

柱島泊地日記帳

まちた

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前作【柱島泊地備忘録】の後日談（続編？）です。

<https://syosetu.org/novel/251137/>

前作の補足など、柱島泊地の日常風景も切り取っていきます。

目次

終わりの知るところ

スタートライン【あきつ丸】 1

わだかまりの解ける頃【川内】 14

思いの丈【大淀】 28

彼女の再出発【阿賀野】 43

記者会見【海原鎮】 58

日常【大淀・鳳翔・龍驤】 67

結【大淀】 80

婚【海原鎮】 85

提督として

教え① 98

教え② 110

教え③【鎮side】 124

教え④【長峰side】 142

教え⑤【鎮side】 162

教え⑥【艦娘side・まるゆ／鎮side】 181

教え⑦【艦娘side・大淀】 196

教え⑧【艦娘side・大淀】 215

教え⑨【鎮side／長峰side】 232

学び 247

学び②【鎮side】 270

立ち話、余談【山元side】 290

艦娘として

北へ 301

喚起【鎮side】	666
後始末④	654
後始末③	643
後始末②	626
後始末【鎮side】	617
戦⑤	602
戦④	592
戦③	577
戦②	564
戦	549
木曾【艦娘side】	529
哨戒②	513
哨戒【艦娘side】	499
紹介③	484
紹介②【鎮side】	467
紹介【鎮side】	448
北へ⑩【艦娘side・木曾】	435
北へ⑨【艦娘side・木曾】	429
北へ⑧	411
北へ⑦【鎮side】	391
北へ⑥【艦娘side・龍驤】	377
北へ⑤【鎮side／ソファイアside】	360
北へ④	347
北へ③	332
北へ②【鎮side】	314

喚起
【ソフイア s i d e】

終わりの知るところ

スタートライン【あきつ丸】

東京、新宿区——大本営。

普段ならば将官しか立ち入ることのできない会議室に、艦娘が一人と、情報部の長である男が一人。

二人以外には誰もおらず、少し古くなった空調の重低音が良く響く室内で、ばさりと書類が投げられる音がした。

「ここ数日の任務、ご苦労だった」

「っは」

艦娘に劳いの言葉をかけたのは、情報部の部長、ただのりようじ忠野良治である。

ずらりと並んだ長方形の机に椅子。その一つに座る忠野は斜め後ろに立つあきつ丸へ机の上にある書類を気配だけで指し示しながら軍服のポケットから煙草を取り出して火を灯した。

机の上には書類以外に備え付けの灰皿が置いてあり、忠野は少しだけ吸った煙草を置くと紫煙を細く吐き出して言う。

「今後必要になるであろう大将閣下の身分証まわりと、住民票の写しだ。大将閣下は財布も持ち合わせておらんかったようだったが、免許を持っていたはずと伺ったので普通自動車第一種運転免許を発行しておいた」

本当ならば一級小型船舶操縦士の免許も発行したかったが、と眉間を親指で揉みながら言う忠野の横から「失礼」と手を伸ばして書類の束を受け取ったあきつ丸は、一つ一つを丁寧に確認しながら口を開いた。

「大将閣下は前に一度、元帥閣下より住民票などを発行してもらったと仰られておりましたが」

「ああ、更新したのだよ。元帥閣下の仕事にケチをつけるわけではないが、情報部を使って徹底的に作り上げた方が不都合も出ないのね。それに——大将閣下の祖父君の記録が残っていた件で気になるところもあったので、調査のついで、とでも思ってくれ」

「……大将閣下のご家族の事でありましょうか」

「今更になつて隠し立てしても仕方が無いか。そうだ、その通り……海原鎮という軍人が過去にいた記録こそあれど……その先は、無かつたよ」

あきつ丸は目を丸くして書類から顔を上げ、忠野を見た。

「と言いますのは——」

彼女が想像した事を口にはしなかったが、長い間を置いて、忠野は煙草を指に挟み、さして溜まってもいない灰を落としてから口にくわえて言う。

「理論物理学を学んだ事は？」

「いえ、それは……」

「ふむ——出来る限り簡単にまとめて話をしよう」

忠野は革張りの椅子をぎつぎつこと鳴らして楽な体勢を取ると、足を組んであきつ丸を手近な椅子へ座るよう促した。

あきつ丸は忠野の横にある椅子を動かし、そこに腰をおろす。

「海原大将閣下——ああ、一人目の海原大将閣下と、二人目の海原大将閣下は、我々とは別の世界から来た、と言っていたが……別の世界線、と言う方が正しかろうと私は考えている」

「世界、線……？」

「うむ。理論物理学には多元宇宙論という論説がある。我々が生きているこの地球という星を含む広大たる宇宙は文字通り無限に広がっているのだが——それがもう一つか、二つか、いくつか存在していると、そういう話だ」

「は、はあ……」

頭上に羊でも飛んでいるような顔をしたあきつ丸の溜息みたいな返事を聞いて、忠野は「……では、多世界解釈なら分かるかね」と続けた。

「申し訳ない……そういった話は、初めて聞いたであります……」

「いや、分からなくとも問題無い。理論立てられる事実だけを述べるとしよう」

忠野は三分の一くらいになった煙草をまた灰皿に置くと、あきつ丸

の持つ書類を指差して言う。

「祖父君の海原鎮の記録のほか、祖父君の奥様は亡くなられていた記録があった」

「それは、かの大戦の頃の話でありますから——」

「違う。奥様は——生き延びていないという意味だ」

「え……？」

忠野の癖であろう、眉間によった皺を右手の親指で揉みながら、あきつ丸に、折を見て大将閣下にもお伝えするつもりだと言った。

「祖父君が基点となった未来の世界がこの世界であり、今いる大将閣下は行方不明となったはずの祖父君の血を受け継いだ別の世界からこの世界へと飛んできた。要するに、現在の大将閣下はここに存在していないはずなのだ、二つの意味でな。それがどうしてここに居るのかを説明するのに、多元宇宙論か、多世界解釈、いわば並行世界から妖精によって導かれたと考えるのが妥当であろうと情報部では結論づけている」

「え、ええ？ 待つていただきたい。頭が……」

「ふむ……もつと単純に言おう。一人目はこの世界に生きた人間だ。過去から、現在へと飛んできた」

これは理解できるな？ と忠野が言えば、あきつ丸は頷く。

「二人目は、別の世界からこちらの世界にやってきた。ただし、時間軸は我々が生きている時間軸と同じである」

これも分かるな？ と言えば、あきつ丸は怪しげながらも浅く頷いた。

「祖父君はこの世界で時間軸を飛び、過去から未来へとやってきた。残念ながら奥様は戦禍で亡くなられており、子は存在していなかった。という事は、本来ならこの世界に孫にあたる海原鎮は存在していないのだ。海原鎮の父は存在しているが、全く違う女性と結婚しており、違う子がいた」

「……はい」

「大将閣下にとってここは可能性の《ありえた世界》で、かつ《自分が存在していないはずの世界》という事だ。我々海軍はそんな大将閣下

と、オカルトの塊たる艦娘の君達に救われたと……もしも学者が知れば飛びついたらだろうな。軍の学者どもは飛びついているが……ふん、くだらん話だ」

くだらない、と口にしながらも忠野の口元は緩んでおり、あきつ丸にもそれが嫌味には聞こえたりしなかった。

何よりも、忠野の肩の上に妖精が座っていて、楽しそうに足を揺らしているのが見えたから、そういう風に受け取れなかったのかもしれない。

「今後も我々は存在しないはずの男と、存在している理屈が分からない艦娘によつて救われていくのだろうと考えると、どうにもやりきれん。もっと海軍の改革を早め、現実へ組み込み——君らが心穏やかに過ごせる場所を提供したいと考えている」

「中将閣下」

「なんだ」

「お心遣い、感謝であります」

「……人類存続という大義名分に盲目となり、身内に目を向けられていなかった阿呆がやつと人間らしい知性を取り戻したに過ぎんよ。むやみやたらに建造している艦娘らの処遇も考えねばならんのだからな。大将閣下に良い事を聞いたので、その前準備とでも言おうか」
良い事とは？ とあきつ丸が問えば、忠野はにやりと笑った。

「艦娘が解体されたらどうなるのか——という事だ。もちろん、君らが知っている雷撃処分とはわけが違う。艦政本部では新兵装の開発と並行して、新部門を設立した。艦娘が社会生活を送れるようにサポートする部門だ」

「解体って——！」

「ああ、君らが想像している処分とは違う意味での解体だ。大将閣下から伺ったのだ。ゲームでの君らが解体された場合はどうなるのか？ とな」

ゲームでは……あきつ丸は考えたが、ゲームの登場キャラクターとしての自分達の想像など出来ず、また、その扱いだって分からなかったために追及の言葉は紡げなかった。

「大将閣下は、ただ消えると言っていたよ。だが、閣下の知識によれば——君らは、普通の少女になれる可能性も大いにあるとの事だった。艦政本部では君らが解体され、少女となれるよう研究し——戦後、人として生きる道を提示できるよう準備を整えている。大将閣下の戸籍を用意しなおしたのは、今後、何百人と用意せねばならん、その予行だ」

「っ——！」

あきつ丸の目が見開かれる。

「希望を持たせるような事を言っておいて失敗した場合どうするのか……と、問わんのか？」

忠野の言葉に、彼女はゆるく首を横に振った。

「……それをあえて口にしたのは、中将閣下のお覚悟でありましょうから」

「ははっ、大将閣下の艦娘は察しも良いのだな。我々は君の同族たる艦娘を多く殺めてしまいかもしれんのだぞ？」

研究の過程での話をしているのはあきつ丸にも理解出来た。

「嘘をつくのがお下手でありますね、中将閣下」

「……」

忠野は目を細める。

「解体が成功した事例はある、と顔に書いてありますよ」

あきつ丸の言葉に、忠野は「察しが良すぎるというのも問題だな」と小声で呟くと、まだ長い煙草を灰皿に押し付けた。

「……今考えると、彼女は幸運だったのかもしれない。そして、ある男の働きは未来への可能性を、今この時、示唆する事になった」

そうして、語る。

「あえて鎮守府の名は伏せておこう。既に我々情報部が闇へ葬った事だ」

前置きからしばらく、あきつ丸の目をじっと見つめていた忠野は、意を決したように口を開いた。

「ある鎮守府に配属となった艦娘は、ただ気に食わないという理由で嫌がらせの対象となった。陰険なやり方で、その艦娘は徹底的な虐待

行為を受け、周りの艦娘は、日に日にエスカレートしていく虐待行為を止めようとしたが……止められなかったのは言うまでもあるまい。虐待を受けていた艦娘の心が壊れるのも時間の問題で、酷な話だが……一度、彼女は心を閉ざした。何の反応も示さなくなったらしい。それを面白く思わなかった提督が目をつけたのが——解体というものだった。それを調査していたのは……鹿屋基地の提督、菅谷中佐だ。奴は、私の部下だ」

あきつ丸は忠野の視線を受け止めたまま、目を逸らす事なく耳を傾け、頷く。

「陰険な男はただ雷撃処分して微量の資源にしては面白くないと、彼女に艦装を展開させ——彼女の目の前で、艦装そのものを破壊したという。その鎮守府に所属している艦娘を利用してな」

う、と喉にこみ上げたものを忠野に悟られないように呑み込んだあきつ丸だったが、忠野はそれに気づいたようで「やめておこうか」と問う。しかし彼女は首を横に振って先を促した。

「……艦装を完全に破壊された彼女は、二度と艦装を展開できなくなった。顕現するものが無いのだから、当然だ。外傷を負ったわけでもないから人の身を入渠ドックに浸けても意味は無い。艦娘として残っているのは——常人よりも頑丈過ぎる身体のみ。しかしそれも、日に日に衰え——今や、ただの少女となった。艦装のみが破壊された場合は艦娘は死なない、と情報部に報告をしてくれたよ。その艦娘を表立って助けられるほど無鉄砲ではなかった菅谷は、苦しそうだった。どのような仕事であれ人という種を存続させるのに必要だと割り切っている私も、流石にあの時ばかりは菅谷に酷い仕事を任せてしまったと悔やんだよ」

あきつ丸はここまで話を聞いて、様々な点が線となり、ああ、と目を伏せた。

「菅谷中佐は……情報部の人間だったのでありますね。その鎮守府の艦娘は保護したのですか？」

「もちろんだ。元帥閣下が引き取ったよ。自分の秘書艦としてな」

「……それって」

「重巡洋艦、青葉だ」

同じように井之上元帥のもとにいたあきつ丸は、言われてみれば彼女が艤装を展開しているところなど見たことも無かったし、互いがどのような状況にあったかなど話したこともなかったな、と思い出して呻くような声を漏らした。

彼女とあきつ丸は短くない時間を共に過ごしたが、そんな様子はおくびにも出さなかった。

良く言えば艦娘という存在にこだわらず、人を守るためならば仕事を選ばなかったから気づかなかつたのかもしれない。

悪く言えば——彼女は艦娘にこだわる事が出来ないのだから、別の方法で人を守るしかなかった。

井之上元帥の仕事を手伝うことは各鎮守府の仕事を手伝うに等しく、即ち、間接的に深海棲艦と戦おうとしていた——とも受け取れる。

「元帥閣下についておられる青葉殿は……会見時にもテレビカメラに映りこんでしまう事もありますから、国民が良く知る艦娘の一人でありますよ？」 どうしてその、暗部を晒すような——」

「危険な綱渡りを、と問いたいか？」

あきつ丸が「当然でありましょう」と怪訝そうな表情を隠すこともせず口によれば、忠野は鼻で笑ってみせた。

「だから元帥閣下の秘書と流布しているのだよ。嘘はついていないぞ？ 秘書艦か秘書官の違いだ。聞き間違えようがそんな事は我々の知ったところじゃない」

忠野は灰皿に置いていた煙草を指に挟むと、それで空中へ文字を書いた。

トンチのような事で国民を操っていたのか？ と呆れた感情をおさえきれなかったあきつ丸の目が泳いだのを目ざとく見つけた忠野は、人を食ったような笑みを浮かべた。

だが、その口から紡がれた言葉は自嘲そのものだった。

「人間らしい知性を持っていても、愚かではない——という証明にはならんのだよ。人が賢しいならば苦しみを伴う発展などせん。愚かであるが故に発展するのだ。そうして傷つき、歴史に学ぶ。私もまた

人を騙し、操り……賢しいフリをする愚か者だ」

「青葉殿は……大丈夫でありましょうか……」

「まだ経過観察中だが、これといった異常は出ていない。このまま人として過ごせるのなら、社会に溶け込むために必要なものを全て海軍が用意せねばならん。さらには同じ顔の少女が複数人存在する事への混乱を避ける対応策を考え、副次的に発生するであろう問題への対処もある。これが確実に可能なら、世界は大きく変わるだろう——君らが出現した時以上の変化に耐える準備が必要となる。建造とて制限を設ける必要が出てくる上に、それに際して海軍の戦力を底上げしなければならぬ……菅谷は未来に大いなる希望と大量の仕事を残して逝ったというわけだ。まったく……手にかかる部下だよ、本当に」

「中将閣下は、どうしてそれを、自分に——」

「弔い代わりの思い出話と、部下の働きを誰かに知って欲しかったという私の欲……と、恰好つけるものじゃあないな。ただの世間話だとしても思ってくれ。私が預かる情報部全体の覚悟を決めるため、それから、絶望ばかり与えていた君らへの償い……失敗した場合の君らが抱えるであろう恨みの矛先、とかな」

あきつ丸は不思議に思った。どうして——かような将官がいて、海軍で内部抗争など起こるのか、と。

しかし対する答えなど出ようはずもなく、ただ俯いた。

「お前達も調べようとしていたのだろうか？」

あきつ丸が顔を上げて「はい？」と返事すれば、忠野は新しい煙草を取り出してくわえながら、フィルター部分を軽く噛みしめた。

あきつ丸に忠野の感情は読めなかったが、不機嫌そうदैいて悲しそうに見えた。

「奴はもとより、艦娘の研究も、深海棲艦の研究も、憎悪をぶつけるためのものだったようだが」

「奴とは……」

忠野はあきつ丸に渡した書類とは別に、持ってきていた鞆を漁ってからファイルを取り出してあきつ丸に投げてよこした。

落としそうになりながら受け取ったあきつ丸は、ファイルを開いて

「南方の研究所の、記録……!?!」

それは、ある男の研究記録である。

研究番号、ヒトナナヒトフタ。超長波による深海棲艦の通信傍受と、艦装に関する記録。

空電の妨害やノイズを艦装によって除去し、微弱な電波でも受信できる……など、つらつらと書き連ねてある文字は、真面目さが伝わるような綺麗な字体だった。

写真が数枚、書類にクリップで留めてあり、そこには明らかに正規空母サラトガが写っていた。

楠木が開発した受信機によって深海棲艦と思しき声を受信したと記されており、その内容は極めて支離滅裂で、消えてしまえ、沈め、燃えろ、と後ろ向きな文言ばかりが並んでいた。

艦娘だからこそ、その文言に恐怖を覚えてしまう。

「深海棲艦の声、とやらを受信し続けたサラトガは深海棲艦になってしまった……一見すればそれだけに思える記録だが、情報部——もとい、新たな艦政本部での推論はこうだ」

ジツポライターを片手にちやきちやきと音を立てていた忠野は、やつのことで火をつけると、煙草の先端にそれを近づけて深く息を吸い込んだ。

じりり、と焼けていく音の後に、やりきれない感情が溜息となって、煙と共に吐き出される。

「正規空母サラトガが深海棲艦の声と共鳴して、深海棲艦となってしまったという説が一つ……楠木の中にあつた感情と共鳴してしまつたという説が、もう一つ。後者は艦政本部に所属している明石達の話に上つたものだが、私は前者であろうと言つたんだ。だが……明石達は後者であると考えているようだった」

「楠木少将に、共鳴したから、と……?…」
「……ああ」

暗い話ばかりで悪いから、もうやめようか、と忠野は話を切り上げ

ようとした。

彼の言う通り、この現状に来るまで多くの苦しみがあつたのだから、真実を知ろうとすれば痛苦の記録ばかりが並ぶのは必然である。

しかし、否、だからこそあきつ丸は知らねばならないと忠野から受け取ったファイルを捲り、挟んであるいくつかの写真を全て目に焼き付けるように見つめた。

「義務でもなければ責務でもない。これは……私の義理のようなものだ。義理と呼ぶのもおこがましいかもしれん。情報部として闇に葬つて来た事など両手では足りんくらいにあるが、それと同じ数だけ……良くも悪くも、真実を誰かに伝えねばならん。今回は、艦娘保全部隊の隊長であるあきつ丸に真実を伝えるべきであると、そう思ったに過ぎん。聞くも聞かないも自由だ」

「ならば、話す話さないも自由でありますよ。それでも中将閣下は話してくださいだったのでありますから、自分はそれを確りと受け止め、大将閣下に持ち帰るだけであります」

ただの一般人であると判明したあの男にか？ と忠野が半笑いで言うと、あきつ丸は同じような笑い顔を試みせた。

「ただの一般人が腹を嘔き飛ばされた次の日に指揮に戻るとお思いで？」

「いいや、思わん。大将閣下が元会社員であるとは受け止めているが、あのお方は会社員より、軍人に向いているよ」

「で、ありましよう」

「くくっ」

人間らしい笑い声を堪えるような仕草を試みせた忠野は、しばらくして、ふう、と溜息を吐いて、あきつ丸が手にしているファイルをめくるようジェスチャーしてみせる。

「中将閣下、これは……記録、というより……」

「ああ」

日記だ、と忠野は呟いた。

「○月○日……母と父の、結婚記念日……両親は、記念日を迎える前に深海棲艦の襲撃に……」

小さな声で読み上げるあきつ丸の表情はだんだんと曇り――

「○月、○日……家族の、ために……深海棲艦を、倒さなければ、家族の魂は報われない……そのために、艦娘を……使い……実験、を……」
――くしゃり、とファイルを握りつぶしてしまいそうなくらい、手に力がこもる。

「○月、○日……渚を、歩くなどと……俺の家族は、もう、歩けないのに、ふざけ……」

「愚かだろう。我々人間は」

「……」

「脆く、どこまでも不安定なのだ。風に吹かれただけで折れるくらいに、頼りない」

あきつ丸はファイルを閉じた後、がん、と大きな音を立てて机に置いた。

忠野は微動だにせず、鞆からさらに違うファイルを取り出してあきつ丸に差し出す。

「もう、結構――」

見るのを断ろうとしたあきつ丸だったが、聞くも見ても自由と言った忠野はあえてそれを見ろと言った。

ここで終われば、彼は本当に人類と艦娘に敵対しただけの軍人になつてしまうから、と。

「これは記録に隠されたものでもなんでもない、研究所に残された数枚のメモだ」

「メモ……?」

しかめっ面でファイルを開けば、確かに、スキャンされたであろうコピー用紙に均等に並べられた紙切れらしき影と文字があった。

たったの数枚しかないメモだったが――あきつ丸の目に、複雑な色が浮かび上がる。

「サラの、好きな、もの……?」

メモには、なんてことはない、サンドイッチだのコーンシロップ多めのアイスだのと書かれており、南方では手に入りづらい材料は本土で、とも書かれていた。

「……海軍に家族以外の全てを捧げた男が家族を失った時、深海棲艦という敵性存在に想像もできないほどの憎悪を抱くのは理解できないのではない。何を利用してでも必ずや沈めてやるという恨みがあっただろう……それこそ私も想像しか出来んが、正規空母サラトガは、それを傍で見ていたし、聞いていたし、感じていた」

「楠木少将は、サラトガ殿に、少しは救われていた、と？」

「私は、そう考えている。故に、サラトガと楠木は共鳴したのではないかと考えているのだ」

「なら、どうして——あきつ丸から紡がれそうになる言葉を察知した忠野は、ゆっくりとした口調で言った。

「奴は憎悪に目が曇っていたのだらうと思う。サラトガを愛していたのは間違いないだろう……私が否定すべき事ではない。だが、客観視すれば、奴は彼女に依存していたのだ。サラトガを帰国させる際に少し話したが、彼女はとても物腰柔らかで、日本海軍の闇に巻き込まれた被害者であるというのに、まだ、楠木の事を嘆いていたよ。それだけ一途に思われたら、依存もしよう」

それが歪んだ結果になった。

あつけなく、あまりにも残酷で凄惨な現実には、あきつ丸はファイルを叩きつけたりせず、ぱさりと置いた。

「つまりん世間話だったか」

忠野の言葉に、あきつ丸は首を横に振った。

「持ち帰り、真実を——共有するであります」

「……ああ、是非、そうしてくれ」

そこからはばし沈黙が続き、忠野が紫煙をくゆらす息遣いだけが会議室に漂った。

不意に忠野から軽い声上がる。

「柱島にはいつ戻るつもりだ？」

「うえ……？ あ、ああ……本日のヒトロクマルマルまでには帰還すると連絡してありますが……」

「そうか——なら青葉に会えるかもしれんな」

「青葉殿と？」

「元帥閣下の名義で贈り物があつて、青葉がそれを届けているはずだ。陸路を行っているはずだから、今頃、柱島泊地に着いているんじゃないか？ 柱島を発つても呉で一日休んで帰るはずだから、会えるだろう」

「なんと——！ で、では急いで帰還せねばなりません！」

話を切り上げるタイミングを作ってくれた忠野に笑いかけながら立ち上がったあきつ丸は、敬礼する。

「では、自分はここで」

「うむ。今後の活躍に期待している」

「っは」

背を向けようとしたあきつ丸だったが、ふと、問う。

「元帥閣下が贈り物とは……一体、何を？」

「急遽作られたものだが、勲章と、新たな階級章だ」

「階級章……？ 大将の階級章であれば既に——」

「それとは別だよ。軍部によって新たに設立された部門、とても言うべきかな。近日公表されるぞ。元帥海軍大将、井之上巖と同じく——それを以て、元帥海軍大将、海原鎮となる。混乱させないよう、通称は大将のままだがな」

え、と声を失うあきつ丸だったが、続く忠野の言葉に、ぱあつと顔を明るくした。

「正式に、日本海軍は全艦娘の指揮官として、海原鎮を元帥として認めただよ」

わだかまりの解ける頃【川内】

陽射しは清々しいと言い難く、梅雨明け特有のまだ湿気の残っているかのような肌にまとわりつく空気がやけに重たく感じられる日だった。

海原は柱島泊地を離れ、はるばる九州は鹿児島に足を運んでおり、最近はいつもびったりと横にくっついていた大淀を柱島へと置いてきていた。彼女は最後まで私も行きますと言っていたが、海原に「お前がいなくなったら誰がこの柱島泊地をまとめるんだ……」と困り顔で言われて渋々に承諾していたのを思い出し、海原は微笑みながら通りすがったコンビニで買った缶コーヒーをあおる。

このところ柱島泊地で健康的な生活を送っていたせいも、海原は市販の缶コーヒーの得も言われぬ香料の強さと味の濃さに懐かしさを感じて、休憩がてらに座っているベンチの背もたれに片腕を乗せて大きく息を吐いた。

そんな海原の付き人として九州まで付いてきているのは——川内型軽巡洋艦の一番艦である。

川内も海原と同じ缶コーヒーを彼に買ってもらっていたのだが、口に合わなかつたらしく、一気に飲み干して既に空き缶を捨ててしまっており、冷気の名残を感じるように手を揉んでいた。

人影もまばらな公園とはいえ、公共の施設で缶コーヒーをあおりながら一休みしている軍服姿の男と艦娘がいれば嫌でも人目を引く。それに柱島泊地を出たのは朝方で、今は既に昼を過ぎようとしている頃なのだから、昼食を済ませたような人々が真っ白な軍服にぎよつとしてしまうのも無理はない。

油断しているのかしていないのか、やはり掴みどころのない海原の姿を、同じベンチに座り、人ひとり分くらいの距離をあげた先から、川内は言う。

「提督、脱がないの……それ……？」

鹿児島について、目的地の最寄り駅から数十分程度とは言え日光をもろに浴びながら顔色一つ変えずに歩いてきた海原の顔を横目に見

る川内は、改二となつて変わった制服に付属しているマフラーのよう
なそれを鬱陶しそうに手で跳ねのけながら問うた。艦娘故に熱中症
で倒れる事は無くとも暑さは感じるのだ。

海原は缶コーヒーの残りをぐつと飲み干してから答えた。

「うむ。昔からスーツで移動する事も多かつたからな。慣れたもの
だ」

「あ、そう……でも、取材は慣れてないはずでしょ」

すかさず別の問いを投げる川内に、涼し気だった海原の表情が苦笑
に崩れる。

柱島泊地から呉を經由し、鹿児島に来るまでの二時間だったか、三
時間のうちに、海原は幾人かの一般人に声を掛けられ、記者らしき者
の取材に追われてここまで来た。

一般人に「あの、が、頑張ってください！」とか「応援してます！」
と会話の前後も無く感情をぶつけてくるような真似をされても、表情
一つ変えずに「仕事ですので」と潜り抜け——取材陣には「公務中だ」
と一蹴……慣れているとしか言いようのない対応の仕方に川内は舌
を巻いた。

彼女が素直にすごいと褒めれば、

「……現実味が無いだけだ。私の話を聞いても面白くなかろうに」

などと微妙な表情で言っていた。日本海軍の中でも偉業を成した
生ける伝説と言っても過言ではない人物の話が面白くないわけがな
いのだが、という川内の胸中のツツコミなどつゆ知らず、海原は空に
なった缶をベンチの横にあるごみ箱へ捨てて、腕時計を見た。それは
先日、井之上元帥から勲章とともに贈られたものである。

時計の針は頂点を過ぎたあたりを指しており、予定ではそろそろ合
流できるはずなのだが、と海原が言えば——丁度良いタイミングで額
に浮かぶ汗を拭いながら歩いてくる大男が川内の目に入った。

「お待たせして申し訳ありません！」

海原の姿を認めると小走りにやってきた大男、山元大佐は上着を羽
織っておらず——当然だ、この直射日光に耐えられるわけがない——
半袖制服だったが、それでも胸元や背中を汗でびっしりと濡らして

いた。

これが普通なんだよ、という川内の視線にも気づかず、海原はベンチから立ち上がって山元大佐を迎えるように右手を振った。

「おお、来たか。今日は陽射しが強いな」

「閣下の感覚はどうなっぺいらっしやるのか……暑くないのですか……？」

「うん？ もちろん暑いが？」

「表情と合っておりませんよ……車両を回して来ましょう」

「いいや、挨拶とは言えどせっかくの外出なのだ。もう少し歩こう」

「呉から鹿児島まで護衛を付けるというから憲兵の同行は無しという閣下のお言葉を呑み込んだのですよ！ 待ち合せ場所も閣下の指定で！ 閣下が待つておられなかつたらどうしようかと……公共交通機関を使うとなれば騒ぎになるかもしれないとも注意したでしょう！ それなのにまだ歩くと……散歩ではないのですよ！」

「まあまあ、落ち着かんか山元。大の大人が遠出も出来んとあれば誰にも顔向けできんだろう、情けない。騒ぎにもなつていないとも。人はそこまで私に興味など無いさ」

川内は小声で「ええ？」と漏らすも、初夏の風にさらわれて消えていく。

「はああ……閣下のお立場を考えてください……ここは前線では無いのですよ……」

本日の目的は——岩川基地の提督、郷田航少将へ挨拶に行くことである。

大規模作戦が完了した暁には支援したのだから挨拶へ寄越せと啖呵を切っていたらしいとは山元大佐曰く。海軍元帥となつた大将を呼び出そうとは肝の据わつた男だと言えようが、川内からすれば、いや、改革の進んでいる海軍からすれば旧体制を背負う男の横暴とも受け取られかねない事だが、海原は二つ返事でそれを了承したのだつた。

理由を訊けば「挨拶に行くだけだ。そこに身分も何もあるまい」というのだから、こちらもちちらで肝の据わつた男である。

海原の内心は「書類から逃げられるウツ！ ヒューツ！」と決して艦娘の前では口にして欲しくない言葉が躍っていたのだが、柱島泊地の艦娘達がそれを知る由もまたないのだった。

そもそも逃げたところで、提督として決裁せねばならない書類は大淀も処理できないので残ったままなのに海原は気づいていない。むつまる達はきつと、帰ってきたらどう弄ってやろうかと示し合わせてニヤニヤしている事だろう。

それはさておき。

自由奔放、型にはまらず——そんな海原の様相に軍帽に汗が付着しないようにと額をしきりに拭う山元の表情は、暑さとは裏腹に真っ青だった。

川内は頭の片隅で山元に同情しつつ——しかし、こうして長い時間、海原と一緒に外の世界を歩くことができる役得な環境に、嬉しさや楽しさに胸がそる。

そんな姿が山元には堂々として見えるように見えたのだろう。海原に向かって小言をこぼしつつも、川内を見るや「川内殿が護衛ならば安心する気持ちも分かりますが……」と微妙に納得する。

川内型軽巡洋艦一番艦の彼女は——海原鎮の専属護衛なのだ。

「では、行くか」

海原が言えば、山元が「こちらです」と先頭を歩き案内を始める。そうして十分もしないうちに岩川基地に到着した。

昔にあった岩川基地は鹿児島県肉用牛改良研究所となっており、戦前の面影など無かったが、それが現在では研究所を移転させ、再びそこを基地として利用しているというのだから感慨深い。

当時はボロと呼ぶに相応しい滑走路とも呼べないものが並んでいたものが、今は現代の技術と資源によって立派な基地として運営されており、艦娘達の艦載機が利用されるために空を飛ぶ事は減ったと言えど有事の際には国内を飛び回る航空機もちらほらと窺えた。

「……挨拶に来させろ、とは申しておりましたが、その、郷田少将も悪い人ではないんですよ」

基地の入り口近くまで来たところで山元が口を開いた。

海原は作戦中であつたやり取りの大筋を、ここに来る前日には聞いていたので、ああ、と短く返事をするにとどまる。

山元が自分の上席たる郷田を親し気に呼んでいるのも、彼が郷田と先輩後輩の関係であつたからだ。

海原の祖父が消えて空いた穴というのは海軍にとって大きなもので、それらを埋め合わせるには人員の階級をいくらか繰り上げる事で仕事を割り振るしかなかったという、なんとも厳しい現実が横たわっていた。

そこで航空隊を駆使して佐世保鎮守府や鹿屋基地と並び九州地方を防衛していた岩川基地の郷田に白羽の矢が立ち、郷田大佐は少将となつたわけだ。大本営に大手を振って出入りできる立場というものは軍人にとってかなりのステータスなのだ。それが出来るのと出来ないのでは、大きな違いがある。

自らが運営する基地の処遇も大きく変わる。

それが今では、どのような拠点であれ海原の一声で改善が可能なのだから、山元や郷田の心情は如何ばかりか。

海原は井之上に対して人間を辞めているような、と印象を抱いているが、井之上を含む日本海軍からしたら海原の仕事処理能力の方が人外であるのは言うまでもない。

それが通称は大将とは言え、元帥にまで成り上がつて全艦娘の指揮官としての軍務と柱島泊地の運営を並行しながら、こうして鹿児島まで散歩のように出歩くくらいには余裕がある——そう見えるだけで、本人としては必死である——山元の危惧も理解出来なくはない、と海原の後ろを歩く川内はぼんやりと考えた。

「郷田……郷田なあ……一通り将官達の顔を見ておかねばと、大本営から取り寄せた資料に目を通しておいたのだが、それを見て思い出したらよ。私と郷田は一度会つた事がある」

「会つたのですか？ 一体どこで——」

「柱島泊地に着任した日、私を岩国まで送つたのが郷田だった。あの時は私も目が覚めたばかりで気が動転していてな、ここはどこだと聞いて、これはどういふ事だと問うて……今のお前と違って、郷田は私

の事情など知らず祖父の海原鎮と思い込んでいたのだから無理もないが、戦果のなさに憤慨されて鼻っ柱を殴られたのをよく覚えてい
る。何もしていないのに何故殴るんだと思ったが、向こうからしたら
失踪扱いされていた祖父が逃げ出したように思えたのだろうか。実
際のところを知らないのであれば、仕方あるまい」

「殴つ……!?! か、閣下、郷田はその、確かに短気な人ではありませんが
！ あの方なりに思う所があつて、我慢ならずといった……が、
我慢はすべきだったかもしれないませんが、あ……！」

基地の手前であたふたと本人でもない山元が釈明を始めたのがお
かしかったのか、海原は軍帽を被りなおしながら笑った。

「はは、言つただろう。互いが事情を知らなかったのだから、話が噛み
合わずそうなつてしまった事くらい私とて理解している。ここで私
が郷田少将に対して求めるものは無いとも。挨拶に来いと言われた
から挨拶に来た……そのついでに、戦果も上がって海軍の改革も進ん
でいるから文句も無かろうと言うだけだ。あの時の事も……彼なり
の理由があつたはずだからな」

「閣下……」

「出来れば、挨拶がてらにその理由も聞けたらとは思ふ。無理に問
いだしたりはしないから、心配するな」

川内が海原の広い背中を見つめながら考えていた事を、山元が代わ
りと言わんばかりに口にした。

「——本当に会社員でした？」

「何だお前突然」

「いえ、やはり会社員らしくないな、と」

「会社員だったと言っているだろう。嘘をついてどうするんだこんな
こと」

「真実だと言っても、軍部以外はきつと信じませんね」

「……お前は最近、遠慮を忘れているなあ」

「失礼、調子に乗りました」

笑いながら浅く頭を下げた山元に対して苦笑して溜息を吐いた海
原は、基地の入り口に立つ歩哨の声に立ち止まる。

「——海原元帥閣下!? それに山元大佐まで……!」

「ご苦勞。私を知っているとは」

海原の言葉に敬礼する歩哨は、今にも泡を吹いてしまいそうなくらい慌てていた。

大方、山元大佐から連絡を受けていた郷田とて本当にここまで足を運ぶとは思っておらず、周知させていなかったのだろう。

「し、知っているも何も……ほ、本日はどのような用向きでしょうか……!」

「郷田少将に挨拶に来た。通してもらえるか?」

「は、はい、お待ちください!」

門扉の背後にある小屋に走って行った歩哨は、数分すると走って戻り、どうぞ、と海原達を案内した。

滑走路を除けば基地はそこまで広くなく、郷田少将がいるであろう執務室まではあつという間だった。

歩いている間、歩哨の男がチラチラと海原の顔色を窺っていたが、海原は視線に気づくことも無く基地を見回して、提督以外の男がいるのが珍しい、というような顔をしていた。

廊下の窓からも見える格納庫の付近で、技術員であろう男達が談笑している風景がある。よくある光景だ。

どちらかと言えば、山元や川内にとつて男が一人である柱島泊地の方が珍しい。

執務室に到着すると、先導していた歩哨が海原と山元に会釈した後、扉をノックして軍帽を脱いだ。

それから扉をほんの少し開き、

「——警備区三班正田^{しょうだ}一等兵曹です! 海原元帥閣下が——」

と言ったところで、海原が小声で「大将だ」と伝える。正式には元帥なのだから、わざわざ通称を使わせなくとも良いのに、と山元と川内は正田一等兵曹を憐れんだ。一等兵曹にとつて山元大佐が来ただけでも心中は穏やかでないだろうに、全艦娘の指揮官となつたばかりの元帥が足を運んだとなれば卒倒ものである。

「げん、す……んんっ、た、大将閣下がお見えになりました！」
「……入れ」

返って来たのは冷たい声だった。案内役の正田一等兵曹が扉を開いて半身を翻し、入室を促せば——室内には軍帽を脱いでぴんと背筋を伸ばして立った郷田の姿があった。

彼は山元と目が合うと一瞬だけ眉をひそめたが、海原を見て瞬時に真面目な表情になり、さっと軍帽を被り敬礼してみせる。

海原と山元が答礼したのを境に、郷田が応接用のソファを指してどうぞと言いながら、先ほどまで仕事をしていたのであろう机をさっさと片付けて二人の正面へ回り、ソファへ腰をおろした。川内は海原の背後に立ち、目を伏せる。

海原は気を遣わせないようにと先に腰をおろしており、案内役の一等兵曹に向かって「案内、ありがとう」と手を振って退室を促した。

郷田はそれを見て、腹をくくったように目を閉じて息を吐き出してから、再び目を開いた時、一等兵曹へ頷いた。そして、こう言った。

「人払いを頼めるか、正田」

「は、はっ……！ その、郷田少将——！」

「それから、駆逐艦電を呼んで来てくれ」

「……了解、しました」

この時点で、山元は郷田が何を考えているか分かった。川内も同じく察したが、海原だけは——相も変わらずというか。

ほどなくしてやってきた電は、入室してからすぐ、沈黙に包まれたままの執務室の雰囲気^{きふい}に怯えながら目に涙を溜めて郷田の後ろに身を隠すように立つ。

「仕事を立て込んでいるようだな」

海原の低い声に、郷田はさっと頭を下げる。

「はい。引き継がねばならない事が多いもので」

「引き継ぎ？」

「……」

郷田は険しい表情のまま暫く応接用テーブルに視線を落としていたが、ちらりと海原を見た。

海原が不思議そうに見つめ返しているのを見た山元が声を挟み込む前に、郷田が言葉を紡ぐ。

「——あの時、戦果を挙げず姿を消したからという理由があれど、自分が上官に向かって暴力をふるった事実は消えません。自分に如何様な処分を下されても岩川基地の運営が可能なようにするための引継ぎでありますので、こればかりはご容赦ください」

「……ああ」

海原は合点がいったように返事した。

「第二次大侵攻における指揮、軍部への通達も含め一切隙のない手腕、感服致しました。分を弁えず元帥閣下を呼びつけるような真似をしたことも、重ねてお詫び申し上げます」

すつと立ち上がって深く頭を下げた郷田に、あーあー、と山元が声を漏らすも、海原は言う。

「挨拶に行くか来るかの違いなど私にとって些事だ。今回は顔合わせついでに、そうだな……柱島泊地に着任する前のやり取りについて、少し話がしたいくらいだ」

「っ……」

海原がさらに言葉を紡ごうとした時、縮こまっていた電が一步前に出た。

そして、郷田の横に並ぶと——ぱつと音がするくらいの勢いで頭を下げる。

「あ、あのっ……あのぉっ……！ 司令官さんを、許してあげてほしいのですっ」

「駆逐艦……お前……！」

「うう……！」

郷田の声にびくりと肩を震わせた電だったが、涙をほろほろと零しながら必死に声を上げた。

「お、お話は聞いているのです！ 司令官さんは、一生懸命、お仕事してるのです！ ちょっと厳しいところも、ありますけど……いつも電や皆に優しいのです！」

「やめろ駆逐艦！」

「でもっ!!」

海原は目を白黒させながら、そのやり取りを見ていた。

川内と山元は、これに極めて似通った経験があるために困り顔である。

山元はすぐにでも止められるが、あえて止めたりはしなかった。

このやり取りを見れば、郷田に殴られた海原も、彼に対するイメージが変わるだろうと確信を持っていたからだ。

一方川内は、このまま勘違いを進行させては話がこじれると思い、そつと後ろから海原の背中を指でついてから耳打ちする。

「提督……相手は何も知らないんだから、あんまり怖がらせないであげてね」

「お、おお……そうだな……」

こそこそと話し合う川内と海原を見た電は、さあつと顔を青くしてまた頭を下げた。

「ほ、本当なのです！ 電がどんなに失敗しちゃっても、どうして失敗したのかを一緒に考えてくれたり……そ、それから、それからあ……司令官は、悲しい思いをする人を減らしたいって、いつも言っているのです！ 電にだって、本当は戦わせたくないって——！」

「やめんかつ!!」

郷田の鋭い声が飛んで来ても、電はさらに「皆の体調も毎日気にしてくれてるのです！」と言う。

それらが決め手となったように、海原は右手で膝をぱちんと叩いた。

「そうか。電を戦わせたくないか」

「い、いえっ！ 戦ってこそその艦娘であります、今のは——」

「電が嘘をついたと？」

「うぐっ……」

「郷田、あれから顔を合わせるの二度目で、互いを知らんわけではないのだ——私と話をせんか」

「……」

郷田は諦めたように、はい、と小さく返事してから、電をちらりと

見た後に椅子に座りなおし、隣に座らせてもよろしいでしょうかと海原に言う。

もちろん、と返事を聞いてから自分の隣に彼女を座らせた後に、海原からの言葉を待つように黙り込んで顔を伏せた。

「まず……私はあの時の事を詰めに来たわけでもなければ、挨拶に来いと言われたからどうこう文句をつけてやろうとも考えていない。仕事で執務室にこもりきりだったから、遠出するのに丁度良い理由をくれて感謝しているくらいだ。だから顔を上げる。電をあまり泣かせてやらんでくれ」

思っていた事と百八十度違う事を言われた郷田はぼかんと口を半開きにして海原を見た。

「自分は相当な口を利いたと思うのですが……」

郷田の言葉に、うむ、と頷く海原。

「確かに。しかし互いに事情があった、それでいいだろう。ただ、郷田には悪いが、どうして私が六年ものあいだ動きが無かったのかの回答は出来ん。軍機に抵触するのでな。第二次大侵攻の戦果を以て、それだけは了承してもらいたい」

「……楠木ですか」

「否定はしないでおこう。これで許してくれんか？」

「——っは。十分です」

それから、海原は郷田と電を交互に見て問う。

「互いが海軍内でどうなっているかなど、ここで話さずとも分かる事だ。それよりも——電を戦わせたくない、というのがどういう事か教えてくれんか？」

「そ、それは、本当に私的な事でありまして——！」

「いいじゃないか。艦娘に面と向かって戦わせたくないとは面白いじゃないか、聞かせてくれ」

郷田は逡巡したが、どう足掻いたところで自分が海原にしでかした事に比べれば、いくら私的な事であれ隠し立てするまでもないと結論付けて、脱いでいた軍帽を電に手渡してから話した。

「本当に、私的な事であります」

「うむ。構わん」

「……自分には、娘がおりました」

海原はすぐに言わんとする事を察知し、あ、と声を漏らしそうになった。

「第一次大侵攻があった時、深海棲艦の艦載機が本土に襲来し、岩川基地と鹿屋基地、佐世保鎮守府から空母、軽空母が応戦しましたが……ある程度の被害が出てしまいました。そのある程度の被害に……自分の娘は、巻き込まれてしまったのであります」

「……そうだったのか」

「丁度、小学五年生になったばかりでした」

「もう結構。話してくれてありがとう、郷田」

「いえ、礼を言われる事では——」

「戦わせたくないという理由には十分だ。だが、電は艦娘だ、分かるな？」

「……っは」

山元は会話を止めなかった自分を褒めてやりたかった。

郷田は海原の祖父をここにいる海原と思い込んで殴ってしまったが、今いる海原もそれを咎めるつもりは無いと言った上で、郷田の事情も呑み込んでくれている。

全艦娘の指揮官として、彼は郷田にどう言うのだろうか。そちらの方が気になった。

「悲しい思いをさせたくないと言うのなら、そうならないように我々が指揮するしかない。柱島の艦娘を救った航空隊を指揮した男だろう？ 二度とそうならないように出来る男なのだぞ、お前は」

「……」

そうだ、郷田は第二次大侵攻に際して哨戒班と第一艦隊の即席連合艦隊を支援した男だ、と山元は剛勇の二人を交互に見た。

川内も色褪せぬ記憶を虚空に見るように視線を泳がせる。

「だから駆逐艦、などと味気ない呼び方をしてやるな。彼女には、電という立派な名がある」

海原が言葉を切ると、郷田は隣の電を見つめて、複雑な表情をした。

亡き娘を思い出ししているのかどうかは、誰にもわからない。

「……幼子を戦わせている海軍は、狂っているとは思いませんか」

「ご、郷田少将……!」

流石の山元も声を挟み込むが、海原は郷田に同意した。

「ああ、そうだな。だから——終わらせるのだ、戦争を」

「……閣下の人となり、なんとなく理解しました」

「ふむ、ならば挨拶に来たかいがあったな」

「自分の指揮と運営方法を変える気はありませんが——それも呑み込んでいただけるのでしょうか？」

少しばかり強気に出た郷田に、海原は顎を撫でながら言葉を返す。

「電があれだけ頭を下げるくらいには慕われているのだから、変える必要も無かろう。ただ、私以外は殴らないようにな。ああ、もう私も殴らないでくれよ?」

冗談交じりの言葉に、郷田は「承知しました、元帥閣下」と丁寧に、それでいて少し口元を緩ませて頭を下げたのだった。

* * *

あれからは、山元も川内も信じられないというくらいにたわいもない会話ばかりだった。

鹿児島まで遠出したのだから、川内に美味しいものを食わせてやりたいのだが、おススメの店はあるか? など……郷田も郷田で、碎けた会話をする海原に毒気を抜かれたように、実は……と、岩川基地に所属している艦娘をたまに連れて行くらしい店を紹介してくれたのだった。

残念ながら山元はすぐに呉鎮守府へ戻らねばならなかったため、岩川基地を出てからすぐに別れたが、川内にとつてそれは幸運とも呼べる出来事で——

「ほ、本当にいいのかな、私だけ……」

「出張、と言うと変な話だが、こういうのが醍醐味だろう。私と川内だけの秘密にしておけばいいさ」

——郷田の紹介してくれた定食屋に来た二人は、そこで平和な時間を過ごした。

ただ食事をして、道中で見たあの風景が綺麗だったとか、今度は違う場所にも行ってみたい、とか、そんな会話ばかり。

「川内、ありがとうな」

「うえっ!?! な、なにが!?!」

がね、と呼ばれるさつまいもの入ったかき揚げを食べていた川内は、むせそうになりながら海原を見る。

「今や私の事情を知っているお前は、郷田と話しているときにフォローしてくれただろう」

怖がらせないであげて、とは言ったが、果たしてあれがフォローであつたのか、川内には分からない。

しかし感謝されているのならば素直に受け取っておこうと川内は微笑んだ。

「いいのいいの、お礼なんて。私は提督の護衛なんだからさ」

「……頼りになる護衛だよ、お前は」

「へへ、でしょ?」

人の影として生きて来た川内は——この人の影になれるのならば本望だと、海原を熱のこもった目で見つめるのだった。

思いの丈【大淀】

梅雨が明けたと報じられて幾日もしないうちに、柱島泊地は大雨に見舞われた。

さりとて周辺海域の哨戒、警備を行わないわけにはいかず、大淀は哨戒班に憐れみの目を向けながら頑張つてとしか言えなかった。

早朝、マルゴーゴーナナ。総員起こしより早くに出立した哨戒班の見送りを終えた彼女は、新たに海原が設置した秘書艦室へと足を運ぶ。

常任の秘書艦なのだから専用の部屋くらいあつた方が良いでしょうとは海原曰く。

そこには執務室と同じく放送用の器材がいくらかと、大本営より用意されたノートパソコンが一台。それから、任務通達用のプリンターが数台設置されており、総員起こしの放送準備を始めると同時にガコガコとプリンターが任務の記された用紙を吐き出した。

壁に掛けられた時計をちらと見やり、大淀は殆ど使うことのないデスクの引き出しからペンとバインダーを取り出して置くと、放送機材のスイッチを入れ、総員起こし用の音源を流した。ぴつたりと、一秒の狂いも無く、マルロクマルマルになった瞬間の事である。

「総員おーしー！」

深呼吸の後、起床ラッパの音源と共に柱島中に響く大淀の声。

機材のスイッチを切ると、大淀はプリンターから紙を取って、海原から言いつけられた通りにそれを仕分けていく。

海原から端を発した、デイリー、ウィークリー、マンスリー、特別任務と四つに分けるといふ手法は、分かりやすい事もあつてか、日本に所属している全拠点へ瞬く間に浸透した。

大本営はこれを良しとして——海原も井之上と同じく元帥なのだから認めざるを得ないのだが——各拠点へ徹底厳守するよう通達し、拠点運営はかなり改善されたと耳にしてからというものの、大淀はより一層気合を入れて提督を補佐せねば、と付きつきりになっているのだ。

そも、彼女は別の意味でも提督の傍から離れたくないというのが本当のところだが。

今日は、そんな彼女にとって忘れられない一日となるのを、誰もまだ知らない。

* * *

「ええ……とうとう申請書を……？」

「うん？ どうした大淀」

「あ、いえ……その……」

朝食を済ませた大淀は、執務室にて過日の演習報告書を確認している時、それらに紛れていた軽巡洋艦神通の演習申請書類を見つけて思わずため息を吐き出しながら呟いた。

海原が書類から顔を上げて反応を示し、大淀はばつが悪そうに言葉を濁した。

神通が単独演習を望んだのは大淀の呟きの通り今回だけではない。しかし、前までは単独演習が出来れば……と遠慮がちに報告書へ記されているだけだった。

これについては海原も知っているし、考えがあるような「単独でなあ」という呟きを残していたりもする。

だが報告書に書いてある神通の個人的見解、または意見というだけ。故に演習に表立った動きは無かった。

ここに来てとうとう神通も意見を通そうと踏み切って正式な申請書を演習報告と共に提出している。

こうまでされては提督としても動くしかないだろうか、と思いつつ大淀は演習申請書を海原へ差し出した。

「神通一人で、大勢を相手に演習したい、か」

「はい……」

神通は佐世保鎮守府に所属している高練度の艦娘阿賀野と演習するため、柱島泊地に所属する全艦娘と演習し、付け焼刃になろうとも練度を向上させたいと無茶を言った事がある。水雷戦隊の意地か、

神通個人の意地であるのかは分からないが、彼女が自らを限界まで追い詰めねばならないと躍起になっていたのを思い出して、大淀は溜息を吐いた。

「神通さんを悪く言いたいわけではないのですが、突拍子も無いと言いますか、どうして自分を追い込むような訓練をしたがるのか分かりません。演習する相手も単独の相手に本気を出せるわけがないでしょうに——」

「六人……六人編成、か……ふむ。許可しよう」

「ですよ。単独演習なんて……えっ!?!」

てつきりダメだと一蹴するものだとばかり思っていた大淀に対し、海原は顎をひと撫でしただけで承認の判を押した。

まさか提督は自分を追い込むような彼女の心理を理解している——
—?

そんな大淀の考えを見透かしているかのように、海原は押印した申請書を返して言った。

「艦隊これくしょんでは、単艦放置という行為がしばしば見られてな。高練度の艦娘を一人、ないし二人だけの編成で演習を行う事がある」

「ほ、放置って……どうして演習に放置という行為が?」

海原にとってゲームの話でも、今や現実。

的を射た提案であるか否かは実際にやってみねばわからない、海原はそういう口振りだった。

「放置と言っても、ゲームなのだからログアウトくらいするだろう?」

私が執務室から出て行くのと何ら変わりはない。ログアウトしている間、待たされている状態を放置と言っているだけだ」

あなたは殆ど執務室にいるではないですか、という言葉が喉元まで出かかった大淀は、はい、と返事をする事でそれを呑み込む。

「私がログアウトしようが、他の提督に演習を申し込まれる事がある。その場合、設定していた第一艦隊が演習の相手となって参加するのだが、第一艦隊を高練度の艦娘一人か二人に絞っていれば、相手は多くの経験値を得ることが出来るんだ。これはシステムによった話になるが……相手にとつちやボーナスステージのようなものだな。」

高練度になればなるほど経験値が得られる、その理屈は分かるな？」
「高練度の艦娘でも、一人ならば、低練度の艦娘で編成して数で押せるかもしれない……勝利すれば、低練度の艦娘は多くの経験値を得られて、容易に戦力を底上げできる、と……理に適っていますね」

「うむ。では、今どうして私が許可したのかだが……この世界でいう練度という数値は艦娘の実技試験の結果が大部分を占めている。艦政本部の話によれば、実技試験を行う場所は各拠点ではなく、指定された設備のある場所であればならないと。実技試験の合否によって練度が一つか二つずつ上昇していく……現実とは言え随分と手間のかかった数値だ」

海原は大淀に渡した申請書とは別の、手元にある演習報告書を指で叩いて示して一枚抜き取ると、読み上げた。

「○月○日、軽巡洋艦、駆逐艦の混合編成——第一艦隊旗艦鬼怒、以下、名取、松風、弥生、水無月……第二艦隊旗艦由良、以下、木曾、深雪、白雪、浦波。結果は第二艦隊の勝利……それから、演習に際した各々の所見が述べられている。後日予定されている実技試験へ行くのは深雪と名取だったか。片や勝利した艦娘、片や敗北した艦娘だが、大淀はどちらが試験に合格すると思う？」

海原の言わんとしている事を考えた大淀の頭の中では一瞬で理屈が組み立てられ、ああ、と手を打つに至る。

「どちらも合格出来る程度の経験は積んでいると思いますが、個人的には名取さんが一足早く合格するかな、と……提督は、演習で経験を積むのに練度とは別の視点が多くあるとお考えなのですね？」

「ふふ、流石大淀だな。私の事をよく分かっている」

冷房の効いた室内で、書類が水滴に濡れないようにと海原が飲んでいるのはホットコーヒーだった。私達に関わるからといって書類の一枚まで気遣って飲み物までこだわる彼の口から出た誉め言葉に、大淀は涼しい室内なのに頬に熱を感じて顔を伏せた。

海原はコーヒーを一口飲んでから机の端にマグカップを置いて言葉紡ぎ続ける。

「そうだ、システムの練度が上がるわけではない。私の知っている

単艦放置という行為で多くの経験が得られるのも、相手側であって、放置している側ではない——が、しかし、神通は改から改二へ至っている事実がある。私の想像していた演習とは違うものだったが——」

あつ、と大淀が弁明しようとする前に、海原は「咎める気は無い。ただ、今度からこのように申請してくれたらいい」と真面目な顔で言った。

「それで、私は考えた。演習の形式を見直す必要があるかもしれない。無論、これは構想段階で実践に至っていない事だ。どのように組み替えようかと考えていたのだが、これもいいタイミングかもしれないと神通の演習申請を許可したわけだ」

「その、構想とは……」

「私にとってお前達は既にゲームのキャラクターなどではない。血の通った艦娘という一つの存在だ——ならば、簡単な事じゃないか？ 要は経験を積むことが出来れば、練度の向上に繋がるのだからな」

「それは……？」

「敵と交戦する際に負けぬようにと訓練を積む。どんな状況下でも冷静に陣形を組み、連携して相手を倒さねばならない。しかしその時、一人、ないし二人や、三人の場合もあるかもしれない。六隻編成同士で戦ってばかりで訓練の質が高いと言えるか？ そこから導き出されるのは——ありとあらゆる状況に対応出来る多少の無茶が必要という事実だ。本当に倒れるまで無茶をさせるつもりはないし、無茶と思われる事を徐々に現実的にする事こそが訓練だと私は考えている。改二に至っている軽巡は神通のみ——彼女にしか分からない事もあらずだ。多勢に無勢を望むような彼女ならば、限界を見極める事も可能だろう」

実戦を想定して訓練が行われるのは言わずもがな。海原はそれは別に、さらに実戦的な状況を想定しているのだ、と分かって大淀は納得した。

「それですと、演習の予定を大幅に組みなおして通達をしなければ——」

「それには及ばん。神通がせっかく申請を出してくれたのだから、ま

ずは過日と同じく多人数戦をしてもらい、詳しい報告書を提出してもらおう。私見でもいいから、どれだけの損害が出るかも報告してもらい、組み込みが可能そうであれば、今ある演習に加えて申請した艦娘を対象に、第一艦隊、第二艦隊の演習後、その二艦隊を相手に演習を行えばいいのだ。集中強化をするのに出て行く資源は必要経費と割り切って、申請した艦娘のみに抑えて一日に制限を設ければ、さしたる支出にもなるまい。それに連続戦闘の訓練にもなる。修正すべきは時間だな。マルキュウマルマルから単艦演習を組み込むのは昼食や昼の休憩がずれ込んでしまいかねんからな……うーむ……昼からの演習を延ばして、夜戦演習の開始時刻をずらせば問題無い、か……しかしそうすると、夜も遅くなってしまうな……夜間演習組の報告書は提出期日を翌々日までにすれば、自由時間を削らずに済むか……？」

予定表を取り出して唸る海原に、大淀はぼかんとしてしまった。

……この人は、本当にただの一般人だったのか？ 軍人の血が流れているとは言え、ここまで実務において無駄のない男が会社で使い潰されていたなど考えられない。

唸る海原をじつと見つめて、大淀はおずおずと問うた。

「関係のない話で、申し訳ないのですが……」

そんな前置きに、海原は予定表から視線だけを上げて大淀を見る。

「何だ？」

「提督の前職は、一体どのような……」

「ほう！ 聞きたいか？」

ぱさりと書類を置いた海原の目が輝いたのに、大淀はきよんとしってしまう。

「は、はい……提督が辛かったと口にするほどのお仕事ですから、どんなものだったのかな、と」

「前に興味が無いと言われたから、話す機会も無いかと思ったが——」

「あの時は、その、別の事が気になってたので……」

「別の事？」

「いえいえ、言う程の事でも……んんっ……それで、提督はどのような

お仕事をなさっていたのですか？」

前職よりも自分達が出ているというゲームの話が気になつていたので正直に言つたところで、海原は笑つて済ませてくれるだろう。しかし、そうすると大淀はどうにも据わりが悪くなる気がして、もぞもぞと足を動かしつつ咳払いで誤魔化して話を促した。

海原は、ぎし、と椅子の背もたれを鳴らして楽な体勢をとり、マグカップを手に取つて一口飲んでから窓を叩く雨を横目に口を開く。

「殆ど私の愚痴になりそうだが……」

提督から愚痴？　大淀は逆に興味をそそられ「是非」と少しおかしな言葉を返す。

海原は首をほぐすように撫でながら話した。

「勤めていたのは、ある総合商社だ。私はそこで営業を担当していて――」

「営業ですか……全く似合いませんね……」

「大淀、お前――」

大淀はハツとして手と首をぶんぶんと横に振つた。

「わつ私にとつて提督は提督ですから、スーツを着て営業しているようなイメージは無いと言いますか――！」

軍帽のつばを押し上げながら「まったく」と言つて笑う海原。

「商品売りたい企業から仕事を取つて来て、それを買いたいという企業を見つけて仲介するのが私の主な仕事だった。いわゆる、契約を取ってくる――という仕事だな。商品の価格を調整し、仕入れる数を数カ月、時には数年単位で調整しつつ、流通ルートを確認して利益を確定させる。私は国内を担当していたが、海外を担当している者もいて、毎日バタバタでなあ……」

「そうなのですか……でも、提督のようなお方がいるなら業務も楽だったのでは……？」

大淀の言葉に、海原は「そんな事はないさ」と鼻で溜息を吐いた。

「海外企業と提携していたから、やり取りをするのに時差のせいで家に帰らず会社待機するという事もざらだった。マルロクマルマルからフタヨンマルマル以降まで、とかな。私が勤めていた企業は海外と

のやり取りを通訳を挟んでいる事もあったから、語学に秀でた者にしわ寄せがいくという事こそなかったが、その分まんべんなく仕事を振れると考える上席がいてな。それが、俺の直属の上席だったわけだが……。余裕のある分さらに仕事が出来るだろう！ とよく怒鳴られたものだ。余裕とは言え、それは仕事をするのに確保せねばならん余力で、決して別の仕事に割いても問題無いというわけじゃなかったんだがな……」

「トラブルに見舞われた際の余力ですか？」

「ああ、その通り。それを加味した上での余裕、ならば話は違ったかもしれない。結局、余裕を潰すように仕事が増え続けた結果、その時の人員では処理しきれない業務量になり、めでたく激務に——改善しようものなら提携契約した企業のいくつかを切らねば首が回らん始末だった。仲介を中断すれば風評にも繋がるし、経営陣は良い顔をしな。切ろうにも切れない企業と業務を続けるだけとなれば、売り上げはそこから伸びはしない——しかし上司の上司はさらに伸ばせという。営業事務やエンジニアが必死に効率化し、商品管理の人員を割き、営業に回して何とかグラフを持ち上げる。そうすると、どうなると思う？」

つらつらと語る海原のかつての環境を想像して、大淀は眩暈がした。

「さらに、戦果を求めた……」

「戦果……戦果か。ふふ、そうだな、上はさらなる戦果を求めて営業へ圧をかける。営業のみならず、エンジニアや事務にも、もつと効率を強化しろと無茶を言う。必要なら適当な人材を見繕って放り投げる。人が増えれば業務量を増やしても問題無かろうとな。しかしその人材だって企業で使えるようになるまでに教育が必要となるため、教育中は人員が増えた分、教育者が必要となつて一時的に効率が落ちる。教育と業務のバランスが重要になるが……戦果を求められているのだから、自然と業務へ傾き、新たなる人材も中途半端な状態でだましましに業務に携わるか、右も左も分からず置物と化す。すると、周囲にミスが増え——どうしようもないくらい、負のループだ。全ては

人の仕事だ。向き不向きもあれば、互いの関係もあるし、これくらいなら出来るという上司もいれば、ここが限界だという上司もいる。人の手によって成立する仕事なのだから関係性は捨て置くべきでは無かったはずだが……当時の上席はそれを捨て、効率を求めた」

遠い目で話す海原を見た大淀は気まずそうに立ち上がって「コーヒーのお代わりでも淹れましょうか」と提案した。

すると海原は「ありがとう。すまんな、本当に愚痴になってしまった」と苦笑するのだった。

しばらくして給湯室から戻った大淀が座ったのを機に、海原が口を開く。

「お前達には苦勞をかけたつばなしで申し訳ない。私も出来る限りの仕事をするつもりだが、互いが倒れてしまわぬように多くの仕事をお前達に振らねばならん。許せよ」

「私達は問題ありませんよ？　というより、そこまで多くの仕事を振られた記憶も……」

大淀が眼鏡の下から指を入れて目元をかくのを見つめながら、海原はしみじみと言う。

「そう感じないくらいお前達が優秀だという事だ。前に比べて、私は随分と恵まれた環境にいる」

「……銃を向けられ、人類の存続を双肩にかけられて恵まれた環境と言い切りますか」

「実感が無いからこそ、かもしれんな。ふふ、いや、今のは聞かなかつた事にしてくれ、私として私なりに真面目に軍務に取り組んでいるつもりだからな。人も大事だが、私にとって同じくらいに艦娘も大事なのだ」

「もう……」

冗談めいて聞こえるが、本意かもしれない。そんな海原の掴めない雰囲気苦笑した大淀は、最初に比べて明らかに柔和となった彼に油断していた。

もちろん、真面目な時には、激昂して八代少将を蹴り飛ばした山元大佐すら震えあがるくらいの鉛が如き重たい空気を纏うが、今、執務

室でマグカップを傾けて書類を眺める姿は、確かにどこにでもいるよ
うな人の好い男にしか見えない。

目元のくまが目立つ、疲れ気味の表情に——幾分か改善された血色
の良さというアンバランスな風貌が、海原らしいというか、なんと
うか。

軍服姿であるからか、その見た目がまた生真面目な軍人らしくて、
やはり会社員には思えなかった。

前世、もとい前の世界の事を思い出しているのか、雨の音に紛れる
海原の息遣いに思う所があるように、大淀はふと問うた。

「前の世界に帰りたい、とは……考えたり……」

言い切る前に、彼女は後悔した。帰って欲しいなど欠片も思ってい
なかつたからだ。

出来る事ならば、海原が元気に動ける間中、自分達の事を見てい
欲しかった。

海原は大淀に顔を向けることなく、視線だけを窓の外にやったま
ま、

「後悔はある。だが、帰る方法があつたとしても、そのつもりは毛頭無
い」

と言った。

「後悔ですか……?」

「ああ。向こうには両親がいるからな。夢で祖父とも話したが……ど
うしようもない親不孝者だよ、私は。仕事にかまけて連絡も碌にとら
ず、年の瀬も正月も盆も会社にいたような男だ——彼女の一人くらい
紹介して安心させてやるべきだった。親孝行をする前に、向こうでは
私が神隠しにあったと思われているか、死んでしまっているか……ど
ちらにせよ、母も父も笑顔ではなからうな」

「……あ、あの、そのお」

すみません、と大淀は黙り込む。

深海棲艦のいない世界で、彼はもしかすると、どこかの知らない誰
かと付き合い、結婚し、平凡な幸せを象徴するような家庭を築いてい
たかもしれない。そう考えるとやるせない気持ちになるのだった。

彼女は海原が「気にするな」と言ってくれるのだろうかと考えた。しかし、彼は違った。

「大淀のような美人を紹介できれば、さぞ喜んだだろうな」
そう言つて笑つたのだ。

いつのまにか失せていた熱が再び大淀の顔を覆い、冗談はやめてくださいと目を伏せる。

「すまんすまん、セクハラになつてしまうな。ふうむ……これがオツサン化していくという事か……？」

もとよりオツサンである。とはいえ、三十代になつたばかりの海原は若いとも言える。

軍部の者は、井之上を除いたとしても、忠野や橘を筆頭に四十も半ばで、中には五十代だつてゐる。

そんな中で唯一の三十代で元帥など、異質も異質である。彼はその呼び名を好いていないようだが、事実として日本海軍に所属している全艦娘の指揮官なのだから、異様さは際立つ。

オツサン化していく、というよりは、彼自身が持つ性質なのかもしれない、と大淀はぼんやりと考えた。

「ま、まあ、一応、提督ご自身から褒賞の代わりとは言え、正妻と認めていただけましたし、セクハラなどでは——」

場繋ぎにと口にした言葉に、海原はカップを持った状態で固まつた。

「ま、待て大淀、どうして突然制裁の話になるのだ」

「えっ……」両親に紹介するなら私のような者が良いと言うものですから、鳳翔さんと私とで執務室で話した時に、正妻と……」

海原はさらに狼狽し、カップを置いて軍帽を被りなおして背筋を伸ばす。

「制裁の件は片が付いただろう？ 私の仕事が至らんばかりに大淀を怒らせてしまったのだから、それで私に仕置きが必要であるという——」

明らかに噛み合っていない会話に、大淀は、ううん？ と首を捻つた。

海原の言うせいさいが、どうして仕置きの話になっているのだ、と。褒美の代わりに仕置きなんて、ひん曲がった性癖でもあるまいし、なんて考えていたところで、大淀の胸中でせいさいという文字が変換されていく。そして――

「……て、提督、もしや、あの、制して裁く、と書く方を考えているのですか？」

「違うのか？」

――ボタンの掛け違いに気づく。

大淀は違和感が押し流されて胸がすくような気持ちになると同時に、湧き上がって来た勘違いへのどうしようもない阿呆らしさに、乱暴に立ち上がって声高に言った。

「私と鳳翔さんが言ったのは妻の方です！ どうして制裁するのに提督の胸に縫らねばならないのですか！ 私は！ 提督の真つ直ぐなお考えや優しさに惹かれたから、じよ、冗談めいてはいましたが……だからこそ正妻としてお傍にいられたら幸せであると――！」

「っ!? お、落ち着け大淀！ 聞き違えていた私が悪かった！」

肩で息をする大淀を落ち着かせるように、同じく立ち上がって、どうどう、とジエスチャーをする海原。

大淀はむすつとした顔で椅子に座り、腕を組んでそっぽを向いてしまふ。

対して海原は小さな声ながらも不思議そうに大淀へ問うた。

「あの頃は出会って本当に間もなかっただろう。一般人という事を伏せて軍務にあたっていた時の私と、今の私に違いもあるまいに、どうして私の正妻などと……」

彼の言い分はもつともである。

大淀とて海原以外の男をいくらでも見て来た。舞鶴で、大本営で。

しかし深くまでかわったのは、彼だけだった。

「……あなたをもつともつと、知りたいと思っただけです。誰よりも、一番近くで」

「知りたいのならば聞けば何だって喋るとも。だが艦娘であれ柱島に他の大淀が来たとしても、お前はお前、一人なのだ。もつとよく考え

て——」

「だからです」

うん？　と言葉を遮られた海原は身体ごと大淀に向けたまま静止した。

「私達は、人じゃないんです……艦娘です。私と同型艦は多く存在しています。その中でも、化け物だと言われ、兵器だと言われ、それでも戦わねばならないと意地を張って……柱島に流れ着いたのです。そんな私に、提督はそうやって目を向けてくれるから……人の真似事を、してみたくなくなったのです」

そう言つてまっすぐに顔を見つめてくる大淀に、海原は唸った。

「うむう……そう、か……」

「……」

「意気地のない男で、すまない」

「あ……う……そ、そうですよね、ごめんなさい、私——」

さらりと零れるように流れた髪を耳にかけて無理に笑った大淀を見ながら、海原はさらに唸った。

「言い訳のように聞こえるかもしれんが、聞いて欲しい」

「……はい」

「私は艦娘だ人間だと区別して考えるが、そこに決定的な違いがあるのかどうかを知らん。お前達は海を駆け、砲撃を放ち、時には人智を超えた力を発揮する。しかし人と同じく涙を流し、痛みを感じ、心を持っていてるように見える。いいや、私は心を持っていると、そう確信している。だから……そう、だな……私より多くの世界を知っているのだろうが、大淀や、他の艦娘達にも、色んな人がいる事を知って欲しい」

海原は語る。

「お前がどのような扱いを受けて、どのような境遇にあつたかを知っている。お前も私が会社員である事を知った。そうして今がある。ならば改めて、お前が本当に一生を添い遂げても良いという男を探すのもまた、悪い事ではないと思うんだ。軍務一つに頭を抱える、うだつが上がらない私のような男ではなく——」

大淀は、

「……だから」

思いの丈をぶつける。

抑えつけられていた感情という濁流が全てを押し退けて、口をついて出た。

だが、それは消え入りそうな程に小さな声だった。

「だから……あなたを、愛してしまっただんじやないですか——」

「お、およど……お前、本気で……」

海原は艦娘の事となれば決して否定から入らない男だ。故に、思慮深く重い言葉は、大淀を揺さぶった。

それは透明な水滴となって、大淀の眼鏡を内側から濡らす。

涙は女の武器とはよく言ったもので、海原にはそれこそ特効があった。

ずるいと言われるかもしれないが、大淀にとって想いを伝える事はそれほど重要なもの。

何度も踏みにじられた思考、何度も貶された存在、幾度も押し込めた感情を受け止めてくれる人は、多くを知る大淀でも、たった一人しか存在しないのだ。

「こういう艦娘は、お嫌い、ですか」

いつかのやり取りを、今度は涙ながらに。

海原はきつと嫌いじゃないと言うだろう。

そう知りながら小賢しく口にした彼女に、海原は言った。

「はあ……甲斐性なしと言われんように、もっと努力せねばならんな」
「え……う？」

顔を上げた大淀に、海原は至極真面目な顔をして頭を下げた。

「……今後とも、私を傍で支えてくれ、大淀」

彼女の再出発【阿賀野】

東京の麻布にあるこぢんまりとした居酒屋で、公序良俗、などという堅苦しい四文字がカウンターを行き交い始めたところで、橘浩二たちばなこうじは眉間に皺を寄せて喉を鳴らした。

酒の肴にはちと堅かったか、と季節外れに呑んでいたぬる爛が残る徳利をちやぷりと振った。

店には橘の他には部下と店主の二人しかおらず、部下の男は声をひそめもせず声高に言った。

「橘閣下もご存じでしょう。我々海軍が為さねば成らない事は、得体の知れない化け物を駆逐し人類を守る事であり、それこそが自分らの正義であると！」

そう熱弁をふるうのは、日本海軍広報部に所属する若き軍人、藤田茂大佐ふじたしげるである。

彼は日本の自衛隊が海軍へと切り替わった頃に入隊した男だ。かつての混乱極まった日本においては、このような男が多かった。言い方は悪いが、ヒロイズムに満ちた者が多かったのだ。日常が破壊され、人々は恐れ、その中でも強き存在艦娘が現れて指揮出来る者が求められたあの頃、自分ならば出来ると立ち上がった人は多かった。

橘は決してそれらを否定しない。人が何かを成そうとする時の原動力とは往々にして自らを満たすための欲であると知っているからだ。公序良俗と言い出したのは藤田大佐であって、彼の弁では海軍の身を切る改革に納得がいかなのだという。

しかして既に実行されている最中のものであり、こうした分子を納得させるのが軍機を握る一人でもある橘の仕事であった。

納得させるといふのも、ていの良い言葉を並べて部下をだまくらかすのを言い換えたに過ぎないのに、橘は非常に後ろめたさを——感じたりはしていなかった。

むしろ、藤田と自分の立場が違う事に安心を覚え、だまくらかして若き軍人をそのまま未来へ繋ぐべきであると思っていた。知らぬまま、分からぬまま、ある日ふと気づいた時、彼が頭を抱えて橘を思い

出すのであろうと考えるだけで面白く、また低く喉が鳴る。

藤田が改革を良しとしないのは、艦娘を指揮する人間があまりに多く失われたからだ。それを補完する手立てがあるとは公表しているものの、人事異動は半ば名前だけが動いただけであり、現場の指揮官が減っているのは厳然たる事実。

海原元帥と井之上元帥の二人の司令塔で指揮官の減った前線が保っている現状が異常なのである。

藤田は現実主義者で、この体制が長く続くとは思っていなかった。どこかで必ず手が足りなくなる、そう考えているのである。

「んん……」

「掌を返すような改革を元帥閣下が推し進める理由も分かりかねます……井之上元帥は人権派だったのです?」

「どちらかと言えば、そうなる」

「確かに艦娘には感情がありましょう。人権を認めるべきであるという動きに自分も反する意見などありませんが——大戦果とは言え海原という男を海軍元帥に祭り上げて全艦娘の指揮官にするなど重責が過ぎます。僭越ながら、この改革はあんまりと言わざるを得ません」

「海原元帥をさして知らんだらうに、重責とは上からじゃあないか」

「そつそれはそうかもしれませんが……しかしですね……」

「あのお方だからこそ、全艦娘の指揮官が妥当であると軍部が判断したのだ。それについては異論は認められん。が、人員の大幅な異動と改革云々については一理ある」

「でしよう? なら——!」

「藤田は軍に入って今年で何年になる?」

「は、はい?」

御猪口にぬる爛を注ぎながら問う橘に、軍帽でよれた髪をくしやりと撫でながら藤田は訝し気に答えた。

「……十年と少しになります」

「艦娘が現れて随分経ったな。藤田も入隊時から考えられない出世をしたもんだ」

「話をそらさないでいただきたい！」

「まあ、聞け。お前は どうして自衛隊から海軍と物々しい名となった組織に入ろうなどと思つたんだ？ 面接の時は確か——」

何を隠そう、藤田を広報部へと引き入れたのは彼であり、藤田もまた、彼と十年以上ともに仕事に取り組んできた。それがどうしてここまで階級に差が生まれたのかは、残酷なほどに単純な理由だった。

「世を平和にするためです」

「ああ、そうだったそうだった、ははは。今だから言うが、夢と現実の区別がつかん馬鹿が入つて来たとおの時は笑つたもんだ」

藤田は純粹だったのだ。現実主義者なのに純粹というのは変な話だが、言い換えれば、彼は常識という枠組みから出られない男なのだ。

しかし橘は彼だからこそ育てねばならんとして、今もこうして居酒屋などに引つ張り出して話をしてている。藤田にとつてもこれはよくある事で、予定が合えば食事なり酒盛りなりに顔を合わせに来る。

男同士のフランクな関係性でありながら、それよりもいくらか近い間柄である。

故に大佐と中将という壁を越えて——藤田は多少なりの礼儀は持ち合わせているが——親しく明け透けに話が出る。

だが今回に限つては、酒の量と比例して口から多く出てくる広報部のくだらない噂話など一切出てこず、橘は藤田個人へと言葉を紡いでいた。

「どうしたのです閣下、そんな。自分をからかうのに呼んだのですか」「ああ、違う、馬鹿というのも親愛を込めたものだ。出世には邪魔になるものだが、決して失われるべきではない根幹であるべき思想だよそれは。まだ世の中を平和に出来ると考えているか？」

諦観したような物言いに藤田は目じりを下げ、悲しそうな顔をして店主へぬる爛を二合ほど注文した。

やってきたぬる爛の徳利を持ち橘へ示せば、御猪口をあおつて空にして、それが差し出される。

「……橘さん、嫌ですよ自分は。そんな事を聞くの」

「馬鹿。お前に聞いてるんだ。誰が世の平和を諦めるものか」

歳は離れていようが、入隊時から十年付き合ってきた相手だ。

妙な気を回した藤田に苦笑した橘は、注がれた酒を一気に飲んでから、既に冷めきったホツケを箸でつついてほぐした。

「国同士の争いは鳴りを潜め、今や手を取り合って化け物どもをやっつけようなんて世界中が奮起している。ある意味では平和だろう?」
「……」

橘の言葉に言い返せず、藤田は塩気の強い枝豆を口に放り込んだ。
「言葉をこねくり回しても仕方が無いから単刀直入に言うが、この先、二年後か三年後か、お前には海軍でも特殊な椅子に座ってもらう事になる。お前にとって幸か不幸かは知らんが、これは非公式な事前通知だ」

「えっ、閣下、それは——」

「昇進、と言えば聞こえはいいが……今のお前にはまだ全てを知らせる事は出来ん。だが私は付き合いの長いお前の事を良く知っている。だから任せるならばお前しかないと、真っ先に頭に浮かんだ。故に、事前通知だ」

これを聞かせるために呼び出したのか。藤田は数時間前まで羽織っていた軍服のせいでよれたワイシャツのボタンを外しながら言った。

「その間、私はお前を見ている。変化が起こるかどうか。十年と変わらぬ心がこの世においてどう作用するのか」

まるで謎かけのような言葉に、年季の入った徳利を御猪口に傾けていた藤田は唸った。

橘はよく回りくどい言い方をするが、それは広報部特有と言うべき世間に対する言い換えの癖みたいなもので、少し不謹慎な例えをすれば、深海棲艦に押され不利な戦況を国民に知られ不安を煽らぬようにと、日本海軍は接戦し、防衛線を維持している……といった具合である。押されはしているが突破はされていないから嘘は言っていない。大本営発表とは昔からよく言ったもので、それが現代に持ち越されて皮肉られているのだから、海軍としてはきまりが悪い。

世を平和にするためとは言え、入隊してから前線で戦うわけでも、

艦娘を指揮するわけでもなく、世間に弁を弄する任務に従事するなど藤田の思想とは真逆である。

それでも藤田が広報部に納まっている理由は、やはり橘という存在が大きかった。

彼は銃を持たず、言葉という武器で心と戦っている。自分の心や、他人の心、さらには、世間という大きな括りが生む大衆の心と戦っている。

海軍らしく別の表現をするならば、彼はそうやってかじ取りをしている。

そこにはしつかりとした思いがある事を知っているからこそ、藤田は謎かけのような言葉もふざけるなど一蹴せずに、噛みしめて考えた。

「変化、ですか……自分は今まで通りですよ。これからも海軍のやり方には従いますし、今回のような無茶な改革があれば口出しします。通るか通らないかは察しておりますが」

「ならば安心だ」

橘はニツコリと笑い、ホツケをもそもそと食む。

「——改革については、世間の目とお前の目は相違無い。身を切り過ぎていのではないかと政府も騒ぎ立てているよ。楠木少将の戦死に続き、八代少将と金森中将の裁判も控えている上に、各拠点から多くの軍人が引つ張られた。陸軍とて大騒ぎしている。特に、新任の松岡は方々を駆けずり回って、まるで番犬……いや、あれは猟犬だな。ある男に触発されてからというもの、松岡は鼻が敏感になった。ひとたび嗅ぎつけられたら地獄の果てまで追いかけられるぞ」

「陸の法務部中将でしたか。そのある男、というのは……海原元帥閣下で？」

「ああ。広島で会ったのが初めてだったが、第二次大侵攻が始まる前まで色々あったらしくてな。それと、海原閣下は正式には元帥だが、閣下の前では大将とお呼びするんだぞ。あのお方は一番上とというのが苦手などという妙な人だからな」

くく、と笑う橘に、藤田は目を細めて記者会見で見た顔を思い出す。

どこにでも居そうなのに、その身に纏う異質な覇気と有無を言わさぬ重い空気——井之上元帥と並んでいても若くして元帥に遜色ないと本能に叩き込まれる雰囲気は、藤田から疑念を霧散させた。

「そのように気が小さい男には見えませんでしたがね」

「だろう？ 私も未だに信じられんよ」

「自分もですが、閣下もその人の部下でしょうに」

橘の笑顔を見て力が抜けたように冗談を返す藤田は、話の先を促した。

「それで……この改革には意味があるのですね？」

場末の居酒屋とは言え、公衆の面前でこのような会話がなされる訳もない。

藤田はちらりと店主を見た。すると、店主と目が合う。

店主は口元だけ緩めると、すぐに料理をするために背を向けたが、藤田には一目でそれが軍関係者である事が分かった。このやり口から見るに、情報部が一枚噛んでいるな、と橘へ視線を向ける。

「だいぶ目が鍛えられているようだな。十年も可愛がった甲斐がある」

ニヤリとした橘に、食えない男め、という表情をしてわざとカウンターに頬杖をついた。

「しかし、せっかく鍛えたその目を取り出して洗わねばならん状況にある。海軍も変わるが、日本も世界も変わっていくぞ、藤田」
「なるほど？」

「時に、手品は好きか？」

「……閣下、もういい加減——」

まあまあ、と御猪口を掲げた橘が、ぱつと手を離した。

声を失って反射的にそれを受け止めようと手を伸ばしかけた藤田は——目を疑う。

御猪口が、ぴつたりと空中に固定されているではないか。

「え、ええ!? 閣下、それ……お、おお……また、おかしな特技を……」

「はは、特技か」

数秒もせず、橘は御猪口を指でつまんで、またカウンターへ置いた。

そして、再び謎かけのような言葉を口にする。

「三年だ。三年の間、お前が純粹さを失わず、その目玉を洗って世界を見られたら、私はお前を後任に据える。それまでは一時的にお前に佐世保鎮守府を任せたく思う」

「……えっ!?!」

唐突な辞令だった。非公式の事前通知とは違う、近日の異動が確定しているような言葉、いいや、これはもう、確定しているのだと藤田は一気に酔いがさめた。

「軍部の殆どは見えているのだがな、徐々に、徐々に広げねばならん。お前は私の自慢の部下だ。ヒロイズムに侵され、しかして現実を受け止められる軍人だ。お前は言葉を武器に出来る男ではない、言葉も武器に出来る男だ。この任務には、お前の頭が必要になる」

「ま、待つてください閣下、どうして広報の自分が佐世保などという大きな拠点に据えられるのですか!」

「八代が消えて席が空いているからだ」

「そんな単純な——!」

「それ以上に理由が欲しくば、前述した通り。お前は私が自信をもつてよそへ出せる軍人であると判断したからだ。井之上元帥にも海原元帥にも許可は取ってある。柱島泊地で発生した事故については把握しているな?」

「うっ……把握は、しておりますが……」

先ほどまで酒を呑んでいたとは思えない雰囲気纏った橘に気圧され、自然と姿勢を正してしまう。

何も言っていないのに、カウンターの向こう側から店主が冷水を置いたのを見て、我慢できずに溜息を吐いた。これはもう、逃げ道など無いのだと。

「艦本かんほんの調べによると、八代の奴が艦娘の艦装に深海棲艦の体液と思しきものを染み込ませた紙を仕込んでいたとの事だ。それを媒介に深海棲艦を呼び寄せたというのが実のところなのだが、その際に保護された——」

「ちよ、ちよちよちよ! 橘閣下! お待ちください!」

もはや声を潜めようが意味も無いのに、掠れたような声で橘を制止する藤田だったが、店主は気にする風もなく料理を続けていて、勢いのまま声をかける。

「おい！ 店主！ 分かるな!？」

「はい?」

なんでしよう、と振り返った店主に、藤田はもごもごと口を動かしていたが、ああ、もう、と声を荒げた。

「所属はどこだ！ 情報部か!? 広報では無かろう、見たことも無いぞ！」

「減点！」

「つぐ……」

橘の冷静な声に、椅子から浮いた腰が再び下ろされる。

「彼は海軍所属では無い。見て分かる通り今はただの居酒屋の店主だ」

こういう時こそ落ち着いて、事細かな言葉尻さえ聞き逃すなど藤田は自身に言い聞かせる。

「……んんつ、今は、という事は、過去は軍人であったのですね。陸軍所属であった、と」

「そうだ。この居酒屋を選んだのにも理由がある」
「……」

藤田は店内を見回す。自分と橘、そして店主以外には誰もいない。店内放送にBGMも流れていない。

静かな店だとは思っていたが、どうにもそれだけではないと気づいたら、違和感は大きくなった。

「……防音が施されておりますな」

「よしよし、冷静になってきたな」

橘の声を耳に受けながら、藤田はさらに店内をつぶさに見た。カウンターはよく拭き上げられているし、飲食店として普通に見えるが、床を見るに自分達以外の足跡がいくつかある。橘と藤田が来店するより前に客がいた証拠だ。

しかしこれも引つ掛けかもしれない。来たのは本当に客か？

椅子から立ち上がって地面にしゃがみ込み、じつと足跡を見つめ始める藤田に、橘は満足気にホッケをもう一口食べた。

「見立てを聞こうか」

橘の声に顔も向けず、いくつかの足跡に指を這わせて、指先に付着したものを確認しながら藤田は言った。

「これは……街路樹の植えられたところを踏んだような土が混じっておりませんが、砂も混じっているところから、一度濡れて乾いたものが街路樹の土と混じって剥がれているのかと。しかしそれも一部で、殆どは土埃ばかりですから、ここは陸軍の施設の一部……でしょうか」失礼、と言つて口に含み、すぐさまカウンターに置かれたおしぼりにそれを吐き出した藤田は、改めて椅子に座つてから、うーん、と唸つた。

「酒を呑む前に試していただきたかつたものです。自分も若いとは言い切れん歳ですから、感覚など十年前前に置いてきたものを引っ張らねばなりません」

「十年で錆びる訓練ではなからう。まだまだ若造よ。それで？」

「塩気があります。ここまで分かりやすく海を連想させたいのにも佐世保に理由があるのかと愚考しましたが、いかがでしょうか」

「……及第点といったところだ。私としては入店時から身構えてもらいたかつたんだがな」

「手厳しいですね。まあ……ここまで整えられているのですから、橘閣下に自分が逆らえるわけありません。どのような任務なのか」

藤田の問いに、橘は店主へ「呼んでいただけるか」と声をかけた。すると、店主は奥に引っ込み——そちらから一人の女性を連れて来た。

「お、あ……橘閣下、どうして、彼女が東京に……!？」

それは——

「件の事故から、暫く休養させるために大本営で預かっていたのだ。海原元帥に預けようという話もあったが、井之上元帥が一時預かるとの事で話がついたのでな。しかし高練度たる彼女を長らく遊ばせて

おくわけにはいかん。よって、佐世保へと帰還させるために新たな提督が必要となった。そこで、私がお前を推薦したのだ」

——佐世保鎮守府所属、阿賀野型軽巡洋艦一番艦、阿賀野その人だった。

「さて、阿賀野。ここにいる私の部下、藤田という男が君の新たな提督となるのだが——どうだろうか」

「あ、あの、私は……えっと……命令なら、従い、ます……」

不安そうに顔を伏せた状態で、ちらちらと店主や橘、藤田を見てはまた視線を下げる彼女。

藤田は額を押さえて橘を見た。

「艦娘の指揮経験などない自分にどうして任せようなど……!」

「お前の目と鼻、頭を信頼しているからだ。知識が無いわけでもあるまい」

「知識はありますが! それとこれとは——!」

「なあに、誰もが初めてなのは同じ事だ。お前は知識だけにあらず過酷な訓練にも耐え抜いた精神力がある。それに、何もかもを一人でやれと放り出そうなどは考えておらん。佐世保鎮守府を運営するにあたって、新任のお前だけでは防衛に難ありと他の者に思われても仕方が無いため、郷田少将と清水中佐に協力するように通達してある。岩川基地、鹿屋基地、佐世保鎮守府の三拠点で防衛網をより強固に出来るよう、軍務に尽くす事を期待している」

「……はあああ」

わざとらしい盛大な溜息を吐き出した藤田は、橘に「阿賀野に失礼だろう」と言われて、さらにもう一度溜息を吐き出してみせた。

しかし、藤田の口から阿賀野に対して「君に対してじゃない、この無茶ぶりをしてくる男に対してだよ」という言葉が紡がれたところで、橘は破顔した。

「橘閣下、正式な辞令がおり次第、佐世保に行けばよろしいのですね?」

「身辺整理に時間が必要であろうから、一週間は見積もっている。その間、彼女にも大本営で待機してもらい、一緒に向かってもらう事に

なるだろう。質問は」

「久しぶりに飲み屋に来たのは、自分と食事をするためでは無かったのですか?」

「それもある。が、本命はこちらだな」

「で、ありますか……ではもう一つ」

「なんだ」

「先程の手品のタネは明かしてもらえないので?」

「……つくく、三年以内に分かるだろう。それが分からねば、お前は広報部で飼育殺しにする」

「それはまた、随分な任務ですね」

飼育殺しにする、という恐ろしい言葉が飛んで来ても、藤田は呆れた笑みを浮かべるばかり。

そのやり取りを見た阿賀野の表情は曇った。

しかし悪い人には見えない。信じて良いのだろうか。いや、もう信じるべきではない。

最初に信じて痛い目を見たじゃないか。痛い目どころか、柱島泊地の明石に救われなければ、今、自分は艦娘としてここに存在していない。

だから、信じるのはもつともつと後でもいい。今は、藤田という男を見極めるべきだ。

もやもやと考えている阿賀野を見て藤田は真っ直ぐな目を向けて言った。

「任務は必ずや遂行する。君の事は高練度の武勲艦であるという曖昧模倣な事しか分からんが、この一週間で出来る限り頭に叩き込んでくるから、心配しないでほしい」

「う、あ、えと……私……」

何か言葉を返さねばと口を開くも、すぐに閉じられ俯く阿賀野に、橘は、どうだ? と言わんばかりに顔を向けて来た。

藤田は女性経験が無いわけではないし、扱いが得意とまではいかずとも苦手じゃない。

しかし相手が若い女性で、しかも艦娘となれば話は別である。流行

りの話を知っているような一般人でもないのだから、話題も限られてくる。

八代少将が犯した重大な軍規違反、いや、国家への反逆行為の被害者たる彼女は多大な苦痛を経験しているはずだ。なら、当たり前障りのない一手が必要か、と藤田は店主へ声をかけた。

まずは自分を知ってもらおう事から始めよう。

「今は店主の方、メニューに無いものでも作ってもらえたりするか？」
そんな八つ当たりみたいない言いかたでもないいいじゃないか、と橘が笑うと、藤田はまるですねた子どものように「自分が悪いわけじゃないので」と鼻を鳴らして席を一つ移動した。

「阿賀野、君もこちらに来て座るといい。立ちっぱなしなのも悪い」「え、あう……はい……」

藤田に言われてカウンターの向こう側からやってきた阿賀野は、気まずそうに先ほど藤田が座っていた椅子に腰をおろした。

軍人二人に挟まれるのはさぞや居心地が悪いだろうに、それでも座ったのは、それを命令であると思いついて入っているからだろう。

かすかに震える腕を見た藤田は、何度目か分からない溜息を吐き出してから御猪口へ酒を注ぎながら言った。

「チャーハンを食べたいのだが、作ってもらえるか？ 明日はせっかくの非番だから、しこたま呑んで帰りたい。無論、橘閣下持ちで」

店主は「はいよ、チャーハンね」とあっさり注文を受けた。

「はっはっはー。そう不機嫌になるな藤田。広報部でマスコミ相手に美味くもない茶を挟んで話し続ける毎日よりは刺激的だろう？」

「でしようね。ええ、そう思います。佐世保で何かあれば全て橘閣下に投げますのでそのつもりで」

「つくづく、気骨がある男に育って清々しい限りだ。阿賀野、こいつに何かされたらすぐに私に言えよ、すぐさま目の前で引きずり回してやるからな」

「あ、は、はい、えと、そんな、私は、うう……」

「訓練で一等ばかりの自分を広報に引つ張り込んだ閣下に言われるのは心外ですねえ？ やれやれ、橘閣下の退陣も近いか……」

「私が耄碌し始めたど？ こいつめ」

阿賀野が毎日聞いていた刺々しい言葉なのに、そこに悪意は一片も無かった。

それどころか——二人は先程よりも、笑顔になっっているではないか。

「ああ、店主、チャーハンにはエビをいれないでくれ」

「うん？ お前、エビが苦手だったか？」

「いえ、別に苦手ではありませんが——どうしてでしょうね、気分じゃないとでも言いましょうか」

「ほお、我儘な男だな。阿賀野、こいつの我儘を佐世保で矯正してやってくれ」

「これくらいはいいでしょう！」

そんなやり取りに、阿賀野の震えがゆっくりと収まった。

「まったく……阿賀野は何か食べるか？」

「あの、私は……」

阿賀野の小さな声は橘の声にかき消されてしまう。

「私は刺身の盛り合わせを貰えるか。あとぬる燗をもう二合」

「橘閣下！ 阿賀野の注文が聞こえないですって！ はああ、この人だけは……すまん阿賀野、なんだ？」

「あ……」

気遣っているわけでもなく、藤田は藤田のままに接してきているのだと気づいた阿賀野は——

「わ、私も、チャーハン、を……エビ、抜き、で……」

遠慮がちな声で、藤田と同じものを頼んだ。

「お、エビ抜きか。店主、チャーハン二人前で頼む。どちらもエビはいらん」

「阿賀野は藤田の味方か、これは分が悪いな……」

「……あの」

口を開いた方がいいが、何を言おうとしたか忘れ頭が真っ白になった阿賀野は、やっぱり何でもないです、と顔を伏せた。

事情を全て知っている橘は一瞬だけ眉をひそめたが、事情を知らぬ

藤田は徳利に残った数滴の酒を御猪口にぽつぽつと落としながら言った。

「ここでも何かも済ませなくてもいいだろう。今は飯を食おう、な？」
「……はい」

あいよ、とあつという間に出来上がったチャーハンが二つカウンターに置かれた時、その香りと湯気の向こうに見えた藤田の顔を見た阿賀野の頬に、ぽろりと水滴がひとつ落ちた。

「阿賀野!?! ど、どうして泣いて……!」

「ご、ごめんな、さい、わ、わからないです、わからな……ぐすつ……すみません……申し訳、ありま……せ……」

「あ、あ、ああ……ええ、と、店主! 何か甘いものを! 阿賀野、何が好きだ!?! 何でもいいぞ、ここはもう経費で落とそう、ね、閣下、構わないでしょう!?!」

「はっはっは」

「何笑ってるんですかちよつと! 店主、おしぼり! おしぼり一つ!」

大の大人が阿賀野一人の涙に慌てふためく、そんな様相に橘は一層満足気に笑う。

自分の選択は間違っていないなかったと、軍部に自信をもって報告出来るぞ、と。

惜しむらくは彼がまだ——手品のタネに気づけないことだ。

しかし、それも時間の問題だろうな、と橘はカウンターのの上に座ってホットケで頬をいっぱいにしてている妖精を見て微笑んだ。

「どうだ、悪くはなからう」

『!』

その妖精は、ニコニコと頷くばかり。

阿賀野は泣いていたが——それもまた、必要なものであろうと、あえて止めたりはしなかった。

「エ、エビ抜きが嫌だったか!?! あー、エビ以外が欲しかったか!?!」

「ち、違う、んで、すつ……一緒の、ご飯、食べます……食べさせて、くださいいっ……ひぐつ……」

「そ、そうだな、食べような!?!
橘閣下、ホツケに話しかけてないで酔
いを醒ましてくださいって!」

記者会見【海原鎮】

これは、過日の話。

井之上が開いた記者会見場には、既に多くの報道陣が集まっており、今か今かとその時を待っていた。

カメラの電子音やノートパソコンのキーを叩く音が響く中で、井之上ら軍人達が扉を開いて姿を現した瞬間から、報道陣は一斉にカメラを構えた。

会見場に現れたのは、海軍元帥の井之上の外、情報部の忠野に、広報部の橘、それから艦政本部の次長を務める白石幸喜（しらいしこうき）という恰幅の良い男の三名である。

壇上へ一番上がったのは井之上で、彼は報道陣に向かつて一礼したのちに、えー、と一声間を置き、話し始めた。

「○月○日、中四国、九州地方の周辺に発生しました深海棲艦出現につきまして、撃滅が完了した報告を致します」

途端に激しいフラッシュの明滅が会見場を照らし、井之上は直接それらを直視しないように顔を顰め、視線を下げた。

後ろに控える忠野達も同様に視線を下げ、直立不動のまま。

「深海棲艦撃滅に際し、警報発令地域の被害状況を確認したところ――」

第二次大侵攻から約二週間経過してようやく会見を開いた海軍に對して、報道陣は今にも食ってかからんと身を乗り出した状態で井之上の話聞いてる。その様相たるや、海軍の杜撰な仕事ぶりに文句しかないと言葉無く伝わってくる程である。

しかしそれらは、井之上の口から紡がれる隙の無い言葉によって踏みつぶされる。

「――鹿児島、肝付町山間部にて一件確認が取れました。飛来した深海棲艦の攻撃機を撃墜した際に被害を最小限にとどめるべく予定されていた撃墜場所、志布志湾沖から十数キロほど墜落地点がずれてしまい、甫与志岳（ほよしだけ）へと敵機が落下、当該地点より半径三十メートル程度が炎上しました。鹿屋基地より速やかに消火班を急行させ消火し、完

全鎮火を確認しております。それから、南洋諸島側へと深海棲艦を誘導した際、出現規模の確認を行った日本海軍所属の楠木少将が深海棲艦の攻撃により、殉職したことを報告いたします」

こちらには腐るほど質問があるぞ、という息遣いが一斉に失せた。井之上は自分で言っておいて、ここまで有り得ない事を口にする日が来ようとは思っておらず、手元に用意していた原稿を二度、三度と目で追う。

自分が言っている事に間違いは無いか？ と確認するも、原稿に印字された文字が変わろうはずもない。そも、この原稿は自分を含む軍部が作成したものであり、間違いなど一片たりとも無いのだ。

第二次大侵攻と大々的な名となった深海棲艦の大量出現は、この会見を開くきっかけになった通り、西日本一帯に警報が響いた通りに紛れもない事実である。

マスコミが無茶をしてへりを飛ばし、現場を見た……などと言った事はなかったものの、深海棲艦出現警報は、日本政府と日本海軍が国民を守るべくして地震警報や気象警報、津波警報と同等の、いやそれ以上の精度で作り上げたものだ。嘘などつかない。

規模こそ海軍が発表せねば分からないが——正確な数の発表は現場からの情報が無い限りは不明であるため——それにしたって警報の範囲が範囲だったのだから、想像を絶する規模だったはずだと全員が理解していた。

深海棲艦が初めて出現して各地を襲った時には、自衛隊に多くの被害が出た。

死者が出たとは言え、たつたの一人——それも本土への被害は山が一部焼けた程度で済んでいる？

では、さらに深く、真実を知っている井之上や、後ろに控える忠野達はどうかだろうか。

信じられないというのならば、彼らが一番、非現実めいていると思っている。

記者会見が始まる前までに大本営の会議室にて何度も打ち合わせをしたというのに、原稿の殆どを用意した忠野はここに来て尻込みし

てしまいそうになった。

海軍における数多の闇を抱える情報部の頂点に座す男が、である。ここからは、どれだけの数を撃沈したかの報告をせねばならない。その報告をする男が、これからやってくる。

忠野は自分で提案しておきながらも不安に襲われていた。

海原鎮——記者会見の場でも井之上が数度名を挙げた程度の、報道陣のみならず民衆にとって幽霊に等しい、かの男を壇上に立たせる。非現実の象徴たる艦娘や妖精を指揮する、これまた非現実な男を。「現場の指揮を執った海原鎮大将より、撃滅報告を行いたく思います」同時に入室してはインパクトに欠けるから、自分が報告の合図をしたら入室をしてくれ。

広報部の橘中将与同様に国民へエンタメじみた嘘をつくなど十八番おはこだった忠野をして、こればかりは緊張した。井之上元帥にまでこのタイミングで壇上から降りてくれと指示していたのだ。

これが海原鎮という、近い将来には日本海軍元帥の座に就く男が国民の目に焼き付けられるであろう瞬間なのだから、無理もない。

井之上が壇上から降りたあと、忠野自身が「お願いします」と厳かに呼んだのは、演出でも何でもなく、緊張していたからだった。控える井之上達にも緊張が走った。

そんな様を見れば報道陣とて嫌でも緊張する。

数度名が挙がっただけの男が、突然、大戦果を引っ提げて現れる。合図から数秒と経たず、ごつ、ごつ、ごつ、と革靴が廊下を踏みしめる重たい音が会場へ届いた。

そうして、扉が開かれると——全員が息を呑む。

錨のマークの光る軍帽の下から覗く、目が合えば射殺されてしまいそうな鋭い眼光。

胸に輝く勲章が霞んでしまうくらいに堂々とした出で立ち。

白い手袋に包まれ、握りしめられた拳に、迷うことのない足取り。覇気に気圧され、必要も無いのに思わず敬礼してしまう白石。

忠野と橘は慌てて最敬礼し、井之上はゆっくりと敬礼する。

ちらりとそれを見た海原が四名に答礼し、その後、会見場にぼつり

とある国旗に向かって軍帽を脱ぎ、頭を下げた。

たったそれだけの所作で、十数秒。

カメラも回っており、ジーという電子音が響いていた。

耳を澄ませてやっと聞こえるような音だったのに、全員がそれを煩く思うくらいに静寂に包まれる会見場に、またも、ごっつん、と革靴の音。

壇上に海原が立つと、誰からか、ごくりと音がした。

「——日本海軍所属、海原鎮だ」

あつ、と井之上達が気づいた時には、既に遅かった。

重傷をおしての指揮。軍首脳部と柱島泊地の艦娘達への真実を伝えた一連の出来事。

それから、大勢の視線にさらされる緊張に——海原節が出てしまっても、もう止められない。

海原節と言えば多少なりとも聞こえはマシだが、海原本人から言わせれば、極限の緊張を乗り切るための——威厳スイッチ、というものであった。

彼の胸中は、それはもう、悲惨なものだった。

(んんんんん！ 多いよツ!! 聞いてない！ こんなに来るとか聞いてないよ井之上さんよオツ！ 打ち合わせと違うぞ忠野テメエツ！)

握りしめた拳は、彼の緊張の証。

(なあにが——病み上がりで申し訳ありませんがちよつとした仕事です、すぐに終わりますから——だよ!! これ本当に終わるのかよ!?)

終わらないよなアツ!?! 無理だよなアツ!?! 見たら分かるヤバイやつじゃん！ 皆にお土産でも買って帰るかって旅行気分だったのにクソアツ!! 助けて大淀おっ！)

鋭い眼光は——実のところ、誰も見ていない。

ちなみに会見するのに大本営まで随行していた大淀は現在、控室にてこの中継をテレビで見ている最中である。

(し、ししし死ぬ死ぬ死ぬウウツ……これなら会社でプレゼンしてた方が億倍マシだよお……ひいん……)

演台の上に用意された原稿を持ち上げるも、海原はその文字列を目で追う余裕すらなかった。

だが、はたから見れば、それらを読み上げるのが如何にも馬鹿馬鹿しいと鼻で笑っているようにしか見えない。

泣きそうになつて鼻が鳴っているだけである。

「……忠野」

「は、はっ……！」

海原は助けを求めべく、原稿を振って示した。

「これを読め、と？」

忠野は忠野で、真実を知っているにもかかわらず、海原から発せられる恐ろしいまでの威圧に屈してしまつており、額に汗を浮かべて両腕をぴんと伸ばした状態で大きな声で返事をする事しか出来なかった。

「はっ！」

「……深海棲艦の撃滅を報告するのに、これだけ長い原稿が必要なのか」

言葉足らず——のように思えるが、海原からすれば純粋な疑問。

日本海軍、ひいては公式の場での所作など知るはずもなく、海原が知っているのは一般の企業における報告会のみ。必要最低限、知らせねばならない事を単純明快に、その後の質疑応答で詳しいところを説明するのが通常である。

しかし、公式の場における報告というものは長つたらしいもので、どこで、どのようにして、どれだけの戦力で、どれくらいの消費のもと、細かくなくとも公表出来る範囲で、どのような作戦を用いて撃滅したのか……端的に挙げててもこれくらいの説明が必要なのだが、海原は——

「ほ、報告でありますので……！」

「……そうか」

——原稿をぱさりと演台に置き、一言だけ。

「出現した深海棲艦は全て撃滅した。以上だ」

ざわ、と会場がどよめいた。

ああ、と橘が眩暈を覚え、記者会見を開く前に数度顔合わせをしていた白石は絶句し、忠野は今にも倒れてしまいそうになる。

井之上は——必死に、笑みを抑え込んでいた。

海原には悪いが、これが必要なのだ、と。

「——〇〇テレビの河野です！ し、質問を……！」

勇気ある男が一人、手を挙げて海原に言う。

「なんだ」

海原の視線を受け、勇ましく立ち上がった河野という記者はびくりと震えた。

「日本海軍が、げ、げき、撃滅したという……深海棲艦は……その……！」

向けられる目が細められ、さらに怯える河野だったが、海原はざわつく記者達を制するように右手をさつと振った。

たったそれだけの仕草で、しん、と静まり返る。

ただ海原が聞こえづらかったただけなのは言うまでもない。

(聞こえないから！ 河野さんからの質問なんだから他は黙ってるってエツ！ 学校で習ったでしょうが！ 他の人が喋ってる時は静かにしなさいってツ!!)

こんな情けない胸中の叫びも、聞こえない。

「失礼、河野殿。質問を」

しかし、そんな海原の質問を堂々と聞こうとする姿勢に河野は目を見開き、今度は落ち着いた口調で問う。

「……日本海軍が撃滅したという深海棲艦の規模を、詳しくお聞かせいただけますか」

本来ならば原稿を読み上げるだけで済んだそれを、どうしてあえて質問させたのか……話をはぐらかされ、逸らされ、上手く躲かれ続けて来た記者にとって海原との会話は非常に好印象となった。

くしくも、忠野が考えていた以上の効果が発揮されたというわけだ。

「作戦海域に出撃した空母機動部隊の艦載機で確認出来たのは、駆逐級、軽巡級、重巡級、戦艦級と合わせて二百と三隻、未確認の特殊個

体を四隻、これは後発で確認できた数だ。先遣隊として哨戒班と南方海域を開放した第一艦隊が確認した深海棲艦も合わせれば、三百程度であると報告を受けている」

「さんっ……!?!? そ、そんな数——」

「正確な報告が出来ず、申し訳ない。規模が規模であったため、確認する前に沈めてしまった深海棲艦も多いのだ。だが、討ち漏らしは無い。南方海域にある各拠点も現在も周辺海域の哨戒もしている。他に質問はあるか」

「……い、いえ、お答えいただき、ありがとうございます」

力が抜けたようにパイプ椅子へ落ちる河野に続き、別の男が手を挙げた。

「そちらの」

海原が顔を向ければ、空気に触発されたようにしやんと立ち上がった大きな声で名乗る男。

「○○新聞社、鈴木です！ 今まで多くの作戦に従事しておられた海原大將は今まで一度も会見には参加されていませんでしたが、何故この記者会見には参加なされたのでしょうか！」

「必要であると判断したからだ。他には」

「いえ！ お答えいただき、ありがとうございます！」

まるで回答を貰えただけで満足というように、鈴木はガリガリとメモを取って座る。

河野、鈴木と勇気ある記者が質問をした事により、会場からどんどん手が挙がる。

海原が指した者から順番に質疑応答が始まるも、対する回答が短いため、処理は速いものだった。

「○○新聞の高谷です！ 西日本全体に警報が出た事に対してどうお考えでしょうか！」

「西日本全体か。詳しくはどこに出たか把握しているか？」

質問に質問で返されたら、記者としては食い気味に「質問を返すな！」と声を荒げるところだったが、海原の雰囲気にもまれた会場でそれが起こるはずもなく、高谷記者は立ち上がりざまに椅子へ置いてい

たパソコンを持ち上げてからいくつもの地名を長々と読み上げた。

それをじつと聞いていた海原からは、やはり、一言。

「——以上の地域で警報が出ました。これには多くの国民が不安を覚えたとありますが、どうお考えですか」

「警報が正常に発令されていると認識している」

「は、はい……!?!」

しばしの沈黙から、高谷がさらに口を開こうとした矢先に、海原の低い声。

「国民へ不安を与えたのは、私達の発見が遅れた事が原因にある。大変、申し訳ない」

そこで軍帽を脱ぎ、演台の横へ出て深く頭を下げた海原に、カメラのシャッター音はならなかった。

映像としてカメラは光景を収めていたが、どうしてか、カメラがすすりとずらされた。それも、カメラマンの手によって。

海原が頭を下げたのに一拍遅れて、井之上達も横に並び頭を下げるも、それを収めるカメラは既に存在しなかった。

全員が頭をあげたのち、新聞の一面を飾る事となる質問が。

「今後、同等規模の深海棲艦の侵攻が再び発生した場合、海原大將が現場の指揮を執る事になるのでしょうか」

「必要ならば、そうなる」

「……今回の侵攻に関して、何かコメントはありますか」

「コメント?」

ふむ、と記者達を見回した後、海原は軍帽を目深に被り、何でもないような口ぶりで言った。

「私の仕事をしたままでだ。君らを守る、それ以外にない」

質問をした記者は、じつと海原の姿を目に焼き付けるように見つめた後、呟くような声量で「ありがとうございました」と言って座った。

それから井之上が動き出して海原と入れ替わったところで、海軍の体制変更が発表されたものの、攻撃的な質問がその場で飛んでくる事は無かった。

これもまた、忠野の予想を上回る結果である。

後日、熱の冷めた記者から藪をつつくような取材が何度か申し込まれたものの、海原が主導して体制の変更中であるため回答を差し控える、と言っただけで引っ込むという拍子抜けな事があつたりしたのだが、それはさておき。

こうして、海原鎮は表舞台に現れ、護国の鬼神、血濡れの大将といった物々しい異名が世に知れ渡る事になったのだった。

余談だが、この記者会見後、海原は傷の具合とは別に腹を壊したらしい。

秘書艦の青葉からこれを聞かされた井之上元帥や軍首脳部は、やはりあの人物は良く分からない人だと笑つたのだとか。

日常【大淀・鳳翔・龍驤】

「限界突破かあ」

鎮守府の談話室は以前と違い様々な設備が整えられ、娯楽のみならず情報収集も出来るようにと共用のパソコンまで設置されていた。もちろん、柱島泊地は最前線かつ元帥の直轄であるために機密情報が漏れないようにと厳しい制限が設けられているもの、おおよそ一般的に使用するには問題のない程度である。

テレビ、雑誌、漫画、パソコン、それ以外にも囲碁や将棋、チェスなんていうものを取り揃えたのは海原本人である。

曰く、戦場に身を置く彼女らに潤いが無いのはいただけない、という事らしく、知的好奇心を満たすのは権利だというのだから生真面目なのか優しいのか。

談話室以外にも、食堂にテレビ兼会議用にと大きなモニターが設置されているのだが、それらは柱島泊地に所属する青葉が面白がって制作した【鎮守府散歩】なる自主制作番組が常時垂れ流しになっているのが実のところである。しかしながらそれもまた好評なのだから、海原からは艦娘が肩の力を抜けるのならと黙認されている。

内容こそ大淀が問題無いか精査しているものの、時たまギリギリな映像が流れる場合もあるとかないとか。何がギリギリなのかは、想像にお任せするでしょう。

「はい、限界突破です」

談話室で難しい顔をしながら結婚情報誌を読みふけている大淀に対して声を上げたのは、足と腕を組んで頭を揺らす龍驤である。

「ほんで、その限界突破っちゅうのにいくつか事例を作るのに一番槍になつたらって大淀が手え上げた事にする、と」

「……そうですね」

「今の間あ、さては個人的に司令官に言ったんが大きいな……?」

龍驤の的確な指摘に対してびくりと反応してずれた眼鏡を押し上げながら咳払いした大淀は、龍驤の横に座っている鳳翔をちらりと見てあからさまに話題を逸らした。

「——んんっ！　そ、そう言えば鳳翔さんはどうでしたか、勉強会」
「勉強会ですか？　んー……艦載機運用の基本的な事をお話ししただけですから、勉強会と呼べるものだったか少し不安ですけど……皆さん、とても真剣に取り組んでくださって、好感触でした」

大淀と鳳翔が言う勉強会とは、井之上元帥、もとい大本営から第二次大侵攻を戦い抜いた艦娘達の経験談は共有されるべきであるとして各拠点にて開かれたものである。

無論、軍機に抵触する事は上手く伏せられていたが、戦闘に際する多くの経験は各拠点の艦娘達との間でコミュニケーションも兼ねて共有され、柱島泊地の艦娘の多くは今や海原と同じく生ける伝説と化しているのだった。

そも、彼女らにそのような意識は無いため気恥ずかしいやら気後れするやら、副次的かつ感情的な問題もあつたりしたのだが、自分達の武勲が後続の役に立つのなら是非も無しといったところ。

図らずも、欠陥と呼ばれた艦娘達は、最前線を駆ける最強の艦娘達として勇名を馳せ、教導する立場になったのだった。

大本営からくだされる任務遂行の他、艦政本部にて開発されている新兵装の実験データの取り扱いや改革された海軍全体の調整、海原本人が自発的に行っている勉強等々——元々はただの会社員だったのだからこれからは必要だろう、と様々な勉強をしているらしい——多岐にわたる活動を表情一つ変えずにこなしている海原に比べれば楽なものと思えるが、それを差し引いても海軍の中核と言って申し分ない多忙さである。

中核に申し分ない拠点だが……彼女らの間に横たわる、大きな問題がある。

彼女らにとっての、大きな問題だ。

「歴戦の空母である鳳翔さんから指導を受けられるのですから、有意義な時間でしょう。それに、えーと……ほらあ……」

うんうんと唸りながら会話を逸らし続けようとするも、龍驤から出た溜息に言葉が途切れ、抱えていた雑誌が、くしゃりと歪む。

「大淀は戦場と執務室やと完璧やけど、それ以外はとこつとんアカンなあ……」

「なっ……!! どこがダメなんですか!」

「まず、そのドレスの頁を開いてるところやろ」

「うっ」

「本から飛び出しとる付箋の数やろ」

「うぐっ」

「色分けされとるのを見るに、自分以外の艦娘が司令官に言い寄った場合も想定されとるみたいや。赤色は戦艦、緑は重巡、黄色と白は軽巡と駆逐か? 青は潜水艦やら特務艦……で、今見とるドレスの頁に貼ったピンク色のは自分用やろ」

「ちが——!」

「全部自分用やったか?」

「それでは私が提督を独り占めしようとしているみたいでは無いですか! 皆さんにもしもの事があれば迅速に情報提供が可能なようにしているだけです!」

「ほなウチの見立て通りやんけ。真面目で完璧なのにやっとる事が抜けとんねや君」

「……うう」

余談だが、柱島泊地において多くの情報を抱えており、なおかつ見抜く力があると言ったら、次点は龍驤である。

彼女は大淀に負けず劣らず分析が得意で、よく人を見ている。それ故に柱島泊地のご意見番、なんて呼ばれていたりもするのだが、それはさておき。

「ふふ、それでも想いが伝わって結実する事は、決して悪い事ではないじゃないですか」

「鳳翔が言うたら重いなあ……」

「え、ええっ!? そんなつもりは……」

「ははは、冗談や、冗談。ま、鳳翔も司令官とケジメつけに行く予定もあるし、そろそろ他人事じゃなくなるで?」

「ケジメって、そんな……」

困った表情の鳳翔は、袴のような制服の裾を指先でちよいちよいと弄りながら、龍驤の言うケジメについて考えを巡らせる。

もちろん、菅谷中佐の事だ。

元情報部所属の男は闇に動いて、闇に葬り去られた。

しかしてその功績は、未来、いわば今に繋がっている。

それらが蔑ろにされてよいわけもなく、彼の上官である忠野中将は菅谷中佐の実家が建てた墓とは別に、鹿屋基地にこぢんまりとした慰霊碑を建てた。未来への活路を切り開いた勇敢で勤勉な軍人として。

それ以外にも情報部は多くの軍人を失った。慰霊碑には簡単な文言しか彫られていないが、そこには多くの想いが込められている。

勉強会で方々へ飛ぶことの増えた鳳翔は、九州に向く事があれば墓参りをしようと海原から提案されている。慰霊碑であるか実家の墓であるかは分からないが、彼女も彼女で断る理由も無いために、機会があればとは言っている。しかし自分は艦娘かつ軍人——如何な理由であれ個を優先して良いものかと半ば遠慮気味だった。海原の多忙さも相まって時間など取れないだろう、と。

だが海原は確実に任務を一つ一つ完遂しており、龍驤の言う通り、本当にそろそろケジメをつけに行けそうなのだった。

靄のかかる胸中を知ってか、一人になる時間も必要だろうが、孤独にはならないようにと、大淀や龍驤はこうして行動を共にしている。

鳳翔にとってそれはありがたい事だった。いつのまにか、柱島泊地のまとめ役はと問われたら三名の名が挙がるほどだ。それくらいに、気が置けない仲である。

龍驤のからかいと違って、大淀は至極真剣に鳳翔に言う。

「私達と提督は、極めて特殊なケースです。軍人と艦娘……ではなく、元々は、会社員と欠陥品なのですから。そうした背景があつてこそ今のですが、鳳翔さんの気持ちは汲まれるべきだと考えていますよ」

「大淀さん……」

「だから、私はあえて限界突破と言ったんです。ここの全員が提督を嫌いでないにしろ、色恋とは別の好意を感じているだけの場合もありますからね。特殊な関係だからこそ、強く繋がりたいではないです

か」

「……そう、ですね」

大淀は雑誌を閉じると、立ち上がって、談話室の隅にある小さな台所へと向かう。

手際よく三人分のお茶を淹れると、それをテーブルへ置いた。

「特殊な関係、なあ。まさか自分らがこないな事考えるようになるなんて思わなかったわ。ウチはちっと分からんなあ、やっぱ」

「提督に撫でられたりとか」

「なんやいきなり」

「提督に褒めていただいたりとか」

「お、おう」

「よくやったな、と目の前で他の娘を褒めているのを目の当たりにして、自分にはそっけなくご苦労とだけ言われたら……?」

「なんも思わんわ別にい！ なんやねんな、もう……」

「——龍驤、よくやったな、やはりお前は素晴らしい艦娘だ。と言われたら?」

声を低くして、かぶつてもいない軍帽のつばをつまむ仕草をする大淀。

「褒められるのは悪いこっちゃないやろ。多少嬉しいくらいやて」

はん、と鼻を鳴らして顔を逸らした龍驤だったが、サンバイザーを目深に被ってわざとらしい咳払いとも呼べない声を出すのを見て、大淀はくすくすと笑った。

「龍驤、私はお前を特別に想っている……どうだろうか、お前さえよければ、今夜一緒に——」

さらに海原を真似る大淀に、龍驤は自分の膝を叩いた。

「やめえや大淀！ そんなんちやうかつたやろ君い!? あーもう!」

「ふふふ、すみません、龍驤さんの顔が真っ赤なのが面白くて」

「うせやん!」

ぱつと顔に手を当てた龍驤。

我慢ならないと言った風に破顔一笑した鳳翔に、ぱつが悪そうに腕を組んだ。

「鳳翔まで笑うんかいな……あーあー、そやそや。司令官は悪い男
ちやう！ 褒められんのも誘われんのもやぶさかやない！ 悪いん
か、ええ!？」

「も、もう、りゅーちゃんったら、そんな顔を真っ赤に、ふふ……ふふ
ふ……!？」

「やめてやあ、もー!？」

血なまぐさい戦場を生き抜いたはずなのに、まるでそれが嘘だった
かのように平和な時間。

仲間内に想われるのが男一人というのは非常に特殊な状況だった
が、それもまた柱島泊地らしい様相なのかもしれない、と大淀は微笑
んだ。

「……ふう。冗談めかしましたが、ケツコンカッコカリについて詳し
いところを共有しているのはお二人だけです。練度九十九が前提で
ある事と、特別な様式が必要になるかは依然として艦政本部の開発状
況次第である事、提督曰く、強制ではない事——これを、騒ぎになら
ないよう穏便に伝えるには、限界突破という名目が安牌だろうとい
う話です」

「大騒ぎになったら困るんは司令官やしな。んでもや、ウチらだけし
か知らんつちゆうこたあ無いやろ。川内は？ 司令官の直属の護衛
やろ」

「川内さんもあきつ丸さんも知っていますよ。しかし、お二人は、ほ
ら、ね?？」

「別枠の扱い、かあ……ま、二人は艦娘保全部隊やし、騒ぎを起こす側
には回らんつちゆう事か」

「ええ。艦政本部の新兵装の開発状況は随時提督へ送られています
が、それとは別にお二方が出張っていますから、それがどういったも
のかも理解しておられるかと。ですので、実験的に実装するのは私を
含め、川内さんとあきつ丸さんの三名になるかと思われます。龍驤さ
んや鳳翔さんに問題が無ければ、実験データは多い方が良いでしょう
から、参加していただきたい……というのが、真面目なところですか
ね」

「んー……ウチはかまへんけど、鳳翔はどないや?」

「私も構いませんよ」

「あえっ? なんや、拍子抜けやな……」

「そうですねか……? 提督には正直に気持ちをお伝えしましたし、提督も菅谷中佐の事を知った上で了承しておられますから、特に問題は——」

「あっ」

大淀の声に二人が顔を向ければ、彼女は気まずそうに鳳翔を見て言った。

「……鳳翔さんは覚えておられますか、あの、褒美を与えるといった話で、私が正妻が良いと言ったのを」

「ええ、覚えていますが」

「提督はどういう聞き間違いか、制して裁く、という方の制裁と勘違いなさっていたようで、私が話した時によく誤解が解けたんです」

「は、はあ……」

「なので、その、鳳翔さんの話も誤解している可能性が——まずはその誤解を解くのが先になるかと……」

「えっ」

「なんやそれ」

「こんこん、と談話室の扉がノックされ、三人はびくりと肩を震わせた。

扉が開かれると、そこには——渦中の人、海原の姿があった。

「ここに居たか。大淀、スケジュールの変更があつてな」

「は、はい! わざわざご足労いただきましたすみません……! スマホに連絡を入れていただければ対応しましたのに」

大淀はポケットからスマートフォンを取り出して振って見せた。

これもまた、談話室や食堂に取り揃えられた設備と同じく、艦政本部の明石達が情報漏洩しないようにと細工を施した特別仕様のスマホである。

一般的なウェブサイトへの接続の他、各種アプリも問題無くインストール出来る一見して何の変哲もないスマートフォンだが、細工を施

すのに妖精の手も加えられているため、意外な事にも使えたりする便利なものだったりもする。例に挙げれば、作戦に携帯して行けば救難信号を出す道具ともなる。

防塵防水はもちろん、艦娘の砲撃には流石に耐えられないにしろ、自動車に踏まれたくらいなら使用に問題無い程度の強度を誇る。他の艦娘が使用できないようにと認証機能もバッチリである。

艦娘が使用するスマホの耐久性は重要だ！ とは艦政本部の明石達曰く。

「もう昼時だったからな、予定変更を伝えるついでに久しぶりに食堂で飯を食おうと思ったんだ。それで、明後日を予定していた艦政本部への訪問だが、明日に変更したいと忠野から連絡があつてな。どうやら新兵装の試作の用途が立ったらしい」

「それって——！」

「うむ、あー、その、あれだな。前に言っていた、アレだ」

鳳翔と龍驤をちらりと見て言葉を濁した海原だったが、無論、二人は察していた。

「食事ついでにその事も話せればと思ったのだが、忙しいのならば後でも——」

「い、いえ！ 任務ですから！ その、秘書艦ですし！ はい！」

立ち上がって海原に駆け寄っていく大淀を「ウチらはもうちよい後で食堂行くわ」と見送る龍驤達。

任務と口にしながらも、ぱあっと顔を輝かせた彼女を邪魔する二人ではなく、静かになった談話室で顔を見合わせて思わず笑ってしまう。

「任務ですから！ やて。任務で、顔に出てるっちゆうねんな」

「ふふ、本当に。でも提督が色々と働きかけてくださったお陰で、私達の環境も随分と変わりました」

「そやなあ……艦娘にスマホ持たせるんも、最初は意味わからなかったけど……」

「まだ使いこなせていませんが、メッセージアプリで離れていても手紙のやり取りのような事が出来るのは素敵だと思いますよ？ ほら、

りゆーちゃんが教えてくれた……」

「ラインやろ。戦艦の集まりやら空母の集まりやら、派閥が出来てまうんか心配したけどやあ……ま、杞憂だったわけやけども」

「派閥なんて出来ませんよ。まとめ役の大淀さんもいらっしやいますし」

「あのポンコツ具合でまとめられるんかいな」

「……ふふふ」

ポンコツ、とは口にしても、二人の表情は柔らかかった。

「司令官の基準もおもしろいな。駆逐艦やら海防艦には、スマホ持たせへんし」

「情操教育のため、とは言っていました……みまもりケータイというものは配布していましたよ？」

「あんなんスマホと別モンやん！ ボタンも三つしかついてへんしやあ。執務室か大淀か大本営にしか繋がらんオモチャやんけ。それこそ通信で事足りるで」

「第六駆逐隊の暁ちゃんは喜んでましたよ？ ケータイを持てる一人前のレディーだー！ って。ふふ」

「ケータイで一人前で、安上がりなレディーやなあ」

大淀が淹れてくれたお茶を口にしながら、龍驤は一息ついた。

鳳翔も同じようにお茶を一口呑むと、談話室はほんの少しの間だけ、静寂に包まれる。

二人とも静寂というものはあまり好きでは無かったが、柱島に来てから、時折ふと訪れる、こうした何もない時間と静寂が好きになっていた。

互いに言葉には言い表せない、心がほつとする、それでいてどうしようもなくつまらない時間が大切に思える。

それは往々にして自分達の心と向き合う時間だった。

一人で向き合わなければならぬものでもなく、言うなれば互いを知る時間でもある。

「ほんま、変なやつちゃで」

「変？」

「変や、変。 自称、元会社員の司令官も、今の海軍も、この時間も、ゼーんぶ変や」

「ん、そうですね。 嫌いですか？」

「……好きやで、こういうんも悪くないって思えるくらいには余裕も出てきてるしな」

「一時も油断しなかったりゆーちゃんがこうなってるのも、変、ですね？」

「はは、そやなあ」

あー、と言葉にならない声を上げながらサンバイザーを脱いで、だらしない恰好でソファにもたれかかる龍驤を見て目を細める鳳翔。 気づけば、何もかもが変わってしまった。

油断ならない戦況は続いているものの、着実に戦力の底上げが行われ、各拠点の資源の管理も行き届き始め、艦娘の待遇も変わって、任務も死と隣り合わせの危険はあれど、死に向かうものではなくなつた。

けれど、何もかもが変わつたと言うのに、相も変わらず日本は日常を変わず送っている。

先日、龍驤は外出許可を貰って広島に出た際——行き交う人々を見た。

仕事に向かう人、遊びに向かうであろう人、店で買い物をしている人、井戸端会議をしている人、子を連れる母、それを見つけ手を振る父、それから——龍驤と共に広島に出て来た、隣を歩く提督の言葉が脳裏を過ぎる。

【これが、お前達が守り抜いたものだ】

その、彼の目と言ったら、もう。

背の低い龍驤が見上げた海原の横顔に、何を思っているのか分からない不思議な目が、龍驤は——

「……りゅーちゃん？」

「んお、ごめんごめん、なんや？」

「いえいえ、ぼうつとしてたものですから……」

「あー、ははは。この前、広島に出てる時の事思い出してもうて」

「提督と外出なさった時でしたっけ」

「そや。呉鎮守府で仕事がある言うて司令官もついて来てな。ま、一緒におつたら息が詰まるやろって司令官はすぐに戻ってもうたけど……」

「デートはしなかったんですね？」

「するかい、んなもん！ それ言うたら鳳翔かて勉強会で司令官と一緒にやったやろ、デートのひとつくらいしたんか？」

「私は勉強会でしたから、デートなんて、そんなそんな……」

「はあー……そないな奥手やとゼーんぶ秘書艦に持っていられるでえ？」

「も、持っていられるってなんですか。私は別に構いませんが？」

「ほおん？ ま、鳳翔は鳳翔で色々考えてるんやろから、つつこまんとくけど……中佐の事もあるし、その、あれや」

龍驤はすっかり冷めてしまったお茶を一息で呑むと、湯呑を置いて優しい声音で言った。

「あんま、無理しなや。今まではできひんかったけど、今は違うんやから、鳳翔の自由にしたって司令官もとやかく言わんやろ」

「……ありがとうございます」

「そんなかしこまらんといてやあ！ ちつとな、気になっただけやから、な？ ままま、まあまあよ。まあまあ」

「何ですかそれ、まあまあって。ふふ」

「まあまあは、まあまあや！ 急ぎ足にならんと、ゆっくりやろやって意味！」

「ええ……そうですね。あの人のもとなら、ゆっくりしても、いいんですかね」

「……それくらいの甲斐性はある男やで、あの人は」

「あら、厚い信頼」

「茶化すなやあ！ もー！」

「ふふふ」

二人の会話に、ピロリン、という軽快な電子音が割り込む。

どちらのスマホから鳴った音か、と見てみれば、それは正規空母赤

城が率先して立ち上げたメッセージアプリのグループの通知だった。鳳翔も龍驤も参加しているものである。

「赤城ちゃんからだわ」

「問題でもあったんかいな」

鳳翔はぎこちない手つきで、龍驤は慣れた手つきで画面を操作する。

二人の画面に表示されたのは——やはり、平和なものだった。

『今日のお昼ご飯はチンジャオロースです!! 全空母、出撃してください!!』

「ぶはっ! 全空母に出撃かかってるで鳳翔、こら緊急事態やわ」

「うふふふ、赤城ちゃんったら、すごいはしやぎようね……それじゃあ、行きましようか、りゅーちゃん?」

「……ん、行こか!」

立ち上がりざまに、もう一件メッセージが届く。

今度は、大淀が主体で立ち上げたスマホを所持している艦娘全員が見られるグループにメッセージが来ていた。

駆逐艦や海防艦にもメッセージが表示される、いわゆる緊急通知用である。

「おわ、ほんまに緊急のメッセージ……が……」

「あら……」

『提督が食堂二向カウ。全艦出撃用意サレタシ』

「……送ったん大淀ちゃうな」

「あきつ丸さん、ですね」

龍驤はスマホをポケットにしまいこみながら、呆れたように笑った。

「ほんま変わったとこやでここは、もお……。ゆるうなりすぎちゃうかこれ?」

「まあ、ずっと緩いわけではないですから、ね?」

「全空母のオカンも甘いやつちやなあ……」

「ふふふ。さ、食堂へ出撃です!」

「……はいはい、出撃しよかあ。あー、丁度ハラも減ってきたわあ」

こうして、柱島泊地の日常が流れていく。

結【大淀】

「東京観光でもして帰るか？」

そう聞いた海原に、大淀は二つ返事で快諾したかったのだが、後に詰まっている予定を考えて我儘を通すことは躊躇われた。

「舞鶴に向かう時間もありませんので」

東京新宿にある大本営にて井之上元帥と会ってから時を待たずして艦政本部のある霞が関へ移動し、今度は大阪と舞鶴へ――。

大将、こと元帥となった海原は多忙を極めており、大淀を伴って方々へ出かける機会は多く、今も柱島泊地を出て既に二日経過している。

海原が不在の間に鎮守府を任された長門や鳳翔、龍驤から出がけに「頑張つて」と激励された大淀は意味を理解して領いてみせたものの、試作機として受け取ったケツコンカッコカリの装備の感触に全てを忘れてしまいそうになりながら、何度もこれは任務だと自分に言い聞かせて行動していた。

感触と言えど、まだ装備は大淀の指にはまってははいない。ただ持っているだけである。無くさないように、と艦政本部に所属する明石達から色気も感慨もなく新兵装だと受け取ったそれを手に、本部から再び大本営に戻って井之上元帥に報告、それからまたすぐに新宿駅へ向かうというタイトスケジュール――にもかかわらず、海原の歩みは軽快そのものだった。

何度も取材を受けた成果か、道中でも堂々とした軍服姿には大淀も背筋がぴんと伸びるほど。だが、その中身が変わったかと問われると――。

「大淀？」

「は、はいっ！　まだ新幹線の搭乗予定時刻には間に合うかと思われ
ます！」

道すがらに海原から心配そうな声をかけられた大淀は大袈裟なままで両肩を跳ねさせて、勢いにずれた眼鏡を指で支えて返事する。

聞かれてもいない事を答える大淀に、海原は困った顔で笑った。

「そうじゃない。休憩は必要無いかと思つてな」

「いえいえいえ、全然、はい、大丈夫です！」

「うむう……では、少し休憩するか」

「えっ？」

断つたつもりが休憩しようとして新宿駅へ向かう道を逸れて歩きはじめる海原に慌てて追いつがる大淀は、ビル群をすり抜けてくる冷たい冬の風に流れる黒髪を耳にかけ海原を呼び止める。

「あのっ！ 提督、私は大丈夫ですから！」

海原は首だけを振つて大淀へ視線を合わせるように軍帽を少し押し上げると、口元を緩ませて言った。

「私が休みたいのだ。我儘を許してくれ」

「……え、あ、う」

大淀は海原の表情を見て言葉を紡げなくなり、ただ一言。

「ずるいですよ、もう」

と、呟いたのだった。

海原は自らを随分と腑抜けてしまったとよく口にするが、大淀を含む柱島一同、そして軍部からして一切変わった様子はないように思えた。

相も変わらず尋常でない仕事量をそつなくこなし、大本営から申し訳なさそうに何度も呼び出されてようと仕事を殆ど残さなまま余裕綽綽といった顔で鎮守府を空ける。

ある意味では鎮守府に残る艦娘達を信頼しているからとも受け取れるが、割り振られたルーティン以外の仕事は残っておらず、近海警備や資材確保遠征、デイリー開発などと名付けられた（海原が言うには艦隊これくしょんでの名称らしい）任務を除けば、海原にしか片付けられない決裁書類をデスクに積むだけ。

よくそれらを目にしている秘書艦たる大淀は、やはりかつてはただの会社員だったという事実を受け止められず、海原こそが自分の、そして私達の提督なのだとして結論付けるほかなかつた。

それに彼は、ここ最近になって特に――

「つと、大淀、少しいいか」

「はっ」

いつのまにやら人通りの少ない道を歩いているのに気づいた大淀は海原の数歩後方でぴたりと止まった。

背を向けたままの海原を見つめて、どうしたのだろうと思惑と同時に視線を巡らせた時、声が漏れそうになる。

海原が立ち止まった先には、教会があった。

「大淀、装備を」

「えと」

「……」

装備を、と短い言葉。意味が分からないほど初心ではないつもりだった大淀でも、ここにきて途端に顔が熱に侵されていく。

思いの丈を伝えてからどれくらい経ったか。少なくとも季節をいくつか跨いで、深海棲艦との熾烈極まる戦いをいくつも乗り越えてきた。

平和を求めている艦娘の一人に徹していた彼女は、雨の降るあの日を思い出して他の何をも考えられなくなり、言われた通りに大切に握りしめていた装備——指輪を差し出した。

「雰囲気は大事だろう」

「は、い……」

海原の表情は、やはり変わりないように見えた。

いつものように気難しそうな、それでいて口元だけ優しそうに柔らかに、都会の中で一人だけ、まるでいつもの海を眺めているような目をしていた。

演習に励む艦娘達の声聞きながら細められるような。

遠征から無事に帰還した艦娘達に向けられるような。

任務を成功させて安堵するみなを満足気に眺めるような。

そんな目が大淀を捉えた。

「——後悔は無いか」

今にも折れてしまいそうなくらい細くて不健康だった海原は、今見ても変わらないように思われる。

大淀が毎日かかさず顔を合わせているからそう思ってしまうのか

もしれないが、それにしたって多少健康になり血色がよくなった程度で、かつて海原を襲った第二次の頃からして体つきだって今まで通り。

なのにどうして彼が大きく見えるのだろうかと場違いに考えた時、連合艦隊旗艦である彼女の思考は後先も考えずに答えを提示する。

一介の艦娘である自分と、日本海軍省元帥の一人となつた海原鎮との格の違い？

否。全くもつて否。

男女が感じる自然な差である。

それは単純な体つきでもあり、性の違いであり、根底から覆すことは到底難しい思考の差。

海原は今、大淀と名のついた艦娘と接している一方で、柱島に所属する艦娘という括りのみならず、あの日、至らない自分を支えてくれと言葉を零した女性に対して問うているのだと、さらに明確な答えが浮かんだ。

ありません。

私はあなたをこそ愛したのです。

どれだけ傷ついたって前を向き、不義を許さず、ただ平和を求め戦うあなたをこそ。

時に妖精と戯れ、時に鬼をも凌ぐ威を見せ戦場を支配し、時にただの人なのだと思わされる脆弱な顔を持つあなたをこそ。

海軍をひっくり返してもなお足りないと言わしめる大淀の頭脳を以てしても、全てを表せる最適な言葉が口から出てこず、差し出した指輪と彼の顔を交互に見て、目にたまり始めた熱が零れないようにと顔を上に向けた。

海原は大淀へ一歩寄って、細指につままれた指輪をそつと取ってから、もう一度問う。

「大淀、後悔は無いか」

「私は、そ、の……後悔、なんて……」

それ以上は問わないで、と大淀の瞳が揺れる。

「これはただの兵装、そう、試作機の兵装だ。練度向上のための――」

大淀の胸中に浮かぶ迷いともとれない感情の塊を察したようにつらつらと口にした海原だったが、とうとう、大淀の瞳からぼつりと筋を作った水滴に声が途切れた。

「すまん。恰好がつかんな」

それから海原は、任務遂行中には見せないような顔をして言う。

「初めてなのだ、このような、その、ほら、分かるだろう。だからいつどのようにして嵌めるべきなのかも分からんし、見当すらつかん。雰囲気作りだって、私なりに、努力はしてみたの、だが……」

目が泳いだ先には、教会がぼつりとあるだけ。

都会のビル群から少しだけ離れた、人通りも少ない、いや、殆どない場所で、遠くから自動車の走る音や、かつかつと人々が歩んでいく音があるだけだった。

海原が自分に兵装を嵌めるためだけにこれを考えていたのかと考えると、大淀の瞳はさらに濡れ、はい、はい、とただ返事をするのに精一杯になってしまう。

「泣かせるつもりは、なく、だな……ああ、くそ」

彼は大淀の右手を取り、数秒して声を漏らしてから、左手を取りなおす。

「こつちだな」

ああ、これで、本当に私の思いが、結実する。

「大淀」

「……はい」

「改めて——私と、ケツコンしてくれ」

「……は、い」

サイズの調整はされていないはずだったが、もしかすると他の大淀型でサイズを測っていたのかもしれない指輪はあまりにあっけなく、そして確りと薬指に収まった。

感極まった大淀の瞳から多くの水滴が流れた。

しかし彼女は、間違いなく幸福そうな表情をしていた。

婚【海原鎮】

仕事終わらねえんだが？

なあ、あのさ。

仕事、終わらねえんだが？（半ギレ）

「兵装も受け取ったし井之上元帥への報告も終わったな。次は舞鶴だったか」

確認の意を込めてクールに独り言を漏らせば、隣を歩いている大淀は人差し指と親指だけで器用にスケジュール帳らしきものを捲って、これからの予定を読み上げてくれる。

「はい。舞鶴に向かい新任の提督が鎮守府を問題無く運営出来ているか視察——それから、先に到着しているであろう神通さんを交えて演習を行い、練度の向上……と、いう名目での書類上で報告されている練度との差異が無いかの確認です。舞鶴に向かう前に、一度大阪の方へ寄って艦政支部の倉庫の確認も。忠野中將から通達があつた通りならばそちらに——」

あつ、待つて待つて大淀、ちよつと待つて。ゆっくり喋って。

まもるは仕事をこなしても出来る男というわけじゃないのだ。ごめんね。

「そこまで焦らないでいい。舞鶴を優先し、大阪の方を後にする」

「えっ……？　で、ですが忠野中將は柱島に送る資材の確認をと……」

分かっているとも！　と頷いてみせた。

あれから季節は巡り、海軍大将ごとお湯被り変態クソ提督まもる（妖精命名）、改め——海軍元帥の一人となつたまもるです。

第二次大侵攻と呼ばれるようになった作戦から暫くして、俺は井之上さんの野郎に……井之上元帥に割り振られる多くの仕事をこなすハメになつ……割り振られる多くの仕事をこなしながらも、何だかんだで平和に過ごしていた。

柱島に籠っているだけではさぞおつらいでしょう、といらん気を使われて日本全国津々浦々まで出張しろと俺をコキ使つてくれやがる忠野の言われるままに各鎮守府の視察までさせられる始末である。

ダメだもう許せねえ!! 労働基準法に準拠しろ!!

もちろん、文句は言えませんでした。

仕方ないね、社畜ならぬ国畜だからね。

胸中で冗談めかしつつ悪態をついてはいるものの、忠野さんも井之上さんも柱島にて書類に押し潰される毎日を送る俺を氣遣つてくれているのだと感じられ、不快感は無かった。嘘、ちよつとだけある。

先の通り、資材を融通してくれているのも、その証拠と言えよう。

資材に余裕が無ければ資材遠征にイムヤ達を出動させっぱなしにしなければならぬし、第二次大侵攻後から何度かそういった場面に陥ってしまった事もある。マジでごめん。やっぱりまもるはクソ提督でした。

幸いにもイムヤ達が反旗を翻して執務室に魚雷をぶち込むなんて事態にはならなかったが、それでも艦隊これくしょんと現実とは違うのだと何度も考えていたにもかかわらず、実際に資材遠征でオリョクルじみたことをさせなければならなくなった時には頭があらなかった。

イムヤやゴーヤ、ニムにハチは

『頑張れば美味しいランチが待ってるわ!』

『美味しいランチ!? それなら、いーっぱい頑張るでちい!』

『ロツゲンミツシユブロート……』

『な、なにその怖い響き……』

『はっちゃん、それただのパンでち』

『前に食べさせられた、あのすっぱいやつ?』

『ニム……食べたんでちね……』

と、健気にクルージングへ出向いてくれた。柱島泊地の資材事情を支えているのは間違いなく潜水艦隊の皆様です。本当にありがとうございます。

ナチュラルに美味しいランチを要求しつつただのパンでも出そうものなら分かってんだらうなと言われている気がしないでもないが、優しい潜水艦達のことである、きつとそれくらいに頑張るから、ご褒美をきちんと用意しておけという……あれおかしいなやつぱ要求さ

れてるな。

そ、それはさておきだ。

何だかんだでただの社畜であった俺は、海軍元帥として仕事を必死にこなしている、ということである。

そんな俺を支えてくれている秘書艦である大淀には、驚かされたが。

彼女は、俺に好意があるらしい。

いや、らしいというのもおかしい話だ。俺は間違いなく彼女の口から聞いたのだから。『だから、愛してしまつたんじゃないですか』と。

ここまで言われて黙っていられるほど男としても提督としても落ちぶれちゃいねえぜ！ 大淀、その想い——受け取つたアツ！

と、俺は勇み足でケツコンカツコカリに必要な指輪まで忠野さんに用意してもらつたのだつた。完全にやりすぎである。

さらにはプロポーズまでしようと言うのだから頭ん中身お花畑だ。

お湯被り変態クソフラワー提督である。

如何に俺に好意があるとは言え、大淀の愛は本当に俺に向けられているものなのか？ と疑問を抱いたのは言うまでもない。それがどれだけ失礼にあたろうとも、俺は信じられなかったのだ。

あれから彼女——大淀とは多くを語り合つた。

大淀が置かれていた状況も、資料などではなく彼女の口頭から聞いた。

俺がここに来る事になったトンデモな状況も、俺の口から話した。

互いが驚愕したことはもちろん、俺にとってゲームのキャラクターであつただけの彼女達の存在は現実という名の別世界に生きる俺の支えであつたことや、深海棲艦や自分達がただの絵空事である平和と言えば平和と呼べる同じようできて全く違う日本の話は、幾日語り合つても、尽きることはなかった。

本当にそんな恐ろしい勤務形態の企業があるのですか!?

なんて目を剥かれた時には、それはもう、重々しく頷きましたとも。マジだよ、と。

そんな企業ばかりではないことも話したが、悲しいかな、度合いは

違えどそれは日本という国における性質なんじゃないか、なんてことも語った。

俺からすれば、ブラック企業で使い潰されるのと大淀と共に戦うのでは選択などあってないようなものだから、今は感謝していると言ったのだが、彼女は真面目過ぎるくらいがあるので「やはり提督は会社員ではなく軍人が向いていますよ」などと明後日の方向へホームランをぶっ飛ばす勢いの返答をしたのだった。

軍人よりブラック企業のが楽に決まってるだろ！ いい加減しろ！

でも艦娘がいるから海軍のほうが俺は好き！

現実逃避にどんどんと乖離していく思考を掴みなおすように咳払いをひとつしてから、大本営から出て歩くすがらに大淀へぽつりと提案する。

「東京観光でもして帰るか？」

「舞鶴に向かう時間もありますので」

即答である。真面目な顔をして逃げようとしても大淀様はお見通しなのだ。フフ怖。

「そうか」

なんて何でもない風を装うので精一杯な俺。情けなさマックスである。

こういう時こそ、むつまる率いる妖精部隊が俺を助けるべきなんじゃないですかアツ!? ぱっと現れて我儘の一つでも言ってくれりやあ、それを理由に東京観光という名目でサボれたのによオツ！
くっそお……！

むつまるは現在、俺の着ているじゃらついた勲章の邪魔くさい上着のポケットでস্যッスヤである。こいつほんつま……と俺の心の龍驤もご立腹。

さて、ここまで来てどうして俺の胸中がここまで愉快な事になっているかと言えば、やはりケツコンカッコカリの指輪が原因と言えよう。

俺と大淀を舞鶴の視察前に呼び出した理由でもある。

柱島泊地からわざわざ大本営に行つて井之上元帥に報告をあげたのもまた、試作された兵装は機密事項であるからして誰が装着するのかを見極める必要がある、とのことだった。

どれだけ茶化そうとも海軍は海軍、現実には現実なのだ。

それに乗じてプロポーズとかしちゃう？　なんて考えている俺も俺だが。

未だ衰えない深海棲艦の勢力は日本近海に出現こそすれど各鎮守府が確実に撃滅している。だが、出現そのものが問題である。

近海に出現するということは防衛が意味を成しているかへの疑問を呈する。

しかしして防衛のていをとらねば国民への示しもつかず、安全への配慮さえ疑問視されかねない。

海外からもソフィアという女研究者を通して情報共有されているが、日本と同じく、沿岸部での防衛線をあざ笑うかのように深海棲艦の出現が確認されているとのことだった。

不気味なのは、それらがあまりにあっけなく撃滅できることだ。

まるで艦隊これくしょんのように、それこそ、デイリー任務のためだけに出現しているのではないかと思えるくらいに、ふと駆逐級の深海棲艦が現れては、あっけなく撃沈され、静寂が戻る。

軍部中枢の将官は口々に言った。

相手は拮抗を選んでいるのではないかと。

過分なくこの世界中で一番に深海棲艦への造詣が深い俺も、殆ど同じ意見だった。

だからか、俺は勇み足でケツコンカツコカリなどというシステムを持ち出して自分を優先するような愚かな真似をしてもよいものか、とも考えてしまっている。

既に試作品が大淀の手中にあるのに、ここにきて、やはりこんな場合ではないのではと今更になって至極真面目に考えあぐねているのだ。

流れるような現実逃避に愉快的胸中だが、その中心核には不安があった。

艦娘に支えられたから。艦娘が好きだから。ただそれだけで深海棲艦と戦い、少年漫画やアニメの如く世界を救えるのか？ それこそ否であるなど、無論のこと。

必要なものは多くあるが、俺には何も無い。

あるとすれば深海棲艦に対する知識、前世のゲームの知識のみである。

それさえ時間の経過に伴って海軍へと浸透していくだろう。

そうすれば、俺だけの武器ではなくなり、以上を望むべくもない。

故に、俺は恐れていた。

「大淀」

「は、はいっ！ まだ新幹線の搭乗予定時刻には間に合うかと思われ
ます！」

大淀がいつか俺から離れて行ってしまおうのではないかという、情けない恐れ。

黙りこくっていた俺が突然に声をかけたものだから、彼女は驚いた様子だった。

それか、俺の口から出た声があまりに弱弱しかったからかもしれない。

仕事の話の口にする大淀を見て、俺はもやもやとした胸が少しだけすくような気持ちになった。それでも拭えない不安を誤魔化すように笑い、

「そうじゃない。休憩は必要無いかと思ってな」

逃げを選んだ。だが、大淀は違う。

「いえいえいえ、全然、はい、大丈夫です！」

ふんふんとやる気に満ちた様子を見て、俺は責任を投げるような心持で彼女の言葉を翻す。

「うむう……では、少し休憩するか」

ごめんね。まもるは難しいことを考え過ぎて疲れています。休ませてください。

またも冗談めかす胸中。道から逸れていく俺の足取り。

このまま道を逸れ続けていれば、きっと取返しのない事にな

る。

もう一つの現実——かつての俺がそうだったのは、身をもって知っているはずなのに。

「あのっ！ 提督、私は大丈夫ですから！」

俺を呼び留める声に、するりと言い訳の言葉が無意識に紡がれた。

「私が休みたいのだ。我儘を許してくれ」

「……え、あ、う……ずるいですよ、もう」

ふふ、と自嘲気味に笑う俺の後ろについてくる大淀の足音。

どこまで行こうか、どこに行こうか。

逃げ道を探す俺に、ふと小さな声がかけられる。

『みぎ』

「うん？」

『みぎだつていつてるでしょ！』

「おあ……!?! な、ま、待って、おま——！」

どういう原理で入り込んでいるのか、勲章の留め具で隙間が無さそうな胸ポケットからぴよこんと顔を出したのは、むつまるだった。それ以外にも、ポケットの雨よけを押し上げて多くの妖精が顔をのぞかせて右へ左へ大合唱。

あつあつ、待って、怖い怖い、やめて、ナニコレ!? 艦これ!?

『ちよくしーん！ すすめー！ まもるー！』

『こんどはひだりだー！ とまるなー！ ぜんしーん！』

「やめんかお前達……！ 今は仕事で、大淀もすぐ後ろに……！」

ひそひそと抗議するも、

『うるさいよ！ いくじなし！ いいからすすんで！ ほらはやくつ

！』

「ひえっ」

酷い言われようである。なんだこいつらは。

そうだね、妖精だね。

言われるがまま、導かれるがままに俺は歩いた。歩かせられた。是非も無し。怖い。

休憩したいと言い訳した手前、大淀に助けを求めるわけにもいか

ず、ちらりと後ろを振り返ってみるも、彼女は顔を伏せて俺についてくるばかり。

『なにがこわいの?』

「あ……?」

『こわがってるみたい』

『しんかいせいかんがこわい?』

「それ、は……」

『かいぐんがこわい?』

『じゃあ、おおよどさんがこわい?』

「大淀が怖いのはそう」

『うそだ! ……って、わけでも、ないみたいだね』

「……」

「……そこそと呟きを落とす俺に、語り続ける妖精達。

『ずっと見てたから、分かるよ私には』

『そうだね、私達には、分かるよ』

「お前達——」

妖精の言う、ずっと見てた、というのは額面通りの意味を持っているのだろう。

それもそのはずだ。妖精は——彼女達は——【俺の艦娘】だったのだから。

『やっぱり、出会わなきゃよかった……なんて思うかしら』

妖精の小さな姿から、らしからぬ艶めいた陸奥の声が出た。

「そんな事はない」

即答するが、それに続く言葉を持ち合わせず。俺は再び閉口する。しかしそれも、数秒のことだった。

「……これは、戦争なんだ」

だから、どれだけ冗談めかしたって、現実是世界を襲うのだ。

いつかのように彼女らは戦火へ飛び込み、平和を口にして砲撃しあう。

身を震わせるような轟音と黒煙にまみれて、俺はただ、遠くからそれを見てることしかできない。

そんなの……残酷過ぎるじゃないか。

ひよんなことから提督になったとはいえ、短く、あるいは長く、そしてとてつもない濃度の時間を共有した俺に、何ができるといえるんだ。

ゲームの知識で無双？ 出来るわけがない。

多くの任務を成功させてきたのは俺の力がほんの少し、殆どが生死をかけた彼女らの献身あってこそ。

『だから？』

「だからって……それは、その……ほら……」

いざ我が身となればゲームや漫画、アニメや小説などのように上手くはいかないのだ。常に必死になって、どうすればいいのかばかり考える。

それも大体が、逃げるために。言い訳するために。

「難しいんだよ、色々……大人、だからさ……」

仕事だから出来るのだ。無茶も、無謀も、無鉄砲も。

今は、一つの間違いだって命取りになりかねない。

井之上さん達を裏切りたくもなければ、艦娘にだって恰好をつけたい。

平和になれば御の字、正直に言えばそんなものは二の次だっついてい。

俺は——彼女達と、艦娘と生きたいだけなのだ。

『ふうん……大人だから、なにが難しいの？』

「体裁とか、あるだろ……もう、ゲームじゃないんだぞ、これ……俺の、我儘ひとつで縛るような……」

『そうね、もうゲームなんかじゃないわ。私も、あなたをブラウザ越しに見ているわけじゃない』

「だろうな。ポケットからだけだな」

『ふふ、茶化したって無駄よ』

「……」

『仕事、仕事、仕事……ブラウザ越しのあなたはいつもそう』

何で怒られてんだ俺は、と俯いてしまう。そうすると、妖精たちと

俺の距離はさらに近くなる。

皮肉なものだ。顔を上げれば艦娘たちと距離が縮み、俯けば妖精たちと距離が縮む。

もう逃げ場なんてものは存在しなかった。

『ここに来てても、仕事、仕事、仕事ばーっかり。いい加減にして欲しいわね』

「……」

『ほんの少しだけ正直になったかと思っただのに……あ、次の道は左よ』
そうして、

『ストップ』

立ち止まる。

『はい。にげてもいいよ』

また拙い声音になったむつまるを見れば、むつまるは俺ではなく、俺の向こう側を見ていた。

顔を向けてみれば、そこには小さな教会が一堂。

場違いに、ある種、この場に合った考えが巡る。

それが何であるのかは、口にせずとも理解している。

「逃げたら、どうなるんだろうな」

『さあ？ おおよどさんが追いかけてくるかも。しごととしてくださー

い！ーって』

「……ふふっ」

『それでもにげつづけければ……むつまるも、わかんない』

尻すぼみになる言葉に、そうか、とだけ返した。

幾度となく脳をかきむしる現実や仕事と名の付く命がけの任務群に、足が震えた。

前は、どうして逃げたんだっけ？

仕事はクソブラックだったからだ。意味も分からん仕事を任せられ、成果も感じられずに文句ばかりつけられては理不尽に虐げられ、孤独だったからだ。

今は、どうして逃げたかったんだっけ？

怖いからだ。意味も分からずやってきたゲームの中なのかどうか

さえ不明な世界が、どうしようもない現実だと心底理解してしまったからだ。

今しがたしようとしていることは、俺の我儘で彼女達を縛り付けることにほかならない。その第一歩が、目の前にある。

『まもるは、どうしたい?』

「そうだな……俺……いや、私は——」

ダメだ。こんな危ない現実にも身を浸すべきじゃない。

強烈で悪辣な痛ましい思考を押し退けるのは——やはり、俺にとって一つしかなかった。

無意識に振り返って「つと、大淀、少しいいか」と声を上げる。

短く返事をした大淀に装備を要求すれば、ちらりと横目に教会を見た彼女が戸惑う。

そりやそうだ。こんな場所でカツコカリの指輪を要求しているのだから。

「雰囲気は大事だろう」

「は、い……」

やはり言い訳じみた言葉を紡ぐも、俺にとつての言い訳は、言い換えればポーズなのだ。そういった、恰好なのだ。良いか悪いかなんて、考えるまでもない。

名前なんてものも、なんだったっていい。

威厳スイツチなんて名前だっけいい。

おずおずと差し出された指輪を受け取る前に俺は言う。

「——後悔は無いか」

大淀に対しての不安を正直にぶつけた言葉であり、再確認であり、むつまる達が俺に用意してくれた逃げ道だ。

いつしか靄に覆われていた気持ちは、なんて単純なことか、大淀の顔を見ただけで霧散してしまっていた。

俺は彼女につままれた指輪をすつと取る。

ただただ晴れやかに、素直なままに、さらに言う。

「大淀、後悔は無いか」

「私は、その……後悔、なんて……」

どこか、似ているな、と考えた時のことだった。
ポケットから顔を出していた妖精たちがクスクスと笑う声が聞こえた。

『にたものどうしだねー』

『ていとくとかんむすだからねー』

『そりやにるかー』

『ねー』

もうちよつとだけ我慢してもらっていいですか、今からほら、ね、分かるでしょうよお前らもよ、こつから感動的かつ俺がかつこよくプロポーズする場面ってことくらいいさ。な？

『ポーズがひつようなの？』

『プロポーズだけに？』

『フツフーウ！』

「……」

クソツ……上手い……じゃねえ！ オラアツ！ やめろオツ！

恰好悪くなるからアツ!!

俺を見つめる大淀の目が涙を湛えているのに気づき、思わず、

「これはただの兵装、そう、試作機の兵装だ。練度向上のための——
！」

なんて言ってしまう。だが、すぐに俺は言いなおした。

「……すまん。恰好がつかんな」

カツコ悪い……しかし、これでいい。真っ直ぐなままでいいんだ。

うだつの上がらない社畜であろうが、国畜にダウングレードしていろいろが、俺は俺なのだ！ お湯被り変——じゃない、海軍元帥、柱島泊地の提督、海原鎮なのだ！

「初めてなのだ、このような、その、ほら、分かるだろう。だからいつものようにして嵌めるべきなのかも分からんし、見当すらつかん。雰囲気作りだって、私なりに、努力はしてみたの、だが……」

言えーッ！ 言うんだまもるーッ！ 男を見せろオオツ!!

「泣かせるつもりは、なく、だな……ああ、くそ」

すみませんへタレでえ……。 (手の平ドリル)

震える手で大淀の右手を取り、あ、違う、と左手を取り直す間抜けっぷりを披露しつつ、俺は言った。

「大淀」

「……はい」

「改めて——私と、ケツコンしてくれ」

「……は、い」

それから俺は後頭部をぶつけることになる。

最後の最後まで情けない限りだが、まあ、これが海原鎮なのだから仕方が無い。

「提督っ……提督っ……!」

「名前では呼んでくれんのか?」

「——まもるさん」

ポケットから飛び出した妖精達が、きやあきやあと笑いながら教会を飛び交った。

提督として

教え①

「隊長……暗い、です……たい、ちよ……」

「暗いな」

「怖く、ない、ですか……」

「ああ、怖くない」

「怖い、です、よ……ずっと、ずっと、ここで、一人、で……」

「一人じゃないさ」

「やっと、来て、くれた、のに……また、人の、役に立ってるって、思った、のに……」

「少し眠るといい。目が覚めたら——」

「めが、さめた、ら……?」

「一緒に飯を食おう。温かい飯を」

* * *

「おう、自称・元一般人司令官やんか。今日は早めの朝飯やなあ」

「おはよう龍驤。その……自称っていうのはやめてくれんか……」

「あはは、冗談やがな！ そやそや、司令官。今日の哨戒に使う予定の艦載機のことなんやけども、明石から何か聞いてたりせえへん?」

「……ああ、新型の艦載機を開発したと報告を受けているな。飛行試験を行いたいとも……空母全員が使えねば意味がないから試験飛行を通して順次確認をしようとしていたが、そのことか?」

「そういうことやったんかあ！ 倉庫に行ったら知らん艦載機がずらーっと並んでたから、何事や！ 思てなあ」

「なるほどな。実戦配備は少し先になるだろうから、待っていてくれ。試験日程は追って知らせるが、遠くはならんだらう」

「新型かあ、楽しみやなあ……えへへー!」

「うむ。龍驤には彩雲を任せたともあるからな、期待している」

「なんなら、これくれた時みたいにな、サプライズでもええねんで？」
「……ん、んんっ。新型兵装の試験には事前通達が必要だが、それは機密事項に抵触するため例外だと言っただろう」

「ふーん……ま、ウチは二番手でも三番手でもかまへんけど、艦載機の試験飛行はいつちゃん最初やないと嫌やで？」

「ああ、分かった。分かったから、からかうのは勘弁してくれ……」
「何を気弱なこと言うてんねや色男。しっかりしてや！ほんなら通達待ってるわ！」

マルロクマルハチ。快晴。

柱島泊地の朝は早く、この時間帯ならばもう少し気だるげな空気が漂っていきそうな鎮守府は既に活気に満ちていた。

食堂から一番に出て来た龍驤とぼったり会った海原は、軽口を叩きあうように仕事の話をしつつ、にこやかなままにすれ違う。

「あーっと、司令官！」

「うん？ どうした。確認漏れか？」

食堂の扉へ手をかけた矢先、龍驤に呼び止められてぴたりと止まる海原。

龍驤はにやりとして「今日の漬物は大淀が手伝って作ったもんらしいで」と言った。

表情にこそ出さず「そうか」とだけ返した海原だったが、無意識に扉から手を離して軍帽を目深にしたことで感情の片鱗が見えてしまい、龍驤はケラケラと笑ったのだった。

「ウチが作っても照れてくれるん？」

「何を言っている。照れてなどいない……が、あー、うむ。嬉しくはある。龍驤も料理が出来るのか？」

誤魔化すような話題を逸らしていく海原だが、必死に表情を隠すような仕草に龍驤はからかい過ぎたかと胸中でほんの少しだけ反省して、またこう言うのだった。

「冗談やがな。じょーだん。料理って言えるもんは作れへんけど、ま、ちつとくらいは練習してみよかな」

ほしたら、また後でな。

そう言い残してひらひらと手を振って歩いていく龍驤の後ろ姿をしばし見つめていた海原だったが、食堂の中から聞こえてきた「あー！ 時雨！ それ夕立が取っておいたデザートっばいい〜！」という悲痛な叫びに意識を引っ張られ、顔をふいとそちらへ向けて食堂へ入っていく。

龍驤の指に光る指輪をちらりと見てついた溜息の意味は、彼にしか分からないだろう。

「あら、提督。おはようございます。この時間にくるだなんて珍しいですわね？ 今日は何弾でも降ってくるのかしら」

「んう？ おお、提督だ。おはよー！ ほんっと珍しいじゃあん！ どうとう仕事し過ぎてやることなくなった？」

入室して一番に声をかけて来たのは、最上型重巡洋艦四番艦熊野と、同三番艦の鈴谷である。

一見して花の女子高生が如き制服姿に、朝早くともきつちりと整えられた髪は、海原にとって眼福というべきか、目の毒というべきか。

柱島に来たばかりの頃からは想像もつかない砕けたやり取りに無礼などは考えもせず、海原は満足気な鼻息を誰にも分らないくらい小さく鳴らしつつ、手近に空いていた最上型の集まるテーブルへ歩み寄っていく。

「こらっ！ 提督になんて口を利くんだい、まったく……ボクの立場も考えてよ！」

「あら、レディーからの小粋な挨拶でしてよ。悪意はありませんわ」「そうそう、フレンドリーなだけだつてえ！」

最上型重巡洋艦の一番艦、長女と呼ぶべき立場の最上が頬を膨らませて二人をたしなめつつ海原へ謝罪するも、海原からしたら「ご褒美です！ アザッス！ アザッス！ もつかいオネシヤス！」と、もう決して口には出してほしくない胸中でなんら問題などないのだが、最上の言葉を借りれば彼にも彼なりの立場があるため、無表情のまま。「大丈夫だ最上、気にしていない。こうしてのびのびと仕事をしてくれるのならば、多少砕けていた方が私としても助かるのでな。だが、最上の言うこともよく聞くように」

「ほーら見てみるー！ 鈴谷達に挨拶されて嬉しいって！」

「ま、朝から麗しいレディー達を見られるのですから、当然ですわね」
「もお、提督は甘いんだからさあ……」

調子に乗っているかと言えば、そうでもない。傍から見て分かるくらいニコニコしているし、海原が歩み寄っただけで座るとも分らないのに、鈴谷と熊野はさつと一つ分の席をあけている。一連の流れは一種の確認行為として周囲も受け止めていた。

そも、そういつた確認行為をおこなう艦娘が少なくないのも理由として挙げられるだろう。

鈴谷、熊野然り。艦娘本来の年齢ではなく、分かりやすく見た目から推察される年齢の若い艦娘ほどこういつた確認行為が見受けられた。特に駆逐艦からは甘えられっぱなしである。

渦中たる海原は本当に、心の底から、いや、さらに言えば無意識下で全面的に受け入れている艦娘オタクが故に、行為が激しくなるようなことはなかったが。

それら行為を咎める艦娘が幾人も存在していることで、偶然とはいえ歯止めとなつて上手く回っているのだった。

鎮守府世の中とは実に巧妙である。

鈴谷達があけてくれた椅子へするりと滑り込んで腰をおろしたところで、海原は「つと、飯を取ってくるのを忘れていた」と立ち上がりかける。

「これはいけませんわ……仕事のし過ぎで生活に影響が……」

「提督さー、ちゃんと寝てるのー？」

「いやいや、これはたまたまだ。お前達が声をかけてくれたのが嬉しくて、そちらに集中してしまった」

「うっ……」

「うくっ……」

「……どうした鈴谷、熊野？」

「な、何でもありませんわ！ そこでぼーっと座っていなさいな！

ワタクシが持ってきてさしあげますから！」

「はああ、調子狂うなあもお……お茶、温かいのいい？」

「うむ、手間をかけてすまん。ありがとう」

食事を中断していいそと立ち上がった歩いていく二人を見送る海原に向かつて、福神漬けをかじりながら感心する最上。

「はええ、提督は扱いが上手いねえ。ボクも見習わなきゃ……後ろから刺されない程度に」

「うむ？ なんの話だ？」

「べつつにー。あ、提督。ボク今日は非番だから、外出許可を貰いたいんだけど。申請書は——」

「それについては受理済みだ。一日ゆつくりと羽を伸ばしてくるといい。私も今日は舞鶴に用事があったな。大淀と合流して戻る予定なのだ。最上さえよければ途中まで送るが？」

「いいの!? やったね！」

ガッツポーズをして喜ぶ最上の姿を見た鈴谷と熊野が、それぞれ手にお茶とお盆を持って早足で戻って来る。

「なにになに？ 提督に何お願いしたの最上！」

「抜け駆けはいけませんわモガミン！ 何かする時は一緒にと——！」

「へっへーん、ボクの言う事を聞かずに提督をからかう妹には教えませーん！」

「なにをーう!? 熊野、ちよつとそつちお願い」

「承りましてよ！ さあモガミン、吐いてもらいますわよ……！」

「ちよ、二人とも！ まだご飯食べて、あ、あっはっはっは！ やめてよ！ もー！ あははははは！」

「ふふ、元気なようだなにより。だが、食事中は騒ぎ過ぎないように」
海原の一言で嘘のように

「つちい……命拾いしたね最上……部屋に戻ったら聞かせてもらおうよ……」

「寝る前に怖い話してやりますわ……」

なんて恨めしそうな声を上げるも、すっと止まるに至る。

今日も今日とて、柱島の一日が始まる。

それが平和か否かは——まだ、誰も知らない。

「えへ、えへへ、ラッキーだなあ今日!」

「随分と機嫌が良いじゃないか。非番というのは、やはりテンションが上がる、というものか?」

「違う違う! 違うよ提督! 一緒にお出かけ出来るのがラッキーなの!」

「ふふ、最上は持ち上げるのが上手いな」

柱島から出て呉鎮守府を経由し、新幹線に乗るべく呉駅を目指す道中。

海原にとつては何度も通っている道で目を引くものなどあまりなかったが、最上は海原の周囲をちよちよことついて回りながらも、キラキラと瞳を輝かせて街並みを眺めていた。

「最上の外出許可というのも珍しいものだが……今日は何か予定を立てているのか? 一人で大丈夫そうか?」

「も、もお! ボクは子供じゃないんだから大丈夫だよ! あのね、鈴谷達が見せてくれた雑誌に呉のデパートが載っててさ。ほら、最近、広報の人達がボクらの事を宣伝してくれてるみたいじゃない。そのグッズ? つてやつが売つてるところに行きたくてさ!」

「あ、あー……艦娘キャンペーンか……」

「うん? どうしたのさ、提督」

「いや、なんでもない」

「もー、なにー!?! 言つてよー!」

ゲームとして艦隊これくしょんを知っており、また、キャラクターとして艦娘を知っている海原の胸中の複雑さといったらない。

コスプレでもなく、当の本人がキャンペーン先のグッズを買いに出かけるというおかしな状況を面白がってもよいのか分からないというのが本音のところ。

ましてや海軍の軍艦とはいえ艦娘という字面通り、キャンペーンでグッズ化されているのは少女であり、これまた買いに出掛けている最

上も少女である。

心配が先立つのも無理はないだろう。

かと言って、仕事を放り出して最上の出先に随行していましたなどと誰が許してくれようものか。軍部は呆れかえるだろうし、海原の右腕たる大淀に至っては「はああ……」と肺胞から酸素がなくなるくらい長い溜息を吐くに違いない。

海原はかろうじて

「問題があれば連絡をするのだぞ」

娘を心配する父親のようなことを言うのだった。

「問題って何さ……それよりボクは提督が心配だよ」

「私が？」

「ごこのところ毎日出掛けてるしさ……無理せずちゃんと帰って来てよ？」

かえって娘から心配されるような言葉をかけられ、海原は苦笑してしまう。

「無理をするな、と口酸っぱく言っている私が言われては世話ないな。早めに帰れるよう、努力する。大淀もいるのだ、仕事など一瞬で終わるさ」

「約束ね」

「うむ。約束だ」

そうして話しながら歩く事しばらく。呉駅に着いたために最上と海原は別れた。

新幹線口へ歩いていく海原を見送ってから、最上は踵を返してバス停へ歩む。

海原と歩いている時は気づかなかつたが、ちらちらと視線を感じた最上は心配の先へ顔を向けた。

そこには、数名の少女達。

見るからに女子高生らしき少女らは、スマホを片手に声をかけて来た。

「あ、あのー！」

「はい？ え、っと……ボク？」

「はい！ あの、艦娘さん、ですよね……？」

「そう、だけど」

やっぱり！ さつき一緒に歩いてたの絶対に軍人さんだったんだよ！ テレビでも見たもん！ と口々に会話しながら近づいてきた少女らに一瞬警戒したのもつかの間、最上はあつという間に囲まれ――

「SNSで見て！ すっごいかつこよくって！ それで！ 写真とかがってダメですか!?!」

「おわわあつ！ しゃ、写真!?! 写真、か……えーつと……」

最上はしばし逡巡していたが、少女らに微笑みかけて言う。

「艦装、ってわかるかな……規則で街中じゃ出しちゃダメだから、ボクだけを撮ることになるけど、いいの？ つまらないと思う、けど……」

微笑みから苦笑に変わった最上の表情だが、少女らから一層大きく黄色い声があがった。

「ぎそー？ とか分からないですけど、いいですよ！ 艦娘って可愛いよねーって皆で話してて！ それで――」

「か、可愛いって……照れるなあ……あはは」

欠陥品と呼ばれたのは遠い過去じゃないはずなのに。

世間の風向きすらも変えてしまった男の姿を思い出しながら、最上は照れ笑いで少女らと写真撮影に興じた。

それから、ボクは用事があるからこれで、と言って少女らと別れて、またしばらく。

デパートで艦娘グッズを購入するのもひと騒ぎあったのだが、それを塗りつぶすような緊急通信が、帰路についていた最上に届いた。昼前だったのも今や夕方過ぎ。既に日は完全に落ちて、月が顔を覗かせようとしている頃だった。

『こちら柱島泊地。全艦娘へ通達。繰り返します、全艦娘へ通達』
声の主は鳳翔だった。

一瞬にして背中から脳天へ向かってぞわりとした寒気が走り、デパート前のバス停でぴたりと止まったまま、虚空を見つめる。

それは最上の、いや、艦娘の勘だった。

丁度やってきたバスの開いたドアの向こうから、怪訝そうに見つめてくる運転手が言った。

「お客さん？ 乗るの？ どうするん？」

「待って！」

「おっ……!?!? ま、待ってって言われても、こっちも仕事じゃけえ……」

「いいからッ！」

少女の姿と言えど、軍艦。

艦娘としての気迫が運転手を沈黙させた。

『舞鶴鎮守府へ視察に出た提督との連絡が途絶えました——』

「え、う、そ……?？」

『提督は舞鶴鎮守府を視察中、執務室付近で突如姿を消したとのこと。時刻はヒトヨンサンマルごろ、現在は常任秘書艦大淀が現場を捜索中で——』

「嘘だ……嘘、嘘だよ、今日は、早めに帰るって……」

ぐらりと揺れる視界に、その場で尻もちをつきそうになる。

がつ、とかかとを鳴らして踏み止まりながら、最上は運転手へ叫んだ。

「これ、どこまで行きますか!?!」

「おおあ！ な、なんね君はあ！ 行先の事ね!?!」

「そうです！ これ！ どこまで行きますか!?!」

ばたばたと乗り込みながら問えば、がらりとした車内には運転手と最上の二人きりであるのに気づく。

「中区の順路を回るだけじゃけえ、こっから本通駅……」

ほんどおりえき

「呉まで行けますか!?!」

「呉え!?! 無理じゃあ！ 路線が違わあな!?!」

鈴谷達へのお土産にとお菓子やグッズを詰め込んだ紙袋を地面に落としながら、ばさばさと肩掛けバッグからカードを取り出す。それは、身分証明書だった。

少女から日本海軍の身分証明書など突き出されたなら、思いつくのは一つだけ。

「事後処理はこちらで行います！ 行けるとここまで構いません、呉へ向かっていただけませんか!？」

「艦娘う!? かああ……はよ言わんねそういう事あ!」

脅迫のつもりなどないが、軍人が一般企業の車両に乗り込んで突如として職務と違うことをしろと要請すれば、逆らえないのは言うまでもない。

一抹の不安と申し訳なさがありながらも、最上は自分の必死さで伝わってくれと祈った。

だが、杞憂だった。

ここは広島。

海原元帥の直轄であるのだから。

あのどうしようもない人にあてられた広島の人々は、同じく、

「呉のお、えええ……ほれ、鎮守府! 鎮守府まで行ったらええね!」

「あ……」

救われた人である。

「はい、お願いします!!」

「出来るだけ急ぐけど信号は無視できんけえね! 許してよ!」

* * *

バスが路線から外れ呉へ向かう。その車内では、最上がじっと耳に指をあてて通信を聴いていた。

叫んだかと思えば静かになった少女の姿が気になっている運転手だったが、緊急事態なのは間違いないとただ運転に集中する。

ぐらぐらと揺れているのが車なのか自分自身なのか混乱しそうになりつつ、最上は声無く通信に答えた。

『こちら広島、重巡洋艦最上です! 今、通りがかったバスの運転手さんに協力してもらって呉鎮守府へ向かっています!』

『ザザツ……こちら鳳翔。最上さん、呉鎮守府で山元大佐に処理をお願いしてください。それから——』

『わ、わかってます! 呉鎮守府からすぐに舞鶴に——!』

『いえ、呉鎮守府で待機してください』

『なんっ……!? どうしてですか鳳翔さん!』

『提督と連絡が途絶えてはいますが、まだ四時間と経っていません。捜査本部を立てようにもあまりに時間が短すぎます』

『短いからって何ですか!!』

『まだ行方不明として届けを提出していないということです。先にも言った通り、提督は舞鶴鎮守府を視察中、執務室付近で忽然と姿を消したらしいのです』

そんな神隠しのようなことあるわけが——否定しようにも、言葉を紡げなかった。

鳳翔に代わり、現場からであろう、少し息の切れた大淀の通信が割り込んできた。

『こちら大淀……はあ、はあ……現在、舞鶴鎮守府にて、ふう……橘閣下、忠野閣下のご意向で付近駐屯地から派兵をしてもらい、捜索を続けています……ですが、全然、どこにも……』

『大淀さん！ 提督と連絡が途絶えたつて、本当に繋がらないの!?!』

最上の問いに、単純明快な解。

『最上さん……そう、でした、確か、本日は非番だったんでしたね。提督と広島まで出られたと聞きました』

『そんな事より！ 連絡だよ!』

『私の探知にすら引つかからない、と言えばよろしいでしょうか』

『艦娘の探知、にも、って……』

『言うまでもありませんが、これを知るのは舞鶴鎮守府と周囲の駐屯地、それから柱島泊地……最上さんが到着次第、呉も知ることになるでしょうが、たったそれだけです。まだ海軍内で大きな騒ぎにはなっていません』

『う、うん』

『提督はどのような事情であれ日本海軍元帥です。順序を間違えないよう捜索を続け、出来る限り迅速に見つけ出します。ですから、落ち着いて行動してください。いいですね』

『わ、かった……』

敵艦を発見するための探知。その能力の高さは艦政本部の折り紙付き。

日本海軍であれば全員が必ず携行している証明書も特殊なもので、チップが埋め込まれており本人の確認が一瞬で出来る優れものである。

将官が携帯している証明書ならば尚更に高性能で、衛星通信によってどこにいるかを割り出すGPSが内蔵されていたりする。安全を確実にすると同時に、監視の役目を担う機能はそれだけにあらず、艦娘の電探にも反応する素材が埋め込まれている。

だが、それすらも反応しないなどおかしい話だ。

脆弱性など絶対がない、とは言い切れない。人の作ったものだから。

冷静になつて考えた結果が冷静さを奪うような混沌の胸中。

『これは予測ですが、提督は恐らく——まだ、舞鶴鎮守府にいます』

大淀の声は震えていた。

一番落ち着いているようで、感情を抑えつけているのは間違いなく彼女だろうと考えた途端、最上から焦りがほんの少しだけ失せる。

『気が、動転しちゃって、バスを捕まえるなんて、ごめんなさい……』

『いえ、広島ならば大丈夫でしょう。言い訳は山元大佐に考えてもらえばいいのですから』

気丈に言う大淀に同調する鳳翔の声。

『ええ、そうですね。提督のことですから、きっと大佐も動いてくださいます。とにかく、最上さんはすぐに鎮守府へ移動して、いつでも動けるようにだけしてください』

『……了解』

バスは速度を上げたまま、呉へと走る。

教え②

同日、時刻ヒトマルヒトヒト。

東京都豊島区、東池袋。

オフィス街と住宅街が入り組むその地の一角に、物々しい雰囲気の建物がある。

——巢鴨拘置所。そこは軍事刑務所でもあり、陸海軍にて重大な犯罪、軍規違反を犯した者が収容される場所である。

第二次大侵攻より前には伽藍洞とも言うべきただのハリボテだったその場所は、見るも無残なボロ屋だったのが嘘のように小奇麗に改装されていた。

小奇麗というのは外観だけの話で、中身はと言えばボロのままではある。外観と内装の対比が不気味さを醸し、多く配置されている陸軍所属の軍人が警備に当たる様は通行人を自然と減らし、辺りは閑散としたものだった。

道の一つ二つと抜ければ人通りが一気に多くなるところから、近隣住民からは《地獄通り》とも呼ばれているらしいとは、近所にあるコンビニに買い物へ出かけた時に偶然立ち話を聞いた軍人の言である。

言い得て妙、というより、その恐ろしい名前が浸透して欲しいと零す男が一人。

「ここまでの道が地獄通りというのならば、ここは地獄だ。地獄の沙汰も終わったというわけだから、貴様がいくら口を閉ざそうがどうにもならないということでもあるが、どう考える？」

「……………ふん」

「つくづく、たかだか数カ月程度で口を割るとは思っていないが、やはり貴様も軍人の端くれではあったという証拠で嬉しく思うぞ——金森イ……………」

金森正平——日本海軍所属の、元中將。

かの者は多くの軍規違反を犯したとして軍事裁判にかけられ、名目二十年、死刑を免れてここ巢鴨拘置所に収容される運びとなった。

死刑こそ免れているが、二十年という長い月日をこの拘置所で過ご

すとなれば希望など既に無い。どれだけ模範的な生活をしようとも減刑などあり得るはずもなく、海軍大臣の井之上と、陸軍大臣、内閣総理大臣から、法務大臣と四大巨塔、いやさ、四枚の分厚い壁が金森を囲っている。

軍人として死ぬ以外で考えうる最大限の絶望の中にいるのだ。

しかし金森は一向に口を割る気配など無かった。

艦娘の轟沈数の差異から、ありとあらゆる不正、人類存続が危ぶまれた第二次大侵攻における楠木少将との接触についてなど、彼は情報の塊でもあるため、死刑にできなかったというのが政治的、軍事的な真意であるというのは、野暮だろう。

取調室として使われている頑強な鉄格子のはめ込まれた窓が一つしかなく、たつた六畳ほどの一室にて、金森の正面に座る男——陸軍法務部中将は笑う。

《猟犬》だとか《狂犬》だとか呼ばれるようになった松岡忠は、その名に恥じぬ鋭い眼光と健康的で獰猛な歯を見せつけるようニヤリと笑いながら、机の上に置かれた金森の手首をガツンと音を立てて殴りつけた。

手錠がぎりりと締まり、ぐ、と声を漏らす金森だったが、それでも態度を崩さず、また鼻を鳴らす。

「つは、殺せないならば尋問、拷問……陸軍は成長の欠片も無いのだな。どうした、ほら、もっと殴れ。殴り殺してみろ。ん？」

腐っても軍人。時が経てど軍人。

収容されたばかりの時は肥えていた金森も、異様な痩せ方をしていた。

顔は膨れたまま、胴回りの脂肪だけが落ちて余った皮がだるんと乗っている姿は地獄と呼ばれる巣鴨拘置所の住人に相応しいもので、この地において安寧など無かった。

「自暴自棄になれば殺してもらえなくても思っているのか？ 安心しろ、自分とて軍規違反はしていなかったとは言え、軍規に殉ずるかと問われたらば否と答える側の軍人だった。お前を責め立てる道理など無い……が、悪いがこれも俺の仕事なのだ」

ガツン！ ガツン！ ガツン！

「ぐつ、ぐあつ……があつ……！」

「改めて質問する。舞鶴での轟沈数の差異はまだ正されていない。思い出せ。嫌でも、思い出せ！」

ガツン！ ガツン！ ガツン！

「ぐうううツ……！」

「安心しろ。ここには名医が揃っている。恐れ多くも海原元帥閣下をお救いした軍医も何名かいるぞ。つい最近になって異動になったとのことだ。幸運だな？」

ガツン！ ガツン！ ガツン！

「や、やめ、やめろツ！ クソツタレが！ クソツタレの犬が！ 兵器に情けをかけるキチガイどもが！」

ガツン！ ガツン！ ガツン！

「あ、ああツ……ぐ、う……！」

ガツ……コツン……。

「ふう……おや、どうした金森。手首から血が出ているじゃないか。全く困ったものだ、そうして腕を机に打ち付けるなどと《自傷行為》をしてもらってはこちらも対応せねばならんだろう？」

「うう……うううう……ツ！」

何度も何度も手錠の上から手首を殴りつけた松岡は、まるで何も無かったかのような涼し気な顔をして部屋の外へ声をかける。

「おい！ 医療班を寄越せ！ クソの始末の時間だ！」

痛みを耐えるためか、ぜえぜえと息を吐き出す金森の目の前、松岡の背後にある重厚な扉が開かれる。

現れたのは、金森が何度か目にしたことのある軍医だった。

何も語らず、何も感情を示さず、ただただ呼ばれては治療するだけの、これまた不気味な男。すらりとした体躯に、機械的な動きが特徴の、眼鏡をかけた姿。

ただその男、抜群に腕が良かった。

治療の際にその軍医にかかれれば痛みなど殆ど感じる事もなく、あつという間に適切な処置を施される。

ものの数分で処置をした男は、声のひとつも発さずに革製の茶色い大きなバッグに包帯やら消毒液を詰め込んでさっさと出て行ってしまった。

そうして、また——質問の時間がやってくる。

「数カ月もすれば流れ作業だな。これはいかん兆候だ。なあ?」

「く、そ……キチガイめ……があっ!」

恨み言を吐き出した金森の肋骨から腹部にかけて、机が強く押し付けられ、衝撃で後ろに飛ぶ。すぐ後ろには窓と壁しかなく、金森はその場で後頭部を強くぶつけた。

「陸軍は成長の欠片も無い、だったか? 貴様の言う通りだと常々思っているよ。自分らはこういったやり方しか知らないのでなあ……それで、まだ話す気にはならんか? え?」

金森に向かって机を蹴った勢いで足を組んだ松岡は、机から落ちそうになった書類を器用に指先でキャッチしており、それをぴらぴらと振って示した。

そこには多くの艦娘の名が記載されていたが、その横には轟沈、と書かれていたり、行方不明や解体、といった文字も見える。

「……」

「はあ……俺も暇ではないのだ、なあ、金森。分かってくれんか? こうして貴様にだけ時間を割いて延々と茶を飲んでるわけにもいかん。俺以外にだって話すチャンスは何度もあったはずだ。なのにどうして話してくれんのだ?」

「……」

「俺が巢鴨へ顔を出すのなんてまだ数度目だが、こうして優しく話しかけ合いの場を設けてやったのは何度目だ。うん? 教えてくれんか?」

「……」

じつと目を伏せて黙りこくる金森。

分厚い鉄格子とガラス板の向こうから差し込む陽射しを背に受けながら、また、小さく鼻を鳴らした。

その途端に松岡は立ち上がって瞬時にこぶしを握り締め、金森の顔面へ向かって振りぬく。

横つ面を殴られた金森は勢いによって椅子に座ったまま倒れ込み、リノリウムの床にべしやんと口づけた。

「ぐ、ぶうあ……！」

「こうして話し合いの場を設けたのは何度目だ？ 教えて、くれるか？」

「ぐ、ぐふつ……ぶあ……う、うう……！」

倒れ込んだ金森に近づいて椅子ごと起き上がらせると、松岡は頬を弱く叩きながら言う。

「言え、ほれ」

「よ、ん、じゅ……う……なな、かい……」

「よーしよし。偉いな。しっかり話せるじゃないか」

「……ち……ガイ……め……」

「……今のは聞かなかった事にしてやるから、次の質問に答えろ」

ふいと背を向けてから椅子に座りなおした松岡の姿を見て、金森は強気な態度のままではあったが、心のうちでは舌を打ち後悔していた。

こうした尋問の時間は收容されてから一日に一度、長くとも三日に一度は設けられており、收容される前の舞鶴鎮守府の運営について事細かに聴取された。

しかし、松岡が来るとき以外は形式ばったもので、黙っていれば何時間と拘束されはしても朝から晩まで黙るだけで收容室……牢に戻れたのだ。

だが、この男には通用しない。

大義名分を背負えば狂った暴力であろうが正義となるなど身に染みて理解している金森でさえ、身震いしてしまう。

まずもって、松岡に正義などという名分は存在しないのだ。

こいつは、この軍人は――

「さっさと話してくれよ。俺もこの後の仕事が残っているのにな」

――この暴力でさえ、仕事だと言い張っていやがる！

こいつに正義も悪も、クソも無い！

包帯の下からじわりと滲む血と、口内を満たす鉄の味。

ぎりりと痛む頬や腹部に意識を奪われながら、金森はそれでも、情報を小出しにした。

その理由は単純なものだった。

こうなったら全員を苦しめてやる、それだけだった。

「轟沈数の、差異、か……は、はは……！ 貴様が、ペンの一つが無くなっただけで騒ぎ立てるような狭量な男だったとはな……は、はははっ！ ぐっ……はははは……！」

痛みに顔を顰めながら笑う金森に、松岡は一瞬きよんとしたが、次の瞬間には書類を机に置きながら大笑いした。

「狭量とは、はっはっは！ 確かに、ペン一つ程度が無くなって騒いでいれば狭量と言われても仕方がないか！ はっはっはっはっは！ これはまいった！」

そして

「はっはっは……はあ」

ダアン！ という破裂音。

否が応でも金森の身体は硬直し、鼻腔を突き刺すような硝煙の匂いと、金森のこめかみから数センチずれた壁に空いた穴に恐怖する。

「仕事だから我慢してやるが、貴様の言う通り俺は狭量だ。必要とあらば貴様の両手足を切り落としてクソを垂れ流すことしか出来ない肉袋にしたって構わんのだ。口と頭さえついていれば話せる」

「う、うううっ……うううううううううう——！」

恐怖には五段階あるらしい、と突然穏やかな口調で話し始めた松岡に、金森の震えが大きくなる。

「死を受容するのに恐怖という感情を用いて、それらを五段階に分けた考え方らしいのだが……ああ、恐ろしい内容の話ではないぞ？ ほら、世間話だ。楽にしろ、楽に」

いつ取り出したのか、腰のホルスターへ拳銃を収めながら言う松岡。

金森に聞かないなどという選択があるはずもなかった。

「俺もこの年齢で、こんな特殊な仕事に就いているものだから家族のことなど考えもできんで……。たまには本のひとつやふたつでも

読んで気を落ち着かせたり、学んだりすべきだろうと思つて買ったものの内容なんだ。ほれ、親孝行をする前には親はおらず、とも言うだろう。少しは成長したんだと親を安心させるための、勉強というやつだ」

「う……うう……！」

「人というものはいつか死ぬものだ。故に、日々を懸命に——ふふ、これでは話が逸れてしまうか。ああ、これは俺の性格でもなんでもないんだぞ？ 本当だ。これはなあ、海原閣下に似てしまったのかもしれないなあ……ほれ、ここに居ても新聞くらい読んでいるだろう、貴様も」
がたがたと椅子が音を立てるくらいに震える金森を穏やかに見つめ、まるで友人に話しかけるかのような雰囲気は、得体の知れない恐怖を生み出す。

「あのお方といつたら、方々で仕事をこなす傍らで本など読んで過ごしているというのだから……。おっと、また話が逸れたな。そう、そうだ、死ぬ瞬間、という本があつてな？」

「……」

「多くを見送つたある精神科医の著書なのだが、これまた考えさせられる本だったのだ。医療に携わるものならば読んで損はないとうちの軍医も言つていたよ」

軍医とは、先ほどの無口な男のことだろうか？

そうして意識を逸らそうにも、背を這いまわるような恐怖は消えず。

「死とは瞬間的な事ではなく、長期的なものであるらしい。それらを五段階に分け、最終的な死というものへ辿り着く過程が書かれた画期的なものだった。まず一段階目は、否認し、孤立するという」

こんなくだらない話に耳を傾けてはダメだ！ 奴の思うつぼだ！

思えども思えども、松岡の声以外に音は無かった。

「自らの命が短いと知るや感情的になって否定してしまうのだと。しかし周囲はそれらに対して受け入れるしかない、まして自分のことではないのだから落ち着いたものだ。本人と周囲に温度差が生じるだろうか？ すると、孤立してしまうのだと書いてあつた。どれだけ冷静

に質問しようが、がなり立てて知らぬ、存ぜぬ、うるさい、とな」

「……あ、あ」

何か、引つかかる。

「次の段階は、怒りだそうだ。どうしようもない事実として受け止めたところで、自分がその状況にあることに対して周囲に反発し、怒る」
そうだ、自分は確かに兵器として扱ったが、戦果は挙げていた。それは間違いないだろう。

だがどうだろうか、一拍の間を置いて思考が逆回転し始める。

兵器として扱い、戦果を挙げて国民を守っていたが、そこに多くの介入があつたのもまた事実。自分^{金森}だけでなく、八代や郷田、山元や清水だつてそうじゃないか。楠木にそそのかされたのは自分だけじゃない！

「怒りを通り越した三段階目に、取引、というものがある。死を先延ばしに出来ないかあらゆる手を尽くすのだそうだ。延命治療だったり、カウンセリングを通してのセカンドオピニオンであつたり……まあ、人間らしいものだ」

郷田や山元はどうなっている!? 清水は！

収容されるならばそいつらだつて同罪だ！

私よりもそいつらの方が多くの情報を握っているぞ！

そう、訴えたことを思い出した。

「そうして、本当にどうにもならないのだと悟ると、抑うつ症状が出る。絶望し、諦め、落ち込みに落ち込んで……中には食事すらままならなくなる人もいるのだと。それはそうだな、死を許容するなど到底出来ようはずもない。誰だつて怖い、誰だつて避けたい、でも避けられないとなれば飯を食う気も失せるというもんだ」

「あ、ああああ……ッ！」

「最後……五段階目になつて、ようやく受容し、価値観が一変して穏やかになるのだそうだ。こうして、人は生きて死ぬのかと考えさせられたよ。出来る事ならば、両親には苦しんで欲しくない。どれだけの苦難があれど、外的要因でこの段階をすつとばすような死に方などして欲しくないなと思つた」

金森は、数カ月間一度としてしなかつた目をしていた。恐怖していた。次ぐ、松岡の言葉に。

「我々とは違う世界があるのだと知って、勉強になったよ」

松岡は立ち上がってホルスターへ手を伸ばす。

「ま、ま、ま、ま、ま、待て！……ま、待て！ 待ってッ！ 待ってッ！ 待ってッ！ 頼むから待ってくれ!!」

「……」

ぱちん、と留め金が外され、革と金属が擦れる音が大きく響いた。

「嫌だ！ 分かった！ 分かった、悪かった！ もうしない！ できない！ な!? 出来ないだろうこんな場所じゃあ！ 悪さなんて考えもしない！ やめてくれ！ 頼む！ 頼むから！ ああああッ！ ヤダアッ！ ひいひいひいひいッ！」

耐えられたはずの痛みが、我慢できないはずじゃないのに、我慢できなくなっていた。

「理解したか金森。これは海軍元帥、井之上閣下の温情であると。お前は段階を踏んで死を理解する時間を与えられた。それは他の軍人にも、艦娘達にも与えられない最大限の温情だ。さらにはここで死を迎えようとも凄惨なものにはしないという考えられない程の慈悲がある」

松岡の流れるような手つきが自動拳銃のスライドへいき、ちやりんと残弾を確認しているのが恐ろしかった。

気にも留めなかつた行動の一つ一つが、あらゆる形の恐怖となって金森の心臓を攻撃した。

「——我々に死への段階など存在せん。あるのは、ここで死ぬか、先で死ぬかの違いでしかない。貴様が軍人ならばここで頭を噴き飛ばしていた、が……」

ホルスターへ再び収められる拳銃。

「……元軍人のお前には段階が発生した。死刑を免れたことを喜べ。改心出来ないのならば情報を喋ったあとでいくらでも好きに黙って静かに過ごせ。ゆつくりと、穏やかに死ぬまでな」

「ひい……ひいっ……げほっ、ごほ、ごほごほっ！」

驚くくらいに汗びっしょりになった金森を一瞥して、松岡は蹴り飛ばした机を片手で引いて元の位置へ戻し、腕時計を確認して言う。

「さて……金森。質問の時間だ。俺が相手ではないからと言って、誤魔化すなよ」

「うう……」

「おい！ 交代だ！」

松岡の怒鳴り声ですつ飛んできたのは、金森にとってはいつもの聴取相手だった。

一つ違うのは——金森の目には、その男が死神に見えるということだ。

* * *

「申し訳ございません松岡中将閣下……ご足労いただいた上に聴取まで……」

「構わん。ようやく進展出来たのだ、銃弾一発で御の字だろう。薬莖はそちらで処分しろ。それと壁の修繕に業者を手配して——」

「あ、相変わらず剛毅と申しますか、いやはや……」

「あん？ 何だ、代わりに金森を撃ちたかったのか？」

「いえいえいえ！ 滅相ありません！ そういった意味ではなく、口を割らなかつた金森中将をああまで変えるとは、と」

「ただの、金森だ。間違えるな」

「ッ……失礼、いたしました……その、強情だった金森の口を割った手腕が、素晴らしいと……」

拘置所の敷地内の隅に隠すようにして設置されたバケツの前で、松岡はそれを見下しながら言った。

「……掃除用か？」

言わずもがな、バケツを指しているであろうことは明白だが、中には多くの煙草の吸殻がうずたかく積もっている。

松岡に随行していた男は、気まずそうに「撤去を——」と口にするが、松岡がポケットから煙草を取り出したことに驚きながら、機転を

利かせた。

「……掃除用であります」

「なるほどな、掃除用か。ならば転がっていても不思議ではないが、普段は片付けておくように。今回は不問とする」

「つは、申し訳ありませんでした」

煙草をくわえて火を灯し、ふう、と紫煙が空を舞う。

松岡は淡々と言う。

「今後また口を閉ざすようであれば、違う手を用意しろ。して、今回まとめられたものは？」

「こちらです。轟沈数の差異の修正ですが、一度海軍へ確認をとった方がよろしいかと思考します」

差し出された書類を受け取り、くわえ煙草の煙に目を細めながら読み込む松岡。

それをじっと待つ男は、通りがかる警備に何でもないからと手を振って追い払う。

「確認は当然として、何名かは思い出せんとあるのは、なんだ？」

「ええ、何度聞いても、思い出せんようです……それだけ杜撰な管理がされていたという事でしょう。話の殆どはどの艦娘に乱暴をしたのだの、躰だといって閉じ込めたのだというものばかりでした。出撃のていを取り、雷撃処分なのち、資源として持ち帰らせたと証言も取れていますから、もしかすると記憶に無いだけで同じく処分されているものと見えています」

「……俺を馬鹿にしているのか？」

「えっ!? は、いや、そのようなことは——!」

いきなり声を低くした松岡にびくりと震えた男は、直立不動で首を振る。

「ここ、これを見る。仮に不明となっている艦娘が雷撃処分されたとして、どうして資源を持ち帰らせるつもりだ」

煙草を指し棒がわりに書類を示す松岡に、覗き込む男。

「と、言いますのは……」

そこには、行方不明とされている艦娘の名前と、同日に出撃したと

される艦娘の名がちらちらと書かれている。

はたと気づいた時、男は松岡が言わんとしていることを理解して、あつ、と声を上げた。

「行方不明は潜水艦……しかし出撃したのは、水上艦ばかりですね……」

「資源がぶかぶか浮いて来て、それを網ですくって持って帰るようなお使いだとも思っているのか貴様？　艦娘が艦娘を沈めて、一部を持って帰って来ているという認識を改めろ」

「は、はい……」

「同部隊の仲間を撃ち殺して、使うから汚れも損傷も気にせず内臓を持って帰って来いと言われているのと同じことだ。いいな？　一切の漏れなく調べ上げることが我々憲兵隊の任務なのだ。可燃性のものがないからと言って敷地内禁煙なのを知っているにもかかわらずバケツを灰皿代わりに一服をかます程度の軍規違反ではない」

「……」

「……これについては私も同罪であるからして、まあ、まあ、あれだ。ほれ」

「……は、はあ」

「喫煙所は作れんのかここは」

「う、上に通していただければ……。中将閣下も提言してくださいましたら、一室程度は……」

「……つち、無理だ無理だ。そのファミレスとて禁煙になったのだぞ」

「え、ええ！　そうなので!？」

「つとに、肩身の狭い……この際、禁煙すべきかな」

「はああ……喫煙者も考えものですな」

「貴様は、どうなのだ」

「っは、自分も……」

「であれば一服くらいして戻れ。許可は出来んが、俺は書類を見るので忙しいのでな、何も見えん」

「……」

迷う素振りを見せる男に、松岡は初めて恐怖の無い、少し擦れた笑みを見せた。

「厳しくすれば良いわけではないなど分かっているも出来んものだな」

ポケットからくしゃついた煙草の箱とライターを取り出して男へ押し付けると、ふう、とまた一息吐き出す。

「……ふうむ、潜水艦、か」

「ふうう……。はい、行方不明で雷撃処分としても違和感のある艦娘は、そののみでしよう。配属前の記録が残っている可能性もありますから、急ぎ調べさせます」

「海軍の記録の前に、一度陸を洗え。陸での記録が揃ったら、海軍の記録と照らし合わせるんだ。まとめられたら俺が大本営に突きつけに行く」

「か、閣下……。何もそんな、しよっぴくような……」

「はは、ただの表現だよ、表現。俺は仕事を任されているのだ、決して失敗は許されん……。それこそ、海原元帥にドヤされてしまう」

「海原元帥とは、あの、新聞の……？」

「そうだ。その海原元帥だ。貴様もいつか会う時があるろう」

「拘置所に配属されるような一介の軍人に、海軍元帥が会うようなことなどありませんでしょうか」

「可能性はゼロではない。あのお方は、必要とあらば地獄の底であろうがこじ開けるぞ」

「ひえ……。そ、そんな、はは、大袈裟な……」

「大袈裟なものか。それでも過少に表現している方だ」

「……」

松岡は最後の一吸いだとばかりに火種を光らせ、もわり、と大きな煙を吐き出した。

「潜水艦、まるゆ……か」

教え③ 【鎮side】

仕事終わらねえんだが？

なあ、あのさ。

仕事、終わらねえんだが？（デジャヴ）

「羽目を外し過ぎないように……と言うと、説教臭いな。せつかくの
非番なのだ、しつかり遊んで来い」

「うんっ！ じゃあね、提督！ 行ってらっしゃい！」
「うむ」

広島、呉駅にて最上と別れた俺は、のんびりとした歩調で切符売り
場へ向かっていた。

暑さも寒さもなんのその。純白の軍服に季節感など皆無。ただた
だ眩しく目立つ格好に慣れてきたのは、自分が一般社畜であることを
正直に話してからもうしばらく経ってからのことだった。

それまでは気にする余裕が無かっただけで、一般常識のうちで考え
ればスーツや制服とは違って——軍服も制服ではあるのだが——厳
めしい印象しか与えない軍服のまま平気な顔をして歩き回るなどた
だの罰ゲームである。

ましてや平々凡々な面構えの社畜が軍服を纏ったところで、よくて
コスプレ、悪くてやべえ奴にしか見られないだろうに、俺は相も変わ
らず皺ひとつない綺麗な白を輝かせて歩いてる。慣れというのは
恐ろしいもの——はい、嘘です未だに慣れてません。

「……ひえっ！ す、すみません先にどうぞお！」
「おっと、失礼。気にしないでくれ。順番は守るとも」

まもるだけにな！ へへっ！

券売機へ続く列に並んだ俺の影に振り返った同志（サラリーマン風
の青年）が驚いた顔で俺を見つめる。これも未だに慣れてません。は
い、悲しいです。

時刻はマルキュウサンヒト。平日の朝ともあれば新幹線口もある
程度は込み合っており、券売機の前には長蛇とまではいかずとも人の
列があった。

今日は舞鶴にて前日より出張している大淀と合流し、小難しそうな《在籍艦娘と異動した艦娘のすり合わせ》をわざわざ現場でしなければならず、出来る限り遅れて——んんつ、出来る限りゆつたりと余裕を持って行動し、現場へ到着したかった。

艦娘に会えるならいいじゃないかって？ 違う違う、違うよ提督！（最上）

ただ艦娘とキャツキャウフフするだけの仕事ならばここまでぐちぐちと考え込んだりしていない。

大本営、井之上元帥から頼まれている重要な任務なのだ。

俺が出向かずとも舞鶴鎮守府にいる提督が勝手に擦り合わせてくれたらそれで終わりじゃないか！ とも思わなくはないが、第二次大侵攻の余波もあり、日本海軍はていを成すので精一杯である、と井之上さんに聞かされている。

舞鶴鎮守府のみならず、佐世保鎮守府や日本全国の泊地拠点、警備府の長が入れ替わっているというのだから驚きだ。どのような規模であれ、引継ぎも充分に出来ないまま多くの艦娘を運用しろというのも無理な話じやろう？ とは井之上さん曰く。

そうだね。大体は俺のせいだね。

ままま、まあまあ待ってもらいたい。

全てが俺のせい、というわけでもないからこそその憂鬱なのである。

第二次大侵攻から海軍は変革を迎え、大規模な人事異動が起こったまでは良しとしても、その後の対応に不安を残してはいけないのは当然も当然。

特に、戦力の根幹である艦娘については慎重に慎重を重ねてもまだ足りないくらいだというのも、至極真つ当な見方である。

ただ「上司が変わったからよろしく」なんていう単純な問題じゃないのは俺が一番分かっている。

うん、まあ、はい。これも俺のせいだね。

適当な仕事ばかりして周りに頼ってた結果が、これだね。

……うーん、全部俺のせいじゃない？（正論）

というわけで、俺はここ数カ月のうち「休日？ 知らない子ですね

……」とブラック戦士と化した正規空母赤城ばりに働きづめなのである。

柱島泊地の運営だけでなく、呉鎮守府との合同演習や岩川基地との飛行訓練。佐世保鎮守府を任された新人提督という藤田と名乗った男との顔合わせやら軍部での会議やら……。

それらに加えて新兵装の開発の一環としてケツコンカツコカリの指輪をいくつか作り、柱島泊地にて試験中でもある。

第一号、第二号などと呼んでは失礼にあたるため、あえて一人目と呼ぶが——まずは俺を好いていると言ってくれた大淀に渡した。喜んでくれたのかもつとムードを考えろとぶちかましを食らったのかは定かでないが、教会前で後頭部を盛大にぶつける結果となったものの、しつかりと了承を得られた。今では執務室で二人きりの時は本当にたまにだが「まもるさん」なんて呼んでくれたりする。

大淀は社畜の扱いバツチリなのである。可愛い。

二人目と三人目はあきつ丸と川内、艦娘保全部隊の二人だ。

こちらも特に問題無く、あきつ丸からは「自分でよければ協力するであります！」と頼もしい二つ返事をもらい。川内からは「ふーん……？」と意味深な返事とも呼べない言葉を賜った。夜戦忍者怖いぜ。

突き返されなかつたあたり、了承してもらったと思込んでいる。

四人目と五人目は、鳳翔と龍驤で、こちらは何故か大淀から渡せと命令——じゃなかつた。新兵装の試験ですから、データは多い方がよろしいかと、と言う事で渡しに行けと言われた。

あれ？ やっぱこれ命令されてんな……。

まあどのような理由であれ、艦娘とケツコンカツコカリが出来るのに嫌がる提督がいるか？ と問われたら、提督諸兄らは首が千切れる勢いで横に振っていることだろう。提督ならそうなる。まもるだつてそうなる。

試験というのにも二つの意味があり、一つは《練度九十九に到達している艦娘の能力をさらに向上させられるか》という艦隊これくしょんにもある機能の実証。

もう一つが厄介なもので……《練度九十九未満の艦娘が兵装を使用した場合の効果の有無》というものなのだ。

柱島泊地に、練度九十九に達している艦娘はいない。

最高練度たる艦娘ですら、八十にも満たない。

すると試験内容はおのずと二つ目が色濃いわけで、軍部と艦政本部は言葉無く俺をせっついていてるわけである。

とつとと艦娘の練度を九十九にもつていけ、と。

全員分の兵装を試作していないのはこれが理由でもあったりするのだ。

常に俺を補佐している大淀には個人的な意味合いが強かったものの、空母筆頭の龍驤や鳳翔、活動が多岐にわたる川内やあきつ丸が選定されたのには真つ当な理由があるのだ。あとまもるの趣味。

拒否される可能性——という最大の懸念もあつた。

しかしながら、それは案外あっさりと解決した。

あのさ……キミ、うちの事どう思ってるの？

まあ、いいんやけどね。ちよつちさ、気になつて。

ああいい、いい！ ごめん……。

龍驤の表情はしおらしく——はいすみません嘘です。

『ああ!? 新兵装の試験に指輪アツ!? あ、あんなあ……司令官、キミ……はああ……ええよ、ええ、ええ。何が？ て、ええつて言うてるやろ！ もう！ 仕事も速けりやこういうんも速いつちゆうことで納得しといたるわ……もお……この人は、ほんま……アホっ』

と、呆れられた。

……た、ただ鳳翔は優しい艦娘だから！

もちろん他の娘だつて優しい子ばかりだが、空母のお艦の慈愛は別格なのだ！

それはそれは美しい表情で——

いつか……いつかふたりで、のんびりと船旅を楽しみたいものですね。

『あのお、提督……こういうのは、もう少し、こう、期間など……考え』

たりはしなかったのですか……？ 大淀さんにも申し訳が……いえ、こちらは受け取らせていただきますが……し、試験ですものね？ データは必要ですもの、ええ。はい』

なんて困り顔をされたよ。これで満足かよオツ！ チクシヨオツ！

俺が夢見たケツコンボイスなんて無かったんだアアアツ！

うわあああはっはああああああん！ ああああああんツ！

「あ、あ、あの、うつ、え、つとお……！」

いらん事を思い出して泣きそうになっているのが顔に出ていたのかもしれない。

困惑した表情でおろおろと両腕を虚空にさ迷わせるリーマン戦士に、俺はきゅつと表情を引き締める。

「どうした。これから仕事ではないのか」

もしかするとこの社畜さんも大淀よろしく出張から戻る途中なのかもしれないが、おおよそ朝方の駅で券売機に並ぶスーツ姿の戦士は戦場へ赴くためにいるのだから、俺の質問はおかしなものでは無かつたはずだった。

「は、は、ははい、これ、から、仕事……です、けども……」

エイトビートを刻むような口調は何だそれ。社畜の最新トレンドなのか。

「朝から頭が下がる。それなのに譲ってくれようとした心遣い、感謝する。ほら、空いたぞ」

「あ——は、い……」

朝であろうが疲労困憊なのかもしれない。

きつと、このリーマン戦士も職場について朝っぱらから上司に怒鳴られたりするのかもしれない。そう考えると俺の切ない状況もまた同じようなものであるため（違う）、柱島の鈴谷と熊野を見習ってフレンドリーに接しておいた。

後ろから肩をぽんと叩くようにして券売機へと押しながら、微笑みかける。

「——辛くとも、負けるなよ」

「え、あ……！ はいッ！」

リーマン戦士は途端に元気になり、手早く切符を購入すると、小走りで改札へ向かう。

それから振り返り、どうしてか俺に向かって、大声で言った。

「い、行つてきますー！」

耐えて、耐えて、耐え抜いて。

それでも終わらぬ仕事は憎まず、管理の杜撰な上司を憎み。

負けてはならぬ仕事には、命を賭して臨むべし……

「……っふ、頑張れよ、青年」

これ即ち——社畜の魂なり。

『まもる。順番きたよ』

「あっはい」

胸ポケットからひよっこりと顔を出した妖精に言われ、愉快的現実逃避は終わりを告げて虚しい現実に戻って来る、俺なのだった。

* * *

数時間とせず、俺は目的地である舞鶴鎮守府へと到着した。

仕事をしたくない時に限って移動というのはスムーズなものである。切ない。

「おはようございませ提と——」

舞鶴鎮守府の正門前でピシッと背筋を伸ばして立っていた大淀は、俺の姿に気づくと駆け足でやってきて、ちらりと周囲を確認した後、小さな声で言った。

「……おはようございませ、まもるさん」

朝から心停止させる気か？

「ん、んんっ。おはよう大淀。前日からご苦労だった」

「いえ、これも仕事ですから」

にっこりと笑う大淀。

天使である。今度からエンジェル大淀を名乗っても——

『まもるコラアッ！ 仕事オッ！』

はい、本日も一日頑張つてまいりましょう。

今度は胸ポケットからではなく軍帽を押しあげて姿を現した妖精が大淀と俺の目の前に来てぴいぴいと怒鳴る。

少しくらい許せやい！ いじわる妖精め！

『もおお！ わたしたちには構つてくれないくせに！』

「なんだ、構つてほしいのか？」

「まもるさん？ 妖精はなんと……？」

無意識に口にしてしまった言葉は引つ込められず、素直に「どうやら妖精たちは私に構つて欲しかったらしい」と正直に言えば、あらあら、なんて微笑む。

「では、本日の仕事の間、お貸ししましょう。ね？ 一緒に舞鶴鎮守府でのお仕事をしてください」

『おおよどさあん……！ まもる、ほら、お礼言つて』

「な、何故私が——」

『かーわーりーにー！ はやくー！』

「……ありがとう、大淀」

「いえいえ。まもるさんは、皆のまもるさん、ですものね？」

ふわふわと飛ぶ妖精に顔を近づけて言う大淀。同調する妖精。

『そうだそうだー！ もつと言つておおよどさーん！』

「ふふふ、何を言っているんでしょね、妖精は」

微笑みながら妖精と戯れる姿は、それはそれは美しいものだった。
が！

騙されるな大淀……こいつらは、ただ遊び相手が欲しいだけだ
……ッ！

金平糖を奪い、適当に椰揄うだけ椰揄つて仕事を邪魔してくるぞ、
気を付けろ！

「皆のまもるさん……か」

「ええ、柱島みんなの、まもるさんです」

妖精ばりに椰揄いまくられるんだろうなあ。最近ずっとそんな感じだもんなあ。

「……では、椰揄われぬようしつかりと仕事をこなそうではないか」

泣いてない。俺は、泣いてない。

「どんな仕事でもこなせそうだよ、お前達とならば」

ポケットから手品が如き勢いでぴよこぴよこと飛び出していく妖精達と大淀を交互に見て、俺は精一杯の強がりと言った。

ちよつとだけ視界が滲んでいたかもしれない。チクシヨウ……チクシヨウ……。

挨拶もそこそこに、俺は大淀と妖精を伴い舞鶴鎮守府へと足を踏み入れた。

正門の警備が直立不動の敬礼をすると、大淀は流れるような動きで答礼する。

俺も做うべきだろうが、舞鶴に来る前からどつと疲れていたため、さつと右手を振るだけで挨拶とした。もちろん、無礼にならないよう営業スマイルも忘れず。

「海原元帥閣下に——敬礼！」

「……朝からご苦労。楽にしてくれ」

「っはー！」

気温こそ過ごしやすいが、快晴の下、陽射しに焼かれ続ければ暑かろうに、汗の一つも流さず立ち続けている軍人。

片や、しゃんとしているのは服装だけで、鞆の中身はカロリーなメイトだのくしゃついたメモだのが詰め込まれている目元の隈が消えない元一般社畜の俺。

頭が、上がらねえ……ッ！

「このまま執務室に向かいたいのだが、構わんか？」

「ご案内しますー！」

正門の両脇から迫って来る軍人二人に気圧されそうになりつつ、本日でも元気よく威厳スイッチ、オンです。

「——そのまま仕事を続けてくれ。この大淀は元舞鶴所属の艦娘だ、案内は結構」

「し、しかし……」

「よい、と言っているのだ」

「申し訳ありませんっ!!」

忙しいのに社畜の案内なんてさせられませんから……と、遠慮すれば、二人は凄まじい勢いで定位置であろう場所へ戻り、まるでマネキンのように動きを止めた。

え、遠慮はしたけど、そんないきなり仕事に戻んなくてもいいじゃんかよ……。

しょんぼりしそうになりつつ、俺はエンジェル大淀に甘やかしてもらおうと――

「では、行きましょう。提督」

「……うむ」

――仕事頑張りまあす……。

と、一悶着ありながらも、執務室へあつという間にたどり着く。

元とは言えここの所属であつた大淀はすすいと複雑な廊下を進み、俺はついて行っただけ。

その道中に艦娘の声はおろか姿さえ見えなかつたのに違和感を覚えないほど馬鹿ではない俺は、執務室の扉をノックする前に大淀へ問うた。

「……他の艦娘はどうした」

「予定通り、自室待機を命じております」

予定通り? な、なるほど?..

「調査終了後、舞鶴鎮守府の提督となった長峰少佐が艦娘のケアを行うため、私達は速やかに帰還を――」

「そ、そうだな。そうだった。確認漏れが無いようで、なにより」

「元々は、ここの艦娘でもありましたから」

「……そうか」

やつちまつてるよこれ。なあ、やつちまつてるって。

執務室の扉をノックしようとして右腕を上げた間抜けな恰好のまま、扉に向かって手の甲を向けた状態でさらに問う。

「大淀……今日の仕事は……――」

「長峰少佐は軍部お墨付きですから、ご安心ください。不正調査のた

めの記録は既に揃えてくださっているでしょう」

「だよねえ！ そうだよねえ！」

「在籍している艦娘のすり合わせも行う……の、だよ、な……？」

「在籍している、とは、その、現在いる艦娘達のことですか……？」

「う、うむ。そうだ」

ふと右腕をおろして鞆をまさぐり、革製の手帖を開いた。

びっしりと予定が書き込まれている手帖の日付を目で追う。

「答え？ 簡単だ。」

「予定を、見間違えていた。」

「提督、在籍している艦娘の照合でしたら、明日、佐世保鎮守府で行う予定で——岩川基地と共同で調査すると——」

大淀の声が脳内でエコーがかけられたように響く。

「あ、アカーン！ ちよつちピンチ過ぎやあッ！」

このままでは大淀に「予定もしっかり確認出来ないんですか？」

「まったくまもるさんだったらあ！ えいっ！」と両目を潰されてしま

う。

「な、ななな何か言い訳、言い訳を……！」

「……明日の佐世保には大淀も同行する、だろう」

「は、はい、そうですが……」

「いつもその場での対応をさせて、申し訳ないと、思っている」

「提督……？」

俺の思考はトップギアである。ここにきて提督業に慣れたから油断してましたと大事な予定を見間違えるような元帥がどこにいるだろうか。

「ここにいます。まもるです。」

俺には今、二つの選択肢がある。

ひとつは、耳ざわりの良い言葉いいわけを並べて、難を凌ぐか。

もうひとつは、素直に「予定を見間違えていたようだ、すまない」と謝った上で俺について仕事をする、ではなく、大淀について仕事をするにシフトするかだ。

言い訳を並べるなど軍人、まして海軍元帥たる男がしていいわけが

ない！

その通りだ。一言一句、間違っていない。だが考えてみるまもる。前日、前々日と日本全国を駆け回る大淀は、それだけにあらず、柱島に戻れば艦娘としての訓練にもきちんと参加している健気で素晴らしい娘だ。

この舞鶴での仕事が終われば、次の日は佐世保に向かかねばならないのだ。柱島に戻って息をつく間など一瞬で、ともすれば俺よりも働きの者である彼女の負担を増やすような真似をしてもいいのか？

そうせざるを得ない理由は俺にあるため、深くまでは言わない。

だがしかし、ケツコンカツコカリの指輪まで渡した艦娘相手に「ごつめー！ あーし予定間違えてたわー！」と北上ぼりの可愛さで謝ったとて後悔の深さはマリアアナ海溝——大淀に負担？ 悪・即・斬である！ ダメ、絶対！

ならば、嘘をつくつもりか？ いいや違う。

一流の社畜を超えた国畜まもる、元帥となって一皮も二皮もむけている。

嘘をつかず言い訳する俺のスキル、なめるなよなアツ！

「予行、の、代わりになればと思っているのだ」

途切れ途切れに言った俺に怪訝な顔を向ける大淀。

視線を合わせられず、扉を睨むように前を向いたまま、俺は言う。

「高度の柔軟性を維持しつつ臨機応変に対応することは、極めて、難しいだろう」

「……」

こくり、と喉が鳴る音。

「常に最善の選択をし続け、常に先手を取り、先を見据えて現在の行動の意味を考える——常人には到底無理な話だ。だが、ある時ふと求められる場合が、あるやもしれん」

「提督、それは……」

言うな大淀！ 分かっているよ！

求められる時は今だって事だよ！ 予定間違えててごめんよおおおおお！

馬鹿！ 俺の馬鹿！ どうして舞鶴に来るのに内容は一日ずれたものを認識してんだ馬鹿！ ばーか！ あほ！

『このお湯被り変態！』

そうだこのお湯被り変態提督がッ！

あれ今むつまるいた？

「それらを実現するには、心身ともに万全でなければならん……故の予行、だ。明日の仕事の内容は各鎮守府で行われねばならんものだが、この舞鶴鎮守府も然り。不正調査として記録を確認しながら、在籍艦娘の照合も行う。世間話の一つでもしながらな」

「まもる、さん……」

あーあーもう今そうやって呼ばないで罪悪感で押し潰れるウー！

「無理であれば、それでもいい」

やっぱり正直に言った方が良かった気が……と、じわりじわりと後悔の念が鎌首をもたげてきたところで、大淀の声が鼓膜を打った。

「優しい人なんですから、もう……分かりました。では、そのように」

あれ？ と俺が顔を向けると、そこには瞳を揺らす大淀の姿。

「でも、柱島の子以外はダメです。いいですね？」

なんの話……？

ま、いや、まあ、これ、なんとかなった……っぽい？

俺の心の夕立は戦々恐々である。

「では、行きましょう」

意味を汲み取りかねている俺をよそに、身体は自然と扉をノックした。

すると、扉の向こうから若々しく力強い、高い声が返って来る。

高い？

「入れ」

言い訳が通用したのかも分からないまま、ああ、きちんと名乗らねばと混乱甚だしい脳内のまま、勢いに任せて口は回る。

「柱島泊地の海原だ。本日の予定通り不正調査並びに鎮守府の視察に来た次第。準備は出来ているか、長峰少佐」

名前聞いという良かったという気持ちが半分。

初めましてと言いきびれてしまつてすみませんという気持ち半分。

俺が長峰と呼んだ新任の舞鶴鎮守府の提督は、驚く事に——女性だった。

三十代にも満たなそうな若々しい見た目で、大淀と並べば姉妹とも見える凛々しい顔つき。

切れ長の目が大淀の丸い目じりと対照的で姉妹のように見えたりかもしれない。

それにフチなしの眼鏡が良く似合い、さらりと真つ直ぐな軍服ながらも曲線が目立つ様は、やり手の女提督として見本と言わんばかり。

俺の姿に気づくや否や、彼女——長峰少佐は跳ねるように立ち上がつて最敬礼した。

「ツ!! 本日はご足労いただき、感謝いたします、海原元帥閣下!」

緊張しているのであろう長峰少佐は、俺が声を失つて見つめていた数秒間身じろぎの一つもせず、ぎゅつと口元をかたく結んで見つめ返していた。

「……気を張りすぎだ。楽にしろ、楽に」
俺の心? うん、そうだよ。初手で折れたよ。だつて怖いもん。

(島風)

半ば投げやりに……こそ、ギリギリならなかったが、心が折れると同時に力も抜けてしまい、軍帽を被りなおしつつ応接ソファへ腰をおろすに至る。

「今、お飲み物を準備しますので!」

「結構だ」

「はっ……失礼しました……! お、大淀殿も、どうぞ、おかけください」

「ありがとうございます、長峰少佐。お気遣いなく」
「すぐに書類を持ってまいります!」

俺は仕事が嫌いである。

なれば必然、仕事も俺が嫌いである。

嫌な噛み合い方をすると、どうなるか。

どちらかとも会いたくないし関わりたくないものだから、さっさと終わらせようとする。

そうして、こうなる。

長峰少佐は素早い動きで執務室のキャビネットを往復しながら両手に抱えきれないほどの書類を取り出しつつ、もう持てないよそれ、という量になれど、まだまだとばかりにかさを増していく。

流石にまもる、止めます。

順番にしないと分からないのでエツ！

無能社畜って呼んでくれよな！

「長峰少佐」

「は、はっ！ もうしばらくお待ちを！ 今すぐに——！」

「長峰、落ち着かんか、お前は」

「え、あ……いや、しかし……！」

今にも零れ落ちそうな書類の束で両腕をいっぱいにしてもキリリとした表情の長峰少佐。

一目見れば誰もが振り返ってしまいそうな麗人であろうが、残念、まもるは艦娘にしか興味はないのだ……。

でも艦娘はまもるに興味ないかもしれない……いかん涙が零れる。

「はあ……長峰……お前……」

呼び捨ては失礼だなと咳ばらいを一つして誤魔化す俺。

「長峰少佐。我々の仕事は何だ？ 言ってみろ」

「っは！ 艦娘と協力し、深海棲艦を退け、国民を守る事であります！」

室内に反響するくらいによく通る綺麗な声で素晴らしい言葉を紡ぐ彼女。

一方、仕事がしたくなさ過ぎて説教じみた文句をたれる社畜。

「その艦娘を差し置いてバタバタと走り回って、どうやって提督として指揮を執るつもりだお前は。私もあまり人の事は言えんがな。とにかく落ち着け。お前を手伝うために来たのだ、我々は。いいな？」

「し、かし……不正の調査を、せねば、艦娘の子達も……」

気にも留めないことかもしれないが、俺の耳に届く「艦娘の子達」と

いう文言が、さらに力を奪っていく。

艦娘に優しい子なら何でも許してやると思うなよ！

大淀を怒らせないようにささっと仕事を済ませて帰るんだ！

「誠実な心を持つているようで、嬉しく思う。だがな長峰少佐、我々は常に冷静でなければならん。どのような局面であれ、決して隙を見せるな」

うーん耳が痛い。ブーメランが背中にいっぱい刺さってる気がする。ハリネズミになりそう。

でも隙を見せるなというのは嘘ではない。隙を見せれば妖精にやられる。

妖精に揶揄われ始めたら一環の終わりなのだ。途端に仕事が滞るぞ。

「隙を見せれば最後、我々は——仕事どころではなくなる。鬱陶しい小言かもしれないが、分かってくれるな？」

「仕事どころでは、なくなる……」

「そうだ。艦娘にも申し訳が立たんだろう、そんなことになれば」
「……」

俺は立ち上がり、女性にしては背の高い長峰少佐に近づいて、両腕から書類を取ると、さっと整えて応接用のテーブルの上に置いた。

「長峰少佐。ここに就いてまだ日は浅いだろう。艦娘とは話しているか？」

「え、あ、っと……」

「ほら、艦娘と協力をするのだと言うならば、秘書艦の一人や二人つけているだろう。その子呼んでやらんか。世間話の一つでも挟もうじゃないか」

別に俺が会いたいわけじゃないです。本当です。

「……失礼ながら、海原元帥閣下」

「海原でも構わんぞ」

「な、何を仰いますか！　せ、僭越ながら、閣下……その……」
「うむ？」

「……秘書として艦娘を指名してはいるの、ですが」

歯切れの悪い長峰少佐は、おずおずとソファへ歩み寄ると、静かに座ったあと、勢いよく頭を下げた。

「申し訳ございません！ 私が至らないばかりに、まだ、この鎮守府の艦娘とはうまく話せておらず……秘書に指名した艦娘も、部屋から出て来ない、状態でありまして……！」

「部屋から出て来ない？ どういうことだ」

「あ、あー！ いえ！ あの！ 違うんです！ 違わないですが……いえいえ！ 戦意維持に問題はありませんが！ そのお……！」

「……長峰少佐」

「も、問題はありません！ 私が上手くコミュニケーションをとれていないだけで、任務の方に問題は一切！ ありません！」

「長峰」

「うくつ……！」

待て待て。分からんよ。何がどうして、どうなってるのよ。

何が起こってるって？ ひとかけらも分からんよ。

あまり俺をなめるなよ。柱島を預かるこの海原鎮、稀代の無能社畜だぞ。

一から説明をお願いします少佐。

「秘書には誰を指名しているんだ」

「……駆逐艦、天津風を指名しておりました」

あまつん？ いいよねえ！ そういうの！

「ふむ……であれば、天津風を呼んで話の一つでもしながら仕事をしようではないか。なあ？」

隠す気もさらさらない本音がこんにちは。

ここまで来ては大淀も我慢ならなくなったのか、軌道修正とばかりに俺の後ろに立ったまま優しい声音を紡いだ。

「長峰少佐。本日は不正調査のほか——あなたを交えた艦娘のケアを行うために来ました。ですから、どうか力を抜いてください」

「艦娘、の、ケアを……？ あ、お、大淀殿は、元は舞鶴の……！」

艦娘、の、ケア……？

そんな話したつけ……？ した……？

「現在、日本海軍内の体制変更に伴い多くの艦娘が混乱のさなかにあります。提督を失い、また、仲間を失った彼女達に必要なのは――揺らぐことのない提督という存在です。ですから長峰少佐がどつしりと構えていないと、不安にさせてしまいますよ」

……うーん。

「それに、不正調査だけならば柱島にしようともできますから」

ね？　と言葉を切った大淀に振り返るきよとん顔の俺。

大淀が言うなら間違いない。きつとそうだ。

よーし！　わかった！

「大淀……すまんが、頼むぞ」

「はい、提督。ではまず、天津風さんから在籍している艦娘の話聞きましょう」

「うむ。長峰少佐、天津風を呼んでくれ。それから改めて、皆で茶でも飲もうではないか」

今回も他力本願で行けってことだな！　っしやあ！　やってやるぜ！

……と、諦めの境地で、どこぞのプロゴルファーよろしく気合だけは十分といった俺の心は、最近清掃業者が入ったらしい舞鶴鎮守府に漂うワックスの独特な香りに消えていく。

「あ、ああ……！　はい！　閣下！　今すぐに！」

キラキラとした瞳で立ち上がり、提督用の机の上にある電話の受話器を持ち上げるのを見つめながら、ふう、と一息吐き出す。

「まったく……大変な仕事だ」

「ふふ、提督が言うとな変な感じがしますね……でも……」

大淀に揶揄われ、こいつめ、と揶揄い返してやろうと口を開きかけた瞬間のこと。

「あまりたらしこむのはやめてくださいね」

「……」

絶対零度を思わせる声に、閉口するのだった。

教え④ 【長峰 side】

この無音に等しい空間で仕事をするのも、あと数日の我慢だ。

そう自分に言い聞かせながら、私は《舞鶴鎮守府大規模改築》と記された書類にペンを走らせる。

ここ舞鶴鎮守府へ着任して一週間と少しが過ぎた頃に井之上元帥閣下からこの話を直接持ち掛けられた時には、驚愕と緊張で声が出なかった。

そんな大事をたつたの一言で、まして私などに！ と。

もちろん、日々訓練に明け暮れ、真面目に、誠実に尽くしてきた自負はある。

それでも日本国のみならず世界中を襲う脅威に対抗する現在の日本海軍は、昔の自衛隊とは違う。さして新しい記憶ではないが、座学の時にだつて軍制に立ち返るとして国民から多大な批判と不安が寄せられたと習つたのだ。当時の政府を思えば、相当の決断であつたのが窺える。

徴兵——などという事は大つぴらに行われたりしなかったけれど、いわば表向きがそうであつたという体なだけで、街中ではどこに行こうが日本海軍、日本陸軍の募集ポスターが迷惑ポスターの上から貼られていた。あの光景はもう、ポスターではなく壁だつたと言つていい。

——これだけ日本が変わつたのだから、さぞ屈強な者達が集まつて結託し戦つているのだろうという私の予想は、悲しくも大外れという結果だつたが。

小中高と普通科に通つていた普遍的な私が海軍を目指すようになったのは、世界中を襲つた大侵攻を経験してから……などという話は、今更だろうか。

どこにでも転がっているような話だ。深海から姿を現したファンタジーとも呼ぶべき恐ろしい存在が死を振りまき、悲しみが世界を覆つた。

幸運なことに内陸である岐阜出身だつた私の周囲で亡くなつた近

しい人はいなかったが、それでもテレビやネットを一色に染め上げた存在に恐怖と憎悪を燃やしたのは言うまでもない。きつかけはたったそれだけである。

話が逸れたが、これら以外に様々な経緯があつて、私は今、舞鶴鎮守府の提督という椅子に腰をおろしているわけだ。

女だからとなめられて訓練では小馬鹿にしてきた同期をぶん殴つて連帯責任として両手足が痺れるまで走らされ、腕立て伏せをさせられたあの頃が懐かしい。

もう一度やれと言われたらちぢくなつてしまふだろうが、こうして異様な静けさに包まれた執務室でペンの音が鼓膜をひつかくような不快極まる任務より幾分も健全に思えてしまう。

改築予定は、このためにある。

「……ん、んんっ。けほっ、こほっ」

無意識な咳払いですら、吸い込まれるように音が消えていく。

私が着任する以前にここを取りまとめていた金森中将閣下が私的に改装を施したというのは、誰の目にも耳にも明らかだった。

二重張りの窓は、雪国でもなければ不自然なもの。

防弾防爆の面で……とそれらしい理屈を考えたつて変だった。何せ鍵が内側についていないのだ。それらの窓は私が座る机の左手側にある一番上の引き出しの中に備えられたスイッチと連動しており、これまた面倒なことに押ししている間しか開かない。

要は私がスイッチを押している間に別の誰かが動いてくれなければ満足に窓の一つもあけられないのである。

室内には豪勢にも最新式のクーラーがあるため、窓を開けずとも湿度とともに快適なものだが、それにしたつて、言葉を失つてしまう有様。

私上官達——今や元上官か——から着任前に聞いた話では、舞鶴鎮守府を含む全国の拠点で一斉摘発があつたとの事で、もちろん私も存じていたが、その中でも巨大な拠点である舞鶴は一層酷いものだったらしい。

剛勇の知将とまで言われていた金森中将閣下は、ここ舞鶴で私利私

欲の限りを尽くしていたというじゃないか。

それも私達国民のために海から蘇ったなんて言われている艦娘に暴力まで振るっていたと聞かされては、金森中将閣下と呼ぶ声も慇懃無礼になってしまう。

勘違いしないでもらいたいののは、私は決してそういつた慇懃無礼な女ではないということと——…：…はあ、だめだ、気が滅入る。

人は無音の空間に放り込まれると気が狂うだなんて与太話を聞いたことがあるが、あながち嘘ではないだろうと本気で考えていた。

ペンが走る音一つすら大切にしたいと思えるくらいに、静かすぎるのだ。

私が書き込む書類には、大規模な改築になるために順序を決めてほしいとの旨が書かれており、こつ、こつ、とボールペンで叩くようにしながら迷う。

これから先、朝から晩までこもりつきりになるであろう執務室から改築したいに決まっている。けれど、金森（中将とも閣下とも呼ぶべきじゃないだろう）の横暴っぷりに疲弊している艦娘を優先してあげべきだとも冷静に考えている。

最優先事項であったのは、使いまわされた形跡はあるがメンテナンスがされておらずボロボロとなっている工廠と入渠施設の改築だったが、これについては艦娘へ通達して真つ先に改築させた。

日々の任務が出来ない事は日本国の停滞を意味する。

大袈裟でもなんでもなく、それだけ巨大な拠点の一つであるのだから、工廠、入渠については文句が出たって改築させようと思っていた。無論、杞憂だったけれど。

井之上元帥からは「どのような順番であれ必ずそのようにする。問題があらばワシに言え」とまで心強いお言葉を賜っているため、誰に何を言われようとも強気に出られるといったところが本音である。

「やっぱり、あの子達の部屋から、か……」

独り言を零しつつ、書類が散らばる机の上の端にあるファイルへ視線が移る。

舞鶴鎮守府に所属している艦娘達のデータがまとめられたそれに

は、顔写真もついており、一見して本当にただの少女にしか見えない彼女らと、私が初めて舞鶴に来た時に見た彼女らのギャップに、大きなため息が出てしまう。

疲弊し、憔悴し、摩耗し、意気消沈し……負の感情を詰め込まれたかのようなだった。

挨拶なんて出来たものじゃない。名乗れど、機械的な動きで答礼し、こちらが質問をしたら怯えながらも答えるが、個人の事に言及すれば、途端に気を失ってしまうのではないかと焦るほどに呼吸が荒くなっていた。

『本日よりここを任された長峰燈少佐だ！ながみねあかり 不当なる扱いを受けていたと聞き及んでいるが——私が来たからには安心してほしい！

より一層奮起し——』

女であるのが軍人である。

私は私なりに激励の意を込めて気合十分な挨拶をしたつもりだった。

『我々は協力し！ ともに戦い抜く仲間である！ 忘れるな！』

歓声も、拍手も、そのような形さえ無かった。

空を切る音もなく、すつと乱れぬ敬礼が返ってきただけで、全員目は虚空を見つめていた。私を見ては、いなかった。

「……ダメダメ、弱気になるな、燈！」

思い出しただけで得体の知れない感情が心臓を撫でる。

私が初めてテレビで見た艦娘は強く、逞しく、どこまでも気高く、美しかった。

でも、現実の彼女らは、そうじゃなかった。

私はそれだけで打ちのめされた。いかな敵であろうが任務ならば必ずや遂行してみせると鍛えに鍛えた精神力が、あつという間に削られるほどの悲しみがあつた。

「順次、あの子達の居室を改築、と……んー、この際だから備品も新調してあげるべきね」

ゆるく浅く頭を振ってからペンを踊らせ、私は引き出しの一つを開き別のファイルを取り出す。それは、舞鶴鎮守府の備品などの購入履

歴である。

細かに記された膨大な量の記録は資料室へ詰め込まれているが、この手元にある履歴は直近のものばかりで、ここから発注を飛ばしている業者を避けて手配しなければならぬ。

また、大きな溜息が一つ。

何を隠そう、このファイルに記されている業者ともども金森と手を組んでいたというのだから始末におえない。

かの井之上元帥閣下の手腕をもってしてもここまで細部に手は届かず、こういつた細やかな部分こそ私のような佐官が処理せねばならないのだから、軍人というのはままならないものである。戦うだけが無能にあらず、とは誰の言葉だっただろうか。

「ここもダメ、ここも、ダメか……んー……」

今度は畳まれていたノートパソコンを開き、近隣の業者を探し始める私。

名簿にある業者はかなりの大手で、そこを避けるとなれば規模は限られる。

備品と言えど私を含め多くが所属しているのだから大量発注になる上に、大本営を頼って信頼のおける業者を手配してもらおうとなれば時間が掛かり過ぎる。

そのほかの拠点を差し置いてでも注文すればいいとは忠野中将閣下のジョークであったが、本当にそうしてしまいたいくらいに、細かすぎる。

舞鶴だけじゃなくその他拠点だって同じ状況なのだろうから文句を口には出さない。

出さない、が。

私はすぐにノートパソコンを閉じて散らばった書類をさつとまとめて机の端へ積み上げると、立ち上がって腰を伸ばす。

それから室内に備え付けられた鎮守府に不必要と思われた高そうなゴテゴテとしたコーヒーメーカーとウォーターサーバーへ歩み寄ってコーヒーを淹れた。

残されたコーヒー豆はどうにも高級品らしく、薫り高いそれらがふ

わりと部屋に漂えば、異様な雰囲気や和らいだ気がした。

一口、また一口。言葉無く、声無く、また一口。

淹れたては熱かったが、別段猫舌なわけでもなかったため、ただただ気分を切り替えるためだけに胃へ流し込む。

こうした任務をこなして数週間。

閉じこもってばかりで艦娘とのコミュニケーションすらままならない。

大抵、艦娘が執務室を訪ねてくる時は入渠の許可をもらいにくる時か、報告書を提出する時だけで、それらも怯えながら来られるものだから対応を考えあぐねるばかり。

そう言えば、秘書艦を付けろと言われて指名した天津風はどうしているだろうか、とぼんやり思考を巡らせる。

彼女と会ったのは挨拶の時を除けば哨戒任務と報告書提出の時だけという、他の子と同じ頻度で、言葉を交わしたのだから「了解しました」くらい。

金森からどのような扱いを受けていたのかさえ聞き取り出来ていませんとあれば、どの面を下げて上に報告をあげられようか……。

しかしこれもまた任務。

「はあ」

ずれた眼鏡を指で押し上げてソファへ置き去りにされた軍帽をちらりと見る私は、それを手に取って、力なくぼすりと被った。

「うん？」

すん、と鼻が動く。

コーヒートの香りを押し退けるようにして、空調とは違う風が流れた気がした。

どこからだろうと顔を振った時、はたと時計が目に入る。

「……あ」

時刻は昼前を指しており、私は一気にコーヒートを飲みほした。

そうだ、今日は海原元帥閣下が不正調査のために来るのだった！

ここでの仕事ぶりも見られるだろうし、下手をすれば艦娘たちの状況を見て戦意に問題ありとして処分が下されるかもしれない！

私がこう考えてしまうのは、やはり第二次における大戦果に加え、幽霊のような存在だった彼が海軍内どころかメディアを通して全世界に突如として姿を露わにしたからである。

常在戦場——彼を表すのに適した言葉は無いが、一面を捉えた言葉はどれかと言われたら、私はこう言うだろう。

記者会見で姿を現した時、画面越しですら萎縮してしまったのは記憶に新しい。

確かその頃は舞鶴に異動することになって、自分の荷物を隊の皆に手伝ってもらってまとめている時だった。女性の集まる部隊で、軍人であろうが女は女。テレビに映るモデルやアイドルなんかを見ては恰好良いだの好みだのときゃあきやあ言うのもご愛敬な和気藹々とした部隊だった。しかしあの時、私を含め、全世界が画面越しに押し潰される感覚を味わったことだろう。

まあ……あんな姿を見ては萎縮するなという方が無理である。

噂では、腹を爆弾で噴き飛ばされた次の日に医師達を押し退けて病院から鎮守府へ戻り艦隊指揮を執ったとまで言われている。

地獄の閻魔を脅して仏を泣かせ、魑魅魍魎を踏みつぶして黄泉比良坂から駆け足で戻った軍神とまで言われているは、恐れるなという方が無理な話である。

これらは脚色され背びれ尾ひれがついた荒唐無稽な噂だが、それを信じさせる威圧感があった。

そんな人がこれからここにやって来るのだと思うと身が引き締まる。

ここを任されたからには、艦娘と共に海を往く運命と定められたも同義。

奮起出来ぬのならば、代わりに私とその姿を見せねば、と気合を入れて頬をぱしんと叩く。

紙コップをくしやりと潰してゴミ箱に投げ捨てると、私はまた机に向かつて任務を再開した。

* * *

ゴンゴン、と重たい音が室内に響いた。

籠った音に反応したが、思考がまつすぐ書類に向きつぱなしになっていた私は、てつきり大本營の軽巡洋艦大淀に自室待機命令が下されているはずの艦娘の誰かが、任務前に言い忘れか報告書か何かでやって来たのだと勘違いしていた。

「入れ!!」

室内から外へ向かって出すには大声を上げる。そうしなければ届かないので、仕方が無い。

喉がひりつき、咳払いを一つ。

扉が開かれた先から飛び込んできた声に、数秒、固まった。

「柱島泊地の海原だ」

声が、出ない。

「本日の予定通り不正調査並びに鎮守府の視察に来た次第。準備は出ているか、長峰少佐」

私は間拔けな顔をしていたかもしれない。

書類に向かってペンを立てたまま、入室してきた人物を見れば、それはもう、新聞記事に載っていた文言に、今ならばその通りだと直接領いてやりたいほどの圧を背負った男がいた。もしかするとそれでもなお、足りない。

護国の鬼神。稀代の知将。

井之上元帥閣下ですら首を振るまでもないと言わしめる男。

日本海軍所属——いや、それは少し前までの話か。

彼は第二次大侵攻から躍進を遂げ、井之上元帥閣下と二大の巨塔となった。

日本海軍筆頭、全艦娘の最終指揮権を握っている、戦場における最高指揮官。

海原鎮元帥である。

室内に漂っていた異様な空気が一気に霧散し、コーヒーの残り香すらもかき消された。

これは表現でも何でもなく、本当に風が吹き込んできたのである。

ただ扉の向こうから室内に向かつて圧の違いで風が発生しただけかもしれないが、それにしたって説明のしようがない風だった。

ひらひらと書類が音を立て、潮の匂いが室内を満たす。

実際に目にして、私は彼の背後にいる軽巡洋艦大淀も相まってか、幻を見た。

海だ。

いつか見た、艦娘が水飛沫を上げて駆けていく大海原がやって来たと思っただけ。

私の身体がまるで自分のものじゃないように立ち上がる。

「ツ!! 本日はご足労いただき、感謝いたします、海原元帥閣下!」

先ほどと同じくらい大きな声で言えば、彼は見定めるように私を見つめた後に、ふん、と鼻を鳴らして呆れ返った様子で言う。

「……気を張りすぎだ。楽にしろ、楽に」

楽にしろとは社交辞令。そんな事は身に染みていますと、私は急いで

「今、お飲み物を準備しますので!」

と言ったのだが、彼は短く「結構だ」とだけ言って、さっさと応接用ソファへ座ってしまう。

ならば任務の話だな、と私は大淀殿に向かって手でソファを示しながら言った。

「はっ……失礼しました……! お、大淀殿も、どうぞ、おかけください」

「ありがとうございます、長峰少佐。お気遣いなく」

今まで見たどの大淀よりも柔らかな笑みを浮かべた彼女は、するりと海原元帥閣下の背に周り、置物のように静かに佇む。

最前線で戦い続ける男と、艦娘。全てにおいて次元が違っていると嫌でも分からされてしまう。

「すぐに書類を持ってまいります!」

手を煩わせるわけにはいかない。今日はあの金森とかいう男の不正の尻拭いにわざわざ出張ってくれているのだから、出来る限り迅速に行動し、自分が役に立てる軍人であると印象付けねば。

そうして舞鶴の艦娘^{彼女ら}らの待遇を改善し、人を救うのだと目を輝かせていた姿を取り戻さねばならない。

だが、やはり緊張はする。

無意識に手が震え、足に力が入らない。

無理矢理に身体を動かしてキャビネットへまとめておいた着任前の記録を引つ張り出しながら、どのような調査を行うのだろうと考えた。一種の、現実逃避とも言おうか。

業者と結託して金品を不正に巻き上げていただけにあらず、艦娘への不遇という言葉では収まらない乱暴を働いていたらしい金森の事だ、記録の精査のほか、海原元帥閣下が持ってきている年季の入った革製の茶色いバッグに詰め込まれているであろう軍部の記録との照合にて一つ一つ正していくのかもしれない。

そうになると、着任前の記録も、出撃記録の他、演習記録も必要になるだろう。

演習に際して弾薬の消費も記録に残されているし、入渠するのにだって資材の消費が発生するために、その資材がどこから、どのようなルートで舞鶴にやってきたかの記録だってある。

その他には……そうだ、出撃記録のほかに、資料室へ収める前に目を通していた着任前の報告書もいくつかあったはずだ。

キャビネットが空っぽになる勢いで両腕いっぱい書類を取り出している私に、冷たい声がかけられる。

「長峰少佐」

早くしなければ。

「は、はっ！ もうしばらくお待ちを！ 今すぐに——！」

もう一枚、いや二枚、と取り出したところで、さらに呆れたような海原元帥閣下の声。

「長峰、落ち着かんか、お前は」

手早く、のみならず。

仕草の一つも気遣えとばかりに言う厳しい言葉に、いや、しかし、と口ごもる私。

同じ軍人故か、教育隊の上官を思い出してしまう声色に、ぐっと喉

が詰まる。

「はあ……長峰……お前……」

どうしてか、見捨てられると考えてしまった私はさらに萎縮してしまいそうになったが——それに続く確固たる意志を問うかのような声に、背筋が伸びる。

「長峰少佐。我々の仕事は何だ？　言ってみろ」

何故、今？

考えるまでも無く、脊髄反射で答えた。

「つは！　艦娘と協力し、深海棲艦を退け、国民を守る事でありませぬ！」

そうして……

「その艦娘を差し置いてバタバタと走り回って、どうやって提督として指揮を執るつもりだお前は。私もあまり人の事は言えんがな。とにかく落ち着け。お前を手伝うために来たのだ、我々は。いいな？」

……お叱りを受けた。

いや、待つて。手伝うために、来た……？

「し、かし……不正の調査を、せねば、艦娘の子達も……」

そうだ、この訪問は不正調査のはず。

大本営から仰せつかっているのは、海原元帥閣下とともに金森の不正の仔細を知り、どのように改善するのかわかりさせるという任務だ。

領海内の哨戒や日々の出撃だつてままならない今、それらを如何に早く済ませるかが舞鶴鎮守府の活動再開に繋がる。

国民には口が裂けても言えない。

艦娘は意気消沈している。それは前任のせいで、戦えもしません、など。

「誠実な心を持っているようで、嬉しく思う。だがな長峰少佐、我々は常に冷静でなければならぬ。どのような局面であれ、決して隙を見せるな」

隙を見せるな。仰られる通りだった。耳が痛い。

ある程度の地位となった今よりも少し前に、自分も同じようなこと

を部下に向かつて生意気に口にしていたのを思い出し、恥ずかしくなった。

「隙を見せれば最後、我々は——仕事どころではなくなる。鬱陶しい小言かもしれないが、分かってくれるな？」

「仕事どころでは、なくなる……」

鸚鵡返しする私に、海原元帥閣下は頷く。

「そうだ。艦娘にも申し訳が立たんだろう、そんなことになれば」
「……」

彼が、この状況を知らぬわけが無かった。

全艦娘の指揮官であるのだから、それは当然の話で、隙を見せるなと私に言う意図もまた、舞鶴という拠点を任せられている事実は、国民からしてみればそれ相応の地位と信頼があるのだと見られていることに同じ。

なれば私の一挙手一投足が艦娘に繋がり、また私の発する一言一句が、舞鶴鎮守府の意思となる。

これこそが、格の違い、である。

さらには——

「長峰少佐。ここに就いてまだ日は浅いだろう。艦娘とは話しているか？」

何もかも、彼の手の内。

まるで私が舞鶴に来てからの事を全て見透かしているかのような鋭い眼光が、さらに言葉を詰まらせた。

「え、あ、つと……」

部隊一番の気の強い女と言われた私が、笑えるものだ。

手のひらの上で踊るところか、戦場にすら立てていない現実を突きつけられている。

「ほら、艦娘と協力をするのだと言うならば、秘書艦の一人や二人つけているだろう。その子を呼んでやらんか。世間話の一つでも挟もうじゃないか」

気遣われた事が嫌なわけじゃなかった。むしろ、安心したくらいだ。

かの御仁も人であるのだと錯覚させてくれる。まあ、人なのだが。それを色濃くしたいが故か、気圧されて完全に私という存在が屈してしまっているのか、自分でも考えられないくらい弱気な声が出た。

「……失礼ながら、海原元帥閣下」

「海原でも構わんぞ」

冗談を飛ばされて驚き、慌てて首を振る。

「な、何を仰いますか！　せ、僭越ながら、閣下……その……」

「うむ？」

「……秘書として艦娘を指名してはいるの、ですが」

「恐る恐る言葉を選ぼうと思いを回転させていたが、ついぞ、最適な言葉など見つからなかった。」

この人に、嘘は絶対に通用しないと確信があった。

故に、私は着任してからあつという間に首を飛ばされる結果となるかもしれないと考えながらも、勢いよく頭を下げた。

せめて、せめて苦しんだ彼女らを助けなければならぬ。

同じ軍人として。

同じ女として。

「申し訳ございません！　私が至らないばかりに、まだ、この鎮守府の艦娘とはうまく話せておらず……秘書に指名した艦娘も、部屋から出て来ない、状態でありまして……！」

「部屋から出て来ない？　どういうことだ」

不思議そうに言う海原元帥閣下に、私は言葉足らずだったと付け加える。

「あ、あー！　いえ！　あの！　違うんです！　違わないですが……いえいえ！　戦意維持に問題はありませんが！　そのお……！」

落ち着けと言われたばかりなのに、必死になってしまう私。

部屋から出て来ないのは本当だが、四六時中部屋に籠って一切出て来ないわけではない。形だけは言え警備の任務はあるし、日々の施設メンテナンスだって艦娘達がやっている。食事もしていれば、風呂も入る。

出て来ないというのは、個人的なものだった。

秘書艦をつけろと言われ、ならば前任の話を聴き取るついでに補佐をと指名した駆逐艦天津風は、あろうことか秘書艦を拒否したのである。

秘書、という言葉に反応して怖がっていたのは明らかだった。

任務の拒否など処分待ったなしだが、私にそんな気が起こるはずもなく。

どうして嫌なのか。何が嫌なのか。一体、私が来る前にここで何があったのか。

記録に載っていない、本当の声を聞かせてほしいと言った。

……結果は、この通りだ。

言葉を紡げば紡ぐだけ、海原元帥閣下の目が細められる。

「……長峰少佐」

「も、問題はありません！ 私が上手くコミュニケーションをとれないだけで、任務の方に問題は一切！ ありません！」

彼女達に問題はない。任務だって遂行してくれている。違う、違うんだ。

傷つけられて、怯えているだけ。

怯えるな、恐れるな、ただ進め。

それを、この日本海軍、いや、世界中でどれだけの者が通せるだろうか。

そんな人がいるのならば、私に教えて欲しい。

私だって恐怖する。今のように。

私だって怯える。駆逐艦天津風のみならず、艦娘にすら声が届いていないように。

私だって、私だって、私だって。

……そう、誰だって、そういった波に揉まれている。

どうか分かって欲しいという切実な願いを届けようとする声は、一刀両断された。

「長峰」

「うくっ……！」

どんな事を言われるのだろうか、ちらりと上目に海原元帥閣下を

窺う。

相変わらず、無表情だった。

「秘書には誰を指名しているんだ」

「……駆逐艦、天津風を指名しておりました」

素直にそう言えば、海原元帥閣下は数瞬で全てを察したように鼻息を漏らし――

「え……？」

——どこにでもいる、普遍的で、少しくたびれたような男の笑みを見せた。

思わず、誰にも聞こえないくらいに小さかったが、声が出てしまう。

「ふむ……であれば、天津風を呼んで話の一つでもしながら仕事をしようではないか。なあ？」

話の一つでも、しながら……？

それは私の任務で、いや、違う、彼が言っているのは、もっと気さくで、気楽で、本当に安心を醸すような――。

戸惑う私に、大淀殿の声。

「長峰少佐。本日は不正調査のほか――あなたを交えた艦娘のケアを行うために来ました。ですから、どうか力を抜いてください」

「艦娘、の、ケアを……？ あ、お、大淀殿は、元は舞鶴の……！」

私の脳内にある記憶が掘り起こされ、行方不明、解体、轟沈、と不穏な言葉と艦娘の顔がいくつも過っていく。

そのうちから、いくつかの顔が思い浮かんだ。

駆逐艦夕立、正規空母赤城、正規空母加賀――軽巡洋艦、大淀。

金森が提督として横暴の限りを尽くしていた頃、ここ舞鶴鎮守府から異動となった艦娘の一人だ。

記録には命令違反をしたとばかり連なっているが、一目見て、実際は違うのだと理解する。

命令違反？ 私の目の前にいる大淀殿が？ 上官である提督の命令を？

大嘘だ。何せ、初対面である私ですら分かるほどに安心しきった顔をしている。

この人の背にいれば何も問題はないと、顔に書いてある。

「現在、日本海軍内の体制変更に伴い多くの艦娘が混乱のさなかにあります。提督を失い、また、仲間を失った彼女達に必要なのは——揺らぐことのない提督という存在です。ですから長峰少佐がどつしりと構えていないと、不安にさせてしまいますよ」

嗚呼。私は瞠目した。

艦娘からその言葉が発せられたことに、ではなく。

艦娘も人と同じく、揺らがぬ意志を持っている。

故に、故に、揺らがぬ上官を、揺らがぬ信念を持つ者を求めている。それらを打ち崩した大馬鹿者は誰だ？

金森だ。

いいや——人だ。手を取り合うべき、人だ。

思考が奪われ、声を失っている私の目の前で、朗らかながらもしつかりとしたやり取りが交わされている。

私が意識を取り戻したのは、優しい声がかけられてからだだった。

「長峰少佐、天津風を呼んでくれ。それから改めて、皆で茶でも飲もうではないか」

「あ、ああ……い……はい！ 閣下！ 今すぐに！」

今日は一言も話せないだろうと、上げられることも無いだろうと静かに鎮座している電話機を乱暴に取り上げ、私は内線のボタンを強く押した。

電子音が鳴って、数コール。

『……は、はい、駆逐艦寮、です』

背後にいる海原元帥閣下と大淀殿をちらりと見た後、私は意を決して言った。

「こちら執務室。長峰だ。駆逐艦天津風を呼び出してくれ、用がある」

* * *

「駆逐艦、天津風、で、す……」

執務室に彼女がやってきたのは、内線で呼び出してから数分後のこ

と。

任務とあらば即参上、が身に染みついているのは誰でも同じことだが、彼女らにとつてそれは違う意味もあるようで。

「大淀……!? それに、あ、あの、え、と……!」

海原元帥閣下を見て、よからぬ想像をしたのだろう。

ひ、ひ、と短い悲鳴を上げたあと、彼女はその場でへたり込んだ。

「い、いやっ……に、任務は、遂行します……やだ、沈みたく、ない……解体しない、で……! あ、あああつ……!」

ぽろぽろと零れ落ちる涙に、私はぐつと唇を噛んだ。

「天津風、あなたを呼んだのは……!」

私が声をかけようとした矢先に動いたのは、大淀殿だった。

「お久しぶりです、天津風さん。私を大本営の大淀と思つてますね?」

ふふ、と大淀殿が優しく微笑みかけると、天津風は驚いて目を見開く。

「え、え……? 大本営、の、人、じゃな、い、の……?」

「……金森元提督の言う事を全く聞かなかつた問題児の、あの大淀です」

「おお、よ、どさん……沈められたつて、きい、聞いて、ひ、ひぐつ……」

本当に、あの、大淀さん、なの……?」

「……夕立さん、赤城さん、加賀さんを覚えていますか?」

二人の会話は、海原元帥閣下を差し置いて続けられる。

当の閣下は、先ほどとは打つて変わつて、ここに来た瞬間のような軍人然とした険しい顔をしており、軍帽を目深に被つて歯を食いしばっていた。

歯ぎしりに頬が動いたのが、離れていても分かるくらいだった。

「お、覚え、て……る、わ……」

「全員、生きています」

「あ……あ、ああつ……わああああああんツ! うあああああああああツ!」

糸が切れたように大声で泣き喚く天津風を抱き寄せた大淀殿は、とんとん、とんとんと彼女の背を撫でながら、彼女の頭に唇を近づけて

言う。

「外部から、この記録を拝見しました。多くの仲間が、失われていることも……知っています。決して許される事ではありませんし、許すつもりもありません。私、いえ、私達は立て直しに来たのです、この、舞鶴を」

「ひぐつ、う、くつ……ぐすつ……たて、なおしに……?」

「ええ、そうです。私達が戦い始めた頃のように、正しい姿へ」

ここにきて、ようやく海原元帥閣下が口を開いた。

「……駆逐艦、天津風だな。私は海軍元帥、海原という者だ。今は柱島泊地にて提督をしている。この舞鶴には大淀の仲間が多くいると聞いているが、お前もその一人で、間違いないな?」

「ひつ……」

怯えるようにし身を縮こまらせて大淀の腕の中へ逃げようと身を振る天津風だったが、頭上から大淀の「大丈夫です。私を助けてくれた人ですから」という声に、そろり、と顔を出す。

「は、い……」

「うむ。此度は海軍における許されざる軍規違反、並びに艦娘へ対する不当な扱いの調査に来た次第だ。どうにも金森とやらが好き勝手していたらしいが、そうなのか?」

「つ……あ、うあ……あのつ……」

「金森から何を——」

金森、という名前を聞くだけで、天津風の顔色は一変。

泣き声とも違う荒い息を何度も吐き出し——過呼吸だ、と気づいた私が立ち上がる前に海原元帥閣下が軍帽を脱ぎながら立ち上がり、天津風と大淀殿の前に片膝をついた。

その軍帽を、天津風の頭の上にほすりと被せた。

まるで、泣き顔を隠してあげるかのように。

「なるほど、承知した。よく頑張ったな、もう大丈夫だ」

そう言って軍服のポケットから携帯電話を取り出して立ち上がった海原元帥閣下は、こういうのもおかしいが、元帥なのだど理解させられる行動を取る。

「……」

静かに携帯電話を操作している顔が、みるみる恐ろしいものに。
それから——小さく、大淀、と呼ぶ声。

「……天津風さん、少し、歩きましょうか？」

「え……？ 歩く、って、どこに……」

「どこでもいいですよ？ うーん、そうですね……では、購買などいかがでしょうか？ ほら、いつもこっそりお菓子を買いに出ている——」

「ん……うん……うんっ……」

また、目に涙を浮かべる天津風を見て、私は言葉無く大淀殿へ向かって頷いた。

天津風達が執務室を出て、扉がぱたりとしまった瞬間、私は——目の前が真っ白になる。

比喩ではない。

思考が、全くできなくなっただけ——恐怖で。

携帯電話を耳に当てて数秒、海原元帥閣下から声が発せられた。

たった、それだけの事である。

「松岡か、今どこにいる」

地の底を這うような低い声。

「巢鴨か……では、丁度いい」

心臓が止まる、とは大袈裟な表現だとは思わないだろうか？

驚いた、驚愕した、仰天した、まあ、多々ある表現でも、銃弾一つ飛んでいく破裂音ですら、軍人にとっては日常で、程遠い感情の一つだ。

では、それらを凌駕するものとは何だろうか？

私は、答えを知っている。

今、目の前で見ていて、聞いている。

その答えは、避けられぬ——死の声に対する、恐怖だ。

「——金森を出せ。今、すぐに」

教え⑤ 【鎮side】

『金森を、でありますか……!?! そ、それはあ……!?!』
「出せない理由があるのか?」

天津風の泣き顔を見てしまった俺は、甚だしい思い違いをしていたのだと痛感した。

いつから《柱島泊地の艦娘だけが苦しんでいる》と思い込んでいたのだろうか。

呉でも、佐世保でも、舞鶴でも——他の鎮守府でも、苦しんでいる艦娘は存在している。

柱島に集められた彼女らは全国からやってきたと聞いていたじゃないか、それなのにどうして。

浮かれに浮かれ艦娘の練度向上のためだとかそれらしい理由付けをし、指輪まで渡して私欲を優先させる俺と、今しがた電話越しに聞こえる松岡のひつとらえた金森との違いはあるのだろうか。

くそ。くそつくそつくそつ!!

噛み締め過ぎた奥歯が痛み、口内に鉄の味が広がる。

ここで呉鎮守府であったように癩癩を起して怒鳴り散らすか?。

ダメだ。そんな事をしたって良い方向に転がるはずがない。

あれら一連のことが上手く回って着地点を得たのは、紛れもなく艦娘の努力と、山元や清水の誠実さがあってこそ。一度悪い事をしたと自覚した彼らは変わったじゃないか。それを期待して、甘えて、ただ怒りに任せて声を荒げるなど、大人の、まして提督のすることじゃない。

長峰少佐に落ち着けと再三言った手前もあって、俺は声を荒げずに済んでいた。

だが、こういう時に限って事は上手くいかず。

『海原閣下は今、舞鶴、でしたでしょうか……』

「そうだ」

『軍規、があります、ので……いくら閣下とて收容されている金森と電話を繋ぐことは、できません』

「どうしてもか」

『……申し訳、いけません』

軍規と言われたらば仕方がない。社畜で言わば内規。曲りなりにも軍人として生きることとなった自分は井之上元帥と同じ場所へ腰を据えている。

ならばそれを破ることなど決してあつてはならない——が、俺は未熟者だ。

そして松岡や長峰が知らぬだけで、井之上さんから軍部中枢の数名は俺を知っており、また、俺の癩癩を察して天津風を連れて出て行つてくれた大淀を含む柱島の全員が、俺の元々を知っている。

仕事においては他力本願が主力のポンコツ極まるお湯被り変態クソ提督でもそれなりに頑張るつもりだが、こと、艦娘においては——他者の理屈など知ったことではない。

無理を通せば道理は引つ込むのだ。屁理屈提督の俺にとって、顔も知らねば遠方において会うことも叶わない金森であれ、艦娘を虐げた者との会話など、能わず。

ごつ、ごつ、と革靴の音を立てて室内を犬のように歩き、沸々と湧き上がる感情を呑み込もうと、設置されているウォーターサーバーへ近づき、サーバーの横に重ねられた紙コップを手を取つてくるりと半回転させる。

「軍規ならば仕方あるまい。それで、私が金森と話せぬ軍規とは何だ？」

『……』

電波が悪いのだろうか、と携帯から耳を離して画面を見るも、きちんと電波は届いている様子だった。ならばマイクの問題か、と俺はスマホを数度タップしてオンフックにし、耳から離れた状態のままカップへ水をいれる。

放り出したままの長峰少佐が手持無沙汰にならないようにと「軍規の載っている書類はあるか」と問えば、彼女は大急ぎでキャビネットをひっくり返し、分厚い本を差し出した。

なみなみと水の入ったそれを一気にあおってから、長峰少佐から本

を受け取って自然と執務机に近づいていく。

はつとしてちらりと彼女の顔を見れば、何も言わぬまま頭を下げたので「借りるぞ」と一言ことわってから腰をおろした。

松岡が未だ黙りこくったままで、こちらも無言のまま。

意味があるかも分からないまま軍規の載った本を必死に捲る音だけが室内を支配した。

『……軍規違反、並びに、重大な犯罪を犯しているのです、あいつは。日本の司法にかかれれば否が応でも死刑になるでしょう。なれば超法規的措置として軍法を曲解し適用する他無かったのは、閣下が一番ご存じではないですか……!』

歯噛みするような松岡の声に、俺は手の平を返すような言葉を投げつける。

「そんなものは知らん」

『閣下……! ご理解ください、どうか』

「理解したくもない。舞鶴鎮守府を訪問して挨拶の一つでもしようとしたら、軍服を見ただけで駆逐艦が泣き出したのだぞ。何を理解しろというのだ」

『……』

捲り続けていた本の字を適当に目が追うなかで、一つ、文言が。

「じしやく辱職における罪について」

『閣下、それは……!』

小難しい文章を理解するとなれば難しい話だが、それとなく意味を汲み取ってただ口にするだけならば簡単なことである。

社会人とは往々にして流れに逆らわぬためにとこういった手法を取る。

ただし、社畜に限る。真似しちやダメだぞ。

「指揮官は艦娘が危険な状態、またはそれに準ずる状態になると判断できる場合において救護しなければならぬ。海軍における軍規第三三章三十五条だ」

『お待ちください、閣下がそのような事を口になされば——』

「敵前であれば須らく死刑。これを作ったのは誰だろうか? はは、

褒めてやりたいよ。当然だ、指揮官たる者が艦娘を差し置いて敵前で逃亡などもつてのほか。なあ、松岡？」

『っ……』

正直なところを言えば、俺の頭は真っ白だった。

怒りに任せて暴れ回りたいのを抑え込むのに必死で、必死で、どうにもならず、居ても立っても居られないと走り出して天津風を泣かせた顔も知らない金森とかいう奴を馬乗りになってぶん殴ってやりたかった。

それは、ただのエゴだ。

艦娘を愛する俺を最優先し、艦娘の気持ちや海軍内での処断を軽視し、俺を受け入れてくれた井之上さんや軍部中枢の者達への軽視行為となる。

自分よりも年若い長峰少佐すら慎重に対応しているであろうことなど明らかだったじゃないか。それを、どうしてこの場で年長たる俺が翻せようか。

けれど俺は止まらず、分厚い本を捲り、文字を指でなぞり、時折感情の泡が弾けるように叩く。

「八章七十八条……これか？　これで決着をつけたんだな？」

『う、ぐっ……』

「読み上げてやる。間違いならば遠慮なく言え」

酒も飲んでいないのに喉が焼けるようだった。

低い声で文言を読み上げれば、松岡の息遣いがスピーカーを揺らす。

「八章、七十八条。海軍の艦娘、航空機、戦車、工場、防衛の用に供する建造物、電車、自動車もしくは橋梁または海軍の軍用に用を供すものを貯蔵する倉庫を焼損しょうそんした者は死刑または無期、十年以上の懲役に処す……と。金森は故意に艦娘に暴力をふるい、意図的に轟沈させたのだから、焼損と変わりない。そうだろうか？」

『……っは、その、通りであります』

「で、生きているか？」

『っは』

「ならば懲役となつてゐるわけだな。生きてゐるのに、話せない理由はなんだ？」

『調書が完成しており、既に送付を……あとは、調書をもとに詳しい調査を行い、その真偽を確認し、改めて報告書としてまとめ——』

「それでは解決できんのだが」

『くくく！ 情報の塊なのであります！ 金森は！ 何卒ご理解ください閣下！ 既に調書をまとめ海軍情報部へ文書を提出してしまつてゐるのです！ 電子文書ですからすでに届いてゐるはず！

迅速に調査を行いますから！ この順序無くして秩序の維持など——』

「既に届いてゐるのか。ふむ……すぐにはかけなおす、待つていろ」

松岡は未だ大声をあげていたが、構わず通話を切る。

「長峰、水を貰えるか」

怒りを抑え続けるのには、思ったよりも膨大な体力を要する。

立ち上がるのも億劫で、部下とはいえ初対面の女性に対して失礼な態度なのは百も承知。

「ど、どうぞ……」

「すまんな」

癩癩起こす社畜でごめんね、と茶化すような胸中のまま、電話を操作して発信すれば、数コールで別の男の声がスピーカーから響かせた。

『おお、海原閣下。何か御用ですか？』

「忠野か。連日連絡ばかりですまんが、少し頼みがある」

『おや、もしやあの新兵装の増産でも？』

「違う。松岡から文書が送られてゐるはずなのだが、すでに届いてゐるだろうか」

『……金森の自供について、ですな。ああ、それについては今こちらに——』

「すぐに破棄してもらいたい」

『はっ!? いくら海原閣下の命令とて、これは必要なことでありますからなあ……う、うーむ……！ 如何な理由であれ、情報部としても、

それは、流石に……』

「今、舞鶴鎮守府に訪問しているのだがな」

長峰少佐と挨拶を交わして艦娘の様子を窺おうとしたところ、呼び出しには応じてくれたが、軍服を見ただけで過呼吸を起こす有様。

舞鶴鎮守府における運営が正常でなかったのは明らかだが、それ以外にも根深い問題がある可能性を考えていること。

手短かに伝えれば、忠野は俺にこう問うた。

『……艦娘が、泣いていたのですな』

「そうだ」

『そうして閣下は、動かざるを得ない状況であると判断なさったと』

「ああ」

『……ふうふう』

かちり、と妙な音が聞こえたかと思えば、今度は大きなため息を吐かれた。

ただ、どうにも忠野の声音は俺を落ち着かせ、怒りこそ消沈しなかったものの、愉快的現実逃避が出来るくらいには、冷静さを取り戻させた。

ごめんて忠野。我儘言ってるのは分かってるって。

でもあまつん泣いてたんだから仕方ないだろ。

社畜の我儘の一つくらい聞いてくれよナイスミドル！ な！

あまつんに挨拶して「いい風きてる？」とか言われたかった俺の気持ちも汲んでくれよ！

と、まあ、冷静さを取り戻したのか愉快的脳内は冷静ではないと言うべきなのかややこしいところだが。

忠野は数度息を吐き続けたあとに、しばしお待ちを、と言った。

声が離れたかと思えば、離れた位置から『それを貸せ』という呆れ返ったような声。

『失礼。閣下、今丁度こちらに文書が届きましたが、これは陸軍法務部の松岡中将が幾日もかけて聞き出した重要情報であります。閣下は情報部の長であるこの私に、捨てろ、と言うのですな？』

「そうだ。秩序維持のために必要であるとは聞いているが、私は、天津

風を泣かせた金森の口から、どうして、いや、この場合は、どのような泣かせたのかを聞かねばならん。聞かねば、我慢ならんのだ」
『なる、ほ、ど……しかししてこの文書も重要であるとは、ご理解していただけますか？ 国家に反逆した者の調書である』

「……ああ。私がつんでもない事を言っている自覚もある」

『つくづく、はははははは！ とんでもない事を言っている自覚がある上で、情報部を握りつぶそうなどと、はーっはっはっはっは！ 自分らは井之上元帥閣下にすら秘匿情報を開示しないのでありますよ？ 無論、海原元帥閣下においても……それなのに、くくくく、ふははっ

……！』

おおいッ！ 忠野コラアッ！ 何わろてんねん！

天津風が大泣きしたくらいに大事なんだぞ！ 金森とかいう提督のお陰で舞鶴は滅茶苦茶だ！

今しがた舞鶴を滅茶苦茶にしているのはお前だ、みたいな視線が長峰少佐から飛んで来ているような気もするけども！ それでもおま……お前エッ！

「何がおかしい」

『し、しっ、ふふ、失礼しました。いやはや、やはり全艦娘の指揮官ともなれば、断固たるものですな。実は、海原閣下よりお話を伺った新兵装について、艦政本部の明石達とどもも、迷ったのです。如何な理由とて艦娘と海原閣下の関係を動かすべきであるのか否かと』

「何の話だ忠野、私は金森と話をするのに軍規がどのと言われたから、それに即して逆らわぬように——」

『我々は海軍。国民を守らねばならぬ存在であり、語弊を恐れず言わば、艦娘は仲間でありますが、我々の主力兵器であります。それもまた、ご理解いただけますな？』

分かっている。艦娘が兵器という一面を持っていることなど、誰よりも分かっているつもりだ。

それでも、彼女らが戦う相手は——人じゃないだろう。

我慢して、一度落ち着いて、少しだけ茶化して。

そんな目まぐるしい胸中から湧き上がる想いが、喉元を突き抜けて

口から声となって放たれた。

「——いい加減にしろッ!! 彼女らは深海棲艦と戦っているのだ!! 桜と錨に砲塔を向けているわけではない!! 穏やかな海に魚雷を放ちたいわけではない!! 忠野、お前も分かっているだろう!? 彼女らが戦うべき相手を見失いかけているのが、我々海軍の責任であるト!!」

『我々海軍の責任、でありますか、これはこれは……』

「そうだッ! これでは仕事もままならん……彼女らに恰好の一つくらいつけられんで、何が軍人かッ!」

『ふふ、それでこそ、海原閣下、というべきですか。……おお、白石。こつちに来い。これを破棄しろ。どうやら松岡中将閣下は我々に違う文書を送っていたようだ』

『え、は、はあッ!? 忠野閣下、それは今、秘匿通信で送られて——』
『おや? この私が間違えていると言っているのだが、ふむ……おかしいな。海原閣下と今、電話をしていてな。どうにも中身を間違えているのではと疑われてなあ……確認したところ、なるほど、中身が違うじゃないか、と。であるからして、破棄だ』

『封を開けてもいないではありませんか! って、い、今……う、海原閣下と、お話し中と申しましたか……?』

『うむ。代わるか?』

『い、いえいえいえ! 結構であります! 自分は達者にしているとお伝えください! では、そ、その、そちらは……本当に、破棄、で……?』

『ああ、そうだ、間違えた文書をやり取りした記録が残っては陸軍法務部も面目が立つまい。記録もろともな。そうさなあ……海原閣下の仕事が終わる次第、この文書が届くのだろう。通信記録はその時刻で、開封も、その時が丁度よいと思われる』

『ではそれまで保管……いえ、破棄、でありましたね』

『うむ、金庫の奥深くにでも破棄しておけ。追って言いつける』

『……っは、そのように』

「忠野……」

『——失礼、海原閣下。どうやら自分の目が節穴だったようでありませぬ。文書の方は中身を見ず破棄いたしましたので、こちらからも一度松岡中将閣下へ送りなませ、と一報しましょう』

「……手間をかける」

『なに、手間というほどでも。しかし閣下、こちらからも一つ』
「なんだ」

「ごめん忠野……マジでごめん……今度むつまるに金平糖を持って行かせるね……」

『そちらの長峰少佐に代わっていただけますかな？』

「あ、ああ……」

「そうだこれ長峰少佐も聞いてるんだ……なんだこのクソ提督……とか思われてるよ絶対にい！ ああもう大淀戻って来てえッ！

「長峰少佐。情報部の忠野だ、話してやってくれ」

「うええええッ!? た、忠野中将閣下、ですか……!? あの、わ、私は、そのお……! うううう——お、お電話代わりました！ 長峰燈少佐でありますッ！」

長峰少佐が電話を手にとって耳に当てると、自然とオンフックが切れて会話の内容が分からなくなるも、良い話ではないだろうなと考え土下座をかましたくなる俺。

突然上司と板挟みとなるなど、社畜時代を思い出して胃が痛くなる。

あとで長峰少佐にも金平糖を上げて許してもらおう。

『長峰少佐、舞鶴鎮守府に着任早々すまん。耳の痛い事を聞いてしまいが、少佐は着任して早々とはいえ、どれくらいになる？』

「す、数週間、以上は……」

『そうだな。それだけの時間があったが、艦娘とはうまくいっておらんか』

「……申し訳ありません」

『今ならばまだ舞鶴鎮守府から異動は可能だぞ？』

「それは……!」

『嫌か？ 後方勤務になれば給与の減額はあれど楽は出来る。私から

口添えしたって構わん』

「それではあの子達は……!」

『海軍の兵器に向かつて、あの子達、だと?』

「そ、そのような言い方……! う、うう……じ、自分は、その……」

『数週間そこらで、君は艦娘の何を見た』

「……泣き顔しか、見ておりません」

『であれば——』

「だからっ! 自分は、納得、できないので、あり、ます……」

『ほう、納得か』

「せ、僭越ながら、艦娘は人を守るために蘇った艦艇であると習った記憶があります。しかし私の目には、どうしたって少女にしか見えず、海で戦闘が可能な超常的な存在であれ、私には……私、には……」

『人に見えるとも?』

「いえ……あの子達は、人じゃ、ありません……」

『ならば兵器だろう?』

「しかし! へ、兵器なども考えておりません! あの子達は、人ではありませんが……か、艦娘です!」

『……つくく、真理、だなあ』

「う、うう……申し訳ありません忠野中将閣下、真理、とは……?」

『いや、こつちの話だ。気にするな。しかし数週間も経って話の一つも出来ておらんのは問題だ。海原閣下においては大問題だぞ』

「申し訳も、ございませぬ……」

『いいや、軍務であるからには連帯である。我々全員の責任であるのは海原閣下の仰るところと変わりない。そこで、だ、長峰少佐。君に舞鶴鎮守府の運営の他、任務を追加したく思う』

「……っは」

『艦娘を想うとは何か、軍人とは何か……今一度よく考えて欲しいのだ。海原閣下を見てみればいい、飽きない人だぞ。それらを見て君が何を感じ、何を思ったか、また私に聞かせてくれんか?』

「はっ……? そ、それは一体どういう——」

『話は以上だ』

「えっ、あ……了解、しました……」

執務机の上に綺麗にまとめられた書類を見ながら、長峰少佐はきつと柱島鎮守府の執務机を見たら泡を吹いて倒れるかもしれないなとしようもない事を考えていると、長峰少佐から携帯を差し出される。

「どうやら話は終わったようだ」と受け取って耳に当てれば、ツーツー、という……切れてるじゃねえか！ 忠野チクシヨウがよオツ！

じゃあ、またあとでね！ くらい言えツ！！

電話切れてるのに耳に当てて「代わったぞ」とか言いかけたわ！

バーカ！

悟られぬよう、静かに携帯を机に置く俺。

気まずそうな顔をする長峰少佐。

地獄みたいな沈黙である。誰か役立たず社畜の俺を殺してくれ。

「……あ、あのっ」

長峰少佐が口を開いたと同時に携帯電話が鳴り響く。

俺が顔を向けるも、少佐は「いえ……」と顔を伏せてしまった。

タイミング考えろよ電話あ……と画面を見れば、松岡の二文字。

松岡てめえツ！ 小難しいこと言って金森を遠ざけやがって！

社畜をなめたらどんな目に遭うか教えてやっから覚悟しろイツ！

「海原だ」

でも冷静にね。カームダウン、カームダウン。

俺が冷静でいると、周りが冷静じゃなくなるというのを、今日、学んだ。

『閣下！ ま、まさか情報部を握りつぶすなど……重大な軍規違反でありますぞッ！』

待って待って、待ってって松岡。違うて！

軍規違反にならないように、文書をもう一度送りなおしてもらおうと、ね？

その間に俺が金森と話そうが、まだ文書は届いてないんだから問題無いだろ!?

こういうの会社でも何度かあったし！ 島風悪くないもん！

うーん、島風は本当に悪くないどころか関係ないね。まもるが悪い

もんね。

「文書が届いていないのならば、また作成すればいいだろう。その間に少し金森から話を聞くだけだが……問題あるか？」

組織というものは体裁が必要。もちろんのこと、ルールだって必要である。

それらを守り、維持する事こそが運営には肝要であるが、例外がないわけじゃない。

その例外をいくつも作ってしまうと組織そのものが瓦解してしまいかねないため、ルールを曲解し、時折こうした搦め手を用いるのだ。社畜の心得だぞ、松岡。

そして俺は心を鬼にして、責任転嫁する。

最低最悪の屑提督である。でも艦娘が泣いてたからノーカンでオネシヤス！

今度柱島に来たら遊ばせてやつから！ な!?

うーちゃんの悪戯を味わわせてやつから！

その時は是非足元に気を付けてくれよな！ 紐で転ぶとか漫画みたいなことになるぜ！

大井つちにチクればバレてケツをひっぱたかれる卯月も見れるぞ！

「軍規に違反はしていないが。松岡、お前が送る文書を間違えていたのだろうか？ 忠野に聞けばそのように答えると思うが」

『……新見のように、見逃してはいただけないのでしょいか』

「新見？」

誰ですかその人。知らないよそんなの。

「見逃すもなにも、私は金森から話を聞きたいだけだ。舞鶴から巢鴨へ移動してはこちらの仕事が滞るだろうか」

俺の仕事は舞鶴で艦娘と遊——違う違う。

この舞鶴鎮守府で金森が不正のために滅茶苦茶にした記録を正しいものへ戻すくっそ面倒な仕事をせねばならないのだ！ 帰ってうーちゃんと遊びたいっぴょん！ って気持ちを押し殺して柱島を出て来たんだからな！ 早くしろ松岡アツ！ 大淀にチクってやろ

うか!? ああ!?

『ん、んー……! ほ、本当に舞鶴におられるのです、よね……? 突然、その、収容所に来られるような事など……!』

あーもう面倒くせえなあお前もよお! 何で舞鶴にいる事を疑われてんだ俺!?

ちつ、と思わず舌打ちをしつつ携帯電話をずいっと長峰少佐に押し付ける。

長峰少佐! 言ってやってくださいこの分らず屋に!

「お、お電話代わりましたっ! 舞鶴鎮守府の長峰燈少佐でありますっ!」

『長峰少佐……ほ、本当に舞鶴におられるのだな!』

「は、はあ……そうですが……」

『舞鶴にいなながら情報部を電話一つで握りつぶすなど……どこの誰が思いつくか、そんなものっ! あーもう! 陸軍法務部中将の松岡忠だ! もういい、分かったから海原閣下に代われ!』

「ひうつ!? しよ、承知しました……」

……ごめんね長峰少佐。金平糖を倍にして伊良湖の最中もつけるね。

携帯電話を改めて受け取れば、諦めに声音が弱くなった松岡が言った。

『新見然り、自分の部下に慈悲をかけていただいた御恩を忘れたわけではありません……電話のみです。いいですね』

「最初からそう言ってるだろう」

俺まで溜息出ちやうよ。あと新見って誰だよ。

* * *

大淀と天津風は今頃何をしているだろうか、と電話口に金森が出る間、ぼけーっと執務室を見回していた。

柱島鎮守府よりも豪華な室内には、俺が使っているキャビネットよりも高級そうなものが並んでいる他に、コーヒーマーカーや勝手に

使っちゃったウォーターサーバー。

最新式であろう綺麗なエアコンに調度品がいくつも壁に並んでいる。

柱島泊地の執務室を見せてやりたい。紙とファイルしかない。

あとこのあいだ第六駆逐隊がお絵描きした画用紙しかない。折り紙とか。

どうあがいても見せた瞬間に「何やってるんですか海原さあーん」とフチなし眼鏡の鋭利な角で喉元を搔つ切られるだろう。

長峰少佐は新人社員が如き初々しい様相だが、これでも俺より大きな拠点任せられている軍人である。女性だからとなめることなかれ。むしろ艦娘と同じく女性こそ恐ろしい存在なのだ。お母ちゃんとか怖いだろ。それと一緒にだ。

癩癩を起しかけて何とか我慢したが、結局無関係の忠野というオッサンに向かって怒鳴り散らしたのだから俺の評価は最低最悪に違いない。

挽回すつから待ってるよ少佐。あまつんの笑顔を取り戻してみせるぜ！

と、気合を入れて髪をぐつとかきあげる。

そういえば軍帽を天津風に渡しちゃったままである。

今頃俺の頭皮の匂いにやられているかもしれないので、仕事を迅速に進めねばならない。

『閣下、今、金森と代わりますが、スピーカーにさせていただきますよ』

「やつとか」

はあ、と本日何度目かも分からない溜息。

それから聞こえて来たのは、ねばついた声だった。

『……貴様が海原か。やつと声が聞けたな』

天津風を泣かせるばかりか舞鶴の艦娘を泣かせた張本人に慈悲は無し。

だが理由を訊くまでは、穏やかに、出来るだけ、静かに、と心を落ち着ける。

「初めまして、金森殿。私は海原というものだ。早速で申し訳ないの

だが、金森殿にいくつか聞きたい事があってな」

抑揚なく言葉を紡げば、向こう側から空気の流れるようなノイズが数秒。

「……金森殿？ 聞こえているか？」

『つ……ふ、ふう、ふう……聞こえて、いる……何を、聞きたい……』

息遣いの荒い金森の声に、うげ、と顔を顰めるも、長峰少佐に分からないよう、座っている椅子を半回転させて背を向ける。

きい、と椅子のきしむ音がやけに響いた。

「どうした。体調でも悪いか？」

『ひ、ひひつ……生かさず殺さず、勝った気か、なあ……！』

なんの話だこいつ。

「なんの話だ？ んん、すまない、こちらにも仕事があるので手短に答えてもらいたい。この際、金森殿が舞鶴鎮守府でどのような不正をしたかなど、気にはしていないのだ」

『ひつ、ひつ、気にはしていないと、きたか……ははは……！』

「起こった事はしかたがないだろう？ 壊れたものは直せばいい、奪われたなら取り戻せばいい、襲われたのなら退ければいい。だが……」

金森に使う時間が惜しい、と俺はありとあらゆる感情を込めた声で言った。

「……艦娘が流した涙は、どうすれば元に戻るのだろうか？」

『……』

驚くことに、本当に数分間、沈黙が続いた。

答えを待つ俺、黙ったまま直立不動の長峰少佐、電話の向こうから心配すら窺えない金森に、松岡。

そうしてやつとのことで、低く、ざらついた金森の声。

『——殺せ……俺を殺せエツ！』

怨嗟の声は受話口を突き破るようで、思わず携帯電話を耳から離す。

「そのようなことはしない、私はただ話を——」

『取引だ海原ッ！ 私が話せば殺すと約束しろッ！』

「ええ……」

何言つてんだよオツサン……やだよ……。

「それは出来ない。だが話してもらおう」

『~~~~ツ！ 海原ああ……ツ！』

「そういう相談は松岡にしてくれんか。私にも仕事があるのでな、そういうことは松岡に一任したい」

『こうなれば……おま……を……』

『何を言っている金森。聞こえんぞ。閣下に聞こえるように話せ』

「……」

『執務室の近くに、資料室が、あるだろう……』

『金森、貴様何を笑って——』

「ああ、あつたな」

ようやく喋った金森の言葉通り、大淀に案内されて執務室に来る時にそのような場所を見た記憶があつたので肯定する。

立ち上がった俺は、それが天津風が泣いていることとどのように関係しているのかを考えながら執務室を出ようと歩を進めた。

後ろからついてこようとした長峰少佐を手の平を向ける事で制止し、耳から携帯電話をするりとずらして言う。

「私が行ってくるから、ここで待っていてくれるか。気になる事があれば大淀が戻った時にでも伝えればいい、大体解決する」

天下の大淀様だからな。知らない事なんて無いだろう。多分な。

「し、しかしっ」

「心配するな、仕事をしてくるだけだ」

執務室を出ながら、金森の言う資料室へ足早に向かうと、再び問う。

「資料室の前まで来たが、ここに何がある」

『全てだ、お前達が俺に聞きたがつていた全てが、そこにある……ひ、ひ……』

「天津風が泣いていた理由が、ここにある、と？」

『ああ、そうだ……あいつがそこを覚えていれば、の話だがなあ……誰も覚えちゃいないさ……だあれも……』

意味深長な気持ちの悪い笑い声を抑えるが如き金森に不信感を抱

いたこの時点で、俺の運命は決していたのかも知れない。

資料室に入ると、小学校や中学校の頃、指折り数えられるくらいにしか通わなかった図書室程度の広さの室内にずらりと並ぶ棚に圧倒され、う、と声が出そうになる。

この中から探し出せとでも言うつもりか？

しかし金森からの指示は、不思議なもので

『番号が振ってあるだろう……資料はまだ残っているか？』

「ああ、大量にあるようだな」

『つひ、ひひ、そうかそうか、ならお望みのものはすぐだ……十二番の棚にある、特別拘禁室とあるファイルを探せ……』

「……特別拘禁、特別拘禁……と、と……たあ、ち、つ、て……これか」

頭文字順にならべられている灰色のファイル群の中から一つ抜き出して開いてみれば、なんてことはない。どの艦娘が命令違反をしたのだの、出撃拒否したのだのと書いてあるくだらないものだった。嘘かどうかなど、気にするべくもない。

片手でぱらぱらとめくりながら金森へ無然とした声を上げる。

「……なんだこの、これは」

『そのまま、それを持って、入り口から左手の壁にある二十八番の棚へ行け』

「左手……執務室側か？」

『ああ、くひっ……そうだ……』

ピ、という電子音。

は？ と驚く前に、棚が後方、壁へと吸い込まれていく様をぼかんとした顔で見っていた。

「金森……これは……」

『行け海原……お前が知りたがってたものが全部あるはずだ……ほら、行け……』

『何を言っている金森！ 海原閣下、何かあったのですか？ 閣下？』

「こんなくだらんものを、作っていたのか、お前」

『閣下……？ お答えください閣下！』

松岡の声を受けながらも、俺の足は自然と動き出す。

この世界は現実なのだを受け入れてようやく慣れて来たところに、まるでゲームの隠し要素とばかりに開かれた地下への道。

不思議な事に、大仰な仕掛けのくせに、音が殆どしなかった。

「……確認してくるから、待っている」

何故か、行かねば、と本能が告げる。

明かりのひとつもない階段を数段下りると、背後でガチンと音が聞こえ、持っていた携帯電話からノイズが走り始める。

『ひゃ、ひゃあははは！ ひ、ひひっひひひひっ！ ザザツ——俺を殺しておけば——もう逃げられ——ザーツ……ザツ……』

『金森貴様、なにを笑っている！ ……閣下？ ノイズが……応答を

閣下——ザザツ……』

それから、ツ、という通話の切れた音。

背後を見ても暗闇、前方を見ても暗闇。

「……ふむ」

ゲームじゃないんだからさ。ね。

携帯電話を操作してカメラのライトを起動し、頼りない明かりで足を照らしながら、汚れた石の階段を下りていく。画面には圏外の文字。

ざりり、ごっん、さり、ごっん、と足音が壁や天井に吸い込まれていく。

そうして階段を下りた先にずらりと並ぶ牢に、くらりと眩暈を覚えた。

「金森、嘘だろ……艦娘に、お前、何を……」

誰にともなく、声に出さずにはいられなかった。

どす黒い染みがいくつもある鉄格子や床の汚れをライトで照らしつつ進む中で、黒いきんちやく袋のようなものが落ちてくるのに気づいて、しゃがみ込んで拾ったその時のこと。

「……う、う……だ、れ……？」

ボロボロな姿で横たわって、薄目を開いてこちらを見る艦娘がいた。

声を、声をかけねば、なにか、声を。

施錠されてもいなかった扉を開いてその艦娘の傍に片膝をつき、静かに言う。

「海原鎮……提督だ。聞こえるか」

その艦娘は、ぽろ、ぽろ、と涙を零しながら、黒く汚れた両手で軍服の裾を掴んだ。

今にも落ちてしまいそうなくらいに弱弱しい力だった。

俺は根拠が無かろうとも言わねばならないと口を開く。

「ごめ、なき……も、っと、頑張ります、から、捨てな、い、で……」

「私はな、お前を助けに来たのだ——まるゆ」

教え⑥ 【艦娘 side・まるゆ／鎮 side】

仮称イ号特種艇、正式名称三式潜航輸送艇。
通称、まるゆと呼ばれる潜水艦。

この世界で目覚めたのは、大型艦建造用ドックと呼ばれるカプセルの中でした。

現在日本は未知の脅威と戦っている、どうか力を貸して欲しい。

誰に言われたのだったか、私はまた役に立てるのだと喜び、元々陸軍の潜水艦だったということもあって新しい体制となったと言われる陸軍へ籍を置くこととなりました。

陸軍の教育隊に編入され、私が過去から蘇った存在であることや、あの大きな戦争の顛末、私が辿った記憶の最後から伸びる歴史についてなど、多くを学びました。

鉄の身体では話を聞くというより、知っているという方が正しいでしょうが、あの頃の私は四百隻近くの建造計画があったそうで、しながら実際に建造されたのは三十八隻のみである、なんていうことも学びました。偶然にも、私はその三十八隻目であるというではありませんか。

あの凄惨な過去を再来させないためにも、深海棲艦という脅威を退ける一助とならねばならない。肅然として訓練に励みました。いっぱい、頑張ったつもりでした。

しかし私の頑張りというものは陸軍のみならず海軍にとっても期待にそえるものではなく、近海ならばともかく、遠洋で戦う艦娘の方々への物資輸送艇としての能力は著しく低いと言わざるを得ませんでした。

理由は様々にありましたが、過去のように幾日もかけて輸送するまでに、艦娘の戦線はもたないのだそうです。私の速力が、仇となっているのです。

正直なところ、学んできた分、私も予想していたところでもありませんでした。

過去の記録をもとに艦娘用に開発された機銃を装備させようにも、

私には重くて、運ぶことはできても使用はできず。陸軍の将官であられる壮齢の方が呟いた「戦闘艦艇ではないからな」という残念そうな声が、今でもはつきりと思い出せます。

私が生まれる前も、生まれた後も、建造ドックからは新たな艦娘さんたちが大勢生まれて日本海軍の拠点へと送られ、日々、深海棲艦と呼称される脅威と戦っています。

その間、訓練も一通り終わった私を眠らせてばかりではいられず、陸軍拠点を転々としていた私達は持てあます存在となってしまい、試験的にでもいいからと海軍へ出向する事となりました。最後に建造された私が、今度は一番最初に海軍へ出向く事となったのです。

日本海軍、舞鶴鎮守府へと出向した私の隊長——これはのちに、提督と呼ぶべきだと何度も怒られてしまう癖なのですが——は、金森殿という方で、艦娘の方々と数多の深海棲艦を退けた知将と謳われる御仁でした。

まるゆもお役に立たねばと、言いつけられたことならば何だってしました。

身の回りのお世話から、秘書の真似事のようなこともしましたが、のろまと言われてよくお叱りを受けました。

否定は、出来ません。まるゆは何をするにも遅いですから。

潜るのだから下手くそですし、昔、木曾さんに「お前潜れるのか？」なんて言われたり、知らない船に敵だと思われて体当たりされたことだってあります。

でもそれは私が不出来で、私が悪いのです。

そういうのには、慣れっ子でした。

潜水艦が、子、と言うのもおかしな話ですけれど。

だからお叱りを受けても、頬を張られても、絶対にくじけないで頑張るんだって、私はたくさん任務を引き受けました。

金森提督は海軍におけるまるゆの上官です。言われたことは絶対で、どんなことでもやってみせますと言いました。

報告書だって、分からないながらも艦娘の皆さんのをまとめたりしていました。

それもいつしか、別の秘書をつけるから要らないと言われました。ならば別の任務をくださいと言ったのが、悪かったのでしょうか。

金森提督からすれば越権のように思えたのかもしれませんが。

その日を境に、私への風当たりはお叱りと言うには強すぎる様相を呈しました。

頬を張られるだけでなく、拳を握るようになり、拳骨を頭に食らうばかりか、高級そうなガラスコップを投げられるようにまでなりました。

越権と言われたらそれまでで、私が僭越にもさらに任務を求めるなどという真似ができるはずありません。下がれと言われたら居室へ下がるだけです。

命令を与えられないのならば、命令が与えられるまで別の何かをしなければなりません。陸軍に籍があれば、海軍に出向している海軍の艦娘でもあるのですから当然です。

訓練に参加させてもらえるようお願いして、組み込んでもらったりして日々を過ごしました。

それから一カ月か二カ月経った頃でしょうか。

金森提督が鬼の形相で、その日の訓練上がりだった私のもとへきて、髪をひつつかみ地面へ引き倒しました。

『誰が貴様に訓練を許可した！ 言ってみろ！』

その声に、一緒に訓練していた艦娘の皆さんも私も縮み上がりました。

痛がる暇もなく、そこから数度背中を踏みつけられ、昼食だったものが吐き出され、咳き込む私に、さらに金森提督は怒鳴りました。

『誰だ！ 言え！ 連帯責任だ！』

艦娘は丈夫です。ちよつとやそつこのことでは傷つきません。

それは陸軍で訓練していた頃に学び体感したので確かでしたが、私達艦娘は、どうしてか、直接人に手をあげられると、簡単に怪我をしてしまうのです。

人が手に持った武器では、傷つきません。痛くもかゆくもありません。

金森提督に投げられたガラスコップが顔で割れようとも、傷の一つもつきません。

けれど、ごつごつとした手で頬を張られると、痛いのです。

建造ドックで不慮の事故が起きた際、ドックを補強するための建材が私めがけて落ちてきたりしましたが、腕に当たろうが足に落ちようが、顔にぶつかろうが、傷の一つもつきませんでした。

大本営の明石という工作艦のお姉さん達は血相を変えて修復材というものが入ったバケツを私にひっくり返したりしていましたが、後から聞くに、心配だったから、という優しい理由だったことに驚きを隠せませんでした。

金森提督に殴られると、とても、痛いのです。

胸がぎゅつとして、涙がたくさん出て、立ち上がれなくなってしまうのです。

ごめんなさい。まるゆが、全部悪いんです。

そうやって金森提督に謝罪しました。

そうしなければ、私以外に頑張っている艦娘さん達が叱られてしまいます。

まるゆが訓練に参加したいと我儘を言っただけで、彼女達はそれを聞き入れてくれただけなのですから、それだけで連帯責任だと殴られてはたまったものではないでしょう。

嘘を言っているわけでもありませんから、金森提督には「まるゆが訓練に参加したいと言ったんです」と正直に申しました。

それでも金森提督の怒りは収まらず、何度も、何度も、私を踏んづけました。

後頭部を強く踏まれ、がっんと鼻をぶつけた際に、息が出来なくなつて、まるで潜航した時のようだと思いました。

海の中も、胸がぎゅつとして、息が出来ないですから。

それよりもなによりも驚いたのは、まるゆの鼻から、血が出たことでした。

当然でしたが、自分からそんなものがと思うと、やはり驚くものです。

まるゆの血は真つ赤でした。いつか見た炎よりも、真つ赤でした。それに続いて、新しく秘書になったというお姉さん、天津風さんの声が聞こえました。

『私が訓練参加を許可したんです！ 私がい！ 私がい——！』

『言うことを聞くようになったかと思えば、貴様も勝手なことを！』

この愚図め！ 貴様は！ 黙って！ 敵を沈めていればいいんだ！

言うことを！ 聞いてな！』

決して海軍の訓練を軽んじているわけではありませんが、それにしただけで陸軍の訓練はともつらく、厳しいものでした。

まるゆは、痛みに強いのです。

だから、天津風さんが私を庇って殴られているのが嫌というのもあつて、また、我儘を言ったのは私だと叫びました。

金森提督は私の髪をまたも掴み、立ち上がって追いつがる私を引きずって執務室へと連れて行きました。天津風さんが何度も謝っていますが、それでも、止まりません。

そうして、執務室に着くや否や、執務机の引き出しから黒い布を取り出して、私の頭の上からそれを被せました。

より一層強い、がん、という衝撃が走りました。

私の記憶は、それから、真つ暗です。

「……そうか」

助けに来たという海原と名乗った御仁は不思議な人でした。

暗くてよく見えませんが、心が落ち着くような優しい声でした。

事情を話せと言ってから暫く、長い時間をかけて支離滅裂に話す私の言葉を聞き逃さないようにじつと片膝をついたまま、私の手を握っていました。

どす黒く乾いた私の血で軍服が汚れたことも気にしていない様子で、ただ、来い、と言ってから地面に座った私を抱き上げて、それで、「痛かったな」

そう、言いました。

「いた、か、った、です……」

どれくらい、ここにいたんでしょうか。

「つらかったろう」

「わ、か、りま、せ……で、も……」

どれくらいぶりに、声を出したでしょうか。

「ま、まる、ゆは、まだ、役に、立ちたい……です……っ」

「そうか、そうか」

もう大丈夫だ。

私を抱き上げたまま座りなおした海原提督は、自分をまるゆの新しい隊長だと言いました。

隊長というのも変な話です。ここは陸軍ではなく、海軍なのですから。

そんな私の考えを見透かしたように、海原提督は——海原隊長は、言いました。

「その方が呼びやすいだろう?」

たったそれだけのことでしたが、隊長の声は私にはどうにも、痛かったのです。

言い訳ではありません。本当に、とても、痛かったのです。

心臓がぎゅっとして、息が出来なくて、苦しくて、苦しくて、灰色の香りしかしなかった暗闇が、まるゆを抱いていた海みたいな香りに満たされたのが、どうしようもなく、痛かったのです。

「あ、あ、うあ……ああっ……!」

涙が、たくさん零れました。

隊長は笑いながら、ハンカチじゃなくて悪いな、なんて言いながら手でまるゆの目元を拭い、鼻元を拭ってくれました。

汚れますとも言えません。何せ、こうやって考えられているのなんて頭の中だけで、私の身体は初めて言う事を聞いてくれなくなっていたのですから。

どれだけつらく苦しい訓練でも、動かなくなった足を叩けば自然と前へ前へと進んでくれました。

上がらなくなった腕も、叩けば自然と上へ上へと動いてくれました。

でも、海原隊長の腕の中では何もできませんでした。

隊長に抱かれて、筋張った体に身を寄せて、胸に顔を埋めて大きな声で泣くことしか出来ませんでした。

隊長は私に問いかけます。

「役に立ちたいのか？」

泣きながら頷くと、隊長は言いました。

「じゃあ、私と一緒にいてくれるか？ 一人じゃ心細くてかなわんだ」

もう一度頷くと、隊長はまた、優しい声で返事をしました。

「それは助かる。まるゆがいれば百人力だ」

慰めるためだったのでしょうか、それでも、そのお言葉だけで、私は、まるゆは——。

ふと、薄明かりが消えました。

私を抱く隊長が、私の背で何かを操作していて、それから明かりが消えたのだと認識した時、いつもならば何とも思わなかったのに、私は怖くて、隊長へしがみ付いてしまいました。

「隊長……暗い、です……たい、ちよ……」

「暗いな」

「怖く、ない、ですか……」

「ああ、怖くない」

だってまるゆがいるからな。

そんな言葉を境に、瞼が重くなってきて、私は沈んでしまうのかと思つて驚いて目を開くのですが、陸でどうやって沈むんだと思つたら、また瞼が重くなり。

幾度か繰り返し返しているうちに、それが眠気なのだと気づいた私は、隊長の手前眠つてはだめだと言葉を紡ごうと口を開きます。

「怖い、です、よ……ずつと、ずつと、ここで、一人、で……」

長い間ここに居た私が、どれだけ怖かったことか。

一人にさせるものかと言おうとした私の声を遮り、隊長は静かに私の背を撫でました。

「一人じゃないさ」

「やっと、来て、くれた、のに……また、人の、役に立てるって、思った、のに……」

「少し眠るといい。目が覚めたら——」

「めが、さめた、ら……?」

「一緒に飯を食おう。温かい飯を」

そこから、私の記憶は、真っ暗です。

前と違うのは——海の匂いと、ちよつとだけ汗の匂いがしたこと。力強い鼓動が、耳元にあったこと。

* * *

「……寝たか」

規則正しい吐息が寢息であると安心したのは、まるゆが黙って暫く経ってからだだった。

まるゆを地面に寝かせるわけにもいかず、軽すぎる彼女を抱いたまま立ち上がって瞬きを数度すると、暗闇でもある程度は目が慣れてきて、どこに障害物となろうものがあるかが分かるようになった。

地下室は単純に牢が並んでいるだけにあらず、現在俺の立つ最奥の牢の他にいくつか並んでいる別の牢と、転がる椅子や、古びたテーブルらしきものの残骸があった。

「明かりをつけたら……うーん、目が覚めてしまうかもしれないなあ……」

明らかに閉じ込められたと分かっているながらも、まあ、愉快的胸中である。

「脱出ゲームとか苦手だったからな……」

そんな一言から始まる、地下室探検は数分で終わった。

だつて狭いもん！ と心の島風、ご立腹である。

端から端まで歩いて三十数歩。距離にして三十メートルに満たない一室、暗がりでは全貌は明らかではなくとも、おおよそ二十畳程度の広さであると考えられる地下室には、転がっていた椅子とテーブル以外にめぼしいものなど一切無かった。

トイレもなければ、地下なのだから当然窓すらもない。

辛うじて通気口らしきものがいくつか取り付けられているのが見えたが、そこから音が聞こえてくるわけでもなく、風が吹き込んでくるわけでもない。

じめじめとしていて暑いことを除けば、過ごすのに問題はないと思えるくらい。

過ごしたいわけじゃないが、しばし過ごすしかない。

椅子とテーブル以外に道具の一つも落ちてない脱出ゲームとか難易度エクストリームか？　と言いたくなるが、悲しいかな、金森がファイルを持たせてここに俺を誘導したのだから、出る時もファイル持ってたら行けるだろ！　という目論見すら失敗した。そりゃあそうですよ。馬鹿かと。アホかと。

そんな単純なことでは出られたんじゃない意味深長に笑った金森は何だったのだという話である。

金森が何を考えているかなど知りたくもないが、これは要するにあれだろう？

不正調査されるくらいなら艦娘にやべえことしたってバレる前に閉じ込めたるわ！　ハッハアア！　という見え見えの罠に俺が引つかかったと、そういうわけだろう？

うーん、この、うーん……。

「……まいったな」

まいったなあ本当これ……。

仕事を放りだした挙句に艦娘へ考えられない暴力をふるっていたという事実。

腕の中でスヤスヤと眠るまるゆから真実が打ち明けられた今、どこのゲームが如き大袈裟な仕掛けや地下室なんかを作って現実逃避しながらハードプレイをしていたであろう金森に募るイライラは仕事中のストレスを凌駕し、怒髪衝天といったところ。

でも静かなのはどうしてかって？　まるゆちゃんが寝てるからだよ起きたらどうすんだ！　いい加減にしろ！

「……」

いい加減にしろってんだ、ほんと。

「……クソツタレめ」

いい加減に、してほしい。

マグマのような怒りが湧き上がり、顔が熱を帯びていく。

『まーもる、シワ、できちやうよー?』

奥歯を噛みしめてまゆるを抱き寄せる俺にかけられる声に顔を上げれば、軍服のポケットから顔を出した妖精——むつまると目があつた。

「お前——」

『わらってっていうときじゃないけど、でも、ね?』

「むつまる……」

『わたしは、かっこいいまもるのほうがいいな!』

「俺と一緒に閉じ込められたのかよ……マジかよ……」

『えっ!?!』

妖精ならば不思議パワーで何とかできるかもしれないとか一瞬だけ考えてたのに! 考えてたのにこいつ! あつさりとポケットなんかから出てきやがって! チキシヨウめエツ! 大っ嫌いだアツ!

嘘です。艦娘も妖精も大好きです。

『ま、まもる? え? いま、わたし、まもるを元気づけてあげようとしてたよね? なのに、なん、ええ……?』

「妖精の力で扉とか見つけられんのか……」

今の頼みの綱が一瞬で無に帰したんですけど……。

『ごおんな暗い部屋でなにを期待してたつていうの!?! わたしだつてこわいのにー!』

「暗いのが怖いのか?」

『そうだよ? だからまもるに守ってもらつて、一緒に励ましあつて……』

「いっつもポケットの中にいるんだから慣れたもんだろ」

『……もう! ばかあ!』

鼻っ柱を殴られて声が出そうになるも、まるゆから「う、うう……」

と声が漏れて慌てて声をひそめる俺。

「まるゆが寝てるんだぞ！」

『むつまるのこともきづかって!』

「お前に何を気遣うっていうんだよ!」

『暗くて怖いだろうが、大丈夫だぞ、この俺がついてるからな……つて言って金平糖を食べさせて!』

「金平糖食いたいだけじゃねえかよ……」

『最中でもいいよ?』

「流石に持つてきてないですう……」

地下牢でしようもないやり取りを繰り返す俺とむつまる。マジ何やってんだ。

『……そっちのままものほうが、わたしはだいすき。ふふ』
「……」

溜息を吐いてあきれ俺の顔を見て笑うむつまる。

分かっているよ、とぶつきらぼうにしかいえない子供じみた俺だったが、むつまるが俺の中に渦巻くどす黒い感情を霧散させてくれたことなど、認めたくなかったのだ。

気恥ずかしいのと、情けないという感情がせめぎあっていた。

そうして、それらを誤魔化すように口にする。

「……今寝たら怒る?」

『うっそでしょまもる』

「マジマジ。本気と書いてマジ。ここ最近疲れてるんだよ本当に。書類に追われるどころか出張まで重なって、お前達と大淀に手伝ってもらっても追いつかないくらいには仕事してるしさ……少しだけだから! な!」

『ええええ……』

「お前くらいじゃないか、俺の前も今も見ていて知ってるなんて。大好きな俺を少し休ませてくれてもいいだろう?」

『自分で言ったら意味ないじゃない!』

「じゃあどう言えればいいんだよ」

『う、ううう……わかんないけどお! で、でも、皆心配するよ? こ

こじや連絡取れないし、それに、むつまるもお外に連れて出てあげられないし……というか、むつまるも、出られないし……』

妖精が出入りできない部屋ってなんだよ。

柱島泊地ではいつどこにでも出現するような妖精である。食堂に行こうが廊下を歩いていようが倉庫整理しながら書類を書きこんでいようがちよつかいをかけて邪魔をしにくる——お仕事を手伝いに来てくださるような妖精が出られない部屋など、想像できない。

あ、別に睨まれたわけじゃないです、本当です、むつまるこつち見んな。

『変なこと考えてないでしょうねえ……』

「……変な事ではないが、妖精さえ出られない部屋となれば、どんな構造なのかと気になってな」

大丈夫です。これでもまもる、海軍元帥です。冷静です。

すみませんまた嘘つきました、ちよつと冷静じゃないです。

『わかんない、けど……すぐく嫌な感じがするの……。うーん、と……あ、そうだ！ これ！ これね、お外につながってるかも！』

ひゅん、と飛んでいったむつまるは、通気口の付近をふわふわと漂いながら一つ一つ金網越しに向こうを見つめて言う。

「そこから出られそうか？ 風の流れは感じられんが……」

『外して！ 中を見てきてあげる！』

「いや、今まるゆが腕に——」

『むつまるが外せると思ってんの？』

なんでお前が高圧的に要求するんだよ。おかしいだろ。

でも逆らえない。提督だからね、仕方がないね。

まるゆを起こさないよう、そつと片腕に重心を傾けてから右腕を伸ばし、さして高くない天井付近に取り付けられた金網へ指を引っ掛ける。

引っ張るように動かしてみたり、スライドさせるように動かしてみても、よく見れば四方をネジ留めされていて外せそうになかった。

「ネジ留めがきつちりされてて、無理だな……まあ、道具があれば簡単に外せそうではある」

『じゃあ——！』

「なあああむつまるうううう……後で頑張るから、マジで、ほんつとうに後でめっちゃ本気で頑張るからちよつとだけ寝ていい？」

チャンスは今しかないんです、とばかりに言う俺に絶望した表情をするむつまる。

分かっているとも。むつまるこそ言いたいのだろう。

お前それマジで言ってるのか、と。

日本海軍、全艦娘の指揮官たるこの海原鎮、残念ながらマジである。

『大淀さんも心配してるかもしれないのに？』

天下無双の大淀様をなめてんのか？ 大淀様の手にかかれば俺の居場所なんざ一瞬でバレるに決まってるんだろ。

いや言い方が違うか……そう、俺をすぐに見つけてくれるはずだ。

「大丈夫だ、多少心配はかけるだろうが後で謝るとも。それに大淀の他に長峰少佐だっているし、俺一人が多少サボったところで、見つかったらお説教されるくらいだって」

俺を閉じ込めたのは金森なのだから、金森が怒られたらいい。

むしろ金森が怒られて俺は被害者なんだと言い張ってやる。

艦娘を虐げていたとは言葉に聞けど実感の薄い俺だったが、まるゆの有様を見ては擁護のしようもない。擁護する気も一切無いが。

「金森の不正についてもきっちり調べさせなきゃならんしな。この部屋も、まるゆも、見てみる。こんなものを一気に見せられてどうしろってんだ」

『……あ』

「お？ なんだよ」

俺を睨みつけていたむつまるだったが、声を漏らしたかと思えば、まるゆと俺を交互に見つめた後に、盛大な溜息を吐き出した。

『はああああ』

「おう待てよ。なんだよ言えよ！」

『……まるゆちゃんの怪我はもう大丈夫だと思う。帰ったら一応入渠させてあげてね？』

「お、おう、そりゃまあ……」

『艦娘だから、怪我は治るよ。あつという間に治っちゃうけど、でも、それは……まもるじゃなきや、治せないもんね』

「——うむ。責任をもって、私が治すとも」

艦娘が怪我なんて考えられません！ 帰還後即入渠！ 修復バケツも辞さない構えです！

『なーんかすれ違ってる気がする』

『私とむつまるが？ ふふ、そんなことはないさ』

『だってまもるバカだし』

『おいお前』

『もう寝ちやえバカー！ バーカーバカー！』

『おおい!? 言い過ぎだろー!』

むつまるは通気口付近から一直線に軍服のポケットへ飛び込み、もぞもぞと動いたかと思えば、ひよこつと顔を覗かせて言った。

『帰ったらお仕事いっぱい溜ってるぞお』

「……起きたら頑張ります」

『んー!』

しゅ、と音がするほど素早く引っ込んでいくむつまる。

そこから、ぱき、ぱりぱり、ぽり、と——

『頼むからポケットの中身べたべたにしないでくれよ、なあ』

『んー、もご、もがー、わかつはー』

「……」

時には諦めも肝心なのである。これは敗北ではなく戦略的静観だ。

俺はまるゆを抱えなおしてから、最奥の牢へ戻る。

他に眠れそうな場所もない。

この人生において牢屋で眠る体験をするとはと頭の片隅で考えながら、起きたらどうしてやろうかと考えながら。

『金森の不正は、これだけじゃないんだろうな……』

謝罪させ、殴って終わり！ と呉のように出来ればどれだけ楽だったことか。

それらが正しい解決法でなかったのは確かであるにしろ、この様子では金森を艦娘の前に立たせることは、筋ではないだろう。

俺は人を裁けるほど出来た人間じゃない。

海軍の元帥として肩書が大仰なだけであって、部下の未来を決するほどの権力が手に入ったなどと微塵も思っていないし、そうであるべきとも思わない。

ならばどうする事が正しいのだろうか。いや、正しさを求めて継るべきなのだろうか。

とりとめのない思考がまどろんでいく。

瞼を開いても閉じてても暗闇がそこにあるだけで、ふと、船が沈む時はどんな感じなんだろうなんて考えた。

とん、とん、と幼子をあやすようにまるゆの背を撫でながら、考えた。

「……約束したからな」

とにもかくにも、これはチャンスである。

仕事疲れに任せて、思考が停滞し、ゆっくりと沈んでいくのを感じながら、寝言のように口にした。

「もう、だいじよ、ぶ、だ……起き、た……ら……一緒、に……帰ろう、な……」

胸元に聞こえるまるゆの寝息が揺れる。

俺の意識は、そこで静かに溶けていった。

「まるゆの……隊長……海原、隊長……」

教え⑦ 【艦娘 Side・大淀】

天津風を連れられた私は、元舞鶴鎮守府所属だったことに加えて前日から視察を重ねていたこともあり、勝手知ったる我が古巣だと懐かしさを覚えながら言葉を紡ぐ。

「私がいた頃は、天津風さんは教育部隊にいましたよね」

「……はい」

彼女はまだ落ち着かない様子で泣きはらした重たそうな瞼をぐしぐしと擦り、不安げな顔を見せる。

自らの所属している鎮守府以外で軽巡洋艦大淀がやってくるなど、凡そが大本営からの任務通達やそのときどきの計画進捗確認だったりと、良い話は少ない。

いくら私が舞鶴鎮守府の所属であって顔を知っている仲間であっても、元帥でもある海原提督に伴われて来るなど良い話のほすがないと考えているのだろう。

海軍元帥となった彼の素性は荒唐無稽が過ぎるもので、元々は軍人でもなければそういった戦場の知識など学校で習った程度のサラリーマンだから、緊張する必要はありません。

少し働き過ぎるくらいがありますが、それは私達艦娘のことを想つてのことで、ここに来たのも仕事をするつもりが天津風さんの涙を見て、ああなってしまうただけなんです。

——なんて、言えるわけもない。

未来の命運を握るのは、私達艦娘の他、非現実な一人の提督だ、なんて。

海軍のなかで最重要とされている機密は、私達と彼の正体である。

そも、私達自身も彼が一般企業で働いていただけのサラリーマンという話を本人の口から明かされてもなお半信半疑のままなのだから、そういった事情を汲み取れない今の彼女にとって混乱を加速させる情報になってしまっただけだ。

確かに彼は真面目で誠実だが、私達のことを【艦隊これくしょん】なるゲームのキャラクターとして知っているファンとして片付けるに

は考えられない熱量を持っている。恥ずかしながら、毎日のように褒められ、自分を犠牲にしてまでも好意を示すような生き方をされては無下にもできないというものである。

おかげ様で柱島泊地の艦娘も自己肯定感はうなぎのぼりで、皆の性格は自由奔放なものになった。それが、元々の性格だったのかもしれないけど。

艦娘保全部隊の二人だけでは手に負えないからと、戦艦長門を筆頭にした風紀委員まで発足したのだから手に負えない。

「大淀、さんは……その、捨てられ……あつ、いや……異動、して？から……大丈夫だったんですか……？」

「はい？」

「あつ！ いや、ごめんなさい、何でもない……です」

——明後日の方向へ思考が逸れていた。

何も決してまもるさん……んんっ。海原提督が如何に常識外れの辣腕で魅力的な男性であるかで頭が埋め尽くされているわけではないし、柱島泊地の艦娘達が問題児だらけだと頭を抱えているわけでもないのは信じてほしい。

新兵装を見て妙にアプローチする艦娘が増えたのも危機感を覚えるところだが、いやいや、違う、そうじゃない。

私は誰に言い訳をしているのかしら……。

「ごめんなさい天津風さん、少し、考え事をしていただけですから」
そう言って微笑みかけ、連れ出すために繋いだ手を振って示せば、彼女は繋いだ手と私の顔を見て言った。

「なんだか、変わりました、ね……」

「そう、ですねえ……変わったのかもしれませんが。色々」と

私の雰囲気指着しているのか、それとも顔つきや目つきを指しているのか定かではないけれど、きつと一見した全体を指しているのだろうと肯定する。

彼女の言う通り、私は変わった。柱島泊地にいる艦娘も、今までに見たことのある別拠点の同型艦とは似て非なる存在と思ってしまうくらいに明るくなった。

それと同じくして——個を深く考えるようになってしまった。しまった、というのは、良い意味であるのだが、それはそれとして、今は彼女の心配を優先するべきだろうと声をあげる。

「私だけじゃなく、赤城さんや加賀さん、夕立さんも変わりましたよ。でも、本質は変わっていません。私達は艦娘であり、海軍の軍人として日々軍務に励んでいますとも。前日からここを視察していました。が、ここは……相変わらず、といったところですね」

「……」
相変わらず。一言に込めた負の感情は、天津風も感じ取れたのであろう。

私と繋がる手にほんの少しだけ力が入って、すぐさま抜けていく。「機械的な哨戒や訓練……演習については少し面白いものが見られましたが」

私が舞鶴鎮守府にいた頃との違いがそこにあった。

私がいた時も演習は行われていたが、その頃から陣形の声掛けや、砲雷撃戦での周囲の安全確認の意味のある「砲撃戦用意」などという声が無かったのだ。

しかし全員が決まりきった行動を取る。安全は確保されていたし、攻防の形が出来上がっていた。

良く言えば完成された形。悪く言えば——戦場を想定しているのではなく、囲碁や将棋の盤面上を動く駒のように見えた。外から見ることではしか理解できない発見だった。

生きている気配が全くとっていいほどしなかったのだ。

あれらを見て感嘆を示す軍人は多くいそうなものだが、第二次大侵攻という戦場を駆け抜けた私にとって違和感を覚える光景だった。

深海棲艦は知能を持ち、選択を迫って来る。しかも選択は常に連続している。

一に対して二の選択を。三に対して四の選択を。そんな悠長なものではない。

一から十まで連続した選択肢が現れ、十一から二十まで先を考えて選ぶ取る。

そうした中で五と六、いや三と八の選択肢が入れ替わり、状況が一変する……言葉にすれば複雑だが、こういうものであるとしか言い表せない、滅茶苦茶と思えるものこそが、戦場だ。

舞鶴鎮守府が数多の深海棲艦を退けてこられたのは機械的な戦略あつてこそで、柱島泊地とは違う特色と言うべきなのかもしれないが、前提督を持ち上げたくはないけれど、金森提督であつたから可能だつた戦術だ。

金森提督が湯水の如く資源を投入し、失つたそばから新たな艦娘を投入して攻勢の盤面を維持し続けたからこそその戦果と言つていい。

こう考えられるのも、今になってやつとというのが、歯がゆいものである。

「面白く、なんて……」

「あ、ああ！ 違うんです天津風さん、その、他意はなくてですね？」

鎮守府それぞれに特色があるんだと気づけた収穫のある視察であつたと、そういう話ですから」

「そう、ですか……」

「……」

それから、彼女はまた顔を伏せてしまう。

購買に到着してから元気づけようと甘味や飲み物をすすめてみたりましたが、私の声に反応こそしても、はいとしか返事しない。

好きだの嫌いだの好みの問題で答えている風でもなく、すすめられるがまま。

結局、使われた形跡が殆どないイトインスペースに連れて来て座らせ、購入したお菓子と飲み物を置いて沈黙の時間を過ごすこととなった。それも数十分。

手持無沙汰で流石に気まずかつたので「二人で食べましょう」と購入したお菓子や飲み物の中からサイダーを一本手に取つて口をつける。

強めの炭酸が喉をぷちぷちと通つて行く爽やかさが、陰鬱な空気も弾けさせて消してくれないかと願つた。

「どうぞ、天津風さんも一緒に食べましょう？ ほら、天津風さんが好

きだったお菓子も——」

「でも、私だけ、こんな」

「先輩からの奢りだと思って、ね？」

「でも……」

う、うーん！ どうしたのか……！

前鎮守府の後輩だからと言って先輩風をふかしたのが良くなかったのだろうか？

いやいや、彼女は自分一人だけ嗜好品を口にするのが申し訳ないといった様子だから、ならば全員分購入して後で配布するからと言えば

……そういう話じゃあ、ないわよね。

ふう、と鼻息を鳴らしてサイダーの瓶をテーブルに置いてから、私は触れたくなくとも、この仕事で触れなければならぬ黒色のなにかへ触れた。

それは、彼女の心でもあるだろうし、この鎮守府にいる艦娘皆の心でもあるだろう。

それは、闇、とか言われるものだ。

軍人として有り体にいえば、それらの正体は「不正」であり、その不正によって理不尽かつあつてはならない不必要な苦しみを押し付けられた彼女らの嘆きだ。

「あまりこういう切り出し方はすべきではないのでしようが……単刀直入に聞きます。天津風さん、あなたは金森提督に暴力を振るわれていましたね？」

「っ……」

まあ、正解と言うべくもない。私だってそうだった。

いくら艦娘が丈夫であるからといっても、それは限定的なもの。

人から直接手をあげられたら簡単に傷つくと発見したのは一体どこの誰なのだか。

銃弾でも傷つかない。鉄パイプで殴打されようが表情一つ変えずにいられる。

そんな私達を一番最初に殴り飛ばしたのは、どこの誰なのだか。

今の天津風には目に見える傷など無いが、私のほか、赤城や加賀なんて理路整然としていないことを言われてはすぐに口に出して問うてしまう性格なので良く頬を張られたものだ。生傷が絶えなかった。私は自分でも認めるくらいに細かい性格の艦娘が故に、小うるさいと言われてしまえばそれまで。基本的に命令ならば従う赤城や加賀、夕立まで口出しするくらいに理不尽な命令であれば、逆らうのなら正義は我が手にありとばかりに殴り飛ばしてくるような男だったのだから、金森提督が更迭されるまでは苦しんだだろう。

長峰少佐が着任してから殴られて傷を作るようなことはなかったにしろ、人の手で傷つけられるとは、こういうことなのだと言わなければならない。理解させられるのもまた、苦しいと思った。

「ここで約束しておきます。もう決して、理不尽な暴力で苦しませることはないようにします。井之上元帥閣下も、海原元帥閣下も、海軍の体制変更に尽力しておられますから、どれだけ小さな声でもいいです。すから、あげてほしいんです。その声が変革の一手になるのです、天津風さん」

「ひっ……ひっ……」

「あ、天津風さん……？」

彼女はテーブルに視線を落としたまま、短い呼吸ともつかぬ声を上げて胸元を両手で押さえ、背を丸めた。

過呼吸か、と私はすぐさま立ち上がった彼女に駆け寄り、背に手を添えてから少し離れたところに見える購買のレジに立つ軍属である男に向かって言う。

「すみません！ なにか小さな袋をいただけますか！」

「えっ、あ、は、はい！」

白いレジ袋を片手に駆け寄ってきた男からそれを受け取って天津風の口元にあてていると、男は厄介ごとには首を突っ込みたくないとばかりにさっさとレジへ戻って行く。

冷たくも感じられたが、無駄な話を聞けば巻き込まれる可能性も否定はできないため、彼を責める道理はない。

今は彼女を見ねばと、呼吸が落ち着くまでレジ袋を当て続けて暫

く、彼女は一度だけ深呼吸すると、レジ袋を持つ私の手に自分の手を重ねて遠慮がちに押した。

「だ、だい、じよ、ぶです……ふう、ふう……ごめ、なさ……」

「気になさらないでください。後輩のためなら、なんてことありません」

「ふー……ふー……っ」

軽口を叩けど、彼女の目は焦点を失っていくばかり。

これは相当に根深い。ここでぱっと聞き出せるような話ではなさそうだと彼女に見えぬよう眉をひそめてしまう私。

前日、前々日と泊りがけで舞鶴周辺の資源貯蔵用の倉庫の確認から、演習視察、哨戒の記録照合などを行って仕事は滞りなく進めていたつもりだった。

ここに来て、実のところ一步も進めていませんでしたと突きつけられているような落胆が私の中に湧き上がる。

「い、いつ、も……いつも、提督、は……よ、夜に、なると……誰かを、し、指名する、んで、す……ふううっ……ふううっ……」

思わず声が出た。あ、という短い声。

彼女は、駆逐艦天津風は、苦しんでなお、私の言葉を呑み込んでどす黒い記憶に手を突っ込んでくれているのだと。

「指名ですか。それは、任務で？」

冷たく機械的な質問をしながらも、私の身体は自然と彼女を強く抱きしめていた。

大丈夫といくら言葉で言っても伝わらない時には、こうするのが一番であると知っているからだ。

「任務、じゃな、いです……あんなの、絶対、任務なんかじゃ、ないっ……！」

「夜伽でしようか」

「……」

こくり、と頷いた彼女に、なるほど、と言いながら腕を回して頭を撫でる。

「いた、かった……怖くて、気持ち悪くて……でも、言うことを聞かな

きや、また、あそこに連れていかれるからって……！ ひぐつ……ぐす……」

必死に涙を我慢していたのだろうが、それでも零れてくる水滴は彼女の制服の裾を濡らしていく。

「あそこ……？ それは、営倉ですか？」

こうして聞くことしか出来ないのがもどかしい。

一足飛びに答えに辿り着いて解決する能力があればと奥歯を噛みしめてしまう。

そんな能力を持つ人などいないと分かっている、そう願わずにはいられなかった。

そうすれば彼女の涙を止められるのにと不甲斐なきにくじけそうになる。

しかしこうやって一つ一つ聞いて牛歩でも進まねばならない。

営倉——と言えば、懲罰的に收容される場所だ。

舞鶴鎮守府においては懲罰的に收容される場所というより、皮肉つて言ってしまうと戦果が挙げられなかった場合の入渠待機場所かその日の居室と呼ばれる場所のことである。

巨大な拠点であるため、舞鶴鎮守府は資材倉庫を敷地の内外にもつ。

そのうち敷地外の資材倉庫は海岸沿いに並ぶように建っており、実はその殆どが敷地内にあるべきもの。

敷地内にある資材倉庫は名ばかりで、それこそ営倉として使われている艦娘にとつての第二の居室なのだった。

倉庫内を改装していくつかの狭い個室を造り、鉄格子のついた小さな窓に床に剥き出しとなったトイレとも呼べない半分に切られたドラム缶が埋められたその場所で、寝食を強制される。

これがまた、堪えるのだ。

不潔さは艦娘であろうが出撃後であれば大敵なことなど見て分かりそうなものだが、そうして苦しんだとしても艦娘は入渠すれば大抵の怪我や病気はあつという間に治ってしまう。

ある意味ではよく考えられた苦しませ方、とも言えるかもしれな

い。

怪我が悪化することはないにしろ、痛みは長く続くし自然治癒もしない。

臭いにも慣れたとて一日と間隔があいただけで、再び不潔極まる営倉に入れられたらえづきもするし食事も喉を通らなくなる。反抗の意味も失せるというものだ。

「倉庫じゃ、ない……と、思います……」

「あの営倉ではない……？」

長峰少佐が着任してからだろう。営倉に使われていた倉庫は全て内装が変わっており、入渠施設、建造ドックともに新品同様になっていた。

少佐もさぞ改造された倉庫に驚いたことだろうが、あの営倉でないとすれば、提督の私室でも指しているのだろうか？

あの趣味の悪い私室をあてがわれた少佐は気の毒だが。

壁一面に酒瓶と高級品であろう時計のコレクションが並び、ダブルベッドにどぎつい香水の匂いを染み込ませていたあの部屋を思い出すだけで、うげ、と顔をしかめそうになる。

夜警をしろと言われてあのベッドの傍で立たされたのは悪夢だった。

さらには太ももに手を伸ばされ……ああもう！ 嫌な事を思い出した！

胸中で憤慨するも、その火はある思考に辿り着いて消えてしまう。

私みたいに殴られようが拒否した艦娘ばかりなわけがない、と。

天津風を見れば、その手は震えていた。

ああ、そうか。納得と同時に、どうにもならない感情が去来する。

「営倉ではないという……その場所がどこにあるか、覚えていますか？」

質問を続けることで平静を保つ私に、彼女は首を振った。

「わから、ないんです……いつも、顔を、隠され、て……」

「顔を隠され……はあ……」

「ご、ごめんなさつ——！」

「違います天津風さん！ その最低な行為について、怒りを乗り越して呆れてしまつて、もう、本当に……よく耐え抜きましたね」
「う、ううっ……うううう……！」

駆け足に質問をしては傷を抉つてしまう。

ゆつくりでいい、少し時間が掛かつたつて構わない。

壊れないように、ただ、彼女が壊れてしまわないようにと抱きしめ続ける。

そして彼女を安心させるべく、独り言を漏らした。

「憲兵隊も体制変更が掛かり、海軍と陸軍の仲は対外的には不仲であるというていが形成されつつあります。内陸の守護や被害復興を目的とした陸軍の中でも法務部といったら、今後の海軍にとって目の上のたんこぶとなるでしょう。その法務部を統括する軍人は軍規違反とあれば容赦なく自分の部下ですら捕まえる男だとか」

「大淀さん……？」

「松岡中将閣下の部下もまた厳しく鍛えられたもので、金森提督がどのように更迭されたか目にしていない私でも、想像に難くありません。佐世保鎮守府の八代提督は私の目の前で引き倒されて銃口を突きつけられていましたからね」

「……」

「強硬な手段を取るならば、同じく強硬な姿勢を取るまで、と言わんばかりでした。人の生き死にを揶揄するべきではありませんが……発砲許可まで下りていたというのですから、それだけ、この変革はただ事ではない、ということですよ」

おっと、これは独り言でしたが、聞かなかつた事にしていただけますか？

そういうと、天津風はぎこちなく口角を上げて頷いた。

「で、も……まだ、怖いんです……私……」

「ええ、ええ」

大きく頷き、天津風をひよいと持ち上げて椅子に座り、私の膝の上に彼女を乗せる。

「あ、わっ……」

「では、こうして守ります」

「お、おも、重いです、からっ……!」

「ちやんとご飯、食べてますか? とっても軽いですよ」

「ううっ……」

恥ずかし気に、困ったように俯く彼女の後頭部に鼻頭を埋めて深呼吸する。

彼女も私と同じく、海の匂いがした。

頭の上にかぶせられたままの海原提督の軍帽をひよいと取り上げ、彼女の顔の横からにゅつと顔を出して、二人して軍帽の中央に堂々とした光をたたえるマークを見つめた。

浮かんでくる様々な感情と記憶。

しかし目の前にあるのは、かつての戦火に煤けた桜と錨ではない。

「これを被っていたあの人は、やっぱり怖かったですか?」

「……うん」

「長峰少佐も?」

「……まだ、少し」

同じ女性にすら恐怖を感じるとあれば、やはり軍服や軍帽といった象徴的なものにトラウマを抱えてしまっているのだろう。

そこで私は突拍子もなく言った。

「じゃあ、長峰少佐が普通の服装なら、どうでしょう?」

「普通の……?」

「はい。ブラウスに、スカートとか」

天津風はその姿を想像しているのか、しばし無言だったが、こくり、と頷いた。

「似合い、そう」

「あら、怖くないか訊いたのですが……似合いそうなんて、ふふ」

「えっ、違、私、そういう、あのっ……!」

「ふふっ、いえ、大丈夫です、私の聞き方が悪かったのかも、ふふ、ふふふふ……」

「そんなに、笑わなくても……」

むう、と唇を尖らせた天津風は軍帽にそつと手を伸ばす。

マークをなぞるように指を動かしてから、引っ込め、もう一度指で触れる。

数度繰り返してから、私から軍帽をそつと取ると、それを裏返した。そこに――紙切れが一枚、折りたたまれていたのに気づく。

「あ、こ、れが、当たってたんだ……」

「なんででしょう、これ？」

二人羽織りの恰好のまま手を伸ばして取り出す私、二人でそれを開くと――それは、破かれたメモ帳の切れ端であろうものに「てーとく」という文字が。

「絵……？」

「これは……」

服を着た棒人間が二人走っているような絵の下には二つの文字で、島風、とあった。

一つは癖のある海原提督の字で、もう一つは彼女自身のもの。

「しま、かぜ……」

「ああ、思い出しました、ふふ」

ふと思い出される、柱島泊地の執務室での出来事。

なんてことはない日常の一端。

執務中の部屋に遊びにきた島風が、非番ですることがなくて暇だと駄々をこね、私がお茶を飲ませて宥め、適当に相手をして帰ってもらおうとした、そんな出来事。

海原提督は第六駆逐隊が残っていた画用紙を渡して、絵でも描いてみるか？　と言ったのだが、島風は彼女たちの画用紙だからと言って描くのを遠慮した。

ならこれを使えと破って渡したのが、このメモ用紙だった。

私が一番速いから、提督は二番目ね。

そんな事を言いながら楽しそうに絵を描いた彼女は、その数分後に飽きて外に走りに行ってしまったのだが。

「こんなところに入れておくなって、変な人ですね」

「艦娘が、描いた……ん、ですか……？」

「ええ。島風さんに天津風さんは、もしかすると、お友達になれるかも

しれません」

艦娘としての繋がりではなく、過去の繋がりで発した言葉だった。「友達なんて、そんな」

「走るのが大好きな子ですから、大変かもしれませんが」

私の言葉を最後に、沈黙が漂った。

日は傾き、彼女と座って黙ってサイダーを飲み、絵を眺め、未開封のままのお菓子を食べてもせず、弄るだけ。

ふと、天津風の掠れた声がする。

「わたしも、走るのが、好きだったんです」

彼女は途切れ途切れに、島風の描いた絵を見て言う。

「好きだったん、です……風を、感じられて、好きだったんです……」

声は震えていたが、今度は涙を流していなかった。

震えが空気を揺らし、想いが行き場を失くした煙のように漂う。

「たくさん走りたい……風を感じて、海の上で、高い空を見上げて、今度こそ人を守りたいんです……」

艦娘だからかもしれません。言葉を切った彼女だったが、紡がれる声に、私はメモの切れ端を持つ彼女の手を強く握った。

「まだ……走れる、かな」

「どうでしょう?」

私は、それを言うべきではないと敢えて手を離す。

「……」

天津風はメモの切れ端を丁寧に畳んでから軍帽の裏へ収めると、くるりと、またマークを見つめる。

「……まだ、走りたい、です」

意志は、死んでいない。

「では、そうしましょう」

「えっ、大淀さ……きやつ!?!」

彼女を抱えて立ち上がると、地面におろしてさらに言う。

「走りたいのならば、走れるように道を整えましょう。それもまた、私の仕事なのですから」

「……うん」

私が言わんとする事を理解した天津風は、それでもまだ少しの恐怖がある様子で、胸元をぎゅつと押さえる。しかし目は、必死に前を見ようとしていた。

「わ、私っ……な、長峰少佐に、は、はなし、ううっ……話してないことが、あるんです……！ お、大淀さんも、いて、くれます、か……？」

「もちろんです。何なら抱っこしたままでも……」

「そ、そそそれはいいです！ 大丈夫ですっ」

「あら、そうですか？ ふふ」

うう、と不満そうな声を上げる天津風だったが、一步だけ前進したかな、と私は彼女の手を握る。

「では、行きましよう。走れるように」

「はい……っ」

* * *

執務室に戻って来ると、そこに海原提督の姿はなく、書類に埋もれながらうんうんと唸る長峰少佐だけが居た。

「戻りました。あの、海原提督は……？」

私の問いに、長峰少佐は簡潔に私と天津風が居ない間の出来事を説明してくれたのだが、あんまりの行動に天津風に恰好をつけた手前だというのに立ち眩みを覚えてしまう。

「あの人は、また、もおお……！」

「大淀さん、海原元帥は……」

「だ、大丈夫でしょうが……長峰少佐、提督は資料室へ向かわれたのですね？」

「え、ええ。はい。邪魔出来る雰囲気ではなく、陸軍の松岡中将閣下や情報部の忠野中将閣下と話しておられたので軍機である可能性も高く……仕事をしてくるからこそここにいろと命令もありましたもの……」

あの人は自分のお立場を分かっているの!? と、説教してやらねば

という気持ちで顔を覗かせたが、理性がそれを抑え込む。

いくら天津風が泣いていたからとかき回すような真似をされては仕事が増えてしまう。あの人はどうにも、仕事にとりつかれている節がある。それが艦娘と関係があるとなれば修羅をも踏み潰さん勢いで行動するものだから追いつくのだったって簡単じゃない。

資料室であれば調べものをしていただけかもしれないが、どちらを優先すべきか……ここで天津風さんを一人にして長峰少佐に話をさせることも考えられたが、そうすると私は彼女に嘘をついたことになる。一緒にいると言ったのだから。

海原提督を——まもるさんを信じて、まずは彼女のことを進めよう、と私は大きなため息を吐き出した。

「はああ……海原提督の様子は後で見るとしましょう。まずは、長峰少佐、天津風さんのお話を聞いていただけませんか？」

「天津風の？ それはもちろんですが……天津風、私に何か話したいことがあるの？」

「う、その……」

執務室にきてから私の背に隠れっぱなしの天津風に後ろ手を伸ばし、手を繋ぐ。

応接用のソファへ連れて行って一緒に腰をおろすと、長峰少佐は執務机から立ち上がって水を三人分用意して、それを置いて対面へ腰をおろした。

「待つわ。何時間でも、何日でも。私は舞鶴鎮守府の提督だからね」
「……」

「話さなくなつて問題は解決する。それが海軍の問題ならなおさら。あの日、私があなたたちに仲間だと言ったことを証明するためにも、尽力する。だからあなたの意思で、決めなさい」

真剣な表情で言う長峰少佐に、天津風は唇を震わせながら開いた。
「金森、提督のこと、で……」

「ゆっくりでいいわ。私は、ここににいるから」

天津風はちらりと長峰少佐の顔を見てから、おずおずと水の入った紙コップに手を伸ばして、口をつけた。

緊張や恐怖で口内がカラカラになっていたのかもしれない。

「私、いつ、も、金森提督に、その……乱暴、されて……それで……」
「乱暴というのは、殴られたり、蹴られたりしたのね？」

天津風の首が縦に振られると、少佐は苦々しい顔をしながら眼鏡を押し上げる。

「それ以外、に、も……」

「以外にも!？」

大きな声にびくりと肩が震えた彼女に、少佐が慌てて手を振る。

「ご、ごめんなさい、大きな声を出して。私は話を聞かされているだけだから、本人の口から以外にも、なんて言葉が出てくると、ちよつとね」

舞鶴鎮守府での不正として目に見えて分かりやすい数字のつく資源や艦娘の増減について知る長峰少佐も、よもや彼女の口からさらに酷い事が飛び出てくるとは、予想していても衝撃がある、といったところか。

「……夜になると、部屋に、呼ばれて、服を」

ダンツ、と応接用テーブルに長峰少佐の手のひらが落ちる。

天津風が驚いて目を見開き、私も何事だと長峰少佐を見るが、彼女は眉根にこれでもかと深いシワを刻んだ表情で、怒りの籠もった声で言った。

「最後まで、したの」

最後まで、その声に天津風の瞳から水滴が落ちる。

「……」

テーブルに落ちた長峰少佐の手が拳を作り、震えた。

「わか、ったわ……そう、天津風、そうだったのね……よく、話してくれた」

「ひっ、う、ぐすっ……は、い……あうっ……」

衝撃でずれた眼鏡をまた押し上げた長峰少佐は、深呼吸を繰り返した後に問う。

「他に、呼ばれた艦娘は分かる？」

天津風は頷く。

「時間をかけて、聞けるとこまで、聞き取り調査する。天津風、あなたは暫く休みなさい」

「え、わ、私——！」

「あなたが何を言おうが待機は変わらない。これは命令よ」
「っ……」

天津風は私に助けを求めるかのような視線を向けるが、私は口を開かなかつた。

それを見て絶望するように瞳から光が失われかけるも、少佐の声に、目が見開かれる。

「あなたの傷を癒すことが先。その他の仕事なんていくらでも回せるわ。それが私の任務なんだから、私が休めつて言えば何も考えず休んでいればいいの。どうしても何かしたくなったら、また言いに来なさい。いいわね」

「あ……」
ほら、ね？ とようやく顔を向けると、天津風は言葉無く目で頷いた。

長峰少佐が「聞き取りに調書を用意して……あーもう新しい金庫も発注すべきかしら、これ……でも予算の分配が……彼女達の部屋にできるだけ……」とぶつぶつ言いながら眉を指でかきはじめた時のこと、古めかしい、ぼーん、というチャイムが鳴った。

執務室にあるアンティーク時計の音だと全員がそちらを向いた時は、はっとして私は立ち上がる。

資料を見ているにしては長すぎる、と。そろそろ迎えに行くべきだ。

私は眼鏡のつるに指を這わせ無意識に海原提督の場所を探ろうとするのだが――

「あ、れ……？」

隣の資料室に反応はない。

失礼します、と執務室を出て、資料室へ駆けていく。

扉を乱暴に開くも、音すらしない。室内は無人だった。

もう一度、と今度は意識的に電探を起動して反応を探すが、離れた

位置にある艦娘寮にいくつも反応が見られるだけで、海原提督らしき反応は見つからず。

もしや身分証明書を柱島泊地の執務室に忘れて来た？ あり得ない話ではあるが、考えにくい。彼は身分証明書の類を部屋のどこかに保管することなど殆どなかったからだ。

常に軍服のポケットにカードを入れっぱなしで、取り出されるのは入浴で着替える場合のみ。

ずぼらなのか几帳面で慎重なのか分からない彼だが、この時に限ってカードを出して忘れるなんてあり得るだろうか。

そう考えながら探知範囲を広げても、反応は見られず。

執務室に戻って、きよとんとしている長峰少佐に「資料室にはいませんでしたが、他にどこかへ行くと言っていましたか？」と訊けば、首を横に振られる。

艦娘寮に行った？ いや、ならば艦娘寮で動きがあるはず。

長峰少佐へ艦娘寮の見取り図を要求したあと、それと反応を照らし合わせてみるも、自室待機している人数分の反応しか無かった。

つるりと冷や汗が背を伝う。

「海原提督が、いません……」

呟く私の声に、長峰少佐は素早い動きで執務室の電話を手にとった。

「……こちら執務室。正門、異常はないか」

無意識に通話に意識を割り込ませ、会話を聞く私だったが、これも冷静を保とうとしていた。

嫌な想像ばかりが頭に浮かぶも、必死に振り払う。

『一班、渡部わたべです。こちら異常ありません！』

「渡部、誰の出入りも無かったのか？」

『はい、本日は視察があると伺っておいりましたので、少佐のご命令通り業者の営業なども全てお引き取り願いましたが』

「そうか……では、資材倉庫の方にある出入口の方で通行があったりしなかったか？」

『報告は受けておりません！ 問題がありましたでしょうか？』

「あー」

長峰少佐が私を見たため、しばし逡巡したあと、頷く。

「出入りがあればすぐに知らせろ。艦娘含め、誰も出入りさせるな。追って連絡する」

『っは！』

長峰少佐が電話を切った後、私は出来るだけ静かに言った。

「まずは、探しましよう。あの人のことですからどこかにいるはずですよ。出ていないのなら、舞鶴鎮守府の敷地内にいるでしょう」

「了解しました。天津風、一緒に手伝ってください」

「は、はいっ」

教え⑧ 【艦娘 side・大淀】

舞鶴鎮守府の敷地はかつて自分が所属していた時よりも数倍以上
広く感じられ、赤レンガばかりが並ぶ風景を右に左にと搜索を続けて
いる私は迷宮にでも閉じ込められたような錯覚に陥っていた。

長峰少佐は執務室のある中央棟から離れた倉庫群と艦娘寮を見て
みると言い、天津風は工廠や建造ドックのある場所を探すと行って、
私は正門から続く中央棟を探すこととなり、はや一時間。永遠のよう
でいて、あつという間に過ぎてしまう。

時刻はヒトハチマルヒト。本来の予定ならば既に舞鶴鎮守府を出
て、舞鶴駅から二人で柱島泊地へ向けて帰路についているはずだっ
た。

電車を乗り継ぎ、途中で新幹線に乗って、遅くとも柱島泊地の食堂
まで我慢するか、諦めてこつそりと二人で弁当を食べてしまうかなん
て話していたかもしれない時間に、私は一人で彼を呼んでいる。

「はあっ……はあっ……三階にも、二階にも、どこにもいないじゃな
い、ですか……!」

中央棟の周辺を植え込みに至るまでくまなく探すも見つからず、建
物内も上から下へ一室も見逃さなかったにもかかわらず、痕跡の一つ
すらなかった。

空を照らす茜色に群青色が差し込み始めた頃には、私の額に浮かぶ
汗に触れる風が気持ちよいものから、冷たいものへ。

どこに、と独り言を漏らしながら汗にずれた眼鏡を手の甲で押し上
げると、かちりと指輪がぶつかって音が立つ。音に自然と視線が指輪
へ移ると、息が詰まった。

舞鶴鎮守府の艦娘を心配して艦娘寮に行つて様子を見ていたりす
るかもしれない、それか、他の鎮守府はどのように工廠管理をしてい
るのか気になって見に行つたのかもしれない。そんな淡い思いは、天
津風の通信によってあつという間に砕かれた。

《ザツ——お、大淀さん、天津風、ですっ》

息を整えて応答すれば、天津風の声が鼓膜を打つ。

《こちら大淀》

《工廠には、海原元帥は、いませんでした……工廠班の人達も、見てないって……》

柱島泊地と違って本土の鎮守府には軍人や軍属が多くいる。

艦娘の装備を整えるのに人の手を使うとなれば相当数が必要となるため、巨大な拠点である舞鶴に至っては工廠を預かるのに数人では利かない。

大勢がいて一人も見えていない？ 艦娘のように自室待機を命じた覚えもないから通常通り艦娘の兵装やドックのメンテナンスを行っているはずだから、大勢の中から一人や二人くらいは休憩を取ったりしているはずだろう。工廠から大きく外れて出て行くことはないしる周囲で長峰少佐以外の見知らぬ白い軍服の男が歩いていれば一目で気づくはずだ。

とすれば、工廠には近寄ってもいないということ。

考えずとも分かると思われるかもしれないが、こうした一つ一つの単純な確認が大事なのだと言った海原提督の言葉の通りに、私は自然と可能性を考慮しては、潰し、消し去る。

工廠、もしくは工廠付近での目撃情報が無いとすれば、残るは中央棟か艦娘寮、倉庫群のどれかになる。

最初に長峰少佐が正門や倉庫群にある裏口の出入りを確認したが、出入りはなかったと証言もあるから、外に出た可能性は殆どないと言っているだろう。殆ど、というのもまた、希望的観測でもあり疑心暗鬼でもある。警備の嘘を考慮したものだ。

嘘を吐く理由もメリツトも思いつかないが、海原提督の肩書に圧されて口を噤んでいる可能性も無いわけではない。

それにしたって海原提督が仕事を放り出して警備に対し黙認するよう言いつけ、舞鶴鎮守府から出て行く理由が無いのだから、ゼロに等しいと考えていいだろう。

ここまで考えるのに、たったの数秒。

《了解しました。では天津風さんは長峰少佐と——あー、いえ、中央棟に戻って私と合流して、一緒に捜索を続けてもらえますか？》

長峰少佐と言葉を交わせるとは言え、金森提督から受けた仕打ちを打ち明けたばかりの相手、まして同じ立場の軍人と二人きりにするのは彼女にとって良くないかもしれない。

そう判断して言いなおした私に、天津風は短い返事をして通信を切る。

それからまた、思考の海へ漕ぎ出す私。

海原提督が居なくなったのをいつと仮定するか。

長峰少佐が言うには、私と天津風が出て行って忠野中将や松岡中将と一悶着あつてから資料室へ行ったというのだから、さほど時間は経過していないと予想出来る。

長峰少佐の言う通りならば、海原提督の口振りから察するに、天津風のみならず舞鶴鎮守府における艦娘への待遇について金森提督とも言葉を交わした。それもかなりの怒気をはらんで。短い会話ながらも確信できるものがあつたのかもしれない。

彼女が提督の覇気に気圧されて大袈裟に話していることも疑われるが、彼はどうしてか一般人とは考えにくい、いや、考えられないような圧を持っているため、これもまた事実として受け止めていいだろう。

舞鶴鎮守府に到着して長峰少佐と話していた時間、私と天津風が出て行って話していた長い時間、執務室に戻ってから聞かされた一連の流れから海原提督が資料室へ出向いた時間――。

天津風と私が出て行ってからは、言葉こそ少なかったが結構な時間を過ごしていた。購買へ移動していた頃には、海原提督は中将達と話していたのだから、殆ど同時に事が起きたと考えると差し支えないだろう。

そうなる――既に、四時間前後が経過していることになる。

事情は違う。私は真実を知っている。

だというのに、過去に海原提督がもう一人の海原であると勘違いしていた時を思い出して、妙に嫌な考えが頭を過る。

六年間も失踪していたと勘違いしていた、あの時。

もし、彼が忽然と姿を消し、このまま失踪してしまつたら？

馬鹿な。そんなはず、あるわけがない。

何をもとにあるわけがないと考えているのだろうか？

彼は元々一般人で、ただのサラリーマンだ。

如何に艦隊これくしょんというゲームを知っていて、私達艦娘を知っていて、深海棲艦を理解しているからと言って、失踪しないこととイコールにはならないじゃないか。

海軍の闇を見て、触れて、その上で重責を背負い立っている。

並々ならぬ思いがなければ成し得ないことを、彼は軽々とこなした。

それでも、それらに耐えきれるかと言われたら、私ならば、どうだろうか。

ぎゅつと左手を握りしめ、彼から受け取った指に光るそれを撫で、深呼吸。

「……大丈夫」

自分に言い聞かせて、ただ冷静に、私がすべきことを、出来ることをと思考を無理矢理に捻じ曲げた。

そうしなければ、きっと私は不安で、この場でへたり込んでしまうと思ったのだ。

天津風が来る前にと眼鏡のつるに指をあて、通信する。

《こちら大淀、こちら大淀、柱島泊地へ。応答願います》

今日の補佐艦は誰だったか、と思い出す前に、その人物の声が返って来る。

《こちら柱島泊地、鳳翔です。お疲れ様です大淀さん、進捗確認ですか？》

柔らかな声に、いくらか気持ち落ち着くも、根の部分にある靄は晴れずにいた。

《えー、と、ですね》

通信しておいて、ああ、これはどう話すべきだと声に詰まっていると、鳳翔の優しい声が柱島泊地の様子を話す。

食堂である世間話のような気軽さは、その靄の表面を少しだけ吹き飛ばしてくれた。

《進捗なら心配ありませんよ。演習の報告書も、開発の報告書も受け取りましたから。もう暫くしたら、哨戒班の皆さんと、潜水艦隊の皆さんも戻るはずですよ》

《……ありがとうございます》

《いえいえ、大淀さんのようにはいきませんけれどね。これでも、大淀さんと同じ立場の艦娘ですから》

鳳翔の声が意味するところを考えながら、ああ、彼の事を想うのは私だけじゃないのだと、自然と言葉が紡げた。

《落ち着いて聞いてください、鳳翔さん。今、舞鶴鎮守府にいるのですが——提督が、どこにもいないんです》

《どこにも、いない……？》

かいつまんだ事情を説明すると、鳳翔は吐息が漏れるような声を出した。

《ふうむ……それは、問題ですね》

普段からふわふわと柔らかな印象を持つ鳳翔だが、それは彼女の持つ性質の薄皮に過ぎない。彼女は間違いなく歴戦の艦娘の一人である。ならば彼女の思考の辿る先は、私と同じもの。

《現在は舞鶴鎮守府の長峰少佐と、秘書艦である天津風さんという駆逐艦の三人態勢で捜索している状況です。いなくなっただであろう時刻から考えて、三時間か、四時間か……》

《舞鶴鎮守府にいたとなれば元帥がいなくなりましたと大袈裟にになってしまうわけにもいきませんものね。けれど、選択肢は増やすべき、と》

以心伝心している、と思った。

私の考えが伝わり、私の次の行動を予測している。

《はい。無為な不安を煽るわけではありませんが、提督の身の安全が第一です、万が一があっても動けるように、皆さんにお伝えいただけますか？》

《補佐艦も気楽な仕事ではありませんね》

《……すみません》

《ふふ、大淀さんを責めているわけではありません。提督を責めているのですよ》

それって……と言った私に対して、鳳翔は声だけでもニコニコしているのが伝わるようだった。それも、悪い方の意味で。

《仕事熱心なのは恰好良いことなのでしょうが、寒心に堪えないことばかりしないでほしいものです》

《帰ったら全員で叱ってやってください》

《それは大淀さん主導で？》

《ええ、私が主導しましょう》

《あら、これは帰還後が楽しみですね？ ……んんっ》

鳳翔の咳払いで、空気に緊張が戻る。

彼女はこうした切り替えが上手い艦娘だ。どれだけ落ち込んでいようが、どれだけ興奮していようが、中立へと引つ張ることができる。

作戦行動以外でも役立つものなどは、などと考えながら、私は言う。

《——大事にすべきではありませんが、長峰少佐も搜索に乗り出してくださいさつていますから、舞鶴鎮守府全体を搜索範囲にして艦娘寮を含む全てを探してみます。それと、軍属の皆さんから無用な情報を出さないよう、視察調査に関してもかん口令を敷けるよう軍上層部に許可を取ります》

《了解しました。では私は柱島泊地所属の全艦に提督が行方不明になった事実をお伝えしましょう。搜索中である、とも。そちらへ派遣出来るように準備を整えましょうか？》

《いえ、それには及びません。提督については軍上層部も動かざるを得ないでしょう。調査の名目もありますから、むしろ軍上層部の協力を得られるのならばかん口令にも説得力が出るといいます。問題——》

《提督の失踪に混乱が起こるのではないか、ですね？》

《それは、もう》

当然でしようとはかりに言えば、鳳翔はゆっくりとした口調で言う。

《この立地ですから、無茶をする娘はいないでしょう。ですが……最上さんが、非番ということもあって提督と広島まで出ていたんです。心配するならば最上さんでしやうね》

外出許可で広島に出ている艦娘がいるとあれば、騒ぎが拡大してしまふ恐れがある。私はすぐさまこう返す。

《広島ならば呉鎮守府へ行かねば正式に出撃は出来ませんから、そちらで待機させましょう。ある程度の混乱は予測されますが、抑え込むことは不可能ではありません》

《分かりました。山元大佐にも協力を要請します》

《山元大佐が無茶をするようなことは――》

冗談ではなく、可能性の一つとして口にした言葉だった。

山元大佐もまた、海原提督に魅せられた一人である。

《私が思うに、艦娘に関して無茶をするのは海原提督が一番かと……大佐は海原提督の起こした奇跡を重ねた上に立っているような軍人ですから、横紙破りを二度も三度もすれば軍籍を剥奪なんてことになりかねません。冷静に対処していただけるかと思えます》

《……では、お願いします》

通信を切ってから暫くして天津風と合流した私は、一度舞鶴鎮守府をしらみつぶしに探せるように見取り図を再確認しよう、と執務室へ向かった。

私が軍上層部の忠野中将と橘中将へ通信している間にも長峰少佐は艦娘の居室一つ一つを探してくれたようで、見つけはしなかったが搜索範囲をさらに絞ることが出来たのだった。

工廠、艦娘寮、倉庫群のどこにもいない。

もう一度探すにしろ、中央棟から範囲を広げるようにして探すのが効率的であろうと、息を切らして走り回った。

途中から忠野中将達の命令を受けて派兵されてきた近隣駐屯地の将兵が正門から入場してすぐに搜索を開始したあたりで、大事にしないつもりだが、どうしても目立ってしまうのは避けられなかった。

近隣住民への説明はどうしたものか。非常時のための訓練とすべきか、否か。

何をしているんですか、提督。

一体、どこで、何を。

「捜査本部の設置を考慮すべき時期かもしれません」

そう言ったのは、長峰少佐だった。

捜索を開始して、鳳翔を通して柱島泊地へ連絡したのも既に二時間前。

今やとつぷりと日は暮れて時刻はフタマルマルを過ぎた頃である。

海原提督が居なくなつてであろう時刻から既に六時間は経過した。

長峰少佐の言う通り、目立たないよう秘密裏に処理するのは無理だと判断せざるを得ない状況だ。大々的とまではいかずとも捜査本部を設置して……いや、しかし、この一日の視察とて艦娘に自室待機を命じるくらいには重大な任務だったのだ、これ以上この拠点の機能を麻痺させるわけにはいかない。

深海棲艦の侵攻頻度を予測出来るようになったとはいえ、不測の事態に備えられていないなどあつてはならないのだ。

この舞鶴鎮守府もまた国民を守る盾であり剣なのだから、この一日で提督を発見せねばならない。

しかし問題は——私の電探にすら引つかからないことである。

海原提督に言われて常日頃から艦隊司令部施設という広域通信網を装備している私は、それに加えて柱島泊地の工作艦明石と夕張が共同で試作した試作電探を装備している。

ただの電探に引つかからないのであれば範囲外にいるのであろうと結論付けることも可能だが、この試作電探が私を舞鶴鎮守府へ縛り付けていた。

電探とは主に陸上見張用や艦上見張用とある程度の分類がある。

俗にいう一号や二号と名付けられるものがそれにあたるのだが、私の装備している試作電探は複合型と呼ばれるもので、その名の通り連続波とパルス波、メートル波を意識的に使い分けることで水陸両用を実現しているものだ。

試作型が故に実戦配備は行われていないものだが、索敵ならぬ捜索

範囲で言わば舞鶴鎮守府どころか周辺地域を覆ってもまだまだ余裕がある性能を誇る。

しかし、それらに提督の反応は見られない。

搜索を開始するまでに時間があつたために範囲外へ速やかに出ていったとすれば、舞鶴鎮守府の警備を疑うしか選択肢はなくなつてしまふし、それは既に否定された事項。

堂々巡りの無限迷宮に、長峰少佐の言葉を受けてもなお見取り図から顔を上げられないでいる私は、うめき声のような返事しか出来なかつた。

「ううん……搜索本部、ですか……」

「大淀殿、事が事ですから、早期に発見すべきです。搜索本部の立ち上げの通達を遅らせれば、末端までこの話が届く前に軍部中枢で収束するでしょう」

長峰少佐が私を気遣つて決定権を譲っていることなど分かつていた。

いくら海原提督、海軍元帥の艦娘とはいえ、指揮権などは無いのだから。

「はあ、すみません、長峰少佐。気を遣わせてしまつて」

「何を仰いますか。元帥閣下が心配なのは私も同じです。それに、天津風が自分で話せるようにと連れて来てくださった大淀殿の心中も察しているつもりです」

「……です、か。そうですね、はい。ありがとうございます、少佐」

「いえ。では搜索本部の設立を要請します」

長峰少佐が軍上層部へかけあえば即座に対応されるはずだろう、と額の脂汗を手で拭い、見取り図からようやく顔を上げてから顎に手を当て唸る。

緊張と無意識の興奮で体温が上がっているのか、暑さを感じて私は電話を持ち上げようとする長峰少佐に一言「窓を開けても？」と訊いた。

「暑いですか？ 今空調を——」

「いえいえ、窓を開ける程度で大丈夫です」

開けますね？ と窓に歩み寄って手をかけた時、うん？ と声を出してしまう。

二重窓——それに、鍵が無い——？

私が舞鶴鎮守府にいた頃に窓など気にしたことなければ、そう言えれば開けようと思つたこともなかった。

節電目的かは定かではないにしろ今ののように空調が切れていることもなく、常に快適な温度に保たれたままだった執務室だったからかもしれない。金森提督はそういった面倒なことをしない人で、いちいち電気を消して、エアコンを消して、と私が切り替えようとするだけで文句を言う人だったから、私もいつしかそういつたことに気を回さなくなつてしまつたから、気づかなかつたのだろう。

「はああ……恐らくは例の改造、かと」

長峰少佐の溜息に顔を向けると、天津風の、金森提督の顔を思い出してしまつたかのような悲しげで苦しそうな表情が目に入る。

「改造とは、あの、営倉のような？」

「ええ、その類のものです。窓を開けるなら、この机の、ほら、ここにあるスイッチを私が押している間でなければ窓を開けられないのですよ。全く、どういった意味があるんだか」

引き出しの一つを開けば、そこには物が入るスペースなどなく、スイッチがいくつか並んでいるのが見えた。

そのうちの窓、と書かれたシールの貼つてあるスイッチを押すと、かちん、と音がした。

妙な寒気が走つたのと同じくして、窓は簡単に開いた。

「なんの意味が……はあ、金森提督の考えることは、やつぱり分かりません……」

「あ、ああっ……は、はあっ……はあっ……！」

急に呻いて呼吸が荒くなつた天津風に驚いて窓から手を離し駆け寄ると、同じく長峰少佐がスイッチから手を離して声を荒げる。

「どうした天津風！」

「天津風さんっ」

長峰少佐がスイッチから手を離れた瞬間、窓が大きな音を立てて閉

じた。

ばん、という音に身体を震わせてへたり込んだ天津風に寄り添った長峰少佐は、両肩を掴んで「大丈夫か、おい！」と声をかけ続ける。

天津風は——何か、ジェスチャーをしていた。

何も無い空間を掴むような動きをしながら、それを、ゆっくり動かし、自らの頭に被るような。

「天津風！ おい！ 何をしてるんだ！ 天津風っ！」

「あ、お、おも、おもい、だ、だし……ハーツ……ハーツ……！」

震えというより、それはもう痙攣と言わなければならない。

「えい、そ、じゃ、無いです……菅倉なんかじゃ、ないっ……」

その動きが何なのか察したのは、私も、長峰少佐も、同時だっただろう。

「金森提督のことは後でいいんだ！ そんなもの思い出さなくていい！ 天津風、どうして今そんな……！」

自分でいいながら長峰少佐はハツとして執務机に振り返る。

「あ、れか……？ あ、あのスイッチ、他に意味があるのか!？」

天津風の瞳から、ようやく止まったのに再び滂沱の涙が流れる。

「少佐、窓というシールがありました、あれは!？」

私の問いに少佐は言う。

「最初から貼ってありました！ はじめは触るべきではないと思いますが、シールのある部分ならば何が連動するか分かるので、つい……」

ちりばめられた点が、繋がっていく感覚。

それは私が戦場で幾度も経験した、活路を見出した感覚。

「……」

「大淀殿？」

「はっ……はあっ……はあっ……」

「大淀殿、どうなさったのです！」

「静かにッ」

私の声に長峰少佐と天津風がびくりとしたのが目に入るも、思考は途切れず。

「……少佐、もう一度窓のスイッチを押してください」

「ま、窓の？」

「お願いします」

怪訝そうにしながらも長峰少佐は天津風の肩を数度撫でて立ち上がり、スイッチを押した。

ぞわりと背筋が凍る感覚に、窓の音。外から吹き込む夜風。知っている。

私はこの電波を、覚えている。

「——金森提督は、楠木少将と繋がって戦果を得ていたのでしたね」「くつ、楠木少将とは、あの、殉職なされた……」

その真実は闇の中。長峰少佐は知る由もないこと。

「スイッチから手を離して、結構です。これ以降、決してそれに触れないでください」

「は、はあ、それは、その、了解しましたが……何故——」

「——深海棲艦の使用する波長です」

「なッ……！」

これ以上は、まだ知らせるべきじゃない。

知るにしたって、私の口から語られるべきではない。

全ては、繋がっている。

私は応接用テーブルに畳んでおいた見取り図を乱暴に開き、両目を見開いて一つも見逃してなるものかと睨みつける。

なにか、この舞鶴鎮守府には大変な秘密が隠されているはずだと。

見取り図を睨んだままに、天津風へ問うた。

「天津風さん、今、あなたは何を思い出したのですか」

「大淀殿！ 急にそんな！」

彼女を心配する長峰少佐の声を押し退け、もう一度同じことを口にすれば、天津風は震える声を返した。

「なん、ど、も、何度も、夜に、連れて、行かれた、場所が、あるんです……暗くて、気持ち悪い空気が、溜まっていた、場所、でした……」

呼吸はまだ荒かったが、彼女はそれでも言葉という形にしてくれた。

驚いた長峰少佐の「天津風……？」という声が、溶けていく。

「きつと、海原提督はこの鎮守府に眠る地獄へたつたの一步で踏み込んだのでしよう——あの人は、そういう人ですから」

「ひ、う……う、海原、提督は、だ、だいじよ——」

「分かりません。ですから、あなたの記憶が頼りです」

見取り図から天津風の方へ視線を移してみれば、彼女はぎゅっと両目をつぶって荒い息を吐きながら、また、記憶を再現するように身体を動かす。

頭になにかを被るような仕草をしたあとに、その場から数歩下がり、くるりと反転。両目を閉じているのに、その足は、執務室の扉へ向いていた。

見取り図を持ったまま天津風に追従する私に、長峰少佐。

一步、二歩、三歩。扉の前に来て長峰少佐が開くと、天津風は進んでいく。

目を閉じているので、倒れないように私は背を支えた。

「う、う……っ」

彼女は歩く。闇の中を。苦痛の記憶の中を。

辿った先は——資料室だった。

「資料室……」

眩く私を置いて、長峰少佐は殆どだけ破る勢いで扉を開き、室内に入って一番に大声を上げた。

「海原元帥閣下！ いらっしやいませんか！ 海原閣下っ！」

天津風は入口で止まって数秒すると、ふら、ふら、と一つの棚へ歩んだ。

まだ、両目は閉じたまま。

身体が覚えてしまうくらい常習的に歩いていた証左である。

天津風が立ち止まった棚には、十二番の番号が割り振られていた。

見てみると、ずらりと並ぶのは——始末書ばかり。

その一つを手にとって見れば、日付は私が所属していた頃のものだった。

今見ても明らかな虚偽である命令違反の数々に、任務失敗の文字が

いくつも並んでいる。

大淀、赤城、加賀、夕立の名がかなり多くあるのを見て、鼻で笑ってしまう。

怒りが込められた笑いだった。

どたどたと室内を探し回る長峰少佐を横目に、天津風に「ここに、なにか？」と問えば、天津風は首をゆるゆると横に振った。

「ここ、じゃ、ない、んです……ここ、じゃ……」

ここではない？ とファイルを棚に押し込みながら思考と共に視線をさ迷わせる。

ふと、一つ棚に違和感を覚えた。

頭文字で分けられたファイルを仕切る何も挟まっていないボードが、隣り合っている部分があるのだ。

夕行《ト》とナ行はじめの《ナ》と記された空っぽのファイルが目に入り、声に出してしまう。

「トの部分にだけ、ファイルが——」

「あ、それ、ですつ……そ、そこ……私、何度も、そこにつ……」

「と？ と、に連れていかれ……？」

「特別……拘禁室、です……！」

天津風は、また、ふらりと歩みを進める。

長峰少佐が戻って来て、歩調を合わせて行先を見定める。

今度は、壁際にある二十八番の棚へ。

そこで、ぴたりと足を止めた天津風はようやく目を開いた。

「あ、れ……？」

「天津風さん、ここに今度は何の資料が？」

急かすような私の声に、天津風は不安げな瞳を向ける。

「ち、ちが、違う、違うんです、あ、あれ、おか、しいです、私、ここ、ここに」

棚を指差して言うも、そこには棚と壁があるだけだ。

見取り図を見たって——そのように記載がある。

「……大淀殿、失礼。貸していただけますか？」

「は、はい」

長峰少佐が横から割りこんで見取り図を手を取って、壁を見てから、また見取り図を見る。

そうしてツカツカと室外へ出て行って、数十秒もしないで戻って、また壁を見て、見取り図と見比べる。

「少佐、何か分かりましたか？」

「……この資料室の隣は、備品倉庫ですよね」

見取り図を指しながら言う長峰少佐に頷いて見取り図へ視線を落とす。

並びにすれば、執務室、備品倉庫、資料室だ。

備品倉庫は狭いもので、執務室で使うコピー用紙やファイルの予備、文房具などといった小物類しか置かれていないため、非常に狭い一室である。

言われてみれば、と私は見取り図にある執務室と資料室を指でなぞった。

「この、空間は何でしょう……？ 特に何も、記載がないですが、壁にしては」

「そう、厚すぎるんです。備品倉庫がもう少し広くても問題無いくらいには」

それから、天津風の言葉が解となる。

「ここ、入ったこと、あんまり、無かつたんですけど……私、ここから、階段に……」

資料室にあまり立ち入ったことのない秘書艦というのも変な話だが、だからこそ、辻褄があう。

「入ったことがあまりなかったのではなく……誰も立ち入らないようにしていた、と言う方が正しいのかもしれない」

とどんと、噛み合う。

「ああ、確か、この資料室だけ着任時に別途鍵が渡されましたね……金森提督のこともありましたから、セキュリティの面で鍵を交換したものとばかり……鍵を交換したのではなく……」

「交換しなければならなかった」

私が静かに言うと、丁度、捜索の進捗報告に私達を探し回っていた

であろう軍人の一人が、開かれたままの扉から顔を覗かせた。

「第三駐屯地、本庄伍長であります！ 倉庫第一から第四に海原元帥閣下はおられませんでした！ また、艦娘寮駆逐、軽巡、重巡、戦艦寮ともに姿は見られません！ これより周辺倉庫の確認を——」

本庄と名乗った伍長は顔を埃で真つ黒にしており、文字通り倉庫の中身をひっくり返して搜索してくれていたのだろう。

忠野中将や橘中将の命令で動いているにしろ、心強かった。

だからか、私はその場でバサバサと二十八番の棚の資料を引っこ抜きながらどんとと天津風に手渡しながら言った。

「本庄伍長！ この壁を壊せるものを持ってきてください！ 何でも構いません！」

どうかお願いしますと許しを得るように長峰少佐に顔を向けるより前に、私の顔の横を声突き抜けていく。

「私が許可する！ すぐに持って来い！ その他は搜索を続行し、周辺倉庫への人員をこちらに少し割いて連れて来てくれ！ ガラを外に運び出すのに人数が必要になる！」

「っは!!」

全速力で駆けていく本庄伍長が見えなくなつてすぐに、長峰少佐は資料をばさばさと適当に地面に投げ捨て始める。

「どうして気づかなかつたのか、くそ、まだまだだな、私も……！」

「長峰少佐、資料を、そんな」

「いいんですよ大淀殿。私の鎮守府なのですから、引継ぎもまともに出来ない前任の残した嘘っぱちの資料など役に立ちません。シュレッダーにかけるのも億劫です」

「少佐……」

「天津風、君もそんなもの抱えなくて結構だ。ほら、こっちに投げつけてけ」

「あ、あう、あの」

「——よく思い出してくれた。大戦果だ」

敵も倒さず大戦果。意味が分からないといった顔の天津風だったが、

「わ、わた、し、役に」

「大いに役立っている。次は私と茶を飲む方法でも覚えてくれ」

ふふん、と切れ長の目を緩ませる長峰少佐に、はい、と小さく答えた。

それから、すぐにどたばたと大勢の足音が近づいてくる。

「本庄伍長、戻りました！ 番号ッ！」

「いちッ！」

「にッ！」

「さんッ！」

「しッ！」

「ごッ！」

ずらりと並ぶ、総勢十名以上の将兵。その手には、ボールやスコップが握られていた。

長峰少佐の凜とした迫力のある綺麗な声が響く。

「この柵は壁に取り付けられているが、破壊して構わん！ とにかく壁をぶち壊せッ！」

「はっ！！」

「掘削——始めッ！」

教え⑨ 【鎮side／長峰side】

「ん……お……」

室内はじめついたままだが、音もなく真つ暗な部屋は俺を深い眠りに落としてくれていたようで、目が覚めた時は驚くほどにすつきりとしていた。

しかし身体の方はそうでもなく、まるゆを抱えたまま石畳の床に座っていたものだからバツキバキである。

「い、で、い……」

上体を振り体勢を変えつつ、意識の覚醒を促すように首をひねる。視線を落とせば、まるゆは未だにスヤスヤと眠ったまま。

規則正しい呼吸音が聞こえてこなければ死んでいるようにも見え、くらい生気がないように思えて、手を伸ばしてまるゆの鼻の近くへ持っていく。

手のひらに細い息が当たるのを確認してほっと一息つき、ポケットから携帯電話を取り出した。

起き抜けで眠気の残滓はあるままだが、仕事から逃げ出す時のように執務室のソファで仮眠をとるよりも数倍、いや数十倍酷い現実逃避をかまして爆睡したのだから、相当な時間が経っているかもしれないと考えたのだ。

「……うわぁ」

金森にそそのかされて地下室へ足を踏み入れた正確な時間は分からないが、少なくとも昼をだいぶ過ぎたあたり。そうして今、携帯電話の画面が示す時刻はフタマルサンナ。

完全に寝すぎです。本当にありがとうございます。

いやむしろこんな状況で現実逃避をかまして眠れたこと自体驚きなのだが、それにしたって夢の一つも見ない熟睡とは。

自分で言うのもなんだが、ベッドの上でもないのに気力がこうも簡単に回復するくらい追い詰められていたのだと考えると改めて……海軍、やべえ仕事である。

さらにはその仕事に追い詰められたからと言って現実逃避に爆睡

をかましてから考えればいいや！ という精神を体現した俺、自分にドン引き。

「流石に、まあ、うん、戻るか……絶対怒られるわこれ」

寝起きこそ意識がぼんやりしていて現実逃避してしまうのでは？ と考えられそうなものだが、社畜ならば経験があることだろう。

睡眠を挟むと余計な事を考えない分、冷静かつ常識的な判断をするものなのだ。

さらには判断力が三割くらいアップする。(まもる比)

特に寝坊して会社に遅刻しそうな時。

「いよいよよ、と……」

「う、うん……」

「あー、すまん、眠いなあ、そうだなあ」

子供をあやすように言いながらまるゆを一度地面に寝かせたあと、上着の胸元についているいくつものバッジを外してズボンのポケットへ押し込む。それから上着を脱いで地面に敷き、まるゆをその上に寝かせた。

「隊、長……」

うーんこのモグラちゃん、いくら動かそうがスヤスヤである。可愛い。

まるゆを見下ろしながら立ち尽くしていても仕方がない、と携帯電話を再び取り出し、画面を睨む。

バックライトの眩しさに目を細めて眉を寄せながら、どうにか脱出する方法を考えねばと無意味にメールを開いてみたり、電話帳を開いてみたりするのだが、そも、この場所が地下であり圏外なので携帯電話そのものとして役に立たず。

せいぜいがカメラのライトで周囲を照らす程度のものだが、気持ちの悪い室内には椅子とテーブルの残骸だけで探索も意味が薄いように思われる。

黒色の壁が光を吸収しているようで、やはり薄暗い。

しかしながらこの地下室から出なければならぬわけで……まるゆがここに閉じ込められている期間を考えたら長峰少佐に確認を取

らねばならないことも山積み。

こんな事になるなら脱出ゲームとかで遊んでおくんだったなあ……やる時間とか無かったけど。

脱出ゲームをプレイしていれば、いつか地下室に閉じ込められたって大丈夫！

——なんて考えるわきゃねえだろ！ 誰がいつこんなところに閉じ込められるんだよ、普通に生活しててよおッ！

と、激おこまもるが顔を覗かせそうなので身体をさっさと動かす。寝る前に通気口らしき部分をあけてみてほしいとむつまがるが言っていたのを思い出し、ライトで照らしながら天井付近に取り付けられた金網をひとつずつ確認していく。

やはり風が吹き込んでくる気配はない。通気口ならば微風であれば吹き込んできそうなものだが、どこにも繋がっていないということはあるまいし……と、顔を近づけると、ふわりと何かの匂いに気づく。「なんだこれ、りんご……いや、消毒液……？」

果物のような匂いから甘さを抜いた香りがして、もしやこの先は食堂にでも繋がってるのではと考えたのだが、そうすれば音の一つくらい反響して聞こえて来たっていいはずなのにと否定が浮かぶ。

ならばこれは一体なんの香りなのだろうと思いつつ、金網の四隅にあるネジに触れた。

ざりざりとした感触がする。ライトで照らすと、若干さび付いているのが見えた。

これは簡単には外せないぞ……と、ドライバー代わりにならないか携帯電話の裏蓋を外して角をネジの駆動部へ突っ込み捻ってみるも、しっかりと取り付けられているようで、蓋がぐにやりと変形してしまふ。

無理に回そうとすれば蓋が割れるか、と携帯電話へ付け直した時、あ、と声を上げてポケットへ手を突っ込む。

「これなら……」

勲章のバッジである。丁度良く細くて薄いそれは、この環境下で一番ドライバーの形状に近い。不敬極まると怒られそうなものだが、緊

急事態だから許してくれるだろう。誰が許すかは知らんが。

本当に脱出ゲームの様相を呈してきたなどと考える一方で、懐かしい事を思い出して苦笑いしてしまう俺。

なにも頭がおかしくなったわけではない。いやちよつとおかしいかもしれないけどそういう意味ではなく、狂ったわけじゃないという意味である。

だから起きぬけた瞬間に何やってんだお前という目を向けなくてくださいむつまるさん。

まゆるを動かしたり上着を脱いだりして起きてしまった様子のむつまるは、まるゆの傍からふわふわと飛んで俺の傍へ来ると、溜息交じりに言う。

『まもる、何笑って遊んでるの……』

「遊んでねえよ！ 寝る前に開けろって言ってたのお前だろ！」

こそこそと反論する俺。

『楽しいの？ 大丈夫？』

「大丈夫だし楽しいわけじゃないって……昔の事を思い出したただだ」

昔の事をな、と噛み締めるように言ってから、その頃よりマシンな状況とは言いにくいのに、むつまるの言うように笑ってしまうくらいには、実のところちよつとだけ楽しいと思っている自分がいる。やつぱ頭やベえのかなと若干心配になる。自分のことなのに。

「昔な、仕事をしていて、どうしても時間が足りなかったことがあった。早朝から必死に仕事に取り組んでも、日付が変わっても終わらなかったんだ」

『前のお仕事の話……？』

「ああ」

ネジの駆動部は硬かったが、徐々にネジ山に隙間が出来てきたのか、回り始める。

「警備の見回りから隠れたりして、必死に仕事を進めた時を思い出した。こうやって真つ暗な中、明かりもつけずにああでもない、こうでもないとな。警備に見つかれば追い出されてしまうとヒヤヒヤしな

がら仕事をしたのを、思い出したんだ」

『まもる……大丈夫……？』

「大丈夫どころか、今の俺は軍人で提督だぞ？　俺より大変な仕事をしている奴だっているんだ、ここで泣き言なんて言ったられん」

でも心は社畜のままです！　ご安心ください！

「……つと、やつと外れたな」

右下の回りきったねじを指でつまんで引き抜くと、今度は対角線にある左上のネジを外し始める。

普通に回しては駆動部を潰しそうになるので何度か上下を変え、振動を与えつつ回すと、今度は先程よりも早くくるりと一回転する。

「うちの部は予算がギリギリでな。備品なんてのも全部ボロだったんだ。錆びて使い物にならなかつたりなんてザラにあつたぞ？　はさみだのホツチキスだのは備品に頼れないから個人で持ち込んでたくらいだ」

今となつては昔の話。ここでいくら愚痴をこぼしたところで過ぎた仕事が楽になるわけもなし。

文句を言うべきじゃあないよな、とまたも苦笑いして、どンドンネジを外していく。

時間は多少かかったが、ネジを全て外したあとに金網を掴んで引つ張ると、がしやん、と音を立てて外れた。

金網の裏側を見ると、壁側の面の方が錆びているのを不審に思い、むつまるに問う。

「内側だけどうして錆びるんだろうな？　それにほら、この匂い、わかるか？」

金網にも匂いは染みついていたようで、リンゴのような香りが指に付着していて、もう一度嗅いだ後に金網と指をずいっとむつまるに向ける。

『……うーん、なんだろう？　とにかく、ちよつと中を見てくるから待ってて！』

「あつ、おいー！」

そのまま通気口へ突っ込んで行くむつまる。

手持無沙汰になって、結局まるゆの傍に戻って座るくらいしかやることのない俺。

「隊長、今の話って」

「っ!? んんっ、起こしてしまったのか、まるゆ」

唐突に声をかけられて「きゃあああ!」とか声出そうになったよまるゆ。

もう少し優しくそつと話しかけてねまるゆ。まもるとの約束だよ。

慌てて姿勢を正して——と言っても、胡坐をかいたまま背筋を伸ばしただけ——まるゆに身体に異常はないか訊けば、首を振って大丈夫だと言った。

「まるゆは丈夫です。それに、入渠の許可をいただければ問題ないです」

「入渠の許可も何も、傷ついているのに入渠しない意味が分からんが」
言いながら、携帯のライトをつけてまるゆの身体を照らす。

艦隊これくしょんのグラフィックでは服が破れたり煤けたりして中破や大破を表現していたが、小破は文字だけだった。

それと照らし合わせて言えばまるゆは小破か中破、といった様子。

「どうして損傷したままこんな場所にいたのかは聞いたが、金森から入渠の許可はおりなかったのか」

まるゆの言葉通りなら、

「……はい」

訊くまでもないことだった。

「そ、それより隊長、さつき妖精さんが見えました。妖精さんとお話
が出来るのですか?」

「ああ、出来るぞ」

「では、今の話は妖精さんと……」

「うむ。ちよつとした昔話だ」

社畜時代のほろ苦い思い出です。

「……どうして、笑ってお話、できるんですか」

「うむ?」

「どれだけ厳しい任務であったか、まるゆには分かりませんが、でも、ど

うして笑っていられるんですか」

「え、あ、うー、む……そう、だなあ……」

昔の事だしなあ……。

今の状況で笑ってることに關しては自分でもやべえなって思ってるよ。

頭おかしいよね、うんうん、まもるもそう思います。

むつまるもやべえなこいつって顔してました。

しかしまるゆの言う任務というものと俺の仕事は違う。

勘違いさせないようにと俺は慎重に言葉を選びながら話した。

「海軍の任務ではない。昔の仕事の話だ。もちろん、人のためになる仕事ではあったが……少し、いやかなり、特殊な仕事だったものでな」

「海軍の任務では、ない……？」

「ああ、誰でも出来る仕事だよ。はたから見れば普通のな」

「……」

一応軍機であるため仔細は伏せるほかないが、嘘は吐けない。

これで納得してくれと言う俺に、まるゆはさらに問うた。

「ま、まるゆの、ような……任務でもなく……？」

「お前の任務は輸送が主だろう？ 昔の仕事で輸送なんて……」

書類を届けたり、商品を届けたり、契約を取ってきたりくらいで……。

「ま、まあ、輸送、とも言えなくはないか……」

「その他には、ど、どのような任務を」

目を輝かせるまるゆ。

やめてくれ、俺をそんな目で見るな浄化される。

社畜が浄化されて残るものは怨念と仕事だけだぞ。誰も幸せにならない。

「他にはと言われてもなあ……まるゆには悪いんだが、軍機で話せんのだ」

「ごめんね……文句は忠野と橘と井之上さんに言ってね……」。

「そ、そうですね、ごめんなさい！ まるゆ、気になって、あの「いいや、気にしないでくれ。まるゆが悪いんじゃない。全部海軍が

悪い」

はん、と笑って言うと、まるゆは困った顔を見せた。

「隊長は、海軍が嫌いですか……？」

ええ!? なんでもいきなり……。

「嫌いなものか。海軍が大好きとも言えんが、少なくとも決して嫌いなどとは考えていない。陸軍も嫌いではないし、どちらも必要なものだろう」

軍人大好き! というほどミリタリーに通じているわけではない。

でも艦娘は大好き。

「どちらも立派な仕事だ。だが、出来ればもう少し……平和な方がいいな」

しみじみと呟いてから、まるゆに顔を向ける。

「まるゆは、海軍が嫌いか？」

するとまるゆは、じつと俺を見つめた。

「嫌いかも、しれません」

それも、そうか。

これだけの仕打ちを受けたのだから、好きになれる要素が無い。

俺が海軍の人間であると知りながらも口にするくらいなんだから。

「そうか。だが、否定はできないな」

どんなクソ野郎でも名目上は金森は俺の部下にあたる。ならば無

関係と断じて責任逃れはあまりに凶々しい。

こうした声を受け止めるのも俺の役目なのかもしれない、と甘んじた。

「でも隊長は——」

まるゆが何かを言いかけた時、ぷし、と音が聞こえた。

次にエコーのように響くむつまるの声が近づいてくる。

『わあああああッ! ま、まもるううううう!』

「む……!?!」

立ち上がってむつまるが突っ込んで行った通気口を見る。

かしゃんと携帯電話が落ちて、ライトが天井を照らしたことであつすらと室内に光が満ちた。

それでもかなり暗いままだったが、通気口から飛び出してきたむつまるを目視した瞬間、悪ふざけでもなく、ただ事ではない雰囲気を感じ取る。

むつまるは俺の胸に飛び込んでくると、わたわたと「口と目を塞いで！ はやく！」と怒鳴る。

一体何が、と問う前に、その答えが通気口から漏れ出した。りんごのような香りが強く充満した瞬間、目に激痛が走る。

「ぐうっ……!?」

俺は瞬時にむつまるを両手で包み込み、まるゆに「立て！」と怒鳴る。

「隊長、どうし——わぶっ!?」

立ち上がったまるゆの足元に敷いたままの軍服を拾い上げて上着のポケットにむつまるを押し込むと、今度はそれをまるゆの頭の上にかぶせた。

「むぐう、むぐうう!? 隊長！ どうしたんですか！」

「まるゆ！ お前は潜水艦だろう!? ゲホッ……えっほ、げほ！ ごほッ！」

両目は焼けるように痛み涙が流れ、喉を内側からなんども引っかかるような不快感が襲う。

明らかに危険な気体だった。強いリンゴの香りを少し吸い込んだだけで鼻を突き抜けて頭痛までしてきた。

「息を止めろー！ 出来るだけ！ 長く！ ゲッホッ！ おえ……！」

既に胃の中は消化されて空っぽだったようで、吐き気のままに中身をぶちまけても粘度の高い唾液に胃液が混じったようなものしか出て来なかった。

身体が全力で拒絶しているのを肌で感じるくらい、苦しい。

『み、みどり剤だよ！ これ、みどり剤！ 外になんて繋がってなかった！ このままじゃ……!』

みどり剤ってなんだよと問う暇もない。

ポケットの中からくぐもったむつまるの声が言うも、既に俺に冷静さなんてものはなく、ただ苦しみから逃れんとする本能だけがあっ

た。

くだらなくて、しようもなく、本当に頭がおかしい男であると自認せざるを得ないことだった。

はやくこの苦しみから逃がさねば——まるゆを。

自分より丈夫で深海棲艦との戦闘以外でそうそう傷つくことのない艦娘を前にして、脆弱な存在であるただの社畜、あるいは国畜の男が一人、冷静さを欠く。

「ゲホツゴホツゴホツ！ おえ！ う、くっ……げほっ！」

「わあっ!? た、たいちよ——」

「喋るな！ 舌を噛む……げほオツ……舌を噛むぞ！ 息を止めていろ！ 命令ゲツホ……命令だ！」

軍服を被せたまるゆを抱えて走り出すと、入り口の階段へ向かう。

しかし、そこは途中で空間を断絶するような黒い天井で覆われており、現実逃避に就寝する前にも確認した通り、入って来た時に使ったファイルも機能しない。

冷静さを欠いていた俺はまるゆを左腕に抱えて、思い切り天井を殴り上げた。

ごん、と硬い音がして拳に衝撃が走る。

びくともしていないのは一目でわかっても、俺はもう必死で何度も天井を殴り上げた。

咳き込むたびに肺胞ひとつひとつが激痛を発し、舌の根元から喉にかけて不快感が行ったり来たり。両目の痛みにも何度も瞬きをしながら涙を流し、普段からペンしか握っていないひ弱な拳をこれでもかと振り上げる。

がごん、がごん、と連続する音。

へこみどころか、傷すらもつかないのが暗がりでも分かった。

「た、隊長！ やめてください！ 隊長！」

「ゲエエツ……オエツ……ゲホツ！ し、心配するなまるゆ！ だい、だいじよ、ゲエツホツ！ 大丈夫だ！ 絶対に助けてやる！ 問題はない！」

問題しかない。それでも俺はまるゆにそう言い切つてとにかく天

井を殴り続けた。

響きもしない殴打の音が室内に消えていく。

足元がふらつきはじめ、眩暈を起こした俺は階段の上から落ちそうになるも、まるゆを落とさないように足に力を込めて前へ身体を倒した。

勢いで天井に頭をぶつけたが、そのおかげで眩暈が消える。

「ぐあっ……げほっ……いー！　くそ、開けよお……ゲツホツ……いー！」

何度も、何度も、何度も何度も殴りつける。

白い手袋の拳が真っ赤に染まってもなお殴る。

意識を失いそうになれば殴る。その痛みで覚醒した身体で殴る。

どれくらい殴っていたかは分からない。

ただ、頭の片隅で一瞬だけ、無我の境地つて本当に何も考えない状態で、なら今の俺はその極致ではないんだろうな、と、それはもうくだらない事を考えていたことだけを、覚えている。

それらを塗りつぶすような、まるゆの金切り声も、耳にこびりついている。

「隊長！　や、やめ——やめてください！　隊長！　まるゆなんて、放っておいていいですから！」

「誰が放っておくか馬鹿者がッ！！　私は提督だぞッ！　安心してゲホッ……抱えられていろ！　いいなッ！」

がこ、べこ、という音がやけに軽くなり始めた頃、俺は、

「音がします長峰少佐！　何か下から——」

「中央じゃない、下を掘れ！　下だッ！」

「は、はいっ！」

「音が近づいてき——う、うわああッ!？」

「手、手が、人の手が！　少佐！」

「提督!？」

「海原閣下!？」

無我の境地とやらに、辿り着いたのだと思う。

黄泉比良坂を駆け足で戻った軍神。私はその言葉とこの光景を生涯忘れないだろうと、指示を出す事も出来ず立ち尽くして見つめていた。

将兵の一人がボールを放り出してしりもちをついて震えあがり、その他の将兵も十数秒、その光景を唾然して見ていた。

「提督！ 提督！」

大淀殿が呼ぶ声に気づいているのか否か分からないが、ただ、真つ赤な拳が空間ごと抉るように突き上げられ、瓦礫を押し退けて外へ出ようとしていた。

ばしやばしやと瓦礫に膝をぶつけながらしやがみ込んで、両手で周囲を掘り起こす大淀殿の行動にやっと正気を取り戻した将兵が「お下がりにください！ 我々が！」と突き上げられる拳の周囲にボールやスコップを突き立てる。

それから数分。地面が黒色の鉄とコンクリートの中間のような硬度のある素材で出来ていて、スコップやボールが欠けてしまわん勢いだという声を聞いた。

恐らくは大淀殿がそう言っていて、スコップが欠けてしまうのだと言ったのは将兵だ。

「……ざ……長……長峰少佐!!」

「っ！ ……も、申し訳ない！ 私もすぐに手伝う！」

「お願いします少佐！」

大淀殿の呼び声に意識を取り戻した私は、見取り図を放り出して掘削に加わろうと一步踏み出したが、ふと振り返って天津風を見る。

こんな地獄のようなものを見せなくてもいい。そんな思いで天津風へ執務室に戻るよう伝えようとしたが、彼女の目は見開かれたまま。

ここで掛けるべき言葉は、戻れ、なんかじゃない。私は意を決して言う。

「天津風、手伝ってくれるか」

「はいっ！」

天津風が加わった事によって艦娘二人分の膂力を得てからは、掘りだすまであつという間だった。

完全に口を開いた地獄へ続くかのような地下への道に立つ男、海原閣下は、ごつん、ざり、ごつん、ざり、とただ前を睨んで出てくる。

「て、提督……なぜ、こんなところに……」

全員が喉を鳴らして息を呑む。

彼は——ただ、こう言った。

「ま、るゆが……ゲホツ、泣い、て、いたんだ……艦娘が、泣いて……」
地下からもわりと上がる匂いに、う、と全員が口を塞いだ。

何があつたのだと覗いてもただ暗闇が広がるばかりで様子など分かつたものじゃなかったが、鼻や目を針で突くような刺激に覚えのない者などいなかっただろう。

——暴徒鎮圧用であろう催涙ガスが撒かれていたのだ。

それも現代の日本にあつてはならない類のものが。

果物と消毒液を混ぜ合わせたかのような刺激臭は、かつて暴徒の鎮圧用に使われたもので、現在は教育用にいくつか似せたものがある程度で、実際に使う事は固く禁じられた兵器として通用する毒物に分類されるもの。

それも相当量で、致死するものではなかったが、閉じた部屋で撒かれようものならば致死性がいくら低くとも危険極まる。

目や喉を焼かれ続ければ失明の危険も考えられ、誘発された嘔吐によつての窒息すらあり得る。

その証拠に海原閣下の口の周りは大量の嘔吐による喉の損傷で血液まじりの唾液が見てとれる。

真つ赤に濡れた右腕をだらりと垂らしながらも、しつかりと抱え込むよう折り曲げられた左腕にある血の跡がある軍服が、もぞ、と動いた。

大淀殿が海原閣下に近づき、そつと軍服を捲ると、そこには震えて涙を流す艦娘が抱えられていた。

「だ、から……出よう、と……だいじよ、ぶだと……」

「隊長っ……た、隊長、出られました……出られましたよ隊長っ……！」

「あ、あ……そう、か……まるゆ……痛く、ないか……」

「大丈夫です、まるゆは、どこも痛く……ないです……！」

「……ははっ」

そりや良かった。そう言っつて、海原閣下はその場に倒れるように座り込んだ。

大淀殿が慌ててまるゆをキャッチし、救護班をと叫ぶ。

周囲の将兵が走りだしたのを機に、私は口元を覆ったまま海原閣下が出て来た地下への入り口へ近づいて覗き込みながら言っつた。

「天津風、君の言っつていた特別拘禁室とは、このことか」

「は、はい、そうです……！ やっぱり、まだここに……！」

「なんてものを作っつていたんだ、金森提督は……」

トラウマが蘇っつてしまうかもという私の考えは、海原閣下の拳で打ち砕かれ、吹き飛ばされていった。

天津風は未だ恐怖していたものの、それでもはつきりと言っつた。

「このガスを撒いて、何日も、ここで艦娘を苦しめていたんです。私達は死なないからと……言っつう事を、聞くようになるまで……！」

「拷問、凌辱……何でもありだな」

座り込んだ格好のまま気を失っつてしまった海原閣下の背を見て、天津風は涙を流して言っつた。

「信じて、いいんですか……私は、本当に信じても」

覚悟を問われているのは、理解している。

しかし果たして私は海原閣下のように危険をかえりみず、このような事をやっつてのけられるだろうか？

分からない。

「……わから、ない」

「……」

だが、闇に触れた。

私の思い描く人を守るといっつう軍人と、海を守ると進む艦娘を汚した

闇に。

「でも、でもな、天津風」

眼鏡を押し上げて、私は初めて真正面から天津風を見た。

「戦えなくて立ち尽くすかもしれない。今だって驚いて動けなかった。それでも、逃げ出そうなんて気はないよ」

「……」

「戦えなくても、立ち続ける事に意味があるんだと教育隊で学んできた。だから私は……天津風の前に、皆の前に立ち続けるよ」

「うん……うん……っ、わか、り、ました……」

天津風はそうして、ぐし、と涙を袖で拭いてから大淀殿に抱えられたままのまるゆに近づいた。

「まるゆ、ごめん、ごめんね……私が逃げたり、しなかったら……！」「天津風さん……えへへ、お久しぶり、です……怒ってなんかいませんよ……」

二人は涙を流して手を握り合う。

大淀殿は複雑そうできて、それでも優しい笑みを浮かべて言った。

「あとの難しい話はゼーんぶ上官に任せて……今は休みましょう。ね？」

学び

「金森、支度をしろ」

一介の若き憲兵の生意気な物言いに慥然とする力も無かった。

金森は言われた通りに立ち上がり、将校であったが故に形だけ支給され続ける白いシャツの袖へと腕を通す。重たい軍服の上着がないだけ楽とも言えようが、既に数カ月と白いシャツに折り目の消えたクリーニングもしていない黄ばみはじめた白いズボンばかりで、囚人服となんら変わりのない感覚だった。

連日続いてきた取り調べも海原と電話してからばったりと止み、そこから不気味で静かな日々が続いた。

若い憲兵がいくらかいる故に疑心のままに罵倒されることなど日常茶飯事だったのに、それすらもなくなっていたのだ。

ただ淡々と、飯だ、風呂だ、運動だ、の三つを繰り返すだけ。

朝、昼、晩と決まった時間に飯を食う以外に昼過ぎに中庭に放り出され、高い高い塀の向こう側に見えるビルと空を眺めるのにも慣れてしまい、金森は魂が徐々に抜けていくように気力を失っていった。

いくつもの疑問符が頭の中をつつきまわしても、どうせ死ぬ、の一言で終わる。

後は死を待つだけだった。

今日こそが、その日だと思った。

「やっとか」

そう呟いた金森は扉に背を向けたまま狭い居室で着替えていたのだが、がしやんと扉が開いた音に驚いて振り返る。

「これは忘れ物だそうだ」

「なん——があッ!?!」

振り返ってすぐに視界は暗闇に閉ざされ、鼻っ柱を折らん勢いで殴打される。

つんとした強烈な痛みと、どろりとしたものが鼻と口を濡らしたが、突然のことにそれが鼻血であるとか、殴られる前にかけられた声は若い憲兵のものではなく、松岡中将のものであるなど考えられず。

反射的に暴れかける金森の両腕はあっという間に手錠がはめられ、さらに後頭部を殴られる。今度は、拳などではなかった。銃床である金属質な、ごき、という音を最後に金森は意識を失う。

* * *

「う…………お、あ…………？」

うめき声を漏らして目を覚ました金森は、まず眩しさに驚いた。

がやついた周囲の音、そして——目の前に座って新聞を広げる男の姿に、驚愕した。

「た、だの…………!? 何をして——!」

「おう、金森。久しぶりだな。裁判以来だからそうでもないか」

「貴様アツ…………!」

「落ち着かんか。全く、憲兵どもも手荒なものだ…………鼻の調子は「っ!?!」

自分が座らされていること、さらには目の前に湯気を立てたコーヒーが置かれていることに気づくと、金森の思考はゆっくりと回り始める。

金森には目もくれず新聞を読みふける忠野に言われて鼻元に手をやると、かさりとした乾いた血の感触がしたが、酷い痛みが残っているわけではない。

テーブルの上に置かれた黒い頭巾を忌々し気に叩き落として言う。

「血は、止まっている…………くそ、憲兵の奴らめ、ドタマまでぶん殴りやがった…………!」

「そうかそうか。後で診てもらえ」

診てもらえという言葉に、思考はどんどんと先細っていく。

周囲の景色は金森が二度と見る事のないと思っていた、街の景色だった。

場所はどこだと見回す金森だったが、忠野がウエイトレスを呼ぶ声に顔をぐりんと向ける。

「コーヒーのお代わりをもらえんか」

「はい、ただいまー」

若いウエイトレスは目を細めてしまいたくなるくらい眩しい笑顔で駆け寄って来て、忠野の前に置かれたカップにコーヒーを注ぐ。

「なん、なんつ、なんだ、これは、忠野……！」

「海軍の体制変更に伴って予定が大幅に変更されてしまったな、お前を迎えに行くのが遅くなったただけの話だ」

「は……？」

ぱたりと新聞をとじて、忠野は煙草を取り出して火を灯す。

それから煙草の箱を金森に向けた。戸惑う金森に忠野は笑う。

「もしや、これを機に禁煙しようと考えていたか？」

「い、いや、も……もらおう」

「つははは、まあ簡単には止められんよな。私も禁煙に成功した経験は一度や二度じゃ利かん」

「ふうう……忠野、説明してくれ、ど、どうということだこれは」

「うん？ だから言っただろう。海軍の体制変更で迎えが遅くなったと」

「そういう事じゃない！ 俺は憲兵に」

「あーあー、そんな事は分かっている。で、この私は誰だ？」

「は？」

「この私は、誰だ？ 知っているだろう、金森」

忠野はこういった話し方をする男だった。そう思い出した金森はかぶりを振って、それに乗っかる形で言葉を紡いだ。

「こうしなければ話を進めない気だろうか？ という顔をして。」

「情報部の、忠野中将閣下、だろう」

「そうだ。情報部は私のもので、一部を除く殆どは私の手中にある」
「……」

「故に、憲兵がどこの誰を捕まえようが、私が出せと言えば出すのだ。これでいいか？」

「それは、お前……！」

「つくづく、物事にはリアリティが必要だからな。さて、ここでは出来ん話もある。そのコーヒーを飲んだら移動するぞ。何か食うなら、こ

ここで済ませてもいいが」

ぱあつと表情を明るくして金森はコーヒーに口を付けたあと、ウエイトレスを呼びつける。

規則正しい生活が強制的に続けられたせいか、さして空腹など感じていなかったため、軽食を注文してそれを犬のように食った。

周りの目を気にする余裕などなく、ただ喜びと安心があった。

「舞鶴はどうなって、むぐ……どうなってる」

サンドイッチで口の中をいっぱいにして殆ど噛まずに呑み込みながら問う金森に、忠野は畳んで置いた新聞記事に視線を落としてつまらなそうに文字をなぞりつつ答えた。

「長峰大尉——今は少佐だったか。その女性士官が舞鶴に着任している」

「長峰え……？」

「眼鏡を掛けた別嬪さんだよ。今の舞鶴鎮守府は異臭騒ぎで閉鎖中……外部倉庫群に加えて外部倉庫周辺の民間工場やオフィスを一時的に借り上げて近隣地域の一部を舞鶴鎮守府として運用している状態だ」

「っ」

異臭騒ぎ、という言葉に喉を詰ませたのを見て忠野はへらへらと笑った。

「お気に入りだったか知らんが、大改築せねばならんで取り壊しは避けられんぞ。それでお前、どこで催涙薬剤を手に入れた。それに未報告の深海棲艦の残骸も発見されたぞ」

「……」

「作ったのか？」

「いや……」

「なら、楠木からのプレゼントか」

「……」

無言は肯定とはよく言ったもので、金森の表情を見ただけでそうと断ずるに充分なものだった。

「楠木の事を言っても仕方がない、というやつだな。どうあれ日本で

購入しようとなればどうしたって足がつく。私が調べても分からんという事は日本国外から仕入れたものだろうと予想を口にしただけだが、間違いじゃないならそれでいい。しかしな金森、あれはやりすぎだ。鹵獲されたか引き揚げられたような深海棲艦の残骸を解体した形跡も見つかったとあれば、握り潰すほかないじゃないか」

「くっ……楠木がヘマをしなければ——！ それに貴様とて知らぬ存ぜぬを通していただろうが！」

「私が知っていたとなれば立場が傾くだろう？ 馬鹿のフリをするなよ金森。私にもお前にも立場があつた、だから知らなかった、そうして組織の瓦解を避けていたと口にせねば分かん阿呆じゃあるまいが」

「……ちイッ」

ぐしゃんと汚い音を立ててサンドイッチの残りを一口で食べきると、コーヒーをぐっと煽った金森は大きく溜息を吐いた。

「食べ終わったか。さて、では行こう」

「ど、どこへ行くんだ」

「艦政本部だ。今は情報部も兼任しているから新築したんだ。過ごし易いと思うが」

立ち上がった忠野に追いつがる金森。

オープンテラスであつたためか、テーブルへ金を置いて悠々と歩いていく忠野の行動に金森は表情を再び明るくした。

カフェらしき場所から徒歩十数分で到着したのは、なんてことはない、普通のオフィスビルだった。二十階建てほどの小奇麗なビルは、どうにもまだ建築途中のようで、ブルーシートが屋上付近ではためいていた。

中に入ると、ビニールに覆われた床や、鉄骨、多くの作業員が目に入る。

海軍の軍人や軍属らしき者も多くおり、ともに作業をしていた。

「話すことは多くある、が……お前にあてがう部屋を用意したのでそこで全て話すでしょう。コーヒーだろうが酒だろうが構わんが……」

ああ、いや、酒はまずいか……アルコール以外ならば用意出来るが、注文はあるか？」

エレベーターに乗り込み、忠野はなんの刻印もされていないボタンの一つを押す。

ごうんと音を立てて動き出したエレベーター内で、金森は鼻元を指でかいて乾いた鼻血を落としながら「コーヒーでいい」と言った。

忠野はスマホを取り出して「コーヒーを二つ用意してくれ」と言つてすぐにスマホをしまう。

ああ、戻つて来た、まだ俺は終わつちやいない！

蛇のような奴で気に入らないとは思つていたが、なんだこいつ、案外使えるじゃないかと金森はほくそ笑んだ。

「艦政本部も情報部も、となれば楽じゃない。まあ、井之上元帥閣下や海原元帥閣下に比べるべくもないのだろうが、役割分担とはかように重要なのかと頭が痛くなるよ。お前の処遇も憲兵に投げっぱなしにするわけにもいかんからと、こうして海軍の尻拭いに奔走させられる」

「……や、やりすぎ、は、認めるが」

忠野は驚いた表情をしてみせた。

「なんだ金森、反省しているのか」

「ああ、艦娘を抑え込む以外にも人権派を徹底的に潰すべきだったのだ……！」

「……ほう？」

忠野の声が地に落ちる。

金森は熱のこもった声で齒の隙間から押し出すように言った。

「八代も拘留中か？ それとも既にやられたか？」

「八代は生きているぞ。収容所は別だが」

「では海原についたらしい清水や山元はどうなってる」

「山元は呉鎮守府に据えられたまま、清水も似たようなものだ」

エレベーターの扉が開かれ、忠野が歩き出すと金森は後ろについていきながらさらに声を上げる。

「海軍の体制変更というのも突然過ぎる！ 呉が押されようが佐世保

は南方からくる深海棲艦を追い払っていただろうが！ 宿毛湾にだって撃退用にわざわざ道具を出してやっていたというのに……ッ！」

「道具、か」

「ああそうだ、アレがあれば深海棲艦は近寄っては来ない！ 楠木が開発したものだから間違いないし舞鶴でも実証済みだ。あの戦果を見ただろう！」

確かに、と忠野は笑った。

舞鶴は常に戦果を挙げ続けていた。神出鬼没な深海棲艦を決して鎮守府に近寄らせず、安全地帯からどんどんと送り込まれる艦娘の群れに深海棲艦が攻め込んできたのではなく、深海棲艦が攻め込まれているとまで称されたほどだ。

「道具というのは、執務室のやつか？」

ほれ、あの、と言いながら左手の手のひらを上に向けて、右手の人差し指でボタンを押すようなジェスチャーをする忠野に、金森は不敵な笑みで頷く。

「あれは素晴らしいものだ。ただの電波一つで深海棲艦どもが面白いくらいに進路を変えるのだ！」

「楠木はそれを、なんと？」

「深海棲艦の司令塔らしき個体から幾つかサンプルを採り合成した電波らしい。人型から得られた情報が一番有用だったと俺に譲ってくれたのだ。あいつらは電波によって進路を決定し、攻撃対象を定める」

「それは分かっているが、どうして電波を発することで進路を変更できるんだ。攻撃目標が目の前にいれば電波を受けても攻撃してきそうなものだが」

「ああ？ 艦政本部ではそんな事も分かっておらんのか？」

「あいにくとな」

「っは、なら楠木は秘匿したままくたばったのだな。電波は電波でも、あれは《深海棲艦が助けを求める声》なのだそう。つくく、化け物の癖に、助けを求める声には攻撃せんのだと。面白いとは思わんか

！」

「……実に興味深い」

「楠木は認めたがらなかったが、あいつも生真面目な奴だったからな。攻撃性個体群の中でもあの電波を発生させることが出来るのは人型のみと言っていた。人型と言えば強力な個体だ、そりゃあ司令塔の助けを求める声に攻撃するほど馬鹿ではないとも言える。それをあいつは使いたくないと駄々をこねるんだ！ あいつらは助けを求めるべきじゃないとな！ つは、何を馬鹿なことを……化け物が人間社会に与することもおかしいのだから当然だろうがそんなこと！ なあ！」

「金森、ついたぞ」

「お、おお、そうかそう、か……」

自慢気に身振り手振りを交えて語った金森が見たのは、ただっ広い空間に、四方を透明な壁に囲まれた部屋のようなのがぼつりとある場所。

異様に天井が低く黒いことを除けば、それは金森が舞鶴鎮守府にいた頃の執務室とそっくりだった。

周囲にはその透明な壁の部屋以外は椅子が一つとテーブルが一つあるだけ。

それだけじゃなく、金森はその透明な部屋に見覚えがあった。

大きなダブルベッドに、壁にいくつもおかれた時計や酒瓶、勲章の数々。

ごく丁寧なことにそれらの支えすらも透明なもので構成されている異様な部屋に、ごくくりと喉が鳴る。

「なんだ、忠野、これは何なんだ……」

「何だ、だど？ おかしなことを言うなよ金森。お前の部屋じゃないか」

「は……？」

「おかしいな。長峰少佐の証言通りの部屋にしたはずだが……少佐は記憶力に関してはずば抜けていてな、時計の位置まで指定してきたのだぞ？ うーむ、どこが間違っているか教えてくれんか、すぐに修正

させるから」

「ま、待て、待て忠野、お前は俺を助けに来たんじゃ——」
「うん？ おかしなことを言うな、助けたじゃないか。その証拠に陸軍憲兵ばかりの収容所から、海軍に戻れた。だろう？ いや、私はな金森、お前の部屋を再現したアレに間違いがあるなら修正せねばならんからと聞いているんだ」

金森は胸元をおさえて息を荒げ、どういふことだと何度も呟く。
それを尻目に忠野はオールバックに撫でつけられた白髪交じりの髪をかきわけるようにガリガリとかいて言う。

「うーむ、これではデータに変動が出ると明石達に叱られてしまうな……よ、よし、金森、コーヒーを飲みながらでいいから少し待て、な！ おーい！ 誰か手の空いている奴はいないか！」

白々しく慌てた様子を見せた忠野が声を上げると、部屋のどこかからぱたぱたと足音が聞こえてくる。

金森がびくりとそちらに振り返ると、そこには桃色の髪をした艦娘が一人。

「はいはい！ お帰りなさい忠野中将！ って、あら、もう来たんですね金森さん！ いらっしやいませー！」

「き、きき、貴様、貴様は、あ、あか……」

「工作艦、明石ですー！ あ、そうすると皆明石だ……えーっと、あんまり好きじゃないんですけど、海軍ではアカサタナで登録されてるので、私はサ号にあたりますね！ 明石サ号ですー！」

ニコニコした明石サ号と名乗った艦娘は忠野に顔を向けて首を傾げる。

「で、忠野中将、用事ですか？ 調剤ならもう少しかかりそうですけど……」

「いやなに、金森の執務室を再現したアレに間違いがあるかもしれないのだ。そうするとお前達も困るだろうから金森に聞いて修正をだな」
「えー!? あれ作るのにどれだけ時間かけたと思ってるんですかあ！

もおおお！ ちゃんと聞いておいてくださいよおー！」

「すまんすまん、長峰少佐も忙しかったから引き留め続けるのも悪い

と思つて……再三、間違ひはないか？ と聞かれては気分も悪からう。それに舞鶴鎮守府の艦娘のケアでバタバタしているのだから、任務ではない事に時間を使わせ続けるのもなあ」

「まあ、そういう理由ならあ……私達だつてまだまだ調査しなきゃいけない事が山積みなんですから！ 実験環境を整える時は迅速に！ ですよ！」

「ははは、そうだな。ああ、それとコーヒーは……」

「それはもうあちらのテーブルに二つ置いてます！ じゃ、金森さん、コーヒーを飲む時間くらいは取りますけど、あの部屋で間違つてるところを早速——」

「ひ、ひいつ!? 忠野貴様、一体何をするつもりだ！」

「んだもう……大声を出さないきなり」

耳を押さえて不快そうな顔をした忠野は金森を置いてテーブルへ近寄り、ひとつしかかない椅子に座つてコーヒーを飲み始めた。

テーブルはまるで部屋を観察するかのような位置にあり、金森の想像はどんどんと嫌なものを突き付ける。

「答える忠野ッ！ 貴様、裏切るつもりか！」

「裏切るものにも、最初からお前の味方だとは一言も言つておらんが」「はあ!?!」

「質問には答えただろう？ 思い出してみる」

術中。これが忠野のやり方である。

思い返しても金森の質問には確かに答えていたし、おかしいことは無かつた。

ただ、彼はこうして金森をけむに巻いただけに過ぎない。

「一応時間通りには到着したはずなの、だがあ……んー、まあ、憲兵も忙しいということかね」

カップを優雅に傾けながら、忠野は腕時計を確認して呟く。

「き、さまあああああッ！」

どたどたと走り出した金森は、勢いよく拳を振り上げた。

ばちんと音がしたが、そこに痛みに転がる忠野の姿はなく。

コーヒーカップを持ったまま、中身も零さずのんびりと啜る音だけ

があった。

それに、金森の拳を片手で受け止め、みしりと握る姿。

「ぐあつ……!?!」

「そうだ、金森。艦娘や深海棲艦が常に変化し続けるように、我々にも変化が起こっているようなのだ。まあ、これも後で話すことになるだろうが、冷静に聞いて欲しい」

「は、離せっ！ くそ、いいいつ!?!」

みしり、みし、みし。

手袋越しに掴まれていて滑りそうなのに、その上から万力で押さえられたように動かせず、金森は悶絶しながら叫んだ。

「がああああああッ！ わ、分かった！ 聞くから離せ！ 頼むッ！

離してくれエッ！」

「ぴいぴいと、子どもじゃあるまいし……軍人が聞いて呆れる。収容所で運動くらいしなかったのかお前は」

ぱ、と手を離されて、後ろへ逃れようとしていた金森はそのまま尻もちをついて顔を恐怖一色に染め上げる。

「まだ変化の薄い私で良かったと喜べ。そも、これのお陰で海軍は体制変更も相まって大騒ぎなのだぞ、まったく」

苦々しそうに言う忠野の声に、遠くから明石の声が。

しかしそれは先程金森に話しかけて来た明石とは別のものだった。

金森に話しかけて来た明石は透明な部屋に入っていて、ああでもない、こうでもないクリップボードを見ながら壁に飾られた腕時計をパズルのように入れ替えていたからだ。

照明に照らされた中央の透明な部屋ではなく、だだっ広い空間の端の暗がりからだ。

「いいじゃないですかあ！ もしも溺れたら私達が助けてあげますからー！」

「笑いごとではないッ！ 海を泳げない海兵がいてたまるか！」

「あはははは！ 海原閣下よりマシじゃないですか。柱島泊地みたいな場所だとお外に出るのも一苦労ですよ？」

「……あの方は問題無かろう。どうせあの一件で艦娘が放してくれん

だろうからな」

「あ、あははー……そりゃあ忠野中将が片腕ボロボロにして帰って来たら、私達も似たようなもんかもしれないから、ノーコメントで……」

「ふん。ああ、すまん金森、で、コーヒーは飲まんのか？ 飲みながらでいいから明石に時計の位置を——」

狂気の空間、そこに金森の自由意志など無かった。

泣けど叫べど、もう逃げられない。ここで死ぬのか、と思った。

だが自分は死を求めているはずじゃないかと気丈な考えが浮かぶも、即座に、砕かれる。

「金森？ 大丈夫か？」

「あ、うあつ……！ くそ、お、俺を、どうするつもりだ……！」

尻もちをついたまま恐れ戦く金森の問い。

「どうする、か、それはまあ、私の口から言うのも酷というものだ。あまり虐めんでくれ」

ははは、と笑う顔に、酷などという生ぬるい言葉があるわけもない。

こいつは今からしようとしていることで何かを得ようとしている。

そう考え、金森は手の一つでも噛んでやると唾を飛ばしながら怒鳴った。

「っは、はは！ 簡単には殺さないつもりだな！ 実験と称して拷問でもするつもりだろう！ その拷問で俺が口を割るとでも思っていたのか!? 馬鹿め！ 大馬鹿野郎め！ 海原がどうなったかなど知ったことではないが、片腕がボロボロになったと!? 命からがらの拘禁室から逃げ出せたらしいなあ！」

海原と話してから松岡に何度か殴り飛ばされたが、それ以降動きは一切無かった。

とすれば、相当な容態であると窺える。

催涙ガスで苦しみぬいて片腕が壊れるくらいに暴れ回って、なんとか救出されたのだろうが、しばらくは使い物にならないだろうとゲタゲタと声を上げて笑った。

「ひ、ひひひははははは！ あーはっはっはっは！ 俺の言う事を聞

いておけば深海棲艦を掌握し続け日本どころか世界をも意のままに出来たというのに、貴様らは愚か者だ！ 艦娘も、深海棲艦も！ 所詮は我々の道具なんだよ！」

「その道具の中でも自分に逆らえそうにもない娘を選び、慰み者にしたのか」

「ははは、は……あ……？」

「なるほどな。お前の性根がよく理解出来たよ金森。お前は大言壮語を吐き散らし、任務を忘れ情欲に溺れ、そのスカスカな賢しい頭と節穴と見紛う両目で逆らわぬ者を選び、時に部屋でなぶ鬻り、時に拘禁室と名付けた地下室に連れ込んで催涙ガスで苦しめ洗脳じみたことをしていたわけだ」

忠野はコーヒーカップを静かに置くと、テーブルに肘をついて、足をすくると組んだ。

「戦艦や重巡、軽巡、空母と言った気の強い艦娘は好かんか？ それとも、真正面から断られて二度三度と怒鳴りつけても意見が変わらぬようであれば心が折れたか？」

「う、うううるさいッ！ 黙れッ！」

「駆逐艦であれば自分よりも小さく上から見下ろせる。何度怒鳴っても意見を変えないとあれば強硬手段もとりやすい。そうした艦娘らを拘禁室へ連れ込んで催涙ガス責めにして安全な執務室からマイク越しに《言うことを聞けば止めてやる》と言えば、たやすく言うことを聞いてくれるようになったか？」

「あああああああッ！ くそッ！ くそがッ！ 黙れえええええッ！」

行き場のない羞恥や悔しき、怒りと言った感情で地面を何度も殴りつける金森を、哀れなものを見る目つきをして見下した忠野は続けて言う。

金森が逃げ出さないのは、周りが見えていないのか、はたまた周りを見ていて逃げられないと考えているからこそその、この行動なのか。「いくらお前であれ少なからずくだらんプライドがあつたわけだ。そのプライドを守るため、艦娘を虐げるのに必死で楠木から寄越された

技術を使つて、自分の秘密基地を作り上げたのだな？　まるで、分別のない子どものように」

準備出来ました、という明石の声と同じくして、暗がりから、ごっつん、と軍靴の音が響き渡る。

ぬう、と暗闇から姿を見せたのは、白い軍服では無かった。

目深に被った緑の軍帽に金の紋章。その奥から猛禽類のような眼光が金森の心臓を射抜く。

「ヒイツ!？」

「……数日ぶりだな、金森イ」

松岡忠——憲兵という名の猟犬の手綱を握る男は、にい、と歯を見せた。

笑つたのではなく、本当に歯を見せたのだ。まるで噛み殺してやると言わんばかりに。

軍帽からのぞく髪から滴る水が、恐ろしさを増幅させるようだった。

「遅刻だぞ松岡中将。どうした、らしくもない」

「貴様ら海軍の身体検査のお陰で遅れたのだ。海軍は相も変わらずとろとろ、とろとろと、何が《苦しいとかありませんか?》《痛いところはありませんか?》だ、嘘つきだらけな上に任務まで満足にこなせんとは聞いて呆れる。髪の毛を乾かしましようかなどと床屋みたいなことを言い始めたのだぞ」

「ははは、濡れたままでは風邪を引くだろうから心配してくれたのだよ」

「そこまでひ弱なわけがあるか!」

刺々しい言葉に忠野は笑いながらちらりと金森を見た後、すぐに松岡へ視線を移してテーブルに置かれたもう一つのコーヒーを指差して言った。

「コーヒーを用意しておいたから飲むといい。座るか?」

「っはん、誰が貴様の用意したものなど口にするか。ここに来る前に食事も済ませてある」

「つれないなあ松岡中将。一緒に海原閣下に仕事を任された仲ではな

いか、なあ？」

「貴様は海原閣下に言われるがまま俺が調べ上げた証言を届いてないだのと隠蔽しただろうが！ 忘れたとは言わせんぞ！」

「はて、そのような事があったかな……あの時、私は海原閣下から届いてないかと問われて、まだ届いていないと、そのような会話をした記憶しかないのだ。なんなら通信記録でも——」

「貴様の出す情報は信用できるが信頼はしてない！」

「はは、それもそうか。だがこうして場を設けたじゃないか。これからここで話すことに偽りは一切ないと誓うとも」

「そのどこを信用すればいいのだか」

「——元帥閣下兩名に誓おう。それに、この艦娘を証人にしても構わん」

「……ならば結構」

松岡は不満げなままではあったが、ツカツカとテーブルへ歩み寄って乱暴な手つきでコーヒーカップを取ると、一気に煽ってがつんとテーブルに置いた。

「で、あれが例の部屋か？」

松岡が問えば、忠野は頷く。

「趣味の悪い部屋だ。しかしこれぞ陸軍式とも言えよう。感謝するぞ」

「松岡中将、お前……感謝出来たんだな……？」

「貴様にではない！ これを作ったのは、ほら、艦娘なのだろう」

「それはそうだが」

「艦娘に感謝しただけだ。勘違いするなよボンクラ」

「これは厳しいお言葉をどうも。まあ、情報部だの艦政本部だのと名乗っておきながらこの体たらくだ、甘んじて受けよう」

「……我々憲兵も同じようなものだがな」

「ははは、互いに肩身が狭いもんだな。つと、そうだ……明石、一本いいかー」

松岡と忠野は刺々しい言葉を交わしあう。

その間に挟まる明石の「どうぞー」という場違いに明るい声に、松

岡の表情が幾分か和らいだ。

「いいのか？」

確認する松岡に、忠野は苦笑いした。

「いや、どこも禁煙、禁煙で落ち着けんから我儘をな。ここなら構わんそうだ」

「では、失礼して」

そうして二人は懐から煙草を取り出し、火を灯して紫煙をくゆらせる。

しばらく、ぽかんとする金森を置いて沈黙が続いたが、それも終わりを告げるのだった。

「さ、て……金森、時間だ」

「は？　じ、時間？」

* * *

「だ、出せ！　ここから出せ！　くそあああああッ！」

松岡にひつつかまれて《透明な執務室》に入れられた金森は、暴れ回った。

出せ、出せ、と怒鳴りながら壁に掛けられたものを全て薙ぎ飛ばし、ベッドを蹴り、棚を殴り倒し、半狂乱に唾を散らす。

壁を殴りつけようとも傷もつけられず、ただ、無機質なノイズにのって部屋に響く忠野の声が耳をひっかく。

《どうだ、懐かしかりう金森。自分の部屋なんだからくつろいで聞いてくれ》

「があああああッ！　クソツタレがあつ！　出せえええええッ！」

《すまんが松岡中将との取引でな、出すわけにはいかんだ。証言記録の改竄、あ、いやいや、証言記録の通達時間の修正は軍規に反するのだが、松岡中将閣下の寛大なお心で不問にしていただいている身でな。死刑にならない代わりに、お前は今後、その部屋で過ごすことになる。さらには恩赦という特典付きだぞ、ラッキーだろう？》

「はあっ……はあっ……ぐっ……」

ぜえぜえと肩で息をしながら壁に手をつけて恨めしい憎悪の視線を壁の向こうに佇む松岡と忠野に向ける金森に、為す術など無かった。

もう正常な判断など出来る状態でもなく、部屋に入れられる前に着せられた軍服も、どういった意図なのかさえ考えられない。

《……松岡中将、何か金森に言っておくことはあるか?》

《何故、今なんだ》

《そりゃあ、この後はいくら声をかけても、なあ》

《……言うことなど……いや、自分の過去を柵に上げて一つだけ、言わせてもらいたい》

忠野が持つ小さなマイクが松岡へ手渡され、声が明瞭に室内に届いた。

《潜水艦、まるゆを覚えているか?》

「……」

金森は睨むばかりで、声は無く。

《おそらく、忘れていたのだろうな。あれはよく人に忘れられる。かく言う俺も忘れていなかったかと言われたら堂々と首を縦に振ることはできん。だが、これでもまるゆは陸軍所属の艦娘だった。だから、私が代わりにこの面を下げって言わせてもらう。まるゆが、世話になったな》

マイクを忠野に押し返したあとは、松岡は腕組みをして仁王立ちのまま金森をずっと睨み返していた。

《……との事だ。軍規だの義理だのとうるさい男だとは私も思っているが、海軍の広い心で許してやろうではないか金森。な? 今からお前は明石達が再現したその部屋の中で実験に協力してもらおうことになる。難しい実験ではないから、落ち着いて聞けよ》

「畜生どもがッ! 誰が貴様に協力などするかッ! 殺すならばさっさとしろッ!」

《えー、舞鶴鎮守府にて発見された特別拘禁室と称される部屋の機能を再現してある。その部屋の天井が執務室のものと別物であると気

づいているだろうが、天井部分のみを舞鶴鎮守府から届けられた拘禁室の素材と同じものに変えてある。金森には今回、その天井を——破壊してもらおう。時間制限は設けないので、気楽に考えてほしい」

「は、あ……？ 天井、を、は、かい……しろ、だと……？ ま、待て！ 何を言っている！ こんなもの破壊出来るわけがないだろうが！ 拘禁室の天井は——！」

《そうだ。拘禁室で使われていたのは不思議な素材だった。鉄と同等かそれ以上の硬度でありながら、量産しようと思えば可能である素材であることは既に明石達の調査によって判明している。それは駆逐級の深海棲艦の外殻とコンクリートを混ぜたものであり、建築材の強度として申し分ないものだ。どんな神経をしていたら残骸を砕いてコンクリートに混ぜ込もうと思えるのかは定かではないが……んんっ、失礼、話が逸れたな。恩赦の内容は簡単だ。そちらからは見えないかもしれないが、その天井より上に空間がある。金森がいる場所から天井の向こうが見えた時点で釈放とする。天井を破壊したか否かの判断は、その部分に描かれた文字を私か明石達の誰かに伝えればいい。気の利いた言葉を選んだんだ。な？ 簡単だろう》

「は、破壊できるわけがない！ 無理だ！ こんなものを破壊出来るのは艦娘しかいない！ それも艦装を装着した状態の艦娘だ！ くそ、出す気はないんだろうッ！」

《馬鹿を言うな。それでは実験の意味がないだろうが。破壊出来るからこそ実験して再現性を確認しようとしているんだ》

「そんなもの——！」

《海原閣下は素手で天井をぶち破ったらしい。私は実際にその現場を確認してきた。血だらけだったよ》

「は……？」

《この実験の本質だ。現在、海軍では大至急調査せねばならない事項にあたる。艦娘の指揮官となり妖精という存在が見えるようになった人間に変化が起きているのだ。一つは、身体能力の大幅な向上——だが、向上に伴う強度の変化は未だ不明のまま、金森にはそれを証明してもらおうと、そういう実験だな》

「ふ、ふざけ」

金森の声を遮り、話は続く。

《さらに不思議なことに、身体能力の大幅な向上とは裏腹に——水泳能力を失うとの話が出ている。清水を覚えているだろうか？ お前の部下でもあったのだし、先ほど話にも出た清水だ。どうやらその清水が水難事故に遭ってしまったらしくてな……ああ、安心して欲しいが、なんら問題は無い。どうやら船上から転落してしまったらしいんだが、随伴していた龍鳳という艦娘が引き上げたそうさ》

「そんな事を聞いているのではないツ!!」

《そうか？ では話を続けるぞ。金森は妖精を見た事があるか?》

「そんな非現実なものが見えるわけがあるかツ！ キチガイどもがツ！」

《……そうか。明石、記録を》

ぞろぞろと同じ姿をした桃色の影が部屋を取り囲み、クリップボードを片手にニコニコとした顔を向け、金森はいよいよ恐怖した。

「ひいっ」

《それも有用なデータとなるそうさ。妖精の見えない状態の指揮官であったお前に身体能力の変化が起きているか否かは重要で貴重なデータになるから、安心してほしい。今後の海軍に大いに役立つだろう。この実験の目的は二つ、今言った身体能力の向上に加えて——クロアセトフェノンに対する反応の変化を確認したい。これについては艦娘ですら等しく悶絶するものだから、データがあってもなくてもいいんだが、一応な、一応》

「そ、れは……ッ！」

《では——実証実験を開始する。問題があれば遠慮なく言ってくれ》

その言葉を皮切りに、ぶしゅう、という音が室内に響いた。

周囲の明石達が一斉にガスマスクを装着し、カリカリとクリップボードにペンを走らせ始める。

「がああああッ!? ゲホッ!? ゴホッゴホッ!! め、目が! ぐあああああッ! くそ、くそ、くそくそくそくそ! クソオオオオアアアアアアアッ!」

ベッドに駆け寄りシーツをはぎ取って口元に当てようとした金森だが、その瞬間に強烈な香りに襲われて顔を離し咳き込んでしまう。咳き込んだ瞬間に催涙ガスを吸引し、さらに咳き込み、のたうちまわった。

「ぐあ、香水——!? ゲエエエエホッ！ オエエエエエエツ！ ゲホツゲホツ！ や、やべでぐれ！ 頼む！ だのむがらっ！ ゲホツ！ も、もう艦娘に暴力なんでふるわないがらっ！ ゲホオツ！ ゲエエツ！」

「ああ、すまん、この実験前に食事をさせたのは失敗だったな。まあしっかり吐けたのだから問題はないか。早く天井を破壊しろ、新鮮な空気もそこにあるぞ」

「ぐぞつぐぞがッ！ ゲホッ！ ああああああッ！」

異様に低い天井に向かって腕を伸ばし拳をぶち当てるも、その感触は無慈悲なまでに硬く、ごり、と音を立てた。

「ぐううううッ！ い、いだい……いだいいいッ！ ゲホオツ！」
そこに救いは無い。ただ、明石達がデータを収集するためにペンを走らせるだけ。

明石達の隙間からうつすらと見える忠野と松岡は、さぞ愉悦に満ちた顔で見ているのだろうと怨念を込めた視線を向けたが——。

彼らは既に眼中にないと言わんばかりに、別の明石にコーヒーをいれてもらっているではないか。煙をくゆらせ、会話している。

「ぐぞ、ぜ、ぜっだい、出て、やる、ゴホッ！ ゴッホオオツ！ オエエエツ」

がつん、がつん、と天井を殴るも、ヒビも入らない。

もうダメだ、ここで死ぬ、そう思っても、催涙ガスでの窒息を狙うには絶望的だった。

咳き込めば咳き込むほど胸や喉が痛むが、その分しっかりと酸素を得るために吸い込んでしまう。身体が反応してしまうのだ。

目がどれだけ痛んでも涙がそれを流す。その涙に染みてもさらに涙があふれ、激痛は変わらず継続する。

咳き込み過ぎて喉が切れて血反吐が出て殴り続けた。

しかし、びくともせず。

「む、無理だッ！ ごんなもの無理にぎまつでる！ ゲホッ！ 頼むがらごろじでくれええええええええええッ！」

懇願する金森の叫びに、一人の明石が動いた。

振り返って何かを忠野に伝えてその場を離れる。

吐しゃ物にまみれてうずくまった金森の目の前に、がらん、と何か
が投げ込まれた。

ボールだ。

「こ、これ、これをづがえは……ッ」

ひつつかんで猛烈な勢いで天井に突き立てれば、かきん、と金属音がして傷がついた。

「あ……」

金森がつけた傷は小指にも満たず、ひつかいたような跡がついただけ。

これではどれだけ時間がかかるか分からない。しかし、撒かれた催涙ガスが止まったことで、さらに金森の動きが激しくなる。

今のうちに、今のうちに天井を少しでも崩さねばと火事場の馬鹿力が発揮された。

小指程度の傷が、第一関節まで埋まるほどになると、そこからどんどんと掘っていく。

ボールを持つ手が無理に振り回した衝撃で血と吐しゃ物に塗れても止まらずに掘り続けた。

これなら、これなら、と何度も頭で念仏のように唱えた金森を、再び催涙ガスが襲い来る。

「ぐ、そ、またかあああああッ！ ゲエホッ！ ガハアッ！ ざぜでだまるがああああッ！」

文字通り決死に暴れ回った結果、天井にとうとう、小さな穴が開いた。

どれだけの時間が経ったのか、いや、そんなには経っていないはずだ。

せいぜい数時間の苦しみだった。

金森は死に体でせいぜいとベッドを引っ張って来て上にのり、天井へ顔を近づけて小さな穴をのぞき込む。

「はあ、はあ……み、見えた！ 文字がみえだああッ！ 忠野おとおおー！」

《おお！ 素晴らしいぞ金森！ それで、そこにはなんて書いてある！》

「ゲホッ、エホッ……はあ、はあ……」

立ち上がって明石達を割って部屋の前まで来た忠野に、金森は言う。

「わ、わた、しは……」

《ああ、ああ、ゆっくりでいいぞ》

天井に貼り付けられている紙には大きな文字があり、小さな穴からでも何とか読むことができた。

「私は、この、日本海軍と、人々の、ために立ち上がった艦娘に、報いる、ため……」

金森の声から力が抜けていく。

「この、実験の、続行、を、のぞみま、す……？」

《金森、それは本当か？》

「あ、ああ！ げほっ、そうだ！ そうやって書いて——！」

《なんと見上げた愛国心か……素晴らしいぞ金森。なあ、松岡中将》

《そうか、ついに反省をしたというわけだな。では健闘を祈るぞ、金森！》

嘘だ。

天井から恐る恐る透明な壁の向こうを見た金森の目には、今度こそ笑った松岡の顔があった。

「ち、違う、違うだろ……これを読んだら、俺は、ここから……」

《死ぬことはないが無茶が必要な実験だ、頑張れよ金森》

忠野が顎を振って指示すると、明石達はまたぞろぞろと部屋から離れていく。

「ま、待て……待ってくれッ！ 待てエッ！」

《では、私も松岡も任務があるので戻らせてもらう。食事は朝昼晩と

出るから、安心して実験を続けてくれ》

がごん、と天井が動き出し、スライドして傷一つない天井が金森を覆った。

忠野と松岡は部屋へ背を向けて歩いていく。

「頼むウツ！ ま、待てえええええッ！ 出してくれええええッ！

いやだああああッ！」

集音マイクのノイズ音、それから、綺麗な女の声に、金森から「ひゅ」と変な呼吸が漏れ出した。

《実験を続けましょう、金森さん！ 明石達にお任せください！》

学び② 【鎮side】

罰だ、罰が当たった。あれは完全に天罰だ。

鞆を大淀に持ってもらった状態で歩きながら、きよろきよると周りを興味深そうに見るまるゆを眺めて現実逃避する俺。

「面白いものでもあったか？」

「はいっ！ 久しぶりに出たので変わってるところも多いなあ、とー」

「それもそうか……。よし、まるゆ、アイスでも食べて帰るか」

「いいんですか!？」

「提督……?」

「……んんっ、艦娘は、ほら、甘味で戦意高揚するだろう?」

「鎮守府に戻るのに戦意高揚する必要があるとは思えません」

正論パンチするな。俺にも心があるんだぞ。

舞鶴鎮守府での一件から二日と少し過ぎた頃。

地下室から命からがら脱出した俺はそのまま気を失ってしまい、舞鶴鎮守府の医務室で目覚めた。

右腕は包帯ぐるぐる巻き。頭にまで包帯を巻かれた状態で両目は痛いわ喉も痛いわで散々な目に遭った。

右腕尺骨、橈骨ともに骨折。

右上腕骨の不全骨折。裂傷、打撲、その他もろもろ……。

目が覚めてから長峰少佐と大淀から聞かされた話によると、あそこは金森提督が秘匿していた部屋で、天津風のみならず多くの艦娘を閉じ込める拘禁室だったという。金森とも電話で話していたからこれはすぐに呑み込めた。

艦これの同人誌などでたまに見る営倉に似たようなものだろうか、と納得しかけたが、反省を促すための部屋が牢屋になっている上に妙なガスまで噴き出す仕様とか意味が分からん。

やば過ぎんか海軍。いや海軍自体に責任を求めるものでもないか。金森だ金森。

海軍が問題に挙げられたら俺にも責任が降りかかってくる。勘弁してください。もう遅いけども。

天津風を泣かせやがってこんにやろう！ と癩癩に任せて行動し金森にそのかさされ、地下室に閉じ込められた上に妙なガスで死にかけましたとか笑い話にもならない。

地下室に閉じ込められてまるゆを発見した時点で大声でも上げて助けを求めるべきだと言うのに、俺の中にいる悪魔の囁きにあつさりと負けて現実逃避に爆睡をかまして仕事をさぼる始末。

はい、そうですね。完全に自業自得です。

誰も擁護できません。まもるでもできません。

寧ろ片腕ボロボロになる程度の天罰で済んで良かったのかもしれない。

しかしエンジェル大淀もこれには激おこで、舞鶴から呉へ向かう道中ではずつと冷たいままである。

それでも荷物は持つてくれるんだから優しいね。流石大淀様だね。

「お、大淀、悪かったと思っっているよ。私も油断していた」

「へえ？」

大淀と俺の間を歩くまるゆは気まずそうな顔をして俺達を見上げる。

「あ、あのつ、まるゆがあんなところにいたから……」

「まるゆさんは悪くありませんよ？ 私が我儘を言って困らせているだけです。提督ならば他の方法を思いつきそうなものだな、と。ええ、そう思わなくもないだけですから」

「大淀お……」

もう仕事サボらないから許してえ……ごめんてえ……。

あんまりに情けない声を上げたからか、大淀は困ったように笑って包帯を首から垂らして支えられる右腕をちらりと見てから言った。

「……天津風さんのためでもあったんですよね」

「それは——」

天津風のためというか……あまつん泣かせやがってこの野郎という個人的感情というか……。

「……し、仕事として、艦娘の扱いに対して、だな、そのお」

もごもごといい訳を考える俺に、大淀は、ぷは、と笑った。

「分かっていますよ。あなたの事ですもの」

「大淀お……！」

ほっと胸をなでおろす俺。そんな胸のポケットから顔を出すむつまる。

『まあ、チョロい提督にバチがあたった感じだよねえ』

誰がチョロい提督じゃい！

でも仰る通りでございます。異論ございません。

しかしあの部屋でまるゆと同じく妙なガスに晒されたむつまるは大丈夫だったのだろうか、と今になって気になり視線を向けると、むつまるは何故かセクシーポーズ。

なんだこいつ。

『むつまるのみりよくにきづいたんだね？』

「……あ、いや」

『じゃあなに？』

「お前は大丈夫かな、と」

隣を歩く二人に聞こえないよう咳払い交じりにこっそり問えば、むつまるはニツコリと笑った。

『うん。だって、まもってくれたでしょ？』

そうだったか？ 掴んでポケットに突っ込んだ覚えしかない。

必死だったことを除いてもあの状況で周りを飛び回られたら鬱陶しいことこの上なかったであろうことは確かだ。確実に叩き落とすてたに違いない。

「私は覚えておらんがな」

ただそのまま伝えたら絶対にぶん殴られるので言わない。まもるは賢いのだ。

『……ふふっ』

「隊長も大淀さんも、喧嘩してないですか……？ もう、平気ですか……？」

むつまるが引つ込むと同時にまるゆの声が聞こえ、俺と大淀は顔を見合わせる。

「喧嘩なんてしていないぞ。いつもこんなものだ」

いっつも怒られっぱなしです。今回は特に顕著です。

「こんな感じですか。さ、アイスを食べるんですかね？　まるゆさんはどこか寄りたいですか？」

「いいんですか!？」

「せっかいですし、提督のお言葉に甘えましょう」

「うむ、いくらでも甘えてくれ」

まるゆは正義だからね、甘えてくれたら俺の心の傷も癒えるというものだ。

わあ、と声を上げて駆けていく無邪気で愛らしい後ろ姿を見ながら、大淀に言う。

「水着のままではないんだな」

「はい？」

いやごめん気になっただけなんです変な下心はありませんほんと。アイスクリーム屋に駆けていくまるゆは白いワンピース姿である。

幼子が白いスクール水着のまま駆け回っていたら、それはそれである案であるからして、ねえ？

「入渠して損傷はなくなりましたが、まるゆは今後、艦娘として軍務に従事できるだろうかと考えていた」

真面目な言葉で塗りつぶす俺に、大淀は帰路につく前までの事を思い返すように空を見上げながら話す。

「軍務についても、天津風さんとの関係修復についても、気にしなくても大丈夫でしょう。こういう言い方はあまりよろしくないでしょうが、金森提督という共通の脅威を前にして互いを支えあうという形で舞鶴鎮守府は維持されてきましたから。環境が変わった今、長峰少佐の判断はもつともであったかと思えます」

俺と大淀がまるゆを連れてくる理由でもあった。

長峰少佐は俺が地下室から脱出したあと、大淀と一緒になって艦娘への聞き取り調査を開始したのである。もちろん、翌日になって、だが。

前に所属していた大淀の協力もあって調査は非常にスムーズであったという。

艦娘の轟沈数の差異も問題無く修正され、情報は大本営に送られた。

舞鶴鎮守府の改築が順次行われる予定も前倒しどころか一気に進めることとなり、舞鶴鎮守府は一時閉鎖された。

名目上は、俺に下された天罰、もといガス漏れのため緊急改築とするらしい。

長峰少佐は大淀と同じく仕事が早いもので、その日に大本営を納得させて舞鶴鎮守府の機能が停止してしまわないよう周辺地域に協力要請まで出したというじゃないか。美人なだけじゃなくて有能とかモテそうである。すげえや長峰さん。

そして行方不明扱いであったまるゆは、今後のことを考えて柱島泊地が引き取るという形に落ち着いた。

活動範囲然り、潜水艦を有効活用できるのは柱島泊地でしょう、とは長峰少佐の言葉である。艦これの知識を持っている俺より有能である。

かくいう俺は何をしていたか？ 寝てました。

いや分かる、言いたい事は分かっているが待つてほしい。

きつと妖精も艦娘達も長峰少佐も「こいつほんまっつかえねえ」みたいにいる事だろう。

でも変なリング臭が辛かったんだよおおおお！ 仕方ないじゃん！！

痛み自体は数時間もせず落ち着いたが、あんまりに暴れ回ったせいで俺の身体はボロボロだったのだ。

当然だね。

あのリングガス（まもる命名）は、むつまるから聞くに通称みどり剤と呼ばれるもので、暴徒鎮圧用の催涙ガスだという。

どうしてそれがあの地下室でばら撒かれたのかは考えるまでもないが、ああして艦娘を苦しめていたという負の側面を知れただけでも収穫と言えよう。

俺が帰ってからの仕事が増えたようなものである。これも俺のせいだね。

全拠点での艦娘に対する扱いを今一度確認しなければならぬのは、やはり最優先事項だ。

「忠野中将閣下が現場を確認しに舞鶴鎮守府を訪問するそうです」「そうか」

「じゃあもう全部忠野に任せておけばいいよ。俺は帰って寝る。」

「あの地下室に使われていた建材は、明らかに――」

「そんな事はどうでもいい」

「ああもうやめて大淀！ 分かったから！ ゼーんぶ分かった！

「分かった上で、あのような行動を？」

「分かっている分かっている、大淀が言いたいことも言っていることも全部分かっているから。」

「全部分かった。すごい分かった。これ以上ないくらい分かった。要するにあれだろ？ うんうん、分かっている分かっている。」

「ああするしかないと思ったのだ」

「そうだね、何やってんだお前って話ですよね。」

「慌てふためいてまるゆを抱えて天井を殴るとか狂ってるよね。」

「今なら忠野や橘が狂人と言っていた理由がわかる。俺、狂ってました。」

「あなたは一人なんですよ」

「アイスクリーム屋の店先でどれを食べようか迷ってワクワクしているまるゆを見つめながら言う大淀に言い返す。」

「まるゆだって一人だろう」

「それにお前も、と付け加えれば、大淀はそつと手を伸ばし――

「いつ……!?! な、何をするんだっ」

「俺の右腕を指で弾いた。こいつ、強硬手段を……!」

「提督が艦娘を、私達を心配してくれるように……私達も提督を心配してるんです。こうも無茶ばかりされては、いつか倒れてしまいますよ」

「む、むう……」

「ごめん……今度から真面目に仕事しますう……」

「それについては、その、申し訳ない」

「もう、そんな顔をして」

大淀は柔らかな笑みを浮かべて、まるゆが離れてひらいた距離を埋めるように近づいてきた。

それから左肩の上に頭を乗せ、鞆の持ち手を指で撫でながら言う。「すつごく怖かったんですよ、あの時のまもるさん」

「……」

めっっちゃ言うじゃん。謝ってんのにめっっちゃ責めるじゃん。やめて。

しかもまもるさんって言いながら責めないで。俺の心もボロボロだあッ！

「あなたが傷つくのを見るのは、嫌なんですからね」

「ん、んんっ……うむ、そうか」

落として上げるな。まもるはチョロいんだから。そうやって掌握するな。

帰ったらいっぱい仕事頑張ります!! 社畜はへこたれませえん!!

「隊長! 隊長! この、みんとちよこれーとって何ですか!」

すげえチョイスじゃんまるゆ。

俺は笑いながら大淀に肘を当てて歩き出す。

「まるゆにはまだ早い味かもしれんなあ」

「えー、そ、そうでしょうか……で、ではバニラを……」

「ふふ、いいじゃないですか提督。じゃあまるゆさん、私がバニラを頼みますので、まるゆさんはミントチョコレートを頼んでください。二人で半分ずつ食べましょう?」

「いいんですか? やったあ!」

あの地下で絶望していたまるゆは、どうして笑えるのだろうか。

ふと考えてしまった俺の表情は、どういったものか分からない。

「隊長は何を頼みますか?」

「では抹茶味を頼もうか」

「し、しぶい……! じゃあまるゆも抹茶を……」

「うん? ミントチョコはいいのか?」

「隊長と一緒にいいです!」

「じゃあ私もミントチョコにしよう」

「ええ!? あう……」

「はいはい、じゃあ全部頼みましょう。支払いは提督持ちですから」
「そ、それはどうなんだ大淀」

「あら、いけませんか?」

「構わんが……」

「まるゆさん、これで提督と一緒に食べられますよ」
「やったあ!」

しかし、艦娘が笑顔ならそれでいいか、と思考を放棄してしまう、どうしようもない俺なのだった。

* * *

終わると思った? 残念、終わりませんでした。

「どれだけ心配したと思ってるの提督!! まったくまったく! まったくだよ! もうっ!!」

「す、すまん最上……これは仕方がないことで……」

「仕方がないで済んだら海軍はいりませーん! 鳳翔さんと大淀さんから行方不明になったって聞いてどれだけ不安だったか分かるかい!?!」

「う、うむう……」

先程までは和気藹々とした雰囲気だったが、呉鎮守府に到着した瞬間これである。

しかし反論すら出来ない。一言一句間違っていないし全部俺が悪い。

「まあまあ最上殿。こうして海原閣下も戻られましたから」

「山元大佐は黙っててください!」

「……」

モガミンに負ける筋肉達磨。この役立たずがよオツ!

舞鶴へ出発した日、広島で別れた最上は柱島泊地へ帰還する前に俺が居なくなっただけを聞かされたらしく、万が一があった場合はすぐに動けるようにと呉鎮守府で今までずっと待機してくれていたらし

い。

山元にも迷惑をかける結果となり、まもる消えそうです。

「山元も迷惑をかけたな、本当にすまなかつた」

ここまで怒られては素直に謝る以外の行動も出来ないというもので、俺は帽子を取って頭を下げる。

「いやいやいや！ おやめください閣下！ ああもう心臓に悪い、頭を上げてくださいって！ 自分は大丈夫ですから！」

事情を知っているが体裁もある。

そんな小難しい立場である山元は大きな身体を縮こまらせて、俺を気遣うように肩をそつと押しして起き上がらせる。

山元お前え……！

「話は忠野中将と長峰少佐を通して多少は聞いております。さぞ大変だったでしょうが、海原閣下のことですし心配していません。さぞ大変ではありませんが……さして問題にもならんだろうと、どーんと構えていた次第。聞きましたぞお、豪腕をふるって、艦娘を救うために天井をぶち抜いたと！」

うーんこいつもダメだ。全然味方じゃねえや。この筋肉バカ！

天井をぶち抜いたわけがねえだろうが。天井殴って半狂乱になつてるところを、大淀と長峰少佐が掘り出してくれたんだよ。なんなんだこの珍事件は。

「ち、違うぞ山元、それは——」

「山元大佐の仰る通りです。目の前で見せられたら驚くなんてものではありませんでしたよ」

くそつ！ だめだ大淀の援護射撃まで！

こうなると俺の敗北は確定したも同然。

両腕を組んで仁王立ちしていた最上は俺の腕を見て目を潤ませながら怒鳴る。

「もお！ 馬鹿！ 馬鹿馬鹿！ 提督の馬鹿！」

俺の心、轟沈。

「……すまん」

今にも膝をついてしまいそうなくらい項垂れる俺。

「海原閣下、それはそれとして一つ気になる話を聞きましたな。お疲れのところ申し訳ありませんが、ここで話す事ではありませんから執務室にでも」

切り替え下手くそか！ でもありがとう山元。

ぷりぷり怒っていたかと思えばまるゆを見て「新しい仲間だね、よろしく！」と笑うモガミンを連れ、正門から執務室へ。

通りすがりに敬礼したり手を振ってくれたりする呉鎮守府の艦娘達に癒されつつ歩くと、ああ帰って来たなあ、と実感する。

ほどなくして到着した執務室に入ると駆逐艦曙が出迎えてくれた。しかし――

「ああ、おかえりクソ提督——って、う、海原さん！ 大丈夫ですか!？」

俺にはクソ提督って言ってくれないんだ曙……。

「うむ。問題無いぞ。山元から何も聞いておらんのか?」

「聞いてました、けど……クソ提督は、海原さんなら大丈夫だって……ちよつとあんた！ 話と違うじゃないの!」

「や、やめんか曙、みなの前で……！ 私は、海原閣下ならば問題無く軍務に復帰するから心配はいらんと、そういう意味で——!」

「誰がそんな心配すんのよ！ 普通は怪我の方を心配するでしょ! ほんつとうにどうしようもないわね、シャキツとしなさいよ!」

「……うむう」

「はあ、ほんつと……お茶でいいの?」
「頼む……」

縮こまる山元。ダメだ使えねえ。俺と同じ部類の人間じゃねえかよ。

気まずそうな顔をしているのは俺と山元だけである。

どうぞ、という山元の声に俺が応接用ソファに座ると、大淀達は俺の後ろに立つ。

「大淀殿はどうか海原閣下の横に。まるゆ殿と最上殿は、そうですね……おい、曙!」

「少しくらい待ちなさいよ！ すぐにお茶持っていくから!」

ほどなくしてお盆に人数分の湯呑を載せてやってきた曙は、山元の

表情を一目見て、俺と山元の前に湯呑を置き、もう一つ余分に湯呑を置いたかと思えば、で？　と言う。

「二人を案内してくれるか？　最上殿はともかく、まるゆ殿は呉鎮守府を知らんだろうから」

「……あ、つそ。分かったわ。じゃあ、二人とも行きましよう？」

「えっ、ま、まるゆは隊長と——」

「僕も提督と——」

山元が内密に話をしたいのは俺でも分かったので、二人を安心させるように「すまんが仕事の話だ。帰ったら大淀から話をしてもらうから」と言った。

すると二人はしぶしぶながら曙とともに執務室を出て行き、ぱたり、と扉が閉まる。

扉が閉まつてから暫く湯呑の茶を啜るだけの時間が過ぎたが、ようやく山元が口を開いた時、あるワードに俺の表情が引き締まった。

「海原閣下に聞きたい話がありまして……というより、確認ですな。閣下が舞鶴へ行っている間、清水から事故に遭ったと連絡を受けまして」

「事故だと？　それで、大丈夫だったのか清水は」

「ええ、清水は無事です。岩川基地と鹿屋基地で合同演習を行うとのことで、演習海域の巡回をしようと龍鳳を随伴に小型船で鹿児島湾に出た時に、船から落ちたと」

「何をやってるんだ清水は……」

船から落ちるって、水面でも覗き込んだのかよ……馬鹿じゃん……。

「艦隊これくしょんでは、深海棲艦は喋るのですかね？」

「……山元、何が言いたい」

ぐつと硬くなる俺の表情に、大淀がお茶を飲む手を止めた。

「大淀殿も海原閣下の出自をご存じであるが故に同席を願いましたが、広めるべきか否か迷いましたな」

山元の言う通り、俺の出自を知る者は限られる。

柱島泊地の全艦娘が知っているからと言っても、みだりにゲームの

話を現実と照らし合わせるべきではないとして、大淀と世間話でふと触れる以外は話すことなんて殆ど無かった。

それこそ、大淀と俺が互いを知るとき以来していない。

「海原閣下は、深海棲艦の声を聞いたことはありますか？」

「……どつちの意味だ」

「どちらでも」

俺は湯呑を持ち上げて、ふう、と湯気を吹き飛ばしながら答えた。

「——あると言えば、ある。ゲームでも、ここでも。ここで聞いたのは第二次大侵攻の時、大淀達が深海海月姫と戦闘をしていた時だ。通信に入り込んだ声を聞いた」

「で、ありますか。ゲームではどのような声を？」

「似たようなものだった。シズメだの、カエレだの、おおよそ怨念めいたものばかりだぞ。ボスマスと呼ばれる海域で接敵した時の出現ボイスがそれにあたる」

「ううむ……」

山元は顔をしかめてぱつぱつの腕を組み、唸る。

「それで、清水とそれに何の関係があるんだ。あいつも声が聞こえたのか」

「端的に言えば、そうではありません。しかし深海棲艦はその場におらず、龍鳳の索敵範囲内にはいなかったというのです。清水の聞いた声というのも妙なものでしてな……」

「妙、というと？」

「助けを求めていたと言うのです。それから、船から落ちて慌てて海からあがろうとした清水が、足を掴まれて引つ張られた、と」

「……」

怪談じゃあるまいし、と思う反面、助けを求めていたという声に思い当たる節がないわけじゃない俺も山元のように唸ってしまふ。

大淀の顔は先程から緊張しており、真っ白だった。

「大淀殿、申し訳ない。大変だったでしょうに突然このような話を」

「い、いえ、私は、その……」

俺は大淀の太ももをぱしんと軽く叩きながら、山元へ言う。

セクハラじゃないです。まもるは大丈夫です。でへへ。

「思い当たる節がある。特に人型であれば、あり得ない話ではないだろう。艦隊これくしょんに出てくる深海棲艦は正体不明の敵として描かれていたが、様々な説があった。その中でも私は艦娘と深海棲艦が対の存在であり、一種の姿であると考えている。映像作品でもそのような描写があった」

俺がこれを初めて伝えたのは柱島泊地の戦艦長門だったか。

のちに大淀を含む柱島泊地の艦娘達は驚愕に目を剥いていたが、目の前で険しい顔をしたまま腕組みして指をとんとんと動かす山元は——ふむ、と言うだけだった。

「そうすると、助けを求めている理由は……沈んでしまった艦娘であるから、という？」

「うむ。私はそう考えている。沈んだ艦娘が深海棲艦であり、人型に近づけば近づくほど、それは艦娘と変わらぬ存在であるとな。そうして大淀達は正規空母サラトガを救い出した」

「シズメ、と言って攻撃してくるのに、助けを求めているなど……」
「難しく考えることはないだろう」

俺は応接テーブルに置かれた新聞紙を指差し、これは何だと問う。

「本日の新聞ですが——」

「そう、新聞だな。ではこうしよう」

広げ、折り曲げ、裏返して再び問う。

「これは何だ？」

「ですから、本日の——あ、ああ……」

「そういう事だ。様々な記事の載るもので日付が変われば内容も変わるが、これは間違いなく新聞紙だろう。我々人間も艦娘も同じで、姿形がどうあれ存在の本質は決して変わらん。気にすべきことはもつと別のことではないか？」

「ま、待っていたら……なら、この戦争は一体なんの意味が——」

山元が言わんとしている事を、俺は痛む喉から声を押し出して止めた。

「——言葉を慎め山元、我々が提督であることを失念するな」
「つ……し、失礼、しました……閣下」

この戦争の意味も意義も知らないし分からない。

俺はただ艦娘が好きだから笑っていて欲しいだけで、幸せに生きて欲しいだけである。

「大義名分も正義も必要ない。そもそも私はこの戦いに意味など求めていない」

「……」

「救いを求めているならば救う。それが、私の仕事だ」

まもるとして言えば艦娘が幸せならオツケーです！ である。

鎮として言うならば、それこそが提督としての俺の仕事で、使命である。

しかしこんな空気でのどのような言葉を紡ぐべきか分からない俺は、その場から逃げ出すことしか出来なかった。

情けない限りだが、頭を冷やさねば、それ以上に何も言えなかった。

「お手洗いを借りる」

「……っは」

立ち上がってその場から逃げ出した俺はやっぱり、最低なのだろう。

「はあ。大淀殿、失礼しました」

「いえ……あはは、あれ、おかしいですね、すみません、私」

「……どうぞ、こちらを。恰好良くハンカチの一つでも渡せたら良かったのですが」

「ふふ、それは海原提督にお願いします。ティッシュ、もらいますね」
「ええ」

「ぐすっ……私達は、艦娘で、人じゃないのに、ふふ。何を考えているんでしょう、私は」

「大淀殿、先ほどの言葉は取り消します。本当に不躰でありました。」

申し訳ない。海原閣下の仰っていた通り、私が気にすべきは些末なことではありませんでした」

「頭を上げてください、大佐」

「……しかし、やはり閣下は変わりませんな。お言葉一つで戦争の意味すらひっくり返してしまうとは。忠野中将閣下にも橘中将閣下にも繋がねばならぬ身としては、頭が痛い限りですなあ。海原閣下のように言えば、中間管理職、というやつですか。どうやって話すべきか……はあ」

「ふふつ、山元大佐も、変わりましたね」

「いやなに、反省しっぱなしでありますとも。こうして自分が生きているのも、呉鎮守府の椅子に座って艦娘にせっつかれているのも、全て閣下のお心遣いのお陰です。清水も同じように粉骨碎身しておりますから、私に連絡をくれたのです。郷田先輩も——ああ、いや、岩川基地の」

「お話しやすい方で、大丈夫です」

「これはこれは、大淀殿にも今後は頭をあげられませんな……郷田先輩にも伝えたそうなのですが、どうやら同じ声を聞いたことがある、と言うのです。それに最近、自分の身体が妙でして」

「妙？」

「ええ、ずっと調子が良いと言いますか、まるで若返ったかのような……」

「それは軍務に励む理由の一つですか？」

「ははは、そうとも言えますな。しかし、こう、力が湧き上がる感じがするのです。以前ならばすぐにバテてしまいそうな訓練でさえ、全く疲労せず、今じゃ三倍の訓練でようやく疲れるくらいで」

「それは……」

「ふと考えれば、妖精が見えるようになってから調子が良いな、と。もしかすると艦娘のように妖精に力を分けてもらっているのかもしれないと考えていますが、海原閣下も同じようなものでしょうか」

「提督はいつも倒れるまで仕事していますから、力が湧き上がっているのかどうかなんてわかりません。いくら止めても気づけば仕事仕

事と……はあ」

「がはは！ 頼もしい限りですなあ！ しかし、無茶ばかりされるのも頭痛の種になる、と」

「山元大佐からも一言お願いしますよ、もう」

「自分は部下でありますから、腑抜けたことを抜かすな！ と叱られてしまいます。曙や那珂にも、せつつかれておるのですから！」

「困りものですねえ」

「……はは」

「大佐？」

「いえ、こうして大淀殿と話せるくらいには、認めていただけたのかと」

「……提督のために動いてくれるのなら、それに越したことはありません」

「当然ですとも。この命は、私をお救いくださった閣下と、この国のためにありますから。もちろん、艦娘の皆に報いるためにも」

「こちらからもよろしくお願いします、山元大佐」

* * *

お手洗いどこだっけ、と迷子になりかけた俺は呆れ返ったむつまの案内によって無事に用を足して執務室に戻って来た。いつもすみませんねほんと。

ティッシュを丸めてゴミ箱に捨てている山元と、あ、と声を上げて顔をそむけた大淀に訝し気な表情をしてしまう俺。

「おお、閣下、どうぞ」

「う、うむ……」

え？ な、なん、これなんの空気？ 大丈夫？

十八禁みたいな展開ない？ 大淀に変な事してない？ 平気？

「大淀、どうした。大丈夫か？」

俺が顔を向けて問えば、彼女は目を伏せたまま「はい」と短く返事する。

山元を見れば気まずそうである癖に口角の上がった変な表情をしていて、嫌な想像がフルスロットル。

「山元、お前大淀に何を——」

立ち上がる俺、驚いて両手も首もぶんぶん振り出す山元。

俺の足に縋りついて「わ、わあああつ！ 違うんです提督！」と声を上げる大淀。

混沌と化す執務室。

「構わん大淀、言え！ 何があつた！」

「で、ですから何でもないんですって提督！」

「落ち着いてください閣下！ 大淀殿のためにも！」

「山元お前、大淀のために落ち着けとは何事だアツ!？」

艦娘パワーに勝てるはずもなく座らされてしまい、事情を聞いて静かになるまでに、たった一分の出来事だった。

「……と、取り乱してすまん」

「なあに、閣下に心配されて気に入らん者などおりません！ 自分の浅慮のせいでありますから！ ははは！」

なに笑ってんだ、原因はお前じゃねえか筋肉テメエツ！

「落ち着いてください、もうっ」

すみません大淀様。まもるが全部悪かったです。

と、そんなやり取りもそこそこに、清水の話はどうなったのだと聞けば、かいつまんで説明しなおしてくれる山元。物覚え悪くてごめんね。

艦娘以外のことはあんま考えてないからね。

「——では清水は海に入ると途端に足が動かなくなると？」

俺の言葉に付け足すように言葉を紡ぎ、頷く山元。

「ええ、不可視の手に掴まれるようだよ、というのです。眉唾とも言い切れません。なにせ我々海軍は艦娘を擁する組織、未知の力を運用しておりますからな」

「ふうむ……お前は試したか？」

単純な問いに山元は首を傾げた。

「試したとは」

「海に入ってみたか？」

「い、いえいえ！　いくら自分とて、危険な可能性をおいそれと試すな
ど！」

そりや溺れちゃうような深さでやったら危ないけどよ。

「浅瀬で試せばよかろう。艦娘を連れて実験してみればいい。なんなら私が――」

「何を仰るんですか提督！　ダメに決まってるでしょう!？」

「え、ええっ!？」

大淀に止められて逆に驚く俺。

いや試さなきゃだめじゃないのそれ!?　仕事でしょこれも!?

確かに話を聞けば恐ろしいが、艦娘がいて浅瀬で試せば溺れたりしないだろうし、何より足を掴まれて動けなくなるというのが想像しづらい。

海に足をつけるだけの仕事なら任せてください！　重要でもんねそれ！

すっげえ楽そうじゃん！（本音）

「し、しかし仕事で――」

「自分の状態を分かって言ってるなら怒りますよ!」

「う、腕を海につけなければ足くらい……」

「足くらいとは何ですか！　足くらいとは!」

怒ってる大淀怖いって……怒鳴らないでほしいでち……。

「ん、んんっ、大淀殿の仰ることはもっともかと。しかし検証せねば分からないのも確かです。それについては自分が安全を考慮して検証し、結果を忠野中将へお伝えします。妖精が見えるようになったという大きな変化に伴ったものであるなら、さらなる調査が必要ですからな。そちらへは、そうですね……あきつ丸殿に持たせればよろしいでしょうか」

「はい、山元大佐。危険な検証になるかもしれませんが、どうかご無理なさらず」

待って大淀、それ俺の仕事だよ、大淀ちよっと。

しかも艦娘と妖精に関する仕事なら一番最初に俺が動かなきゃだ

めなやつだよ。

「では、後日改めてそのように。さ、帰り際に立ち寄っていたいて時間を取らせてしまいましたな！ 柱島泊地までお送りしましょう」

「お茶、ぐちそうさまです」

「いえいえ、茶菓子も出さず申し訳ない。おつと、そうだ、土産の一つでもお持ちください。最近ようやく近所の方々と挨拶できるようになりましてな、その時におすそ分けいただいたものでありますが」

「あら、すみません、そんな」

「なあに、全員に配布したつて余るくらいいただきましたからな。叱咤激励のお言葉はその倍ほど」

「ふふふ、良い兆候ではないですか」

「住民のぐ寛大なお心と優しさに触れるたび、自分の情けなさに悔恨の情がわくばかりですよ」

ちよつと、あの。

「しばしお待ちを……おお、曙、長々と話し込んですまんかったな。閣下がお帰りになるから護衛部隊を、ああ、そうだ、頼む。それと土産の方を——そうだそうだ、それだ。手間をかける」

スマホを取り出し、ささつと連絡した山元は、さあ帰れと言わんばかりに立ち上がって「どうぞ」などと言いやがる。

俺？ 大淀に連れられて出たよ。必死に「うむ」とか言つてな。クソオツ！

こうして、長い長い舞鶴鎮守府の視察は終わりを告げた。ついでに仕事も増えた。

柱島泊地に到着してからの話は、語るまでもないだろう。

泊地近海の哨戒に艦載機を飛ばしていた鳳翔と鉢合わせてしまい、通信を受けたであろう龍驤が全力疾走してきて、どこからともなく現れたあきつ丸と川内に怒鳴られ、その声を聞きつけた艦娘が集まって四方八方から怒られた。

ただ、それだけである。

立ち話、余談 【山元 side】

舞鶴鎮守府での一件からまた暫く、柱島泊地は日常を取り戻していた。

前と同じかと問われたら、全員がそうではないと答えるであろうが、おおよそ日常と呼べるまでに回復したと言って差し支えないだろう。

怪我をして帰って来てから所属艦娘の殆どから心配のあまり怒鳴られてしまった海原は平身低頭で詫び、もう無茶はしないと約束したが、やはり仕事量の多さについては未だに小言で背をつつかれる毎日である。

本人はと言えば、右腕の怪我をもともせず社畜時代に培った無駄な技能たる両利きを駆使して書類仕事もなんのその。普段から右手で作業していたものだから、食堂で誰が食べさせるか議論が白熱したりしたが、さりと左手で食事をしたことに全員が啞然としたのは言うまでもない。

書類に関しては流石に自分が代筆すべきだろうと考えていた大淀も肩透かしをくらう結果となった。

右手と何ら変わりなく動かして食事をした時から予想できそうなものであったが、海原は心配せずとも仕事は出来ると左手で同じ字を書いてみせたのだ。

大淀含む艦娘達は仕事の心配をしているんじゃないと再三再四言っているのだが、無理をしているわけじゃないぞと本人の口から言われてしまうと、それ以上に言い返せないのであった。

故に、通りすがりに「大丈夫？ 仕事なくなっただ？」などと揶揄うようにして全員から挨拶代わりの言葉を投げられたりしているのだが、それはともかく。

「まさか自分が柱島泊地でこのように過ごす日が来るとは夢にも思いませんでした」

柱島泊地の一角にある浜辺にて、昼下がりの陽射しを浴びながら立つ男が二人。

舞鶴鎮守府での事の顛末を正式な報告を受けたと連絡だけで済ま
さずに呉鎮守府から顔を見せにきた山元勲は、柱島泊地の潜水艦隊が
訓練と称して水遊びをしている光景を眺めながら言った。

彼女らは資材確保の遠征が続いていたため、本日は非番らしい。

海原は山元の隣で陽射しに目を細めて同じようにその光景を眺め
ていた。

未だ包帯に巻かれた右腕を抱えたまま、新たに仲間に加わった潜水
艦まるゆがイムヤに引つ張られながらぱちやぱちやと足をばたつか
せる音と楽し気な声を聞きながら山元へ言葉を返す。

「前も来ただろう。ほれ、八代の」

海原の返答に一瞬だけ顔をしかめた山元は鼻息を鳴らした。

「こうして、個人的にという意味です。長門や松風、神風や天龍……そ
れに龍田に陸奥も……追い出されやしないだろうかとヒヤヒヤしま
した」

「そりゃあお前、あれだけの事をしたのだからそれくらいは受け止め
んか」

「返す言葉もございませぬ……」

しゅんと肩をすくめる山元。

こまごまとした任務の手続きやら報告書の確認やらで昼過ぎまで
は動きつぱなしだったが、怪我人とは到底思えない海原の作業スピー
ドと大淀の敏腕っぷりもあり、ようやく休憩をしている最中。

浜辺に出る前に柱島泊地の敷地内で通りすがりに会った天龍達の
顔を思い出しながら、山元は鼻息をさらに鳴らした。今度は犬のよう
に。

「一発ぐらい殴られるものかと覚悟しておりました」

時間が経てど過去は消えない。それを重々承知しているが故の覚
悟ですれ違った山元は、呉鎮守府を発つ前からそのことばかりを気に
していた。

しかし実際は、あっさりとした会話を交わしただけ。

『おう、大佐。久しぶりだな。佐世保の提督が来た時以来か？』

『お久しぶりです』

二人は呉鎮守府で見た事などなかった顔をしていた。彼女らに謝罪をしようとした山元だったが、それは、叶わず。

『おっと、頭を下げられちゃ許さなきやいけねえだろ、やめてくれよ』
天龍は声音こそ明るかったが、表情は真剣だった。

『オレは長門達とは違うからな。許す気はねエぞ。でも——力は貸すぜ』

それもまた当然の反応か、山元はただ、わかったとだけ伝えた。力を貸してくれるだけでも十二分の許しに思えた。

すつきりとしめない気持ちこそ、抱え続けねばならない業であると自認した。

それに、天龍達と別れたあとに海原からかけられた鋭い言葉が、天龍や龍田の代わりに自分を裁いてくれたように思えたのだ。

『許されようが許されまいが、やった事は決して変わらんと、ずっとな』

取り返しのつかない、深い傷。

認知が甘かったとは思わないが、時間が経ってから突きつけられた現実というものは極めて鋭利で、残酷で、どうしようもないものだった。

『それでもお前の味方でいてくれるんだ、心強いだろう』

広島の人々に対しても、欲望と諦念が混ざった感情を向けてしまった海原や艦娘に対しても、どうやったって取り返しがつかないのだと認めた時の辛さといったら、どんな痛みよりも凄まじいものだった。

山元は、心がねじ切れるみたいな後悔という感情を深く理解した。

「艦娘は人に危害を加えんだろう」

海原の言葉に頷くも、山元は、例外的に、と前置いて言う。

「危害という意識が無ければ可能かもしれないがね」

ただの可能性の話で、試した者など一人もいなかったが、ふと海原が紡ぐ言葉に山元は驚いた。

「だろうな。大淀に心配をかけすぎだと折れた腕をつつかれたよ。なかなか痛かった」

「はっ!?!」

未だ研究の続けられている艦娘は、深海棲艦の生態よりは判明していることの多い存在だが、それでもまだまだ謎は多い。

反対派であった山元は、反対派であったが故に艦娘に関する話を多く知っている。大部分は今亡き楠木少将からの情報で、残りが金森や八代といった上官からの情報だったが、信頼性のあるものではあつた。

どれだけ激情にかられようが、艦娘は指揮官に対して暴力をふるおうとすると、動きを止めてしまう。殴る寸前まで動けたとしても、自分からぴたりと止まってしまうのだ。殴りたい、でも殴れない、殴つちやダメだ、そんな感情が見てわかるほどに顔に出る。

それが、ただの意識の問題だと？

この人はどうして重要な情報をあたかも当然のように……と山元が何度目かのため息を吐き出す。

呼吸するたびに新たな報告義務が出来てしまうような気がして、山元は話すのをやめようか本気で考えそうになった。

「……それは、艦政本部に報告しておりますか？」

「報告？ 何故こんなことを報告する必要があるんだ」

「表向き、というよりも、海軍全体で艦娘は決して人に危害を与えられないと周知されております。自分もそう思っております。先ほどまでは！」

「危害は加えられんだろう？」

「今、閣下がご自身で認めておられたじゃないですか！ 意識が無ければ可能であると！ 骨折した腕をつつくのも危険であると判断されかねません！ 艦政本部に報告する義務がありますよ！」

「なら不可能ということにしてくれ。他にも仕事は多くあるんだ、そんなくだらん報告よりもな」

「なっ……はああ、せめて忠野中將には——」

「あーあー、いらんそんな報告は。暴力を振るわれるような事をせねばいいだろうが」

「そつ、それを言っちゃあ、閣下……」

「心当たりがあるならばさっきの話は無しだ。いいな？」

「……了解しました」

わざとらしく無然とした態度で言った山元を横目に見た海原は、口角だけ上げて笑い、ボトル缶のコーヒーを傾ける。

缶コーヒーが欲しい、と言った海原のために段ボール数ケースを購入して呉鎮守府から柱島泊地に持ち込んだものだ。

軍服の男がボトル缶を片手に海を眺める光景は絵になるもので、山元はしばし無言で見つめた後に言った。

「にしても閣下、様になりますな」

「うん？　なんだ急に気持ち悪い。仕事なら請け負わんぞ」

「素直に褒めただけじゃないですか！　話題転換にもなるかと気遣ったのでありますよこっちは」

「下手くそか」

「……こうして話すと、分からんでもないのですが、どうにも、慣れませんな」

「分からんでもないとは、何がだ？」

「自称・サラリーマンである、と」

「山元お前、次に自称と言ったらあることないこと曙に言うぞ。那珂にも言うからな」

「自分が言ったわけではありません！　みなが言っておったのです、柱島泊地のみなが！」

「そんな事を言う者なんて……！　……うーむ」

言い返そうとして言葉が出て来ず、海原は思い浮かぶいくつもの顔を呑み込むようにコーヒーを流し込む。

「やはり閣下は軍人こそ天職です。サラリーマンなんて似合いませんよ」

「それもどうなんだろうなあ」

「ははは」

冗談を交わして幾分か和らいだ空気に、潮風が吹き込む。

「それはそうと、気になっていたんだがな、山元」

「っは、何でしょう」

「お前は どうして艦娘反対派だったんだ」

「……」

「こんな話ができるお前が、どうしてあんなになったんだ」

不思議と、空気は柔らかなままだった。

それは艦娘達を眺める海原の表情が柔和なままだったからそう感じたのかもしれないし、声が優しいものだったからかもしれない。

「艦娘を兵器と呼んで、広島の人達まで敵に回して、深海棲艦との戦いを避け……私利私欲に溺れていたのが、私はどうにも信じられんだ。自分の目で見ていたというのに、夢じゃなかったのかと思うほどにな」

「それを口にすれば、言い訳になってしまいます」

「いいじゃないか、言い訳で結構。正当性、合理性、そんなものを気にして聞いているのではない。年齢差があれ、立場があれ、今のお前は私の部下だろう。仕事のやり方について私と違う考えをもって、違う姿勢であった話を聞きたい。ただそれだけだ」

「反対派を良しとしているわけじゃないぞ？」 と言ってまた缶ポトルを傾ける海原の顔を見た後、山元は海へ顔を向けて暫く考えた。

それから自分よりも年下であるとは思えない貫祿に負け、話し出す。

「……はじめは反対派ではありませんでしたよ。艦娘を理解しようとしておりました。艦娘がこの世界に現れて、もう十年以上も経ちます。未だに生態すら解明できていない存在を前にした過去の自分は、彼女らを化け物や兵器などとは考えてもおりませんでした」

「十年以上、か」

「閣下からすればゲームの話でもありますが、自分達は最初から、現実でしたからな」

「……うむ」

「ああ、決して閣下の出自がどうこう考えてはおりません。寧ろ、だからこそ閣下が軍人に向いていると思っっているのです。現実であるとすぐに受け止め、前を向いておられるあなたをこそ」

「私の話はいい」

「失礼——そう、ですな。今になって思えば、深海棲艦との戦いで多く

の犠牲が出て、自衛隊から海軍へと変わって環境が一変したのにも要因があったのだらうと思います。艦娘でなければどうやったって勝てない相手を前にして、その艦娘が無条件に戦って人々を守っているのが……怖かったのです。自衛隊員でもあり、軍人でもあった自分からしたら、守られる意味が分からなかったと言えればよろしいでしょうか」

「ほう？　守られることが理解できなかったか」

「ええ、ええ、軍人は国を守る存在でありますから、国を守るとは即ち人を守ることもありませう。その覚悟を持った仲間として許容するには、彼女らの超常的な力はあまりに大きすぎました。艦娘や深海棲艦の出現に伴い様々な変化が起こりましたが、たかだか十年です。されど十年とも言えますが、それでも、世界が変わるにはどうしても存在が大きすぎる」

山元の話に、海原の表情は柔らかなまま。

「人の手に余るのです。政に詳しいわけではありませんが、艦娘の扱いについてはどの国も相当に揉めたと聞いております。世間においては艦娘を保護するか否かについて、海軍よりも先に意見が割れたくらいですから」

「世論が割れたか。それはそうだな、海を駆ける少女が現れて深海棲艦を退けたからと言って諸手を挙げて喜ぶなんざ、その時に限られる」

艦娘を最優先に考える男にしては冷静だ、なんて思ってしまった山元の言葉が途切れると、海原は目だけを山元に向けて言った。

「人は都合良く考える生き物だが、大きな力に対しては不思議とその逆を考え、不安になってしまうものだろうか？　自然災害が良い例だ。明日、大きな地震が起こると言われたら具体性が無かろうが漠然とした不安が生まれ、伝播する。誰かが艦娘を深海棲艦と同じように脅威と感じれば、少なからずそれに同調する人が出て不思議ではあるまい」

「……仰る通りで。艦娘が出現したばかりの頃、ある噂が流れたのです。艦娘は危険である、と。その噂に具体的な危険性を語るものは少

なかつたですが、日を追うごとに尾ひれ背びれが付き、深海棲艦のよう
に人を襲っていたのを見たときまで言われていたくらいです。無論、
事実無根でしたが。艦娘は人に危害を加えられない、と海軍で周知さ
れていると言いましたが、まあ、平たく言えば流布ですな。艦娘が軍
を求めたが故に再編された海軍がそう流布することで、艦娘を危険視
する世論の鎮静化を図ったのです。皮肉なもので、世論というものは
危険でなければそれでいいと、今度は極端に舵を切って艦娘の保護を
と言い始めました」

「……ふむ。それだけではお前が反対派になる理由がないように思え
るが」

「郷田少将と同じ考えを持っていたと言えば、分かりますか」

「ああ」

海原はそれで大方察したようだったが、続ける、という風に浅く頷
いた。

「艦娘は同じ顔をして、同じ声をしていますが、個々の違いは必ずあり
ます。性格であつたり、好みであつたり、癖であつたり……深海棲艦
という人類の脅威に対抗するために関われば関わるほどに、彼女らが
生きていると実感してしまふ。人と違って頑丈な彼女らが、化け物と
戦つて、沈んで、まるで何事も無かつたかのように、妖精がもたらし
た未知の技術によって出来たカプセルから同じ顔が生まれる。別の
艦娘なのですから記憶がないのは当然ですが、同じ姿で、現れる。
はつきり言つて異常です、こんなものは。なら最初から彼女らは沈む
べきなんかじやありません、あの頃、郷田少将と同じような話を何度
もしました。幼子の姿をした駆逐艦から、年頃の少女のような、嫁入
り前の未来ある女性たちのような艦娘が自分らは軍艦だと勇ましく
海を往く。そして我々の手の届かぬ海の向こう側で、沈むのです。こ
れほどに恐ろしい話がありますか」

熱を帯びる声に、海原は何も言わずに軍帽のつばを少し押し上げ
る。

まだ、浅瀬で艦娘達の黄色い声が聞こえていた。

「深海棲艦と一進一退、いや、殆ど後退するような戦いを続け制海権を

奪われる中、任務に加えて雑事はどんどん増えていきます。作戦海域から戻って来た彼女らは煤にまみれた顔で言うのです。ギラギラとした目をして、誰が沈んだか、どれだけの被害が出たか。私は……彼女らを、受け止められなかった。生きていると一度思った相手が海を駆けては沈んでいく。そんな恐ろしい敵が今にも海と一体化して艦娘もろとも世界を呑み込んでしまうのではないか。いつしか私は、彼女らの目を見ることをやめ、戦いを、諦めてしまいたくなった」

「それで、どうなった」

「……郷田少将に相談しました。郷田少将もまた、私と同じような思いをしていたと話してくれました。それでも、逃げてはだめだとも」

山元は一度大きく息を吸い込むと、空を仰ぎ、息を吐き出す。

「自分は郷田少将を真似るつもりで、彼女らを兵器と呼びました。深海棲艦と人類の大戦争に勝つための道具だと言って、必要最低限の会話以外は接触を避けました。さっさと戦争を終わらせて、彼女らを自由にしたいと。そうして手探りの運用を続けながら海域を取り返しては奪われる戦いを続け、必要最低限と考えていた会話も減っていき……連携などあったものじゃない。当然の結果です。郷田少将を真似ただけで、同じ運用をしていたわけじゃないのですから、戦果など挙がるわけもない。それなのに、私は……どうして負けたんだ、そう聞いた記憶があります」

軍帽を脱いで髪を撫でつけて被りなおす山元の目は虚空を見つめる。

「その当時、作戦海域に出撃したのは、軽巡洋艦那珂でした。自分の動きが悪かったから……彼女は申し訳なさそうにして泣きそうになっていました。仲間と共に生きて帰還しました。今になって思えば手探りであった当時、生きて帰って来られただけでも十分な戦果と言えましょう。敵の情報だって持って帰っていたのですから。それなのに私はどうして敵を沈めていないのかと、問い詰めたんです」

「そこからか」

「ええ」

海原の言葉を肯定し、自分はそうして何度も那珂を怒鳴るように

なつたんです、と言った。

「何度も立ち上がる彼女らが不思議でなりませんでした。何故立てるんだ、どうして戦えるんだ……自ら否定した彼女らに聞く勇氣はありませんでした。そうして私はその疑問から逃れるため……八代少将や金森中将のように、戦果を挙げ続けていた楠木少将に縋り、偽りの勝利や権力を求めるようになりました。っはは、権力を持ってばどうなるのかなど考えもしなかった。力を見誤っていたのです。深海棲艦と戦える彼女らを権力に任せ虐げることによって、自分も強くなっているのだと錯覚していた。しかし心のどこかでは理解していたのかもしれない。常に前を見つめている彼女らが眩し過ぎた……だから私は怒りに任せ、愚行を」

海原の言葉が山元の心臓を掴む。

「如何な理由とて、周りの者は認めんだろう。私とて認めない」
「……」

「作戦に不備はなかったか、艦娘の体調は万全だったか、そもそも会話していないのだから連携が取れていなかったと自分でも認めている。ならば作戦以前の問題であったかもしれない。勝てぬような相手に挑むことは、愚かだと考えてしまうのも当然理解出来る。だが捨て鉢になる理由にはならん」

「……はい」

「非常につらい立場だ」

山元は驚いて海原を見た。

てつきり責められるものだと思っていたのに、と。

「深海棲艦も艦娘も両方を知らねばならない。私は過去を知らんが、それでも、話を聞くに理解の深さには偏りがあっただろう。世間が知る艦娘、軍が知る艦娘。深海棲艦についても、国ごとに今でも理解度に違いがある」

私が調べた限りな、と言った海原はどこか自嘲気味に笑う。

「人が多く関われば、単純な話が複雑化してしまう。まして戦争となればなおさらだ。欲が絡めばなおのこと、理解のしようがない。それでも、分からないとは口に出せん。全く理不尽なもんだ。それでもお

前は戦おうと戻って来た……お前はすごい男だ」

すつと、海原の表情が変わる。

先ほどの自嘲気味な笑顔でもなければ、柔らかな顔でもない。

山元はその表情をどう言い表せばいいか分からなかった。

彼の目は、艦娘に向けられたまま。

「山元よ、教えてくれ」

「っは」

「我々がすべきことはなんだろうな」

「すべきこと、ですか」

「ああ、目的はなんなんだ？ 戦争に勝つことか？ 深海棲艦がいな

かった頃のような世界に戻すことか？」

多くの言葉が脳裏を過る。海洋からの侵略阻止、支配の維持、通商の復帰。

それらを押し退けて頭に浮かぶ一言。

「……守ること、です」

「何をだ？」

「国であり、人であり、仲間であり……それらは多く、存在します」

「そうか。ならば、そうするしかあるまい。それが仕事だ。難しいこととがどこにある」

「私に、できるでしょうか、そのように大それたこと」

そう問うた山元の目に焼き付く、海原鎮という男の横顔。

海から反射する光に照らされ、真っ白な軍服を潮風にはためかせる。

「出来る出来ないじゃない、やるんだ」

海原の視線の先には——こちらに手を振る少女達の姿があった。

彼女らにゆるゆると手を振り返しながら、彼は微笑んでいた。

「そうやって恰好をつけるんだよ、男ってやつは」

艦娘として

北へ

深海棲艦の声が聞こえた。足が不可視の手に掴まれたように動かせない。

そんな不穏な報告を受けてから既に数カ月が経過していた。

鹿屋基地の清水中佐と呉鎮守府の山元大佐の協力によって再現性があるか何度も検証が重ねられているが、同じ現象は起こらなかったという。

艦政本部でも検証されているというが、結果は変わらず。

これだけならば清水中佐が船から転落した際に恐怖を感じて幻視したか、幻聴を聞いたなんて強引な理由付けも出来るのだが、未だ検証は続けられている。

組織として体制変更がようやく落ち着いてきた海軍において艦娘という超常的存在だけでも十二分に信ぴょう性に欠けるファンタジーであるというのに、艦娘に付随して妖精という存在がさらにそれらを加速させている。

その妖精が検証に協力的である、という清水中佐の言が、検証を中断させない大きな理由の一つ。

山元大佐も清水中佐と条件こそ違えど同じ検証を続けており、妖精も協力しているのだが、やはり新たな展開に繋がるような結果は得られていないという。

それと同じくして、深海棲艦側に動きがあった。

柱島泊地をはじめ西日本の各拠点は基本的に南方や南西から攻め込んでくる深海棲艦の撃退を主としているのだが、定期的に出現する《はぐれ》と呼ばれる少数の敵艦隊を除き大きな動きを見せなくなってきたのだ。不気味な静けさ、と言おうか。

入れ替わりに、東日本側の各拠点が忙しなくなってきたと大本営から全拠点へ報告として挙げられた。はぐれ艦隊の増加にくわえ、北方からの侵攻が激しくなってきたというのだ。

現在は呉鎮守府、舞鶴鎮守府の二つの巨大拠点から艦娘を数名送り込んで北方海域における新たな防衛ラインの設置を慎重に行っている最中である。

* * *

「……なんの冗談だこれは」

呉鎮守府から送られてきた、最近の海原にとってちよつとした楽しみとなつている新作の缶コーヒーが、かつんと机に置かれる。

海原の呟きは執務室に漂う紙とコーヒーの香りに染み込んで、窓から執務室を洗うように吹き込んできた冷たい風がさらつていった。

季節は秋に差し掛かり、残暑もやつと落ち着いたという頃である。

「井之上元帥閣下からの書状や、冗談やつたら大問題やろ」

《大湊警備府ヲ調査セヨ》

軽空母龍驤が茶を啜りながら言う。

簡潔にまとめればそう記載されている書状を開いた状態で、海原は執務室の天井を仰ぎ見た。

「そうか……冗談じゃないのか……」

「どんだけ嫌がつとんねん司令官。りゅーちゃんに見せてみい」

くつと茶を飲みほしてから補佐官の机から立ち上がった龍驤に手渡される書状。

彼女は「ほんほん」と声を漏らしながら内容を一通りぎつと読んだから、

「なんの冗談やこれ……」

と呟いた。

「井之上さんからの書状だ……冗談だつたら大問題だろう……」

「さ、さよか……冗談やないんか……」

なんて掛け合う。

海原は井之上元帥から下令される新たな任務について頭を抱えた一方で、柱島泊地に来てからこのように気楽な瞬間が時折顔を覗かせるのを嬉しく思うマールブル模様の心持をしばし楽しみ、ふう、と切

り替えるように龍驤から書状をひよいと取り上げた。

「んあ、まだ読んでんのにい」

「いくら読んだところで内容は変わらん。まずは情報収集と……龍驤、鳳翔を呼んでくれ」

「なんやのん、その切り替えの早さは。今度は大湊警備府で足でも折ってくるつもりなんか？」

「ただの調査だろう、怪我などしない」

「舞鶴鎮守府に行ったんもただの調査やったはずやんか」

「……んんつ。鳳翔を」

「へえへえ、呼んでくるわ」

執務室から出て行く龍驤を見送り、海原は再び書状に視線を戻す。

数枚にわたって北方、大湊警備府の現状が記されたそれには、海原からしては信じられない内容ばかりだった。さらに言うならば、佐世保、呉、舞鶴と三つの大きな問題に首を突っ込んだ本人が経験も想像もしたことのないものであるのが、衝撃であった。

考えてみれば《あり得ないことがあり得ない》世界なのだから、こういう問題も起こって当然ともいえよう。

——所属艦娘による横暴。

日本のみならず世界中を襲う深海棲艦に対して人類が持つ唯一の対抗手段たる艦娘が横暴を働く姿を想像できない海原は、むう、と声を漏らす。

妙なところでステレオタイプな男で、艦娘が権力や暴力によって支配されているところを実際に見てきたのも相まって問題を解決してこられたが、しかし今回、彼に課せられた任務の環境は真逆である。

艦娘が権力と暴力で人を支配している。そんな現場だ。

人類を救う唯一の手段であるからこそ理屈としてはそちらの方が通っているような気もする、と考えるが、多くの艦娘を見て来た海原をして想像しにくいというのが現実。

まして人に暴力を振るえない艦娘が、暴力を抜きにした横暴さで人を支配しているなどさらに考えづらい。

ただでさえ多くの仕事を柱島泊地の艦娘に振り分けていると思

込んでいる海原は、今度こそ仕事をしろとせつつかれてしまうのではないかと悪い想像を働かせながら龍驤が鳳翔を連れてくるのを待った。

「軽空母鳳翔、入ります」

「おお、鳳翔。急にすまないな。少し頼みが——」

ノックしてからしずしずと入室してきた鳳翔に、執務机の傍で立った状態で言葉を紡ぎかける海原。

「承知しました」

「……まだ何も言っておらんが」

「龍驤さんからおおよそ聞いております。出張、なされるんですね？」

「う、うむ」

「はあ……また怪我をして帰って来るなんて、皆にどう説明したら……」

「まだ怪我はしておらんだらう!? 怪我をする予定があるように言わ

んでくれ、縁起の悪い!」

「今度は足ですか……?」

「なっ……全く。龍驤だな?」

海原がそう言うと、まだ半開きになっていた扉から龍驤が顔を出して笑った。

「へへへ」

「あまり揶揄わんでくれよ。それで鳳翔、どうやら私が大湊警備府の調査に乗り出すのは秘匿されているらしいので、その間の運営について相談をしたいのだ」

「大淀さんも大本営に行っておられますから、私に出来ることなら何でもお申し付けを」

ふふ、と笑いながら言う鳳翔に、海原は苦笑しながら話す。

「うむ、助かる。基本的にはいつものルーティンを続けてもらうことになるが、各種開発と艤装製作についてはストップしてもらいたいのだ。長期出張にはならんだらうが、出来る限り資源の貯蔵に回して例外的な対応が発生した場合の保険にしたい。お前達が動くのに余剰分があれば今の資源を減らさずに済む」

「承知しました。入渠の方はいかがでしたでしょうか？」

「開発できない明石から文句が出て困るのでな。損傷の程度によっては明石の泊地修理で対応してもらえるか？　ただし哨戒組は遠慮なく入渠させてくれ。演習や訓練での損傷のみを泊地修理の対応とする」

「はい、承知しました」

元一般人とは思えぬスムーズなやり取りも一年近くで様になったものである。

ふと、龍驤が海原に問う。

「そしたらウチは鳳翔の補佐をしたらええの？」

海原はしばし唸ったが、いや、と前置いて言った。

「鳳翔ならば問題あるまい。大湊警備府の調査には龍驤が必要になるかもしれない」

「ウチが？　なんや、別に調査が得意っちゅうわけでもあらへんのに」

「今回の調査は特殊だ。龍驤のような艦娘が適任だろう」

「艦娘の調査にい？　もつと賢い子お連れて行きいな」

「いいや、お前がいい」

任務を明確に拒否したわけではないが、別の艦娘にしろと自分を除外する物言いをされても海原は彼女を選んだ。そも、上官命令ならば拒否権は無いのだが、海原はこうして彼女らが自分の意思を示すようになっただけでも嬉しいのか、不謹慎ながらも思わず微笑みが零れてしまう。

「なっ……んな顔せんといてや、もお……わあつた、ついてつたらええんやな」

「うむ。龍驤がいれば私も安心というものだ」

「それ他の子にも言うてるやろ」

「何をだ？」

「……はああ」

龍驤の盛大な溜息にくすくすと笑う鳳翔。

当の本人は意味を理解しかねている様子で眉間にしわを寄せている。

「たらしやなあ、君い」

と言われて、海原がはつとして鼻元へ手を持って行つてすすすと鼻をすすり始めたあたりで龍驤と鳳翔は笑つたのだった。

「あかんわ、こんなん勝たれへん」

「ふふふ、そうね。提督つたら、鼻なんかすすつて、もう、ふふふ」

「な、なん、え？ 何だ、すまん、どういう意味だ。教えてくれ」

「ほな準備してこよか」

「では私も明石さんへ通達を……」

「ま、待て二人とも！ 変な事をしたのなら謝るから！ なあ！」

* * *

呉鎮守府を經由して広島駅へ。海原にとって慣れた道のりで、龍驤にとつては非番で外出許可をもらった際に何度か通つただけの道。

「任務で外出つても久々やわ。大湊に行くのに飛行機使わへんねや？」

「途中で大本営に寄らねばならんでな、東京を經由する。前の鎮守府ではこういう出張は無かつたのか？」

「あるわけないやんか。ゼーんぶ海の上やで？」

「ならばせつかくだ、弁当でも買って行こう。こういうのが醍醐味なんだ」

「醍醐味で。任務やで司令官、しっかりしてや」

「仕事にも潤いがなければならんだ、潤いが」

「潤いて……」

広島駅から新幹線と電車をいくつも乗り継ぐことになるからと、道中で龍驤に説明がてらに話をする。

「調査の内容は、私が行くことが秘匿されているように抜き打ちの形になる。龍驤も同じように抜き打ちで運営が正常であるかを判断してほしい。軍規に準拠する判断で構わないが、気になる事があれば遠慮せずに相談してくれ」

「あいよ、了解や。抜き打ち調査つちゆうんも向こうさんからしたら

けつたいな話やろけど、気になる事ってウチが引つかかったことでもええんか？」

「無論だ。寧ろ、艦娘でなければ気づけないことだってあるだろう。みなをよく見ている龍驤だからこそ、頼らせてもらいたいのだ」

「んふふー、そら気分ええわ。おっしや、りゅーちゃんに任しとき！でも大湊警備府かあ、寒そうやなあー」

「大湊警備府と言えば明石が所属していた警備府の近くになるのか。明石のいた警備府では酒保に関して一悶着あったと記録を見たが、人が艦娘を虐げている現場ばかり見てきたものだから大湊警備府の現状が信じられんな」

「んー、そんなもんなん？」

「私は、な」

「まあ艦娘は人に手え出されへんし、そらそうか」

「龍驤のように手を出していると言う事だろうか」

「ウチ!? いやいやいや手え出してへんがな！　なんでそうなんねん！」

びつと手の甲で海原の腰あたりを叩く龍驤に、海原は「これだ、これ」と真顔で言う。

「ツツコミやこれえ！」

「……なるほど」

「ツツコミで艦娘が横暴や言うて井之上元帥が調査せえっておかしいやろー！」

「確かに」

「アカン、司令官ほんま仕事のし過ぎちやうんか？　大丈夫か？　脳

みそちやぶちやぶになつてへん？」

「ちやぶちやぶ……んんつ。冗談だ、冗談。だが本当に想像しにくいのだ。ここに来て多くの艦娘を目にした私が偏つていると言われたらそれまでだが、お前達は一人一人に違いがあっても、根底に同じ思いを持っている。それを踏みにじるのはいつだって人だった。だから、どうにも……」

話すうちに駅構内にある券売機に到着し、海原は二人分の切符を購

入し、改札を通り抜ける。

ちよこちよこことついてくる龍驤に切符を手渡しながら、その足はコンビニへと向かっていた。

「司令官は頭ええけど優しいから想像でけへんのかもな」

「私の頭が？ それこそ冗談だろう」

「冗談ちやうて。真面目にや、真面目に。司令官の真似して言うなら……そやなあ……人にも色々おるやろ？」

「当然だ」

「なら、艦娘にも色々おつておかしいわけないやんか」

「うーむ……」

「なんで無条件に艦娘が優しいって思うんや。それこそ不思議やわ」

「だが柱島泊地のみなは優しいだろう。龍驤だつてこうして私の補佐をしてくれている。お前の優しさに私は救われ続けているんだ、昔も今も」

「んなつ、や、やめてや人もいっぱいおるのに……」

コンビニに入店して、飲み物を選びながらしれつと言い切る海原はいつもの白い軍服ではなく、北国へ行くこともあつて衣替えの時期より少し早く濃紺の軍服を身に纏っている。

軍服というだけでかなりの注目を浴びるというのに、濃紺の軍服の男にサンバイザーのような艤装を一部のぞかせる艦娘の組み合わせはどうしたつて人の目を引く。

それを気にもしない風に言うものだから、龍驤は俯いてサンバイザーで必死に顔を隠してしまう。

会話の内容こそ前後もなければ聞き耳を立てない限り分からないにしろ、雰囲気は何を言ったのかは伝わるもの。

龍驤は顔を赤らめて俯いており、普段通りの真顔で今度は弁当を選び始めた海原という組み合わせは周囲の人を変な笑顔にするのだつた。

「龍驤、おこのみやき弁当あるぞ」

「空気読め空気イツ！」

「おあ!?! す、すまない、こだわりがあつたか……?」

「ちやうて、もおお……」

そうして、低くない頻度で広島駅を利用する海原に気づいた店員の一人が、あ、と声をかける。

「海原さんじゃないですか。お疲れ様です。お仕事で？」

「ああ、どうも。これからちよつとした出張です」

海原は軍属や軍人に対しては威厳のある接し方をするが、元の性格もあってか一般人相手になると途端にニコニコとした営業マンの顔が出てくる。

余談だが、広島を牛耳っていたと言っても過言ではない山元大佐を更生させたお偉いさんとして恐れられていた海原が見せるこの一面こそ、周辺住民からのイメージアップに繋がっているのだから、面白いものである。

「出張ですか、大変ですねえ。頑張ってください！」

「ありがとうございます。そちらも勤務、頑張ってください」

二人分の弁当を購入してコンビニから出て行く際、龍驤は振り返って店員や客を見ながら言った。

「もう全員顔見知りやん」

「全員ではないさ」

「えー?」

龍驤の言うように、道中も龍驤と話しながら歩いているだけで手を振られたり挨拶されたりと忙しいものだった。

広島から一歩出てしまえば、これが好奇の目が変わるのだろうか、と龍驤は考えつつ、海原の手からコンビニ袋をさつと取った。

「ウチが持つわ」

「……優しいなあ」

「ほ、褒め過ぎ! やめてえや、もおー!」

そうして、駅のホームへ。

新幹線が到着するまで暫く時間がある、と海原は弁当と一緒に購入したお茶とは別に自販機であたたかい飲み物を二つ購入して、一つを龍驤へ手渡す。

「お茶で良かったか？」

「ウチはなんでも。おおきに」

「さ、て……調査、調査か。どうしたものか」

お茶のペットボトルへ口をつけながら、龍驤は目だけで海原を見る。

「なにか気になるん？」

「軍規を知らんわけではないし、私なりに学んだつもりではあるが……軍規に則った運営でなければ大本営に報告を上げねばならんだらうっ。」

「そらそうや」

「その……そこにいる艦娘に対する措置や処遇が気にかかってしまうのだ」

「おろ、司令官知らんのか」

「決まった処遇があるのか？ まあ、ほら、私は元々」

「自称やろ。そら軍規違反した艦娘にもちゃんと措置くらいあるよ」

「自称では……」

ぼつりと反論する海原だったが、龍驤は気にせず人差し指を立てて、足をぶらぶらとさせながら言った。

「艦娘の訓練施設に送られるんや。しかもただの訓練施設やあらへんで。再教育施設っちゆうてな、まあ単純な話、艦娘が生まれて配備されるまでにやらなあかん訓練をぎゅつと詰め込んだもんをやらされるところや」

「訓練を詰め込んだ……というのは、短い期間で同程度の訓練を積みされるという意味か？」

「そや、そんだけ」

「それだけって……ふむ、だが訓練してから拠点に配置されたあとも、実戦配備までに別途訓練があったりするだろう？ そう考えると二度手間に思えるが……」

「二度手間やで。でも、やるんや。無駄なことを、きびしくやらされる場所……それが再教育施設やね」

「艦娘からさらに反感を買いそうなものだがなあ」

「そうでもないんやなあ、これが。ちなみにウチは再教育施設を知っ

とるで。何度か行っただわ」

「そうなのか……！ では、どのような——」

「ゼーンぶ無駄なことじゃ。ほんまに、ゼーンぶ。復習や反復訓練や、どんな理由付けしたって無駄やと思える訓練ばかりやで。ただここに意味があるつちゆうたら、まあ、意味あるやろなって納得できるかな」

「そこまでして無駄な訓練を積む意味が？ そんなことをするくらいならば、具体的な解決策と再発防止案を提示したほうが建設的だろう。それを周知するほうが例にも残るのだから、それぞれが対応しやすいだろうに」

「司令官はそう言うやろなあ」

なはは、と笑う龍驤の顔はいつもの変わらぬ飄々としたものだったが、海原の目は誤魔化せなかった。

「すまない、変な話を聞いたな。もう聞いたりしないから、心配するな」

突然頭を優しくなでられた龍驤は、失われたはずの熱で頬を焼かれる。

「きつ……急に撫でるんはアカン！ ダメ！」

「おお、す、すまん……」

「もお、なんやねんな……わあつたて、そんな顔せんといて」

無意識に眉尻が下がっていた海原の表情に苦笑した龍驤は語る。

「あそこはな……なんて言うたらええやろ……思い出されんねん。自分が生まれた時のこと。いやーな形でな」

「龍驤、無理に話さなくていいんだ。私が悪かった」

「ええよええよ、この話も任務に必要ななるかもしれんやんか」

「しかし」

躊躇う海原の手を握り、龍驤は笑ってみせた。

右手を伸ばした龍驤が握る海原の手袋越しに、龍驤の薬指にあるものと同じ指輪の感触。

「一緒におってくれるんやろ？」

「それはもちろんだ」

「なら、へーき」

「……」

そうして、改めて龍驤は遠くを見るような目をして話した。

「再教育施設の訓練ucciゅうたら海上訓練より、座学の方が多いんや。ほんで、どうして艦娘が必要なんか、自分らがしつかり戦わんかったらどうなるんかucciゅうのを教え込まれる。あ、でも、今は司令官と井之上元帥の新体制やからおんなじかどうか知らんで？　ウチの時は、ね」

「……うむ」

「どうなるんか見せられるのは、まあ、そやな……単純なこつちや。記録を見せられんねん。深海棲艦の被害に遭った現場を、一片の嘘もななく」

「それは——」

「砲撃や空襲で崩落した家屋、ほんで、それに潰された人、逃げ遅れて焼けてもうた家族に、燃える海岸……色々な記録を見せられる。そしてたら不思議とな、思い出すんや。自分らが生まれた瞬間のこと、深海棲艦と戦ってきた今までのことが、ゼーんぶ、きつちり。再教育施設ucciゅうんも、はー、考えられた名前やなって思うわ」

そこまで話した龍驤だったが、言葉が続かなかった。

海原が手を強く握り返したことで、龍驤が驚いて顔を向けた時、真正面に真っ黒な目が二つ、自分を映していたからだ。

彼女は自分が一番不安になる夜の空を思い出した。

どれだけ綺麗な空であつても、海にいとその瞬間だけは一番危険な場所である。

そのはずなのに、その危険な空が彼の目のようだと思うと、どうしてか龍驤はどこまでも溶けていくように安心してしまう。

「もういい、龍驤。ありがとう」

「あ、ウチは、別に……その……」

「龍驤、私に出来ることは多くない。だが、お前の傍に居ることは出来る」

「う、うん、うん。わかってるて、もう、やめてえやいきなり——」

「悲しい想いをさせないよう、努力する」

「……うん」

今は瞬きすらしちやだめだと龍驤はしっかり目を見開いた。

一度でも瞼を閉じてしまえば、涙がこぼれてしまいそうだったからだ。

しかし、次の瞬間には呆れて、笑ってしまふ。

「……よし、飯を食おう、飯を！ 少し早いけど、こういう時はな、飯を食えば元気になるんだ」

「おおいッ！ 今の空気からよお飯食おうとか言えるな君い！」

「龍驤、飯を食え。どれだけ過酷な仕事にしても飯を食えば何とかなる。本当だぞ」

「なんつちゆう男や……何でウチは、こんなアホに……」

「龍驤、おこのみやき弁当でいいか？」

「なんでもええてッ！ ちゆうか新幹線途中で食べるんやないんか！」

「うむ……？ まだ時間はあるだろう……？」

「はああ……あつはは、もうええわ。わかった、一緒に食べよか。ふふ」

賢しい提督で、愚かな男。

龍驤の脳を埋め尽くしていた暗い色は一瞬にして霧散し、冴え冴えとした空のような青色に染まった。

「長い道のりになるからな、しっかり食べておかねばならん」

「ん」

《○番線ホームに参りますのは——〇〇九十二号——東京行きです——
↓》

「おおいッ！ 新幹線来てもうとるやないか！」

「なに!? しまった……一本勘違いしていたのか……」

「大丈夫かいな、もおお……」

北へ② 【鎮side】

「——ええ、はい。それで大本営にそういった類の資料があれば」

『確かに、大本営ならば全拠点の報告書が集積されておる。ワシから許可を得ずともお前なら自由に使えるじやろうに』

「いやあ、元帥と言つても自分はただの一般人でして……海軍の機密情報でもありますから、井之上さんの許可を得たうえでちよつと見せてもらえればと思つてたんですが……」

『お前は……いつまで一般人面をするつもりなんじや。ワシらからすればそうと言えようが、そりゃあワシらの視点での話じやろう。艦娘の運用も一年近く続けてきたんじや、しつかりせんか。それでどうやつて艦娘に顔向けするつもりだ』

「お、親父に怒られてるみたいなんでやめてください……」

『はっはっは、珍しく話せたと思つたらこれだ。小言の一つくらい言わせんか。それで海原、出来そうか？』

「命令でもありますし、最善を尽くします。それにもう龍驤を連れて広島を出ましたから、大本営に着くのも遠くないかと」

『つくく、お前の性格ならば大本営に寄るじやろうと思つておつたわ。で、どれくらいで到着する予定だ？』

「俺……んんっ、私の事ならつていうのは——？」

『まーだその話し方も慣れんのか』

「井之上さあん、勘弁してくださいって……」

『なっさけない……しやんとせんか！ しやんと！ まあ、大本営ならば嫌でもそうするしかあるまいからな、楽しみに待っていてやる』
「……」

『ワシとお前が個人で話す分には一人称など問わんし肩の力を抜けば良いがな、対外的には記者会見での自分を思い出して話すよう心掛けろ。いいな』

「はい……」

『情けない声を出すな！』

「ひえっ……すみません……。そ、それで井之上さん、大淀はまだそち

らに?」

『うむ。何か言伝か?』

「でしたら、大淀に大湊警備府からの出撃報告書をまとめておいてくれとお伝えいただければ助かります」

『わかった、伝えておこう。お前も大本営に到着次第、顔を見せに来い。もう一仕事頼みたい』

「もちろんです。あつ……井之上さん、一つ変な質問を……」

『なんだ?』

「衣替えの時期っていつからですか……?」

『はあ? 衣替え? そ、そうじゃなあ……来月には一斉に冬服になるうな』

「すみません、大湊警備府に行くのに、寒いかなって既に冬服を……」

『もう第一種に戻したのか。暑かろうに』

「や、やっぱりまだ東京は暑いですか」

『暑いぞ』

「失敗したなあ……!」

『はは、まあ冷たい飲み物の一つくらい用意しておいてやる。おお、そうだ海原』

「なんででしょう?」

『東京駅には何時に到着予定だ?』

「ヒトヨンヨンマルまでには到着します」

『……うむ、承知した』

「はい。ではまた後ほど」

新幹線の喫煙ルームを出ると、一服するため待っていたのである。うスーツ姿のサラリーマンらしき男が表情を強張らせて頭を下げて来た。

井之上さんと電話をするのに車両間のスペースで話していて、通りすぎる人が軍服に怖がるものだから申し訳なくて喫煙ルームに逃げ

込んだのだが、ここもかえって喫煙者に迷惑になっていたようだ。俺も仕事だったのだ、憩いの場を使わせてもらってすまない、同志よ……！

「入れば良かっただろう。すまないな、待たせてしまったて」

うーん、他人相手なら口調変えてもなんともないのになあ。

「あつ、い、いえ……！ す、すみません！」

「どこに謝る必要がある。ゆっくり吸ってくれ」

失礼、と恰好つけて軍帽のつばに指をかけて挨拶をすると、俺はさつさと座席で待っている龍驤のもとへ戻った。

龍驤は窓の外に流れる景色を眺めつつ弁当をちよびちよびとつついており、俺が「すまんすまん」と言いながら席へ座ると、おー、と肩の力が抜けたような返事をする。

「誰と電話しとったん？」

ちよつと電話をしてくる、とだけ言って出て行って暫く待たせてしまったからか、手持無沙汰にさせてしまったのだろう。

四時間前後の移動となるのに一人にさせたのは申し訳なかったか、と話題がてらに言葉を紡ぐ。それが気の利いたものであればよかったのだが、俺は軍服を纏って進化しているように見えて、実際は退化した国畜である。話題なんて仕事以外ないんだなあ、これが。

「調べものをするために、大本営に連絡をしていたんだ。大湊警備府へは明日中に到着すれば問題無いから、今日は東京で一泊して行くぞ」

「泊りなんや。ほんなら大本営の——」

職場で泊まる!?! やめてくださいあいいい!

前職でのトラウマが蘇り、俺の心の阿武隈、必死の抵抗である。

「大本営には泊まらん。適当にホテルをとればいい」

「お、おう……そか」

即答した俺に気圧された龍驤は気まずそうな顔をしてお好み焼きを箸で切り分け、ふーん、と言って欠片を口に放り込む。

「柱島泊地にいても調べられん事はないが、どうしたって時間が掛かってしまう。ならば自分から行けばいいだろうという話なだけだ。

大本営には大淀がまだいるそうだから、大湊警備府の報告書をまとめておいてくれとも頼んだ」

「おお、大淀と話したんや」

「いや?」

「あん? 今、大淀に頼んだって言うたやん」

まもるは賢いので、こういつた勘違い、ちゃんと学びました。

俺は龍驤と同じお好み焼き弁当を袋から取り出して、割りばしを探しつつ笑ってきちんと伝えた。

「大本営に大淀がまだいるか聞いて、いると言つてたから言伝を頼んだだけだ。話したのは井之上さんだぞ」

「ああ、井之上さんなあ! なーんや、ウチはてつきり大淀と話したもんやと勘違いしてたわ!」

「はは、すまない。言葉足らずだったな。さて、いただきま——」

「——待てやオイツ! 元帥やんけ! 何を普通に仕事させとんねん!」

「おわあ!?! きゅ、急に大声を出すな龍驤、周りのお客さんに迷惑だろう……!」

龍驤の可愛らしくも海の向こうまで届きそうな声が車内に響き、周りの乗客も何事だと顔を向けている。

俺はすみませんと頭を下げて龍驤を宥めるように「静かにせんか」と言ったのだが、一瞬だけはつとした龍驤はそれでも納得できないという風にひそひそと抗議してくる。

「仕事させてるとは人間きの悪い。少し頼み事をしただけだ」

「それがおかしいねや! 司令官と同じ立場や言うても君と井之上元帥は事情がちゃうんやから……!」

いや、でも俺が言ったんじゃないし……。

これから一日東京で調べものをした後、翌日には大湊警備府に向かって調査任務だぞ? 会社で言わば監査のようなものだ。それも俺の大好きな艦娘が横暴を働いているかもしれないという見たくもない場面を見せられるかもしれないと考えたら、仕事の一つや二つ、井之上さんに押し付け——んんっ。井之上さんをお願いしたってい

いじゃないか！

それもただ大淀に「調べものしたいから資料まとめといてつて言つてたよ」くらいの言伝だ。上司であろうがそれくらいはどこの会社もやってるぞ！

ブラックな会社であれば上下関係がはつきりしているため、そういった伝言すらも受け付けないという事もままあるかもしれない。

しかしながら、いくら海軍がブラックだからといって上司に言伝のひとつも頼めないわけがないじゃないか。

龍驤、ブラックに染まるな……いいや俺が染まらせたりしない！

！
関西生まれじゃないのに関西弁が妙に流暢な龍驤は、まもるが守る

……つへへ、艦娘のためとあればダジャレも高度でキレッキレになるってもんよ。

「龍驤、落ち着かんか。どのような仕事であれ私や井之上さんの行動は必ずやお前達に繋がる。これも一つの連携だ。決して言伝を頼むためだけに連絡したわけではないんだ」

報告、連絡、相談なのだ！

「そんなん言うてもやなあ……！」

主に小言でつつきまわされてしやんとしろと怒られただけなのが、オブラートに包んで伝える。怒られるために電話したわけじゃないからね。そこはね。

「大本営に向かうのに一言断る理由も分かるだろう。これでも立場は弁えているつもりなのだ。井之上さんも私の行動が分かっているからこそ、大本営に寄るであろうと思っていたと言っていた」

「お、おお？ そうなんか……？」

「うむ。私も仕事を頼まれた身だ。まあ、しやんとしろとは言われたがな。東京に到着する時刻も伝えておいた」

「……まあ、司令官にも考えがあるやろから、ウチはついていくけどやあ」

よっしや話逸らせたわ。いやいやいや、逸らしてない逸らしてない。

これ以上龍驤に突っ込みをくらってはボロが出てしまうので、その前に俺は弁当を食べて誤魔化し——美味しい弁当をいただくことに専念した。そう、決して、誤魔化したりはしていない。

「美味しいな？」

「せやな」

適当に流された気がしないでもないが、弁当を食い終わる頃には機嫌もなおってるだろ！ と俺は龍驤とともに流れる景色を眺めつつ、食事をしたのだった。

そうして、弁当を食べ終わってからのこと。

何か話題は無いものかと考え込んでいた俺を見かねてか、どうせ君仕事の話くらいしかないやろ、と察してくれたように話しかけてくれた。

「大湊警備府のことなんやけどさ」

「ああ」

「司令官はどう見とるん？」

「どう見ている、とは」

「あー……横暴しとるっちゆう話、どう考えとるんかなって」

龍驤の言葉に即応できる考えは、持っていないかった。

どれだけ劣悪な環境にあっても、沈んで来いなどというあり得ない命令ですら受け入れて海に出る艦娘達が横暴を働く理由はいくらでもある。それこそ、一部とは言えど海軍そのものが理由になるだろう。

しかし彼女らは命令を遂行し続けた。その証拠は柱島泊地で今を生きる艦娘達であり、俺が見て来た現場の数々でもある。

仕事の話題が重すぎるよ……とへこたれてしまっそうになるが、恰好をつけたい相手であつても柱島泊地の艦娘である。

俺の全てを知っているのだから、隠す必要性もないか、と正直に答えた。

「本当に想像すらつかん。龍驤は私に艦娘が無条件に優しいと思うのが不思議、と言っただらう？」

「言うたね」

「人の汚いところは多く見て来たし、十人十色なものも理解している。しかし私が見て来た艦娘は全員が健気で、一生懸命で、優しい娘ばかりだった。お前達を知っているようでいて、私が知っていると思いついでいるだけ、分かっているのは先程言ったような一面だけなのだろう、と考えている」

「んー……司令官も中々にけつたいな性格やな」

「ま、まあ、その、気弱な面があるとは思っているけども……」

「気弱あ!? それこそ嘘やろ。ウチが言いたいんは、艦娘のそういうん見たら嫌いになりそやなって話や」

「それはないな」

「即答やん……なんでや? 呉鎮守府でも舞鶴鎮守府でも酷い現場見たやろ。佐世保鎮守府の提督が来たときやって酷い目に遭う^おとる。人っちゅうんは千差万別で、司令官があいつらとは全然違う人やつちゅうのも、分かつとる。艦娘やってそれと一緒や」

「……ううむ」

「それともなんや、司令官は艦娘がそういう風に出来とるつて考えてるん?」

龍驤の言葉に棘があるような気がして、ふとそちらに顔を向けた。怒っているのか、はたまた悲しんでいるのか分からない表情だった。

出来てると考えているのか、という言葉の真意を一瞬で掴み、俺は語気を強めて言葉を返した。

「無機質なものであると捉えているつもりは一切ない。そこは決して勘違いするな」

「つ……ごめん、別に変な意味やなかったんやけど、ウチ、その」
驚いて目を見開いたあと、すつと顔を背けて髪を耳にかけながらお好み焼きを食べ進める龍驤。

ちよ、つと……すみません。はい、言い過ぎたかもしれません……。

(気弱)

「ああ、いや、すまん龍驤。私が言いたいののは女性の気持ちはそうそう

分からんと、そういう事だ。艦娘というくらいだ、女性しかおらんだろう？　もしかすると大湊警備府の男が全員鈍感で気の利かない奴らばかりかもしれん。そうすれば気分を害された艦娘が横柄になるのも納得できるというものだ」

セクハラとか働いてるかもしれんなアツ！

直近で出向いた舞鶴鎮守府の惨状を思い返せば、ありえない話とも思えない。

そういう拠点ばかりだと、艦娘を虐げて君達良く滅亡しなかったねと言いたくなるが、海軍のトップたる井之上さんの胃腸が心配になるばかり。

「なんでそういう風に考えられるんや君」

え？　そういう話じゃないんですか……？

俺はかなり間抜け面をしていたに違いない。龍驤は俺を見て、はんつ、と鼻で笑った後にお好み焼きの最後の一欠片を食べてさっさとゴミを片付け、窓の外に顔を背けてしまった。

怒らせてしまった、と思ひ窓越しに龍驤の顔を見れば——違うあれは怒っているんじゃない、呆れていらつしやる顔だあ……！

ニコニコとした表情の龍驤と窓の反射越しに目が合い、龍驤の口が動くのが見えた。

大きく口を開け、それからしばむ。

明らかにアホって言われています。本当にありがとうございます……！

東京に着くまで無言地獄が決定です。

「つかあー、腰いたあー！　やあつと着いたなあ」

都合数時間の移動。昼も過ぎて東京の雲一つない空から降り注ぐ陽射しは、濃紺の軍服をあぶるようだった。

新幹線を降りた俺は龍驤様の機嫌をなおすべく、柱島泊地に籠もつてばかりでどうせ使い道のないもんだと財布に詰まったお札を確認

したあと、こつちだ、と龍驤を誘導する。

「龍驤、こつちだ」

「うん？ バスで移動するんか？」

ばっかやろう龍驤様にまた硬い座席に座らせるなんて出来るわけないじゃないですか！

国畜まもる、ちゃんと考えておりますとも！

意気揚々とタクシー乗り場を探しに改札を出たあたりで――

「海原元帥閣下、お待ちしておりました」

――大勢の軍人に囲まれる俺と龍驤。

龍驤は「おあつ……!?」と硬直してしまっているが、俺に至っては声も出ず。

「……」

無言のままギクシヤクとした動きで周囲を見れば、一般人はただならぬ空気を感じて小走りで離れていく者や、スマホのカメラを向けてくる者まで。

普通の会社員だった俺がこのような状況に対応出来るわけがなく、悲しいかな、やはり出来る事はひとつに限られている。

がつがつがつ、と乱暴な足音を立てて俺に声をかけて来た軍人に詰め寄ってから、周囲を取り囲む軍人に指を差しながら、こう言った。

「なんだこれは」

本当に何なんですかアツ!? まだ何もしてないんですけどオツ!

いや待てまもる。井之上さんと連絡をして東京駅に到着する時間を聞かれたじゃないか。もしかすると迎えに寄越してくれたのかもしれない。

！
だとしても多過ぎるし怖いよお！ 小心者の社畜のことを考えろ

俺に声をかけられた軍人の男は額を汗びっしょりにして最敬礼し、何度も噛みながら言う。

「し、しっ、しし、失礼しました！ い、いいい井之上元帥閣下のご命令により、お迎えにあがった次第でありますッ!!」

やはり井之上さんの差し金か。いや、迎えか。

ちきしょう、俺が何したってんだ……だめだ思い当たる節しかねえ。

「井之上元帥は何と」

「準備が出来ているから、このまま大本営へ向かうようにと……！」

「……承知した。だがお前、これを見て何も思わんのか」

これからまたお小言を言われるかもしれないと考えた俺、その前に小言を言ってやると最低な選択。さつきまで龍驤と和やかに飯食ってたつてのにお前らは！

和やか……？ まあ、和やかだったということにしよう。

「え、え……つと……？」

「こんな大人数を伴って交通機関を麻痺させるつもりか？ 私以外の者も多くが利用しているのだぞ。迎えというならばお前一人でも十分だったはずだ」

「し、しかし——」

しかしカモシカもあるかつ！ お前らのせいで注目の的じゃねえか！

「我々が任務を優先するように、彼らも生活や仕事を優先せねばならんのだ。良く考えろ」

「っは、りよ、了解しました！ では、その、小官が迎えの車までご案内を……」

「うむ」

そうだね。ただの八つ当たりだね。俺もビックリしたからね、仕方がない。

許せよ名も無き軍人よ。驚き過ぎてさつき食ったお好み焼きが全部出そうになったんだからさ。

「総員駆けあしッ！」

「ひえ」

目の前で突然大声を上げられて驚く俺。もちろん俺の悲鳴はかき消された。

俺と龍驤を取り囲んでいた大勢の軍人は嘘のように消えていき、最後には俺と龍驤、出迎え軍人の三人となる。ものの十数秒の出来事で

あつた。

「こちらです、元帥閣下」

「……うむ。行くぞ龍驤」

「お、おおん」

大本営に到着する前にお手洗いにいった方が良かったかもしれない。
い。

胃が丸ごと出そう。

* * *

そうして黒塗りの高級車に乗せられ、あつという間に大本営に到着した俺と龍驤。

車中で龍驤は「大本営も久しぶりやなあ」と呟いていたので来たことがあるようだったが、柱島泊地の中枢施設以外の大きな建物というのには慣れていないのか、緊張の面持ちだった。

俺は古めかしく大きく立派な建物であろうが「テレビで見る国会議事堂みたいだあ」くらいの印象で、それ以外の感嘆など一切無かった。仕事で如何に綺麗なビルを見上げても感動しないのと一緒にである。仕事だもん、しかもここ大本営でお偉いさんが集まってるだけでしょ？ 艦娘がいないなら興味も湧かないよそりゃ。

さらには一部とはいえお偉いさんなんて映像越しに会議で何度も顔を合わせた者ばかり。とすれば、俺をただの社畜と知っている奴がいるのだから緊張もへつたくれもないのである。感動が無いのも物悲しいが、艦娘に会えない仕事というだけでやる気スイッチがオンになっしてくれないのだ。

まあ、井之上さんに会って挨拶出来るし、大淀もいるだろうから……と無理矢理に元気を出して高級車を降りる。

「あ、あぁっ、自分が開けましたのに……！」

運転手の男が困ったように言う。ごめん普通に着いたから出ちゃったよ。

「いらん。ほら、龍驤」

俺が龍驤さんを降ろしてさしあげるんだよ！ 邪魔してんじゃねえッ！

「あ、アカンで司令官……ウチは艦娘なんやから……！」

小声で言う龍驤だったが、どうして艦娘にドアを開けてはいけないのか分からず、俺は眉をひそめる。

「変なことか？」

「変やて！ 元帥自ら艦娘が降り易いようにつて運転手みたいに、それ、そのタクシーの運ちゃんみたいに手え添えてたらおかしいやろ！」

龍驤が指さす先には、リアドアを開けた上部へ添えた俺の腕が。

頭を打ったりしたらどうする、と真顔で言えば、龍驤は自分の額をぺしんと叩いて溜息を吐いた。

な、なんだよ、似合わないって言いたいのかよ！ 新喜劇みたいな反応すんなよ！

「お前が怪我をするよりよっぽどいい」

「艦娘がぶつけて怪我あするわけないやろ……つて、言うても無駄なんやろけど……よつと！」

ぴよん、と可愛らしく降車した龍驤。百点です。

運転手に向かって、

「ご苦労だった」

とだけ言った俺は、軍帽の位置を直して大本営へ足を踏み入れる。手近にいた女性士官に声をかけ、井之上元帥の居場所を問えば、俺の顔を見てはつとした後に案内してくれた。

そうして、建物内を右へ左へ。複雑な廊下の先に両開きの扉が現れる。

先導してくれた女性士官はどうしてか俺に一礼したあと、龍驤にも一礼し、扉に手をかけた。

開けてくれるのかと思いきや、別の女性士官がやってきて龍驤へ「こちらです」と声をかける。

どういう事だと気にかかるも、もしや井之上さんが個人で話でもしたがつっていたのだろうかと考えた矢先、龍驤の背中が見えなくなる前

に扉が開かれた。

そこには――

「来たか、海原」

井之上さんと見知った外国人女性が一人。知らない老齡の外国人の男一人と、その横にスーツ姿の若い外国人の男が一人。英会話教室かな？

四名の視線が俺に向けられ、自然と表情がぐっと引き締まるも、ビツて目も合わせられずに軍帽を目深に被ってしまった。

軍帽のつばで視界が遮られる前に見えた女性は――ソフィア・クルーズという女性だった。彼女と会うのも久しぶりになるが、どうしてここに？ など考える余裕もなく。

「海原鎮、ただいま到着しました」

大淀がよく言ってるからこれなら間違いないだろ！ と瞬時に判断する俺。

敬礼のしかた間違えてないっけ、これでいいっけ、と脳内大混乱である。

井之上さあん！ 客人在るなら先に言えってマジでもおおおおお！

「お話し中に申し訳ない。また時間を改めます」

「いや、海原、いいのだ。こちらへ来てもらえるか」

「……っは」

たっぶり五秒くらい黙ってしまった。行きたくなさ過ぎて。

井之上さんの傍に来た俺は、ちらりとソフィアさんを見て「お元気そうで安心しました」と言う。おもつくそ日本語で。

ソフィアさんは首を傾げていた。そら（日本語知らないんだらうから）そう（いう反応になる）よ。

失礼、と言つて井之上さんの横に腰をおろせば、中断していたであろう話が再開された。内容？ 分かるわけがない。社畜には難易度高いです。

さらに驚くことに井之上さん、英語がぺらっぺらである。

『間に合つて良かった。こちら、前線で指揮を執っていた海原という

者です。知らんことはないでしょうが』

井之上さんが何やら俺を指して言っている。紹介してくれたのだろうと老齡の男に向かつて軍帽を脱いで頭を浅くさげる。

くそ、妖精出てこい頼む！ お前達の出番だ！ 自動翻訳金平糖をくれ！

まあ、こういう時に限って出て来ないのだが。

俺の祈りもむなしく、自然にポケットの外側を撫でつけて感触を確認するが、スヤツスヤの様子。

役立たずがよオツ!!

『ええ、もちろんですよ井之上元帥。大切な国民を救ってくれたヒーローですから、我が国ではミスター・海原……いえ、海原元帥の名を聞かない日はありません。ミズ・ソフィアも、久しぶりだろう?』

『はい。まさかお会いできるなんて……でも、雰囲気がいつもと違いますね? 服のせいかしら』

『私はジョシユア・クラーク。アメリカ海軍の少将です。こちらの女性は……紹介しなくとも、覚えておられるでしょう。そしてこちらは補佐のベイリー大佐です』

外国人の身振り手振りというのは見ていて面白いもので、井之上さんの流暢な英語もあつてか、本当に映画のワンシーンに迷い込んだようだった。

俺に話しかけてきている様子なので頭を下げる。多分名乗ってくれたのだろう。

ジョシユアと言う老人に、ベイリー? ベイリー? さん

井之上さんが俺の軍服を指して言う。

『これは冬用の正装です。元帥となっても海原は前線の癖が抜けないようで、方々を飛び回っておりまして。これからまた移動を』

『お忙しいのにわざわざ挨拶に?』

井之上さんと話していた老人が俺に顔を向けてきて、井之上さんの視線もこちらへ。

慌てて何かを言わなければと姿勢を正し、とりあえず手を差し伸べる。

「……」

無言である。ないすとうーみちゆうーくらい言え俺！

待てよ？ こういう時はもつとこう、丁寧な言い方があったはずだ。

ぷ、ぷりしえい？ 違うな……ぷれじゃー、みーと……あーくそ、こんな事になるなら英会話教室でも行つとくんだったあ！ 行く時間無かっただろうけど。

社畜時代に培われた多くの技能の中に英語なんてない！ 総合商社に勤めていた俺だが、海外取引部門の奴らが喋れるからといって全部署が相当する能力を持っているかと言われたら別なのだ。

俺には書類を消し去る能力しかない……なんて無力なんだツ……！

『……お会いできて光栄だ。私は海原鎮という』

ぼそぼそと「ぷれじゃーとうーみーちゆうー、まいねーむいず……」と言った俺だが、伝わっただろうかと軍帽のつば越しにちらりと相手を見る。

相手は硬い表情でゆっくりと俺の手を握った後、咳払い。

ごめん井之上さん、伝わらなかつたのかもしれない。後でいっばい謝るね。

『さ、流石に、前線を指揮しているだけあって、すごい迫力ですね。は、こんなに緊張したのはいつぶりだろうか。もう少し歳をくつていたらきつと気絶していただろうね』

老人が苦笑いしており、ソフィアさんも硬い表情である。

あーもうこれだめだあ！ 仕事前だつてのに滅茶苦茶だよもう、あーあー！

しかしまもる、これだけは覚えていて。女性は困らせちゃだめだと。

そこまで仲が良いわけじゃないが、艦娘が助けた女性であるソフィアさんに冷たい野郎だなんて思われては艦娘のイメージダウンになりかねない。

フオローアツプは社畜の得意技よ、任せな！

『……あなたに会えず寂しかったよ、ソフィアさん』

あいみすゆー、は会いたい、だから、あいみすどうゆーと過去形にすれば会いたかったとなるはずだ！

こうすれば覚えているよと安心させられるだろうし、ソフィアさんも肩の力抜けるだろう！ へへ、まもるは馬鹿でも紳士なんだ。

『あ、えっ、海原元帥、あのっ、え、あ……』

きよとんとする老人たちウイズ若人。

え？ 間違っていないだろうこの英語は。中学英語だよ？

流星に中学英語を間違えるほどまもるだつて馬鹿じゃないってー！

『そんなに、想われていただなんて、その、連絡もできないでごめんなさい……自分の事ばかりでいっぱいになって、それも今日あなたが来ることも知らされていなかったから、私、その……！』

待つて待つて英語でまくしたてないで。ラップか？

『——感謝しているの！ あなたがくれたあのキャンデーのことも忘れてないわ！ 本当よ！ ……よかった、あの時のあなたのまま、変わっていないみたいで。ふふ、驚いたのよ？ そんな真つ黒な服で、怖い顔をしていたから……』

やつとワンバース終わったか……殆ど聞き取れなかったぜ……！

キャンデー、という単語だけは聞き取れたので、とりあえず、とポケットから妖精のおやつ用にと持ってきていた金平糖を一つ取り出して渡す。

ひあゆあー、と忘れずに。

『いちらを』

『……っふふ、あなたって、ほんと、不思議な人ね』

『これはこれは！ 海原元帥が扱えるのは銃弾だけじゃないようだ』

ソフィアさんもジョシユアさんも何やら笑ってくれたので良しとしよう。金平糖食べたくて来日したわけじゃあるまいが。

『……んんっ。話を続けましょうか。こちらから出せる艦娘についての研究資料は既に用意してあります。それで、そちらの研究結果は共有していただけるでしょうか？』

急に声のトーンが低くなった井之上さん。

ジョシユアさんの顔も強張り、二人の間に緊張の糸がぴんと張ったようだった。

『もちろんです、井之上元帥。ですがその前に、深海棲艦を押し返すのがやつとであった日本海軍が何故、ここにきて一転攻勢に出られたのかをお聞かせいただけないだろうか？ 内容はともかく、それは研究で得た結果なのでしょうか？』

『私は答えを呼びましたよ。ここにね』

『と、すると、彼が、ひ、一人で……？』

『ええ、そうです』

『それはあり得ないでしょう！ スтейツがどれだけの物量で押し潰しているとお思いなのですか？ 艦娘を大量に建造し、包囲殲滅し続ける事で西海岸も東海岸も沿岸海域の制海権を維持しているのです！ 深海棲艦の弱点を突き続けられるからこそその結果ですよ！』

『弱点など関係ありません。それは既に戦果が証明しております』
『では、研究結果を求めるのは何故です！』

『勘違いしないでいただきたいのは、深海棲艦の情報も、艦娘の情報も、提供しあうことと共有することは違うということです。我々は艦娘の情報を各国と共有したいと考えており、日本政府もその意向に同意しております。ですから、我々がアメリカに求めるものなどないというのが前提です。我々が情報を共有しているという事実があればこそ、各国の動きを活発化させ、打開の一手をさらに生み出せると考えております』

『それでは確証の無い脅しではありませんか』

『これは確認に過ぎません。アメリカ側が深海棲艦の情報を共有しないと言つても、我々は艦娘に関する研究結果の一切を共有する準備があります』

『井之上元帥……私はあなたを古くから知っている。何があなたをそこまで突き動かしているのですか？ どうして、そうも自信に満ちているのです』

『だから言っているではないですか。勝つための方法は既にある、と』

なんだか英会話のビデオみたい、と思っただらまたもこちらに視線が向く。

井之上さんは期待しているような目をしているし、ジヨシユアさんは怖い顔をしているし、ベイリーさんも顔色真っ青である。

ソフィアさんは食べづらいのか、俺と金平糖を交互に見ている。いいよ食べて。

なんだよ。何を言えばいいんだよ!?

新しい仕事でもさせる気か! いいよ俺がやってやろうじゃんよ

!

大湊警備府の仕事が終わってからオネシヤスツ!! (諦め)

おっけー! のーぷろぶれむ! あいむひあ! おーけい!!

『一切問題ない、私がいるだろう』

何故かソフィアさんが口元を押さえて震えながら泣き始めた。

ジヨシユアさんとベイリーさんは目を見開いている。

井之上さんはニヤニヤ笑ってやがる。なんだよもおおおお!

龍驤おおおおお! 大淀おおおおお! ちよつと来てえええ

えええ!

北へ③

龍驤が連れられたのは執務室とサインプレートのある部屋——の正面にある部屋。

そこには作戦会議室と書かれたプレートがあつたが、その横に間に合わせのような手書きで第二執務室、というプレートも貼り付けられていた。

女性士官は一礼すると去つて行つてしまい、入つて待っているという事か、と重厚な木製扉に手をかけながら、扉をノックする。

「どうぞ」

扉の向こうから返つてきた声は女性のもの。それも良く知る声で、龍驤は勢いよく扉を開いた。

「すみません、海原元帥なら——あら、龍驤さん！」

「大淀！ おま、何してんねやこんなところで!？」

「何、と聞かれると困りますが……今は海原提督に頼まれた資料の整理をしていたところですよ」

苦笑しながら龍驤を招き入れた大淀は、両手に抱えた紙束を部屋の正面最奥にある机の上にどさりと置いて「今、お茶を淹れますね」と応接用ソファに座るよう示した。

室内は整理されたばかりであろう綺麗さだったが、壁と一体化するように設置された本棚には多くのファイルが入れられたままになっていた。

作戦会議室の名残はあるが、木製の執務机に茶色の革張り椅子、本棚ひとつひとつから綺麗な木目が窺えるシックな室内の雰囲気も相まって、執務室と言われたら納得する内装。だがやはり龍驤は資料室と見紛う膨大な書類が気になってしまい、感嘆するような、物珍しいものを見たといった声を漏らした。

「はああ、すごい光景やな。これなんなん？」

「作戦会議室兼資料室の一つだったらしいです。私は大本営で資料整理をするのはこれが初めてで井之上元帥に聞いたままですが……ここに集積されているものは全て過去の戦闘詳報です。それと……行

動調書ですわね」

「戦闘詳報、て……それに外に執務室で手書きのプレートかかったたやんか。ほお、井之上元帥はここで執務しとるんか……」

「あ、いえいえ、違いますよ。ここは資料室の一つだったと言ったじやありませんか。井之上元帥の執務室はこの正面の部屋です」

「ほんなら、ここは？」

「海原提督の部屋らしいですよ。ここには柱島泊地の艦娘か元帥の許可を得た人しか入れません」

「うわこわ。え？ うせやん、こんな部屋もろてたんや司令官」

「……そういう反応になりますよねえ。でも海原提督はこの部屋をまだ知らないんです」

「ちゆうごとは……？」

「はい。私と龍驤さんが一番乗りになっちゃいました。不可抗力ですけどね」

大淀は紙コップに入れた冷たいお茶を二つ用意して応接用ソファまでくると、一つを龍驤に手渡して腰をおろした。

「さつき司令官と大本営に着いたばかりなんやけど、井之上元帥と話があるんか向こうの会議室に入っていつてもーてや。知らん子おに連れてこられてまんま来たのはええけども……な、大淀、大本営ってこんな女性士官働いとるもんなんか？」

紙コップを両手に持ち、コップの側面から伝わる冷たさで涼みながら疑問を口にする龍驤。

普段から口数は少なくない彼女だが、緊張からくる饒舌さを感じさせる。

落ち着かせるには機銃のように連発される質問に答えられる範囲で答えるしかないのだろう、と考えて大淀は微笑んでみせる。

海原に求められた資料は執務机に既に準備済みだが、出来ればこの部屋の片付けを優先したい気持ちもある。しかしこれから海原と大湊警備府へ出向くのだから片付けが遅れて柱島泊地への帰還が多少延びてもすれ違いにはならないか、と結論付けて口を開いた。

「いえいえ、ここ最近になって大本営に異動した方が多いらしいです

よ。井之上元帥のご意向みたいですけど、詳しくは分かりません」

「……趣味？」

「んんっ、龍驤さん」

「じよ、冗談やん。まあ慣れてる感じが全くせえへんかったからなあ、変やなあとは思ってたんや」

龍驤は口にしなだけでよく人を見ている艦娘だ。

大淀の言う通り、大本営にいる女性士官の多くは各地から異動となった者ばかりで、主に艦娘の対応を任されているらしいとは大淀の言。

井之上元帥曰く、出来る限り艦娘には女性を、とのことらしい。

海軍の体制変更もあつて各拠点における現場以外での異性との接触機会を減らしているようにも思えた。真意のほどは、定かではない。

「よう大本営と行き来しとるとは思ってたけど、色々と変わってきてんねやなあ。司令官も大本営に執務室持つてるとか言わんしビツクリするやん」

「聞かれなきや言わない人ですし、そもそも知らないですから……」

「それもそやな。んじゃあ大淀はこの整理をしにわざわざ柱島泊地から出てるんか？」

「ああ、それについては——」

女性士官が多くいる理由は詳しく知らないというのに、機密任務に關して多くを知る大淀は、おかしな環境だと胸中で笑いつつ答えた。

機密とは言え自分達は今、大本営の執務室にいる。さらに会議室には井之上元帥も海原提督もいるのだからと気は軽いものだった。

「陸軍憲兵と同じく、海軍も特別警察隊が編制されたんです。私はその補佐を頼まれたんですよ」

「……マジっ？」

「マジです」

「うわあ、なんやろ……昔のこと思い出してめっちゃ胃い痛なってきた」

「うふふ、そうなりますよね。分かります、私も聞いた時は戸惑いまし

た」

龍驤の言う昔のこととは、言わずもがな。

しかし彼女が考えている特別警察隊とは意味が違うのだと大淀は言う。

「陸軍大臣も認可しているそうです。まあ、名ばかり部隊という感じですからね」

「名ばかり部隊で、なんで編制すんねやそんなもん」

海軍における憲兵たる特別警察隊は、かつて海軍軍法会議などを有しているながらも独自の軍事警察機関を持つていなかったことから創設されたものだ。

陸軍法務部の統括する憲兵は軍事行動の際に作戦区域へ出兵され、軍人の犯罪行為を取り締まる役を担う。時間の経過に伴い占領地が広がり兵力が不足したことで陸軍憲兵から反対されながらも組織されたものが特別警察隊である。

しかしながらこの戦争において占領地という概念は極めて薄く、あるのは制海権、または海域の支配権であり、どちらかと言えば国家同士の経済問題に近い。

さらに言うならば通商の復帰もしなければならぬのだから、憲兵という存在は微妙なバランスの上にある扱いづらい組織でありながらも重要な役割を持つ。

当時の陸軍が反対した理由如何は割愛するが、権力の分断は混乱を招く、とだけ言えばこの場では伝わるだろうかと大淀は簡潔に説明した。

「単なる人手不足や命令権の分離が目的ではありません。昔の特別警察隊とは違う組織なんです。海原提督に関連して——」

たったそれだけで龍驤は理解し、答え合わせが如く人差し指を立てて言う。

「あの人の警護やな」

「ふふ、流石ですね」

「はっはあ、ま、ウチらの司令官は特別変やからな。特別警察隊の体裁も必要つちゆうことか」

「はい、そういうことです。思う所が無いわけではありませんが……」
顎に指をとんとんと当てて言う大淀に、なんで？ と直球に問う龍驤。

すると大淀は真面目な顔をして言った。

「柱島泊地以外での任務を安心して遂行出来ると言えば聞こえは良いですが、裏を返せば監視されているということですよ。海原提督も気が張ってしまうだろうなあ、と……」

「あー……」

どれだけ優れた人間であれ個人の時間を失うというのは堪えるものだ。

柱島泊地ではどこにいたって艦娘がいる。大淀や龍驤を含む彼女らは無意識ながらも気遣っているのだ。それでも一人の時間は殆どないと言っている。

それが柱島泊地から出て外部で活動する場合にも特別警察隊の誰かが見ているとなれば、きつと良い気はしないだろう。

そこで、井之上元帥に伝えられたことを龍驤へさりりと言う大淀。

「ですから、提督には秘匿したままにしろと井之上元帥が」

「んなつ!? じゃあウチに言うなや!」

「一人で抱えるのも大変じゃないですか」

「大淀、お前ほんつま……! なんや、いつかの仕返しのつもりかこれ!?!」

「……結婚情報誌の時の仕返しです」

「はああ……みみっちいやっちゃ!」

「あはは! でも、完全秘匿というわけでもないそうです。ただ、聞かれるまでは言わなくていい、とのことで」

いたずらっ子のように笑う二人だったが、扱う情報の重さはそこらの軍機の比ではない。

無論、軍機とあればそこに差は無く等しく秘匿されるべきなのが、こと、海原鎮という男に関しては井之上元帥のほか、軍部中枢全員の許可がなければ情報部すらも触れようとしなないものである。

陸海軍から国内のあらゆる情報を持つ部門ですら不用意に扱わな

い情報を、お茶を飲みながら口にするのが欠陥品扱いされていた艦娘二人という状況は異常という表現では足りないだろう。

それを理解しているが故に、二人の笑みはさらに深まってしまったのだ。

「公表されるんやろし司令官もすぐ気づくんちやう？」

「どうでしょう？　陸軍の反応も昔とは真逆だったようで、スムーズに編制されましたよ。既に公表もされています。しかし特に海原提督からそのような話は受けておりません」

「……その先は聞きたないで」

「広報部の橘中將が——」

「あー言わんとつてもー！」

大淀の声を大袈裟に遮って耳を塞ぐ龍驤だが、それだけで言わんとしている事が分かってしまう。

これもまた情報操作か、と肩を落とす、龍驤は言う。

「にしてもや、特警を陸の人らが、はい、さよですかって認めたってのは何でや？　流石に司令官のことは言うてへんやろ」

「これについても詳しいところを聞いたわけではありませんが、陸軍の活動に兵力を割くのが主になると」

「……なるほど、井之上元帥も絶妙なところ突きよるやんか」

龍驤は足を組んでソファの背もたれに寄りかかりながら片腕を乗せ、茶を一口飲んでつらつらと語る。

「活動は監視するけどそっちも監視してええよと。ほんで兵力が必要になったら正式に貸し出せる人員を無条件に出したるし手の平は返さんから安心してやって証拠にきっちり編制したわけや。ほな陸の大臣さんも命令権を行使したときに無視されへんから陸軍の兵力を温存出来る……。陸海軍を対外的に睨み合わせる形にしたんは、多分このためやったんかもしれん。腹ん中を覗きたい官僚連中らもウキウキで探り入れてくるやろけど、陸海軍と両方にある同一つちゆうてええ組織にいらんことすれば、どっちも手を噛んでくるかしらんから抑止にもなる……」

「その活動の一環に、提督の護衛があるわけですね。寧ろ、憲兵隊が積

極的に活動したって構わない再編のさなかですから、特別警察隊を編制する意味は薄いだろうとは思っていましたが、わざわざ喧伝するように一斉摘発を憲兵に堂々とさせる意味も、これに関わっているのかもしれない」

「悪事がバレたって膿が出て行くだけやからな。そのための再編や」
「はい。ですが外部の者は特別警察隊の編制に色めき立っている――」

「悪事を隠そうと必死になってるんやと見とるから、陸軍が不自然なくらいにスムーズに編制認可をおろしても、周りは止めへんわけや」
「そんな特警が大戦果を挙げた提督の周囲をウロついている事が露呈したとしても、決して邪魔は入らない。二重の抑止力、ということですね」

龍驤はそこまで情報がまとまったところで、空になった紙コップをテーブルに置いて静かに言った。

「……井之上元帥の頭ん中どないなってんねやろな」

「当初の海原提督に感じていたものと同じ感覚ですよね」

「あれはちよい勘違い入ってたやん！ 井之上元帥のはガチやろ！

ガチー」

「では龍驤さん、これを」

大淀は飲みかけの紙コップを置いて立ち上がると、執務机に置かれた書類の中から一枚の紙を抜き出して龍驤へ手渡した。

「大湊警備府の資料やん、なんでウチにこれを――え、あ」

「大本営付でありながら各拠点を回ったあなただからこそ、選出したのだろうなと入室してきて一目で気づきました。今回ののは、勘違いなどではないと思いますよ」

それは戦闘詳報の一つで、一見して、ただ過去に深海棲艦をなんなく撃滅せしめたというだけのもの。

しかしそこに記されている日時はとても古く、遡らねば辿り着けないものでもあった。

大湊警備府近海における戦闘記録。

哨戒班旗艦――初期型マルヒト号――軽空母、龍驤。

深海棲艦が出現して一年も経っていない頃のものである。

海軍として再編されてようやく形が落ち着いた頃でもあり、艦娘の運用について手探りどころの話ではなかった頃のものだった。

それぞれの拠点が独自の運用で多くの深海棲艦を撃滅しつつ、情報蓄積に躍起になっていた。

国同士で連携せねば勝てないと薄々感じ始めた頃でもある。

それが現在において為されているかと問うのは野暮であろう。

「……偶然やて。初期型やったから色々なところ回ったし、大湊警備府もちよつとおつただけで、殆ど覚えてへんよ。最後には大本營に戻った挙句に型落ちちゃーって柱島泊地やで？ 今でこそ井之上元帥が逃がしてくれたんやって分かつとるけどもや」

すぐに書類をテーブルへ置いて「茶あのお代わりちよーだい」なんて笑って言う龍驤だったが、大湊は空の紙コップを持ち上げながら言葉を紡ぐ。

それはまるで龍驤の深層心理と現実を隔てる薄膜に触れるようだった。

「本当に偶然でしょうか？」

「偶然や偶然、ウチもほんまに殆ど覚えてへんねんから！ そら場所くらい分かるけど、それくらいや」

「では、私の考え過ぎかもしれません。忘れてください」

「お、おん……まあ秘書艦大湊っちゅうてもそれくらいは人間味いないとなー。常に完璧やと怖いし」

「人間味、ですか。はいどうぞ」

龍驤はへらへらと笑ったままお茶を受け取り、半分程ぐつと飲む。

「喉が渴いてたんですか？」

「外ちよつと暑かったんやもん。大湊に行くのに温度差で司令官がやられへんか心配やわ」

笑いながら言うも、大湊が「そうですねえ」と返しつつちらりと龍驤の指へ視線を移したのに気づき、しばし無言のあと、

「……ああもう、わかったて、言うて。言う！ 変なとこで鋭くならんというよ」

と茶を一気に飲んで紙コップを握り潰して言った。

「自分からお話してもらえらるなら、それに越したことはありません。是非お聞かせください」

ニツコリと笑って書類を執務机に戻してソファへ座りなおす大淀に、龍驤は隠しておきたかったわけではなくとも、わざわざ言いたくもない気持ちで吐露した。

「……人と艦娘って、違うやん。大湊警備府におったんは短い間やったけど確かに覚えとる。ただ我武者羅に戦う場所やったこと、それしか覚えてへんねん。よおボロクソにされたんも覚えとるよ。片腕取れるわ、飛行甲板ボコボコになるわで最悪の環境やったわ。ただ……そやな、一番、艦娘らしい過ごし方をしとったとも、記憶しとるかな」

「ええ、はい」

「ウチらは人やないんや。普通に人らは片腕取れたら治らへんし、何度も死にかけるような戦場におったら頭もおかしなる。けどウチらはどないや？ ならへんやろ。そういう風に来ると痛感してまうくらい、時間が経てば元通りになる。恐ろしい想いをしたつちゆう記憶があつて怖がつても、海に出たら戦わなつて、どうしてか心が奮い立つ。変やと思えへんか？ 片腕取れるような戦いしたのにな、よっしゃやつたろ！ って思うねんで？ ……普通なわけあらへんやんか」

「……ええ」

「駆逐艦の子おら、そやな……ウチと同じ初期型の吹雪おるやろ」

龍驤の紡ぐ言葉の先を早く聞かせてほしいと逸る気持ちを抑えて頷く大淀。

「海で沈む以外で死ぬ事なんて殆どあれへん。ずーつと同じ、ウチならウチ、吹雪なら吹雪、大淀なら大淀のまま、存在し続ける。君、髪切ったことあるか？」

「髪、ですか？ それは……」

無い。ただそれを口には出来なかった。

「そういうこつちや。時間が進んでへんねん、十年前から。考えやら性格やらは変わったかもしらんけど、吹雪はずーつと、駆逐艦吹雪の

ままで、姿はおんなじや。軽空母龍驤も、ずっとこのまま」

ここまで言ってから龍驤はサンバイザーのような艤装を指で弄りながら、上目遣いに大淀を見る。

「——変化していないということですか？」

「ん……それもある」

どういう意味です？ と促せば、龍驤は逆に大淀へ問いを投げた。

「大淀は司令官の事好きやろ」

「ええ」

恥ずかしげもなく堂々と頷いたのに少し驚き笑ったが、龍驤の笑顔には陰があった。

「ウチ、ちよい嫌なこと言うかも」

「なんです？」

「……ウチらは沈まん限り死ねへんねや。大淀は司令官と、長いこと過ごせたとして——そのあとどうするんかなとか、考えてもうたことがある」

「そのあと……う？」

自分で口にしてやっと思いを理解して、大淀は手を打った。

「ああ……私達は死なないとか、変わらないって、そういう……」

艦娘は——歳をとらない。

幼い駆逐艦も、少女のような軽巡も重巡も、成人した見た目をしてる戦艦や空母も、十年前から変わらないまま。艦娘は時の流れから外れているような存在だ。

いつか彼ら、彼女らを置いて自分達が沈んでいったように——解体されていったように——今度はそれが逆転して突きつけられるかもしれない現実が横たわっている。

龍驤はずつとそれが心の底に眠っていたのだろう。

「あつ、べ、別に自分で沈んだるか考えてへんで!? いやあ、でも、なあ……寂しいやんか、そんなん。勝っても終わってもないのに何言うてんねーん！ って感じやけどさ。昔っからそういう事ばかり考えてまうんよ、ウチ。へへ、めっちゃ根暗やんな、こんなの」

「……そうでしょうか」

大淀は目を伏せたが、口元は緩く微笑んでいた。

「なんでそんな顔できんねや。悟ってんの？」

「悟ってるとか、そんなことはありません。ただその考えはよく分かります。ええ、そうですね。寂しく感じてしまいます、そんなの」
「別に司令官が好きとか嫌いとかあんま考えたことあれへんかったけどやあ……あんだけウチらの事で必死になつてくれる人や。そら寂しくも思うやんか。接し方も分からんようになるて。大湊警備府におった時には、こんなこと考えてても軍人と関わることなんて入渠で身体治す時に物珍しさに見られる時くらいや。関わりつちゆうもんがほつとんど無いとこや、あそこは。大淀が想像しとるよりよっぼど人と艦娘の関わりが希薄なとこやで。当時の司令官にも言われてたからな、バケモンやて。今がおかしいんや……柱島泊地と、司令官が変なんや」

大淀は海原が龍驤を選んだ理由を想像しながら、彼女の言葉を腹の奥深くに溶かしていく。

人と艦娘の関わりというものを言葉無く考え続けて来た龍驤だから、選んだのだろうかと思いつつ。

ふと、大淀は笑みを隠しながら言う。

「だから提督に不器用に甘えているのですか？」

「あつ!? 甘えてへんて!? 急に変な事言わんとつてよお！」

大淀はようやく、態度が軟化しただけにしては海原との距離が近いと感じていたことへの違和感を呑み込めて、釈然とした。

「なるほどなるほど。提督が龍驤さんを選んだ理由は、大湊警備府を知っているだけではなく、打ち解けてくれたように見える龍驤さんならば安心して任せられると——」

龍驤は脳裏で大淀の言葉と海原の言葉が重なり、立ち上がってさらに否定してしまう。

「ちやう!! あんなボケーっとした司令官の事は好きやない!!」

「好きかどうかは聞いてませんが? 大湊警備府の調査に龍驤さんを選出した理由の話ではありませんか」

「ぐっ、う、揚げ足取るなて! 接し方が分からんっていうた理由と

セットやろがい！ それとこれとは別！ そ、それに、ほれえ！ 指輪を貰ったんも新兵装のデータのためやし、協力せえっちゅうたのは大淀、君やろが！」

相当に狼狽して左手を広げて突き出し、指輪を見せつける龍驤。

大淀はもうにやにやとした顔を隠せなくなりながら、声だけ平坦なまま頷く。

「はい、その通りです」

「そやろ!? ほんなら別にこの指輪にもそれ以上の意味はあれへんやんか！ そら受け取るのにちよつと考えたんは、あるけど……」

大淀は目で龍驤の左手を見ながら言う。

「その兵装の名前を知らないわけでは、ないですよね？」

「しつ……とる、けどお……」

「データ収集の一環として扱うにしたって、好意がない相手から受け取るには重たい名前だと思うのですが……少なくとも、それを受け取れるくらいには海原提督を好ましく思っているのでは？」

「……」

「それでそれで、龍驤さんっ。海原提督への想いに気づいたのは一体いつからなんです？」

まるで乙女のように期待に満ちた目をして前のめりに聞いてくる大淀の顔を見て、龍驤はどうとう両手で顔を覆って声を上げながらソファに倒れ込み、両足をばたばたさせた。

大真面目に任務について話していたはずなのに、どうしてこんな話題にシフトしているのだと考える余裕すらも失われた龍驤だが、これは言わば大淀の手中。

龍驤の深層に眠る本質と現実のズレを、空気に触れるような場所へ晒すべきではないとして大淀はこうして茶化すことで話題の転換を図ったのである。

それを解決するのはきつと私じゃなく、龍驤自身だから、と。

「あーっ！ 何でそんな平気な顔で突っ込めるんやこの秘書艦はあーっ！」

「隠していても損ですから。特に柱島泊地においては」

「なんやねんその意味わからん理屈……」

「わかつてらっしやる癖にい」

「くっそおお……なんで大淀にしてやられなアカンねや……!」

「それで、教えてくださいよ龍驤さん。いつからなんです?」

指の隙間からチラリと大淀を見て、また指を閉じて顔を隠した龍驤はぼそりと呟いた。

「ウチも、分からへんねん……最初はちよっと揶揄ったろと思っただけで、反応おもしろいなって思ってただけやってん……でもたまに、齒あ浮きそうになるようなこと真剣に言うてくるし、めっちゃウチらに近いやんか。一気に近づかれたら意識すなって方が無理やろ!?! 今までどれだけ疎まれてきたと思ってるんや! あれだけ構ってくれるんやから話しかけてまうやんか……」

「そして気づいた時には目で追うようになっていた、と」

「だあああもうやめや! やめやめ!」

これ以上は本当にダメだろうと大淀はクスクス笑いながら「すみません」と謝罪にもならない言葉を紡ぎ、立ち上がって新しい紙コップを用意し、茶を龍驤へ手渡す。

龍驤も何も言わず受け取って一気に飲み干し、一息。

「は……まさか大淀に突っ込まれるとは思えへんかった……油断したわ……」

「でも隠したって仕方がないことは確かです。人であるとか艦娘であるとか、私もよく考えてしまいますが……ふふ、つい先日、あきつ丸さんから良い話を聞いてから、遠慮は損だなと学んだのです」

良い話題転換だと、龍驤は白々しく食いついてみせる。

これもまた大淀の手中とはつゆ知らず。

「お、おお! あきつ丸! あきつ丸と川内も忙しくしとんなあ。二人は艦娘保全部隊やろ? 柱島泊地におつても駆逐艦と散歩しとるくらいでは何しとるかわからんし」

「呉鎮守府と柱島泊地の連絡役ですよ。電話で済ませられない報告であつたりとか」

「ほーん……それ以外は? 今の大淀みたいな頻度ちゃうけど、

大本営にも出入りしとるやろ?」

「大本営に出入りしているというよりは、大本営を使っているだけと言いますか……」

「使ってるだけえ?」

「情報部とやり取りしているんですよ」

「……あきつ丸と川内らしいというか、なんちゅうか」

「機会があれば、龍驤さんも話を聞けるかもしれませんね」

「なんの?」

「秘密です」

「ちよい大淀お! あんだけウチをいじったんやから隠すの無しやつて! なあー!」

さて、仕事仕事つと、なんて言いながら資料の整理に戻る大淀の背中を見つめて唇を尖らせ、ぼすん、とソファに埋もれる龍驤。

そうしてむず痒い時間を過ごして暫く。

「……司令官、戻ってけえへんな。もうちよい時間かかるんやろか」

そう呟いた龍驤に、大淀はきよとんとした顔で振り返った。

「提督から聞いてないんですか?」

「いいや、特に聞いてへんけど……大湊警備府のことで調べもんするから言うて、井之上元帥のところに挨拶がてら寄ったんやろ?」

「え……? 井之上元帥からも、聞いてないです?」

「井之上元帥に会うてもないがな。会議室の前まで来たら司令官はそのまま会議室入ってもうたし、ウチはここに直行や」

てつきり二人きりで話してるとばかり思っていた龍驤は、大淀の反応に違和感を覚える。

「あ、あー……そう、でしたかあ……」

「え、もう、なになに、言うてよ」

大淀は左手に資料をいっばいに抱え、右手で頬をかきながら気まずそうに言った。

「アメリカ海軍の上級将校と、井之上元帥、海原提督、それに深海棲艦研究者であるソフィアという女性と会談しておられるかと……」

「おおいッ!? めっちゃ重要事項やんけそれ!? せめて先にそれ伝えてえや! ももおおおおッ!」

大本営、作戦会議室改め、海原元帥の執務室に龍驤の悲痛なツツコミがこだました。

北へ④

海軍再編と同時に日本政府へ働きかけ、周辺諸国、中でも大国アメリカと交渉の機会を設けるのに一年近く掛かった。

しかし、世界の戦況を鑑みればたったの一年という方が誰しもがしっくりとくるだろう。

井之上は自らが行使できる権限の全てを使い自分と同じ立場まで海原を引き上げ、さらに今までの情報経路や命令系統を一新して構築し、政府ごと陸軍を巻き込み、海原とは違う戦場を整え続けた。

多くをこなそうとして失敗した過去。そこには保身があった。

部下を守らねばならない。その上で艦娘も守らねばならない。そのためには自分が生きねばならない。求められたものを差し出すのに、井之上の手札は足りなかった。

しかし彼は光を見た。まるで水平線から昇る暁が如き世代を超えし献身を見た。

そうして、たった一つの事を学んだ。

小賢しく細分化して理路整然とした理屈を以て守りに徹する事が悪いとは言わないが、己が立つ場所が変われば意味を成さないと。

いついかなる時であれ決して変わらぬ理屈が必要だったのだ。

かの男は言った。国のためであると。

かの男は言った。艦娘のためであると。

ならば私はこう言おう。全てのためであると。

『十年です。人類が窮地に立って、互いが手の届く距離に近づくまでに、十年掛かりました』

井之上の日本語訛りの言葉がジョシユアへ投げかけられる。

人間同士の会話であるのにどこか無機質で機械的な、温度の感じられないものだった。それはもしかすると井之上の眼窩に隠された軍人としての冷徹さかもしれないし、ジョシユアやベイリーが近年攻勢に出た日本海軍を警戒しているからかもしれない。もしくは、楠木という失われた日本海軍の闇の中心へ巻き込まれてしまったソフィアの恐怖であるかもしれない。

あるいは、それら一切を関知する立場であるのに無言を貫き、自らの姿勢を崩さぬ海原の異様さがそうさせているのかもしれない。

ジョシユアとベイリーは階級の違いはあれどアメリカ海軍でもトップクラスの戦績を持つ二人として日本へ渡った。

深海棲艦にいつ襲われるか分かったものではない環境でありながら太平洋を横断するという胆力と強運、戦力を持つ男達である。

さしものアメリカもさらに上の者を連れるのは渋ったが、この二人をここへ連れられただけでも成果への道。

ソフィアという非戦闘員を一人連れて海を渡るだけでも相当に危険であるというのにもかかわらず、それを遂行してみせた二人であるが故に、井之上は二人にこそ海原という存在を焼き付けねばならないと、会議室の誰よりも緻密に思考を回転させ続けた。

割ける時間はそう多くない。

彼らとともに来た艦娘達は大本営近くにある工廠区にて艦装修理と入渠を行っている。リミットはそれらが終了するまで。

この会談の結果によって日本海軍の立ち位置が決定される可能性はおおいにある。

ここで一切の間違いは許されない、と誰にも悟られないように喉を鳴らした。

間違いが許されない状況は今まで数多経験してきた井之上だったが、ここに来て、状況を左右するスケールの大きさに、柱島泊地の工作艦明石から送られてきた第二次大侵攻の映像記録を思い出して武者震いするのだった。

海原の一言によって別室で資料の整理にいそしんでいる彼女も、海原が作り出した戦況の一瞬一瞬を、このような心持で駆け抜けていたのだろうかと考えた。

『十年……そうですね。我々はそれだけの時間を費やしてきました』
ジョシユアの重たい声に、ベイリーは頷いて目を伏せる。

『深海棲艦と艦娘が出現し、日本は合わせて二度の大きな波を凌ぎました。アメリカも幾度となく襲い来る波を押し退けてこられた。もう、良いのではないですか』

井之上は相手を丸め込むように、がらついた声で言った。

深海棲艦が出現して、艦娘が人類を救い続けて十年。

この長い歳月は決して覆らない結果を多く生み出した。負の感情を撒き散らし、深海棲艦という幾重にも重なる謎のベールを血まみれになって剥がし続けた。

そうして得られた情報はどれほどのものだったろうか。

井之上もジョシユアもベイリーも、同じような感想しか浮かばないだろう。

たったの一握り。ただの薄皮数枚だと。

日本海軍は種類の豊富な艦娘に救われたが故に人間の持つ多くの闇を増大させてしまい、艦娘を傷つけるというあつてはならない事態に陥った。

中途半端な安全が一部の者から危機感を奪い、確実な危険と恐怖が一部の者から戦意を根こそぎ消し去った。ましてやアメリカの非戦闘員を巻き込んで。

多くの艦娘を建造して戦ったアメリカ海軍は艦娘の損耗が激しくも、深海棲艦の研究はかなり進んでおり、駆逐級や軽巡級、重巡級、戦艦級や空母級の弱点を知っているという。外交的有効打として情報を使うべく弱点と言いつつ切っているのか、はたまた本当に弱点で、包囲殲滅において使える情報であつたとしても、井之上にとって重要なのはそんなチャチなものではない。

ソフィアという日本海軍の闇に巻き込まれた彼女への贖罪でもあり、井之上の心中にある罪の報い。

研究なんてそっちのけでした。

今や日本は窮地であります、どうか助けてください。

下手をすればどう繕ってもそう言うしかなかった場面であるかもしれなかったと、井之上はちらりと横目に海原を見た。

それからジョシユアとベイリーへ視線を戻し、言葉を選ぶ。

もう舞台は整いつつある。我が身を賭して、人類を存続させるのだと井之上は奮起した。

『この戦況ですから、あなた方をアメリカ海軍の代表としてとらえ、質

問わせてもらいたい。日本海軍に所属する工作艦明石——艦娘に対する特殊技術を持つ艦娘に相当する存在が、アメリカにいますか？」直球。その問いにジョシユアは首を振った。

『いいえ、おりません。ですが代わりにアメリカには、多くの研究機関があります。深海棲艦のみならず艦娘の兵装についても研究が進められておりますから、実験的な兵装もあります。それこそが深海棲艦に対する有効打なのです』

『ほう。それは艦娘へ装備可能なものなのですか？』

『……んんっ』

咳払いしたベイリーに、井之上は『聞き出そうというつもりはありませんよ』と言ってから話を続ける。

『こちらが手の内を明かさねば話すものも話せないというお二人の立場も理解しているつもりです。私の目的は貴方達に我々日本海軍が必要であると認識していただくことであり、アメリカ海軍との協力体制を整えることにある』

井之上はゆっくりとした動作で立ち上がった。椅子がぎしりと音を立てる。

『皆さんに御覧に入りたい映像があります。どうぞこちらへ』

ジョシユア、ベイリー、ソフィアの順に立ち上がると、海原は最後にゆっくりと立ち上がった。

同じ元帥としてジョシユアが古くから知る井之上よりも若い軍人が最後に立ち上がるなんて、と表情が曇る。ベイリーに至ってはあからさまに不機嫌そうな顔をした。

井之上はこの瞬間が好きだ。

ゆっくりと、しかし確実に状況が自らへ傾いていると実感する瞬間が。

「海原、第二次大侵攻の際に軽空母鳳翔が記録したものがあつたらう。情報部で処理を施した映像を用意してある。お前も来い」

「鳳翔が記録したものが？……わかりました」

海原の目つきが鋭くなり、一気に空気が凍り付く。

第一種軍装の重苦しい雰囲気も相まって、素性を知る井之上を除く

三名からゴクリと音が聞こえた。それもかなりの大きさで。

日本語の短いやりとりはジョシユアとベイリーに重圧をかけ、拒否する意思を奪った。

映像の内容がどうあれ、連れていかれる場所がどこであれ、自分達に選択権は無いのだと錯覚させる。

アメリカ海軍の二人に万が一でも起これば日本という島国は孤立無援となると分かっているのに、ジョシユアは手の平に汗をかき、ベイリーは抗えない恐怖を覚えた。

軍靴の鈍い音が毛の短いカーペットへ吸われる。

井之上の先導のもと、会議室を出て廊下を進み、エレベーターホールへ。

井之上の傷が多い指がボタンを押せば、すぐに扉が開いた。

そしてエレベーターは五名を乗せて地下二階へ。

再び扉が開いた時、ジョシユアとベイリーは感嘆の声を上げた。

『これは……』

『おお……！』

そこは巨大なモニターを中心に用途不明の機械類が等間隔に並べられた、だだっ広い空間だった。

『井之上元帥、ここは技術施設も兼ねていたのですか？』

ジョシユアの問いに井之上は首を横に振る。

『我々海軍が技術施設と呼ぶものは別にあります。ここはその一部分にも満たない、ちよつとした……そうですね……忍者屋敷とでも言いましょうか』

ジョークを口にして笑ってみせれば、ベイリーは表情を一変させてアメリカ人らしい反応を見せる。

一方、ジョシユアは中央のモニター付近で作業している桃色の髪をしたつなぎ姿の女性を見ながら言う。

『あちらの女性は、艦娘……ですよ？』

『ええ、そうです。ソフィアさんは覚えておられますかな？』

奇抜な髪色をした一見して仮装しているような姿は、大体が艦娘であるとジョシユアも理解しており、それと同時にソフィアに投げかけ

られた問いに納得する。

彼女は海原の艦隊に救われ、その時に多くの艦娘を目にしたのだから。

『海原元帥のところに行った艦娘と同じ……だけど、違う娘、かしら……？ アカシ、と』

『そうです。彼女こそ日本海軍に所属する艦娘であり、兵装開発や修理に欠かせない特殊な艦娘——工作艦明石です。しかしソフィアさん、よく別の艦娘であると分かりましたね？』

これは井之上の純粹な感想だった。

今でこそ同一艦を見分けられる軍人はいるが、未だ見分けられない者だって多くいる。アメリカ海軍は日本海軍よりも多くの艦娘を建造、運用しているから見分けられるのだろうかと考えていたが、井之上の予想は外れた。

『だって彼女、妖精を連れていないわ』

『ソフィア！ ……んんっ、失礼、井之上元帥。その、彼女の精神に異常などがあるわけではなく——』

ジョシユアの狼狽した反応に井之上はまたも首を横に振ってみせた。

ベイリーも平静を保とうとしているが動揺に一瞬だけ目が泳ぐ。

『アメリカと日本の違いは、そこにあると言えましょう。私は決してソフィアさんが異常だとは思っておりません。彼女を否定すれば、これから御覧に入れるものが全て嘘になってしまいますからな』

『井之上元帥、あの、それはどういう意味です？』

『今に分かります』

井之上は先頭を歩きながらモニターへ近づき、明石へ声をかけた。

「待たせたな。映像の準備は出来ているか？」

「あ、お疲れ様ですー！ もうちよつとだけ待ってもらえますか？ すみません、なーんかこの子の調子が悪いみたいでえ……」

「分かった」

機械にこの子と言いなながらガチャガチャと音を立てて作業する明石はそう言つて再び作業を再開する。

井之上はこの間にもう少しだけ情報を渡してやるべきか、とジョシユアとベイリーへ身体ごと向け、モニターの淡い光を背に受けながら話す。

『これから御覧いただくのは、第二次大侵攻における深海棲艦との戦闘記録です』

『それは、アメリカにも知らせが届いた、あの——！』

ベイリーが、まだ何も映っていないモニターと井之上を交互に見て言う。

『はい、公式に発表した撃滅数はこの映像をもとにしています。記録していたのは、軽空母鳳翔という艦娘であり、この戦場の艦娘を取りまとめたのは軽巡洋艦大淀という艦娘です。そして、この作戦の最高指揮官が——この、海原なのです』

井之上が海原に目をやると、彼は俯いて咳払いをしていた。

しかしよく見れば、この男、金平糖を口に放り込んでいるじゃないか。

「……つくく、手持無沙汰か、海原」

「えっ？ いえいえいえ、全然」

素性を知れど、大胆不敵なものだと井之上は隠せず笑みを浮かべてしまう。

「この戦闘記録について海原の所感を話してもらいたいんじゃないが、可能か」

「所感ですか」

「全てを話せというわけじゃない。この戦闘における反省会でもないから、ただ見たままを言えばよろしい」

「あー……」

井之上はアメリカ海軍の二人に艦娘はこれだけの力を発揮できるのだと見せつけられたら御の字であり、別段、何を話されてもフォローすれば問題ないと考えていた。

海原に事情も説明せずにつれて来た理由は——海原の持つ状況把握能力と適応能力から生み出される言い知れぬ《説得力》であった。

こと艦娘に関してならば海原以外に人選のしようがないとも言え

るが、井之上は自身の勘や目も信用している。海原の愚直なまでに誠実な心根もまた、信用している。

だから存分に發揮してもらおうじゃないかと、ほくそ笑んでいるのだ。

彼の緊張から生まれる予想外の《勘違い》を。

しかし、海原鎮というどうしようもない提督^{社畜}は、常に暁の水平線に一番近い場所にいることを、誰も知らない。

* * *

ざざ、という雑音がモニターに内蔵されたスピーカーから流れた次の瞬間、耳を劈く砲撃音がいくつも炸裂した。

『うわ!?!』

『うっ……!?!』

『きやあっ!!』

ジョシユアとベイリーがビクリと肩をすくめ、ソフィアが耳を塞ぐ。

井之上は何度も何度も見返した映像が故に動じなかった。

海原は——誰よりも真剣な眼差しで、身じろぎの一つもせずモニターを見上げる。

『ほ、本当に戦場の映像ですかこれは!?! どうやって撮影を……兵装にカメラを組み込んだってこんなに鮮明には……』

ベイリーの声に、海原が反応した。

流暢な言葉に、井之上は映像から目を離し、海原を見た。

『……妖精の持つ技術ならば可能だ』

掠れた重たい声に、ジョシユアが問う。

『では、この、いくつもの声は』

『水上打撃部隊、第一艦隊の皆の声だ。途中で割り込んできているのは、第二艦隊の……軽巡洋艦、大井と球磨だな。そうか、戦場は、こんな……』

海原の意識はただ声を返すだけで、大部分を映像に持っていかれて

いるようだった。

井之上はここが正念場だと海原を見守る。元のデータは艦政本部にある。いざとなれば途中で映像を停止してでも彼が不利にならぬようにと構え、会話に耳を傾けた。

神に祈るより、この奇怪な男に祈る事になろうとは、なんて胸中で笑いながら。

それも自嘲ではない。こいつならばと、期待してしまっている。

『海原元帥、こんな数の深海棲艦を……それも人型までいるではありませんか！ これは本物の映像なのですか!? この指揮を!?』

ベイリーの叫びにも似た声に、海原は顔をモニターに向けたまま、目だけを動かして睨む。

『彼女らが命を賭した戦場を疑うつもりか』

『い、やつ……そのような、つもりは……!』

海上を縦横無尽に駆け抜け、敵を攪乱する艦娘。盾のように立ちただかる艦娘。

まさに戦場がそこに映し出されていた。

ジョシユアもベイリーも、いくつも言葉が浮かんで口を出て行くこうとするが、声にならず、溜息にもならない呻きが漏れるばかり。

「明石、止めろ」

「えっ? あ、はい!」

とある場面で映像が止まる。

海原が「少し巻き戻せ」と言えば、するする映像が逆再生されたあと、再び停止。

『ジョシユア、それにベイリーと言ったか』

二人は無意識に背筋を伸ばし、身体ごと海原に向く。

『は、はっ』

『はいっ』

海原は手袋に包まれた指をすつと伸ばしてモニターの一点を指差した。

上空から撮影されたガラス越しのような映像の端に、人型深海棲艦、軽巡棲鬼の姿があった。憎悪に満ちた目は映像越しであるという

のに今にもこちらを睨んできそうな程の不気味さがあり、既に撃沈されているのに身震いしてしまう。

ソフィアは映像を見たくないのか俯いていたが、

『あれは無尽蔵に深海棲艦を生み出してきたそうだ。駆逐艦、軽巡洋艦、重巡洋艦……それに潜水艦や補給艦までもな。合計して百と三隻。彼女らは全て撃滅した。これは一部に過ぎん。この前にも、後にも、夥しい数の深海棲艦と戦い、勝利した』
そろりと顔を上げる。

彼女の金髪がさらりと流れ、そこから窺い見た海原の目は、複雑な色をしていた。

表情は変わらないのに、代わりに目の色に全てが映し出されているように見えた。

不安、恐怖、憂い、悲しみ——全てを塗りつぶす、希望。

『……負ける要素があるように見えるか?』

ジョシユアとベイリーは気を付けの恰好でモニターを見上げ、海原の声に、首を横に振る。振らざるを得ない。

それからジョシユアは、一時停止された映像から目を離して井之上とソフィアに問うた。

『妖精、とは……本当に存在するのですね』

井之上は頷いて『ええ』と短く言う。

ソフィアは映像に映る別の艦載機を指差してみせた。

映像には艦載機の操縦席に小さな人が乗っているのが窺えた。

表情などは光の反射やブレなどで見えないが、確かに人影がある。

艦娘の扱う兵装は想像もつかない破壊力を秘めているが、艦載機などは手の平に収まるサイズだ。その操縦席に人影など、そういった存在がなければ説明がつかない。

ジョシユアとベイリーの目にそれが認識できるかは、分からないが。

『十年という長い歳月で、一度姿を消したと思われましたが……妖精は存在します。アメリカ海軍にも、そういった話があったと私は見ておりますが、いかがでしょうか』

井之上の言葉にジョシユアは軍帽を脱いで茶髪の癖毛をかきあげて、ベイリーを見て頷く。

『アメリカには多くの艦娘がおりますが、一部からそのような話が挙がっている事実はあります。しかし我が国の……』

言い淀み、咳払いし、ジョシユアは躊躇いつつ話した。

『国土の広大さが仇となり、報告全てが正しく把握できているとは言えません。このように映像に残せるようにと手段を講じたこともありませんが、深海棲艦との戦闘映像は多くありません。戦闘の激しさ故に持ち帰れなかつたり、消失するばかりで、ここまで鮮明なものとなれば……』

海原が明石に「再生を」と言えば、時が流れ激しい戦場が動き出した。

艦政本部が多少手を加えた映像はあつという間に終わってしまったが、ジョシユアとベイリーには十分な効果を発揮しただろうと井之上は息を吐く。

ソフィアが後押しするように海原を指して言う。

『彼が言っているのなら間違いはないはずでしょ？ 私はアメリカに戻ってからもずっと訴えてたし、アイオワだって言っていたでしょう！』

『……あ、ああ、これを見せられては、な』

ベイリーが両手を胸の前まで上げて、ソフィアを落ち着かせるような声で言うも、まだ信じていないのかとばかりに今度はジョシユアへ矛先が向けられた。

『ジョシユア少将！ あなたはどうなの！』

『……神の存在を信じていると口にする敬虔な信徒は多いが、神を見たという奴は大体が狂った奴らだ。だが私は今なら、神を見たという奴を信じるだろうね』

腕組みをして言ったジョシユアを見たソフィアはようやく納得したかのよう閉口する。

それに代わって海原が言葉を紡いだ。

『神は信じて、艦娘は信じていないのか？』

核心に掠る問い。ジョシユアはぐつと声に詰まった。

『つ……そのようなつもりはありませんでした。我々アメリカ海軍は艦娘を信頼し、最大効率での運用を心掛けてきました』

『そうか。であるならば、ソフィアの言うアイオワもまた最大限の力が発揮できるようにしてあるのだろうか』

海原からソフィアと呼ばれた事で先ほどまでの興奮が一気に冷却された様子の彼女は再び俯いた。白々しい咳払いつきで。

井之上はここまで来ると手を叩いて喜び、海原を褒めてやりたくなつた。

お前は どうして こうも 核心を 突ける の だろう な、 と。

もちろん、ぐつと表情を引き締めたまま沈黙を貫いているが。

『……』

口をつぐむジョシユアとベイリーに、海原の言葉はトドメとなつた。

どうしてトドメとなつたのかは、本人たちにしか分からない。

井之上と、ジョシユアとベイリーにしか理解出来ない言葉だ。

それを言つた海原は理解出来ていない。だが、間違いなく心臓を鷲掴みにした。

『艦娘の体調、兵装、艦装の調整、戦場に出る前のありとあらゆる準備は勝利を確実にするためのものではない。やっつけて当然のことだ——海に出れば、勝利を左右する一瞬の判断は全て彼女ら艦娘に委ねられるのだからな。その上で我々がすべきことは祈ることでもなければ神を論じることでもない』

映像が終わつたことで事後処理をしていた明石は、無意識に顔を上げてしまった。

『——彼女らを最後まで信じることだ』

ジョシユアもベイリーも、頭の中でいくつもの反論にもならない悪態が浮かぶ。

そんなもので戦場がどうにかなるものか。深海棲艦という人類の生み出した兵器が通用しない相手と何年戦争をしていると思つていいのだ。

資源ある限り最低限の性能さえ發揮できれば数で押し潰せば勝てる相手だ。

空母の群れから艦載機を放ち空を埋め尽くし、砲弾で海面ごと穿つ、それで我が国は勝利してきたんだ。

それらを、一つの映像と、一人の男が否定した。

まるで冗談みたいな存在を本気で扱って、証明してしまった。

『妖精^{あいつ}らは甘いものが好きだぞ』

ぼつりと海原の口から零れた言葉に、ジョシユアは、はん、と笑った。

『では——最高級のケーキでも用意してみましたしょうか』

ジョシユアは皮肉を言っているようだったが、その目は来たばかりの頃とは変わっていた。同じく、ベイリーの目も。

北へ⑤ 【鎮side／ソファイアside】

『ねーえー、まーもーるー……まだ眠いよお……』

『もう少し我慢しろ、頼むから……！』

『英語で言われてもお』

『あぁもうっ……！』

むつまるがポケットの中から間延びした声で文句を言う。お前も英語じゃねえかよ流暢に喋りやがって。

しかもこういう重要な時に限って爆睡かまして翻訳金平糖（妖精印）を出さずに窮地に立たせやがってよオツ……！

先ほどになってようやく俺の危機を察知し、もそもそと金平糖を差し出してくれたので隠れて食べることに成功したが、多分、井之上さんにはバレてたかもしれない。

オロカモノメツ……！（自責）

けれどすごく助かったので、俺はジョシユアさんがケーキがどうのと言うのをふんふんと適当な返事で流しながら、不自然に見えないようポケットに手をあてて、ぼんぼんと撫でておく。ありがとうむつまる。フォーエバーむつまる。頼むから起きろ。

『んんっ、相手が相手であるならば、味方も味方というわけだ。是非、最高級ケーキとやらを用意して喜ばせてやってくれ』

そうしたらきつと群がってくるぞ。

俺は井之上さんに仕事してますよとアピールすべく妖精についてさらに説明してやろうと、後ろで手を組み言葉を紡ぐ。

『……さて、妖精は私達と切っても切れない関係であるのは日本海軍の者ならば知っているが——』

隙を見せれば邪魔をされ、やり返そうとすれば十二倍くらいにして仕返しされる。

書類仕事で頭を痛める我々提督にとつての天敵であり、重要な鍵である妖精を信じていない様子の二人にむつまるを見せてあげてもいいのだが、やる気スイッチがぶっ壊れたみたいにならけたむつまるを見せては俺の監督責任を問われかねん。

俺はむつまるを撫でるのをやめ、モニターに繋がったいかつい機械を弄り続ける明石に近づきながら声をかける。

『——妖精と無意識に作用しあう関係でもある。だろう、明石?』

「えっ? あ、ごめんなさい、英語はちよつとお……!」

「んんっ。妖精と私達、妖精と艦娘、互いに作用しあっている、と言ったのだ」

「ああ! 言われてみれば、最近になって確かに……」

ごめんね明石、社畜も必死なのだ。

妖精について話を続けようとする俺だったが、井之上さんを見て「違いわこれ深海棲艦との戦闘記録の話だったわ」と思い出して、華麗な話題転換。社畜のなせる技である。別に間違えて英語で話しかけたからと狼狽したわけではない。

「すまない。話を戻そう。明石、お前は映像にいた深海棲艦を見てどう思う」

改めて日本語で問えば、明石は井之上さんをちらりと見た。

「良い。ワシが許可する。言ってみろ」

「でしたら……んー、そう、ですねえ……」

工具を持ったまま腰をくいと反らし、額に工具をこつこつとぶつけながら考え込む。見てよジョシユアさん、ベイリーさん。この可愛さをよ。

こんなに可愛くて強い艦娘が深海棲艦に負けると思ってたんのか?

……茶化さずに所感を述べれば、まあ、とんでもない相手だと再認識した。

艦娘はあんな異形の怪物と対峙していたのかと声も出せなかった。

艦隊これくしょんの頃だって常に自分達を捻り潰さんばかりの戦力で襲い掛かって来る相手だったのだ、一般社畜の俺が恐怖しない理由が無い。

未だに戦艦棲姫とか見たら机をぶん殴ってしまう自信がある。

幽鬼が如き絶望の光を宿した瞳を揺らし、蠟色の装甲から伸びる灰のような腕は今にも掴み掛り深海へ引きずり込もうとしているような、あんな姿を見せられて恐怖するなという方が無茶な話だ。

しかしそれでも、俺は海で深海棲艦と対峙することはない。

この世界に生きる今でさえモニター越しで、彼女達の戦いを見てい
るだけなのだから。

故に俺は信じるしかないのだ。どこまでも気高い彼女らの強さを。
「端的に言えば、怖い、ですかね。それに……見てるだけで、悲しくて、
悔しい気持ちになりました。映像にあった特殊个体だからってわけ
でもなくて、深海棲艦を見ると、そういう気持ちになっちゃうんです
よ。私達って。勝てる勝てないとか、沈むかもなんて考えたりもしま
すけど、根っこにあるのは……やつぱり、そういう気持ちですかね」
それつきり俯いてしまった明石に「そうか」とだけ言って、話して
くれた礼を言えばいいのに、それだけでは自分の謝意を伝えきれない
気がして肩をぽんぽんと撫でた。
「あ、えと……」

彼女の視線が俺をとらえ、しばらくの沈黙が流れる。

明石は視線をそろりと井之上さんに向けて、目が合った途端に、
あはは、と困ったような笑い声を漏らした。

違うんですよ井之上さん、これは謝意であってセクハラではないん
です。

というか日本語で話してもらいましたけど伝わるんですかこれ、と
ジョシユアさんを見れば、

『悲しさに、悔しさ……っは、本当にオカルトだ』

と言って——ちよつと待てや日本語分かるんじゃねえか！

むつまるを必死にこそそと起こした俺の努力返せテメエツ！

『まだ半信半疑のようだが、お前達はこれらを一笑に付す結果を出し
たのか？』

棘のある俺の声にジョシユアさん達が身構えるように動いた。

すみません八つ当たりでしたね。調子乗りました。許して。

『映像を見せた後に結果を問うなんて、海原元帥は厳しいお方ですね。
このような貴重な記録まで見せられて、何の情報も出さずに背を向け
て帰国してはアメリカ海軍の沽券にかかわります。話しましょう、私
が知る限りを。これが今の私の誠意であると思っただければ。』

……我々アメリカ海軍は、深海棲艦の撃滅に際して残骸そのものや敵機のサンプルを採取し研究を続け、ある発見を——』

『クラーク少将……！』

『黙っているベイリー大佐。ここで隠し立てしたところで進展があるか？ それとも君は海原元帥のように艦娘を指揮して同じ結果を残せるとも言うつもりか？ 映像に映っていた艦娘の数を見ただろう。半分、いやそれ以下だった！ 最終的に倒した数は未確認を含めれば差は十倍近くにまでのぼるんだぞ！ これがもう答えじゃないか！ そのうえ、一人しか犠牲を出さずに勝利した。妖精という未知の部分差し引いても、これ以上に君を安心させる要素はないように思うがね』

『で、すが……』

『かつて拳を交えた相手だからとくだらんプライドを持っていて任務の邪魔をするつもりなら、今すぐ表に出てドーナツでも買って来い。ナッツ入りのな』

『……』

すげえ、洋画みたいだあ……。でもどうしてナッツなんだ。好きなのか？

ぽかんとした顔でやり取りを見ていた俺にジョシユアさんは言った。

『失礼。どこまで話しましたか？』

深海棲艦のサンプルがどうのってところまでだよ。と素で言いかけて、威厳スイッチオン。あぶねえ。

『サンプル採取をした、と』

『ああ、そう、そうでしたね。サンプルを研究した我々の発見とは、物理的に撃破するための攻撃手段ではありません。そちらの楠木少将が発見した深海棲艦の通信方法である電波を搜索する効率的手段を見つけたのです。奴らは攻撃地点を事前に決め、そこへ出現する。先回りすればどのような相手であれ先手を打てるのですよ。奴らにとっての弱点は、常に我々に後れを取る——ということころでしょう』

『楠木……か』

日本海軍の一部の軍人達が艦娘を滅茶苦茶にする原因となった男。呟いた俺の声に、ジョシユアさん達は胸に手を当てて『お悔やみを』と言った。

『それで、発信源の特定は出来たのですか？』

今度は井之上さんが問う。するとジョシユアさんは頷いたが、曖昧な頷き方だった。

『ええ、いくつも特定できましたよ。我々がぶつかっている問題は、その電波の発信源が常に動いていることと……大本に辿り着けた試しがないことです。傍受出来ても辿った先からぶつりと途切れてしまう。その電波というのも人類が発展させた科学に反するようなもので、目標地点に到達した途端に性質を大きく変える。特殊な電磁場が形成されるのです……それも、そのエリアを攻撃する敵艦隊が撃滅されないかぎり、残留します』

『撃滅されないかぎり残るか。しかし辿れないとは妙な話だな』
それらが示すのは艦娘からも報告が上がっている結界、という現象だろう。

日本海軍は今まで結界を艦娘の妄言としていたが、アメリカ海軍は戦場から上がる多くの報告に共通点を見出だし、大真面目に調査したのだろう。

電波とやらが敵棲地から攻撃地点を指していることは理解出来るが、大本がどこにも存在しないなんていうのはあり得ないのでは？と口を挟んでしまう俺。

思えば、一般社畜のミリタリー知識すつからかんの俺ですら現代の科学技術を以てしても十年という長い期間、人類側が耐え続けたとは考えづらい。

日本のみならず諸外国とてあらゆる手段を講じたはずだ。それらが役に立ったか否かを差し置いても人類が未だ滅亡していないというのはあまりに不自然だった。

深海棲艦側が意図的にじわじわと追い詰めているのならば話は別だが。

語弊の無いように言うが決して俺は破滅願望を持つような社畜で

は無い。

虚無主義者でもないし楽観主義者でもない。

ちよつとだけ、いや結構な楽観主義者かもしれない。艦娘がいればオツケー！　なので。

……話が逸れたが、要するに人類が危機に瀕しているにしてはコントロールされているように思える、という話である。

謎に包まれた存在として扱われていた深海棲艦は艦隊これくしょんというコンテンツの運営が長くなるにつれて正体を徐々に明らかにした。明言こそしていないが、そうした表現が増えたと言おうか。

艦隊これくしょんと言えれば敵を生み出しているのは運営だ。

コンテンツを維持するために史実を基にキャラクターを考え、実装され続けるからこそ戦いが続く。

ではこの世界はどうだ？

歴史に名を残す軍艦が少女として蘇った。そうして、歴史をなぞるように現れる敵と戦うわけじゃない。無限とも思える戦力が深海から湧き出す。

俺がここに来る前の世界と艦娘と深海棲艦の存在を抜けば殆ど変わらないこの世界が同じ歴史を辿って来たのなら、人類に残されている選択はたった一つしかないはずだ。

滅亡である。それも数年で。

そのゴールに到達するまでの時間が抵抗すればするほどに長引くだけで、最終的には食い潰される。

史実に沿うなら当然の帰結。

『我々は決して他国に技術的に劣っているとは考えておりません。機能的にも組織的にも優れていると自負しています。国土を駆使した工業能力を以てして開発した数多くの手法が尽くそう示すのです。大本に辿り着けないとね』

……違うだろう。彼女らは軍艦の記憶を持った存在だが、決して軍艦そのものではない。

記憶があれど、知識があれど、背負う悲しみがあれど、生まれ変わった存在だ。

また軍艦同士をぶつけ合って戦うのか？ 違う。何もかもが違う。前提条件が、全くもって違うじゃないか。

彼女らは、艦娘なのだ。

この戦争は過去をなぞる戦いでもない。

今度の相手は——深海棲艦。

正義だの悪だのは存在せず、ただ彼女らは人類を守らねばと戦っている。

理由は？ 軍艦の記憶を持っていて、戦火の悲惨さを知っているからか？

それだけであそこまで戦えるはずがない。あんな異形の怪物と。

艦娘が心に持つあらゆる感情の中に、普遍的で、誰にでもあつて然るべき思いがあるだけなのだ。

機械的に深海棲艦を見つけ出し、機械的に艦娘を出撃させて戦い続け、十年。

そこに意味があるとは到底思えなくて、俺は眉根にしわを寄せてしまふ。

『辿り着くことに意味があるのか？』

俺の声に力がこもる。

『はい……？』

『発信源が最重要であると感じているようだが、私はそれに意味があるとは思えんのだ。深海棲艦は、何かを示しているのではないのか？』

『そのようなもの、考えた事も……』

『発信源など、深海くらいしか思いつかんがな』

え、あれ？ 違うの？ じゃあ分かんねえよ！ 社畜の真面目思考を返せ！

そう胸中で茶化してしまう一方で、ジョシユアさんの顔色が変化したのが分かった。

『海原元帥、それは深海棲艦と呼称しているからなどとは、言いませんよね』

そうですけど？ なんだよ、そのまんまじゃねえのかよ。

『ただの比喩とでも考えていたのか？』

まあ、漫画やアニメのように単純な問題ではないのは百も承知している。

艦隊これくしょんに限りなく近い別物として捉えるべきだ。

深海棲艦をより深く知ろうとすれば俺の持つ知識とは全く異なるものであるなど考えるまでもない。

『……日本海軍も独自に深海棲艦の研究をしていることは存じていますが、我々とは違う方面で研究を続けていたということですか』

ジョシユアさんの視線が井之上さんへ向けられる。

井之上さんは俺に代わって言葉を紡ぎ始めた。

『我々が深海棲艦と呼称するのも理由があります。これは後付け、いや、裏付けにもなりませんが……まるで深海から現れた化け物のようだ、と言った人類の感覚が間違っていないなかつたことにも繋がります。奴らの堅牢堅固な外殻より内側の組織は、非常に柔らかく、深海の環境に適しているであろう事が判明しております。アメリカ側も似たような研究結果や見解が出ているのではないかと愚考しますが、如何ですか？』

あつあつ、井之上さんやめて、それ以上難しい単語を並べられては俺の両耳に搭載された《右から左へ機能》が起動しちゃう。

『深海の感光限界はおよそ千メートル。光をエネルギーとして利用できる深度はせいぜいが二百メートル程度。我々人類は深海の研究をしておりますが、制海権の多くを失った今では足踏みせざるを得ない状況で、大部分は未解明のままです。数字にすれば絶望的なまでに未開の地だ。潜水可能な艦娘でさえ深度百メートルも潜れば行動制限が掛かってしまう場所を……どうして候補から外せましようか。我々の戦力をはるかに凌ぐ数の深海棲艦が潜むには十分な場所であるかと』

だめだ起動しちゃうよこんなの。

あー……大淀、書類整理してくれてるかなあ。

そういえば龍驤も待たせたままだし、さっさと大湊警備府の仕事終わらせて柱島泊地に帰ってえなー！ 小難しいことはゼーンぶん井之上さん達に任せちゃってさー！ あーあー！ 間宮のご飯食べながら

ら夕立と時雨の言い合いでも眺めてたいなー!

話をほとんど聞いていない俺をよそに、ジョシユアさんは井之上さんに一歩近づいて声量を大きくした。

『で、であるならば! 敵棲地は文字通り深海のどこかにあるという――!』

深海のどこかってなんだ。深海棲艦なんだから深海そのものに棲んでるんだろ、どれだけいると思ってるんだ。無限湧きだぞ。

そう考えただけのつもりが、あんまりに不真面目な俺の口が滑る。

『深海棲艦だぞ? 深海そのものを目標と捉えても良いくらいだ。特殊個体が群れを成して泊地を形成しようが、そんなものは一部に過ぎん』

『海原、元帥……それは……っ!?』

や、やべえ……やっちゃまった……!

後悔先に立たずとは正にこのこと。

自動翻訳金平糖を食べているというのに、仕草だけでジョシユアさんとベイリーさんが「おーまい……じーざすくらいすと……!」とか「まい、ぶっつど……」とか言っているのが分かる。

実際には『嘘だろ、そんな……』と聞こえているのだが。

俺の不真面目さにととう痺れを切らしたのであろう井之上さんが、にこやかな表情で俺に歩み寄って来て、ぽん、と肩を叩く。

怒られる、では済まないかもしれないと身構える俺。

『……深海そのものが目標、というのは語弊があるだろうか?』

えっ、いや、でもこれゲームの話ですから! 井之上さん分かってるだろ!?

俺の心の声が届いたかのように、井之上さんは「濁せ」と耳打ちしてきた。怖い。

言い訳してもいいんですね!? 責任取ってくださいよマジで!?(他カ本願)

『失礼した。深海そのものが目標であるのは例え話だ。あー、その明石が言っていただろう。特殊な個体のみならず、深海棲艦を見ると悲しさと悔しさを感じると。無尽蔵に湧き出る敵はどうして一

斉に襲い掛かって来ないのだろうか？ 向こう側が圧倒的戦力を有しているのならば、敢えてそうせねばならん理屈や理由があるのかもしれない。途方もない悲しみの連鎖を、まるで途切れさせぬようにしているみたいではないか』

ゲームでは、敵がいなくなればサービス終了してしまうからとにべもなく言える。

そうした歴史を再現して、敵と戦い、可愛い子を愛でるだけのゲームだよ、と。

違うだろう。今を生きる彼女達は必死になって歴史を塗り替えようとしているじゃないか。

過去ではなく、未来を。

……ああ、なるほど。

俺はここにきてようやく納得するに至った。

深海棲艦もまた、変えようとしているのかもしれない。

自分達が成せなかった想いが反転し、人類へ牙を剥ける結果になっただけなのかもしれない。

『途切れてはならぬと、相手も必死になっている。この連鎖の果てを求めているように』

深海棲艦は、きつと過去の影なのだ。

あるいは悪夢で、いつしか忘れ去られてしまいかねない記憶だ。

記憶を引き継ぐ存在で、その影は忘れられぬようにと足掻く傷そのもの。

俺が口にしようとしている言葉は、言い訳に使うにはあまりに不謹慎が過ぎる。

かつての戦争で水底へ消えた軍艦が蘇って戦い、歴史をなぞっているのならば、自分達がせねばならないことは何か、それを表現するための言葉を探す。

もっと良い言葉を、と必死に考える俺の背に、井之上さんの硬い掌が当てられた。

ああああああ！ 殴られる!? サーセン！ サーセンっした！

言いますから！ 言います！

『……清算する時が来たのだろうか。我々の手で。争うのではなく、救うために』

言ってしまった。

戦争そのものへの理解が浅い俺が決して口にしてはならない言葉を……。

井之上さんは口元だけニコニコとさせて、俺に言う。

「付き合わせてすまなかつたな海原。任務へ戻って結構」

「えっあつ、井之上さん、あの」

「くくく、お前と言う奴は、どうしてこうも……見上げた奴よ」

ぱしん、と背を押されて、エレベーターのある方へ数歩進んでしまふ。

振り返って井之上さんを見れば、頷かれ、ああもうさっさと出て行けど、はい。

『私は私の仕事をせねばならないので、ここで失礼する』

せめて礼儀がない奴と思われぬように、と俺は軍帽を被りなおして背筋を伸ばし、ジョシユアさんとベイリーさんを見つめて、最後にソフィアさんに敬礼した。

深海棲艦研究者なんですよね!! ならもうここはお任せしまっすッ!

もう、会う事もないかもしれないが……! と泣きそうになりながら、涙が零れないようにしかめっ面である。なんて情けない。

ジョシユアさん達からの答礼? 無かったよ。

俺は逃げるようにエレベーターへ向かったが、後ろからまた井之上さんの野太い声が届いた。俺は振り向き、重々しく頷く。

「警備府の件、頼むぞ」

「っは」

この仕事、もう失敗は許されねエツ……!

人類の存続よりも俺の仕事の存続のが先だアツ! 許せよアメリカ海軍のお二人!

エレベーターに乗り込んで扉が閉まるまで、俺は手を後ろに組んで

俯きっぱなしだった。

帰って来たら井之上さんに怒られるんだろうなあ……。

* * *

覚悟を決めた顔をした海原の姿がエレベーターの扉の向こうへ消えた後、ジョシユアは情報を欲して声を荒げた。その音量にソフィアの肩が跳ねる。

『日本海軍の研究はどこまで進んでいるのです!? 艦娘の研究の他、深海棲艦の研究も続けられておられるのならば、我々はこの戦争に終止符を打つことができるのですね!』

井之上元帥は絶望に染まる戦況を知ってなお笑っていた。

海原鎮という大いなる希望を見せておいて、ここから第二段階だと絶望を叩きつける。

『それはどうでしょうな。深海棲艦と十年も戦争を続けて来たのですから、互いに理解しているように思いますが。どれだけの数が存在するか定かではありません。特殊個体は多くの深海棲艦を生み出し続けますが、そちらの言い分であれば物量で押し潰し続けられる相手なのでしょうか? ならば問題は無いかと』

的確に、確実に言葉で絡めとる。

井之上の予想通りの反応を引き出すために。

ベイリーは軍帽を脱いで脇に抱え、不格好であろうがお構いなしに額に浮かぶ汗を袖で拭って言った。

『十年も戦い続けられたアメリカ海軍であれ、果てが見えませんが、ええ、もう、弱音でもなく、これは事実と認めましょう』

続いてジョシユアが言葉を繋ぐ。

『映像を見て……彼を見て確信しました。あの指揮官と艦娘であるから可能である戦術であると深く理解しました。であれば我々にもあのレベルでなくともまだ戦える可能性があるということでもありません。情報共有も前向きに……いや、出来る限り早急に、手を回しましょう』

『クラーク少将の一存では難しいことも多くあるでしょうから、私に出来ることがあれば何でも仰ってください。この映像データを持ち帰って頂いても構いませんし、行動調書の一部もお渡ししましょう。それで……アメリカ海軍としては、深海棲艦の規模をどの程度と見積もっておられたのですか?』

さあ吐けと言葉にせず井之上は凄んでみせた。

完全に委縮してしまい、ジョシユアがぼろりと口にする。

『現在の戦力に対して……十倍以上は、かたいとの予測が出ています。敵棲地がいくつも示された結果にアメリカ政府は恐れをなし、艦種を多く保有する日本の情報を欲しているのです。日本政府や井之上元帥が二つ返事で情報の共有を申し出たのに食いついたのだから、今まならざり得ない話であると井之上元帥も考えてらっしゃるでしょう』

『ええ。今まででならば、ですが。アメリカ海軍は圧倒的戦力を以て深海棲艦を撃滅し続ける先導者です。そうせねば世界に示しがつかないとお考えだ。しかし我が国は既になりふり構わず戦う事を決意し、実行しております。一騎当千を体現し、何倍、何十倍もの敵勢力を撃滅している指揮官のもとでね。情報の共有一つで人類が存続できるのであれば外部からどう見られようとも、安いものです』

『……今後の経済や国家のパワーバランスが大きく変化してしましますよ』

『そうでしょうか? では、アメリカが独自に発見した情報として扱って頂ければ宜しい』

『何を仰るのです井之上元帥! お戯れが過ぎます! 折衷案を探しましょう。なあ、ベイリー大佐、ミズ・ソフィア』

二人は何度も首を縦に振るが、井之上は横に振った。

『では分かりやすく言います、あの最高指揮官の言葉を借りて。——我々に、清算する時が来たのです。国家間が小競り合いする余裕など何年も前に失われました。如何なるオカルトであれ、未知の存在であれ、薄々気づいていたはずです。これは歴史を繰り返そうとする大きな力のうねりであると。憎悪や痛哭の過去が牙を剥いて蘇った

のだと』

ソフィアは囚われていた過去を思い出しているのか、腕を抱いて震える吐息を漏らす。

争いという形になっているのを突きつけられては、思い出したくなくとも深海^{彼女}棲艦^らの瞳を思い出してしまふのだ。

どこまでも暗く、光を探し求めているようで、怒りに燃えた目を。

『それを世界に向けてどう説明するおつもりですか!! かつての戦火は消えておらず燻っていただけで、また大きな火の手があがったと!?

それは我々の過ちであるとしても演説しますか!?! 海原元帥のお力も、日本の艦娘の力も今ここで見せていただきましたし認めております! しかしこのような事で世界は納得しません!』

ジョシユアの痛切な叫びを吹き飛ばしたのは、井之上の怒声だった。

『かつての戦争に納得があったとお思いか——ツ!!』

『っ…………』

『うぐっ…………』

怒号の飛び交う空間でソフィアはどうとう両手を胸の前に組んで、ぎゅつと目を閉じる。祈るように。そこでふと浮かんだのは、ある友人の顔だった。

心配し続け、彼女を想い続けてくれた戦艦の顔だ。

すると淀みが消え、彼女の心の内にあるのは、単純で当然な無垢なる想いとなった。

争わないで。

その心に呼応したかのように、ソフィアの着ていたグレーのスーツのポケットが淡く光った。

ジョシユアもベイリーも井之上も気づいておらず、明石だけが誰にともなく言う。

「え…………? ポケットが、光って…………」

『これ…………あの人くれた、キャンディー…………?』

ソフィアがポケットから取り出すとそれはさらに光を帯びた。ジョシユア達が驚いて視線を向け、二人がそれを確認しようと歩み寄る前に、ソフィアは無意識のまま、それを口に含んでしまう。

そして世界は、反転する。

『ミズ・ソフィア、なんだそれは!? 待て! それを口に入れるなど——!』

ベイリーの声がかき消される。

刹那のこと——まばゆい光がソフィアを包み込み——彼女の頭の中に見た事も無い光景がいくつも流れ込んできた。

地面に立っているのに、彼女の意識は暁の水平線の果てへ飛んでいく。

まばゆい光は全員から視界を奪い、まるでその空間を真っ白に染め上げるようだった。

『あ、あぁっ……これ、は……』

『ミズ・ソフィア! くそ、見えない……! 井之上元帥、彼は彼女に何を渡したのです!』

「……つくくく、はっはっはっはっは! 海原よ、そうか、そう来たか! 全くお前という奴はどこまでも無茶をしてくれる! はっはっはっはっは!」

高らかに笑う井之上元帥の姿に、眩しさに目を細めながらベイリーが懐にしまっていた拳銃を取り出して構えた。ジョシユアが叫ぶ。

『動くなアツ! 一体何を——!』

『ベイリー大佐! 銃を下ろせッ!』

『クラーク少将! こんなもの異常です! ミズ・ソフィアという手札を失えば我々アメリカ合衆国の損失に繋がります! 少なくとも再び失ってもいい人ではありません!』

『クソツタレめ、そんな事を言っている場合か! お前の早とちりで何度俺が尻拭いさせられたと思っっているんだ! いいから銃を下ろせ! やめろッ!』

『しかし！』

『ここは日本海軍の中樞だぞ！ お前が引き金を引けばどうなるかわからない分かるだろう！』

『つぐ、ううう……！』

怒鳴りあう彼らにおいて、彼女の頭に流れ込んでくる光景。

それはかつての戦争なのだとソフィアはすぐに理解した。

だがそれ以上に理解しようとする、冷静さはすぐに失せ、ただ、多くの感情が頭を駆け巡る。

喜び、悲しみ、痛み、苦しみ、絶望。

身体を突き抜ける銃弾。心臓を穿つナイフ。

四肢を吹き飛ばす爆発、全身を焼き尽くす業火。

泣き叫ぶ子ども、絶望に暗い空を仰ぎ見る母親。

骸を抱いて俯く軍人。銃口を向けあう人。

ソフィアの意識は多くの人々に入り込んで抜け出していく。

まるで自分が光の粒になったかのように世界を巡る。

そうして重油にまみれた真つ黒な海へ飛び込み——底を見た。

『あ……あ……あ……』

ソフィアの意識は、今にも崩れ落ちそうな真つ白な手が、沈んだ大きな船の残骸から突き出しているのを見ていた。

しかしジョシユア達には彼女が虚空へ手を伸ばしているようには見えなかった。

光る彼女の左手が、そつと不可視のものに触れ——掴み——そして

『そう、だったのね……』

——掴んだ手を離さないように、大事そうに引き寄せて、両手で包み込む。

まばゆい光はソフィアの両手に収束していき、ふつと、消えた。

『ただ……世界こゝろに居たかっただけなのね……』

ソフィアが両手をひらくと、そこには小さな妖精が眠っていた。

ジョシユアは啞然としたまま立ち尽くし、ベイリーは構えていた拳銃を力無く下ろした。

井之上は素晴らしいものを見せてもらったというような満足気な表情で言った。

『これもまた、共有事項の一つとしておきましょう』

ジョシユア達は言葉の意味を呑み込もうとしながら、彼女の手のひらに眠る妖精を見て頭を抱えた。

『ミズ・ソフィア、それ、その小人は、なんだ……なんだっていうんだ……！』

ベイリーの震える声に、ソフィアは自分の意思とは無関係に流れる涙をそのままに言った。

『救いを求める魂、過去の記憶そのもの……妖精よ』

井之上は軍帽のつばに指をかけ、姿勢を正してソフィアに身体を向ける。

その瞬間、ソフィアの心臓は強く脈打った。

まるで焼けた鋼鉄が血液となって全身に送り出されたように、熱を帯びる。

揺れる瞳は、妖精を見つめていた。

『どうやら、艦娘と共に戦う提督となりうる人物がここにもいたようだ』

作戦会議室改め、第二執務室にやってきた司令官は大淀とウチに向かつて遅くなつてすまんと言ったあと、資料に囲まれた仰々しい内装に驚くことも、自らの執務室であるのに感慨深そうな表情を見せるでもなく執務机に歩み寄つて、どつかりと腰をおろした。

司令官が入室する寸前、扉の向こう側に頭を下げている女性士官が見えたので、恐らくは執務室であることを聞いていたから驚いてなかったのかもしれないが、ウチには彼が浮かない顔をしているようにも見えて声を掛けずにはいられなかった。

「どないしてんや司令官、会談で疲れてもうたんか？」

会談の予定があるなら先に言つておけ、と言葉に含みを持たせわざとらしく言つたつもりだった。

大淀はウチの心情を知っているため苦笑して「まあまあ」と言いながら冷たいお茶を淹れて、甲斐甲斐しく振舞う。

「……急遽呼ばれたんだ。予定には無かった」

おや？ と思つたのはウチだけじゃなく大淀も同じ様子で、二人して顔を見合わせる。

「アメリカ海軍の上級将校が来ていたというのに急なのもおかしい話ですね。井之上元帥だけで対応する予定だったのを変更したのでしょうか？」

大方、そうだろう。同意を示して頷くウチに、司令官はちらりと視線を向けた。

しばらく無言でウチを見つめてくるものだから「なんやの、見んといてよ」と手を振ってしまう。

するりとウチから視線を逸らした次に、大淀へ顔を向けて、またしばしの無言。

「提督、どうかしましたか？」

「ああ、いや……」

言い淀む司令官。そんな顔をされては聞かずにいられない。いられるはずもない。

ウチはそういうった性格で、気になったらすぐに口をつけて言葉が出る。問うてしまう。

他のウチがどういった性格をしているかは知らないし興味もないが、往々にしてこういうった性格をしているのだろうと心のどこかで自然と考えた。

「なんやねんな、気になるやん。気にせんといて、は無しやで」

「なあ？」と大淀を煽れば、彼女も「そうですよ。私達が力になれることなら」と言ってくれた。

こういう察しの良さやら気立ての良さに司令官は惚れ込んだんやろか？

「——私は提督どころか、軍人につくづく向いていないと考えさせられたところだ」

「は？」

そう反応したのはウチで、大淀は力になれることなら、と言って目を細めて微笑んだ状態のまま固まっていた。

「お前達の戦闘記録を見たんだ」

司令官は夜半に降る小雨みたいに消え入りそうな声で、軍帽を脱いで額をおさえながら机に両肘をつけて語った。

「これでは、昔と変わらんではないか。モニターの向こうで必死になつて世界を守るお前達を見ていることしか出来ないなんて。ただでさえ仕事も満足にこなせない私がどうして海軍にいられると安心していたのだから、分からなくなった。周りは出来ることをやっている。常に最善を選びぬいて自らの役目を全うしていたのを、この目で見てきた。私は……私は本当にお前達の傍にいる資格があるのだろうか」

会談で戦闘記録を見た——恐らくは井之上元帥がアメリカ海軍との交渉に記録を用いたのだろう。

楠木少将が亡き今、アメリカを含む諸外国との交渉を一手に引き受けて精力的に活動しているのは井之上元帥で、柱島泊地に届く新聞や雑誌から得られる情報でも様々な活動がスムーズに進み始めていることを知っている。

もちろん新聞や雑誌に載っているような事柄には手が加えられている。真偽を確かめねば疑わしい情報だつてある。それでも井之上元帥のことや、外交が上手くいってないにもかかわらず良好だ、なんざ得もない嘘を吐くとは思えない。

アメリカ海軍との交渉が失敗して、司令官は戻ってきた？ いいや、それならもつと別の言い方をするはずや。彼は今、自分を「軍人に向いていない」と言った。そうして「昔と変わらない。見ていることしか出来ない」とも。

それらが意味するのは――

「……言い訳ばかりで、逃げてばつかりだ」

――戦場の空気に当てられた、人として正常な反応であること。

「司令官、こつち」

ウチが呼べば、大淀が司令官よりも早足でウチの座る応接用ソファまでやってきて、一人分の空間をあけて座った。そして、同じように言う。

「提督、こちらへ」

二人して座れとソファを叩いて示すと、司令官は困ったような顔をした。

「いや、私は――」

「ええからええから！ はよー！」

司令官には悪いと思いつつ、ウチはどこか期待していた。

彼はどこまでも強いようだけど、ちゃんと人としての弱みがあるのだ、と。

椅子から立ち上がってソファまでやってきた司令官は、今度は静かに腰をおろした。

「ほんで？ なんや、言うてごらんよ。大淀先生とりゅーちゃんが聞いたろやないの」

「提督の全てを知っている、とまでは言いませんが、少なくとも他の人達よりは知っているつもりですから。いいんですよ、私達になら」

口々に言うと、司令官は両手で顔を覆って膝に肘をつき、ふう、と長い長い溜息を吐いた。

「あー、いや、その、だな……すまない。なんてザマだ。やはり忘れて――」
「あかなくてここまで引つ張ったんやから！　言うまで仕事させへんで？」

　　ばしばしと背を叩いてみせれば、その口がゆつくりと開かれた。

「私のいた世界と、この世界は違うだろう。艦娘がいて、深海棲艦がいて、苦しんでいる人がいて、どうにかしようとして皆がもがいている。戦争をしているんだ」

「うおお、重いやん」

「龍驤さん」

「あつはは、ごめんごめん、茶化し過ぎやな」

　　少しでも彼の背負うものを分けて欲しい。ウチと同じか、きつとウチよりも切に思っている大淀は真剣な表情で司令官を覗き込んだ。

「提督、少しでもいいですから、ね？」

　　話してください、と大淀が言えば、途切れた言葉が再び紡がれる。

「……私は深海棲艦を、轟沈した艦娘であると考えている」

「おう、長門にも聞いたし司令官も言ってたな。流石に人から言われたらむっちゃビビったけどなあ」

「そう、ですね……」

　　突如として世界に現れ、牙を剥いた深海棲艦。

　　同時期に出現し、深海棲艦から人類を守った艦娘。

　　ウチらの関係はまだ謎に包まれたままで、その多くが未解明だ。

　　艦娘としての身体の頑強さ、常軌を逸した破壊力を持つ私達にしか扱えない兵器。

　　正反対でいて、特徴を並べてみれば殆ど同じ存在である深海棲艦。

　　人型か否かを置いておいても、人類の持つ兵器が通用しない頑強さを持ち、常軌を逸した破壊力を秘めた兵器で世界を、人を破壊する深海棲艦。

　　ウチらと深海棲艦は、矛先が違うだけ。

　　戦闘記録を見た時、司令官も似たようなことを考えたんやろか。

「これは戦争なのだから、私はお前達を守り――敵を、沈めねばなら

ん」

指の隙間から、司令官の瞳が見えた。

その目に宿る感情は、ウチの知らん感情やった。

「……怖気づいたんか？」

率直に問えば、彼は否定した。

「いいや、お前達が居れば負けなйдらう。ああ、私は確信している。決して負けんと」

ならどうして、と大淀が口になると、司令官は顔を上げて記録に埋もれる壁を見て言った。

「沈めるのはお前達なんだ。私はそれを指示するだけで、直接手を下すのは全部……お前達なんだ」

ウチの心は反射的に「違う」と否定した。司令官の言葉通り、怖気づいたわけでもなければ、軍人に向いていないと嘆く理由は根本的に別の場所にある。

大淀が首を傾げてウチを見たけど、ウチはそれをすぐに理解してしまった。

彼はウチら艦娘を心から想ってくれている。だからこそ、海を往くウチらにジレンマを抱いているのではないか。

自分の手ではなく、他ならないウチらの手で敵を沈めている事実が——彼に自責や罪過を背負わせているのではないか。

重い、と茶化した手前、続けて冗談は言えへんかった。本当に重たい考えを持って帰って来たんやから。

「なあ、司令官。それが嫌なんか？」

ウチの声に大淀が続けて訊く。「私達が深海棲艦を沈めていて、自分は何も出来ていない、とお思いなのですね？」

続けざまに問われて司令官は困ったような表情をさらに歪めた。

「いつもなら適当に茶化すだろうな。そうすれば時間も過ぎる、事態も進む、いつの間にかどこかの誰かが解決する。私はそうやって生きてきた」

ぐつと眉を寄せ、喉に何か引っかかっているような声で彼は吐露し

た。

彼が茶化す？　ウチみたいにい？　そんなところは見たことがない。でも多分、彼にとつて——嘘じゃないのだろう。感覚の違いなのかもしれない。

「……我ながら不誠実な男だと、自己嫌悪してしまったのだ」

会談から戻る道中、悶々と考え込んだのだろう。

柱島泊地に来たばかりの頃より幾ばくかマシになった目元の隈が、血の巡りによつてか、少し濃くなっているように見えた。

どういった言葉をかけてあげればいいのか。ウチは司令官を救える言葉を持つとるんやろか。

んん、と言葉にならない声をあげて考えるも、気の利いた言葉など浮かんでこなかった。

「提督は私達をいつも助けてくれるじゃないですか。敵を沈めるのは確かに私達ですが、だから何も出来ていないというのは飛躍していませんよ。出来ているから、私達は海を進むことができます」

ここに来てからも思っていたが、一皮むけたようにすつきりとしていて、堂々とした雰囲気になった大淀の言葉は常に真つ直ぐだ。飾り気のない事実かつ、彼女の感情が見える言葉は何よりも強く室内の鉛じみた空気を打った。

「呉の艦娘だけじゃなく、山元大佐や清水中佐を立ち上がらせました。舞鶴で我が身を顧みず忘れ去られていたまるゆさんだって救い出しました。提督はとても凄い方ですよ。自己嫌悪することなんて、ありません」

司令官は大淀に顔を向けたが、いや、しかし、なんて言葉をこぼす。

艦娘と深海棲艦を同じ存在であると考えているから悩んでいるのならば、こういった話はウチがすべきやろうか、と腕を組んで、足も組んで、ソファの背もたれに身体を預けて暫く虚空を見つめて考えたあと、ウチは言った。

「……おっしや、りゅーちゃんがおもしろい話したるわ」

ウチが語るのは、戦場の話。

十年も前から感じていた不思議な話。

誰にも言ったことのない、とある真実。

司令官から深海棲艦と艦娘の関係性を聞いたときに腑に落ちてしまった、認めたくない話でもある。

しかしながら、それよりも大きな安心という感情が、ウチにこの話をするのを許してくれた気がした。

「ウチらが深海棲艦とやりあう時、何を考えてるかとか、わかる？」

「先程、会談の途中で明石に会ってな、記録を確認した所感を聞いた時に少しばかり聞かせてもらった。悲しさや悔しさを感じると」

「ほおん？ 明石がおんねや？ ま、大本営やしどの艦娘がおつてもおかしくないけどや……ままま、そやね、そんな感じたりするわけや。そしたら司令官はその明石から、なんで悲しいんか、なんで悔しいんか、聞いた？」

「いや……」

今までにないくらい縮こまってしまいう司令官を見るのも新鮮だったが、あんまりに不安そうな顔をするものだから驚いてしまって、ウチは腕組みを解いて彼の太ももを弱く何度も叩きながら言う。

「なーんちゆう顔してんねや、もー。大淀、ほれ、お茶持ってきたって。司令官もちよい落ち着きいな。別に君がどんだけアホやって海軍から飛ばされたとしてもウチらが何とかしたるから」

ははは、と笑ってみせたが、彼の表情は変わらぬまま。

執務机に置き去りにされたお茶を持ってきた大淀がカップを手渡せば、一口だけ含み、口内を洗うようにゆっくりと飲み下して息を吐き出した。

「ウチが初期型って呼ばれてんのは、知ってるやろ？ 深海魚どもとバッチバチにやりあって、もう十年や」

ああ、と短い返事。

「大淀も登録で言うたら若い方ちゃうん？」

大淀は改めてソファに座って頷いた。

「ええ、そうですよね」

「なら、口にせえへんだけでウチとおんなじ事を考えて、悩んでもうた事があるはずや——深海棲艦を沈めた瞬間、どうしようもないくらい

悲しなるのと同時に、良かった、もう大丈夫やって思ったことあれへんか？」

「それは……」

「戦闘が終わったことに対しての安心感とは別に、や」

「……」

ウチが間髪容れずに言い切ったところで、大淀はちらりと司令官を見た後に「はい」とはつきり言った。

司令官の暗かった表情に驚愕の色が滲んだのを認めて、ウチはさらに語る。

「どれだけ有能な指揮官であれ、ここに居るのが例え井之上元帥であつたとしても語らなかつたであろうウチら艦娘の間だけにある感情を。」

「司令官から深海棲艦が轟沈した艦娘つて考えとるのを聞いた時は、なるほどなあつて思った子おらばっかりやったやろうな。柱島泊地におるんは他の拠点から弾かれた子ばかり、いやそれしかおらん。厳しい状況で戦闘を強いられることもあつたやろし、滅茶苦茶な戦場を生き抜いた子もおる。ウチもそうや。深海棲艦の正体なんざ司令官から聞くまで言葉にして考えたこともあらへんし、どう足掻こうがウチらの敵や。何もせず海の底でじつとしてるんなら話は別やけどな。人に手え出すんやから、そらウチらから戦うわな。当たり前の話や」

「そう。深海棲艦が暴れたりしないのならば、手を出すことなんてない。」

だが司令官は言葉を汲み取れない様子でウチを見る。じつと見つめる黒い瞳に、大本営に行く前のような緊張や気恥ずかしさは感じなかった。ただ、彼に伝えてあげたいという気持ちが強く、声を届ける。

艦娘としての声を。

「深海棲艦を沈めるとな、へーんな感覚になるんや。安心してもうて、これで終わりやなつて思ったら——昔のことをびたつと思ひ出さんようになるんや」

「昔のことを、思ひ出さなくなる……？」

龍驤、それは記憶が消えると

いう——」

「あー、ちやうちやう！ あはは、ウチの言い方が悪かったんやな。勘違いさせてもうたわ。……君のせいやで？」

にしし、と笑えば、やっと消えたと思つた彼の困惑の表情が色濃く戻つて来てしまい、大淀に咎められる。

「龍驤さん……」

「ごめんてえ！ 元気出してもらおうとしたりゅーちゃんの小粋なジョークやがな！」

「もお……」

大淀も本気で咎めているわけではない。苦笑して、続きを促すように黙り込む。

「龍驤つちゆう艦娘であるウチは、ウチ以外にもおるやろ？ せやから同じように昔の記憶を持つとる。生まれた後の記憶は別やで？」

それでも軍艦であつた頃の記憶は一緒や。不思議なもんで、ある意味バケモンって呼ばれるのも分からんでもない存在や。そんなウチらでも、やつぱり昔の事を思い出したら悔しいし悲しいねん。やりきれん気持ちがい慢できひんくらい溢れて、戦いに必死になつとるんか、悲しさを誤魔化するのに必死になつとるんか分からんくらいぐちやぐちやな中でやりあう——思い出すなつちゆう方が無理な話やろ。ウチかてもつともつと活躍したかつたわ！ 周りの奴らぜんつぶ片付けて翔鶴と瑞鶴に追いついてたら未来は変わつとつたかもしらん！」

徐々に大きくなるウチの声。しかしふと、落ち着く。

まるで深海棲艦を沈めた時のように。

「……こういう気持ちがな、すうーつと落ち着くねん。ああ、終わったんやな、つてな。腑に落ちるて言うたらええんかな。あの時は、あれで良かったんやと思えてまう。沈んでいく深海棲艦をぼけーつと眺めながら妙な感慨に浸つてまうこともあるくらいに、心が鎮まるんや。そうしたら昔の事を思い出さんようになる。夢にも出てけえへんようになんねや。自分から思い出そうとせえへんかぎり」

言い終えてしばしの沈黙のあと、大淀がウチの言葉を両手で掬うように声を紡いだ。

「それは提督のもとに来て、さらに鮮明になった……違いますか？」
「……ん。その通りや」

ここまで話したところで、やっとしつかりと顔をあげた司令官が、ウチと大淀を、顔をふって交互に見た。

「どう、いう……」

「ここまで話して分からんって言うんか！ かああ……ほんつま鈍い男や君はあー！」

「提督、流石にそれは……」

「す、すまない！ 私は別に、お前達の気持ちを蔑ろにしようとか、そういうつもりでは——！」

慌てた姿が、どうにも。

ウチより何倍も強い思いが湧きあがったのであろう大淀が、くすくすと笑って、ウチの前だというのに司令官の肩に頭を乗せるように寄りかかった。

ウチの前やつちゅうのにや!!

ならウチは身体ごとといったる！ と体勢を変えて背もたれではなく、司令官に背を預けるように力を抜いた。

彼はウチの無礼とも言える行動を咎めることも、止めることもせず
に受け止めた。

「なん、なんだ二人とも、悪かった、私の思慮が浅かったから二人を傷つけてしまったのだろう。本当にすまなかった」

「ちやうて！ ……大淀もようこんなんに毎日付き合うなあ」

「今の体勢の龍驤さんに言われたくありませんね」

「おお？ なんや言うやんけ。歴戦のりゅーちゃんにそないな口利けるなんて強気やん？」

「連合艦隊旗艦ですよ？ これくらい強気じゃなければまとめられませんか」

「ははは、そらまあ、その通りや」

ウチと大淀のやり取りにあたふたして縮こまったままの司令官に、分かりやすく一言にまとめ言ってあげるべきだろうと口を開いた時、大淀も同時に言った。

寸分も違わず、声が重なる。

「せやから、司令官やないとアカンねや」

「だからこそ、提督じゃなければダメなんです」

「……す、すまない……その、も、もう一度言ってもらっていいか、聞き取りづらかったのだが」

ウチと大淀は、また同じタイミングで嘖き出して、笑ってしまう。

「つぶ……あはははは！ 聞き取りづらかったのだがー、やて！

あつはつはつはつは！ 会談で何があったか知らんし司令官にも悩みくらいはあると思つとるけどやな、ウチらの悩みまで取らんとつてよ」

「ふふ、そうですね。提督が悩んでいらつしやるのと同じように、私達もたくさん悩んでいるんです。でも、この悩みは……私達だからこそ
の悩みでもあります。提督に渡すわけにはいきません」

艦娘だけの、艦娘のためにある悩みと葛藤。

深海棲艦を沈めた瞬間に私達を包む安心と納得は、言葉にすれば兵器を抱えた化け物と揶揄されたつておかしくないものだ。

司令官が苦しんでいるところ、こう考えてしまうのは悪いかもしいないけれど――

「きつと君やから、助けられてるんやろうな」

――君やから、救われているのだと気づけたんや。

これだけは決して間違いなんかじゃないと確信があった。

もしかすると、これも共鳴の一種なんやろか？ ウチは顔を動かして大淀を見る。

またも同じタイミングで大淀もウチを見てたもんやから、それがなんだか面白くて、笑ってしまう。

戦争をしているのに、どうして笑えるやろ？

どうして、安心してしまふんやろか？

彼だつて言っているじゃないか。これは戦争なんだと。

「……司令官。この戦争を、どない思う？」

突如として鋭い刃のような言葉を突きつけたウチやったけど、やはり彼には、敵わなかった。

「戦争、そう、だな……戦争なんだと、そういうことについて井之上元帥達と話していたんだが……ここに戻って来るまで色々なことを考えていたのに、その……お、覚えてないのだ。お前達のことを思うと、ああ、次の仕事をせねばと、考えてしまつて……それで、こうやって目を背けて、なんて情けないんだと……」

戦争の罪過を背負い、自責に苦しんでジレンマを抱えているのに——次の仕事をしなければと進もうとする。

「忘れた？ 分かりやすい嘘を……否、本当に、忘れてしまったのかもしれない。」

一時であれ、全てを忘れるくらいに仕事に打ち込んでしまう彼の言葉を、胸の内で反芻する。

お前達を守ることが私の仕事だ。そんな言葉を。

「仕事のことを考えて戦争について考えてたのを忘れたんか!? 司令官、君……つぶは、あつははははは！ アカン、ほんまのアホや君は！ あーつぶはつぶは！」

「龍驤さん、し、失礼ですよ提督に向かつて——つく、ふふ」

「君かてわろてもうてるやないか！ わかるで、大淀。この人ったら、もう……とか思ってるんやろ」

わざとらしく眼鏡を押し上げる真似をして揶揄うと、大淀もとうとう声を上げて笑った。

「だって！ あれだけ真剣に悩んでるお顔をされていたのに、オチが次の仕事があるから忘れちゃつたって、ふふふ、そんなのおかしいじゃないですか！ 俯いていた内容を忘れるって、ふふふふふ、あつはつぶはつぶは！」

「なっ、わ、笑い過ぎだ二人とも！ いい加減にしないか！ 私だって真剣に悩んでいるのだ！」

「忘れたのに？」

ウチがすかさず言うとは彼は、うぐ、と黙り込んでしまう。

笑い声に誘われたように司令官の軍服のポケットから妖精が飛び出してきて、ふわふわとウチらの周りを飛んだ。妖精までも、笑っていた。

声を聞けるはずもなかったが、司令官は妖精に向かって冗談みたいに真剣な顔で抗議していた。

妖精もウチや大淀と同じようなことを言っていたのかもしれない。「なっ……お、お前まで……！　だから、私は本気で考えていると言っているだろう!?　さつきまで眠っていた癖にお前は……！」

日本海軍元帥にアメリカ海軍の上級将校まで同席していた重要な会談で、戦闘記録まで持ち出された場所で、妖精が眠っていた？

それが何よりもの証明じゃないか、と笑い過ぎて目じりに浮かんだ涙を指で拭った。

「こらアカンわ。柱島泊地のヒエラルキーが決まってもうたな」

「りゅ、龍驤？　それはどういう意味だ？」

はつとしてウチを見た司令官が、ウチではなく大淀が言葉を紡いだのに顔をぐりと反転させる。

「上から、妖精さんと私達、その下に提督、ですね。二段しかありませんが」

「……うむう」

「否定もせえへんやん」

「で、出来ないからな……」

否定が出来ない？　違う、司令官、君は否定しないんや。

自らの立場すらも、この戦争すらも君は簡単に捨ててまう。

時には自らも捨ててしまう危うさがあるけど、それは何よりもウチらを想ってのこと。

だからウチらは受け入れられたんや。

深海棲艦が、過去の記憶の成れの果てである、その真実を。

こうまで想われて、どうしてウチらが君を否定できるんや。

「……お前達を心配させぬよう、精進する。どのような仕事でも必ずやり遂げるから、安心してくれ」

ひとしきり笑った後、ウチと大淀の声が再び重なった。

「安心できへんなあ」

「安心できませんねえ」

「うぐうつ……ほ、本当に、仕事はきちんとする、本当だ！」

ああ、もう、これ以上は無理や。頬が緩んで、落ちてしまう。

言葉にせず、じゃあ、仕事をするために行動しようかと立ち上がった。

「ほれ、資料が必要なんやろ？ 大淀がそこにまとめてくれとるで。ウチはどうしたらええ？」

「そつ、そうだな、仕事、仕事だな。うむ。大湊警備府の戦闘記録を確認したいのと、行動調書に出来る限り目を通しておきたい。それで龍驤には大淀と一緒に準備してもらいたいものがあったな……」

「うっしや、そしたらちやっちやとやってまおか」

「はい。何でも仰つてください、提督」

「ちゃんと仕事はするからな？ 本当に、お前達のためならなんでもやってみせる。どんなことでもだ！ だから安心して——」

「せやから安心できへんって言うてるやろ」

「私達を安心させるよりも仕事をしてください、提督」

「……うむう」

大淀とウチは顔を見合わせ、何度目か分からないくらい、笑みを浮かべあう。

安心しろ、安心しろと、心配性な人や。

君の隣にいられるなら、ウチはそれで満足なんや。

きつとウチや、大淀、柱島泊地の艦娘にも同じことを言うんやろな。

もしウチや大淀が化け物であったとしても、変わらず同じことを言うんやろ。

私がいる。安心しろ、と。

だから、ウチらはこれ以上にないくらいに安らいどる。

君がおるから、ウチらは——海を往けるんや。

北へ⑦ 【鎮side】

けたたましい起床ラッパの放送が鳴り響く。

「総員おーしー！」

大湊警備府のスピーカー全てから野太い声が聞こえてくると、建物が揺れたと錯覚してしまうほど芯の通った軍人達の返事が各所から聞こえ、ものの数分後には全員が制服や揃いの作業服を着用して訓練場の一角にある広場に集合整列していた。

既に一時間も前から持ち場についていた俺は、その光景を工廠と呼ばれる区画からぼんやりと眺めながら、球磨型軽巡洋艦五番艦である木曾の艤装にホースで水をかけて手持ちのブラシを動かした。

「海原、何見てんだお前？」

「うお!? す、すみません！」

「新人だろうが同じ班の一員なんだ、ぼーつとするなよ」

「はいっ！」

社畜改め、日本海軍元帥……改め、大湊警備府付工廠の新人技官として調査任務に励む、海原鎮です。

「木曾の艤装洗浄が終わったらすぐに兵装格納庫に來い。仕事はいくらでもあるぞで」

「了解しました！」

「……元帥と同じ名前つつうのも災難なもんだな海原」

出来の良い大きなプラモデルみたいな艤装に向き直り、力を込めてこびりついた黒い油を洗い流す俺に声を掛けて來たのは大湊警備府付工廠の一部を差配する班長の杉村浩二すぎむらこうじという男だ。

日に焼けた浅黒い肌に、快活さを窺わせる目じりの笑いジワが特徴の典型的ガテン系を見た目をした杉村は、班長という立場でありながら、新人で右も左も分からない俺の教育係に名乗り出た気のいい男でもある。

現在時刻、マルロクマルロク。

艤装洗浄に勤しむ俺の横に座り込んだ杉村さんは「この可動部の溝の部分もよく洗えよ」と指示しつつ工廠の窓越しに、すぐ目の前にあ

る訓練場の様子を見ながらこつそりと話をしてくれた。

そのまま海に出られるようにと開けた工廠の一角は、軍人達の声がよく聞こえた。

「来たばかりでまだ眠いだろ？ 宿舎のベッドはお世辞にも柔らかいなんて言えないしな」

「いえ、大丈夫です！」

「お前、朝から元気だなあ……やっぱり呉でもコキ使われてきたのか？」

「え？ いえいえ！ そんな事ありません！」

ハキハキと喋るよう意識して声を返す俺に、ニヤリとした杉村さん。

「呉の山元大佐は随分と恐ろしい人らしいじゃねえか。可愛がりも相当だったろう？」

「自分是要領が悪いんですが、山元大佐はこんな自分にも普通に接してくださいましたよ」

適当にそう返事して、訓練が開始された広場の向こう側に視線をやって、殆ど全力疾走じゃないかと見紛うランニング風景を眺めていると、杉村さんが自分のブラシを持ってきた。

木曾の艤装とは別に並べて置かれた暁型二番艦響の艤装を洗浄し始める。さらにその横には同型三番艦、四番艦の艤装もあった。

本日の俺の仕事はこの四つの艤装を洗浄することから始まるわけだが、教育係ということもあってか杉村さんのお手伝い付きらしい。

初めのうちは床掃除でもしてろ！ という扱いを覚悟していた俺は肩透かしをくらった。

海軍における重要機密の塊でもある艦娘の艤装を新人に触らせるべきではないだろうと思つた俺は「床の掃除などは……？」と訊いたのだけれど、呉から大湊へと異動してきた即戦力——というていである——ならば技術を磨き続けろとのこと。

杉村さんがついてくれているのは、空気に慣れるようにという気遣いと、失敗してもすぐにサポートできるようにという職務上の気遣いである。

そもそも艦装にホースで水かけて汚れを落とすだけなので失敗もなにも無いのだが。

「嘘つけよお！ 山元大佐って言やあ反対派で有名じゃねえか。一部の上層部とつるんで好き勝手してたつて噂だぞ。もしかしてありや本当に噂だったのか？」

「ただの噂ですよ。山元大佐は——」

この時間ならば曙か那珂、はたまた違う艦娘に叩き起こされて食堂へ引つ張られてるんじゃないですかね、なんて言えるはずもなかった。

——何せ、俺はここじゃ無知の新人、海原鎮と同姓同名なだけの一般人なのだ。

我ながらややこしい。一般人だけど軍人で元帥。しかし一般人のフリをしなければならいってもうこれ分かんねえな。

「えーっと、ほら、新体制でかなり変わったみたいで、優しい人でした」「新体制つつつても一年かそこらじゃねえか。別に俺達はお前のこと小突きまわしてやろうなんて考えちやいねえんだから吐いとけつて、な？」

「面白がって変なこと聞きたがってるだけじゃないですか！」

「ははは、バレたか！ まあここにいる間は肩に力を入れ過ぎんなよ。艦娘が来た時に気合入れな」

「は、はあ……」

大湊警備府に来てまだ一日と少ししか経過していない俺だが、未だ艦娘の姿を直接目にしたわけではない。

しかしながら工廠——言わば技術工場——で作業する軍人や軍属の者は一人も漏れず気楽に作業している様子のままで、杉村さん然り、立ち話しながらコンクリートの床に水を撒いてデッキブラシで掃除しつつ、傍らでブラシを片手に談笑している者もいるくらいには雰囲気は良かった。

大湊警備府を調査せよ、という井之上元帥の書状を見てから相当の惨状を覚悟してきたのだが……。

「にしても本当に災難っていうか、弄られ放題だったんじゃないか？」

「あ、あー……つと、名前ですよね」

「そりゃあそうだよ！ あの元帥閣下と同姓同名ってお前、本当に同情するよ」

「は、ははは……」

作業帽を目深に被りなおして、俺は艀装に意識を向けた。

当然だが俺よりも手際のよい杉村さんは響の艀装の周りをぐるぐると動き回りながら的確に汚れを洗い落としていく。

「……こりゃ失敗だったかな」

「あん？ 海原、何か言ったかー？」

「いえ！ 水が掛かっただけです！」

「お前が汚れた分、艀装が綺麗になるんだ。しっかり洗えよ」

「はい！」

現場の空気を知るという面においては大成功と言って良いだろう。

俺が海軍元帥としての立場をもってこの場に居れば決して知ることが出来なかっただろうし、気楽に接してくれと言おうがこうした碎けた会話さえなかったに違いない。

柱島泊地においては明石に任せっぱなしだなあ……。

ただ、問題が一つある。

「なあ海原、元帥閣下の訓練の話聞いたことあるか？」

「訓練？」

「おう。呉の山元大佐に可愛がられただの言ったろ？」

言ってねえ。ああ、いや杉村さんからの話題提供はありましたけども。

「あの山元大佐が号泣するくらい厳しいらしいぞ」

「えっ!？」

——こうした根も葉もない噂を聞かされることである。

訓練したこと無いですけどお！ 最近は方々を駆けまわる大淀よろしく俺も出張が増えたことで呉鎮守府に立ち寄ることも増えたが、訓練の「く」の字もないよ！

柱島泊地で書類と格闘してるか飯食ってるかだよ。九対一くらいの割合でな！

「訓練の話は聞いたことないですね……」

「んだよ海原お前え！ 疎いのか？」

「疎いと言いますか、訓練自体したことないと言いますか……」

「そら呉の民間工場から出向してるだけなら訓練の必要も殆どないだろ」

話が噛み合わねえ……でも噛み合わせてもダメだしもどかしい……！

「広島じゃ誰も逆らえないって噂の山元大佐が号泣して土下座するくらい厳しい訓練って想像も出来ないよなあ。あ、それとこれは長峰っていう佐官の話らしいんだけどよ」

「……」

待てよ。工廠に勤めている軍属である杉村さんからどうして長峰少佐の話が出てくるんだ？

俺の頭に疑問が浮かび、言葉として組み立てられる前に杉村さんの話が耳に飛び込んでくる。

「元帥閣下は怪力の持ち主なんだってよ。舞鶴鎮守府って大規模改築されたろ？ どうにも、改築の原因はガス漏れだって言われてるが、実は元帥閣下が大暴れしたからって——」

「それは違いますよ!!」

「おあ?」

背びれ尾びれどころかジェットエンジン積んだ大嘘じゃねえかつ!

真実は俺が手違いで地下に閉じ込められて半狂乱になって大暴れし、それに気づいた大淀と長峰少佐が掘り出してくれたという珍事件なんだ! 決して俺が怪力であるとかそういうわけでは——!

うーん、どっちも頭がおかしいエピソードですね……。

「……んんっ、げほ。失礼しました」

「海原、違うってどういうことだよ? この話知ってるのか?」

「あーいやいやいや! 自分が聞いた話と違うな……なんて」

「ほお? どんな風な話だ」

真実は話せない。話したくない。情けないので。

「げ、元帥閣下は、えーっと……普通の人だったと聞いてます」
「……」

話しながらでも決して止まることのなかった杉村さんの手がぴたりと止まる。

そして俺に顔を向けて一言。

「そりや嘘だろお」

俺は杉村さんと数秒間見つめあったあと、そっと木曾の艤装洗浄に戻った。

「……で、ですかねえ」

この仕事を失敗するわけにはいかないが――

「艤装を展開してる艦娘ですら逆らえない男って有名だぞ？」

逆だろそれ。

「流石に大袈裟ですって……」

「分かんねえぞ。睨まれただけで気絶した奴もいるらしいんだからよ」

――まもる、心が折れそうである。

* * *

あれやこれやと準備をしていたら、青森駅に到着したのは昼も随分と過ぎた頃となった。

青森駅に到着してから、案内板を見ながらバス停を探す俺に龍驤が言う。

「で、言われた通りに準備したんはええけどやな」

すかさず返事をして、ぱんぱん、と背負った大きな鞆を叩く俺。

「うむ。これで調査をスムーズに行えるだろう」

「司令官はすごいよなあ。電話一本で身分を用意出来るんやから。一般人やって言われてもだーれも信じられへんのは、こういう突拍子もないことするからちゃうん？」

「突拍子がないことはないとも。一般企業でも身分を隠してお偉いさ

んが現場を視察するなんてことはあつたぞ」

「君の場合は隠してるんやなくて詐称しとるんやで。しかも情報部を使つてや」

「……誤差だ」

「なんの誤差やねん！」

井之上さんが用意してくれていたらしい大本営の俺専用執務室にて大湊警備府の様々な記録に目を通した翌日。龍驤と大淀に俺の名前を使つても良いと許可を出して情報部の忠野へ頼み事をした。

大湊警備府を調査するため、一時的な身分が欲しいから用意してくれ、と。

情報部の長ともなれば、井之上元帥が秘匿している任務であれ本人から共有はされていたらしく、頼み事はすんなりと受け入れてもらったのだつた。

海軍元帥としての立場で大湊警備府を訪れて真正面から調査するのも悪くないのだが、艦娘が横暴を働く現場という情報を加味すればこうする方がより真実に近づけるのではないかと考えたのだ。故に俺は将官用の軍服を脱ぎ、清々しい青色の作業着を身に纏っている。「ホテルでゆつくり出来るんかと思つたら、結局執務室に泊まつてもうたしや……そんなんやから皆に怒られるんやで司令官」

「まあまあ、私が知りたいことは粗方分かつたのだから良しとしてくれんか」

「ウチと大淀は別にええよ、部屋借りれたからゆつくり休めたし。問題は君や君。まーた寝てへんやんか」

「寝たぞ？ 三時間か、四時間か」

「仮眠やん」

「寝てるじゃないか」

「お？ なんや喧嘩なら買うで？ 言い訳するんか？」

「け、喧嘩など売っていいない。勘弁してくれ」

「冗談やけども……荷物増やして大湊警備府に行つて、具体的に何をするつもりなん？ そろそろ聞かせてくれてもええやん」

予想より準備するものが多くなつてしまい、東京から大湊警備府の

ある青森まで移動する間もずっと電話越しに忠野と打ち合わせしていたため、龍驤を放っておく形になってしまった。龍驤の言い分はもつともである。

新幹線から降りて案内板を頼りに歩いて到着した記載数の少ないバス停の時刻表を確認して、まだ次のバスまで時間はあるからと二人でベンチに座り、ようやく俺は龍驤へ言った。

「ふう……なんで？」

「まずは龍驤、移動中に放っておいてすまなかったな」

「ん……ええけど、別に」

「この調査は手分けして進める必要があるため、お前の負担を少しでも減らせるようにと忠野に相談していたんだ。決して龍驤をないがしろにしていたわけでは」

「わ、わかっとなるてえ！ なんやの、もお」

大淀と二人して俺じゃ安心できないって明言したじゃんよお!?

だから見捨てられないように必死に考えて仕事してるんですよ！

いい加減にしろ！ サンバイザーの位置ずらすぞ龍驤 teme ヲツ!!

「君の負担を減らすためにウチがおるんやから、気張らんと力抜きな。調査前に疲れてもうたら本末転倒やんか」

こんの……！

「……優しい娘だなあ、本当に」

まもるを甘やかさないでくださいあい！ これ以上甘やかされては仕事になりません！

「あつたりまえやん。それで？」

龍驤の一言を皮切りに、俺は調査の内容や方法を再確認すべく言葉を紡いだ。

「うむ。これから私は大湊警備府の工廠部門に下級技官として配属される。出撃や遠征、哨戒の際に間近で艦娘の様子を確認できるのは執務室などではなく現場だろうと判断して、忠野に無理を言っつて身分を用意させたのだ。別名義では本当に詐称になってしまったため、本名のまま仮登録してある」

ポケットから身分証明書のカードを二枚取り出して手渡せば、龍驤

はまじまじとそれを見つめた。

「これをたった半日……どころか、大本営に届ける時間も含めても数時間で作ったんかいな……はああ、ようやるわ」

「忠野に感謝だな。もう一枚はお前の分だ」

「ほんまや、ウチのまでである。大本営付、登録番号……え、待ってや司令官、これウチが持つてるのと殆ど一緒やで？ 所属が柱島泊地になつてないだけやん」

「見た目はな」

これもまた忠野の準備したもので、見た目に違いはないが内蔵されているチップが違うとのことらしい。

大湊警備府では所属している艦娘の持つ身分証明書に電子マネー機能が搭載されているらしい。立地もあって現金での買い物は不便なのだとか。警備府内には酒保以外にコンビニがあるとも聞かされている。ちよつと買い物してみたいからとついでお願ひしたわけではない。

本当に異動したわけではないため買い物出来なくて困ることなどないだろうが、忠野曰く「何事も徹底的に、が情報部であります」とのこと。ありがとうイケオジ。

どのような事態に陥ってもきちんとした身分証明書があれば調査に支障は出ないだろうと気遣ってくれたものだと言明すれば、龍驤はカードを陽射しに透かすように掲げて「ほおん」と生返事。

「大湊警備府は横須賀鎮守府の管轄下だ。とすれば、井之上元帥の膝元だろう？ 龍驤は名目上、一時的な戦力の増派という形で大湊警備府に配属されるていとなつている」

龍驤は理解が早く、これだけで「大体分かったわ」と頷いた。

説明している俺が混乱しそうなややこしい状況だというのに、流石である。

これまもるいる？ 大丈夫？

「そしたら司令官は呉鎮守府の工廠から異動する新人技官っちゅうわけや。名前がそのまんまなんは気になるとこやけども……平気なんかそれ？」

「この見た目で元帥だと思うか？」

作業着姿のまま両手を広げて見せれば、龍驤は笑う。

「おう、全然変わらん！ まんまウチらの司令官や！」

「バレはしないさ」

「アカンやるッ!? 話聞けや！」

「龍驤は私を普段から見ているから変わらんとするだけだ。私のことを良く知らない者が見れば同姓同名の一般人だと思おうだろう」

「ほ、ほんまあ……？ 不安なんやけど……」

「安心しろ龍驤。仕事はきっちりこなしてみせる」

「……もつと不安になってきたわ」

信用してくださいよ龍驤さん。

軍服の胸ポケットを秘密基地代わりに使っていたむつまるは、居心地の違うであろう作業着の胸ポケットからぴよこんと頭だけを出して言う。

『やあらかい！ ポケットにもいっぱいこんぺいとうはいるね！』

「……」

『ずつとコレ着てもいいよまもる。軍服は硬いから』

それはそれで困るんだよ言ってるんだお前は。

「話を戻すが、大湊警備府の司令長官は熊谷壮二郎少将で、この調査任務を既に知っているため問題解決に手を貸してくれるはずだ。それに私のことも知っている。私と龍驤が大湊警備府に所属するのは周知されているだろうから、我々はお互いの現場で心置きなく調査できるというわけだ」

「熊谷少将って言うたら、前から変わってないんやな」

「龍驤が所属していた頃もそうだったのか？」

記録を見ただけに過ぎないが、この世界に深海棲艦が出現したばかりの頃、一人目の龍驤として出現した彼女は国内の拠点を転々としていたという。

その拠点の一つが大湊警備府であり、彼女が所属していたのは本当に最初の十年近くも前になる。

その頃から大湊警備府の長として椅子に座り続けている男、熊谷少

将はいわゆる人権派——艦娘を一人の軍人として扱う人なのか。軍人として扱うのと等しく、人としても扱う将官であるという記録を見た時に、俺の中にある謎はさらに深まった。

現場を未だ見ていないのもあって、人権派が暴力を振るわれている理由を考えられない。どちらかと言えば迎合し仲睦まじく軍務に励んでいる想像をしてしまうのだ。

「そやで。熊谷少将のところが一番マシやったって思えんこともないくらいには悪うないところやったけどなあ。厳しさの度合いで言うたら柱島泊地みたいなことやで」

「……ふむ」

ならばブラックじゃない……と思うのだが。

熊谷少将は第二次大侵攻の際に行われた軍議に参加していた幹部の一人である。

故に俺が社畜一般人であることも、二人目の海原鎮である事も承知している。

そもそも、調査せよと書状を送った井之上元帥に問題提起したのは熊谷少将らしいのだ。

どうして秘匿して調査してもらいたいのか。そこに本質があるのだろう。

「帰還したら入渠も出来るし、艦装の修理も出来る。妖精も明石もおらへんかったけど、設備はしつかりしとったから問題うちゅう問題も無かったし……ウチがたらいい回しにされたんはそやけど、大湊警備府だけは例外や」

「例外？」

俺が鸚鵡返しすると、龍驤は足を揺らしながら言った。

「今でこそ正規空母や軽空母やって区別されとるけども、空母は空母やろ？ 戦力としては型落ちでも寝かせとくんは勿体ないつちゅうて熊谷少将が異動を大本営に推薦したんや。そつから横須賀に行つたりしたんやけど……まあ、数度の出撃で横須賀は横須賀で過剰戦力になるからいらんってまた異動になって、どこもいらん、いらん、いらん、で、柱島泊地やな。井之上元帥も今とは別の意味でバタバタし

とつたんやろから、ウチが横須賀鎮守府に一瞬でも所属しとつたのは知つとつてもどうしようもできへんかったんやろなあ、と今では思つとるけどな。ま、ちゆうことで大湊警備府だけが体裁あつての異動や。杜撰な運用もウチが知る限りしとらんかった。ちつと戦闘は激しい場所やけどな。……別の拠点で出撃に参加したりもしたんやけど、まー、敵を沈められんかったらぶちぶち文句言われるわ、手えあげられるわで……つと、ごめん、愚痴になつてもうた」

へへ、と笑つた龍驤の足の揺れを止めるように俺は彼女の膝に手を添える。

「……大湊警備府で問題は起きないだろうとは思っているが、絶対はない。だから万が一があればすぐに私が駆けつける。いいな？」

新体制の今、安心感が増したものの、全拠点が統一されているのかと問われたら俺はノーと言うだろう。例え俺の知る軍人であれ信用はしても熊谷少将以外は分らない。

もつと言えば、軍人も一般人も関係無い。ルール無用とばかりに横暴を働く輩がいるのはどこだつて一緒なのだ。全員がきつちりと規律に準じているのならばそもそも問題など起きたりはしないのだから。

「はいセクハラアツ！ これセクハラやで司令官！」

「ええ!? ち、違う！ 私は邪なことは考えていないぞ!?!」

「はっはっは！ 嘘やつて！」

くそ、龍驤のちいちゃい膝可愛いねえ！ と思つていたことがバレたのか!?!

いやいやいや、思つてない。いや思うけど思つてない。これ仕事なんで！

もしやオッサン上司がセクハラとよく言われるのは、こういうことなのか……!?!

「あんまべたべた触られたら困るやろ?」

はい。仰る通りです。

「……すまん」

無意識とは言え普通に触ってしまったのは言い逃れ出来ないので

素直に謝罪する。まもるは悪いことは悪いと認められる社畜なのである。

「柱島泊地に帰ってからにしてや」

「うん？」

「なーんでも。そしたらお互いの現場で問題点があつたら、ちやちやつとまとめて井之上元帥と熊谷少将に報告——で、ええんやな？」

「そうだ。我々で解決できる問題であれば、解決してしまえばいいのだがな」

「……そういうんが安心できへんのよなあ」

待て龍驤！ 問題解決すら出来ない社畜とお思いで!?

さしものまもるとして遺憾の意である。艦娘だからって許されないラインは存在するのだ。

「が、頑張るから」

見捨てないでください！ オネシヤス！ オネシヤス！

「ウチもおるんやからちゃんと頼つてや。お、バス来たで」

「う、うむ」

軍服の詰め込まれた膨れた鞆を背負って立ち上がり、バスに乗り込む。

それから大湊警備府まではたわいもない会話ばかりで、あつという間だった。

到着してから出迎えてくれたのは——軽巡洋艦、木曾だった。

吹きすさぶ冷たい風に白い制服のスカートをはためかせ、右目の眼帯の位置を指で直しながら歩いてくると、おう、と挨拶代わりとばかりに片手をあげた。

「おう、龍驤。と……横のは？」

寒空をものともしないイケメンっぷりを惜しみなく披露する木曾は、柱島泊地にいる木曾とは別の艦娘である。見た目こそ全く同じはずなのに、俺の目にはどこかキツイ印象で映った。濃緑色の髪の毛は、落ち着いているというより鋭さと冷たさを助長するようにも見え

る。

「今日からよろしゅうな。こっちは新人の海原さん。工廠部門で世話になるっちゆうんで途中から一緒に来たんや」

「よろしくお願ひしますッ！」

帽子を脱いで勢いよく頭を下げる俺。第一印象は大事。社会人の心得です。

「へえ……ま、いいや。じゃ、案内するぜ」

「熊谷少将閣下に挨拶しときたいんやけど、かまへんか？」

「ああ、じゃあ執務室に行くか」

荷物を背負いなおしつつ同行しようと歩を進める俺に、木曾が振り返る。

「お前は工廠の方だろ」

え？ と聞き返してしまう。確かに工廠区画に勤めることになっているが、なによりも先に総責任者に挨拶をするものなのではないかと。

「ここで働くつつつても軍属なんだ。お前は後で来い」

「は、はあ……挨拶が遅れても大丈夫なのでしたら……」

これが横暴の正体か——!? と思いきや、続く木曾の言葉に思いなおす。

「登録は済ませてあるんだろ？ そう聞してるよ。だったらここに早く慣れる事が先だ。荷物を置いてから来いよ」

ただ気遣われてただけでした。やっぱり艦娘に悪い子なんていないんじゃない！

「そうですか、分かりました！ じゃあ荷物を置いてからすぐに伺いますー！」

「ああ、後でな」

「はい！ 失礼しますー！」

「んぐっ……ふふ」

笑ってんじゃないよ龍驤。どっちかっていうとこれが俺の素だよ。

そうして、木曾達とわかれ工廠区画へ向かう俺。

もちろんのこと、すぐに迷子になった。

工場区画つてどっちなんだと挙動不審に周りを見ていたところ、声を掛けて来たのは——浅黒い肌の男。俺と同じ作業着姿の男は、ニツと笑って片手を上げて挨拶した。

「もしかして今日来るって言ってた新人か？」

「あ、はい！ 海原鎮と申します！」

「おう、俺は杉村だ、よろしく頼むよ。まだ作業が残ってるからあんまり時間割けねえんだけど、とりあえずついて来てくれ」

彼について職員向け官舎まで来ると、施設の簡単な紹介をされ、自分の寝床を教えられる。

「ここが今日からお前のベッドだ。トイレは廊下を出て右の突き当りにある。荷物はここのロッカーに入れて管理してくれ、で、これがロッカーの鍵で——」

矢継ぎ早な説明でもついでいけます。社畜なんで。

「と、一通りこんなもんだが、分からない事はその都度聞いてくれ。作業の見学をさせてやりたいんだが、今日はちよつと立て込んでるんで無しだ。明日の朝一に洗浄作業を一緒にしながら、詳しいところを説明する。飯はもう少し後になるから、ゆつくりしてくれ」

「杉村さん、あの、少将閣下にご挨拶を——」

荷物置いたら来いって言われてるんです、と言ったところで、杉村さんは一瞬だけ怪訝な顔をした。

「なら執務室まで案内してやる。挨拶前にここに来たのか？」

「はい。木曾さんにまずはここに来るようにと……」

「木曾か……なるほどな。まあいい。とりあえず行くぞ」

広い敷地に柱島泊地と違う雰囲気は新鮮なもので、辺りを見ている間に執務室に到着する。

しかしながら執務室というのはどこも似たようなものだった。

緊張の面持ちで扉をノックした杉村さんは大声で言う。

「工場三班、班長の杉村です！」

「入れ」

静かにドアを開けた杉村さんの後ろからずりりと滑り込むように入室すると、そこには木曾の姿は無く、龍驤と熊谷少将だけがいた。

白髪交じりの忠野と違い、黒々としたオールバックで、額から鼻筋にかけて大きな傷跡のある強面である。でも知ってる人だからまもるは緊張しない。

「案内ご苦労だった。杉村班長、戻ってよろしい」
「っはー！」

去り際に小声で「後でな」と耳打ちした杉村さんに頭を下げて、扉が閉まるまで見送ったあと——大きく溜息を吐いて帽子を脱いだ。

「はああ……新鮮な緊張だな」

「そのお姿も新鮮ですよ。まるで本当の一般人だ」

「正真正銘の一般人だとも。今はな」

俺の呟きにくつくつと笑い声を漏らして立ち上がった熊谷少将は、歩み寄りながら片手を伸ばしてきた。

握手に応じれば、龍驤のニヤニヤとした顔が視界に映る。

「とんだ茶番やんか」

「茶番とはなんだ茶番とは。熊谷少将が困っているから来たのだぞ」

短いやり取りに、熊谷少将は笑みを浮かべたままに言う。

「ご足労いただき感謝します海原閣下。突然の申し出でしたのに……」

「構わん。これも任務のうちだ。それで、井之上元帥と忠野中将から話は聞いているな？」

「っは。お心遣い、感謝します。こちらでの手続きは全て滞りなく完了しておりますので、明日からお願いできますでしょうか」

「うむ。それで早速なのだがな熊谷少将」

「ええ、ええ」

握手と談笑もそこそこに、執務室で目にする馴染みある応接用ソファに腰を下ろすと、正面に熊谷少将が座る。

ソファとは別に執務机の正面に置かれた一脚の椅子から立ち上がった龍驤も俺の横へ移動してきた。

「艦娘の横暴の調査との事だが、一見してまだ分からんのだ。龍驤と正門に到着した時に会った軽巡洋艦木曾も、普通だったようだが」

普通という表現もおかしいかもしれないが、そうとしか形容出来ない

い普遍さだった。

強いて言うならば総責任者に挨拶する前に持ち場に行け、と言われた時に違和感を覚えたくらいだ。

その違和感だって、このルールを知らないから抱いただけかもしれない。

「今日は哨戒のみで戦闘も無かったので……」

そこまで言って考え込む熊谷少将。

「戦闘がある日に荒れる、ということか？」

「端的に申し上げますと、そうです」

「どのように荒れるのだ。戦闘の興奮で口が悪くなるとか、暴力的になるだとかあるだろう」

「いくつか挙げるならば、その点もありましょう。ただ実害が出ても前体制のようにおいそれと異動だの解体だのは出来ませんし、まず解体を視野には入れたくありませんから……どうにか出来ないものかと」

「ふーむ……そこまで深刻か。実害とはなんだ」

「先ほど仰られたように、戦闘から帰還した際に……非常に、暴力的であります」

興奮冷めやらぬ状態で暴力的になる、とは、これまた想像しづらい。どういった感じなのかニユアンスでも分かりづらいのは困りものである。

「具体的な実害は何だ。色々あるだろう、殴られただとか」

「……艦娘は人に暴力を振るえないではありませんか」

「まあ、そうだな」

「であるならば、暴力とも言えないのです」

う、うーん!? さらに分からんが！ はっきり言え熊谷アツ！

「はっきり言え」

俺の低い声に眉をぴくりと動かした熊谷少将は、重たい口を開いた。

「近づくな、と言って艦装の脱着に一悶着を起こすのです。それも、毎回と言ってもいいくらいに」

「ふむう……？」

戦闘後はすぐに艦装を修理に回し、艦娘は入渠施設へ行くものという熊谷少将の話は理解出来たのだが、どうやら大湊警備府の艦娘達は艦装を装着したまま短くとも一時間から二時間は海の方を睨みつけて上がってこないのだという。

工廠の傍にいる分いなくなる事は無いにしろ、任務に支障をきたしてしまうのは事実であり、数度、命令違反も起こしているらしい。

熊谷少将は解体を避けるために再教育施設での処分で難を凌いできたらしいが、新体制の今、再教育施設に送り続けることも難しくなってきたという事で、今回の調査を大本営、ひいては井之上元帥に依頼する運びとなったのだとか。

「命令違反とは、出撃拒否か」

「逆です」

「逆……？」

「艦装の修理や入渠もしていない状態で、再度出撃してしまうのです。出て行った艦娘を呼び戻そうにも、難しく……」

「それでは轟沈の危険性があるだろう」

「はい、その通りであります。今までは幸運に恵まれ大事には至っておりませんが、新体制になってからより激しく、命令違反を起こしております。井之上元帥も報告を受けて自分の調査の申し出を受けてくださったのです。それに暴力的な振る舞いが加速したのも」

「新体制になってからさらに、か」

「はい……」

俺は腕組みをして背もたれに寄りかかって唸った。

「解体処分、異動処分、全て前体制ならば書類一枚で片付けられたのだろうが……艦娘の待遇改善が裏目に出たのだな」

「海原閣下と井之上閣下が間違えているとは思ってもおりませんが、ここのところ所属艦娘の行動は激しくなるばかりですので……海原閣下に正直に申し上げますが、私は一度、手をあげてしまいました」

「なに……？」

俺が顔を向けると、熊谷少将の目が泳ぐも、すぐに真っ直ぐ見つめ

返してきた。

「お前達の働きによって助かる人もいれば、勝手な行動で命を落とす結果になることもあると言って頬を張ったのです。これ以上の命令違反は解体も止む無しとなるかもしれないとも言いました。海原閣下と龍驤殿が会った艦娘、木曾がその本人です」

「頬を張って、どうなった」

「分かっている、とだけ言われました。その日は落ち着いていたのですが、やはり戦闘帰りには酷いものです。艦装を装着したままですと我々の力で敵うはずありません。工廠の職員が戻るようにと浅瀬に立つ木曾の手を掴んだところ、振り払われ……ただ、振り払っただけで、大怪我を」

「その者は」

「先ほど海原閣下を案内していた杉村という班長です。彼は数針縫うほどの怪我を負ったのですが……これもまた困りもので、彼は原因が明らかなのにもかかわらず、足を滑らせてしまっただけだと言いつ張る始末でして……。技術班と艦娘の関係が一番の問題とも言えるかもしれません。これ以上は私とて看過出来ませんので、この調査を以て処分を決定させていただければと考えております」

「なるほど……」

艦娘の横暴——確かに、話を聞けばそう表現するしかない。

だがそうすると、張本人の杉村の様子も気になるところだ。

「それで木曾は」

「深海棲艦は沈めてくるから、行かせろ、と」

「むうう……」

俺の唸りがさらに響く。

これは一筋縄ではいかないだろう。

「問題は木曾だけか？」

「木曾にあてられたように、木曾の率いる水雷戦隊の全員も、似たような状況になりつつあります。六駆の雷、電、響にも伝播してしまいうな勢いです」

「早急に、ということだな」

「っは……ですのでもずは、明日の哨戒から帰還した彼女らを見ていただければと考えております」

「承知した」

ガシガシと頭をかいて言うのと、熊谷少将は深く頭を下げた。

「情けない限り……申し開きもございません」

「これが私の仕事なのだから、心配するな。善処する」

安心したように息を吐く熊谷少将に、考え込む俺。

龍驤は——ちらりとドアの方を見て小声で言った。

「話はここまでにしとこうや。外で誰か聞いとる」

「では明日から工廠の各員の指示に従い、励むように」

熊谷少将から威厳を凝縮した太い声を掛けられ、海原はドアの方をちらりと見ながら立ち上がって作業帽を被り、無表情のまま大声で返事する。

「はいっ！ 頑張りますー！」

龍驤は厳めしい表情をした。社会人として一般企業で働いていたにしてはやけに手慣れている上下関係の維持——ましてや相手は大湊警備府の司令官熊谷少将である。実際のところは海原が彼の上官であると言っても、演技をするならば身体までそれについていってしまうようなものだが、海原はまるで「立場を忘れるな」とでも言いつけんばかりの態度だった。

声音だけ高々としていて表情を動かさぬ相手を前に、熊谷少将は言葉に反して緊張を隠せない様子だった。

自分以外にも見せてやりたい。龍驤がそう思わざるを得ない光景。直立不動で気を付けの恰好をして命令口調で話す熊谷少将。

声高に返事をして、聞くだけならば最敬礼をしているか、腰を深く曲げてお辞儀していそうなのに、実物は堂々とただ立っているだけの海原。

それどころか扉の方を指で示しながら顎を振って逆に命令している。言葉すらなく。

「……んんっ」

熊谷少将が一つ咳払いして言う。

「誰かいるのか」

かたん、と扉の向こうから物音がして、次にノックの音。

入れと熊谷少将が言うのと、遠慮がちに扉が開かれた。

ほんの少ししか開けられなかった扉の向こうから室内を覗くようにして顔を出したのは、ある艦娘だった。

「忙しいなら、後にしておくけれど」

暁型駆逐艦二番艦、響である。

照明から降る光を反射するような綺麗な銀髪が零れるように扉から室内へ入り込む。

「挨拶を済ませただけだ。構わんとも」

熊谷少将は二度目の驚愕に狼狽しかけるも、鋼鉄の理性で表情を固める。

挨拶を済ませた、と声にした時点で視線を海原に向けたところ、彼の表情が一瞬にして、まるで右も左も分からないという新人の顔になっていたからだ。

そのうえ、大湊警備府のように固有の艦隊を持たぬ場所とは違って多くの艦娘を保有する柱島泊地の頂点たる彼は、まるで響という艦娘を初めて間近で見たと言わんばかりの興味津々な瞳をしていた。

「な、何だい？ 私、どこか変なところでも——」

キラキラとした目を向けられてたじろぐ響に、海原は作業帽を脱いで頭を下げる。

「す、すみません！ 響さん、ですよね？」

「そう、だけど……」

「初めて見たので、驚いて……失礼しました！ それでは、自分はこので！」

すぐに作業帽を被って熊谷少将、龍驤、響の順に頭を三度下げてから退室する海原。三者三様の表情で彼を見送った後、響はすれ違って歩いていく背を数秒見つめたあと、ふい、と熊谷少将へ向き直って入室する。

「それで、どうした響」

熊谷少将が執務机の対面に置き去りにされたままの椅子を壁際へ持つていきながら訊けば、響は龍驤を視界に収めながらも隠し立てすることなく口にする。

「明日の哨戒についてなんだけれど、彼女は置いていきたい」

「ん、ウチ？」

「龍驤を？ 理由は」

「昨日、司令官が突然言うものだから木曾さんが哨戒ルートで接敵した際の連携に不安があると言っていたんだ」

「ほう。それをどうして本人ではなく、響が言いに来たんだ？」

熊谷少将が執務机に腰をもたれて問えば、響は龍驤に視線だけを向けて言う。

「私達はまだ彼女をよく知らないからね。ここのところ、はぐれが多いだろう？ 五隻になればすぐに片付くなんて簡単な任務じゃないのは私が言うまでもないこと……司令官は、分かっていると思うけど」

「木曾を呼んで——」

「木曾さんと呼んだら解決する、と思っっているのかい？」

「……」

短いやり取りだが、龍驤は心の内で「確かに、横暴としか表現できない状況やな」と改めて認識した。

司令官に向かって意見具申、というより、それはお互いに理解しているのだからと押し付ける物言いである。

「響の言い分も分かっているが、龍驤は大本営から増派された戦力だ。連携が取れないかもしれないと言うのなら、航空支援を主軸に運用すれば問題なからう」

熊谷少将もやり手で賢しい軍人である。即座に言い返せる反射神経もある。

「艦載機に飛び回られるのも嫌がりそうだけどね」

だが響もまた彼の部下である。賢しく反射も速い。

龍驤は沈黙を貫く。

空母が故に艦載機を嫌がられるなど腹を立てるなど言う方が無茶な話だが、それでもこれが任務だと口を閉じ続けた。

彼女の荒ぶらんとする心を落ち着かせる錨は、言うまでもなく海原である。

「大抵の我儘は聞いてやる。だがな響。木曾を含め命令違反ギリギリのグレーゾーンを行ったり来たりする行動はもう看過出来るところまできている。龍驤の前で話されたくも無いだろうから、航空支援は受け入れる。さもなければ私も彼女に今の太平洋水雷団はかようにも我儘であると教えねばならん」

「……」

「返事は」

「でも」

「はあ、響、そう何度も無茶を言われてはこちらも——」

このタイミングかな、と龍驤は沈黙を破った。

「面白そうな話ですね。ウチにも聞かせてくださいよ」

訛りが殆ど消え失せた口調に、熊谷少将は目の色を変えた。

「大湊水雷団の我儘っぷり、気になりますね」

煽るように鼻で笑った龍驤を、かつと顔を赤くして響が睨む。

つらつらと、訛りの少ない口調のままに龍驤は言った。

「実はウチ、昔はここに所属していたんです。熊谷少将もウチの事を覚えていらつしやるでしょう?」

「あ、ああ、うむ」

「あの時からすれば、ある意味、平和に貢献出来ていたんだと実感しました。軽巡洋艦の我儘一つで編成が変えられるかもしれないんですから」

「前に所属していたからって先輩面とは、面白い人だね。もう君はこの艦娘じゃないのに」

海原の行動を見るに、彼は良い人で通して調査をするのかもしれない。

ならば横暴の正体を一番近くで見ることになるであろう自分は、悪い艦娘、もとい嫌味な艦娘として彼女らの本性を暴いてやろう。

そう考えて龍驤はサンバイザーに指をかけて押し上げながら、上目遣いに笑って見せた。

「またここに所属になったんですから先輩ですよ。駆逐艦ちゃん」

「つ……! 木曾さんに会えば、その態度もすぐ変わるようになるよ」

熊谷少将は不機嫌そうに顔を歪め、分かった、と口を開いた。

「木曾を呼んで来い。本人が龍驤に直接理由を話せばいいだろう。私が仲裁する。妥当と判断出来ねば、予定通り大湊水雷団に龍驤を編成し明日の哨戒を行ってもらおうとしよう。先に言っておくが、連携が取

れない、など杜撰な言い訳は無しだ。いいな」

「……呼んでくるよ」

「ああ」

ニヤニヤとしたまま響を見送る龍驤。

一度振り返った響は龍驤の表情を見て舌打ちし、扉を乱暴に閉めて出て行く。

「はあ、龍驤」

溜息交じりに咎めようとした熊谷少将だが、彼女がぱつと表情を明るくしたことに毒気を抜かれてしまう。

「ごめんてー！ ほれ、司令官がああいう風に新人さんを装うっぽいから、ウチかて不本意で仕方なく、嫌あーな先輩面してるんやんか！」
「……変わったな」

「おっ」

熊谷少将はしばし沈黙し、彼女を見つめた後にしみじみと言った。

「とても、良い顔をしている」

「え？ あ、はは、そんなことないやろ」

「いいや、変わったよ龍驤は。前はまるで地獄の鬼をも撃沈せんという顔をしてボロボロになりながら——」

「だああ!?! やめてや熊谷少将！ 今は可愛いりゅーちゃんなんや！
どこで司令官が聞いているかもわからへんのに……。ウチから話すのと熊谷少将から話されるんは訳がちやうんやからな！」

ぶつぶつと口を尖らせる龍驤に笑ってしまう熊谷だったが、すぐ表情をきゅつと引き締めて空気を切り替えた。

「まあ、御覧の通りだ。お前がここに来たら、昔話でもしながら海原閣下の話も聞かせてもらおうかと思っただが……。そうもいかんな」

「司令官の？ 何が聞きたいんや」

応接用ソファに全身を埋もれさせるように気楽な姿勢のまま、両足をぱたぱたと揺らす龍驤に、熊谷少将はせっかく真面目な顔をしているのに、頬を緩めた。

「第二次に際する軍議で、閣下の出自を知り、妖精を初めて見た。それにな——ほら」

熊谷少将は執務机を回りこんで引き出しの一つを開くと、そつと何かを取り出した。

取り出されたそれを見た龍驤から無意識に「おあ」と驚愕の声が漏れる。

「……私のもとにも、妖精が現れるようになったのだ」

「す、すごいやん熊谷少将！　前は妖精なんておらんって言うてたのに！」

「前って、何年も昔だろうに」

手のひらに乗せられた妖精はきよとんとした表情で熊谷少将を見上げており、龍驤を見て、細くて小さな手で龍驤を示し首を傾げる。

「彼女は私の上官の艦娘だよ。初めて会うだろう」

「熊谷少将、も、もしかして妖精の声が聞こえるんか……？」

さも普通に話しているのでそう問えば、熊谷少将は首を横に振った。

「いいや、全然だ。だが話しかけない理由にはならないじゃないか」

「……はは、熊谷少将も変わってるやんか。ウチらがどんだけ妖精や境界や言うても目にしてないものは考慮出来ん！　とか言うてた癖に」

「その考えは変わっていないぞ。目にしたものを的確に処理出来ねば軍人として任務を全う出来んからな。だが妖精はこうして私の目の前に現れた。触れられるし、掌に重みだって感じる。ならばどのような非現実めいた存在であれ、事実として私は受け止める。それだけだ」

「んでも実は？」

「ペンを取り出そうと引き出しを開けた時、妖精が居るのを見てびっくり返ったよ」

「あはははは！　ノリエえやんか！」

「冗談抜きでひっくり返ったぞ」

「それでも妖精が熊谷少将のそこにおるだけで、ウチはここにおった事を誇れるで」

「妖精基準なのか」

「そら、ウチは艦娘やし」

「艦娘の艦装には常に妖精がいるものな」

熊谷少将の言葉に頷く龍驤。彼の言う通り、艦娘の艦装には妖精がついている。空母ならば艦載機に搭乗していたり、水上艦の砲塔にだつて姿を見せる。

しかし熊谷少将は妖精が見えなかった十年も昔、その存在を否定した。

理屈を付けられない艦装の動きや強度、破壊力を妖精などという荒唐無稽も甚だしい文言で片付けるのは理性が許さなかった。

艦娘が如何に屈強とて、それらが不可視の存在によって左右されるなど意味が分からないと。

だが今ならばその理由が分かる。

目の前にいる龍驤と——現在の大湊水雷団の違いもはつきり理解出来る。熊谷少将は小さく唸った。

「龍驤と一緒にいる妖精が心配だな。いつか笑い過ぎて倒れてしまうかもしれない」

「熊谷少将……やつとウチのおもろさに気づいたんやなあ……」

「皮肉だったんだが」

「分かってて返したったんや！」

「ははは、そうか」

微笑みあう二人に妖精も訳も分からずといった様子のままだが、ニツコリと笑みを浮かべた。

しかし次の瞬間には、妖精の表情が曇り、隠れたがるように熊谷少将の掌の上から軍服の袖の中へ入って行こうとする。

熊谷少将はくすぐったさを感じる前に妖精の気持ちを察して開けっ放しの引き出しの中へ妖精を放した。

「……妖精は不思議だな。私が考えた瞬間に感じ取って、逃げてしまう」

「なんや、逃げてしまつて」

壁に掛けられた時計を見て、木曾がここに来るまでもう少し時間があるか、と呟いた熊谷少将は静かに引き出しを閉じた。

「大湊警備府に妖精が居ないのは、知っているな」

切り出された言葉に龍驤が頷く。

「私の前では姿を現してくれるのだが……今、妖精を見せたのは確認の意味もあつたんだ」

「……ウチを見て妖精が逃げ出すかどうか、か」

「察しの良さに磨きがかかっているようで、元上官として誇らしいな」
「今でも上官やろ」

「上官に対しての態度にしては碎けているが？」

「ウチがこんな態度なん誰でも知ってるやろ。慇懃にすんのはほんまに知らん人にだけ」

「海原閣下には甘えてそうだと思っていたのだがなあ」

「んなっ……あ、甘えてへんよ！」

「冗談だよ。声を荒げるなど龍驤らしくもない。変わったのは本当のようだ。海原閣下のものでしつかりと可愛がってもらえているように安心したぞ」

「こんの……！」

わなわなと震える龍驤は、歴戦の艦娘であるのは言わずもがな。

勝てる勝てないなど考えるまでもなく、大抵の相手には強気に出られる。

例外を挙げるとすれば、海原と、この熊谷少将である。

「揶揄い過ぎたな。妖精に関して、大方、龍驤の考えている通りだと言っておこう」

切り替えの早さもどこぞの一般人と似ているな、と溜息を吐く龍驤。

「艦娘相手に妖精が逃げ出すてなんやねんな。木曾やら、さっきの響を見ても逃げ出すんか？」

「私が見た限り、出撃してない今の状態——龍驤が煽る前の状態であれば、姿を堂々と見せたりはしないものの、少なくとも逃げ出したりはしない」

引き出しの中から様子を窺っていたということか、と龍驤が問えば、熊谷少将は浅く頷いた。

「恐らくな。出撃前になると、木曾達は雰囲気が一変する。戦意として見るならば上々だ。しかし妖精が恐れ逃げ出すような姿が本当に上々であるかは、疑問の残るところと言えよう」

「艦載機に乗ってたら深海棲艦相手に突っ込んでいくような妖精がビビッて逃げるで、とんでもないやんか」

「故に、海原閣下を頼れないかと書状を出したのだ」

「はー……こら一癖も二癖もありそうな任務や」

「忠野中将から調査方法について聞いている。海原閣下は直接艦娘から話を聞くよりも、彼女らと深く関わっている工廠班の者達から聴取すると。慎重に事を進めていただけるのならば私としても助かる」

頼むから、煽り過ぎるな。

熊谷少将の視線はそう語っていた。

「わあった。ちつとどんなもんか見てみたかっただけやし、あれ以上の事は控えるようにしとくわ。それでも熊谷少将、あれはどうなんやろうな？ 大湊警備府の司令長官に対しての意見具申、とは誰がどう見ても言われへんやろ」

「無茶や無謀を抑え込むのに、ああして言い含める毎日だ。彼女らは大湊警備府に来て二年……いや、もう三年目になるが、来てからずっとだ」

キャビネットから書類を数枚取り出して龍驤に差し出した熊谷少将は、書類の内、一つを指し示した。

「大湊警備府は大小問わず作戦海域に出撃することなど殆どと言って良いほどない。行動調書も現行の哨戒ルートのものばかりだが……ここを見てくれ」

哨戒ルートばかり、というのは龍驤も知っていたのこと。

龍驤が所属していた頃の大湊警備府はいくつかの殲滅作戦に際して戦力増派に協力した拠点でもあるが、それを除けば柱島泊地と同じく本土防衛が主な任務である。

柱島泊地が第二次大侵攻にて海を駆け抜けたのは例外としても、今や遠征以外で遠洋まで赴くことは稀も稀。現在の大湊警備府と同じく、日々の哨戒ルートに多少の変更があれど本土に近づく深海棲艦を

沈めるにとどまっている。

その他の拠点がそれぞれで深海棲艦の棲地を慎重に調査している今、どこかがバランスを崩すような大きな動きをしてはならないのは、熊谷少将も龍驤も痛感しているところである。

有り体に言わば、海軍の新体制が馴染むのを待っている状態なのだ。

十年以上戦争を続けている異様とも呼べる現実が成す、息を殺すべき時間である。

「……被害無し、被害無し、どれも全部被害無しやん」

龍驤は行動調書に記される丸みを帯びた文字を指でなぞる。

「行動調書における被害の定義を述べられるか？」

「おう、流石に馬鹿にしすぎやろ」

反射的にそう返した龍驤だが、続けざまに言う。

「被害は被害、そのままの意味やんか。大湊警備府の要地であれ、ただの浜辺であれ、深海棲艦の攻撃を受けた時点で被害に相当するやろ。曲解するなら、ウチらが戦闘したとして、弾薬、燃料、諸々が消費されたら損害として換算出来るかもしれへんな。まあ、そこはこの行動調書の消費の欄に書くことやから曲解つちゅうのも変な話やけども」
「では、消費の欄にはどう書かれているように見える？」

まるで熊谷少将は龍驤に否定してもらいたいようだった。

「軽巡洋艦木曾、主砲中度破損。砲身の歪みにより砲撃困難となる」

「……続けてくれ」

ああ、と龍驤は声に出してしまう。

これは大本営に提出していない行動調書だと分かってしまった。

同じ日付で、修正されたものを海原が見ていたのを龍驤も見ていたから、熊谷少将が遠回しに伝えたいことを理解した。

「駆逐艦雷、艦装軽度破損。航行可能、旋回に難あり。駆逐艦響、艦装軽度破損。同上、旋回に難あり。駆逐艦電、機銃軽度破損——全部、消費の欄に書かれとるな」

「木曾達の頬を張ったのは言い訳などするつもりはない。だが、その理由も理解してもらえたらと思う」

「熊谷少将が司令官で良かったんとちゃう?」

龍驤は行動調書をめくりながら、消費欄に書かれた文字を読み続ける。

「こんなん前の体制やったら一発で解体処分や。下手したら不穏分子やー! 言うて他の司令官なら雷撃処分にしとるかもしれんで。憂さ晴らしにでもなるってな。言うこと聞く分、喜ぶボケもおるかもしらんけど……」

「……」

「でも、熊谷少将はそうせえへんかった。それだけでここにおった時のきつつい戦闘もええ思い出やって言い切れるわ」

理解の代わりに思い出として語る龍驤の言葉に、熊谷少将は小さく礼を言った。

「そう言ってもらえると、少しは心が救われるよ」

「ただ一つ」

龍驤は読み終わった行動調書を差し出して熊谷少将の目を見た。

「再教育施設に行かせるしか手が無かったんかもしれんけど、悪手やったかもしれん。あそこで突きつけられる現実を、きつとこの子らは知つとる」

「否定は、出来んな」

行動調書をキャビネットへおさめた熊谷少将は、執務机に戻って腰を下ろすと、龍驤と少し距離がある状態で話した。

「あそこは艦娘の意識を更生、改善する目的の施設だと私は考えているが、既にそれらを理解している艦娘に見せたところで確かに意味はないだろう」

「無駄な時間やと思われただけやろな……人を守ろうと思つとるなら、やけど」

「木曾達は間違いなく、人に被害が及ぶことを良しとしていない。艦娘として深海棲艦を沈めることこそ本分であると弁えているつもりなのだ」

「自分は兵器やから、消耗品として戦つとるでも言いたいんか」

「私が言ったことではない。寧ろ彼女らを軍人として扱っているから

こそ、私は己の不甲斐なさを棚に上げて頬を張ったのだ。貴様らがいなくなったら誰が大湊水雷団としてこの地を守るのだとな」

「木曾達の処分を保留にして長引かせて、いざとなれば再教育施設……戦力が流れていくのが前提の警備府じゃなく、戦力を保有して無駄にしたがらん鎮守府に所属させられたら解体を避けられるかもしれへん、と……今までもそうしてきたんか」

「そうだ」

熊谷少将のやり方に納得を示さない上級将校もいるだろう。

それらをかいくぐる術は限られており、その中でも最善を選択した、とも言える彼の行動に、龍驤は残酷なことを突きつけねばならぬのかと歯噛みした。

「今までの艦娘はそれで助かったんかいな」

「……」

「助かったんかって聞いてんねや」

「多くの艦娘は、別の鎮守府で、別の傷を増やしただけ、だった」

「どこも腐ったみかんの海軍で、逃がすもクソもないやろが」

「……ああ。龍驤の言う通りだ」

「まあ、言うてもウチかて簡単に方法を考えられるほど賢いわけちゃうから、熊谷少将を責められる立場でもないんやけどさ……そんなで、別の人からしたら、てい良く責任逃れしただけやって言われるかもしれない」

「……」

「熊谷少将は艦娘に優しい人権派の軍人やけど、傷つくのを見てられへんからって自分の手元から艦娘をほっぽり出すような奴や！ ただのビビりで責任逃れする卑怯者や！……そんなんばかり言う、世の中なんやで」

口にはせずつとも分かっているであろうに、どうして敢えて口にしたのか。

龍驤はこうして突きつけることで熊谷少将の考えの、さらに奥にあるものを見てみたかったのかもしれない。

人は、いや、そこに人もなにも関係無いのかもしれないと龍驤は考

えた。

艦娘も含め、他人は当事者の立場になって考えられるとさえ、それは虚偽、虚勢、言わば偽善。自分のことしか考えられないなど、当たり前のこと。

しかし一方で龍驤にはここまでのやり取りで妙な自信があった。ただ所属し、ただ戦い、通り過ぎただけの大湊警備府で、いくつかの思い出があるからだ。

誰も覚えていないかもしれない、龍驤にとっての小さな思い出。「いくら熊谷少将に方法が残されてなかったとしても、他の人らは――」

「構わん」

「あ……？」

「私がどう言われようが、何を言われようが、一向に構わん。本土を守り抜き、彼女らが満足するのであれば私はそれでいい。消耗品だから沈んで良いなどという暴論よりもよっぽどマシだ」

「ほおん……あ、そ」

龍驤は頭の後ろで手を組み、上体を反らして伸びをした。

「ええやん、海原流や」

「う、海原流……？　なんだそれは」

「ウチらが最優先、みたいな軟派者の考え方や」

「軟派者とは何だ、軟派者とは――」

先ほどまでの空気はどこへやら。龍驤はニコニコとして言った。

「しっかり悪者演じたるから、命令違反はきっちり指摘してや。哨戒の時はその百倍くらい言い返して木曾達に同調したる。ま、手始めに嫌味の一つでもかましたるけどな」

「どっ同調など……哨戒で深海棲艦との戦闘になったら取り返しがつかなくなるかもしれんだろう……！」

「そこは信用してや。ウチはあの司令官のところでアホほどきつい訓練と哨戒しとんのやで」

「なに……？　海原閣下は、艦娘にそんなにつらい任務を――」

「にしし、残念やけど違うで」

熊谷少将は眉を歪ませて訳を訊く。

それから龍驤の口から飛び出た言葉に、思わず目を剥いた。

「絶対のない世界で、あの人は絶対を持つとるんや。ウチらがどんだけバケモンやっちゅうても、自分の艦娘やと言ひ張る絶対をな。そして、それに見合うくらいにバケモンじみた強さをもつとかなアカンやろ」

「龍驤、どうしてそんな後ろ向きな事を」

「後ろ向き？ どこがやねんな」

「バケモノという所だ！ 決してお前達はバケモノではないだろう」

立派な軍人だ、と熊谷少将は言う。

しかし龍驤は違った。

「バケモノや。艦装を展開した状態なら、熊谷少将はウチを一步も動かされへんやろ。でもウチは指一本でどうとでもできる……木曾も、響もウチと一緒にや」

「だが、しかしっ……」

「艦装を解いたら、どうやろな」

言わんとすることを理解出来ず唸る熊谷少将に、今はここまで、と言つて時計に目を向ける龍驤。

「うーん、木曾けえへんやんか」

「お、おお、確かに、そうだな……私が見に——」

ごんごん、と重たいノックの音。

丁度良いタイミングで執務室に到着したらしい木曾が入室してくると、龍驤の雰囲気が一変する。

「おー、さつきは案内ありがとうな、木曾」

「挨拶は済んだみたいだな。それで……編成の件だな？」

木曾は熊谷少将に顔を向けるも、すぐに龍驤へ視線を引っ張られてしまうこととなる。

「大湊水雷団の旗艦、木曾の教育がなってへんっちゅうて文句言うてたところや。響ちゃんが熊谷少将にえらい噛みついてん。どっかのボケがウチと出撃したら連携取られへんとかビビリ散らかしとるらし」

「ああ……？」

熊谷少将は静かに「龍驤、言葉に気を付けろ」とだけ言うも、明らかにただ形だけの注意だった。

大本営から来たとされる龍驤の振る舞いに木曾は不快さを露わにし、入り口からずかずかと龍驤の前まで来ると、じとりと見下して言う。

「大本営でどんな活躍をしたのかは知らんが、ここの旗艦はこの俺だ。俺の命令に従えないのなら戦闘には参加させない。貴様の不手際で被害を被るなどごめんだからな」

「はは、別に木曾の命令なんてここで聞く必要はないやろ。熊谷少将がどう言うかちやうの？」

「貴様……」

「木曾、それに龍驤も、落ち着け」

「はーいはい」

「ちっ……！」

「木曾には悪いが、これは大本営の意向だ。一時的に大湊水雷団に組み込み、旗艦は木曾のまま運用する。哨戒ルートに随伴させるのに問題があると響から聞いているが、そうなのか？」

熊谷少将の問いに木曾は不機嫌そうに頷いた。

「ああ、大アリだな。はぐれの少なかった去年か一昨年くらいなら連れまわしてやっつたろうが、今は毎日と言っていいくらいに戦闘がある。軽空母を守りながらの戦闘は戦力の増加かもしれないが、俺にとっちゃただの負担だ。特定海域は海流だって荒いんだぞ、実力も分からん空母のお守りなんざしてられん」

煽られたことで逆上するよりも理性の働いた木曾は、どうすれば龍驤を連れまわさずに済むかを冷静に考えて、そう口にした。

確かに木曾の言にも一理ある。実力を測るにしたって大湊警備府で演習をする時間など無く、発艦の一つでもさせてみようが、それを実力として見るには不安が残るだろう。ならば素直に負担であると言えばいい。

そんな木曾の言葉には、龍驤を侮る感情が込められていた。

「不和や連携ではなく、負担、か。響にも言ったが、航空戦力として支援を主軸に運用したならば、どうだ」

「……戦闘海域でこいつを守る必要はないんだな」

「ああ、警備府から直掩機を出すにとどめよう」

「なら……それでいい。だがな龍驤」

ギロリと木曾の目が龍驤へ向けられる。

「貴様の艦載機が無駄にならないようにしろ。大本営のお偉方に文句を言われるのだけは勘弁願いたい。資源だって限られているんだ」

「心配せんでもそう簡単に墜とされへんて、素人ちやうんやから。君らよりも戦果あげたるやないの」

「っは、そりや期待しちまうな。話はそれだけかよ」

「以上だ。木曾、呼び立ててすまなかつたな、戻つてよし」

「ああ、それじゃあな」

そうして、響よりも乱暴に扉を閉めて出て行った木曾の足音が遠ざかると、熊谷少将は大きく溜息を吐いた。

「えらいあつさり引き下がったやん」

「今回は、な。龍驤がいなければもつと言い合いになっていた可能性の方が高い。煽るというのも相手の理性を利用する良い手立てかもしれない。私には向かんが」

「これ、毎回なん？」

「まあ、言及は控えよう。厳しくしようが今のように接しようが一切変わらない」

「けつたいな任務やで……」

「すまんが、言った通り哨戒の際には直掩機のみで支援を頼む。木曾達の様子はそれでも分かるのだろうか？」

「分かるで。ほんまに危なくなったら、熊谷少将の指示でもって直接戦闘に参加させてもらう形でええんか。遠距離から全力で追つても微妙なところやから、大湊警備府にべったりってわけにもいかんで？」

「ああ……大湊警備府に寄った海域から周囲の哨戒をしてもらえたら問題無い。願わくば、あいつらに安全な戦闘を教えてやってほしいものだが」

戦闘に安全なものにも無いか、と自嘲する熊谷少将に、当たり前やんと言つてからからと笑う龍驤。

「でも拍子抜けやな。もう少し言い合いになるんかと思つたわ」

「ああして直接話せば、多少なりとも言ふ事は聞いてくれるのだ。不満があるうが、帰還命令を無視することもない。理性を失うのは戦場だけだ。帰還は帰還でも、先に言つた通り——」

「工廠前で立ち往生、やな。工廠には司令官もおるし大丈夫やろ！」

「だといいがな……今日は持ち回りの任務もおおよそ終わっているから、休んでくれていいぞ。そうそう、龍驤の部屋なんだがな」

前と同じだ、とだけ言つて自分の額を撫で、引き出しを開く熊谷少将。

そこに、妖精の姿は無かつた。

「……やっぱり、か」

「妖精は？」

「消えたよ。暫くすれば戻るだろう」

「消える妖精に、自分を消耗品扱いする艦娘……下手すりや暴力沙汰、かあ」

「どちらが先に手を出したかと問われると、微妙なところだな」

「熊谷少将を抜きにしても、工廠の人らからて止めようとしただけちゃうんか。それを手出して言うたら酷やで」

「そうとも言える、というだけの話だ。そうしたら木曾達だつて手を出したわけではあるまい」

「相手が怪我してへんかつたらな。血が流れたんやつたら、どう理屈つけたつてアカン」

「……」

「ま、ここで話をこねくり回してもしやあないから、明日になったらしっかり見とくわ！ で、熊谷少将。大本営で聞いたんやけどさ、こつてコンビニ出来たつてほんま？」

急に俗な話を始める龍驤に、ああ、やはり彼女は変わったのだと前の面影を探しつつ、熊谷少将は立ち上がる。

「案内しよう。ここは普通のコンビニとは少し品揃えも違うのだ。主

に任務に使う雑貨が多く置いてあつてな」

「おもしろそうやん。後で司令官にも教えたる。お菓子とか食べるやろし買つといてあげよかな」

「……本当に甘えん坊になつてしまつて」

「ああつ!? セヤから違つて!!」

「海原閣下に後でしつかりとお礼を——」

「やめて! いやほんま! ほんまにやめてよ!」

「昔の龍驤の話をするのも良いかもしれん。勇ましい話の一つでもすれば、きつと喜んでもらえるぞ」

「せんでええて! ほんまにせんといつてよ! したら怒るで! めつちや怒る!」

「ははは」

「ははは、やないて! なあ、ちよお、もう、熊谷少将!」

二人の声は、かろうじて扉の外へ届いてはいなかった。

そんな執務室の窓の向こうで、いくつかの光が、ちらりと動いた。

北へ⑨ 【艦娘side・木曾】

「……う、ぐっ」

寝苦しい。

《ワイヤーをもつと張れ！ 強く張らんかッ！》

《ダメです！ 艦首が……！》

《諦めるなそこでえッ！ 早くこっちに掛ける！》

《まだ乗ってる！ 乗ってるんだ！ 急げ！》

《止まりません、もう……これは……！》

「はあっ……はあっ……うう」

息が出来ない。

《認定はまだ下りんか》

《っは》

《そうか……なら、睨み続けてやるしかあるまい》

《……はい》

《気骨を見せつけてやろうじゃあないか、なあ？》

《もう人数は、そういませんよ》

《一人でも二人でも生きとればいい。ここで終わりにするかどうかは

――》

「……かはっ！ は、はあ……はあ……！」

電流が走ったように目が覚めた俺は、ベッドの上から転げ落ちるようにして降りて、月明かりに縋って窓辺へ這っていった。

また、この夢だ。いつもこの夢が俺を眠りの底から引きあげやがる。

「ん、く……ふは……くそ」

窓辺に置かれて冷えた水差しを引つ掴むと、一気に煽ってねばついた口内を洗い、悪夢ごと飲み下す。喉から腹にかけて冷たさが伝うと、ほんの少しだけ落ち着いた。

額に浮かんでいた汗を拭った時に、全身もまた汗で濡れているのに気づいて頭をかいて独り呟く。時計をちらりと見れば、まだ夜半。

「……風呂行くか」

大湊警備府に来て三年目となり、すっかり馴染んだベッドと最低限の家具しかない殺風景な俺の部屋を振り返って見回したあと、寝間着姿のままに部屋を出た。

ほぼ全員が寝静まっている大湊警備府は静寂に包まれていて、風呂代わりにも使われている入渠施設までの道のりは不気味なほどの静寂が支配していた。

これも慣れたものだ。それでも、あの夢を見た後だと嫌な想像をしてしまう。

まるで、深海みてえだ、なんて。

深海がどんなもんかこの目で見たわけじゃないから、本当にただの想像に過ぎないが、静かで、今みたいに月の光すらも無い恐ろしい場所なのかもしれないと考える。

恐ろしいってのもおかしいか。寂しい、が正解なのかもな。

「あ……？」

さつさと風呂に入って汗を流したら、もうひと眠りしよう。

窓辺にあつた水差しの傍に置かれた時計で見た時刻は、たしか、まだマルフタマルマルくらいだったか。風呂から上がって寝ても微妙な時間だが、明日のために体力は出来る限り回復させておきたい。

夢を忘れるためにうだうだと考えながら歩く俺の視線の先に、作業着の男が一人立っていた。

入渠施設までの道のりだ、別におかしくはないが——時間が時間だったから、俺は自然と声を掛けた。

「何してんだ、こんな時間に」

目深に被った作業帽は横から見ても表情を窺わせなかったが、俺は一目で昨日来たばかりの新人だと気づいた。

迷ったのか？　とも思ったが、迷ったのならばこんな時間までうろつくはずがないと、眉をひそめてしまう。

「ああ、木曾さん。こんばんは」

振り向いた顔に宿る感情は——分からない。見たこともない顔をしてやがる。

無理矢理に言葉にすれば、悲しそうで、一方で楽しそう。そして

どこか疲れている顔だ。

「海原、だったか？ 迷ったのかよ」

「夜風に当たりに来ました。大湊警備府の夜は冷えますねえ」

「当たり前だろ。新人がこんな時間にうろついてんじゃねえ、さっさと戻れ」

「すみません、でももう少しだけ風に当たらせてください」

「……まったく、何だつてんだお前は」

新人なんざ放っておいて風呂を済ませて戻ればいいのに、俺は海原の近くまで来て、渡り廊下になっているそこで黙って突っ立つ。

「初日の緊張で眠れねえのか？」

「え？ いや、眠れないわけではないですよ。本当に夜風に当たりに来ただけですから」

「そうかよ。夜間の無断外出は規則違反だつてドヤされんぞ」

面倒な奴だ。ウロつかれるのも目障りだからと適当に言った俺が油断していたのかもしれない。

海原は不思議そうな顔で俺を見て言った。

「木曾さんはいいんですか？」

「お……俺はいいんだよ、関係無いだろ」

「じゃあ、木曾さんが連れて出たつてことにしてくださいよ」

「はあ？ なんて俺が——」

「そうしたら規則違反も許してもらえるかなー、と」

乾いた笑い声をあげる海原に、本当に面倒な奴だと大きく溜息を吐いてしまう。

大本営から龍驤とかいうクソ生意気な軽空母が来て、ただでさえ鬱陶しい戦闘がさらに荒れるかもしれないというのに、呉からやって来た工員までもが変わり者だとは。

熊谷少将に文句を垂れた時にこいつのことも聞いておくべきだったと胸中で舌打ちして、それでもまあ、あの芯の凍るような夢を忘れられるなら適当に相手をしてやっても構わないかと、汗で気持ちの悪い寝間着の胸元をばたつかせた。

熊谷少将のことだ、もしかすると艦娘について多少なりとも話した

かもしれない。

それに工廠の奴らだつて……。

「命令違反ばかり起こす艦娘に連れまわされたつてか？」

「違反したんですか？」

「ぐっ……」

こいつ、聞いてなかったのかよ……！

俺は苦し紛れに「冗談だよ」などと言ったが、海原は無表情のまま、また夜空へ顔を向けた。

「聞いた話ですけど」

いきなりそう切り出した海原に、俺は返事もせず。

「杉村班長が怪我をした原因は、木曾さんらしいですね」

「……てめえ、誰に聞いたんだ」

「誰から聞いたかは重要ではないかと」

まるで俺が告げ口した奴をシメてやろうとしてるみたいで、バツが悪くなつて今度は本当に舌打ちをした。

「どうして——」

「暴力を振るえたか、つて聞きてえのか」

艦娘は、暴力を振るえない。それを知らない奴は殆どいないと言つていいだろう。

だがどうして会つたばかりの海原にそんな不躰なことを聞かれなきやいけねえんだと、俺は声を低くした。

あれは、殴つてやろうとか考えてたわけじゃない。

「呉でどんな仕事つぶりだったのか知らねえし興味もねえけどよ、立場をすっかり弁えて口を利けよ。俺の話をどういう風に聞いたかも知らねえけど、怪我をしたくなきゃ——」

「いえ、理由を聞きたかつただけです。すみませんでした」

「お、あ……お、おう、わ、分かればいいんだ、分かれば……」

素直に謝られると途端に言葉を失つてしまう。

海原の独特な雰囲気にしてやられているのか、真夜中で寝起きだから頭が働いていないのか、それとも夢が忘れられなくて、どんな話でもいいから頭を空っぽにしたかつたのかは、分からない。

「艦娘が暴力を振るえないって話、おかしいですよねえ」

その言葉に視線をやると、海原は自分の頬を撫でながら言った。

「自分、思いつきりビンタされた事あるんで」

「はっ……!?!」

待て。今こいつは、艦娘に暴力を振るわれたつつたか……!?!

面白いもんで、驚愕とは得てしてどのような事で頭を支配されていても、中身をどこかへ吹き飛ばしちまう。その内容が艦娘の行動原理や理屈を根底からひっくり返すようなもんなんだから、なおさらだった。

「ま、待てよお前、ビンタされたって、どういう——」

「仕事でちよつとした勘違いがありました。あー、でもあれは勘違いでも無かったかな……?」

うーん、と頬を撫でながら唸る海原に詰め寄り、肩を掴む。

「お、おい! その話詳しく聞かせろ! 艦娘が暴力を振るえるなんておかしいだろうが——!」

「わあっ!?! お、落ち着いてくださいよ木曾さん!」

「あ……わ、悪い……じゃなくて! それ! どういうことなんだよ!」

海原の肩を揺らして訊けば、奴は俺の手をそつと肩から離れた。

「どういうって、そもそも暴力を振るえない理由がないじゃないですか。どんな人だって喧嘩の一つや二つするんですから、気に入らないなら手も出たりするでしょう」

当たり前——だが、当たり前じゃない。

「それが出来ないのが艦娘だろうが!?!」

「出来ますって。暴力を振るえないじゃなくて、振るわないの間違いでしょう。理性の強さが違うとか、そんなレベルの話じゃないんですか?」

「な、なんだよ、それ……理性の、強さとか……意味が……」

寝起きの時と違う汗が背を伝い、俺は突っ立った状態から動けなくなつた。

「意思の問題じゃないですかね」

「意思……?」

鸚鵡返した俺に、海原は背を向けて歩いていく。

「ま、待てよー!」

「出歩いてすみませんでした、このことはできれば内緒でお願いしますね」

「おいっ!」

「明日また工廠でお会いしましょう、木曾さん」

追いかけたらいいのに、俺は海原の背中に手を伸ばすだけで、足は動いちやくれなかった。

夜の闇に溶けるようにして消えていく姿が完全に見えなくなったあとも、俺はしばらく渡り廊下で冷たい夜風に吹かれ続けた。

北へ⑩ 【艦娘 side・木曾】

「ちっ……」

結局、あの後は眠れやしなかった。海原とかいう工員の言ったことが頭の中を跳ねまわってうるさかったのと、ベッドでもう一度横たわって瞼を閉じたら、夢の続きを見てしまいそうだと思ったからだ。

睡眠はするに越したことはないが、出来なくとも行動は出来る。任務をこなすにはこれくらいが丁度いいと見栄をはって人だかりの出来た食堂の扉をくぐった。

俺がやって来たことで怯えてか先を譲るよう一步下がる訓練兵に一瞥くれてやると、どんと肩で押し退けていく。

「おはよう、木曾さん」

「おはようなのです」

「ひどい顔よ？ ちゃんと眠れたの？」

食堂に踏み込むと、響、電、雷の順に声をかけられた。

すでに大勢が食事をしていて、音が耳に痛かった。

開口一番にひどい顔とは随分じゃないか。言葉にはせず鼻で笑ってそう示した俺に三人がそれぞれにテーブルへ食事の準備をしてくれた。電が箸を、響が茶を、雷が今日の朝飯をのせたトレーを。世話を焼きたがるのは結構で俺も楽が出来る分助かるってもんだが、いつもは遠慮している。が、今日はあいにく遠慮できる元気もない。

「はい、お茶」

響になんとか「おう」と返事だけすると、興味すらわからない作業が始まる。

箸を手に持ち、ただ口に運ぶ。咀嚼し、ドロついた頃に飲み下し、砂を洗い流すが如き勢いで茶を飲む。それを数度、十数度と続けるだけ。

なんたる苦痛か。味なんて感じられたもんじゃなかった。

そもそも、味ってなんだよ。

「……今日の哨戒だが」

くだらないことを考えるな。ただ本土防衛だけに集中しろ。

たった一つの単純な任務を細分化して、それで頭をいっぱいにしちまえば余計な事を考えずに済むんだ。

食堂の壁にかけられた時計を見れば、時刻はマルナナヒトフタを指している。

訓練兵でもないからゆっくり食事をすればいいとは分かっているも、俺はこの空気、雰囲気にも三年経っても未だ馴染めず、とつとつずらかってしまいたかった。

横並びで食事をする艦娘の俺達の周りだけぽっかりと空間があいていて、その他は人間でいっぱいだった。しかも全員が何かしらの話題に夢中だ。耳をすませば内容も分かろうが、やはり興味が湧かず、ただただ砂のような飯を噛んだ。

俺が生きていた時代——軍艦として海を駆けた時代とは違うこの世界は、また戦争をしていた。

またつてのもおかしいか。俺達が、戦争をもってきちまったんだ。「響には言っているが、大本営から戦力の増派があった。哨戒ルートに変更はないが戦闘は少し楽になるかもな」

「龍驤さんでしょうか？ 木曾さんが来る前にここで食事してたわよ」
雷へ顔を向けて、へえ、と言うと、彼女は訊きもしないのに龍驤の様子を語る。

「すごいよ。雷が来る頃にはもうご飯食べ終わっちゃってたんだから！ いつもよりゆっくりできて楽って言うって……やっぱり大本営って忙しいのね」

大本営が忙しいかどうかは知らないが、十年も戦争を続けるくらいには逼迫した世界で大多数が生き残っている現状を考えれば、それくらいあくせくしているのも頷ける。

俺は生まれてすぐに大湊警備府に来たもんだから、よその耳障りな話を聞けど、悪辣な運用方法であれ戦争を退ける賢人がいくらかいるんだという認識で、それだけだ。

艦娘の酷使に関しちや気分が悪いなんてものじゃあないし、それを口々に噂する奴らも腹立たしいから最初の頃こそ「俺の前でその話題を出すな」と言いまわったもんだが……ま、人つてのはどれだけ瀟洒しょうしゃ

ぶろうが蓋をされた臭いもんの中身を覗きたくなるもんだ。認めはしないが否定もできない。

だからかもしれない、と思考が曇った。

「大本營で酷使されてりや飯食う暇もないってか」

「でも、ニコニコしていたのです」

「何が楽しくて笑っていたのかは知らないけれどね」

場繋ぎに紡がれた声に反応しなかった雷が、一拍遅れて虚空を見つめて呟いた。

「……早く帰りたいって言ってたわ」

帰りたい？ 警備府程度の仕事よりも、大本營でのお仕事の方が大事だろうよ。

「お偉方に使って貰えた方が箔がつくつてもんなんじゃねえの」

俺は分かんねえけどよ、と、ぬるい味噌汁を啜った。

三年ぼちちとは言え、固有艦隊のない警備府で唯一の艦娘である俺達は長居している方なのだという。俺達を除く殆どが大本營を経由して各拠点へ異動して、大体が鎮守府付の艦娘になってるってんだから、俺はどうにも居心地が悪く感じていた。

戦うことが本分の俺に居心地なんざ要らねえと言われたら返す言葉もねえが、それでも、いつだったか熊谷少将に言われた言葉が忘れられなくて、きつとそれが俺の居心地を悪くしてるんだらうと、漬物をかじり考えた。

《お前達がいなくなれば、誰がこの大湊を守るんだ》

そうだ、はぐれの重巡にくそみそにやられちまった時だ。

艦娘になって初めて大破して、着底するか否か——人型の俺に着底って言葉が合ってるのかどうかは知らねえ——つてとこまで追い詰められて、雷と電の魚雷に救われ這う這うの体で帰還した時だ。工廠で待ってたらしい熊谷少将が顔を真っ赤にして工員に怒鳴り散らしてたのを思い出す。物凄い剣幕ってのはああいうのを指すんだらう。工員どもが腰を抜かしながらクレーンで艀装を吊って、俺達は放り込まれるみたいにして入渠施設行き。入渠施設で湯船に浸かつてても外から聞こえてくる熊谷少将の声に、電が泣き出しちまったん

だっけ。

《絶対直せ》

唯一の武器だ。人類にとっちゃ替えのきくもので、増産できるものであったとしても、大湊警備府にとっちゃ違う。俺達しかいないんだから、怒鳴りたくもなるだろう。

意識も朦朧としてたから、修復中の記憶は曖昧だった。

でもなんとなく、安心できた気がしたんだ。

ギリギリのところで助かった安堵かもしれないが、確かに俺は、安心してたんだ。

でもそれが、悪夢の始まりだった。

《シズメ》

俺に、声が聞こえるようになった。

遠く海の向こう側から俺を誘うような声だ。

《オマエモ、水底へ》

そうして悪夢を、見るようになったんだ。

毎晩のように夢に出るのは、船の頃の記憶なんだろう。

鉄の身体で記憶もなにもあったもんじゃないのに、どうしてか鮮明に、強烈な感情を伴って俺の夢で暴れ回りやがる。

夕霧が沈んじまった時の夢。

マニラに沈んじまった時の夢。

俺に乗っていた奴らの号令、怒声。

熊谷少将の声に似てたんだ。多分、それで思い出したんだ。

そこから、どうしたって深海棲艦を沈めてやりたいって気持ちを抑えられなくて、俺は出撃するたびに雪辱を果たすような奮戦をした……と、思う。

雪辱も一度果たせば十分だが、深海棲艦って奴らは空気を読まない。無限に湧き出では、人を襲う。

世界中のシーレーンは一時全てが断絶されたとまで言われてたんだから、その脅威は語るまでもない。主要となりうるシーレーンを立て直したのは偶然にも新人工員と同じ名の軍人だったと聞く。あの工員の疲れたような目を思い出して、また、誰にともなく鼻で笑って

ごまかして飯を口に詰め込んだ。そして、すぐに飲み下してから言う。

「今日は、もういい」

「え？ まだこんなに残って——」

「いらねえ」

茶碗の半分ほど残った玄米に視線を落として暫く、俺はトレーを持ち上げて厨房と食堂を繋ぐ小窓に持つていこうと立ち上がる。

その時、バタバタと落ち着きのない足音とともに食堂の扉が開かれた。

「遅れてすみません！ まだ食べられますか!？」

声にぎよつと振り向く俺。またこいつかよ……と、顔に出ていたことだろう。

「おお、ゆつくり食っても大丈夫だから慌てんなって。こつち空いてるぞ」

海原に声を掛けたのは、杉村班長だ。

俺が、怪我をさせちまった人だった。

俺達が座っていた空間の、その向こう側から手招きをして海原を呼ぶ。

海原は海原で顔を油で真っ黒にしたまま、手の甲で額の汗を拭い礼を言いつつ、俺達の存在に気づいて、にこーつと笑った。

「ありがとうございます班長。ああ、皆さんも、おはようございます!」

朝っぱらから快活に挨拶をした海原の行動に、俺だけじゃなく、今度は全員がぎよつとしていた。そりゃあそうだ。食堂に来た時も、飯を食うにも、俺達艦娘に声を掛けてくるような奴はいなかったんだから。

「お、はよう……」

「なのです……」

「おはよう、で、いいの……?」

これまた三者三様に混乱の表情を見せる雷達。

俺はもちろん無視だ。

とつとと準備を済ませて、いつでも哨戒に出られるように――

「あれ、木曾さんもう食べないんですか？　体調でも悪いとか？」

「あ、ああ……？　別に関係ねえだろ」

「関係ありますけど……？」

あまりの出来事に周囲は事態の推移を見守って、食堂はしんと静まり返った。

「関係ねえよ。俺が飯をどうしようが、俺の勝手だろ」

「それはそうですけど、食事しなきゃ任務も大変でしょうし……新人とは言え、俺も工員なんで！　艦娘の体調を気にすることも仕事です！」

「そうかよ。見ての通り俺は元気だ、じゃあな」

がたん、とトレーを投げるように置いて背を向けた俺の手首が、掴まれた。

「くら」

「っ……!?　何しやがる！」

ぐい、と引つ張られた勢いで身体を向かい合わせにさせられた俺が怒鳴ると、海原は俺が置いたトレーを指して言った。

「残すなら残すで、ごめんなさい、でしょう。それにトレーを投げるなんてよくありません」

「はあ!?　それこそお前に関係な――」

「関係あります！　作ってくれた人に悪いでしょう！」

まるで自分が作ったみたいなきろくで言いやがるから、ぽかんとしちゃった。

だが海原が続げざまに言った言葉は、ズレているというか。

「泣かれますよ。それはもう、すごい泣かれます」

「な、泣かれるってお前、それ……」

「俺の時は泣かれました！」

どうして泣かれたことを堂々と自信ありげに言うんだよ。

俺の胸中のツツコミなど露知らず。ちらりと横目に見た小窓の向こう側では、炊事兵が今にも逃げ出してしまうそうなくらい気まずそうな顔をしていた。

俺の手首を離してくれる気配も無い海原を思っただ、小窓越しに炊事兵が小声で言う。

「自分らは大丈夫ですから。艦娘さんも食欲がないだけかと……」

「食欲がないなら、それはそれで問題でしょう。それと、木曾さんです、木曾さん」

「え？ ああ、ああ、いやあ、そりやそう、なんですけどもお……」

こいつ……周りが見えてねえのかよ……？

俺の混乱すらも気づかず、海原はあたかも俺を心配しているかのよう、残された食事を見て言った。

「嫌いなものでも入ってたんですか？ なんならそれと俺のやつ交換してもいいですから、せめて食事くらい——」

「うっせえな、いいから離せ」

「体調が悪いわけじゃないんですね？」

「……ああ、悪くねえよ」

「嫌いなものがあるわけでも——」

「嫌いなものなんてねえよ！ 全部一緒だろうが！」

振り払おうと手に力を込めた時、俺の視界に映る海原の手に、思考が奪われた。

生傷だらけだった。呉で工員をやっていた頃に出来た傷だとしても、ただの傷じゃない。硬いものでもぶん殴って裂けたみたいな傷ばかりで、呼吸が止まりそうになった。単純に、ビビっちゃまったんだ。

「お、まえ……この手……」

「え？ ああ、これは大丈夫です」

ただそれだけでさりと流した海原は、俺が置いたトレーを取って手渡してくる。

「じゃあせつかくなんで食べましょう」

「せつかくって……ああ、くそっ！ わかった、食べる、食べるよ！」

「一緒に食べますか？」

「誰がためえなんかと食べるか！ いいから離せ！」

海原はようやく、ぱっと手を離すと、何事も無かったかのように自分のトレーに食事を載せて杉村班長のもとへ行った。

離れた場所からでも、班長や工員が口々に海原へひそひそと言う内容が聞こえた。

「海原、お前朝っぱらからなにやってんだよお……！」

「朝ごはんは大事でしょう」

「お前の胆力すげえな、心臓どうなってんだよ」

「普通ですって、普通」

「壊れてんじゃねえの」

「生きてないでしょそれ」

陰口ではないにしろ、気まずいってもんじゃない。

改めてトレーを持って席に戻って、すっかり冷えた飯を詰め込む俺に、電が困り顔で声を掛けてくる。

「木曾さん、あの、無理はしなくても」

「無理じゃねえ」

ここで残したら、また面倒な絡み方してきやがるかもしれねえだろ。

それに、逃げ出したなんて言われちゃ本当に殴っちまう。

「ちつ、なんなんだよ……」

* * *

食堂での一件から工廠に近づいちや絡まれかねないと、俺は警備府の敷地内をふらふらと歩いていた。

哨戒まで多少の空き時間がある。普段なら艀装の具合を確認しに工廠に顔を出していたんだが、杉村班長を怪我させてからというもの、工廠を訪れるたびにそれが思い出されてイライラしてしまつて顔を出さなくなつた。

任務まで自室にこもるか、適当に雷達の談笑に付き合うのだが、今日はそういう気分でもない。

敷地内から浜辺まで来ると、防波堤を伝うように歩き、その先端で足を投げ出して座り込んだ。

「……はあ」

任務以外で海に来るのはあまり好きじゃない。しかし今は別だ。

いつもなら妙な幻聴に頭痛が起きて数分もすれば吐き気を催してその場を離れたくなるが、今日は不思議と、寄せては返す波の音だけがそこにあつた。

ふと、食堂での顔ぶれを思い返してしまう。

俺や海原が原因でもあつたが、感情をこれでもかと表出させたくだけらないやり取りを思い出すだけで、変な気持ちになつてしまつて、また溜息を吐いた。

なんだよ、飯は大事だのと。

それから、ふいに海の向こうを見る。

このままじゃ、また嫌な事ばかり考えてしまひそうだ。

俺は出来るだけ波の音に集中しようとした。

だが、それもすぐに終わつてしまう。

《……シズメ……オマエモ、深く、冷たい、水底ニ……》

「あ……？」

せつかく今日は聞こえないと思つた矢先の出来事に、俺の中で感情が膨れ上がる。

「うるせえな……」

《アハハ……ハハ……ドウセ、沈ムンダ……ドウセ……》

「黙れつて……」

《鉄屑ノ頃ト、ナニモ、変ワラナイノニ——》

「黙つてろよッ!!」

その場で投げ出した足に力を込めて海に向かつて飛び、ざん、と海面に立つ。

艀装が無くとも海には浮かべる。海の向こうから聞こえる声の通り、鉄の身体を持った軍艦の頃から、俺には海以外に何も無い。強いて言わば、戦いこそが、軍艦の俺が存在するのを許された意義でもある。

「はあっ……はあっ……待つてろ、すぐに沈めてやる……!」

胸が苦しくて、声を聞きたびにどうしようもない悲しみに襲われる。

夢を見るのが怖くて眠れないのに、起きていても思い出される記憶に、身体が言う事を聞いてくれなくなっちまう。

「く、うう……っ」

胸を押さえて海面に膝をついた俺は、暫く、このままじゃだめだと気持ちいを落ち着かせるために荒い息を吐き出し続けた。

すると、背中に声が降ってきた。

「おお、おお、大丈夫かいな」

「誰だ!？」

振り向いた先には、防波堤の上に立つ小さな影。

頭に二つの尾を揺らす艦娘——龍驤だった。

「誰だ!… って、声聞いたら分かるやろ。どないしたんや、いけるか?」

俺を立ち上がらせようとしているのか、その場でしゃがんで手を伸ばす龍驤に、荒い呼吸のままに言葉を返す。

「っは……そっから手が届くわけ、ねえだろ……」

「はは、それもそうやな」

すっと手を引つ込めた龍驤は、あつさりと俺を心配するのをやめて、先ほどの俺と同じように海の向こうを見ながら言った。

「相も変わらず、ここは濃いとこやなあ」

あん? と無意識に聞き返すと、龍驤は語った。

「昔と同じ空気しとるんや、ここ。陸奥湾からは流石に薄れたやろと思っと思ったけど、そんな変わらへんなあ」

龍驤が示す方向は大湊警備府を擁する陸奥湾の先。内陸側。

「こつちからは聞こえへんから、任務まで休むんなら向こうにしとき」
「なん、だよ……てめえには関係ないだろ……」

「出た。関係ないだろ。君い、食堂でも言うてたらしいやんかそれえ」
「っは、海原から聞いたのかよ。新人同士で陰口でも……って、お前、今、聞こえないって……」

龍驤は薄ら笑いを浮かべたまま、おう、と頷く。

「そうや、向こうなら聞こえへんって言ったんや。ここは深海魚どもぶちのめして帰ってくるばっかりで陸に囲まれとるし、声が吹き溜ま

るんやろなあ。せやから、休むんなら官舎に戻るか、人がおるとここにしとき」

「龍驤、お前も声が聞こえるのか……?」

「いやそれ今言うたがな! 聞こえるて声くらい。ウチら艦娘なんやし」

先ほどまでは考えたくも無いと思っていたのに、俺は矢継ぎ早に質問を投げてしまっていた。

「お、俺以外にも声が聞こえるのかよ!? 他の艦娘も、全員か!? なら雷や、電や響も皆——!」

「お、おおう、すごい勢いやな……。聞こえへんつちゆう奴もおるんちやう? 知らんけど。まあ全員つちや全員やろ。聞こえへんつて言い張る奴は深海棲艦から目を背けたい奴らや。君は向き合つとるつちゆうことやな」

向き合い方には問題アリやけど、と締めくくった龍驤が背を向けた時、ひととき大きな声が聞こえた。

《キタ……キタノネエ……艦娘ガ……アノ艦娘ガ……!》

「ぐつ、うう……!?!」

耳を抑えて蹲った俺の視界に、龍驤が勢いよく振り返るのが映る。

「——つはは! なんや深海魚ども、ウチの事覚えてたんかいな!

こりや傑作やな……幻聴の癖して言いよるやんけ」

幻聴の癖して、という盛大な皮肉を口にして、龍驤はサンバイザーを目深に被って視線を落とし、俺を見る。

「ま、今日は君らに譲つたるけど。アカンなあと思つたらすぐに呼びや」

俺は、言葉を返せなかった。

軽々しい口調に、ぞくりと背中に電気が走る。

その代わりとばかりに浮かんだ問いを投げかければ、龍驤はすらすらと答えてみせた。

「この声、一体なんだっていうんだよ……教えてくれよ、なあ……!」
「不思議なこと言うやつちやなあ? 分かってるやろ。深海棲艦の声や。ただ、ここにあるのは正確には声つちゆうより、幻聴に近いな。」

ただの幻聴ってわけでもないし……そやなあ……ウチや君みたいな艦娘が共通で認識しとる意識、やろな」

「意味がわかんねえよ！ 幻聴に近いけど幻聴じゃない？ じゃあやっぱり、俺が狂っちゃったんじゃない——」

「狂うてへんよ。ウチも君も同時に聞こえてるやろ？ そしたらウチまで狂っとることになるやんか。この陸奥湾に広がっとるのも、君がどこぞで聞いたとるのも間違いなく深海棲艦の声や」

「ここで聞こえてるのと、遠洋で聞く声は違う、ってことか……？」

「そうや。ウチらが海に出とる時に聞こえる声はマジもんの深海棲艦の声で、今ここで聞こえて来てるんは……ウチらが背負っとる声や」
「背負って、る……？」

「ウチが背負っとるもんを、君が聞いた。ほんで君が背負っとるもんを、ウチが聞いた。それだけのこっちゃ」

さらに混乱が加速したが、俺は心のどこかで感謝してしまっていた。

おかげで頭が真っ白で、声が入る余地がなくなったからだ。

「お互いが、別々の声を聞いてるってことか……？」

「お、ええでええで、近いやん」

まるで謎かけだ。

「それが、ここで重なって、お互いの声が聞こえるようになって……」

そうして、龍驤が言う。

「分からんふりもええ加減にしとき。ウチも艦娘、君も艦娘、答えはひとつやろ」

悔しさすら感じられないほどの圧倒的な威圧に負け、声を失ってしまった。

俺よりも前に大湊にいたらしい艦娘なんだから、戦歴が違う。

貫禄が違うと言えばそうだし、ただそれだけじゃないとも言える。

「木曾は沈みたがりやで、戦いだけが自分に許されとるもんやと思ってるんやろが……それは違うで。皆、どっかで戦っとる。ウチらは目的がおんなじやから、共鳴してもうた……ただそれだけや。あのクソボケ深海魚どもから大事な人を守りたいだけなんやからな」

龍驤は再び背を向けた。

深海棲艦に向かって、深海魚と言い張る強気な姿勢を止められはしなかった。

こんな背中を、昨夜も見た気がしたんだ。

「なんで、笑ってられんだよ……！」

あいつは去り際に、不敵に笑ってやがった。

沈むか、沈めるか、その二択しかないこの海を見て。

背を向けてひらひらと片手を振って去る龍驤は、声を張って言う。

「笑ってた方が可愛いやろ！ 君もわろとき！」

俺は哨戒に出る時間になるまで、また聞こえなくなった声を探すように、振り返って海を見つめ続けた。

耳に届くのは、静かな波の音ばかりだった。

紹介 【鎮side】

日も高くなった昼前になりやつのことで艤装の洗浄を終えた頃、次の作業は兵装格納庫で行われるのだったかと工廠を見回している、離れた場所で他の工員へ指示をしていた杉村班長が作業服の袖を捲りながら俺を呼んだ。

「海原ー！ こっち来い！」

「はい！ ただいま！」

手持ちブラシから水滴を払うと、俺は小走りで杉村班長のもとへ向かう。

今の今まで艤装洗浄しかしていなかったが、昼からの仕事も単純作業なのだろうか？ などと考えて他の工員をちらりと見ると、彼らは彼らで図面らしき薄青色の紙を手に複雑そうな線を指差してああでもない、こうでもないと呼んでいた。

それが一体どういったものなのかを詳しく覗き見ようとする俺に杉村班長が言った。

「お前にやまだ早い。その仕事は当分先だ」

「気になってしまつて。すみません」

「いいさ、やる気がある分には構わねえよ。つと……そうだ。よし、お前らちよつとこっち来てくれ！」

杉村班長の号令によつて集まった工員は総勢で数十名。大湊警備府の工廠における艦娘と直接かわることの多い軍属達である。一人一人に視線をやつて浅く頭を下げていると、全員が集まった頃合いに杉村班長が俺の背をどんと叩いた。

自然と背筋が伸び、指先まで真っ直ぐになる。

「ちよいと遅くなつた！ 紹介しとくぞ！ 昨日の時点で知つてる奴らもいるだろうが、今日付けで呉鎮守府工廠から大湊警備府に異動になった海原鎮だ。ここじゃ新人だが呉での経験もある、仲良くしてやつてくれ！」

「「はいっ」」

「おい、海原。自己紹介」

「えっ!? あ、はい、えーと、あの」

「なに緊張してんだ、ほら!」

こんなオツサン新人に何を期待してるんですかアツ!?

そうですね普通に自己紹介しろって話ですね、はい。

しかし「皆に紹介したい」なんて予告も無く連れて来られて、いきなり挨拶しろとも言わず空気を察せと言わんばかりの雰囲気。どことなく懐かしい。

工廠に流れる和気藹々とした様子こそ真逆だが、体育会系ですと一目で分かるフレンドリーさは一歩間違えれば無礼、不躰になりうる危険なもの。

そう、まさに——ブラック企業が求めていたであろう環境の完成形であつた。

工廠に足を踏み入れた瞬間に自己紹介しておくべきだったとも考えたが、全員が作業している中に踏み込んで一人一人に挨拶しては邪魔になるだろうと、先に言いつけられた作業をしていた。これもまた仕事優先のブラックな感じが懐かしいやら。

アットホームな職場です! が正しい意味で使われてる現場ってこういう所なんだろうな、と先ほどまで臍装を洗淨していた時に見ていた光景を思い返す。

全員がそれぞれの仕事をこなしながらも互いをサポートしあつて作業していた。

俺の知らない工員が通りすがりに洗淨中の臍装の横に座り込んで、落とすきれいなかった汚れを教えてくれたり、さらには、ただ間違いや失敗を指摘するだけではなく、どうしてその失敗をすると困るかまで単純かつ明快に教えてくれるという完璧っぷり。しかも教えしてくれたのは俺より若い工員だ。若者に教えられることに対して躊躇いや嫌悪など微塵もないが相手はどうか。気まづかったり、逆に慇懃に接してしまう場合もあるだろう。

しかしながら、その時の工員は至って普通の振る舞いで、俺がしっかり聞かねばと洗淨の手を止めて熱心にメモを取ろうと思つたくらいだ。もちろん持つてるわけがないのだが。次から持つてきますね。

(持つてこない)

俺はこの世界における艦娘の知識がない故に柱島泊地の工廠では明石に一任し責任者を請け負うという一段飛ばしな方法をとっているため知らないことも多く、彼の話は非常に勉強になった。

それまでの俺は「艦装つて光に包まれてふんわり現れて、また光に包まれてふんわり消えたりする便利なものじゃないの？」なんて認識である。

パンケーキってふわふわな雲を焼いたら出来るんでしょ？ くらいにトンデモ理論で理解していたのだ。結構マジで。

これは一部正しく、一部が間違いだった。

艦娘の艦装とは、艦娘と妖精の両方と深く結びついているのだという。

洗浄中に声を掛けてくれた若き工員、新井淳あらいしゆんは人づてに聞いたことと学んだことを合わせた自分なりの解釈だと言って教えてくれた。

ちなみに俺より前に艦装洗浄を担当していた人物でもあるらしい。新井くんが洗いますってか。

なんだよ髪の毛引っ張るなよむつまる。

自己紹介を、と言われた手前きちんと名乗らねばと、作業帽の中から『真面目にして』と真つ当すぎる注意をしてくるむつまるを無視して頭を下げる俺。

「本来なら昨日の時点で挨拶をしておくべきだったのですが、遅ればせながら本日より大湊警備府工廠で勤めます、海原鎮と申します。右も左も分からないため皆様には多くのご迷惑をおかけすると思いますが、ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いしやあつす!!」

完璧じゃん。どうよ。

本当に右も左も分からなくて、昨日の夜中にトイレ探して迷ったからな。

任務の主目的である木曾に見つかって怒られるかと思って逃げたもんな。

なんならついでに仕事しようと熊谷少将から聞いた話をちよろつとした時点で失敗したなと判断して逃げたからな。

「海軍元帥と同じ名前ですごくいいから、すぐに覚えましたよ。よろしくお願いしますね、海原さん」

「新井先輩、先程はありがとうございました！ 自分は新人なんで、年齢とか気にせずに気軽に話してください！ オネシヤツス！」

「ははは、すごいアクティブな人だ」

ザ・好青年という風貌の若き工員、新井さんは作業帽をひよいと持ち上げて陽気に笑った。

彼が洗浄中に教えてくれた話は俺の知る艦隊これくしょんのアニメや漫画とは少し違い、現実であればこうだろう、というイメージをも塗り替えるものだった。

光に包まれて現れる……という現象は、妖精という存在なくしては在り得ないのだという。同じく光に包まれて艦装が消えることも。

妖精がない大湊警備府では基本的に艦装は物理的管理がなされており、修理の多くは人の手によるものだろう。

恐らくは先ほど見た小難しい凶面は修理の際に使うものだろう。

あまりに損傷が酷い場合は、艦政本部が設置した特殊な装置——これは妖精が作ったものだ——に入れてボタン一つという、不思議極まる修理方法なのだ。

修理中の中身がどうなっているのかは誰も見られず、ただ修理しているであろう物音が響くだけなのだとか。艦娘を生み出す建造ドックのようなカプセルの中身は一見して空っぽで修理できそうな装置が組み込まれている様子もないというのだから妖精技術はすごいものである。

俺の帽子の中に閉じこもりっきりのむつまるが『わたしたちの力がつまってるんだよ』と教えてくれたが、言葉尻を捕らえれば妖精自体が直しているのではないみたいだ。妖精パワーが詰まっている装置には夢も一緒に詰まっているのだろうか。

話が逸れたが、では、消失している艦装はどうなっているのかと言えば、その時を止めたままなのだとか。光となって消失した状態を保つため、再度出現した際には損傷などが修復されずに装備された状態で顕現するらしい。

呉鎮守府ではどうだったの？ と問われ、苦し紛れに「ずっと置いてありますよ！」と適当に吹かしたところ、この話を教えてくれたのだ。

大湊警備府も同じく、いや、現在の呉鎮守府では妖精が管理してくれてるらしいので厳密には違うのだが、嘘も方便ということで見逃してくれ工員達よ。

大湊警備府では哨戒の前後に艀装を洗浄し、海水を洗い流す。理由は単純で、塩水によって錆びてしまうから。

艦政本部が開発した透明な特殊塗料で塗装されているため一度や二度くらい洗浄作業を忘れてしまっても問題無いらしいが、戦争に直接かわる兵器の清掃である。どれだけ単純作業で、誰であろうが出来る仕事と言っても毎日一度は行われる。

艦政本部が開発したと聞けば大層なものに聞こえるが、大方、それにも妖精が手を加えているのだから任せておけば大丈夫じゃないの？ というまもる的な他力本願は大湊警備府では通用しないようだった。誰かがサボれば誰かが割を食う、当然だね。

寧ろ、サボれば艦娘に影響が出る。艦娘に影響が出れば海軍に影響が出る。海軍に影響が出れば国へ、世界へ影響が出る。洗浄作業の一つでも侮るなかれとは新井さん曰く。正論過ぎて海原元帥に聞かせてやりたかった。

柱島泊地に戻ったら全員の艀装を自分の手で洗浄しようと思いません。すみませんでした。

そして、先の通り工廠では軍属の工員含む海軍が管理しており、大湊警備府の責任者はもちろん熊谷少将になるが、現場管理は杉村班長がしているとのことだった。実はすごい人だったのである。新人まもるが逆らってはならない人だ。

艀装洗浄は工員ならば本当に誰でも出来る作業らしいが、杉村班長が口にした「技術を磨け」という言葉とは別に新人にさせるものもあるとも言っていた。

ただの可愛がりであれば、職場での洗礼のようなものだとなんて出来たものだが、理由はもつと別にあるのがすぐに分かった。

人と艦娘の関係性、である。簡単な作業であればこそ、艦娘と関わらずに済むのならば新人に任せてしまえという風潮があるのだ。

前日に熊谷少将が言った通り、戦闘を終えて大湊警備府に戻ってきた木曾達、いや、ここは木曾本人だろうか。彼女はすぐに入渠や修復作業を任せるわけではなく、戻れという命令を無視して海を睨み続けていた。それをここにいる工員達の殆どが目撃している。

さらには新井さんもその現場に居合わせており、杉村班長が怪我をしたのも見たというのだから、艀装を洗浄する手も止まるというものだ。

人というのは悲しいかな、得てして噂をするものである。

朝っぱらから杉村班長に海原元帥のすべらない話……じゃなかった、海原元帥についてのぶつ飛んだ噂話を聞かされたものだから自分も承知の上で聞いたが、真偽はともかくとして艦娘のそういった話は耳に痛いものだった。

暁を除く第六駆逐隊の三名はとかく木曾を慕っているようで、木曾が工員や他の軍人に対して冷たい態度をとっているのを見て、あまり話しかけたりしないようにしているのだという。

その木曾本人は傍若無人で、任務以外で交流など殆どなく、すれ違おうが、食堂で隣り合って挨拶をしようが全て無視するらしい。

木曾が着任したばかりの頃は挨拶程度の交流はあったが、それも数えられるくらいで、ある日、哨戒に引っかけた深海棲艦との戦闘で大破して帰還した時から口を利かなくなり、任務で工廠から艀装を引っぱり出す時や食事する時以外はめつきり姿も見せないというのだ。

原因は熊谷少将が大激怒したからだとか、何度も再教育施設に送られたからだとか様々なことを言っていたが、根本的な問題は別にある気がしてならなかった。

しかし、そこには共通認識が一つある。

「その調子で艦娘に絡むなよ？　痛い目見るぞ」

杉村班長や新井さんとは別の工員が野次を飛ばしたところで、俺はむっとしそうになった。

社畜の業、営業スマイルを駆使して笑顔を保ったままに問う。

「ええ？ どうしてですか？ 呉鎮守府では仲良くさせてもらってましたけど……」

嘘じゃない。那珂ちゃん達と喋ったことあるもん。

腹の傷跡を撫でられたことだってあるんだぜ！

潮にはビンタされたけどな！

「海原さん、それ本当？ うわあ、すごいなあ」

新井さんが驚いた顔をするものだから、一瞬だけ「やっぱり那珂ちゃん以外は艦隊のアイドルになれないんですか？」と口をつけて出そうになった言葉を呑み込んでさらに訊く。

「すごいって、皆さんあまり会話なさらないようですけど、どうしてです？」

自己紹介をするだけのはずが、いつの間にやら俺の質問タイムになってしまったが、丁度よく昼食の時間だからと各々が作業に使っていた道具を片付けたりしながら話をした。

「だって艦娘だよ？ 杉村班長のを見たからってのもあるけどさあ……愛想も無いし、挨拶だって無視。そりゃ他の鎮守府じゃ酷い扱いだったみたいな話を聞いたこともあるけど、大湊警備府でそういう扱いしてるわけでもないのに、一括りにされてるみたいと感じちゃうじゃない。あの艦娘は最初からここにいるわけだしさ」

「あ、ああ……」

俺の返事とも言えない声に、杉村班長が「まあまあ」と言うも、他の工員からも続々と声が上がった。

「まあなあ……せめて普通に接してくれりゃいいんだけどな。哨戒から戻った時もあったけど、やっぱり人や人じゃねえって」

「大破した時のか？」

「そうそう。海原が見たら驚くつてもんじゃなかったぞきつと！ 完膚なきまでって、まさにあんな感じだよ。全身血だらけで戻って来て、片腕なんて捻じ曲がってたしよお……でも次の日に入渠から戻ったら普通の顔して出てくるんだから怖がるなって方が無理だろ」

「あれって全身の骨がバキバキになっても治るのかな？」

「治るんじゃないか？　というかここに戻る前に沈むだろ」

「それもそうか。艦装の修理も相当掛かったしなあ……出来れば無傷で戻って来てくれって思うよ」

「無傷が一番なのは仕事が減るからだろ」

「それ以外にあるのか？」

共通認識——艦娘は、人ではない。

どれだけの重傷を負えど、入渠すれば元通り。沈みさえしなければ艦娘はまた戦えるようになる。

「そう、なんですねえ……」

ゲームでは軽い「仕方ねえ、出てやるか」という木曾のボイスも、現実では違うということだ。大破して戻った木曾は声すら上げなかったというのだから、彼らの目にも間違いなく瀕死の状態に見えたことだろう。

次の日になってピンピンした姿で出て来たのならば、それもまた彼らの言う通りの反応になってしまうことも理解できる。昨日と今日で姿が違えば恐れも感じるものだ。共通認識として人と違う存在である艦娘に、底知れぬ恐怖と未知の恐怖、同種かつ別物である二つの感情が彼らと木曾達の距離を遠ざけているのだ。

人の姿をしていようと、横柄な態度で接されては相応の扱いを受けるといふもの。これもまた、当たり前だ。

人から兵器へ、段々と彼らの中で認識が変化していった結果が今である。

「呉鎮守府の艦娘はどうだったんです？」

新井さんの声に、無意識に考え込んで俯いていた俺は顔を上げた。

「呉ですか？　えー、そう、ですねえ……木曾さんと同じ軽巡洋艦の、那珂って分かりますか？」

「ああ、分かるよ。あの、お団子の、二つ結びの」

十年も活躍している艦娘の多くは、その程度の認識。

大多数が艦娘を保護せよと言えど、建前であると理解させられる反応は、俺にとって言葉では形容し難い悲しさがあった。

「那珂……さんは、山元大佐と仲が良さそうでした。それに駆逐艦の

曙さんも、毎日楽しそうに過ごしてましたよ」

あぶねえ。癖で呼び捨てにしそうになった。

本来の性格という妙な感覚だが、素はこちらの方なのに、いつのまにやら軍人の鎮が形成されて馴染んでしまっているのか、那珂さん、曙さんと呼ぶ方が違和感を覚えてしまう。人って変わるんだね、むつまる。

むつまるは黙ったままで、作業帽の中にいることは髪の毛がもぞもぞと動くことで分かるのだが、大人しいものだった。

「山元大佐は変わり者って聞くからなあ」

「反対派だったのがいきなり人権派になったんだろ。絶対お上から圧かかったんだって」

「圧って？」

「圧は圧だろ」

「見た目だけはいいいからなあ。世間じゃ艦娘を戦争の道具に使うなって声もある」

「じゃあ深海棲艦はどうすんだって話になるだろうよ」

「せめて待遇はって事か」

「あー」

「白羽の矢が立ったのが山元大佐だったんだろ」

うーん……それについてはまもるの独断行動でした。

ごめんね工員達。ごめんね筋肉達磨。

山元大佐は曙にクソ提督って呼んで貰ってるからいいか。

「そーいや海原元帥が艦娘を保護して回ってるって聞いたことあるぞ」

「え!？」

そうなんですか!? と、名も知らぬ工員に思わず声を上げてしまう俺。

艦娘を保護して回っているなんて……どこの海原なんだ……?」

柱島泊地の執務室に閉じこもって日がな一日書類と格闘して終わってるはずなのに……きつと別の海原に違いない。

食堂に顔を出しただけで皆から「大丈夫? 生きてる?」とか言わ

れてるんだぞ。出張にしたって大体が大本營に顔を出して柱島泊地の艦娘の様子を話しながら井之上元帥と飯食ってるだけだよ。あと忠野が人間の身体の強度について研究してるとか話をしてくれるくらいだ。強度ってなんだよ。

ましてや最近は大淀様に頼りっぱなしなんだからな。頭上がらわ。お前らも大淀様に会ったらひれ伏すんだぞ。じゃないと書類仕事を押し付けられる。

最近は大淀様だと信じていた鳳翔や、隠れ提督ラブ勢かもと思っていた川内やあきつ丸でさえ俺に辛い現実書類を押し付けてくるんだからな！

「呉鎮守府、佐世保鎮守府、並びに舞鶴鎮守府の運営は問題無しと判断できるかと。岩川基地や鹿屋基地につきましても、自分が見た限り関係性も良好でありました。全て報告書に記載してありますが……不備がないか確認なさるまで、待機していてもよろしいです……？」

あきつ丸には報告書の確認が終わるまで監視され……。

「提督、今日の演習報告書！ 見落しのないようにねえ？ 特にここ、ここは評価できると思うなあ！ 絶対に見落とさないようにしてよね！ そう！ へっへーん、やっぱ夜間演習は私が一番なんだなあ、これが！ へへ……。ねえねえ、何か言うことあるよね？」

川内には演習で勝利したのだから気の利いた言葉くらい言えんのかと圧をかけられ……。

「あら提督、食事はいいのですか？ なんてしたら、私がこちらに食事をお持ちしますよ。一緒に食べましょう」

鳳翔には食事は持ってきてやるから仕事を続けろと……ふざけやがって！

俺に無茶させやがって！ いっぱい好き！ 頑張りまあすツ！
んんっ……違うね。そういう事ではないよね。

「なんだ海原、知らないのか？ 同じ名前の癖に」

同じ名前の癖について何だテメエツ!?

ああすみません杉村班長でしたか。と、冷静さを取り戻す俺。

「し……らなかつた、ですね……ははは……」

「テレビでも新聞でも軍帽で顔を隠すような元帥だからなあ。あんなの会つても分かんねえよな」

「そ、そうですね。顔くらい出せばいいのに」

話を合わせる、と本能が告げる。俺のことはいくら言つても構わないで艦娘に対する認識は改めてくださいあー！

「でも元帥直々に艦娘を保護してるって話は初めて聞きました」

軌道修正のために言葉を紡ぐと、手際よく片付けを終えた杉村班長が首にかけたくたびれた手拭いで顔を拭きながら言った。

「井之上元帥も保護してたろ？ 紫っぽい髪の艦娘」

すると、他の工員も片付けを終えてわらわらと俺と杉村班長のもとへ再集合。

「漫画みたいな髪色だよなあ」

「青葉って名前だろ確か」

青葉が保護された過去については井之上元帥本人や忠野から話を聞いたことがあるが、こうして末端にも話が届いているのは驚きである。

それが正しい形ではないなど、今更だろう。

「所属の鎮守府から逃げ出したんだって。それで井之上元帥が捕まえて、戦闘させないのを条件に秘書にしたとか」

「脱柵でも保護で済むのかよ」

「どこの情報だそれ」

笑いながら飛び交う声。俺だけが固まったみたいなお笑い顔だった。

「ま、まあ、噂でしょう？ ね？」

かろうじて俺が言えば、全員が噂であると頷く。

だが噂であろうが話の種がまかれてしまえば、芽吹き、花開くもの。木曾さんとだつてそこまで話したことがあるわけじゃないんですね？ なら、仲良くなれば色々話を聞けるかもしれないですよ。かく大湊警備府にいる仲間なんですからこれを機に話しかけてみるのもいいかもしれませんよ！ 三年も一緒にいるんですから話したことがない方が変ですって！」

そんな提案に、全員が渋い顔をした。明らかに乗り気ではない。俺の見ていない大破帰還の一件や、熊谷少将との一連の出来事、再教育施設へ何度も行っている事実が彼らに尻込みさせているようだった。

三年も一緒にいて殆ど会話の無い同僚がいる……おかしいが、現実でもありうる話だ。しかしそれが命にかかわる場所なら、意味合いは変わる。

「まずは挨拶からでも！ ね！」

明るく言ってみたものの、色よい返事があるわけもなく。

「ま、まあ……止めたりはしないけどよ、あんま、な？ 海原にやる気があるってのは伝わってるから」

「そうですね、やる気があるのは悪いことじゃないですから」

杉村班長と新井さんの反応に、崩れかけた表情を苦笑にとどめた。「んじゃあ、そろそろ飯行くか」

ぱん、と手を叩いた杉村班長に「うーい」とだらけた返事をして工廠を出て行く工員達。俺も続けて出て行こうとしたところで、新井さんに止められる。

「海原さん、待った！ ほら、あれあれ」

「え？」

俺の背後を指差すものだから、振り返れば——放置されたブラシや、特殊塗料を落とさないうための洗剤やバケツ。

「片付けてからです」

「あ……」

「昼食の時間は短くないから大丈夫ですよ、でも早く慣れるようにしてくださいね」

「すみません、話に夢中で……」

「ははは、全員で話してたから仕方がないですけど、あれは海原さんの仕事ですから」

「はいいい……」

若者に窘められるまもる。これでも一応、海軍元帥である。悲しい。

そうして、彼らが出て行くのを眺めて暫く。静かになってしまった工場でブラシに付着した洗剤を洗い落とし、バケツを磨き、海へ直接流れないように注意しながら水気を排水溝へ押しやったりと作業を再開する。

十数分くらいしてからだろうか、ごんごん、と工場の鉄扉を叩く音がしてはっと顔を上げると、そこには龍驤が居た。

「お、おお、龍驤、どうした？」

「切り替え早いなあ、流石司令官や。仕事はどないなん？」

床にいくらか出来た水溜まりをぱちやぱちやと踏みしめながらやってきた龍驤の顔を見てほっとしてしまったのか、大きく溜息を吐き出してしまふ。

「はああ……」

「どないしたんや、あんまよろしくないんか」

「いいや……ああ、まあ、そうだな、よろしくないと言えばよろしくない。ただ、お前の顔を見て心底安心してしまっただけだ」

「お、う……そ、そうなんか、へへ、りゅーちゃんに進捗を聞かせてみい！」

「うむ、そうだな。外に誰かいたか？」

「大丈夫や、きっちりおらんの確認してから来たんやから。ほんで？」

木曾の話は聞けたんかいな」

この龍驤の有能っぷり……もう全部りゅーちゃんだけでいいんじゃないかな。

と言うわけにもいかないので、俺は今まで聞いた話を片手間に掃除を続け話した。

龍驤は俺の話を聞くうちに笑顔が曇り、最後には困惑の表情に。

仕事だからと艦娘である龍驤も聞かされて気分が良いものではないだろう。

俺ですら耳の痛い話ばかりだったのだから、龍驤の心中は如何ばかりか。

「さよか……で、でも、司令官の人当たりの良さで話をぱーっと引き出せてるやん！　すごいことやで！」

「聞きたくない話じゃなければ、さらに良かったのだがな」

「う……そら言いっこ無しやんか……ウチかて、そういうもんやって分かっててもちよつち嫌な気分になるし……」

そういうもん。

そう、そういうもんなのだ。

たった一言で片づけられる、艀装の洗浄作業やその後の掃除よりも簡単な現実である。

艦娘は超常的な力を持つという先入観と、死線をさまよう重傷を負っても一晩で完治する事実。人に暴力を振るえないはずなのに、杉村班長が怪我を負ってしまった事件の衝撃と木曾の振る舞い、真偽が定かではない噂話が固定観念となり、彼らに負の感情を抱かせる結果となった。

それらは中身を変えればどこにでも見られる普遍的な現象と言えるだろう。

この世界であれ、俺が生きていた前の世界であれ、人という存在があれば必ず起こるものだ。

あのまま根も葉もない噂に固められた艦娘の話など聞き続けていたら、俺は理由を問い質していたかもしれない。

見てくれが少女でなくとも同じ反応をしたのか？ もっと可愛らしい、それこそ……毛むくじやらかな猫ならばどうだ。言葉が話せないクジラだったらどうだ。自分達のために戦って傷だらけになったそれを見て同じことを言えるのか？

艦娘を虐げていた奴らと一緒くたな対応をされて嫌なのは当然だろう。なら彼女らにそれを伝え、艦娘側の話を聞いたのか？

頭の中にいくつも浮かぶ疑問符を叩き潰し、残酷ながらも現状を受け止めるしかないと考え直す。

それこそ変えなければならぬ問題の核だ。俺の考えだつて艦娘に寄つたものだと言われたらそれまでなのだから、互いを尊重すべきで、中庸を捉えねばならない。

それに、あの口振りからして本人たちに重大な認識なんて無いだろう。ただの話題の一つだったのかもしれないし、場繋ぎに軽く口にし

ただけに過ぎないのかもしれない。

しかし人の言葉は誰かしらに影響を与えるのだ。

たった一滴であれ波紋が広がる。その一滴に呼応して誰かが一滴を落とせば波紋は複雑になり、波となる。

負の感情という波が人を呑み込むと、どうなることか。

それを言葉にせねば分からない程、人は愚かじやないはずなのに。「井之上元帥や山元についても言及されていたからな。先入観からくる噂なんてものは耳にするものじやないと再認識させられたところだが、木曾の態度のこともある。しかしこれも仕事だ。この大湊警備府にいる者と木曾達の溝を埋めるとまではいかなくとも、橋渡しにくらいならねば私も井之上元帥に報告をあげられん」

「司令官……」

「山元の時のように解決できればいいんだが」

「殴ったらアカンで!？」

「殴らないが!？」

暴力的なこと言わないでくださいよ龍驤さん!

それじゃあまもるがいつも殴って解決してきたみたいじゃないですかアツ!？」

……いやまあ確かに山元についてはぶん殴ってしまった事実があるから否定できないが、清水については……うーんちよつと似てるかもしれないな。これも無し。

あ、ほら舞鶴鎮守府の視察は——!

人は殴らなかつたけど天井をぶん殴りましたね……これも無しでお願いします。

まもるはホワイトな勤務形態を目指す善良な提督なんです。社畜から国畜にダウングレードしてしまっても、皆には笑顔で過ごして欲しいから頑張ってるつもりなんですよ。絶対に前の職場のような部下を突然殴り飛ばしたり、怒鳴りつけたりするようなブラック上司にならないように頑張って——。

「……」

前の職場の上司がやってたこと、全部やってるう……!？」

物に当たるわ、山元を殴り飛ばして、清水の背中もぶっ叩いて、生意気な事言ってた癖に井之上元帥の前ではへこへこ頭下げて土下座までしてたあ……う、うわああ最悪だああッ!?

今の今まで気づかなかったのかまもる！　と言われたら、気づいたのだが。

現実逃避していただけである。しかしこうして根も葉もない噂の飛び交う現場に来て、人と艦娘の仲の悪さを耳にしては直視せざるを得ないではないか。

俺もまた、波紋を広げる人間の一人である、逃れようのない現実。俺は俯いて奥歯を噛みしめた。

「ど、どないしたんよ、なあ？　お腹でも痛いんか？」

くそ、俺はなんて最低な上司なんだ……さっきのも全部龍驤に任せればいいんじゃないですかねって他力本願を発動させそうになるし、酷い奴だ！

俯いてしまったまま、視線の先にいる龍驤を見つめ返していたが、ふとその場で片膝について視線を合わせる。

「し、司令官……？」

「いつもすまないな、龍驤」

膝が水に濡れて汚れようがおかまいなしに、手を伸ばして俺は龍驤の肩をぽんと撫でた。

どんなブラック上司であつてもついて来てくれる艦娘って、やっぱりすげえよ……尊敬を超えて崇拜だよこんなの……。

「な、なんつ、えっ」

「心配ばかりかけて、情けない男だ、私は」

「そ、そんなことないで！　どないしたんよ！」

昔からそうだった。お前達の姿を見るだけで、やらねばならんと、どんな時だつて立ち上がられた。今もそれをひしひしと実感していたのだ。こんな私についてきてくれて、感謝する」

「え、あう……司令官……」

こうなつたらあいつらの艦娘へのイメージを百八十度どころか五百四十度くらい変えてやるぜ！　待つてろよな井之上さん、熊谷少将

！ 見ててくれ龍驤！

「龍驤、木曾を頼むぞ」

ちよつと前日にいらん事言っちゃったんでフォローお願いします！
！ サーセンほんと！

「……な、なあ、司令官」

やる気も十分に立ち上がり、片付けをして食堂へ行くぞと意気込む俺を龍驤のか細い声が止めた。

「どうした龍驤、気になることでもあるか？」

ちよつとお片付け下手くそかもしれないですけど、新人なんでそこは見逃してください。

「艦娘なら、だ、誰でも助けたり、するん……？」

上目遣いに不思議なことを問うてくるものだから、俺はきよとんとしてしまった。

艦娘なら誰でも助けるのか？ そりゃ、まあ、艦娘なら無条件で全てを捧げますけども……。

彼女が聞きたいのは、恐らくそういうことではない。

分かっているとも、龍驤。

「……困っている者がいれば、助けねばならんだろう」

それが軍人だって井之上さんを見て学びました。流石にそこはね。大丈夫ですよ。

しかし龍驤は小さな声のまま「そうやなくてさ」と言った。

「例えば、柱島泊地の子おらと、他の子やったら、どっちを……ああ、もう、なんでもない！ 最低なこと聞こうとしたわ！ ごめん、忘れて！」

え、ええ……何ですか龍驤さん……。

「それは、どちらも助けるが……」

だって海軍元帥なんかも……きつと俺じゃなくても井之上さんや山元大佐、清水中佐だって同じことを言うだろう。忠野中将や橘中将だってそうだ。

国が困っているから、艦娘と共に戦っているのだ。人も助ける。艦娘も助ける。そういう話ですよね？

でもまもるの本音を言うならあ……やっぱり艦娘う、ですかねえ……。
それにそもそも柱島泊地の艦娘は助ける必要ないだろうが！
まもるを助けてくださいよ！

「お前達は助ける助けがない以前の問題だろう？」

「え……司令官、それ……」

龍驤どころか柱島泊地の全員は俺を無能だって認識してるはずだろ。

いじめるなよ俺をよオツ！

「私はお前達が居なければ生きていけないんだ。あまり私から言わせんでくれ、恥ずかしい」

「あ、う、あ……」

龍驤は突然口をパクパクとさせて俺を見上げた。

なんだ龍驤、新手のギャグでも披露するつもりか？

俺のダジャレに対抗しようたってそうはいかな——。

「と、とつとと片付けて飯食べに行けや、もおつ！」

「痛っ!？」

強烈な裏拳、もとい原因不明のツツコミを左わき腹に食らった。

そうだね、原因は全部まもるだね。他力本願も大概にせえつてツツコミですよね分かってますよすみません!!

艦娘パワーでこれ以上のツツコミを食らっては本気で大破しかねないので、俺は手早くバケツの中にブラシやら洗剤を突っ込んで掃除用具入れに押し込むと、工廠を小走りで後にする。

「後でな龍驤。しっかり頼むぞ」

でも仕事は任せちゃう。そうです、私が屑です。

去り際に、龍驤が胸元で拳を握りしめ何かぶつぶつと呟いていた。多分文句だと思う。後でどついたらとかそんなん。ごめんて。

「なんつちゆう恥ずかしいことを平気な顔して……もう、君しか見ら

れへんやないか、アホオつ……！」

紹介② 【鎮side】

俺が食堂に到着する頃には既に食事を終えた人がチラホラと見受けられ、工場班が一塊となつて座る一角以外はまばらなものだった。入つてすぐに食堂を見渡すも、そこに木曾達の姿はなく、だらりとした食事風景だけが広がっていた。

「遅れました」

トレー片手に工場班のもとへ顔を出すと、手近に座っていた工員が顎をしゃくつて下座を示した。

ここで食事がてらに杉村班長から直接木曾の話聞き出したかったのだが、流石に新人であれ礼儀を欠いて空いているからと席を確保するのは憚られるか、と示された通りに下座へ。

そこに着席してようやく食事を始めた俺に、新井さんが話しかけてきた。

「掃除用具入れ、どこにあるか分かった？」

気軽に話しかけてくれと言つた手前か、多少のぎこちなさは残るものの砕けた口調の新井さん。頷いてみせると、よかつた、とこれまた爽やかな笑顔を見せる。

ただ俺の目に映る新井さんの爽やかさは、どこか白々しく見えてしまう。艦娘への態度、対応、認識を知ってしまったからだろうか、彼らの艦娘に対する認識がどうであれ俺にそれをどうこう言う資格も無いために、愛想笑いで誤魔化すしかなかった。

艦娘を嫌っていたわけじゃない。寧ろ他の拠点での艦娘の待遇を耳にして無難に挨拶からと動いてくれた人達だ。故に艦娘の側に立つたつもりで俺があれこれ考えようとも独り善がりに過ぎず、彼らにとつては傍迷惑な新人に成り下がってしまうだけ。

「はい、すぐに分かりました。皆さんと早く仲良くなりたくて話に夢中になっちゃつて、すみません」

一にも二にも「すみません」をねじ込む。下手に出て立場を弁えたフリを続ける、己に染みつく社畜の業よ……。

「仲良くなりたいのは悪い事じゃないけど、先に仕事を覚えなきゃね」

新井さんの言葉に「それもそうですよね」と返し、食欲もないのに米を口に詰め込んだ。

厨房と繋がる小窓から見え隠れする炊事兵をちらりと見てから、美味いですね、なんて言うと、杉村さんは言った。

「どこも同じようなもんだろ」

間宮と伊良湖が作るご飯は二百倍美味しいんですけどオツ!?

もちろん、口には出さない。

「飯を食ってる時に仕事の話をして悪いが、昼からの仕事はちよつと変更させてくれ」

「え？ はい、それは問題ありませんが……兵装の格納庫で何かするんでしたよね」

「哨戒前の点検を手伝わせようと思ってたんだよ。呉じゃやってこなかったか?」

「あー」

呉鎮守府どころか柱島泊地でも兵器の点検なんてやったことありません。方法すら知りません。

撃てるかどうかを確認するのか? と思考を巡らせるも、点検の内容なんて素人が思い浮かぶはずもない。知識にあるのは成人男性の上半身くらいあるサイズの砲弾をえっさほいさと装填するといった映画などで見られるシーンくらいのもので、専門的な点検は艦これ提督といえど門外漢である。

艦娘以外のことは良く知らないんで全部任せますが、点検の手伝いから変更とはまたどうしてなのかと疑問を呈するのは、不自然じゃないだろうと俺は問う。

「呉では別の仕事をしたので……でもどうして変更したんです? 艦装洗浄の手際が悪かったですかね……?」

杉村班長はしばし逡巡し、持っていたお椀と箸を置くと肘をついて俺へ身を乗り出すようにして言った。

「朝っぱらから艦娘に絡むような男だからな。哨戒前の気が立ってる木曾に会わせちゃ何が起こるか分からん上に責任も取れん。だから昼からは艦装修復用のカプセルの清掃と点検に回ってもらおう」

朝食時に電達に挨拶しただけでこの言われようである。

……た、確かに木曾にはちよつと面倒な絡み方をしてしまったかもしれないが、朝食を残すつていうのも作ってくれた人に悪いと思つたから、ああ言つただけであつて……いくら艦娘でも人の作つてくれたものを蔑ろにするみたいにはトレーを投げてはいかんと、当然の事を言つたままでだ。

食事を残すのだから、どんな理由でも「残してごめんなさい」くらい言つてもおかしくないじゃないか。

柱島泊地で一度だけ間宮達の食事を残してしまつたことがあるが、あの時の気まずさと申し訳なさといつたらもう……。

あの時は間宮と伊良湖に泣かれたりして俺もいっぱいいっぱいだったが、ご飯は悪くないわけだからね。

杉村班長が言うように、哨戒に出る前の木曾達に会えば気を付けていつてらつしゃいの一言くらいは声を掛けていたに違いない。しかし気が立っているからと、それで面倒が起ころるのは些か大袈裟ではないだろうか。

「艦装修復用のカプセルですか……了解しました」

逆らつても仕方あるまい。言われた仕事をこなしながらさらなる情報を得て、哨戒から木曾達が戻り次第様子を見てから龍驤を交えて熊谷少将と情報共有するか、と頭の中でうつすらと予定を組み立てる。

木曾の横柄さと、彼女を慕う第六駆逐隊三名の態度は確認済みなのだ。あとは問題とされる木曾の戦闘帰りが本当に危険なものであるのかを見定めるだけ。出来れば出発前に龍驤ともう一度話せばいいのだが……。

と、俺が考えているのを見透かしたが如きタイミングで龍驤が食堂へやつて来た。

「邪魔すんでー」

なんて和やかで軽い口調の龍驤は、俺の姿を見るや否や目を泳がせた。

ここでは新人工員と大本営の艦娘だから、関係があると悟られては

ならない故の行動だろうが……うーん、りゅーちゃんちよつと不自然だよそれは……。

あからさまに俯いて早足になって食事を受け取りに行くものだから、工廠班も不思議そうな顔をして見ている。

龍驤が工廠班から少し離れた空席に腰を下ろしたところで、杉村班長にじとりと睨まれる。

「……海原あ、お前、龍驤にも絡んだんじゃねえだろうな」

呆れた声を否定することも出来たが、ここはあえて肯定しようとは頷いた。

「大湊警備府まで一緒に来ましたからね、いくらか話しましたよ」

「お前なあ……悪いことあ言わねえから、あんまり深入りするなって。見た目は人でも俺らとは根本が違うんだ。いつ、どんな話題が逆鱗に触れるとも分からんのだろ」

「普通の話でしたよ。来る時に食べたおこのみやき弁当が美味しかったとか、そんなのばかりです。デリカシーの無いことはしてませんって。ここに来てからはここまで話してません」

これは本当です。

「でもお前、朝方は木曾の手首掴んでたろ」

「あれは……！」

「ご飯を残したのはまだしも、トレーを投げるように置いたから……と言いつつ浮かぶも、手首を掴んだことに違いはないために言葉を紡げず。」

「そう、なんですけどもお……」

「あれで引つ張り倒されてたら、軽い怪我じゃすまなかつたぞ」

杉村班長がこめかみを指で示して言った。作業帽に潰された髪から見えた傷は決して小さなものでは無かった。人差し指の先から第一関節くらいの長さの傷が、生々しい色を残していた。

彼は転んで出来た傷であると熊谷少将に言っていたらしいのに、どうしてここでは艦娘につけられた傷と言いたげなのだろう。

「木曾さんと他に何かあったんですか？」

ならばその流れに乗るだけだと声を上げれば、杉村班長の他、席に

ついた工員達が唸った。

「やめとけ海原、後で言うから、後で」

「だな、後にしよう」

「今はダメだ」

口々に言った後、工員達の目が一齐に龍驤へ向けられる。それも一瞬の出来事で、龍驤は気づいていない様子で黙々と食事をしていた。

艦娘がいるから話題を避けようとしているだけなのだが、俺にはそれが陰口を叩いているように思えてしまって、本来は柱島泊地の艦娘である龍驤にそんな事は絶対にしたくないとさらに突っ込んでしま

う。

「悪口じゃないですよ？ 悪口なら聞きませんけど」

棘のある言い方をしてしまったが、これで俺への態度を変えるようならばそれまでだと堂々と背筋を伸ばしてみせる。

「ごめんなさい嘘ですちよつとだけビビってます。」

何でもないなら話してみろよ？ おお？ おおん？ という雰囲気
を醸している癖に、手元や口元は正直なもので、緊張を誤魔化すため
に本日のメニューである南瓜のそぼろ煮をちよいちよいとつまんで、
玄米をごっそりと口に入れ込む。

ハムスターみたいに頬を膨らませている俺が間抜けだったからか、
杉村班長はぽかんとしていた。

「別に、そういうわけじゃねえけど……お前変わってんなあ」

「ほうでふか」

「……呑み込めそれ」

「んぐ、む……失礼しました」

はつきり言つて、今のは俺が不躰だった。しかし悪口ならば認めて
しまふわけにはいかない。

身分を隠していても中身は柱島泊地の提督なのだ。そのさらに深
い中身は国畜だが。

「あー……木曾が哨戒終わりに工廠に中々戻らないって話したろ？」

ただの不機嫌なら放っておけば熊谷少将から叱責されるなりで俺達
に害はないんだけどよ……損傷が酷い時には引っ張つても修復さ

せなきや危険なんだ。冗談を抜きにして沈んじまう。俺達だって無為に沈めたいわけじゃねえんだ。でも、熊谷少将が説明したって、俺達が何度説明したって聞きやしねえ。三年だ、三年。海原が来る前から俺達なりに何とか力になってやろうって思ってたんだ。あいつの艦装は、昔の軽巡洋艦の構造と見てくれがかなり変わっちゃいるが、似通ってる部分も多くある。だからもつと丈夫に出来ねえか、とか
な」

「でも、工廠じゃ皆——」

艦娘なんてバケモノだ、くらいの口振りだったじゃないか。

俺が言いたい事を察知した別の工員が、半分ほど中身の残っているご飯茶碗に味噌汁を入れながら言った。

「海原お前、元は造船業じゃねえだろ」

ぎくりとして視線をやると、汁飯をかきこんでから彼は言う。

「見てりや分かるよ。それくらい。洗浄一つとってもなっちゃいねえ。船つてのは頑丈に見えて、かなり繊細なんだ。形はどうあれ艦装を背負えばあいつらは船だと俺は思ってる。船なら傷だらけのまま放置するわけにはいかねえし俺のプライドが許さねえ」

誰かが、俺達だろ、と口にすると、彼は残った漬物を齧って同意した。

「ああ、そうだな。船が喋るなんて昔なら夢にも思わなかったが、もし軍艦つてのが全員ああいふ沈みたがりなら直してやろうって気も起らねえつてもんだ。お口を開けば、うるさい、退け、邪魔だ——海原が言われ続けたらどう思うよ？ それがお前、年頃の娘みたいな風貌で言われちゃたまつたもんじゃねえ。おかしいことか？」

「……」

俺は言葉を失った。

中庸を捉えるのならば、彼らにだって彼らの考えがあるなど当然のことなのに、やはりどうしたって俺は提督で、艦これオタクのまま。艦娘側に立って考えてばかりだったのだと突きつけられる。

「おかしく、ない、です……」

俯いて、もそ、と南瓜を食べた。舌に乗せただけでじゅわりと広が

る旨味でも、すれ違っているつらさを薄れさせることはない。

俺より若い新井さんでさえ同じ考えの様子で、それもまた否定にたる考えなどあらず。

杉村班長が言葉を繋ぐ。

「どんだけ暴れたっついいい。どんだけ無愛想だろうが、口が悪かろうが構わねえ。でも俺達工員の前で沈むのだけは許しちやならねえんだよ。木曾が来る前だつてこの考えが変わったことはなかった。すぐに異動していった奴らにも、沈むなよ、頑張れよつて声を掛けて来た。別れ際の一言だつたが、皆、頑張るつて言ってくれたんだ。だから俺は……せめて木曾が不利にならねえようにしてきたつもりだ。この傷についても転んだつて言い張つてんだ」

湯呑を持ち上げ、杉村班長は離れた位置にいる龍驤をちらりと見た。

「俺達と関わるのが嫌なら関わらねえようにするのが最善だ。人の形してるからつて、そういう扱いを望んでいるかどうかは別だろ？ なら、それはそれでいい。でもな、俺達にや心がある。同じような態度を返したつて文句を言われる筋合いなんてねえつてのが俺達の考えだ。だから海原よお、大湊警備府の工廠班なんだからやり方には従つてもらおうぞ。これが俺達のやり方だ」

「……そうですか」

ただ溝があるわけじゃない。溝ができる理由があつた。これもまた、理屈のある自然なことである。

互いの距離が離れば離れるほどに、心根が変わらずとも表面的な印象はどんどんと変化してしまう。

これらを俺が解決する方法など、無いも同然だつた。

木曾の態度が悪いだけならば、彼女をどうにかすればいい。

工廠班の皆の対応が酷いだけならば、彼らをどうにかすればいい。

ただ、もしもどちらも悪くないのならば、どうすればいい？

ならばせめて、哨戒前に龍驤から話を聞くべきかとトレーを持って立ち上がった。

「お、おい海原、どこ行くんだよ」

「すみません、ちよつと」

戸惑う杉村班長を尻目に龍驤へ歩み寄り、隣の席へどかつと腰を下ろす俺。

すると驚いた龍驤が「おわあ!？」と声を上げたが、俺の表情を見て小声で言った。

「どないしたの。進展あつたん?」

「木曾の話を知りたい」

「なんでここで聞くんや、工廠の人らもおるのに……!」

「彼らには彼らなりの理由があつた。それを知つた今、既に身分を隠す必要も無いと判断したまでだ」

背後ではひそひそと声が聞こえたが、内容までは耳に届かず、俺は続けざまに言った。

「哨戒まで時間があるだろう。彼女から何か聞いたのなら、報告してくれ」

「んなつ、急に、今あ……!? え、ええ……!」

残つた食事を手早く食べて、お茶で流し込む俺の姿を見て龍驤は「……わあつた」と食事をしながら話した。

「艦娘は深海棲艦の声が聞こえる……そんな言わんでも司令官は分かつてるやろ」

俺が龍驤の隣に座つた事で一瞬だけ食堂のざわめきが収まつたが、すぐに喧噪に満たされる。

工廠で感じた他人への興味の無さを最大限に利用する俺だったが、龍驤は会話の内容を聞かれるのを防ぐように俺に身を寄せて小声のまま話を続けた。

「ああ」

「木曾にも聞こえとる。あの娘はそれに苦しんどるんや」

「……ふむ。それで周りが見えていないと?」

「手一杯って感じやろな。深海棲艦を沈めることでそれが収まる、と思つとるんかもしれん。まあ、間違いやないけども、声に引つ張られすぎや。多分、毎晩夢にも見とるやろ」

引つ張られすぎ——艦娘が深海棲艦の側に寄つてしまふのを指し

ているのは、理解出来る。

あらゆる媒体でそういう描写があつたから、という前世の知識もある。だがそれよりも強烈な記憶が俺の脳髓を叩いた。

第二次大侵攻における正規空母サラトガの深海棲艦化だ。

たつたそれだけで、脳内に散らばっていた情報が集約される。

「引つ張られ過ぎとは、サラトガに近い状態か」

咄嗟の言葉に龍驤はぴくりと眉を動かした。

「……今の君は工員やろ。詳しいところは後で——」

「いいや、もう結構だ」

がたん、と立ち上がって食事トレーを厨房へ戻しに行く。

龍驤が「ちよ、ちよお!」と慌てた声をあげるも止まらず、食堂を出て行く。

嫌な予感が急かしていた。俺の中にある何かが、ほんの少しの情報しか手にしていなくとも、常に万が一を考えている小心者の社畜ならぬ国畜の背を押すのだ。なりふり構わずに動けと。

* * *

官舎まで戻って来た俺は、作業着を脱いで、持ってきた状態のまま開けられていない大きな鞆を手繰り寄せて中身を引つ張り出した。いつもの純白とは違う、ごわごわとした手触りの殆ど黒に近い濃紺の軍服を。

『ごわいかおしてる』

作業帽を脱いだところで、どこからか飛び出してきたむつまるの声に顔を上げたが、意識しても表情を変えられずに言う俺。

「出来る事をせねばならん」

『なにをするの?』

「私に出来ることなど、仕事しかあるまい」

むつまるは暫く着替える俺をじっと見つめていたが、

『ごわいかお。だけど——いつものかおだね』

そんな事を言って笑った。

『まゆげ、こーんな！ むーってしわをよせてさ！ ほんとまもるつて、しよーがないなあ！』

「恰好良いだろう？」

『はー？ ぜんぜんですけどー？』

「っはは、そうか」

着替えた俺はぐつと軍帽を目深に被り、官舎を出た。

むつまるは『ごわごわだー！』とはしやぎながら軍服の胸ポケットへ飛び込んだ。

それから一直線に執務室に向かい、扉をノックして熊谷少将が「入れ」と返事したのと同時に入室した。

「入るぞ」

「海原元帥!? 作業着はどうなさったのですか！」

「情報は集まった。もう十分だ」

「集まったって……これから木曾達が哨戒に出るのですよ!? 哨戒前に情報を集めきるなど……!」

隅々まで調べてたら何日掛かるか分からんだろうが！ 早くしないと困っちゃうかも！ と俺の心の秋津洲が叫んでいる。

俺は応接用ソファに腰を下ろして工廠で聞いたことと龍驤から聞いた木曾の様子を話した。

情報なんてこれしかない。でもこれで十分だよね、と。

威厳スイッチ、オンです！

「工廠班と艦娘の間に溝があるのは言うまでもない。私はこれらが互いが極度に話さないために起きたすれ違いが深刻化したものであると見ている。艦娘は戦場で深海棲艦の声を聞くだろうか？」

「え、ええ、はい。そのように聞いております」

熊谷少将は執務机から立ち上がって俺の対面へ座った。

「木曾も同じく深海棲艦の声を聞いているようだ。それに、夢を見ているのだろうか」と龍驤から聞いた」

「夢、ですか」

「ああ。龍驤は昔、軍艦であった頃の夢を見ていた時期があると言っ

ていた。ここは哨戒に際する戦闘が多いと聞く。戦闘による疲弊や深海棲艦の声、夢に見る記憶がもたらす複合的な苦痛によってさらにコミュニケーションが困難な状態にあるのだろう。三年前、木曾がここに着任した頃には挨拶を交わす程度とは言え接点があったらしいが、今や修理以外で顔を合わせることもないとも聞いた。熊谷少将はどう認識している」

「海原元帥が仰る通り、木曾は雷達と以外、殆どと言ってよいほど喋りません。自分も……」

「仕事以外での会話は」

「……数度、しか」

「一朝一夕で変えられることではない問題だ、これは」

「……」

きつかけを作ることは出来るぞ、と言えば、熊谷少将は目の色を変えた。

「自分に出来ることであれば——！」

「しっかり話しかけ、気にかけてやる事だ。互いを知らねば、すれ違いは解消されん」

うーん、なんだかブーメランが脳天にぶつ刺さってる気がしないこともない……が！

コミュニケーションは本当に大事なんだよ信じてくれイケオジツ！

強面だから第六駆逐隊の面々には恐れられる可能性があるが、木曾はきつと違うから！ 多分な！

「話しかける、と言いましても……何を……？」

それは自分で考えてくださいよお!! なんてしたらまもるにも話題ください。

いつも柱島泊地じゃ書類と格闘しっぱなしの俺から提供できる話題なんて呉鎮守府から届けられる雑誌の内容だけだ。あと艦これの話。

非番で出かけてた艦娘が帰って来た時におかえりと言うついでに楽しかった? くらいしか話せてねえんだからよ! まもるはコ

ミュ障なのだ。許せよ。

天気か飯か雑誌の内容か。俺の会話デツキは三枚だけしかないんだぞ。

あとは駆逐艦や海防艦のお絵描きやままごとに付き合ったりするくらいだ。幼稚園かな？

「……食事」

「はい……？」

おう、熊谷少将、強面のまま睨むなこの場で泣くぞ。

「まずは食事を一緒にすればいい。艦娘とて飯を食わねばならんのだから、同じ釜の飯を食う仲間として隣り合って不自然ではあるまい。そこから、知らないことを聞け」

「き、聞けと申されましたも……」

熊谷アツ！ 立場上は俺の部下でも海軍ではお前の方が先輩だろうがアツ！

自信を持ってくださいよお……頼むからあ……！

「着任して三年目と言えど、まだ三年目なんだ。大湊警備府での昔話でも、熊谷少将の個人的な話でも、なんだっていい。お前達は距離があまりに離れているのだ。そっぽを向きあったところで何が分かる？」

「……」

「互いを知らねばならん。違うか？」

それが出来ないなら第六駆逐隊をダシに——ダシってどういう言い方も悪いな——味方につけて、お絵描きでもしながら話せばいいじゃん、と思ってしまう俺。

しかし調査に乗り出して「問題はこれだけです」なんて都合の良い話があるはずもなく。

「深海棲艦の声を聞く艦娘は、常に深海棲艦との平衡を保っている。それは第二次大侵攻で十二分に理解しているところであると考えるが」

「っは、それは、もう」

「もしも木曾が、あの正規空母サラトガのようになってしまったらど

うする」

「い、やああ……海原元帥、自分は……そのお……！」

「沈めるか？」

「自分は、海軍少将でありますから……！」

「仲間であつたことから目を背けて、迷いなく雷撃処分できるのか？」

「っ……」

「深海棲艦は確かに撃滅せねばならん敵だ。人類に牙を剥くのだから、我々も存続のため身を護らねばならん。大湊警備府で、もし木曾がそうなつた場合——別の鎮守府から応援を呼んで雷撃処分させるのが安全かもしれんな」

「そのようなこと……！　いくら海原元帥とて許されません！　訂正していただきたいッ！」

ばしん、と強く机を叩いた熊谷少将に、俺はにやりとした。

「答えは出ているではないか」

「……あ」

「沈めたくないのだろう。私とてそのような事態に陥つて欲しくもない。曲がりなりにも艦娘を部下として大切に考えている。だから、体制変更が掛かる前の大湊警備府で、固有の艦隊を持つていないのをよいことにあの手この手を尽くし艦娘を守ろうとしたのだろうか？　結果がどうあれ、その行動自体に間違いはなかったと私は考える。木曾の命令違反は前体制ならば解体処分よりも酷い仕打ちを受けていた可能性が多いにある。だがそれをさせぬようと、木曾を三年も守つたのだろう」

「自分、は……それでも、彼女を、再教育施設に……」

「木曾はそれをどう思っているのだろうか」

「恨まれていても、おかしくはありません……」

「そう聞いたのか？」

「いえ……」

「話題が一つできたな。それを聞くのも熊谷少将の役目だ」

「海原元帥……ですが、もし、彼女らが私を恨んでいるのならば」
「受け止める」

それ以外に方法無いでしょうが。

熊谷少将は額から鼻筋にかけて走る傷を指でなぞり、呟いた。

「……傷が増えるかもしれませんな」

「傷が増えて困ることがあるか？」

「つはは……考えてみれば、ありません。死なねば安いものです」

この……海軍のブラックつぶりよ……でも艦娘につけられる傷はご褒美みたいなもんだから問題無いね。

決してそういった趣味があるとかではない。違うぞ。

「工廠班や他の者もそうだが、まずは上官たる熊谷少将からその姿勢を見せてやってくれ。哨戒では木曾達と通信するだろう？」

「はい、哨戒中は定期的に報告のために通信を行っております。戦闘も多いのでこちらから指示を出すことも」

「あまり長々と話すべきではないかもしれませんが、一言二言くらい交わしても問題ないだろうし、そこで海の様子でも聞いてみてはどうだ」

「……考えてもみませんでした」

「何をだ？」

「この長い戦争の中で感覚が麻痺していたのかもしれない。大湊警備府に着任する艦娘は木曾達を除けば長くとも一年以内には別の拠点へ異動させておりました。ですから、最低限の会話だけで十分に運営できるものであると、思い込んでいたんです」

「ふむ……」

「抜本的な運営を改善せねばならないのですね」

「そうとも言えるな。今回はそれが、諸君らのコミュニケーションである、というだけだ。哨戒を実施するにあたって私もここで通信を聞かせてもらいたいが、構わんか？」

「つは、問題ありません。しかし海原元帥、工廠班の者へはどのように……」

「今朝、食堂で木曾の腕を掴んでしまった」

「はい!？」

驚きのあまりか、熊谷少将の頭上から軍帽がずり落ちた。

「木曾が食事を残そうとしてな。トレーを投げるように厨房に置いて

いたので、注意したのだ。結局、残すのをやめて食事をしていたが……木曾の腕を掴んだのは多くの者が見ていたはずだ。それについて呼び出しているとしても言っておけば問題ないのではないか？」

言い訳を考えるのは一流だろ？ と熊谷少将と目を合わせれば、困った顔をされる。

「なんだ、おかしい理由か？」

「……はあ」

どうして溜息吐くんだよオツ!? じゃあお前が考えろよ！ まもるだって一生懸命なんだぞ！

「海原元帥……どこまで織り込み済みで行動していらっしやるのですか……」

熊谷少将はぶつぶつと何かを呟きながら立ち上がると、執務机の上に置かれた電話の受話器を持ち上げて操作する。

「……執務室、熊谷だ。杉村班長はいるか？ ああ、杉村班長、私だ。今、新人の工員の……うむ、そうだ、海原が食堂で木曾の腕を掴んだと聞いてな」

受話器越しに声など聞こえてきたりしないが、熊谷少将がちらちらと俺に視線をやりながら会話する光景が、学校の先生から自宅に電話がかかって来て、悪いことをしたわけでもないのに緊張してしまうような微妙な気持ちを感じさせて気まずかった。

熊谷少将の視線から逃れるように、するりと執務室の窓へ目をやる
と――。

「……うわあ」

窓の外にべったりと大量の妖精が張り付いているのが見えた。

気持ち悪ういッ!? 熊谷少将、あれ見て、あれエッ！

俺が熊谷少将と窓を交互に見ていたのに気づいたのか、同じく窓に視線が動く。

「そうか、本当だったか。では少し海原を借りるぞ。それについて事情を……げっほおっ!? ごほっごほっ！ あ、ああ、いや！ す、すまん、ただ咳き込んだただけだ、う、うむ、うむ……では午後からは海原抜きで作業を頼む」

熊谷少将は乱暴に受話器を置くと、風を切る音が聞こえるくらいの勢いで振り返って俺に詰め寄った。

「な、ななっ、なんですかあの妖精の数は?!」

知らないよお……まもるに聞くなよお……。

「私を知るわけなからう。とりあえず、窓を開けてやってはどうだ」

俺に言われた通りに熊谷少将が窓を開けた途端、ぶわりと飛び込んでくる妖精達。

『わあー!』

『おしごとだー!』

『す、すこしこわいけど……きそさんをさがそう!』

『いけいけー!』

『このへやっておかしあるかな?』

おう最後の妖精ちよつと待て。

「艦娘を恐れて隠れていた、のに……どうして……!」

数歩後退ってから、はっとして執務机の引き出しを開けた熊谷少将は、きつとトラウマになったことだろう。

はたから見ている俺でもちよつと怖かった。

引き出しから窓に張り付いていたのと同じくらい大量の妖精が飛び出してきたのだ。

勢いよく尻餅をついた熊谷少将は、あんぐりと口を開けていた。

「うわああっ!? こ、こんっ、こんな数の妖精、見たことも——!」

俺はと言えば、いつもの如く。

「警備府とて妖精くらいどこにでもいるだろう。大方、隠れていたのが出て来たのではないか?」

知らんけど。どうなんでしようむつまるさん。

言葉無く顔を俯かせて胸ポケットを見ると、ひよっこりと顔を出したむつまるが言った。

『くまがやしーしーしーがおはなしするなら、みんなてつだうって!』なるほど。と、俺はむつまるの言葉をそのまま熊谷少将に伝える。

「熊谷少将が話をするのならば、妖精が手伝ってくれるだろう」

「海原元帥、や、やはりこれは、あなたが……!」

『まもるのかわりに、むつまるたちがおしごととしてあげるんだよ』

「……私は何もしていないさ」

『あとでこんぺいとうね』

「……んんっ」

堂々とむつまるにボロクソ言われた気がする。いやそうでもないか。

情けない顔を隠すためにさらに軍帽を目深に被り、むつまるを胸ポケットに押し込んでから腕組みをする。

せめて「哨戒まで待たせてもらうぞ」みたいな恰好をしていなければ、ただ全員から話を聞いて飯を食って、艀装を洗いに来ただけのアホになってしまおうと思ったのだ。

「何もしていない、など、は、ははは……海原元帥、あなたという人は、本当に……！」

「なに。飯を食って、少し仕事を手伝っているだけだ」

言葉にするととなっさけねえなあ本当！と、改めて自分の無能さを噛みしめるのだった。

紹介③

強く打ち付けてしまった腰に手を当て、熊谷少将は部屋を飛び交う無数の妖精に目を奪われた。自然と漏れ出す笑い声、戦場で感じたこととの無かった鼓動の高鳴りに、かつて軍議にて一般人であると自白した男を見た。

そう遠くない過去、まだ一年と経っていないのに彼は——海原鎮という軍人は——今や日本海軍で井之上元帥と肩を並べて戦場を支配せんとしている。

この男を呼んで間違いはなかった、そう確信する光景だった。無数の妖精の中にいるいくらかは熊谷少将の周りを飛び、ひっくり返った格好のままにいるのを心配そうに見つめている。

その他は無軌道かつ不規則な動きのようであり、的確にキャビネットからファイルをいくつも取り出しては堂々と座した海原の前へ積み上げていく。

熊谷少将は目を剥いた。言葉なくして妖精に指示を出しているのが明らかであったからだ。

妖精達が海原の眼前に積み上げていくファイルは木曾達、大湊警備府における唯一の戦力たる水雷団の行動調書、その原本である。

海原はゆつくりとした動作で一つを手に取り、開き、すらすらと読むでは、また別のファイルを開き、読むのを繰り返した。本当にゆつたりとした動きなのに、熊谷少将があっけにとられながらもなんとか執務机に向かう間に既に多くを読み終えて、積み上げられた行動調書とは別けるよう机に置いている。

(速過ぎる……本当に全て読んで——いるの、だろうな……)

一般人など嘘八百だ！ と叫びたくなってしまう。

しかし唾然とした熊谷少将の胸中とは裏腹に、海原は狼狽していた。

(あー！ やめて！ そんなに持ってこないで！ ナニコレ艦これ!? 全部読めってこと!? これ読むの? おい答えるオツ! 誰でもいいからアツ!)

妖精は海原の胸中を見透かして口を揃えて言う。

『あたりまえでしょ！ まじめにして！』

「ふむ……」

一息吐き出し、海原は妖精へ声を掛けた。

「これで全部か？」

すると妖精の動きがぴたりと止まり、海原の前にぎつと整列した。

『さいていでも、これはぜんぶみておいてね！』

『じゅーよーじこーです！』

『こんぺいとうもつてる？』

『りゅーじょーさんがいるからだいじょうぶだけどね！』

『うごかないのはだめだからね』

『きいてんのまもる？ ねえ？』

「んんっ……承知した。しばし待て」

それから静寂。行動調書の頁を捲る音が執務室を満たし、その間妖精達は身じろぎの一つさえせず、じつと海原を見つめていた。

これが、これこそが、この戦争という名の災禍の中心に現れ、日本海軍の闇を踏みつぶし、艦娘と共に大海原で戦う軍人の姿かと、熊谷少将は喉を鳴らす。

非現実を非現実のままに、現実を現実のままに扱い、多くの軍人が狂気の満ちた戦争に理性を以て立ち向かっている。ただ一人、この狂気じみた男を除いて。

——と、熊谷少将が畏敬の念を抱いていることなど露知らず。

海原はいつも通り、相も変わらず、ただ艦娘が好きだから、艦娘を愛しているから、どれだけ理不尽で嫌な仕事であろうがやるしかないで心で泣いていた。

逃げ出したいのに逃げ出せない。妖精達が総出で監視している状態だ。

ましてや柱島泊地に所属する軽巡洋艦木曾と同じ顔、同じ声でも全く違う存在である木曾であれ放っておくという選択肢が頭に浮かびすらない。

仕事が嫌で心の内で文句を垂れているだけの真面目な国畜なのだ。

(はー……読んで分かったら苦労しないってこんなの……行動調書ってこれ、柱島泊地でいつもあげてもらってる報告書とは違うやつっぽいし……もしかして大湊警備府だから行動調書って名前だけで、実は同じ報告書の扱いなのか?)

一枚、二枚と頁を捲り、ふと別のファイルを手にとって、見比べる海原。

(海原元帥は調書と報告書に何を見出だしておられるのだ……?)

見出だしてはいない。海原はただ見比べているだけである。

また別のファイルを取り出して開いた時、ぴたりと動きを止めた海原に、熊谷少将は身構えた。

(見つけたか……消費欄に書かれている点に言及されるのだろうか。言われて気づく龍驤も賢しいものだが、海原元帥には及ばんか……)

しかし海原が考えているのは——絶望であった。

(うわ、これ行動調書じゃない……柱島泊地でも見た正式なひな形の報告書じゃんか……ってことは？ 行動調書は別に必要だった、ってコト……!? あーッ! どうしよう! これまずいよな!? 随分前から、どこか柱島泊地に来てから一枚も書いた記憶ないよこんなのオツ! どどどどうしよう流石に井之上さんに言ったら怒られるじゃ済まないよな……だって一年くらい記録が無かったことになるもんな!?! た、忠野に言っただけで適当に作ってもら——つちやあだめだよなあ! 井之上さんに言い訳を用意するのに忠野を使うって、ダメだよまもるう……社畜でもやっていいことと悪いことくらいの違いしなきゃさあ……! でも、これだけは分かる……マジでヤバイってことか)

海原は大きな勘違いをしているのだが、その勘違いがさらなる勘違いを呼び、勘違いを勘違いと思わずそのままに扱って熊谷少将に問う。

するとどうなるか? もちろん、彼らの間では会話が成立しようとも、現実はずたずたになってしまう。

「熊谷……」

絶望の淵に立つ海原は熊谷少将を低い声で呼び捨てる。

濃紺の軍服もあって、彼の威圧たるや、歴戦の猛者である熊谷少将
が立ち上がる勢いで椅子を倒してしまおうほど。

(じ、自分が見落としていたものがあつたか……ッ!? いいや落ち着
け、今、私がせねばならん事を忘れるな。海原元帥も言っていたでは
ないか。私達軍人と、木曾達は極度のコミュニケーション不足であつ
たと……いくら私が見落としていなかったとて、それは軍人たる私の
視点での話だ。海原元帥には全く違うものが見えていたつておかし
くない……)

「は、はっー!」

敬礼してしまいそうな勢いと音量で返事する熊谷少将の鼓膜が、海
原の重低音に揺れる。

「この、行動調書はなんだ?」

「と、申しますと……!」

「分からんか? そのままの意味で問うているのだ。これは、なんだ
と」

「っ……」

ぱさ、と行動調書を振って示す海原に、熊谷少将は目に見えぬ巨大
な手で全身を押し潰される錯覚を覚えた。答える答えないの前に、呼
吸すらままならない。

「そ、それ、それは……哨戒の、記録で、あります……」

そんな事を聞きたいわけじゃないと分かっている熊谷少将。

俺はそんな事すら出来ていなかったのかとさらに絶望する海原。

(消費欄への言及を恐れるなど、我ながら愚かな……海原元帥からす
れば、行動調書そのものに違和感を抱いてもおかしくなかったのだ。
考えずとも分かっただろうに……!)

熊谷少将は奥歯を噛みしめながら、戦場でさえ震える事の無かった
膝が笑っているのに気づき、力を込め何とか立ち続ける。

まず、一つ。

調書とは本来、文字通り《取り調べたものをまとめたもの》である。
ならば哨戒についての行動調書とは、誰かが取り調べてまとめたも
の、となる。保有艦隊が大湊水雷団と名のある木曾達四名しかない

ため必然として木曾達の報告書と聴取を合わせたものが行動調書となるのだが……ここに、大きな勘違いがあった。

大湊警備府は決して人員不足ではない。

工廠班の他、沿岸警備のための軍人も多く在籍している。

しかし、艦娘はたったの四名であり、彼女らは任務で海に出る以外まともな会話をしていないという事実。とすると——行動調書は、どうやって書かれたのだろうか。

軍規違反でもなければ、取り調べる形式として明確な基準もないために誰もが気づかないでいる歪なもの。海原からすれば、これもまたブラックだと言いつい出しかねない常態化した勤務実態である。それは彼女ら自身が記したものだ。

海原とて、気づかないだけで柱島泊地の艦娘に任せていること。

艦娘全員が自身の行動を謹厳実直に記しているだけ。

故に勘違い。

木曾達からあげられた報告書をもとに熊谷少将が世間話でも交えて聴取し、行動調書を記していれば、龍驤が行動調書を見て溜息を吐くことも無かつただろうし、木曾が自らを消耗品のように扱っているのも、熊谷少将が聴取の時点で咎められたかもしれない。木曾から受け取った哨戒記録とて改竄して大本営に送らずに済んだかもしれない。

いくつものたればを押し退けて現実には絶望を突きつける。

自業自得なのだが、誰一人として悪意を持っていないが故に、切なく悲しいものでもある。

緊張と恐怖で背中を汗で濡らす熊谷少将に、海原はさらに言った。

「これが哨戒の記録だど？」

問い質しているわけではない。海原は「間違いないね？」と再確認しているだけである。

「しゅ、習慣化、しており、じ、じじ自分も、是正せねばならんと、思っているところでありまして……」

この場面における正しいベクトルは、行動調書は本来、木曾達と熊谷少将で書き上げねばならないものだ。海原が叱責し、熊谷少将は習

慣を改め、軍規になくとも慣習に従い馬鹿正直に時間をかけてでも軍務をこなすといったものだ。

しかし実際は、行動調書を柱島泊地で書いた記憶がない海原が内心大慌てで熊谷少将に縋っており、縋られた本人は習慣化して木曾達に書かせていたが故に本人にはどうしようもないくらいに深く大きな溝となったのだろうかと責められている、という勘違いのシンフォニー。

海原は消耗品として木曾が自分の損傷を別の欄に書いているなど、目にしようが関係ないのだ。それはどうしてか？ 社畜であり、今や国畜と自分を認識する彼がそれに違和感を覚えるだろうか？ そう、これが答えである。

この場にはそれを指摘できる人物などおらず、蚊帳の内と外にまたがって存在する妖精だけが真実を知っているが、残念ながら、伝える術がない。

海原に違うよと声を掛けても、きつと勘違いは解消されない。

熊谷少将はどうか？ そもそも声が聞こえない。

勘違いを解消するには、どちらにも声を届けねばならない。だが、届けられない。

で、あるならば、どうなるか――。

当然、勘違いしたままに現実に進んでいく。

「習慣化しているのか……なるほどな。で、是正すべきでもあると」

鸚鵡返しの海原の声。

「う、ぐ……そのお……！」

「もし、これを書いていなかったならばどうなる」

海原の言葉の意味は変わらず。

認識する立場が違う熊谷少将も、変わらずに言葉を返す。

「人の手を煩わせるような事態に陥ることは、ない、です……」

「そうか。で、書いたら問題はないのか？」

遅れても大丈夫？ そんなニュアンスが込められた声。

熊谷少将は生きた心地がしないまま、震える手で軍帽を脱いで机に置いた。

離れた位置にいる海原から発せられる絶望の気配に、不動のままでは堪えられなかったのだ。どうにか呼吸するために水中で藻掻くが如き行動は、往々にして自助にならぬなど節理であるのも分かっているながら。

書いたら問題はないのか？ という言葉がこれほどに鋭利な刃物となることは、過去、未来、どちらにもなかっただろう。

熊谷少将からすれば書かなければ問題にならなかったかもしれないという希望的観測を述べたのも墓穴、海原の言葉を否定するのも墓穴。

前門の虎後門の狼とはよく言ったものだが、海原を前にしてはどちらも死に直結する地獄への大穴。

かつて熊谷少将は深海棲艦そのものを前にして住民を背に無力にも立ち向かった経歴がある。深海棲艦が世に出現して日本沿岸を襲った際に、軽空母級の深海棲艦から放たれた艦載機が落とした爆弾で倒壊した建物から飛来した瓦礫で、顔に大きな傷を負ったのだ。

あれに比べれば恐怖に値するものなどこの世に無しとまで言われる記憶が、今、海原鎮という存在によって塗り替えられた。

海原が強面なわけではない。ただ、彼という存在を構成する一つ一つが奇跡的な組み合わせで想像を絶する威圧感を生み出している。

血色がよくなっても消えぬ目元の隈は、寝不足なだけ。それが軍帽のつばが落とす影によって強調され、白目に縁取られた深海を彷彿とさせる黒い瞳が見る者を射抜く。口数が少なくない彼から発せられる言葉と現実の乖離は、深淵を掌握していると思わせるに十分なものだった。

もちろんただの勘違いである。

一般の社会人であった海原から見た艦娘の対応を除けば、熊谷少将は、井之上元帥や忠野中将、橘中将に並ぶ模範たる軍人である。彼が行動調書が必要と言えば、ああ、そういうルールなんだと疑いなく受け入れられるくらいに海原は彼を信用している。

なにせ自分の正体を知ってなお大湊警備府に呼ぶような、度量もあり、素直に助けを求められる寛容な男だ。海原は言葉無くとも彼を尊

敬し、尊重している。

恐怖し、畏れられていることなど知らぬまま。

「……申し訳ありません」

「どこに謝るところがある」

「っ……」

何度も言うが、決して、海原は熊谷少将を責めているわけではない。本当に不思議に思っているところである。

行動調書は無ければ困るもの。なら遅れたらどうなる？ という質問に対して謝罪をされたら、誰だつてこうなるだろう。

絶望の淵に唯一見た光である立場のある軍人、熊谷少将に助けを求めているだけなのだ。

ともすれば、こうした新たな勘違いが生まれる。

(やっぱ自分でなんとかしなきゃだめかあ。はあ、これクビとかになつたらどうすんだよ……龍驤に助けてもらうか？ 大淀に日付を偽って書かせ……たかないしなあああ！ あーあー！ 八方塞がりつてこういうことなのかなー！ 帰りにえなあー！ ……でもまあ、熊谷少将の手前、嘔吐くわけにはいかんか)

「言われるうちが花、か」

その眩きに、はつとして海原を見る熊谷少将の瞳が熱を帯びる。

「海原、元帥……？」

(あなたは、私も艦娘も見捨てるようなことは、しないと……？ 龍驤ならば所属していた艦娘であるから黙っているだろうと勝手に思い込んでいたが、海原元帥が黙っている道理など、どこにもないはず……私は艦娘のためだと言い張って、保身をしていたに過ぎないというのに……どうして、そう、叱ってくださいるのですか……)

しかし海原の胸中は全く違うことを考えていたりする。(調書、調書なあ……はー……大淀にも助けてもらおう。それで、謝る時は一人で井之上さんのところに行つて……帰りに大本営に報告をあげに戻るし、その時にでも打ち明けるしかないな……ゲロ吐きそうだ……)

軍帽のつばから覗く諦めの瞳が、熊谷少将には、まるで子どもを窘

める大人のように見えた。自分よりも随分と年下であるのに、父親に叱られた遠い昔を思い出すくらいに懐かしく優しい感情が湧き上がる。

海原鎮という男は、どこまでも遠い雲の上の存在だ、と。

因みに、海原は別に怒られるような要因など無かつたりする。

柱島泊地と大湊警備府の大きな違いは、艦娘の所属人数である。

報告書も行動調書も目を通してしている海原だが、後から目を通すのは大淀なのだ。

助けを求める以前に、行動調書は既にきつちりと処理されているのである。

海原が過日の報告書に目を通してしている間にも、大淀は柱島泊地のあちらこちらへ足を運んで仕事をこなしている。工廠に行つては開発状況を聞き、遠征や演習から帰還して修理、入渠する艦娘達から報告書を受け取り、その時点で聴取してまとめている。最終的な仕事量は圧倒的に海原の方が多いが、連合艦隊旗艦たる大淀の仕事量もまた多いのだ。

要するに、海原の杞憂である。

「誰にでも間違いはある。同じ轍を踏むこともあろう……が、重要なのは、仕事を投げ出さないことだ。そうだろうか？」

「は、い……はいっ……！」

「では、そのようにしようではないか。つと……すまんな、個人的な話をして」

「いえ……ありがとうございます……海原元帥……！」

「うん？ なんだいきなり、私に礼など。おかしなやつだ」

熊谷少将からしたら、海原に叱咤激励を受けたものとの認識。

海原からしたら、個人的な話で仕事を放りだしかけているのにお礼を言われてしまった認識。

噛み合わないが、噛み合っている。歯車とは得てして、巨大なもの同士であれば多少のズレが生じようとも問題無く回るものである。

それに気付けるのは、果てしなく遠くから見ている誰かだけで、それが彼らや、彼女らに作用することなどない。なんとも、もどかしい。

「さて、熊谷少将。木曾達が哨戒に出るまで、あとどれくらい時間があ
る?。」

空気が切り替わったと同時に熊谷少将は軍帽を取り上げてしっか
りと被り、壁に掛けられた時計をちらりと見て言った。

「はっ! もう準備のために木曾達は工廠へ足を運んでいるでしょ
う。海原元帥、着替えられた手前ですが、艦娘の様子を見に行かれま
すか?。」

「……問題の本質は既に掴んでいるから隠す必要も無いが、哨戒前に
木曾達を混乱させる必要もあるまい。そのまま任務に出発させても
いいだろう。龍驤と連絡を取っても構わんか?。」

「私の許可など……海原元帥のご随意に」

海原は軍服のポケットから携帯電話を取り出して操作し、暫くして
声を上げる。

「龍驤、今いいか?。」

《おお、司令官! つとと……》

電話に出た龍驤は、すぐさま声を潜めた。

《今、工廠におんねんけど……皆が君の話しとる!》

「ああ、そうか」

《そうか、て……君なあ……! 木曾の腕掴んだから言うて熊谷少将
に呼び出されて説教されてるつちゆう話で持ち切りやけど、これが君
の目論見やったんやな!》

「……うん?。」

工廠で何が起こっているかなど知る由も無い海原は、携帯電話を耳
に当てた格好のまま熊谷少将に顔を向けた。

「熊谷少将、私を呼び出して説教しているという話題で工廠が持ち切
りだそうだ」

(どうしてくれんだアツ! 新人なのにイツ!)

当てつけがましく言うも、完全に自業自得である。

さらに熊谷少将は龍驤と同じような勘違いをしながら、ニッコリを
笑みを浮かべてしまう。

その笑顔が海原の胸に突き刺さり、結果として、現実逃避させるの

だった。

「少しは役に立てたでしようか」

「う、むう……」

（嫌味か！ く、熊谷少将、お、お前、ちよおつと顔に傷があってもイケメンだからって調子に乗りやがって……木曾の哨戒を助けてやるのはうちのりゅーちゃんやぞ！ 頭下げんかいコラアツ！）

と、明後日の方向に八つ当たりする海原。妖精達からは大ブーイングである。

『まじめにしごとしないからだー』

『そうだそうだー』

『ぶーぶー』

『はたらけまもるー！』

（うつせえ！ もう働いてるわ！）

海原は咳払いした後、龍驤へ詳しい状況を尋ねる。

「バレない程度に話してくれたらいいが、どのように言われているんだ」

《ちよ、ちよい待つてや——よつ、と》

がさ、ごそごそ、がさり、と移動している物音が数秒。

それから龍驤が改めて話した。

《杉村つちゆう班長さんが木曾の様子を気にしとるんや。手首痛くないかー言うて！ ほんなら、木曾も、関係ないやろつて言うてる癖に、久しぶりに話したんが気になるみたいでソワソワしとるわ！ ははっ、前進ちやうのこれ！》

「ふむ、話しているのか。ならば後は任せても良さそう、だが……」
もう自分いらないんじゃないじゃん！ と言いたいところをぐつと堪え、海原はしっかりと警戒して物を言う。

こうして用心するところは社会人として見習うべき、そして然るべき行動なのだが、ちぐはぐな勘違いと無駄な行動力が場をかき乱す。

話しているのか、という言葉に浮足立つ熊谷少将に、海原は顔を向けた。

「哨戒から戻るまでが任務だ。それ以降の様子も見ねばならんだろう

？」

そこに本来の仕事がある、と海原は言いたいのだが、一言であろうが言葉を交わしてくれたと見て取れる様子を目にした熊谷少将はどこまでも安心し、強気になった。

ここに我らが海原元帥がいるのだ、何を心配することがある、と。「自分に出来ることならば何だってやります。海原元帥のご命令であれば、私は——！」

「大袈裟な奴だ。私は熊谷少将の手伝いであることを失念するな。大湊警備府の問題は海軍の問題でもあるが、ここの責任者はお前なのだからな」

「はっ、全力で」

「全力で、か——ならば、その全力をしつかり見せてもらおう」

そして、すまん、と一言置いて海原は龍驤へ言った。

「哨戒に際しての戦闘が多いのだったな？」

《お、おん、そやな。対馬暖流に乗って津軽海峡まで流れるはぐれがあるから……》

「……ふむ？」

ぼんやりとしか意味を捉えられない海原の空返事に、龍驤は不安げな声をあげる。

《戦闘記録やと問題無さそうやけども……木曾達、平気よな？》

「そのために龍驤を呼んだのだ。見ているだけでも構わんだろう」

この一言が、引き金となる。

《あー、やつぱさそう、やんなあ……相当な荒治療やで、こんなん……》
「荒治療など。ただの哨戒だろう？」

《それは柱島泊地やったらの話や！ ったく、厳しいんか優しいんか分からん人やわ……熊谷少将、そこにおるんやろ？》

「う、うむ……代わるか？」

《ちよい代わって》

携帯電話を熊谷少将に差し出すと、彼は受け取って怪訝な表情で耳に当てる。

「熊谷だ」

《ちよつくら話は聞いたけど、ウチはあの人の艦娘や、熊谷少将に頭下げて頼まれても、悪いけど蹴らしてもらうで。今回の哨戒に関して、今の大湊水雷団がどんな戦い方するんかだけ見させてもらうわ。ウチが助けるんは——沈むギリギリ手前や》

「……試されているのだろうか、私は」

呟く声は海原に届かず。

《口軽い女やって思われるかもしらんけど……山元大佐や清水中佐の一件は知つとるやろ。あれは全部、司令官の手腕があつての作戦やつた。たかだか哨戒つちゆうてもこれは司令官が手出し無用やと明言しとる……つちゆうこたあ、意味も分かるやろ》

「そうだな……海原元帥を大湊へ呼び出せただけで大金星だったのだ。ここまでお膳立てされて、手伝つてくださいななどは口が裂けても言えん」

小さな声で交わされる会話は勘違いが解消される糸口になりえるものだったが——残念ながら、海原はそれを聞いていなかった。

正確には耳にしようが考えられなかったというべきだろう。

妖精達に群がられ、金平糖を要求されていたのだ。

困った表情をしながらもポケットから紙に包まれた金平糖を取り出し、ひとつひとつ妖精に手渡している様子が熊谷少将の目に映る。

(はは、私の弱気な言葉を聞いてなお、信頼してくださるか)

ただ話を聞いていないだけとは映らない。この優しい歪さ。

「予定通り、警備府からの支援のていで頼む。それと木曾達の様子を逐一報告してもらえるか」

《……ん、分かった。熊谷少将、不安かもしれないけど頑張りや。そこには司令官がおるし、木曾らにはウチがついとる》

「……ああ。泣きつくことがないよう、やってみる」

《司令官の前じゃ、流石の熊谷少将も形無しやなあ》

龍驤の笑い声に、熊谷少将も苦笑した。

「まったく、まるで子ども扱いだよ。では、代わるぞ」

携帯電話を返されてようやく妖精の呪縛、ならぬ金平糖催促の行列から解放された海原。

「話はまとまったか？」

《おう。熊谷少将も頑張るらしいから、あんまいじめたらアカンで》

「い、いじめたりはしないが」

《ほーん……ま、厳しいのは変わらんやろから何も言わんといたるわ。ただし！ 少しでええから手伝ってあげてや！ ほんま少しでもええから！》

「……うむ」

仕事が出来ぬなら手伝いくらいしろ、と言われたと思ひ込む海原。

ここまで厳しさを強いるのだから手伝いくらいしろ、と言った龍驤に、電話から漏れ出る大声を聞いて、助けられてばかりだと溜息を吐く熊谷少将。

もう滅茶苦茶である。

《お、そろそろ時間や。見送ってくるわ》

「分かった。ではまた後で」

《あいよ！ 定時連絡の時になー！》

携帯電話をしまいこんだ海原は、目の前に積まれた書類から一枚、適当に抜き取った。

ただ本当に抜き取り、その書面に書かれたことを口にしただけである。

「……重巡り級、か」

「海原元帥、それはいつの——」

熊谷少将が問えば、海原は書類をぴらぴらと振って言う。

「随分と昔の記録だ。特殊個体ではないが、人型の深海棲艦は非常に強力だろう？ それと戦闘して勝利したのだから、大したものだ」

海原が思い浮かんだことをそのままに伝えれば、熊谷少将は眉根にしわを寄せた。

（過去に出現したはぐれ深海棲艦など、軽巡級か、駆逐級ばかりなのに、どうしてこのタイミングで敢えて重巡級が出現した記録を読み上げた——？）

そうして、事態は進展する。

「艦娘がいれば、大丈夫だ」

海原の重厚感ある声に、熊谷少将は胸騒ぎを覚えた。

哨戒 【艦娘 side】

大湊警備府から出立してしばらく。ニヤニヤとした顔の龍驤と別れてせいせいした気分で航路を進む大湊水雷団の旗艦木曾は、カルガモの親子のように後方へ並ぶ雷達に声を上げた。

ざあざあと海を進む中で声がかき消されてしまわないようにと、地声と通信の両方を使っているため、雷達には二重に聞こえた。

「直掩機は来てるか？」

「もうそろそろ後方から——あつ」

木曾に返事をした雷が器用に後方の空を見上げた時、ほんの一瞬で頭上を飛び抜けていく機影が一同の目に映った。

それは物凄い速度で空を滑るように直進し、あつという間に視界から失せた。

木曾をはじめとする大湊水雷団の一同は規模は小さくとも多くの作戦に従事した艦娘達であり、無論のこと艦載機の飛行する姿など見飽きるほどだったが、ここにきてあの軽空母から発艦された艦載機の速さときたらどうだ。

ふん、と小生意気に鼻を鳴らした木曾が呟く。

《大本営で贄沢してただけじゃねえってか。ありや艦攻か……》

通信は音声を逃さず、呟きは龍驤へ殆ど遅延なく届いてしまい、すかさず声が返って来る。

《ただの先行偵察やがな》

《ちっ……話しかけてもねえのに返事すんじやねえよ》

忌々しそうに舌打ちをした木曾に、龍驤ははるか後方にいるのに通信だけでにやけ面が伝わる声音で言った。

《ええ目えしとるのだけは褒めたるわ》

天山——だったろうか。木曾は既に見えぬ機影を探すように空を見た。

木曾の目が確かなら、龍驤の言う通り大本営のみならずどの拠点であれ空母が所属しているのならば手に入れられる艦載機である。現在、だが。

それよりも、と木曾は艦装にくつついてきた小さな影を睨んで言った。

今度は通信に入らないように。

「いつまで俺を見てんだよ。鬱陶しいな」

それは妖精だった。

木曾がいつか見た妖精は姿を認めるや否やぴゅんと飛んで消えた、先ほどの機影のように幻みたいな存在である。

哨戒準備に工廠へ顔を出したところ、艦装を装着する前には杉村班長を筆頭に工員達に新人工員の海原に掴まれた手首は大丈夫か？

だのと心配されて甚だ面倒を被ったというのに、抜錨するまで妖精がひつついていたことにも気づけなかったなどと今更文句を言えようものか。

木曾は妖精を深く知らない。艦娘であるが、彼女に妖精がついて回っていたことなど世に生まれて半年もなかっただろう。いいや、もしかすると数カ月程度しか妖精を見たことがないかもしれない。

すれ違ってきた艦娘達から——姉妹艦だと自称していた球磨や多摩、北上や大井といった艦娘だ——それらは妖精という名で、自分達と同じ軍艦の魂や心といった存在だと教えられた記憶がある。しかしあるだけで、妖精がいるからどうということではなく、化け物と揶揄される艦娘と変わらぬ未知に分類されるものという認識である。

艦娘の本分とは、敵の撃沈にある。故に、妖精などという奇妙極まる小人風情を気に掛ける感情も無かった。戦いに余念が無いのだ。

木曾のみならず、随行する第六駆逐隊の艦装にも同様に妖精がひつついており、木曾と違うところがあるとすれば、不思議そうにしながらも受け入れているところだろう。電や雷は可愛い可愛いとしきりに言つて掌に乗せてみたりしており、響は頭の上に乗せて落ちないようにね、と声を掛けている。

「遊びじゃねえんだ、集中しろ」

「ごっ……ごめんなさい、なのです……」

叱責されしゅんと俯いた電はすぐに顔を持ち上げて周囲を警戒する。

本日の津軽海峡はちぎった綿雲が少し散らばる晴れた空を抱き、胸のすくような冷たい潮風に満ちていた。普段はもつと重くて、苦しく感じるはずなのにと考えたのは、木曾だけじゃなく、大湊水雷団の全員だった。

天気が良いからそう感じるだけだろうか？ そんな馬鹿なことはない。三年も大湊警備府にいて軍務に従事してきたのだ。晴れた日などいくらでもあった。戦闘のあるなしに関わらず、毎日のように駆け回る海域で初めて感じられる空気に違和感を覚えないほど、愚かでもない。

「今日の海は妙だ……貴様らの仕業とでも言うのか？」

木曾の声に、艤装にしがみついて風に揺れる妖精はぎこちない笑みを浮かべた。

その光景が見えていたわけでもないのに、同じような反応をしたのであろう、雷が、わあ、と声を上げた。

「あなたたちのお陰なのね！ とても気持ちの良い海だわ！」

電や響も感嘆の声を上げたが、木曾の背を見てすぐに押し黙った。

今日、戦闘があつたら、また自分達が足を引っ張ってしまうかもしれないと浮かれていた己を律したのだ。

木曾とともに大湊警備府に着任した暁を除く第六駆逐隊の三名は、木曾と同じく随分と若い。もちろんそれは、建造された年数でもあり、戦闘経験でもある。

大湊水雷団に所属しながらも単冠湾泊地への戦力増派として単独で出向いたり、横須賀鎮守府が仙台沖で発生した深海棲艦の襲撃に対応した時にも協力した過去を持つ木曾だが、雷達は違う。彼女らは大湊警備府しか知らない。

しかしながら、大湊警備府は哨戒に際する戦闘が多いため、他の拠点と比べるべくもなく本分たる戦闘は問題無いと言える。木曾と比較するべきではないだけだ。

木曾が舌打ちするまでもなく、雷は慌てて口を噤んだ。

そろそろか、と木曾が片耳を押さえ通信を開始する。定時報告である。

《ザツ……マルヒト、マルヒト。こちらマルフタ》

木曾の声から少しのノイズと空白。それから熊谷少将の声が聞こえてきた。

《こちらマルヒト。感よし。現在地、送れ》

短い言葉に、木曾はいつも通りに返答した。

《現在地、平館海峡を北上中。たいらだて 仏ヶ浦ほとけがうらに差し掛かる。異常なし》

《現在地、了解》

いつもならばここで、抑揚のない熊谷少将の「おわり」という声で通信を同時に切断していた。

《木曾……その、どうだ、海の様子は》

《……は?》

思いもよらぬ問いに、木曾は頭を真つ白にしてしばし沈黙したが、かろうじて気を持ち直して返答する。ぶつきらぼうに。

《さつき言つたら。異常なしだ。おわ——》

《今日は良い天気だから、気持ちもよからう。雷も、電も、響も……どんな海だ、今日は》

おわり、と言えず。木曾は首だけを動かして後方を見やる。

通信は木曾以外にも聞こえており、雷達も目を丸くしていた。

《熊谷少将、何を言つて——マルヒト、雑多し。感明送れ》かんめい

きつとノイズの確認だ。木曾はぎゅつと口元を引き締めたあとに冷たく言うも、熊谷少将は変わらずに緊張して、それでいて柔らかな声のままだった。

《雑音が酷いか? こちらは明瞭だが、平館で通信状況が悪くなるなど——》

《つ、通信状況が悪いんじゃないやねえよ! 何やってんだ熊谷少将、今は哨戒中だぞ!》

《そ、そうだな。すまない》

《まったく、なんなんだ……一体……》

《お前達と、仕事以外で話していなかったと思って、だな……確かに、哨戒中にする通信ではないな。定時報告、了解した。おわり》

そうしてあっさりと切れた通信に、しばし耳に指をあてた状態のまま

ま呆けていると、響の声がして、木曾は航行と警戒に集中しなおそうと前を向く。

「木曾さん？　大丈夫かい？」

「あ、ああ……大丈夫だ。通信絞れ、広域のままだ」

「ん、了解した」

* * *

平館海峡から津軽海峡に差し掛かったところで、通信上に不快なノイズ音が走り始めた。

今日はどうかやら戦闘を避けられず、一仕事しなければならぬそうだと木曾が身構える。

「工員どもには群がられるし、妖精とかいう変なのもくつついてくるし、戦闘もありかよ……厄日だぜ、まったくよ」

単縦陣で前進していたところ、響と電が自然と離れ、木曾に並んだ。警戒網を広げ、目を増やすために複縦陣となる慣れた動きだが、先ほどの通信が原因か気もそぞろな二人に雷が言う。

「電、響、集中よ！　どこから出るか分からないわ」

頷く二人を横目に前進を続けていると——木曾達の前方の波が、ぎあ、と不自然に盛り上がった。

影よりも黒い丘が出現した、と意識するよりも早くに木曾の声が第六駆逐隊を叩いた。

「駆逐イ級を確認！　二隻だ！　響、右舷へ流れろ！」

「了解っ」

通信ではなく地声。今度は大声だ。それも木曾の悪態つきで。

「龍驤は何やってんだよ！　直掩も出してたじゃねえか、クソッ！」

「木曾さん、二隻じゃない！　もう一隻……口級だ！」

響の報告を受け即座に反応した木曾は、砲雷撃戦を開始する。

左右にイ級が一隻ずつ、その後方に口級が一隻。

大湊水雷団の航行を邪魔するようにして現れた深海棲艦に対して、木曾の砲身が唸りを上げた。

ごうん、といった重低音を纏った砲弾は放物線を描き、敵艦が反応するよりも前に正確にイ級をすり抜け、口級の眼前に落ちる。

挟又が発した水飛沫によって口級の動きが止まると、響は木曾とアイコンタクトをとって頷き、電を連れて右舷へ流れる。

するとイ級の一隻が響達を捕らえんと追いつき、もう片方のイ級は目標を木曾へ。響が離れたところで空へ高くあがっていた水壁が失せ、口級が再び姿を露わにした。

木曾の戦闘におけるセンスはかなりのもので、瞬時に敵を分断し最適な戦力で相手を叩くことができる。そうして三年もの間、大湊警備府を守ってきた。

深海棲艦も愚かではない。ここで敢えて駆逐艦二人だけの響達を追いかけたところで危険に晒されるなど考えるまでもなく、軽巡の砲撃を受けてでも確実に戦力を削るべきだと、不気味に揺れ動いた。狙いは間違いなく、雷である。

「魚雷装填！ 木曾さん、お願いしますっ」

「ああ！ こつちだクソ野郎！」

またも轟音。木曾の十四センチ単装砲から放たれた砲撃は前方のイ級を寸分の狂いも無く捉え、黒煙を噴き上げる。

それからすぐに二発目、三発目と砲撃が加えられ、派手な水飛沫が上がる。

「雷、いけるか！」

「当然よ！」

返事を受けてすぐさま進路を確保するべく左舷へ流れる木曾。一秒、二秒、三秒後には、雷の甲高い声。

「逃げるなら今のうちだよ？ ……逃がさないけどっ」

ぼしゅん、ぼしゅん、と気の抜けるような音がした次には、海へ潜る魚雷。

間抜けな音からは想像もできない速度でそれは海中を突き進んだ。

あっという間にイ級へと到達した魚雷が爆発して海面を焼く。さらに後方から追撃の二発目が迫り、爆破の衝撃で海流に流されたイ級を抜けて口級へ。あつけなく、同じように爆発し、黒煙を噴き上げた。

「次だ！俺に続け！」

「わかったわ！」

木曾の動きに倣い雷も進路を変え、魚雷を再装填して瞬く間に残り一隻となった敵艦へ迫る。

だがそれも、木曾達が追いつく前に――

「無駄だね」

「つてー！」

響と電のコンビネーションにより、撃沈される。

時間にして数秒の差をつけて連携した木曾と雷とは違い、響と電はまるでコピーされたような動きで同時に砲撃していた。

木曾の戦闘センスを筆頭にして、大湊水雷団が津軽海峡、平館海峡を守護できている理由がまざまざと感じられる戦闘である。

三隻を沈めた後も警戒を怠らず、木曾の「警戒しろ！」という声に第六駆逐隊は周囲を睨め回す。たつぷりと数分間が経ち、雷の声で各々が兵装をそつと下ろした。

「敵……感知、無しよ」

響と電が十二・七センチ連装砲に乗った妖精に小さく声を掛ける。

「やったね」

「いつもより、身体が軽い気がするのですっ」

「おや、電もかい？なんだか私も調子が良くて――」

非常に短い戦闘ながらも激しい動きだった。それにもかかわらず妖精は艀装にも兵装にもくつついたまま。不思議に思うも、普段の哨戒での戦闘より随分と楽に終えられた喜びが勝って二人は驚きと笑みが混じった表情をして見つめあった。

たった三隻、されど三隻の深海棲艦。平館海峡と津軽海峡が丁度交わる沖合の戦闘で助かったと溜息を吐いたのは雷である。

「はあ……驚いた。龍驤さんがいるからって警戒が甘かったかしら」

深海棲艦が海上に出現するまで気づかないということは無いにして、珍しいことだった。

三年も哨戒を続けている見慣れた航路が故に油断したわけでもない。雷の言葉通り、無意識のうちに龍驤がいるならと頼ってしまった

のだろうか。

響がそう呟くと、木曾が苛立って通信を始めた。

《こちらマルフタ、旗艦木曾。こちらマルフタ、旗艦木曾。龍驤、応答しろ》

冷静にあらうとする抑揚のない声は、すぐにがなり声となる。

《こちら龍驤。遠くから見てたで！ やるやんか！ あっちゅう間に終わってもうたなあ》

《てめえッ！ 敵艦を発見して報告も無したあどういう事だ！ 言ってみろッ！》

《うわっ、声デカいなあ……一応、直掩機は出しとるやんか。邪魔するなって言うたの君ちやうんか？》

龍驤は決して煽ったわけではなく、前日に哨戒を邪魔するなど言つた木曾の言い分をそのまま返しただけ。だが木曾がそう受け取るはずもなく、がなり声は海に響いた。

《戦闘の邪魔になるなって意味だろ！ 誰が馬鹿みたいに艦載機を飛ばして遊べつつつたんだ、あぁッ!?!》

《あー、わあつたわあつた、ごめんなあ。そしたら次に戦闘が発生したら参加したらええねんな？》

《クソツタ——……!》

直接的な表現で罵倒する前に、木曾は大きく息を吸い込み、吐き出す。

《ふうう……戦闘に参加する必要はねえ。ただし敵艦を発見したらすぐに報告しろ。それくらいなら出来るだろ》

《はいはい、了解や。まあ……敵艦発見するくらいはええか》

《あ？ 感悪し、感悪し、おい、龍驤!》

《聞こえとるで。君らの戦力は今ので十分にわかったから、伝えとくわ》

《伝えとくって、お前何を》

《この先、知内しりうちとお前おまの中間、丁度、津軽海峡の中央地点に敵艦ありや》

《は……お前……?》

ざわ、と胸騒ぎがして、木曾は雷達を呼び寄せた。

「お前ら、こつちに来い。すぐに海峡を進む。哨戒ルートから外れるが——龍驤が敵艦を発見した」

またがなり立ててやりたいのをぐつと堪えて、木曾は極めて冷静にあらうと努めた。ここで龍驤にあれやこれやと文句を言ったところで、相手にされないだろうと思ったのだ。そもそも自分が相手にしたくないのもある。

「かなり先じゃない……どうして今の敵艦には気づかなかったのかしら？」

雷の疑問に答える者はおらず。電も響も首を傾げるばかり。

「木曾さん、敵の規模は？　もしかすると、たつた今のは三隻だからと優先度を決めかねたのかもしれない」

理由付けにもならない庇うような響の言葉に、ああ、とだけ声を返した木曾は再び耳へ指をあてた。

《あとで報告書に書かせてもらうからな。それで、敵の規模は》

龍驤の声は、非常に軽かった。

《駆逐八級が三隻、それから重巡り級——計四隻や》

重巡だと？　木曾の表情が曇る。

勝てない相手ではない。しかしはぐれにしてはおかしい。

過去に戦闘になった重巡級の深海棲艦は、はぐれとして分かりやすい特徴があった。艦隊行動をしていなかったのだ。単独で出現しただけでも北海道と青森を繋ぐ重要な海峡で重巡洋艦の火力は脅威となる。駆逐級がいくらかまとまって沿岸部に被害をもたらすのと同等かそれ以上の破壊力を持つ強力な個体だ。

大湊警備府にきて一年か、二年目に差し掛かろうとした頃だろうか。

水雷団として関わった大きな戦闘となったのも重巡り級だった。

アレは相当な戦力を秘めていた。ただでさえ一撃が重く、戦闘に慣れてきたかどうかという程度の木曾達には荷が重かったと言う他ない相手。

第六駆逐隊の魚雷を受けてなお敵意に満ちていたり級は、最後の最後まで木曾達を睨みつけ沈んでいった。

大湊警備府における戦果としては大きなものである。軽巡洋艦と駆逐艦、戦力差があれど重巡級の深海棲艦を本土への被害無く撃沈せしめたのだ。

しかしながらそれは、相手が単独であったが故の話。

《それ、はぐれか……？ 敵艦隊から流れた、今の駆逐どもとは別……？》

木曾から苛立ちは消え去り、疑念を龍驤へぶつける。

すると今までの軽い声から予想だにしない冷たい声が返ってきた。

《いいや、完全に艦隊行動をとつとる。津軽海峡からそつち側に南下しとるから途中でカチ合うで》

《なっ……！》

龍驤はすらすらと語った。

《もう警備府には報告しとるから安心しい。今までののはぐれと違^{ちが}うて明らかに陸奥湾を目標に入れとるみたいや。駆逐三隻と重巡一隻しかおらんのが引つかかるけども……多分、今まではぐれやと思つて沈め回つとつたいくらかが偵察隊やつた可能性がある。大湊警備府の戦力が水雷団一つしかないと見て、ギリギリ上回る戦力で向かつとるんかもしれん》

自分よりも戦歴のある龍驤の予想は、木曾の背に重くのしかかった。

損傷はない。木曾を含め、先ほど消費された弾薬や燃料は無視できるものだ。

しかし自分と第六駆逐隊の兵装で駆逐級と重巡級を同時に片付けられるのか？

いや、弱気になるな。行ける。やるしかない。

己を鼓舞するように拳を握りしめ、木曾は言った。

「……今の聞いてたな？ このまま北上して陸地から出来るだけ離れた地点で迎撃するぞ。重巡を先に仕留めてやりたい……先制出来れば、戦況をこつちに傾けられる」

木曾の視線は電と雷の装備した魚雷へ向けられる。

それを受けて二人は恐恐とした表情をするも頷き、響もまた、木曾

の意図を汲み取って言う。

「じゃあ、私は木曾さんに合わせて先頭を潰す……で、いいのかな」

「それでいい。重巡から一撃も貰うなよ、痛いじゃ済まねえぞ」

「……わかった」

二度目となる邂逅に戦意を高めようと、自然と浅くなる木曾の呼吸。

《龍驤、流石にこれは支援が必要になる。さつきも見ただろうが、駆逐級なら問題ねえから、上空から重巡級に——》

《悪いけど、それはできひん相談や》

全員が、声を失った。

任務を放棄するつもりか？ いや待て、重巡級に攻撃することに反対しただけだと木曾はすぐに思い直して言葉を紡ぐ。

《どういう作戦がいいんだ。採用の可否はこの際どうでもいいから、言ってみろよ》

《作戦もなにも、ウチは君らの邪魔をせんって言うてるんや。君らだけで戦うんやで》

放棄、するつもりか。とうとう木曾は冷静さを欠いて大声を出した。

《てつめツ……龍驤ッ！ 遊びじゃねえんだ、分かってんだろがっ！！》

《分かつとるよ。でも悪いけど、これはウチが受けた命令なんや》
《命令、だあ……!?》

《そ、命令や。ウチは君らの戦いを見届ける——沈むその手前まで》
木曾の脳裏に、ありとあらゆる嫌な想像が浮かんだ。

大本営から急遽増派された謎の艦娘——急に声を掛けてくるようになった工員達に、まるで自分の様子を窺いに来たかのような新人工員——それから、任務と叱責以外で話すことなど無かった熊谷少将の通信——。

《は、はは……なんだよ、それ……》

かつて実行された——敵戦力の確認と研究に重きを置いた、捨て艦作戦。

《そうかよ……ああ、そうかよ……真面目に戦つてりやあ艦娘としてそれで十分かと思つてたら、てめえら軍人のご機嫌伺いまでしなきゃ及第点じゃねえって言いてえのかよ……》

《……》

龍驤と繋がる通信からは、ホワイトノイズばかりが聞こえてくる。

《なら、俺だけで戦う》

《……木曾、君だけで戦うっちゅう意味か？》

《ああ、そうだよ、そう言ったんだ》

《第六駆逐隊の子おらはどうするつもりや。たかが四隻なんて言うつもりや無いやろな？ 君だけじゃ戦力不足やで》

冷静な声は、さらに木曾の心をかき乱す。

《じゃあ、俺と、こいつらに……沈めつてのかよ……》

《ちやうちやう。君らで、敵艦隊と戦つて勝つてくれつちゅう話やんか》

雷達は涙を目元いっぱい溜めて、木曾を見つめていた。

またあの苛烈な戦鬪をしなきゃならない。その恐怖が彼女らの感覚を過敏にしているのだろうと、頭の隅では冷静に考えられる。だがそれよりも激しい感情の波が木曾を？み込もうとしていた。

《何を考えとるんか知らんけど、君らを沈める気いはさらさらないし、見捨てる気もない。ただウチの役目を口にすることも出来んから、堪忍してや。ほんまに危なくなったら助けたるから、まずは君らで戦うて——》

【アア……】

木曾の目が見開かれる。同じく、通信から聞こえてくる龍驤の声を塗りつぶすような何かに、雷の唇が震え、電の瞳が揺れ、響の喉が鳴つ

た。

【シズメ……シズメ……】

ざり、ざぎ、ざりざり、という不規則なノイズが近づいてくるようだった。

脳髓をかきむしり、頭の中を跳ねるたびに黒くどろついた染みを残すかのような重苦しくも細い声が、徐々に、徐々に木曾を蝕む。

《——木曾、しつかりしい》

《つう、あ……!?!》

《君らはこれから、その声に抗い続けなアカンねや——君らが——ザッ、ザ——救う——……ザッ……——大湊を……ザリリッ、ザ——きつと——》

龍驤の凜とした声に驚いて身体が跳ねるも、そこからは雑音に塗れ、聞き取れなくなった。

「木曾さん……木曾さん……っ!」

肩を揺らされ、はつとして顔を向けると、今にも泣きそうな電の顔が視界を埋め尽くした。

「ま、また、また声が、聞こえるのです……! し、しし、しつかり、しなきや、電達も、頑張るから、だから……っ!」

「ぐ、う……くそ……」

木曾は胸を押さえて頭の中を過る夢か記憶か分からないいくつもの場面を振り払う。

木曾のみならず、雷も、電も、響でさえも同じように苦しみに呻いた。

「今度は、守る、守ってみせるんだ……電も、雷も……」

響の声も、電と雷の声も、互いを向いているのに、届いておらず。

「沈まない……絶対に沈まないのです……っ」

「置いて行かないわ、誰も……」

同じ艦娘とて見てくれは自分よりも随分と幼い三人を見て、本当に痛んでいるわけではないのに痛いと言ってくる胸元をどんと強く叩き、木曾は声を上げた。

「っ……俺を見ろ！ 三人とも！」

三人に対して、ただ強気に言うのだ。

「俺が何とかする、だから……だから、心配すんな！」

声は、笑う。

【連レテ……行ツテ、アゲル……深く、深く、溶ケテイキソウナ、水底マデ……アハ、ハハハ……アハハハハ……！】

「つぐ、ううう……!？」

「木曾さんっ！」

雷が胸元に添えられたままの木曾の手に自分の手を重ねて叫ぶと、木曾は苦しそうな顔のまま無理矢理に笑みを作ってみせた。

「この声……うぜえ、よなあ……ははっ……」

龍驤が言っていたことを、彼女らに伝えてやろう。木曾がそう考えた時、四人に影が落ちた。

否、影が落ちたように錯覚しただけで、それは――

「なんだってんだ!?! 空が、暗く……!?!」

はぐれの重巡と戦った時と同じ、結界によって外界と断絶された瞬間なのだった。

哨戒②

「まあ……ちやちい艦隊だけなわけあれへんわな」

津軽海峡中央部へ向かい始め通信の届かなくなった木曾を追うべく平館海峡を北上する龍驤は、帰還する艦載機から見えた敵影に嘆息して不可思議な力で浮力を得て展開された巨大な巻物型の飛行甲板を眼前に伸ばした。

艦載機から見えたのは駆逐級ばかりで、軽空母たる龍驤を相手にするには距離があるためこちらから一方的に攻撃が可能な状態だ。帰還させながらも攻撃を加え、数隻をあつという間に撃沈に至らしめるも——表情を硬くしたまま。

《こちら龍驤。津軽海峡西部方面から敵艦隊ありや。向こうさんは十隻はくだらんで……どないするんや、熊谷少将》

大湊警備府の通信室へと声を届ける龍驤の耳を穿つような熊谷少将の声は、さしもの龍驤とて聊か厳し過ぎると言わざるを得ない状況なのだど理解させた。

《海原元帥！ 大湊水雷団とは言えこちらの戦力は龍驤を合わせて五隻なのですよ!? 龍驤の支援無しでは拮抗はおろか一方的に攻撃されるだけです！ 仮に重巡洋艦をおさえられたとしても津軽海峡西部方面の駆逐艦隊への対応まではできません!》

《龍驤に支援させても構わんが——いいのだな?》
《っ……》

《私の責任のもとで指示を出すことになるが、問題はないのだな?》

その声に海上に佇んだまま遠い目をする龍驤は、言葉にしたいのを堪え続ける。

(きつと気づいて欲しいんや……熊谷少将も木曾も……捉え方を変えるべきやと……)

相手は重巡り級に駆逐八級が三隻。大湊水雷団と頭数は同じでも戦力の差は言わずもがな。

このままでは勝てないだろう。手も足も出ずに沈められる可能性の方が高い。

（司令官は熊谷少将を仲間やって認めてくれと。せやから熊谷少将に自分の力で気づいて欲しいんや……！ 無理に合わせるんやなく、お互いに納得しあった上で戦わんとアカン……どれだけ無謀やと思えても、どれだけアホらしく思えても、果てしなく信じ合う事で力が発揮されるんやと司令官は知つとるから、でも、言葉では信じてもらわれへんとも考えとるんやろうな……ほんま……ウチら艦娘も、軍人も……）

「面倒なこつちや……はあ」

通信では捉えられない龍驤の呟きは、平館海峡から吹きつける重たい潮風がどこかへ攫っていった。

過去が如何なものであれ、龍驤は大湊警備府を知る艦娘である。ならば海原に叱責されるであろうことを押し退けてでも熊谷少将に答えの欠片を提示してあげたいと考えた。これでは甘ちゃんと言われてしまうだろうか、などと自嘲した矢先のこと。

《現在、津軽海峡中央部に重巡り級と駆逐八級が三隻だったな？ それで、津軽海峡西部方面からも敵艦隊が迫っていると。仮に木曾達の支援に龍驤が出張つたとすれば、重巡り級と駆逐艦数隻程度ならば問題ないと見ているが——では、西部方面の敵艦隊はどのように処理すればいい？》

《それはっ……》

「どないしてそんな厳しくすんねや……もおおっ……」

歯がゆさから通信を一瞬だけ切断して音声が入り込まないようにしてからばしやんと海面を踏みしめる龍驤。

海原は知っているはずだ。初期型と呼ばれ十年もの間戦い続けてこられた龍驤ならば、遠方から一方的に攻撃できる今——西部方面の敵艦を一掃できることなど。

柱島泊地で哨戒任務に就く傍ら、第二次大侵攻を退けた武勲艦揃いの相手に演習し続けている彼女の練度は過去の比ではない。実戦経験に至っては第二次大侵攻を経験した艦娘達と同等以上のものがある。それでも、熊谷少将は海原と龍驤をたかだか一人と一隻と見ているからこそ迷いが生じているのだ。

たった一隻で何が出来る。たった一人で何が成せる、と。それこそが、大きな間違いであると気づけないでいる。

龍驤は通信を復帰させて、堪えきれず言った。

《ウチが西部方面を対応したらええねんな?》

これで気づいてくれと祈る龍驤を見透かしたかのように、答えから引き離すような海原の言葉がノイズを押し退けた。

《龍驤一人で十隻は下らんという駆逐艦を相手にするのか? そんな事させられるわけがないだろう。危険過ぎる。熊谷少将にも考えがあるはずだ》

《なっ、司令官……なんつで……!》

《哨戒に際する戦闘が多いのだから、海域のことにしたって熊谷少将の方が良く知っているはずだろう。ここは熊谷少将の考えに従うべきだと思うが》

絶対に戻ったら一言くらいは言っておくと心に決めて、龍驤は口を噤んだ。

《あー、もう、わかった。何も言わんとくわ! これでええねやろ! 指示があるまで待機しとくから、すぐに言うてよ!》

* * *

大湊警備府の通信室では、熊谷少将が通信用ヘッドセットを装着した状態で海図を睨みつけており、その傍らでパイプ椅子に腰を下ろした海原が同じように海図を見下ろす。

海図を指でなぞりながら、これでは、ああ違う、ならばこうすれば、いやしかし、とぶつぶつ言う熊谷少将。

一方、海原は額に浮かぶ汗を軍帽で隠して、腕組みをする。

「明らかに戦力が足りません……」

「……そうか」

海原は熊谷少将を見守っている——わけではない。

(重巡り級に駆逐八級……数は同じでも軽巡と重巡という差がある。けど……木曾も雷達も練度はなかなか高いし対応は出来そうなも

んだ……。まだ遠方にいるなら龍驤が足止め出来る可能性もないわけじゃない。いやああ、でもなあ……。これは艦これじゃないんだ！ 練度と運でどうにか出来る問題じゃないのは重々分かっているだろ俺え……。せめて援軍を……。でも哨戒で援軍って呼ぶべきなのか!? いや呼べばいいよ！ 寧ろ呼んでいい！ 当たりがきつからうが木曾も雷達も傷ついて欲しくない！ こ、ここから近い拠点は単冠湾泊地か横須賀鎮守府——距離はどちらもあるが、それまで耐え抜けば——って、こういう希望的観測がダメなんだろうなあ……。どどどうすればいいんだよこんなのおおお!?)

海軍元帥として決して口に出して欲しくない胸中である。

そも、兵法も戦術も素人である海原に求めるものなど本来ならばあるはずもなく、熊谷少将とて明らかに不利な状況に追い込まれて素人意見に左右されるべき状態ではない。

しかし海原の考える応援要請は悪い案では無いだろう。

だが距離がある。到着までに木曾達が耐えられる保証など存在しない。

それでも動かねばならない。海原は言う。

「応援要請はしないのか」

「応援要請を、すべきでしょう……。しかし艦娘がこちらに派遣されるまでの時間は、短くありません」

(ですよねえ！)

胸中で泣きながら頷く海原。実際には無表情で「で、あろうな」というだけ。

「ならば、どうすべきだ」

「つく、う……」

脳が沸騰するほどに思考する熊谷少将。今の今まで、はぐれ深海棲艦がまとまって攻撃してきたことなど一度も無かった。油断していたのもある。しかしながら、それよりも納得できないのは海域の状態からして、攻め込むには適していないはず、という現実。北海道と青森を繋ぐ広いとは言えない津軽海峡。それに合流する平館海峡は、深海棲艦側からすれば攻める事が出来れば多大な被害をもたらすこと

が出来る場所。攻める事ができれば、の話だ。

舞鶴鎮守府が日本海側への侵入を防ぎ、そこから討ち漏らしたはぐれ深海棲艦を大湊警備府が撃破する。二重構造が活き、日本海側を含め大湊の平穩は保たれてきた。もちろん本当の平穩とは程遠いが、少なくとも大きな被害は出していない。

敵の立場になって考えようとも、リマン海流の利用は自殺行為だと候補にもならず。単冠湾泊地と幌筵泊地、二つの泊地に必ず察知され叩かれる。

しかし事実として駆逐艦隊が津軽海峡西部に流れ込んでいる。

熊谷少将は撃破するにはどうすべきか考え続けた。

「……何故、駆逐艦隊が西部にいるのだろうか。過去にこういう例があつたか？」

海原の問いに、通信から声が漏れる。海原も熊谷少将と同じく通信用ヘッドセットを装着していたため、龍驤の声が良く聞こえた。

《あ……なんやの司令官！　ウチには言わさんかつた癖に！》

《うお……!?　どうした龍驤、急に……何かあつたか》

《しつらじらしいわほんつま……司令官が言うたんやからウチかて言うてもええやんか！》

何を？　と海原が考えたのは言うまでもない。

《……意見具申ならば、遠慮せず言うといい》

《意見具申でなんやねん、もう、司令官のいじわる！》

海原は一方的に怒られていると勘違いしている。自分だって一生懸命に考えているんですよと胸中でいくら叫んだところで、役に立っているかと問われたら無能でしたとしか言えないのだから仕方がない。

だが彼の一言一句が、妙に、運命をくすぐるのだ。

そうして、人を、艦娘を動かす。否が応でも動いてしまう。

(な、なんで怒られてんだ俺……緊急事態なのに無能だから怒られているのか!?　まあ否定できないんだけど……ごめんりゅーちゃん……)

《熊谷少将、この艦隊が流れ着いたはぐれやないのは分かるやろ》

語りかけてくる龍驤に返事をして海図から顔をあげた熊谷少将は、海原を見た。

海原は気まずくて視線から逃れようと俯くばかり。

《ああ、確かにおかしい。北方から流れ込んだのならば単冠湾泊地から報告があるはずだ。しかしそのような報告もないし、向こうとて防衛線の設置が進んでいるのだから抜けて出たならそれこそ問題だ》
《それや》

《それ、とは……では駆逐艦隊を擁する重巡り級は——》

《——独立艦隊や。隠れとつたもんが今になつて顔を出した、ちゅう方が分かりやすいか？ 遊撃隊か、偵察艦隊かは分からんで。それでも明らかに大湊警備府の戦力をギリギリ超える範囲で、戦闘でも優位に立てる編成としたら何かしら理由があるはずやとは思えんやろか》
《理由……？》

《生意気言うたけど……ウチが言えるんはここまでや。これ以上は間違つてたら恥ずかしいしな。もう答え合わせしたりいや司令官》

急にバトンをパスされた海原は内容も状況も把握しているが深く理解できないまま、重苦しい声を上げる。

《そう、だな……》

彼は決して不真面目なわけじゃない。ただ、必死なのだ。

（遊撃隊に偵察艦隊つて、大湊警備府を襲つて被害を出そうつてか！ 駆逐艦と重巡洋艦だけで？ あり得ないだろそれこそ……もつと戦艦とか引つ張つて来るだろうよ……第二次大侵攻の時なんかガチで被害を出そうとして姫級やら鬼級がわんさか随伴艦を連れて来たつてのに……！ そもそも被害を出すなら適当な海岸を攻めるんじゃダメなのか？ くっそ、社畜の俺に分かるわけがねえ！）

《答えではないが》

海原はそう言つて、長考する。

（か、会社に例えてで考えよう。そうだ、俺に分かりやすい考え方でいいから、皆の力になるんだ……名ばかり元帥だつて、何か考えられるはずだろ……！ 大湊警備府という営業敵を目標とするなら、田舎町じゃ利益も上げられん——被害を利益だの商品だのと例えるのは不

謹慎だが、営業敵は大湊警備府……だけじゃない。海軍そのものだ。同業他社を陥れるなら同じことをするより差別化した方が客の食いつきがいい。この場合は、他社を困らせ利益を生み出す、または掠め取る……大湊警備府を落として利益が上がるか？　この仕事ならぬ任務は防衛であつて、利益の維持だ。とすれば、相手は利益維持を困難にさせようとしていると見てもいいだろう。しかしそうするとこのタイミングで出て来た理由が分からん……最も効率的に商売敵を困らせるには、同業他社を一つに絞らずに足止めすることにある。うん？　足止め……？)

勘違いの長考。だが、それこそが一番、答えに近い。

《この指示については、私が責任を取る》

《え？　あ、は、はあ、何を――》

熊谷少将が海原を見つめるも、彼の目は虚空をさ迷うだけで、目が合うことはなかった。

《龍驤。津軽海峡西部方面から流れ込む駆逐艦隊を相手に出来るか？》

通信から聞こえる龍驤の声は、ようやく明るいものに。

同じくして、それはとても力強く、熊谷少将を励ますようだった。

《もちろんや。ほんで、司令官。ウチはどうしたらええんや？　足止めするんか、数を減らすんか……》

《殲滅だ》

「はいっ!？」

熊谷少将は装着したヘッドセットをむしり取って驚愕した。

いくら空母とは言え、今の長考を含め着実に近づいている駆逐艦隊を相手に一隻で挑めなど自殺行為ではないか！　そう、表情に出ている。

海原はどうしようもなく無能であり、ただの社畜から抜け出せない男だが、誰にも劣らない点が二つある。

(足止め……そう、か……ああ、足止めだ！　北方からほど近い場所で艦隊行動をとる敵艦が出現したとなれば、こっちに戦力を割くしかないとか考えてるんじゃないか!?　防衛ラインの設置を邪魔しようと

してるんじゃない!? いや分からんけども! 多分な! メイビーよ、メイビー! 間違つても深海棲艦は倒さなきゃいかんし、とりあえず龍驤に任せて後で確認しよう、うん、これだ。先延ばしにしたわけじゃないぞこれは。うんうん、決して先延ばしにしたわけじゃない……自分なりに一生懸命考えたから……だから睨むな妖精達よ……ごめんて、社畜には難しいこと分かって……)

一つは、過程を無視し、答えに到達すること。
そしてもう一つは、艦娘を信頼していることだ。それはもう、無責任なまでに。

その無責任に近い信頼は艦娘という存在の奥深くにある心を滾らせ、燃えあがらせる。

熊谷少将は妖精と見つめ合う海原に困惑の表情を向けた。

《殲滅な、はいはい……はーもう、ほんまに全部熊谷少将にやらせるんかと思つてヒヤヒヤしたわ》

《ま、待て龍驤! それに海原元帥も! いくら駆逐艦隊だとは言え、相手は十隻以上いるのだろう! まだ距離はあるのか!》

《んー、もう少しでウチの目えで見られる範囲に来るやろな》

《そ、んな……困まれては、どうにもならんぞ……! 木曾とも通信が出来ないんだ……結界にいる、木曾、とも……》

《ま、心配しなやそこは。司令官も考えとるやろから》

《龍驤、頼むぞ》

《あいよ。ほな、後でな》

困惑する熊谷少将を尻目に、海原は立ち上がって携帯電話を取り出してどこかへ電話をかけ始めた。

数コール、無機質な音が通信室にかすかに漂う。

「——海原です。今、お時間よろしいですか?」

熊谷少将に電話の内容は聞こえなかったが、海原の口調からして相手は井之上元帥だろうと分かった。

『おお、海原。丁度良かった。少し前にアメリカ海軍の上級将校が横須賀を発つたところだ。取り急ぎ、いくつか協力できる落としどころを話し合つたんじゃないかな——はは、思い出しても痛快だ。お前のお陰

でソフィア・クルーズ女史が一時的だが大湊警備府に駐在することが決定したぞ。深海棲艦がほどよく出現し、研究も捗るであろう場所はそこしかないからな。海域の水質調査がしたいとのこと、いくつかのポイントを通って大湊に向かうそうじゃ。入れ替わりになるやもしれんが、もし顔を合わせたら挨拶くらいしてやれ。ずっとお前を気にしておったからな。……それと、ソフィア女史に加え、過去の研究を続けたいと正規空母サラトガも共に駐在が決定した。くっくっく、祖国に戻ればジョシユア少将とベイリー大佐は大目玉を食らうだろうが、貴重な戦力を割いてでも維持せねばならん関係だと理解させられた。文句が出ようとも手は出てこんだろう。大手柄だ。礼を言うぞ』

「……そうですか。それは丁度良かった。では急で申し訳ないのですが、津軽海峡中央部を通っていたたく事は可能でしょうか？」

『津軽海峡を……？ それは、こちらから指示出来るだろうが……どうした、問題でもあったか』

「はい、そうです。現在、大湊警備府の哨戒に引っかけた敵艦隊がありました、大湊水雷団では戦力が不足しているとのこと……」

『戦力の不足——ふむ。軽巡と駆逐では足らんか。熊谷少将の指揮は保守的ではあるが、分析、分担ともに悪くはないと見ておる。具体的な戦力差を聞かせてくれるか』

「相手は重巡り級が一隻、それから駆逐八級三隻の四隻編成です。津軽海峡西部方面からは駆逐級の艦隊が十隻以上こちらに向かっていて、と報告を受けております」

『なに……？ 大湊で艦隊別に行動をとるような輩が出現するとなると……そうか、海原、万一を考えておるのだな』

「万一などとは決して……ですが、戦力は必要です」

『そうさなあ……大規模戦闘にはなるまいが、お前の考えは分からないでもない。すぐにでもこちらから指示を出そう』

「どれくらいで到着しそうですか？」

『急がせればさして時間はかからんじやろう。艦隊のみを向かわせればな』

「充分です。では、お願いします」

『うむ。熊谷少将は……問題無いか』

「……ええ、問題ありません」

『ほう？』

意味深長な声音を最後に、井之上はまた喉に引っかかるような笑い声をあげた。

『海原が責任を取るから問題はない、とても言いたげじゃな。まあ、構わんが……くく、ではな』

「っは」

そうして、携帯電話をしまった海原は、再びパイプ椅子に腰を下ろして海図を見下ろし腕を組んだ。

通信からは、龍驤が戦う声が聞こえ続ける。

(だ、ダメだ、パンクする)

海原は、絶望する。

(やっぱり俺は無能なんだ……ただの社畜が、ゲームで艦娘を知っているからって理由で元帥に据えられていることが異常なんだ。深海棲艦のことだって深く理解してるわけじゃない。今、出来ることは……せめて木曾達を助けて、大湊警備府をかき回すような真似しか出来なかつたことを熊谷少将に素直に謝ること、だけ……きつと井之上元帥は期待して大湊警備府に俺を送り込んだんだろうな。それでも失敗するかもしれないと構えていたから、俺が全てを言う前に、すんなりと……ああ、もう、くっそ……泣きそうだ……)

海原も同じくヘッドセットを外して、軍帽のつば越しに熊谷少将を見た。

視線がかち合うと、互いの表情が硬くなる。

「熊谷少将。一挙に仕事をこなそうとする私の愚かさを許してほしい」

「はい……っ。」

「こうする他ない。今は」

「あ、あの、海原元帥、意味が——」

ぎ、ぎぎぎ、とヘッドセットから音がして熊谷少将は慌てて応答し

ようと装着し、声を上げかけた。

しかしそれは、言葉として構築されず。

《—This is USS BB61 Iowa. This is USS BB61 Iowa come in》

《え、あ……はあつ!?》

《ザッツ—Repeat—ザッツ—This is USS BB61 Iowa come in》

《こっ……これは……》

この十年で熊谷少将が何度か聞いたことのある声だった。それもたった数度。

海原は、この声を良く知っていた。彼は額をおさえて事情を話す。

熊谷少将には海原が思考を続けながら話しているように見えた。

実際には現実逃避をしたいが逃げられない状況が故に、申し訳なきに号泣しそうになっているだけである。

なんと滑稽なことか。

なんと、幸運なことか。

まるで仕組まれていたかのような流れに、熊谷少将の目がゆっくりと見開かれる。

「……日本海軍はアメリカ海軍と協力し、艦娘、並びに深海棲艦の研究を再開していたが——この度、派遣される研究員がこの大湊警備府の近隣に駐在することが決定されたようだ。詳しくは追って説明されるだろう。大本営で会談を終えたアメリカ海軍は横須賀鎮守府を発ち、いくつかのポイントを経由しこちらに向かうとのことだ」

海原は海図に示される横須賀鎮守府に人差し指を立て、すると沿岸部をなぞった。

なぞっている指の動きから、熊谷少将はすぐにアメリカ海軍が安全を期して単冠湾泊地や幌筈泊地を経由し、ベーリング海沿いに帰還する予定だったのだろうと予測する。

横須賀鎮守府を発ったのはたった今か、それとも少し前か。

重要なのはそんなことではなく、どうして今ここで海原が井之上元帥に確認の電話をしたか、である。

これではまるで、深海棲艦の出現を予測していたかのようなではないか。

熊谷少将はアメリカ海軍、アイオワと名乗った相手に拙い英語で通信に答えた。

《——こちら大湊警備府通信室！　こちら大湊警備府通信室！》

《あら、すぐに繋がったわね。ツガルカイキョー？　で、戦闘支援が必要だと聞いたわ。私達は今、仙台沖を北上中だけれど、耐えられそうなの？》

《なんと……！　げ、現在は軽巡洋艦木曾を旗艦とした、駆逐艦を擁する大湊水雷団が重巡り級、それから駆逐八級と交戦中です！　け、結界が——》

はつとして熊谷少将は海原を見ると、彼は重々しく頷いた。

（不甲斐ない……なんたる、不甲斐なさだ……！　ここに来て海原元帥の手を煩わせ、木曾達への指示すら出せず……如何に結界が理由とて、これも重要な情報、アメリカ海軍に情報をやすやすと聞かせるべきでは——）

「……助けを求めることも、時には必要なのだ。私とお前達は違う」

海原の言葉に、熊谷少将は脱力した。

（……何を、勘違いしていたのだから。そう、そうだ。私は決して海原元帥のように全てを見通せるわけではないんだ。木曾の心の内すらも分からなかった。だからこうした時、窮地に陥る。海原元帥と龍驤はどうだ？　ただ殲滅しろと言うだけで、具体的な言葉を交わさずに、まして龍驤さえそれを受け入れて戦っている。自分の力量を理解した上で、倒せるのならばウダウダと御託を並べず、ただ戦うと。っは、はは、実に、軍人らしいじゃないか。そして、龍驤もバケモノと呼ばれて然るべき無謀さ……あれを、艦娘と呼ぶのだな）

ぐつと喉にせりあがる熱を呑み込み、熊谷は頷き返した。

（ごめんな熊谷少将。ただの社畜のままするには荷が重すぎたんだ……考えてみれば分かることだったよ。柱島泊地の艦娘が立ち直れたのは、彼女らが強靱な精神の持ち主ばかりだったからで、きつかけはもしかすると俺だったのかもしれないが、それにしたって、俺が居なく

ともどこかで立ち直っていたかもしれない。それだけ優秀な艦娘の集まりだったのだ。何を勘違いして、艦娘のことなら任せると胸を張っていたんだか……熊谷少将と木曾のコミュニケーションが足りない？　そもそも俺に脳みそが足りてねえ！　だから、俺と熊谷少将は違うんだよ……まもるは素直に井之上さんに助けを求めました……お見通しだったみたいで、アメリカ海軍が助けに来てくれるそうです……会談で忙しかったろうに、昨日の今日で迷惑をかけちゃってほんととサーセン……龍驤が帰って来たら心臓ぶち抜くようなツツコミを食らうだろうから、許してくれ)

どこまでも噛み合わないのに、どこまでも回る歯車。

熊谷少将は意を決してヘッドセットのマイクを指で引き寄せて言った。

《——現在、大湊水雷団は津軽海峡中央部にて深海棲艦が発した結界の中で交戦中です》

《結界……オーケイ、大急ぎで向かうわ。艦載機を飛ばしても結界があるのなら支援は難しいかもしれない。でも周囲に敵がいれば攻撃は可能よ。許可はいただけるかしら》

《も、もちろんです！》

《サラ！　すぐに発艦を！　日本のフリートガールが危険よ！》

《わかったわ。航空隊——発艦はじめ！》

《サラ、とは……まさか……！》

知将と呼んで差し支えない熊谷少将の脳に叩き込まれる情報の数々。眩暈を起こしそうになりながら海原を見れば、彼は彼で、妖精が持つてきたペンを片手に海図になにかを書き込んでおり——。「正規空母サラトガ——楠木少将とともに日本で深海棲艦の研究をしていた艦娘だ」

横須賀鎮守府から伸ばされる赤い線は、沿岸部を通り海流に逆らう形で津軽海峡へと進入する。

続けて、大湊警備府から平館海峡を北上する細い線。

全てが繋がった途端、ばちん、と熊谷少将の眼前が光ったような錯覚。

(私や木曾の行動など、最初から問題視していなかった……行動調査も、戦闘詳報も、木曾の行動を確認するためのものじゃ、なかった……海原元帥が違和感を覚えたのは木曾の行動が横暴によるものじゃなかったと見抜いていたからか……！　ならば木曾の横暴さは別のものを由来と、す、る……ま、待て……そうだ、彼女らは、声が聞こえると言っていた……木曾が工廠に戻らず海を睨んでいたのも、戦いに固執していたのも、深海棲艦の声によるものだとしたら……!?!　偶然なわけがない！　楠木少将と共に深海棲艦を研究していた艦娘がたまたま帰還するのに通りがかかるか？　あり得るわけがないじゃないか……！　ここまでヒントがあつて、やつと真意の片鱗が見えたなど、なんつたる……!)

《すぐに向かうわ！　なんとか耐えて——お願いよ》

《了解、こちらでも受け入れ準備を整える》

ぷつんと通信を切った後に、全てが繋がった後だというのに、それらがさらに線を伸ばしていく感覚に熊谷少将の手が震えた。

そうして海原に問う。

「手出しをしない、はずじゃないですか」

「手出し？　なんのことだ」

ここにきてとぼけるなど、と熊谷少将は皮肉めいた笑みを浮かべて、海原の対面にあるパイプ椅子に腰を下ろした。

海図を挟んで対峙し、さらに言う。

「仰っていたではありませんか。木曾の戦いを見ると。それはきつと自分の指揮を見るためでもあったのでしょうか。ですがどうしてここに来て、アメリカ海軍を介入させてまで助けてくださるのですか」

熊谷少将の問いはもつともながら、もちろん、噛み合うわけがない。

助けてくださる、ではなく、海原にとってただ助けを求めた、であるのだから。

「助けたわけではない。ただ、指揮が未熟なだけだ。いいや、指揮にもなっておらんな」

それはもちろん海原本人のことである。

「っ……」

熊谷少将はこんな時に叱らせてしまったと自責の念にかられるが、海原は自分が未熟だと吐露して謝罪しているつもりで言葉を紡ぐ。「本当にすまない。だがこれが、私なのだ。こうすることではしか仕事が出来ん……完璧などこの世に存在しないと口にすれば言い訳になるが、私に出来ることなど限られたものだ。艦娘を信じ、任せ……責を負う。単純な言葉にすれば、丸投げだと思われるかもしれないだろう。その通り、丸投げだ。そうとしか見えん」

「そのような、ことは……」

熊谷少将の胸中は、嘆きに満ちる。

(丸投げにしか見えないなどと、そんなこと思ってもない……大湊警備府を預かる自分も、柱島泊地を預かる海原元帥も、成すべきことは一つだ。海で戦う艦娘を支え、軍人としてともに生きて……国を守ることなんだ。複雑に考え過ぎていただけなのだ、私は……海原元帥が単純だと仰った意味も、ようやく理解できた……海を往く彼女らを信じて任せるしかない。ただ、それだけだ。海原元帥は、今、私の前で見せてくださったじゃないか。信じて任せるしかないなら、自分がどうすべきか。はは、言葉にすれば確かに簡単だ。だが、それは——地獄を地獄とも思わず、出入りするが如き修羅の行い——それら以外の一切を、自分で成さねばならないという意味だ)

「これが、海原元帥閣下のやり方……なのですか」

海原はたっぷり数秒、熊谷少将を見つめ、息を吐き出す。

「……そうだ」

(これこそが俺の……まもるの情けなさの最たる例、他力本願です……)

熊谷少将は今にも溢れてしまいそうな目元の熱を抑えるよう、ぎゅつと目を閉じてから、再び開く。

「信じ、最善を尽くす——単純で……私が知る何よりも素晴らしい教義です。海原元帥」

そうして立ち上がった熊谷少将の周囲に、妖精が群がった。

少しだけたじろぐも、どうしたと声を掛ければ、妖精達は机の上に置かれた海図を壁にぺたりと貼り付けて、先に星マークのついた細い

棒で海原の描いた線を示した。

『あ、もうまもるは何もしなくていいよ。座ってて』

『がんばったねー、よしよーし』

『あとはきそさんたちと、りゅーじょーさんになんとかしてもらおうねー』

『くまがやしよーしよーのまじめさをみならってね』

妖精の声は海原にしか届かず。

熊谷少将は力強く妖精に答えた。一方的に。

『予測進路、だな……分かった。全力で取り組む。手伝ってくれ、妖精よ』

『まもるのらくがきはきにしないでください！』

『おわたたらおかしたべましょー』

『ここから、ここにいくとあんぜんかも！』

『だいじょーぶです、わるいことはぜんぶまもるがなんとかします』

『責任は全て私が負う』

『海原元帥……ありがとうございます』

『まもるはねー、かんむすのことならねー、がんばれるんだけどねー』

『ちよつとむずかしいことになるとすぐになきそうになるからあ』

『わたしたちがついてあげないといけないんです』

『できることは、おふろでおゆをかぶることと、どげぎです』

『でもいっぱいすきだよ』

『だからいまはすわってて』

『じゃませずにくまがやしよーしよーにまかせようね』

熊谷少将には妖精が口々に応援してくれているように見えた。

もちろん、海原には真意が聞こえていた。

「……あとは任せるぞ、熊谷少将」

「はっ!!」

木曾 【艦娘 side】

「くうっ……前よりも酷いじゃねえか……こんなの、見た事ねえっ……！」

「木曾さん！ 前方、駆逐級が一隻来ます！」

津軽海峡へ向けて航路を進む大湊水雷団は、たったの四隻。

大荒れの海の中をひたすらに前進し、波にもまれながら雷の声で反射的に十四センチ単装砲を構えて、砲撃する。

がおん、という音が波間に消えた数秒後にはさらに大きな爆発音がして、赤黒い空間の向こうに煙が噴き上がった。

「み、見えてたのかい……？」

水飛沫を防ぐように片腕で顔を隠したままに砲撃したというのに、木曾の放った砲弾は駆逐級深海棲艦を撃沈に至らしめた。その光景をすぐ後方から見ていた響の愕然とした声が茫々たる赤色の海でノイズ交じりに届いた。

ただ声を上げるだけでは会話すらままならない。通信で繋がることで意思の疎通がギリギリ可能な状態である。しかしながら外部への通信はおろか、救難信号すら出せず。

先刻、龍驤の通信を最後に意思ある声と会話を構築できるのは、今しがた海を進む大湊水雷団のみである。

「勘だ、勘！ 何が四隻だ……四隻以上いるじゃねえかよッ」

クソツタレが。声を荒げようと、悪態を投げつけた相手には届かず。

ただ目標を定められたならばそれを撃滅せねばならないと、木曾は言う。

「俺達はどうあがいたって海軍の軍艦なんだ。文句の一つくらい言ってやりてえが、これが大湊警備府の意向なら従うしかねえ。だから、絶対に沈めるぞ」

言うや否や、さらに海中からずるりと姿を現す深海棲艦に電が叫んだ。

「左舷に敵艦見ゆ、なのですっ！ 先ほどと同じ駆逐級……ハ級なの

です！」

「龍驤が見つけた本隊から出張つてきやがつ——」

「二、三……違う！ 木曾さん、こいつらは本隊から先遣してきた奴らじゃない！ 五隻もいる！」

「ああつ!?!」

舌打ちする暇すら無く、木曾が右腕を振って響に合図する。

単縦陣から複縦陣となり、互いの位置をずらして射線を格子状になるようにすると、木曾が号令をかけた。

「合わせろつ！ 砲撃用意！」

「なのですつ」

「了解よ！」

「わかった！」

五隻のうち一隻でも確実に、いや三隻は落とすべきか。

無駄に砲雷撃戦を繰り返せば本隊に到達する前に倒れてしまいかねない。せめて本隊に到達するまでは燃料も弾薬も温存し撃滅できずとも撃退までは持つていかねばならないと木曾は呻いた。

「正面に捉えろ！ 艦隊旋回！」

津軽海峡から太平洋側へと流れる潮は速く、意識せねばあつという間に距離がひらいてしまう。ならば相手側がこちらに近づいてくるように位置取りすれば——戦闘経験による即席の戦略は確実に相手を撃沈させるには最適解であつたと言えよう。

「撃てエッ！」

弾薬を温存すべきだとしても、本隊から先遣してきた敵ではないなら戦力を少しでも減らすべきである。何故ならば本隊として龍驤が通信で報告してきたのはたったの四隻。駆逐級三隻と重巡級一隻の構成のはずなのだ。もちろんそれを鵜呑みにするならば、だが。

深海棲艦は無限に湧き出る——それは大湊警備府に向かおうとする戦力を道中で落とさねばそれだけの被害に繋がる可能性があるという事。

艦娘がおらずとも大湊警備府には深海棲艦に対応出来る方策がある。正面きつて戦えないにしろ、沿岸部、もとい陸奥湾周辺に被害が

出ないように人の手によってつくられた兵器がゴロゴロと転がっているはずだ。物的被害があつても死人は出るまい。

であれば木曾達、大湊水雷団に求められるのは物的被害を抑えることにある。本隊と衝突する前に脅威を排除し、最終的には本隊と――

「木曾さん、も、もつと弾幕を！　これじゃあ足りない！」

響の大声にはつととして意識を持ち直し、木曾は十四センチ単装砲のみならず、二十五ミリ単装機銃を唸らせた。とにかく相手を落とせ、戦意のままに、と。

「邪魔だああああッ！」

耳に痛みが生じるほどの炸裂音が連続する。

電と雷は敵艦を近づけようともその手は届かせまいとして残り少ない魚雷を放った。

「二隻撃沈を確認よ！　響、こつちも砲撃を――！」

「わかっている……よつ！」

刻一刻と変化する戦場。大湊警備府における哨戒に激しい戦闘はつきものだ、そんな木曾の常識や日常ともとれるものが塗り替えられていく。

明らかに作戦めいた艦隊行動――これは自分達を足止めする罠だ。

第六駆逐隊が同等の三隻を撃沈に至らしめるすぐ横で、木曾は奮戦し辛くも二隻を撃沈する。だが、弾薬、燃料ともに消費は想定を上回った。

「感知は！」

「な、無しよ！　もう、大丈夫……先へ行きましょう！」

雷が周囲を見渡しながら木曾に言えば、大湊水雷団の航行速度がさらに増す。

出来るだけ早く到着して本隊を、全員の頭で何度も何度も繰り返される思考。

「ああ。この消費じゃ……こりやもたねえかもな」

木曾の呟きは通信を通して第六駆逐隊にも伝わっていたが、それに対する声は上がらなかった。ただ全員が、同じように考え、そうだと

うなど、未来を予感していた。

* * *

津軽海峡の中央部に到達する頃には、短距離であるのにもかかわらず通信に酷いノイズが雑じり会話すら困難な状況になっていた。

意思の疎通は互いの喉が裂けんばかりの大声という手立てしかなく、荒波に負けじと怒鳴り合う。

「電！ どうだ！ ここが結界の最深部だろ!？」

「わ、分からないのですっ！ 感知どころか、電探が機能しないのですっ！」

「私もよ！ このままじゃあどこから来るか……」

互いの声が届く範囲まで、と無意識のうちに近づいてしまった電と雷に、離れた事によって不安が生じた様子の響も同じように近づこうと動いたところで木曾が憤怒する。

「近づきすぎるなッ！ 俺達の行動範囲が狭まればそれだけ攻撃的になっちまうことくらい分かるだろ！」

「でも——」

響が言わんとすることは分かる。木曾も同じだった。

ただ、不安なだけ。結界に呑まれた経験があれば木曾と第六駆逐隊では理解度が違う。周囲の景色が一変して波が荒れる。不穏な空気は潮風を消し去り、通信が妨害されているように繋がりにくくなる。その程度の認識である。

その昔、大湊警備府に着任して間もない木曾が大破に追い込まれた戦闘も似たような結界に呑まれた時の事だった。あの時の彼女の判断は極めて危険だったが、死に歩むような先刻の戦闘と同様、最適解であったと今ならば言えるだろう。彼女は、第六駆逐隊を逃がしたのである。少なからず情報を持ち帰らせるため、そして無為に戦力を減らさないために。木曾があの時出現した重巡洋艦を倒せなければ、第六駆逐隊が持ち帰った情報は必ず役に立つと考えたのだ。

敵深海棲艦を撃沈出来れば大湊水雷団の戦果となる。どちらに転

んでも海軍にとって良い結果と言えよう。

海軍にとって。それは海軍にだけ、である。

第六駆逐隊はそれを是としなかった。木曾の命令に背き、彼女と共に戦うのだと海域に残り周囲に湧き出す深海棲艦と戦闘した。結果は言わずもがな、ここに木曾と第六駆逐隊がいるという事は、勝利した上で情報を持ち帰ることが出来たということである。彼女らは木曾を中心に奮闘したが、結界の中心地と外周では艦娘に及ぶ影響の強さは段違いだ。一口に結界と言えど、内と外の情報を得られたということだ。

では、その情報はどうなったか。

大湊警備府に戦闘詳報として、行動調書として残り、大本営に集積された。

きちんとした経路で全拠点に共有される深海棲艦の情報の一つとして残った。

しかし、軍艦としての責務を果たせれど彼女らにそれ以上のものは残らなかった。

響の行動を見るに、雷や電の表情を見るに、それらが活かされたかと問われたら、否と答えるしかない様相が戦場にあった。

互いが情報を情報としてしか共有出来ていないのである。もちろん戦争における情報の比重からして間違った行動は何一つとして存在しない。ではどうして、彼女らは不安に駆られ足踏みしているのか。

じじ、と通信に今までと違うノイズが雑じる。

《ジ、ジ……——支援艦隊の現在位置は！ もっと早く合流できんのか！》

木曾達に聞こえて来たのは、熊谷少将の声だった。

通信が繋がったのだと応答を願う響の声が、海域に広がる。

「っ！ マルヒト！ マルヒト！ こちら響！ 応答を！」

聞こえてくる熊谷少将の声に、つい昨日聞いたばかりの男の声。

《落ち着け熊谷少将。心配も分かるが、大湊水雷団の練度は平均して高いものだ。慌てることもなからう》

《わかつております……それでもっ……!》

《龍驤からの報告でも心配はないとのことだ。万が一があれば彼女も向かわせる》

それは海原と名乗った工員の声である。木曾はぽかんとして両腕をおろし、片耳に指を当てて俯いた。どういうことだ? と考える彼女の視界に、傘を広げたような不格好なアンテナを構える妖精が映る。

「こ、れ……お前が、傍受してんのか……でも、どうしてこっちの声が、聞こえねえんだ……」

妖精はアンテナを構えたまま首を横に振ったり、片手をぶんぶんと振り回してみたりと意思疎通を凶っているようだが、木曾には伝わらず。

結界の影響なのか、と問えば、妖精は頷いた。

「そうか……熊谷少将は海原と何を話してんだ。それに、向かわせる、だとか……」

当然の疑問に答えられる者がいるはずもない。電が木曾に同調した。

「電達が抜錨する前に、木曾さんの腕を掴んだからって呼び出されていたはずなのです」

「そりゃあ分かかってるけど、おかしいだろ! 哨戒による戦闘中なんだぞ、新人工員の説教なんざ後回しにするに決まって——」

「木曾さん! 新手だ!」

またも響の声。今度は反射などではなく意識的に、そして正確に響が示した方向を見て単装砲を構えた。ざあ、と波間から湧き出る深海棲艦——それもまた、駆逐八級。今日だけで八隻は沈めたのにまだ湧きやがるのかと唾を吐く木曾の砲撃は、二発の挟叉を伴い、三発目で撃沈に至る。精度が落ちてきている。連戦による疲労だった。

「ちっ……複縦陣じゃ対応しきれねえ! 広がれ! 単横陣をとれっ!」

「了解!」

一塊となっていた第六駆逐隊が木曾に呼応して相当の距離をひら

く。

待っていましたとばかりに湧き出す深海棲艦にそれぞれが砲雷撃戦を繰り広げるも、徐々に、徐々に押され始めた。

「だ、だめ……弾薬の残りも……！」

「電、魚雷の残りを！ 私を援護する！」

震える唇を噛みしめ、電は雷を見て頷いてから魚雷を放った。

衝突、爆発、衝突、爆発。連続する轟音に、叫喚ともつかぬ耳障りな音を上げて沈んでいく深海棲艦。

彼女らの表情は、それらを見つめて歪んだ。

涙でぐしゃぐしゃな顔なのに、それすら互いに気づけぬまま戦闘は続く。

黒に煙る視界は一帶の空を覆い、赤黒い空と海が上下の間隔を薄れさせていく。

自分達が海の揺れの上に立っているのか、空に向かって打ち上げられているのか分からない程に激しい戦い。

そこに場違いな通信の音声が混ざり合う。

《熊谷少将。話でもせんか》

《い、今ですか!? そんな悠長な——!》

《言つたろう。我々に出来ることなど、今やなにも無いのだ。問うが、熊谷少将がこの場で出来ることを教えてくれんか? 龍驤にさつさと殲滅して迎えに行けと急かすか? それとも、何とか通信を復帰させて木曾達に右だ左だと命令をするのか? 戦場の音しか届かぬこの通信室から》

《状況報告を受けて作戦を立てることくらい出来るはずです!》

《うむ、うむ……真面目で結構。ならもう一つ問わせてもらおうか。熊谷少将が木曾達から報告を受けてその場で作戦を立てようとしている間に、津軽海峡という場所で、彼女らは戦い続けているわけだが……戦況は変わる。なあ?》

《それは、その、通りですが……》

《では、彼女らはその間にどうすべきだと考える? 遮蔽も無ければ、あるのはただ、海だけだ。相対する深海棲艦は機を窺っているぞ。彼

女らをどう沈めてやろうかと。熊谷少将が考えている間も、コンマ一秒とて無駄にせず、あいつらは狡猾に考えて動くだろう。私ならば隙を見つけて飛びかかるかもしれない。熊谷少将の蓄積してきた知識、経験、それから見識は決して無駄ではないだろう。だが語弊を恐れずに私の考えを言わせてもらえば——そんなものは彼女らにとつて邪魔なだけだ》

《……》

工員の声だ。間違いない。でもどうして、とその先を考えようとした矢先に、飛来した砲弾が大湊水雷団の面々を掠った。

「きやああつ!？」

「雷!」

「雷ちゃんっ!」

「だ、大丈夫よ! 掠っただけ……まだ戦えるわ! 木曾さん、もう弾薬の残りは少ないわ! これ以上の交戦は——」

ぎりりと歯を食いしばって、木曾は言う。

「……艦隊反転! 艦隊反転! 本隊に突撃する!」

木曾はこれしかないと思った。

奇襲にも等しい深海棲艦の出現に、哨戒班たる大湊水雷団の戦力が敵うはずもなかったなど、考えずとも分かっていたはずだ。それでも、効率的に相手を沈めて脅威を減らし、最後には敵艦もろとも轟沈させる。軍艦としてこれ以上ない効果的な戦い方だろう。

「と、とつ、げ……う、ううっ……了解ッ!!」

響が呻きながら返事をする、雷と電も覚悟を決めて進み始めた木曾へ続く。

恐らくは、これが最後になると。

深海棲艦達が不気味な速度で背後から迫る。つかず離れず、木曾は絶望の中で敵に向かって気丈に笑った。

「置いていくぞお前ら!」

ぜえぜえと必死に追いつがる第六駆逐隊に、ぽつりと言った言葉。

「悪いな……これじゃ、旗艦失格だ」

それは続く木曾の届かぬ通信に消え、第六駆逐隊の覚悟をさらに固

めた。

《ザ、ザザツ……—こちらマルフタ、こちらマルフタ！ 届いてるか！》

通信の向こうからは、相変わらず熊谷少将と海原の声ばかり。

しかしノイズが酷く激しいために内容すらも分からなくなっていた。

《届いてなくても記録には残るだろ！ なあ！》

「木曾さん……」

電の呼びかけをよそに、木曾は俯き、それからぐつと顔を持ち上げた。

水飛沫なのか涙なのか分からぬ水気で頬を濡らしたまま。

《もう残弾を撃ちきるのも時間の問題だ！ 龍驤が間に合うかも分からねえ！ だから……大湊水雷団は出現した本隊へ突撃を敢行する！ 繰り返す！ 大湊水雷団は出現した本隊へ突撃を敢行する！

出来るだけ早く戦力を補充して対応してくれ！ 俺達も出来るだけ足掻いてみるからよ！ 頼むぜ！》

はは、という木曾の声は喉を焼いた。

最大戦速のまま進み続ける中で首だけを回して、横目に第六駆逐隊を見ながら木曾は問う。

「燃料は！」

それに答えたのは、電である。

彼女もまた木曾と同じような表情だった。

逃げられぬならば戦ってやろうじゃないか、と。

「帰還分と少し……たつぷりとは言えないのですっ」

「そうか、十分だなあ！ よく燃えそうだ！」

「っ……はい！」

その意味が分からいなか。響と雷も涙ながらに不敵に笑ってみせた。

「木曾さん！ 私はね！」

「なんだ響！ 聞こえねえって！」

「木曾さん!! 私はねえ!!」

君が旗艦で、大湊水雷団で、良かったと思うよ。

その言葉を聞き取ったとほぼ同じくして、背後からの砲弾が木曾に衝突する。

「があっ!? く、そっ……」

「木曾さんを守るんだ皆! 木曾さんを先頭に単横陣で盾に——!」

「問題ねえツ! まだ往ける——そのまま止まらずに進めツ!」

空の色が、さらに暗く、黒く、赤くなっていく。

前に沈んだ時も同じような色を見ていた気がするな、と木曾は思った。

ずきずきと痛む身体をおして進みながらも、記録を残そうと声を必死に出した。

《こ、ちら、マルフタ……旗艦木曾……敵、駆逐八級の砲撃により装甲剥離……! 小破だ……装甲は剥離したが、まだ、進める……!》

木曾は無意識に、ノイズの中に声を探し求めた。

なんでもいいから命令をくれと、熊谷少将に呼びかける。

《もう、この際だろ……言えよ、熊谷少将……言ってくれよ……沈んでも、敵艦を仕留めてこいってよお……! 今度は、雷達も巻き込もうとしてんだぜ……なあ……!》

ざり、ざり、というノイズからの応答はない。

なんて、虚しいのだろうと木曾は傷に痛む腕をあげ、片手で顔を覆った。

眼帯をした目が痛む。

彼女は、自分以外の木曾の片目には傷が無いと聞いたのを思い出していた。それは熊谷少将と出会ってしばらく、大破して戻った日のことだ。

どうして幾度もあの日を思い出してしまうんだと木曾がかぶりを振れど、情景が浮かんできてしまう。

入渠施設の修復液に半分以上身を沈めたまま、自分よりも先に修復が終わった第六駆逐隊を見送った後のことだった。

夜半にもなって、風呂場のようになっている入渠施設のすりガラスの扉越しに姿を見せた熊谷少将が話してくれたことが、彼女にとって

少しばかりの特別となつてゐることなど、未だ自覚出来ないまま。

大湊水雷団旗艦、木曾の眼帯の下にある目に光は無い。そう、見えないのである。

その他の木曾は眼帯を外せば通常通り視界を確保できるために揶揄われたりすることもあるとかなひとか。中には傷を隠すために眼帯をしている木曾もいるから十把一絡げには出来ないが、それでも、見えぬ片目は彼女にとって、特別と言えるものになつてゐた。目が見えずとも戦える、片目でこれだけの戦果を挙げられる、光が無かろうが敵は逃がさない。三年もの間、大湊警備府を守つて来た木曾の誇りとも言えるかもしれない。ただ彼女にその自覚がないだけだ。

うるせえよ。どっか行け。

そんな言葉を吐き捨ててしまつたあの夜、木曾は初めて意識的に片目に触れた。

どうせこの傷なんざ修復が終われば元通りになるんだろ、なんて。

しかし驚くことに、その傷は治らず、光が戻ることはなかった。

もちろん熊谷少将に報告をしたし、工廠班も原因は何だと頭を捻つた。

ついぞ答えが分からぬままに沈むのかと一抹の寂しさと後悔を胸に、木曾は眼帯の位置を直した。

《もう欠陥艦娘はいなくなる。最後の最後に第六駆逐隊を巻き込んで悪いな。許せなんて言わねえけど、まあ、悪くなかつたよ、大湊は》
これが最後かと通信を切りかけた時——とうとう、視線の先に本隊が現れた。

【アアアアアア……】

「ぐうあつ!? なんだ、この、声……く、そ、さいつてーな声してやがる……!」

「ひうつ……」

「み、耳がつ……」

「じ、陣形を維持して、雷、電……」

まるで泥の底から出て来たような重巡り級。

正面、そして左右に一隻ずつ駆逐八級が並んでいるが、不自然だつ

た。

動いていないのだ。いや、動こうとしていない、が正しいのかもしれない。

どんだんと距離が近づいていく。それでも、動かない。

「く、そおおあああああッ！　これが最後だッ！　全艦、とつげ——」

「ハ、ハハハッ……変ワライノネエ……アナタ……」

木曾は猛った。うるせえ、黙れ、そんな言葉を吐き出しながら進む。

「イイワ、イイワヨソノ顔……水底ニ持ッテ帰ッテ飾ラナキヤ……キヤハハハハハハハッ！」

ざわ、と海面が動いた。

「止まるな！　進めエツ！」

それでも進もうとしたが、木曾の足が止まった。

がくんとバランスを崩して前に倒れそうになるのを、痛みが生じるほどに足を踏ん張ることで耐えたが——止まった原因を見た時に、ああ、と声が漏れる。

「ただじゃ、攻撃させねえってか……くそ」

木曾のみならず、雷も、電も、響も同じように顔を青くしてそれを見ていた。

自分達の足を掴む、青白い手を。

「ひ、ひゃああああッ!？」

「きやああああッ!!」

「うわあああああッ!!」

「ばっ——やめろ！　撃つなッ！」

第六駆逐隊の面々は恐怖に顔を歪ませて十二・七センチ連装砲を足元に向かつて放った。それが如何に愚かな行為であろうと、戦場で混乱し、正常な判断を失った今では言う方が無為で無駄である。

己の攻撃によって青白い正体不明の手は消え失せたが、被害は甚大となる。

足元に砲撃をすれば航行の続行不可能になるなど自明の理である。それが昔と同じように巨大な鉄の身体であれば、きつと為す術はい

くらかあつただろう。しかしながら人の身体の今、常軌を逸した破壊力を持つ兵装を自らに放てば、如何に頑丈とて傷は免れない。

「あ、ああつ……」

雷が正気の欠片を手にした時には、それがまさに大湊水雷団の向こうに笑う旗艦であろう重巡り級の策中であつたと気づく。

深海棲艦は、愚かではない。

木曾は瞬時に反転し、砲撃を受けて皮膚がずるりと剥けた腕の痛みを顔をしかめながら伸ばして、雷、電、最後に響の順で引っ張り寄せた。

自ら一塊となつた大湊水雷団。軍艦同士ならば衝突で沈没していてもおかしくない状態ながら、人の身を持つ今でなければ在り得ていない状況に心のどこかで笑いながら、木曾は全員に腕を回して抱きしめた状態で顔を寄せて言った。

「……………ここが本当に、最後だ」

「ぐ、ぐぐ、ごめん、なさい、木曾さん、わ、私っ」

雷は責任感の強い艦娘である。混乱していたからと自分の足元に砲撃するなど後悔しているのだろうと、木曾はぎこちなく笑みを浮かべてみせた。

「仕方がねえ。策に嵌つたのは俺の指示のせいでもある。俺もびびっちゃまつたよ……ははは……悪いな皆。だがこの戦力差だ、少しでも相手を減らして、大湊を守ろうじゃねえか」

「……………ん、うん……うんっ……わがっだ、のです……!」

電が泣きながら頷くと、木曾は手を伸ばしてそれを拭う。

「俺達は、軍艦なんだ。だから——」

《あの子らは、軍艦ではないのですね》

全員がはつとして、時が止まつたような錯覚に陥る。

通信が復帰したのか？ なら今の状況を少しでも伝えねば。

そんな事を考えられる木曾の冷静さもなく。

私は助けになれたでしょうか？ そう問いたい電の声もなく。

頼りになる存在だったかしら？ いつも頼られたがった雷の声も。

不死鳥のように戦えると思つていたけれど、難しかったね、なんて

懺悔したがる響の声も、一つとして組み立てられなかった。

頭の中に響く熊谷少将の否定の声に打ちひしがれそうになった。そうして、木曾は顔を上げて振り返る。

未だに笑う深海棲艦。重巡り級。

万全の状態でも勝てるか分からない相手は、今や敵わないだろうと確信に至る絶望を纏っていた。不気味に蒼く光る視線が、木曾とかち合う。

《そうだ。あの子らは軍艦の記憶を持ち、魂を継ぎ、護国に生きる存在であると同時に——人の心を持つ少女なのだ》

そうでなければ、彼女らが必死に戦う意味が分からんだろうが。

新人工員から発せられたとは思えない力強い声に、木曾の目がさらに痛みを訴える。

《ならば……私は酷い指揮官ですね。少女を戦場に駆り出すばかりか、彼女らなりに戦って帰ったのに、命令違反をするなど頬を張ってしまった。いかなる理由であれ、私がすべきことは——》

「あ、あ……ち、違う、違うんだ、熊谷少将……違うんだよ……お、俺は……俺はただ、ただ……！」

《おかえりと、伝えることだったのですね》

守りたかっただけなんだ。この身が燃え尽きようとも。

深く関われば、きつと戦場での判断が鈍ってしまうからと、向き合うのを避けていただけ。

自らを苦しめる深海棲艦の声をどうにかするには、戦うことしかないのだと、それだけに意識を向けていた。そうしなければきつと声から逃げ出してしまうと思った。

人からも、深海棲艦の声からも逃げただけなのだ気づいた

時、木曾の目がさらに痛みを発したが——木曾は眼帯をむしり取って身体ごと振り返った。

「木曾、さん……?」

「突撃は中止だ……」

「どうして——このままじゃ、満足に戦闘も——!」

「それでも、中止だ……お前らは駆逐艦を集中して落とせ。重巡の攻撃は俺が引き付ける」

「そんなことさせられるわけがないじゃない!」

雷の悲痛な叫びに顔だけ振り返った木曾の目を見た時、第六駆逐隊の面々は驚愕する。

「その、目……!?!」

対峙する重巡り級の片目から放たれる蒼い光と同じようにして、木曾の片目が光っていた。それは眩い朝日が如く。

「気が変わったんだ……大湊水雷団の前で笑ってやがる敵だぞ、深海に叩き返してやろうじゃねえか」

それに帰らなきゃ、今度こそ工廠の奴らに文句を言われちゃう。

木曾の言葉に第六駆逐隊が息を呑んだ。瞳が揺れ、光が灯る。

「でも、これじゃあ砲雷撃戦で一方的に……」

電が言い切る前に、全員の艦装から妖精が飛び出した。

驚く声もお構いなしに、飛び出した妖精達は第六駆逐隊の足元に集中して光を放ち、そして——

「あ、れ……動け、る……う、動けるよ! 木曾さん!」

「これなら航行出来るわ!」

響と電の表情に色が戻った。木曾と言えば、妖精が兵装にぴよんと飛び乗っただけ。

「……お、俺には?」

妖精達は木曾を上から下まで見つめた後に、ぐつと親指を立てる。小さな小さな、それでいて自信ありげなサムズアップ。

「傷があっても航行できるから問題ねえってか……っは、鼻戻してんなあ」

だが、傷があつて丁度いい。気丈にそう言った木曾は啖呵を切っ

た。

「無傷で帰らせたりしねえぞてめえらッ！ 大湊水雷団程度、問題にもならねえって思ってたのか知らねえが……足止め食らったくらいじゃ止まったりしねえよ……！」

「ハ……？ ナ、ゼ……光ガ、貴様、ドウシテ……ドウシテ笑ッテ——！」

「想定外ってやつか！ 妖精に関しちや俺らも想定外だがな、ははっ！」

通信から聞こえ続ける、我らが指揮官、熊谷少将の声に大湊水雷団を覆う絶望が消えていく。

《妖精もついでにいるでしょうから——》

話の前後がなくとも、これは熊谷少将の仕業なのだと確信した。そうして、彼女らが動き出す。

《——あのやんちゃな大湊水雷団に、任せるしかない、ですね》

話を聞け。命令違反するな。哨戒とはいえ、どうしてお前達はそうやって危険なことを。いくつも投げかけられた言葉の真意。それは、距離があると理解できない憂慮の感情。

自分達がどれだけ昔の記憶を持っていても、世に生を受けてたったの三年。

今回は大人である熊谷少将が折れてくれたに過ぎないのだろうか、などと、本当にくだらないことを考えたのは——全員、同時のことだった。

それは、大湊水雷団が初めて共鳴した瞬間である。

「帰ったら木曾さんに命令されたって言おう」

「ちよ、ちよつと響！ だめよそんなこと！ で、でも、無茶をしたのは、その、少しは……」

恐る恐る視線を向けてくる雷に、木曾は心の底から笑った。

「は、はははははっ！ ああ、いいぜ、俺のせいでもいい。いいや、俺のせいだ。突撃なんてくだらねえこと考えたのも、俺だからな」

「い、電も同意したのです！ だからっ……うう」

「ありがとよ、電。それで……どうして攻撃してこねえんだ？ あア

……？」

ぎろりと睨まれた重巡り級。

木曾の言葉通り、攻撃するチャンスはいくらでもあったはずなのに、駆逐八級ともども動きはしなかった。

「ク、クヒ……ヒヒツ……！ 何度モ、何度モ、声ヲカケテアゲタノニ……ソウスレバ、前ノヨウニ……」

声の正体、そして――

「てめえが何度も俺を苦しめてくれやがったのか」

【今度コソ……水底ニ……モウ、二度ト、負ケタリ、シナイ――】

荒い潮風によって持ち上げられたしなびた海藻のような髪の毛の向こうから覗く不気味な目。

「こちとら三年も休まず戦いつぱなしなんだぜ？ ちつと情けねえとこを見せちまったが……本当の戦鬪つてヤツを、教えてやるよ」

最初に木曾が動いた。一塊になったままの第六駆逐隊が露わになり、重巡り級がにやりとして囷である木曾を無視して先に沈めてやろうと駆逐八級に言葉無く指示する。

【オオオオオ……】

三隻同時にがばりと口を開いて砲塔を見せた。巨大な一つ目を光らせて、それぞれに照準を合わせようと動くも、第六駆逐隊は慌てず。ぱきん、と音がした。だが、何も起こらない。

【シズメロ……ナ、ア……!?!】

駆逐八級の側面から爆炎が噴き上がる。木曾の速過ぎる砲撃に間に合わなかった。

それでもまだ二隻いると歯噛みしながら【撃テ――！】と言うも、さらに放たれた砲弾が水飛沫を上げ、視界を奪う。

ならば貴様から沈めてやる！ 残った二隻と重巡り級が反転した瞬間、背後から連続した破裂音。

【クソツ、クソクソクソオオオアアアアアアツ!! 艦娘風情ガアアアアツ!!】

「八級の撃沈を確認！ 木曾さん、お願いっ！」
「あぁっ！」

「マダ、マダイルノヨオオ！ イクラデモネエエエ！」

「ちくしょう、マジかよ……！」

先ほど大湊水雷団の足を掴んだ手と同じ数ほどの駆逐級の深海棲艦が海面へぞわぞわと姿を現し始める。流石に、これを全て沈めるのは無理だと悟るも、突撃しようなんて無謀な考えは浮かばなかった。誰一人として。

「最後の最後まで足掻いてやる……それが俺なんだからよ——！」

音が響いた。それも、海ではない。

空から、甲高い風を切る音が響いたのだ。

「あれは、天山——！」

「支援が来たのですっ！」

支援などと生ぬるいものでは無かった。

一機のみならず、その後方からいくつもの機影が現れ、通信が飛び込む。

《本隊だけなら行けるやろと思っただけど、こら無理やな！ 木曾、君い、えらい気張ったやんか！ ええでええで、それが必要なんや！》
場違いに明るい声。

一言、もう一言発するたびに、空から夥しい攻撃が降り注いで重巡り級は声すら上げられずぽかんとした。

海面を埋め尽くさん勢いで出現していた駆逐級の深海棲艦は瞬間に爆炎に呑み込まれ、沈んでいく。

《何、だよ、嘘だろこれ、龍驤、お、お前こんな力を——》

木曾の声に、からからと笑う龍驤。

《あはは！ そらウチは歴戦の軽空母、りゅーちゃんやからな！ 周りより強い自覚はあるで？ そんでもこれはウチだけやない——形は違っても、君にでも出来ることや。いつかな》

《でっ出来るわけねえだろこんな無茶なこと!! ったく、こんなことなら、早く支援に来てっんだ……!》

震える木曾の声を敢えて指摘するような野暮な真似をせず、龍驤は言う。

《文句は司令官に言うてや！ でも君も分かったやろ。声が何なのか

も、その深海魚どもが何を狙ってんのかも》

《……》

戦場でしか知ることのできない、深海棲艦の憎悪。

それはかつての——自分達の無念。

《誰のせいなんだろうな、この、戦い》

《誰かのせいにしたら、ウチらは自分らの手えで世界を壊さなあかんくなるで》

《……わかつてるよ》

《向き合おうや。軍艦やなく、艦娘として》

《……まだ分かんねえことがある》

《おう、なんや。今なら答えたるわ。しっかし君、絨毯爆撃しとる中でよう平気な顔して突っ立ってられるなあ！》

《そりやどうしようもねえからだよ！ 動いたらあぶねえだろ!?!》

《はは、悪い悪い！ まあじつとしとき、ウチが終わらしたる。ほんで？》

大湊水雷団の前にはあり得ない光景が広がる。

ただ立っているだけで、夢とも悪夢ともつかぬ光景だ。

いつかの記憶と重なる、艦載機が淡々と敵を沈めていく景色は、木曾の心を動かした。

《どうして、熊谷少将は……俺を飛ばさねえんだ》

《異動、ちゆうことか？》

《ああ》

《さあなあ……体制の前後があるから、そのせいやとも言えるやろうし……大湊水雷団として活動の長い君らを手放したくないんかもしらん。それか……》

君らが大事なんやろ。

たった一言を聞き終え、木曾は俯いた。

《命令違反するような艦娘だぞ……第六駆逐隊のチビどもを連れて、軍人どもにあてつけるような……そんな……》

《熊谷少将も歳やしなあ、ガキ大将見てるみたいなもんやろ。愛着も湧いたんちゃうんか。知らんけど》

《ガキ大将って、はっ、この木曾をか?》

《まあ、ウチから見てもガキんちよやで。戦力も含めてな》

《これを見ちや文句も出ねえが、言うじゃねえかよ》

《そらそうや。十年も戦ってたら強くもなるわな》

《……は?》

木曾だけではなく、第六駆逐隊の全員も空を見上げた。

不規則ながら的確に敵を撃沈に至らしめる高練度を思わせる艦載機の群れに、気の抜けた龍驤の顔が浮かぶ。

《ま、待てよ、お前、は? どう、いう……十年? まさか、お前――》

《信じてないんか? なら君らが帰ったら見せたるわ》

《初期型艦娘、軽空母りゅーちゃんの登録証》

戦

《初期型なんて……もう、残ってないって聞いたぞ……!》

爆音の最中、通信が明瞭になっていくのを感じながら空を見上げる木曾。

同じようにして第六駆逐隊の三人もぽかんと空を見上げたまま、会話を聞いていた。

《誰から聞いたんや?》

《教官だよ! それに、大本営でもそういう風に——》

《そう教えられたんか? 残ってないっっちゃうのは嘘やろ。確かに初期型の殆どは捨て艦作戦で沈んどるけど生き残った奴もおる》

《そ、そいつらは何してんだ!? 龍驤以外にどれだけいるんだ!》

混乱甚だしくも木曾の問いには意味があった。単純な好奇心や疑問ではない。龍驤のような十年も戦争を生き残った艦娘がいたとしたら、それは相当の戦力であるはずなのだ。たかが軽空母、されど軽空母——たった一人の艦娘によつて絶望に塗りつぶされた戦場が覆されている現実を目の当たりにして言わずにはいられなかった。

《今それ聞かあ? まあ秘匿されとるわけやないから、別にええけども……生き残つとるのはウチ以外に、吹雪つちゆう特型駆逐艦やな。それからあ……ウチと同じ軽空母の、鳳翔》

《吹雪に、鳳翔……》

《勘違いされても困るから言うとかけど、初期型やから強いってわけじゃないで。色々な理由があつて生き残つとるだけで、木曾が思つとるようなことが当てはまるんはウチだけや》

考えを読まれている。いや、読む以前に見透かされている。木曾が分かりやすいのではなく、龍驤と木曾の経験値が違い過ぎるのである。

戦場であるというのに、まるで気にも留めずつらつらと語る龍驤は大湊水雷団を落ち着かせるようであり、語弊なく、異常という他ない。

まるで初めて戦場に出た時みたいだと感じたのは木曾のみならず、雷も電も、響も同様だった。

《にしてもえっらい多いな……駆逐級だけやなくて潜水艦までおるやんけ。こら計画的な奇襲の可能性も……いや、待てよ……？　木曾、妖精にお願いして通信復帰させえ》

《妖精にお願いってなんだよ!?!》

《お願いはお願いやがな。ウチら標準の兵装じゃ結界から通信は届かへんで。撤退支援したるから早くしい》

《て、撤退だ?!?　この深海棲艦どもはどうすんだよ!》

《君らが戻って来るまで持たせるから問題あらへん。それに支援艦隊も向こうとる》

《支援艦隊が——!》

《とにもかくにも、君らはまず補給に戻らな継続戦闘は無理やろ。補給と応急修理の間に少しくらいは減らしといたるから、はよ行き!》
木曾が艤装のどこかにいるであろう妖精を探し始めると、電の声でした。

「木曾さんつ、妖精さんが、これを!」

視線をやると、電の掌の上に乗った妖精が目に入った。その妖精が持つ、羅針盤にも。

「羅針盤、だあ……?」

《見つけたみたいやな。そんならちやっちゃと移動や!　羅針盤に従って進みい!》

ざらついた音声に反応して「艦隊反転!　ああもう意味わかんねえ!」と文句を垂れて妖精に手を伸ばす木曾。妖精はやる気に満ちた顔で木曾へ羅針盤を渡すと、そのまま電の艤装の中へと潜り込んだ。

《これに従えばいいんだな?!　北か?!　南か!?!》

方向感覚を失っている大湊水雷団が頼れるものは羅針盤と龍驤の通信のみ。

龍驤がそうだと言えば、そちらに進むしかない状態である。

《それはただの羅針盤やないで。妖精印の特殊技術や。磁気が狂つとる結界の中でも動く代物やちゅうたら伝わるか!》

「普通の磁気コンパスと同じように使えつてか……艦隊!　南下するぞ!　平館まで下がればあとは一直線だ!」

「了解なのですっ」

「わかった！」

電と響に続き、残弾ある雷が木曾から離れ後方へ。

「私が殿を！ 木曾さん、急いで！」

「あ、ああ！ 艦隊、撤退開始！」

* * *

大湊警備府の通信室では熊谷少将がパイプ椅子から立ち上がった。り座つたりと、スクワットでもしているのかというくらいに落ち着きのなさを見せていた。

一方の海原は腕を組んでどっしりと構えている——ように見えて、諦めの境地である。

（木曾が撤退してくるなど、あ、ありえるのか……しかし、そうしたら大湊警備府はどうなる……まだ深海棲艦は残っているはずだ。考えろ、考えろ……！ 海原元帥の艦娘になった龍驤にも、示しがつかんど……！）

龍驤から撤退指示をさせたと通信を受けてしばらく。

ただの哨戒であるつもりで油断していたと露呈すれど、熊谷少将は取り繕うこともなくソワソワしっぱなしだった。

この海域において駆逐級であれ十隻を超える大規模な戦闘が起こったなど前代未聞。ともすればこの戦闘には意味もあり意義もある。答えを知っているであろう海原に直接問えば解決する問題だが——任せる——たった一言に集約された信頼と期待を裏切る選択肢は熊谷少将に存在しなかった。

一方、海原は諦めの境地の果てで無表情のまま考えた。

余計なことを聞いては無駄口を叩きかねないと自ら通信用ヘッドセットを外して後方待機である。

（妖精に邪魔するなって言われたし、する事がねエツ……。撤退指示を出したって言った時は流石に心臓が止まるかと思っただけど、龍驤は龍驤でただ補給しに戻すだけやで！ とか言ってたしなあ……まあ

任せれば問題ないんだろうけどさ。考えてもみろよ、龍驤だぞ？ 龍驤。あのツツコミ一つで泊地を壊滅させられそうな気迫ある艦娘が言うんだから間違いない。問題などないのだ。だから落ち着けまもる）

とん、とん、とん、と腕組みをした指を動かす様は熊谷少将にさらなるプレッシャーを与える。無論、海原にそのような意図などあるはずもない。

互いに考えていることが異なるのだからすれ違いよりも酷い有様である。

「海原元帥……大湊水雷団が帰還したあと、補給ののちに戦線復帰させても、問題ないのでしようか……」

己の無力を認めたくえでギリギリまで攻めた問いに、海原が伏せていた視線を持ち上げた。

視線に射抜かれた熊谷少将がごくりと喉を鳴らす。

「……問題ない、と思うか？」

「っ……っ！」

短い言葉で投げ返された問い。

（自分で考えろと……？ 言わんとしておられることは分かる。だが、この大湊警備府にある戦力は水雷団の四人だけ……戦線復帰させない選択肢もないわけじゃない。海原元帥に単独で随伴している龍驤がいるのだ、戦力はあれでも十分に思える。それに大本営からアメリカ海軍の支援まで引っ張ってこられたのだ——如何に危険であるとは言え、水雷団を戦線復帰させ相手を撃滅できれば木曾達の手柄にもでき、る……っ!?!）

海原の視線が鋭くなったのに気づき、息が止まる。

熊谷少将の額には脂汗が浮かび、余計な事を考えたのが瞬時に見抜かれたと悟らせた。

「どうした、熊谷少将。暑いか」

「い、え……」

（違う、違うだろうが！ 何を考えているのだ私は！ 危険？ 手柄？ そんな無駄な事を考えるための猶予を与えていただいたわけ

じやないだろう……ッ！)

ただの一般人であると知っているはずなのに、熊谷少将の目に映るかの男は井之上元帥を彷彿とさせる異様な気配があった。

彼の祖父は軍人であり、かつての戦火を経験してなお、数奇な運命を辿ってやってきた別世界たるこの現実でも戦争へ迷わず飛び込んだという。それは、海原という名を持つ者の意思か、血筋か。

安心していただきたいが、勘違いである。

(試されている……？ は、はは、ただの一般人が軍人を試すだと？)

それこそ何を考えているんだ私は、馬鹿馬鹿しい……しかし説明のつかん現状とこの威圧をどう表せばいい！ これは人命と、艦娘の命運が左右される戦争なのだ……恐れるな、問え、問うのだ……！)

熊谷壮二郎——日本海軍、大湊警備府を預かる少将であるこの男も、やはり極めて高い能力を誇る。身体能力は年齢を加味しても体力の全盛期を迎える若者に劣らず、戦場での経験がさらに彼を強固な存在にしている。

さらには深海棲艦との戦争を十年続けた中で余計な諍いに囚われず自らを守る術を持ち、知恵もある。

故に、彼は人を決して侮らない。

だから、勘違いする。

「この哨戒で……いえ、私が書状を出した時から、これを見越しておられたのですか」

散らばった情報を瞬時に収束させ、共通項を見出し、隠れた事実を探し当てる。

言うは易く行うは難し。並の頭脳では到底思いつかないであろう突飛な事でさえ真実として受け止められる度量。凡百の人間では及ばぬ超常的事象に指をかけられるかもしれない知能は、まさに英傑と呼ぶに相応しいものだろう。

もちろん海原ではなく熊谷少将の話である。

海原は熊谷少将の言葉を耳にして、ふんと鼻を鳴らすだけ。泣きそうなのを隠しながら。

「木曾を含む大湊警備府の艦娘が人に害をなすなどあり得んと思つて

いた……それらは杞憂に終わったが、別の問題はそうではないらしい」

艦娘と軍人の仲を取り持つことが出来ればスキップでもして帰ることが出来る楽な仕事だったと思ひ込んでいた海原。現実はその甘くない。

事実として熊谷少将をはじめとした大湊警備府と木曾達の軋轢は取り除かれようとしているが——余計な事をした海原のお陰で木曾達は大事に巻き込まれているのである。龍驤のみならずアメリカ海軍までもが、海原へと引き寄せられている。

「見越していたなど、あり得るわけもなからう。私はただ邪魔をしただけだ」

木曾達に無駄な仕事をさせ危険な目に遭わせてしまった。

熊谷少将に心労をかけてしまった。

海原は今にも土下座したい気持ちでいっぱいになりながら、言葉を紡ぐ。

「私の行動一つとっても邪魔になるだろう。それを支えようと龍驤が動き、アメリカ海軍まで引き込んで……これ以上は、言わせるな」

事実を言葉にして現実を直視しては本当に泣き出してしまおう、と海原は顔を伏せ、大きく溜息を吐き出した。

熊谷少将の頭の中に入り込んだ海原の言葉は——不快な音を立てて噛み合わせぬ雑多な情報という歯車への潤滑剤となり、かちりと、回りだす。

「邪魔に、なる……ですか。その、言葉を選べぬ自分をお許しください。僭越ながら、海原元帥は木曾の哨戒にかこつけて……彼女と、いえ、この大湊警備府を、使ったのですか」

「使った？ 私を呼んだのは熊谷少将だろう。それに、私なりに準備をしてきたつもりだ。迷惑にならぬようにとわざわざ作業服や証明書まで作ったのだぞ」

噛み合っていない会話。だが不思議と、互いに違和感はない。

「どうしてそのような事をする必要があるのです。大湊警備府にそのままいらっしやった所で海原元帥ならば解決など容易ではありません

んか！」

「容易な問題がどこにある」

「っ……」

海原は胸中で叫んだ。

（一般人が軍務で！ お前ら俺に期待し過ぎだアツ!! 書類仕事をさくさく片付けてることを知ってるんだな熊谷テメエも！ 誰だ！ それをチクつたのは誰だ！ どうせ忠野か橘あたりが、あの社畜使えるぜとか言ってるんだろ！ なあ!? 柱島泊地に大量に仕事を送り込んでくるのは大体がその二人だからアツ！ クソアツ！ 木曾達がいなけりや手伝ってねえよ！ その木曾にまで嫌われそうになってるかもしれないというのに！ 俺が！ 仕事を邪魔しちやっただから！ ここで号泣してやろうかアツ!?）

「私にとってこの仕事は命よりも大切なものだ。いかなる内容とて容易などとは考えん。……この私が言うのもおかしな話だがな。熊谷少将の苦勞とは比べるべくもなからうが、だとしても私なりに努力はしている」

海原が腕組みを解き、軍服のポケットから一枚のカードを取り出す。

それは使うだろうと忠野に無理を言って作らせた証明書である。

「私を使うまでもなかつたが」

（こんなものまで作って！ 出来る限り穩便に済ませようとした結果がこれですよ！ ほらあ！ 見なさいよこれ、ほらアツ！）

そして、高性能さが無駄になったプラスチックカードとなり果てたものでもある。

熊谷少将は海原が差し出してきたカードを恐々と受け取ってから、脳裏で繋がっていく情報が発する電気信号がパチパチと弾ける感覚を覚えた。

「これは……」

熊谷少将の頭の中で、ひときわ大きくバチンツと電流が走った。

多くの情報を共有している軍部中枢の人間であり、さらには海原という存在の真実を知っているが故に至った結論。

「防衛ライン設置による補給線は、間違いなく、我々大湊警備府になる……あ、あぁっ……!」

自らの口にすることでより鮮明になった予測は、その領域を超越して実現されてしまうのだと確信した。

彼は海軍内部で常識となったことを、思い出す。

深海棲艦は愚かではない。アレは知能を持つ、と。

「戦闘詳報も、行動調書も、防衛ラインのことも……あれらは戦力を見定められていたということですか!」

がたと立ち上がった熊谷少将に内心で飛び上がりながら、表では飄々としたまま、海原は頷いた。

（戦力を見定めるってか、木曾達が何で横柄なのかを見てたのは間違いないけども……え、ええ、本当に遊びに来ただけとか勘違いしてないだろうな熊谷少将……。防衛ラインについては知らないけども、流石にただ仕事を見に來ただけじゃないよ……! まもるだって空気が読めるし頑張ってるんだよ! 実際に現場に來て動いてるじゃないこうやってさあ! ん、んんっ……それが役立つてるかは別でね、それはね。ちよつと事情が変わってきてるみたいだから）

「防衛ライン然り、見ねば分からんし会わねば分からん。ならばそうするしかないのは当然のことではないのか? 私はここに仕事をしに來たのだぞ」

「は、ははは……仰る、通りです……当然です、当然のことですよ、戦力の確認など——!」

哨戒中に出現するはぐれ深海棲艦は、漂流してきたものばかりではない。

それらの一部は大湊警備府を狙い続けていたのだ。いつからか不明にしろ、虎視眈々と。北方で活発になったと言われる深海棲艦の数々を対応している中で防衛ラインの設置が急がれるならば、深海棲艦がそれを察知して妨害行動に出てもおかしいことなどない。

この十年という長い戦争で、海軍内の抗争によって無駄に戦力を消耗し己が手で人類を衰退させかけていたところで持ち直した。その瞬間こそが、油断だった。

(彼は——海原鎮という軍人は、一片の油断も、していなかった——！)

そんな事はない。油断も何も、艦娘のことしか考えていない。

だが、艦娘のことしか考えていないからこそ、彼女らの潜在的な危険に立ちはだかる最大の障壁となりうる。

置き去りにされたヘッドセットを装着した熊谷少将が龍驤へ通信を試みる。

《こちらマルヒト、こちらマルヒト！ 龍驤、聞こえるか！》

《聞こえるで。どないしたんや》

《ま、待たせた……やっと、分かった……！》

龍驤もまた賢しい艦娘である。彼女は熊谷少将の短い言葉のみならず、その声音や、空気を感じ取って、安堵したように息を吐いた。《……なら、良かったわ。支援艦隊の方はもうすぐで到着するみたいや。木曾らも結界をそろそろ抜ける頃や——ほんで、どうする？ もういつペン出撃させて戦わせるんか？》

またも迫られる選択。熊谷少将は振り返り、海原をちらりと見た。

海原はその視線を受けて、ただ頷く。本当に頷いただけだが。

《浅慮だが、愚かではないつもりだ。龍驤と支援艦隊と合わせて……敵戦力は撃滅出来るだろうか》

《まったく問題あれへんな。こっちやあ一方的にどついてるだけなんやで？ 木曾を追いかけてる奴らから遡って深海魚どもを料理するだけや。大物でも重巡やし、戦艦と空母まで来るんやから過剰なくらいや。それまでどれだけ湧こうがウチが沈めたるわ》

《今の木曾達では、足手まといになるだろう。彼女らを帰還させて、殲滅を任せたい。防衛ラインの設置に兵站部の一つとなろう大湊警備府に被害が出ないことを優先させてほしい》

《わあった……ほんまなら司令官の肩持ったりしたいけど、今回は別や！ いつのも悪い癖が出とるからなあ、振り回される身にもなって欲しいもんやで、もお！》

《悪い癖？》

《そ、悪い癖！ なあにが元サラリーマンやねんな、あのアホ！ ま、

ギリギリ間に合って良かったつちゆうとこやな……司令官な、熊谷少将の書状を見る前に、丁度、大本営から届いた北方の戦況報告書を処理しとったんや。それから、深海棲艦のことについても……」

熊谷少将の表情がみるみるうちに複雑なものになる。

自分の予想が当たっていた事による喜びに、背後に座る男への畏怖。一時期だけとはいえともに戦場に立った龍驤の、昔よりも飛び抜けた知性に対する驚愕。

《深海棲艦のこと?》

龍驤はいつでも木曾達を助けられるようにと離れた位置から艦載機を通して見ていた光景を語る。

《そうや。清水中佐のことは聞いたやろ?》

《清水中佐のこと? それは……あ、ああ、転落事故、の……》

そうして熊谷少将の中で一つ、また一つと絵図が出来上がる。

《結界の中やったから艦載機越しでもはつきり見えたで——四人が不自然に動きを止めた途端に、自分の足元撃ちぬいたのがな》

《そんな事があつたのか!? あ、あいつらは! 大丈夫なのか!?!》

《大丈夫や、航行可能な状態まで妖精が応急修理しとる。そのまま帰還せえつちゆうても言うことに従わんやろから、補給しに戻れって言うといたで》

《しかしそれでは、また同じように命令違反をしかねん》

《大丈夫や。あの子らも分かつとる》

《誰かが木曾達を見てやらねば——》

熊谷少将がちらりと海原を見た。

海原は丁度その瞬間に立ち上がって、一言。

「席を外すぞ。すぐに戻る」

「え、あ……はっ!」

《熊谷少将?》

通信室から出て行く海原を見送ってから、熊谷少将は訝し気な表情をしたまま口を開いた。

《いや、海原元帥が席を外す、と……》

《戻って来るのを工廠で待つんやろ。ここの指揮官は熊谷少将やから

動かれへんと思ったんちやうか》

《私の代わりに、木曾達を見に行つたと……?》

《本当なら熊谷少将の仕事やけどな。それでもどうにかしてくれって頼んだのは君や、文句は言えんで》

《……》

戦場の全ては計にあり——まさに海原を表すにぴったりだと、熊谷少将は自嘲した。

《戦線復帰をさせても、させなくとも、両方に対応出来る術というわけか》

《見知つた熊谷少将ならいざ知らず、流石の木曾も元帥相手に無茶は出来んやろからな。それに木曾らが初めて受け止めなアカン深海棲艦の事実を知つたのもある。動揺やら混乱を落ち着かせられるんは、ウチの司令官しかおらん》

《そ、そうだ、深海棲艦！ 戦闘中だつたらうに、何故木曾達は動きを止めたんだ！》

《多分、足を掴まれたんや》

《足を掴まれた……!? 清水中佐の、とは、そのことか——!》

《ウチも実際に目えにするまでは意味わからへんかったわ。でも、あれは深海棲艦やない。ウチらでいう妖精に近いもんかもしれん。深海棲艦ならただ掴むだけなわけあれへんしな。あの瞬間に確実に沈められたはずなのに、それをせえへんかったなら、そうとしか表現できへん。ウチら艦娘と深海棲艦っていう対の存在があるなら、妖精の対があつておかしくはないやろ?》

《しれん、とは……やはりまだ詳しくは分からないか》

《分かつたら苦労せえへんて! でも、おもしろいくらいに全部が噛み合つとるんは確かや。深海棲艦の研究員がこのタイミングで偶然にも引き込まれるか? それに木曾達が哨戒するのに今まで戦闘が多かつたにしろこの瞬間にはいはいって動き出すんか? 恐らくはウチの航空支援に気づいて、戦力が増加される前に叩いたろって出て来たところを捕まえられてるんやで、相手は》

《しかし海原元帥はどうして敵の動きに気づけたのだ。資料から、ど

う読み取ったというのだ?》

《大本営で会談があったんや。後で報告があがるかもしれんけど、井之上元帥と一緒に考えてたっていうなら全てがこつちに傾いとるのも説明がつく。バケモン同士の戦略やで? 誰がそんなの予想出来るんや。それに……楠木少将と同じパターン、やったんかもしれん》

楠木、と鸚鵡返しに呟いた熊谷少将の腰が、すんと椅子に落ちた。

《共鳴、というやつか》

《分からんけどな。ウチかて全部が全部考えられるわけやない。木曾も第六駆逐隊の子らも、戦わなアカンっちゅう気持ちがあった。それが先行してただけやったんや。だけっちゅうても変な感じやな……まんなま言わしてもらったら、大湊水雷団の戦意を否定せずに司令官は利用したんやと思う。戦意を餌に相手を誘き出して、安全を期して手数だけは多いウチを選出したんかもしれん。相手からしたら艦載機だけじゃどれだけの戦力があるか推察しきらんやろからな。軍艦時代やったら予測できても、艦娘である今、練度によつて統制力も変わってくるウチらを熟知してないとできひん戦術や——そんでアメリカ海軍までお出ましときたら、相手のことながら気の毒なもんやで。戦力把握どころの話じゃないんやから》

《そう、か……しかし、それならば説明できずとも、腑に落ちる》

《腑に落ちる? 何がや》

《深海棲艦が無限に湧き出る、その理屈だ》

龍驤の言葉を噛み砕き、熊谷少将は言った。

《妖精によつて従来の何十倍という力を得る艦娘と同じく、深海棲艦も妖精のような存在によつて無限に湧き出しているのかもしれないだろ》

《そうやって直接言われると、複雑なもんやが……それを解明するための人が、これからやって来るんやな》

切実な龍驤の声音の背後では、いくつもの風を切る音が聞こえて来た。

攻撃を終えて戻ったのであろう艦載機が、着艦し、また発艦してい

くような音だ。

器用に通信しながら戦線を維持できるのだから恐ろしいものだと考えながらも、熊谷少将は頼もしきの方が勝っている様子で、抑揚を取り戻した声で言う。

《龍驤は龍驤、艦娘は艦娘だ。そこに違いを求めたりはせん。私が言うまでもないが……意味なんてものは後からついてくるだろうからな。今はそれを胸に戦うしかないだろう。ただ、考える事が無駄だとは思わない》

《ほお？ 言うやん。海原流を理解してきとるなあ》

ははんと茶化すように笑った龍驤に、熊谷少将は見えないだろうに首を横に振りながら言葉を返した。

《まだまだ、私は彼と並び立つ軍人ではないと思いきわされたよ。海原元帥がかような状況を作り出すなどあり得んと、疑ってしまった。だが考えれば考えるほど、思い出せば思い出すだけ、全て計略の内にあると実感させられる》

《大袈裟な表現、やないんやろなあ》

《龍驤。海原元帥が私になんて言ったか分かるか？》

《もつとシャキツとせえ！ とか？》

《はは、それならば私も背筋が伸びるといふものだが、残念ながら違う》

熊谷少将は机の上に集まってまるで軍議でも繰り広げているかのような海原の残していった妖精達を見つめて言った。

《一挙に仕事をこなそうとする私の愚かさを許してほしい……などと、謝られてしまったよ》

《は、はは、あははははっ！ 謝られたて！ あっはっはっはっはっは

！ ええなあ熊谷少将！ 快拳やん！》

《か、快拳だど？》

《山元大佐も、清水中佐も、ほつとんどの人らは怒鳴られてんねんで？

それが、謝罪の一つで任されてるて、はああ、流石というか、なんというかやなあ……》

頭上に疑問符を漂わせている熊谷少将に、龍驤は笑いをこらえなが

ら言う。

《最初から君を当てにしとつたんやて！ 謝罪やない、嫌味や嫌味！
くつくつく、なんや司令官、バケモンじみとる癖して妙なところで我
儘な人間味出しよるやんけ》

《い、嫌味い!? そのような、私は確かに海原元帥に及ばなかったかも
しれんが——!》

《せやから任されたんやがな! あの人は艦娘専門。戦場については
いくら策略を練られても実地を知るんは君のが上や。最初から任せ
るつもりがワタワタしとつたら、そら嫌味の一つくらい言われるがな
! にしても、厳しいもんやな、あはは!》

はは、と力が抜けたように熊谷少将は笑う。

《き、厳しいどころか……厳し過ぎるではないか! 大湊警備府の全
員の人命が掛かっている問題だぞ!》

《それがウチら軍人の仕事やろ? 異常に思えるけど、あの人はあれ
が毎日のことや。数百っちゅう艦娘を抱えとる人やで。君も状況は
違えどそのはずやと思つたんやろうけど……そこらへん、どない?》
《っ……ああ、くそ! 自分の無能さをここまで知らしめられて尻拭
いまでさせたとあつては大湊警備府の恥だ! 龍驤、残りの燃料は持
ちそうか!》

《ふふふ……艦載機飛ばしとるだけやから消費はそこそこやけど、
まだいけるで。支援が到着する頃には丁度交代出来るくらいや》

熊谷少将は拳を握りしめて立ち上がり、妖精を見やる。

妖精はびゅんと飛び上がって海図へ群がると、各々が手に持ったペ
ンで海図へ線を引き始めた。一目で龍驤や木曾達、そして支援艦隊の
予測航路であると見抜いた彼は一息に言う。

《支援艦隊と入れ替わりに全力で大湊警備府へ帰還しろ! 補給を済
ませたら即時再出撃、全力で残存戦力を殲滅して津軽海峡、平館海峡
を一掃するぞ! 木曾達も修復材を使用して同時に出撃してもらう
! これ以上、海原元帥にドヤされてはかなわんからな!》

《くくっ……あいよ、了解ッ! 帰還分だけ残して、あとは大盤振る舞
いや! 艦載機のみんなあ! お仕事お仕事!》

通信にさらに激しい風を切る音が入り込み、龍驤の楽し気な笑い声が響く。

熊谷少将の目には勝利への炎が燃え上がり、妖精達も気合十分といった表情で一糸乱れぬ隊列を組んで見せた。

「妖精よ、ここからが本番になるぞ——速戦即決といこうじゃないか——」

妖精達から最敬礼された熊谷少将は、にやりと不敵に笑う。

そして次の瞬間には、通信が復帰した。予定調和が如く。

《ザーツ……ザザツ、ザ……ちらマルフタ！　こちらマルフタ！　ちつくしよお……まだ復帰しねえのかよ……！》

《こちらマルヒト。通信の復帰を確認した。木曾、状況を報告しろ》

《熊谷少将……！　やつとだ……津軽海峡中央部で深海棲艦が出現した！　駆逐艦八級が三隻と重巡り級が一隻の小規模艦隊だ！　それ以外にも——》

《全て龍驤から報告を受けている。早急に大湊警備府に帰還し、修理と補給を済ませてくれ。支援艦隊とともに敵深海棲艦を殲滅する》

《了解！　すぐに戻る！》

「自称一般人、か……。はっ、無理がありますよ、海原元帥……」

ぷつぷつりと通信が切れたあと、熊谷少将はヘッドセットを外しながら呟いた。

そうして、大湊警備府のどこかで軍靴の音を立てているであろう護国の鬼神に向かって、精一杯の反骨心を示すのだった。

ただ、勘違いと知らぬままに。

戦②

哨戒中、奇襲部隊と思われる深海棲艦に遭遇。交戦した大湊水雷団の旗艦木曾が小破。第六駆逐隊の三名も脚部を小破したと連絡を受けた工廠は緊迫した空気に包まれていた。怒号が飛び交い、すぐに艦装修理と艦娘の入渠が出来るように準備を整えるため各員が奔走する。

工廠部一班の面々は艦装修理用のカプセルを使用できるようにと再点検、再々点検と交代しながら準備を進め、二班は平時では艦娘用の入浴に使われている浴槽へ修復液を流し込み、三班は杉村班長を筆頭にして艦装の損傷が本当に軽微だった場合人の手で迅速に修理した方がよいと木曾達に戻り次第すぐに艦装を回収できるようクレーンを操作していた。

昨日今日に来たばかりの新人工員が戻ってこないことが気がかりではあったが、全員がそれどころではない様相である。

「クレーン準備！ かかれ！」

「かかれ！」

「カプセル、使用可能です！」

「おい、工具をここに置いておくな！ 邪魔だツ！」

「今さげます！ ちよつとそこ開ける！ 修復液の追加が搬入できん！」

大湊警備府にとって大規模な戦闘である。第六駆逐隊ならば目を白黒させながらもきつとすぐに修理に入れるだろうと考えるが、木曾はどうだろうか。そこだけが問題だった。出撃前には海原に掴まれた腕は問題無いかなどと口を利いたが、いつも通りのぶつきらぼうな返答をもらっただけ。

若き工員新井は、数分して準備が整った工廠内を見回したあと、緊張を保ったままで一人呟いた。

「海原さん、戻ってきませんかね」

誰にともなく呟かれた言葉に顔を上げて反応したのは、杉村班長である。

「説教食らってるうちに奇襲にあったとありやあな……執務室……は、無理だろうから、居室待機だろう」

「熊谷少将は？」

「今、通信室から連絡があった。こっちに応援が来るってよ」

「応援ですか？」

「ああ。大方、木曾が戻って来てまた暴れるのを予想して訓練兵を何人が寄越したんだろうよ。前みたいに俺達だけで止めろってのは、流石にな」

「あー……大の大人が数人がかりで押さえ込めるかどうかって、本当にとんでもない話ですよ。ましてや、ただ工廠内に引っ張るだけですよ？」

「……ああ」

「杉村班長、今回は無しですからね」

新井の声に、杉村班長は苦々しい表情を見せた。

「わかってる。二度も怪我しちや、木曾に悪い」

「杉村班長のお身体ですよ！ 全員が気にしてるのは！」

すると工廠の全員が、各々の作業を進めながら頷いたのが杉村班長の目に入る。

ばつが悪くなつて「誰が怪我するかよ」と吐き捨てたが、その言葉を鵜呑みにするような工員がいるはずもなかった。艦娘の怪力を誰もが知っているからだ。

あの時は杉村班長が木曾の腕を掴んで、振り払われて転んだだけで済んだ。しかし杉村班長の体躯が細かったからというわけじゃない。長年、造船業に従事し続けた彼の身体は鍛え抜かれた軍人とは筋肉の付き方こそ違えど、相応にがっしりとしている。艦娘を除き彼に羽交い絞めにでもされようものなら、抜け出せる者はそうそういないと言つていいだろう。それに、艦娘の艦装も見た目にすぐわない超重量を誇る。そんなものを日々扱う工員の中でも頭抜けて体力がある杉村班長がまるで子どものように転がされたとあっては、皆の心配も当然と言えよう。

「応援が来るなら、その人に任せましようよ」

「俺達の仕事なのにか？」

「引つ張り込むことは仕事ではないじゃないですか！ 艦装の修理、艦娘の入渠の世話、それが工廠部の仕事だつてご自身が口を酸っぱくして言つてたことでしょ？」

「そりゃ……んん」

返す言葉も無いといった顔をして腕組みをする杉村班長に、新井はわざと溜息を吐き出す。若手であれ大湊警備府の工廠に就く工員の一人ならば、軍人では無く軍属だと言い訳してでも上司の無茶を止めねばならない。

そうしなければ頑固な彼は止められないと思つたのだ。

艦娘が悪いわけではない。それでも彼女らには超常の力がある。

一歩間違えば大怪我しかねないのは工廠における作業でも同じだが、リスク低減のためならば極力関わらないことを選ぶことは、彼らにとって別段おかしなことではない。故の言葉だが、工廠部の全員が思うところがあるように、新井みたく言葉をはつきりと紡げずにいた。

その原因は、新人工員海原の言葉だ。

彼は艦娘を人と同様に扱う。挨拶し、話しかけ、おかしいと思えば立場を顧みず咎める。木曾の腕を掴んだ時のように。

その光景は、あまりに自然だった。飯を残すなら相応の態度をとれだの、食器を丁寧に置きなさいだのと、ただ叱る大人そのものだった。あの光景を見てしまつては、艦娘の力や、それによる怪我を恐れている自分達が情けなく思えるのも、また仕方がないところなのかもしれない。

「……海原さんもきつと分かりますよ。帰つて来た木曾を見れば」

不満そうに言う新井に、また、工員達から曖昧な返事ともつかない声が漏れ出す。

木曾達はいつ戻るのだろうか、なんて誰かが言おうとした時、工廠の鉄扉が乱暴に叩かれた。

海へ出られる方では無く、工員達の出入りしている大きな鉄扉の方である。

応援に寄越された軍人かとそれぞれの顔が向いた時、さらに扉が乱暴に叩かれた。

ガンガン、と工廠に響く拳を打ち付けるような音。

「入ればいいのに」

新井が小さな声で言うと、代わりに杉村班長がドラ声を上げた。

「開いてるぞ！ 所属は！」

大湊警備府付、教育部隊〇〇班——！ などと続くと思い込んでいたところに、心臓を穿つような低い声が届く。

鉄扉越しであるというのに、その声は全員を無意識に整列させた。

「——海原だ。木曾の様子を見に来た」

海原？ 新人工員が帰って来たのか？

混乱する全員をよそに、鉄扉が開かれ、声の主が姿を現す。

「あ、え……？」

本能的に整列した場の雰囲気呑まれ参列した新井は、口を半開きにした。

海原だ。間違いなく、新人工員の彼だった。

しかし海原は清々しい青色の作業服ではなく、皺ひとつない濃紺の軍服に身を包み、汚れや傷のあつた両手には純白の手袋。人懐っこい笑みが覗いていた作業帽子ではなく、重苦しい金色の紋章を輝かせた軍帽のつばの向こうから、大湊警備府にいる教官達が裸足で逃げ出しそうな眼光を放っていた。

新井のみならず杉村班長までもが唾然とする中、海原は軍靴を鳴らし工廠へ足を踏み入れると、右手を後ろへ回し、左手を軍帽のつばに添えて言った。

「みなを騙すような形になってすまない」

「う、海原さん？ え？ あれ？」

人は驚愕の度合いが大きいと、得てして質の悪い冗談だと思い込む節がある。

現実味が無ければ冗談であると断定し、笑ってしまうのである。

「今は冗談言ってる場合じゃないんですよ海原さん。大湊水雷団が哨戒中に——」

半笑いだが、新人が職場に馴染もうとする冗談にしては本当に質が悪過ぎるとして諫めようとする新井に対し、工廠部二班、力武りきたけという男が喉から絞り出すような声を上げた。

「新井、馬鹿、やめろ！ 下がれ！」

ひそひそとした声に新井が振り返るのと同じくして、海原の重苦しい声が工廠に満ちる。

「木曾達が哨戒中に深海棲艦と遭遇し交戦した事は把握している。そのために、私が来たのだ」

「どう、して……」

それでは意味が分からない、といった顔ばかりが並ぶ。

疑問の声を上げた工員の見た海原の胸中は、酷いものであった。

（やつば着替えてから行くんだったかなあああ!? でもそれだと邪魔しに来たんですかって思われるかもしれないし、いやそれは間違えてないんだけどまもる的には違うと言わなきゃまずいつていうか龍驤どころか井之上さん繋がりでアメリカの艦娘まで巻き込んだりしててやばい状況なんです助けてください——なんて言えるかアツ!!
説明できないよ！ だって！ まもるは！ キソーが横柄で困るって言われて来ただけだからあ！）

もちろん、熊谷少将に多大なる迷惑をかけている自覚があるため慎重に言葉を選び発言する。

木曾達が横柄なのは本人にも問題はあるだろうけど、根本的なところはコミュニケーション不足なんじゃないですかあ!! などと大見得を切った手前、海原に退路など存在しないのだ。

「どうして、か。説明の必要があるか？」

説明しなきゃダメでしょうか？ という海原の言葉は威厳スイツチにより軍人変換がかけられ、体裁を見事に保ったまま。

全員が唾然としているのはきつと自分の見てくれではなく、こいつは工廠に何しに来やがったのだと思っ込んでいるに違いない——と、思っ込んでいる。

一部は海原の思っ込み通りと言えよう。海軍元帥がどうして新人工員のフリをして大湊警備府に来ていたのかという疑問。加えて、今

になって本来の役職を明かしてまで現れた理由を知りたがっている。説明の必要？ あるに決まっている。

杉村班長が堂々と、いや、虚勢で大声を上げた。

「海原——！……元帥閣下、は、その、どのような理由でこちらにいらつしやつたのでしようか！」

海軍元帥を前にして退かぬ、軍属ながら見上げた根性と度胸である。

まるでその度胸に免じて答えてやろうという風に、海原はゆっくりと言った。

本当のところは、邪魔をして申し訳ないと謝罪の意を込めて。

「具体的な内容については、秘匿事項のため口に出らん。が、そうだな……大湊水雷団が理由であるだけ、言っておこう」

（艦娘が横柄だからちよつと見てやってくださいって熊谷少将から書状が届いたから顔を見せに来たんだよ、なんて言えるわきゃねえだろ！ 木曾達にもプライドがあるし熊谷少将の立場もあるんだぞ！

考えろ少しはアツ！ そうね、考えられるわけがないよね、関係ないんだもんね）

自分でボケて、自分でツツコミを入れる。ある種の自問自答に似た胸中のまま、さらに説明を求められる前にと言葉を紡いだ。

嘘はつかず、相手を納得させるに足る理由と、自分が身分を隠していた理由を述べねば、と。

「秘匿事項とは言え納得がいかんと言われては私も立つ瀬が無くなるので、ここで明かせることだけ……。一言で言えば、視察のようなものであると思ってくれ。大湊警備府が正常に運営されているか見に来たのだ」

大湊水雷団が理由、と海軍元帥が口にした時点で、全員が意味を理解した。

木曾達が軍人に従わないと伝わってしまったのだと。ほんの少し前まで艦娘に対する処遇が酷いものであったと知る工員達は、まさか大湊警備府の艦娘が本格的に処分されるのではと危惧した。

しかし、続く言葉に安堵し、さらに混乱する。

「熊谷少将がいるのだから正常に運営されているだろうと踏んでいたが、それについては、物の序ででな。諸君らの話を聞いてどうこう、とも考えていない。私は私の仕事をしに来ただけだ」

海原を本当に新人工員だと思ひ込み好き勝手に話していた工員達は喉を鳴らす。

別に目的があつたのなら、一体彼はどのような——理由をさらに追及する前に、工廠の各所からブザーの音が鳴り響いた。

「——帰還だ！ 水雷団が戻つたぞ！ 各員、持ち場につけ！」

一斑から三班の班長らの掛け声。しかし、誰もが動こうにも動けずにいた。

無論、海原が入口に立つたまままで、敬礼の一つでもして作業に戻つてよいのか否か考えあぐねているのだ。

待てを言い渡された犬のようにソワソワする工員達に向かつて、はっとした海原は数秒経つて言った。

「私のことは気にせず、戻ってくれ」

そうして、ざあつと蜘蛛の子を散らすように工員が持ち場へと走っていく。

* * *

大湊水雷団の一同はヨロヨロとした足取りで工廠まで来ると、海面から続く階段の手前に単縦陣の状態で整列してクレーンを待っていた。

先頭にいた木曾は列から離れて、すぐ後方にいた電の背を押し、その後ろの響にも続けと促すように顎を振る。

クレーンが下ろされ爪が頭上までくると、電は手を伸ばして自らの艤装に引つ掛けて声を上げた。

「オツケーなのですつ」

するすると巻き上げられるワイヤー。電から艤装が外され、がごとくという音がして、一瞬だけふわりと足元が浮いたあとに、ぱしやりとまた海面へ着水した。

同じように、響、雷と艤装が回収されていく。

木曾は、工廠に背を向けたまま「すぐ戻るから、すぐに、出来るだけ、すぐに」と何度も呟き歯を食いしばっていた。

杉村班長から「木曾！ 艤装回収だ！」と声を掛けられると、振り返って言う。

「燃料と弾薬の補充だけでいい！ まだ航行可能だ！ すぐに海域に戻らねえと——！」

工廠に、やはり、という空気が漂う。

別の工員が木曾へ怒鳴った。

「装甲剥離したんだろうが！ 高速修復材の使用許可が出てるから一度戻れ！」

「だから！ 航行に問題はねえよッ！ 大本営の艦娘が戦ってるのにのんびりしてられっか！ 応急修理は妖精がしてくれたから、補給だけで——」

木曾が怒鳴り返すも、声は途切れた。

かつん、かつん、というコンクリートを叩く音とともに現れた影に、瞠目する。

「は……？」

「——修理が先だ。戻れ」

「え、なん、で、新人、お前……っ!?!」

「騙して悪いが、新人ではない」

軍服姿の海原に木曾は色を失った。

たったの一言。声に込められた圧に、自分に向けられた言葉ではないのに工員が委縮し、後退る。

「大湊水雷団が傷ついたのは私の落ち度だが、無茶をさせるわけにはいかん。早く修理に戻れ」

自分の落ち度と言い切った海原。木曾は龍驤の言葉を反芻し彼の言葉の意味を解する。

（予測してたんだ……龍驤が来たのも、ギリギリまで手出ししなかったのも、コイツが……。工員のフリをしていたのはどうしてだ？ 俺や電達に近づくため……いや、大湊警備府がどういった所か見に来

て、もう処分を決めた、のか……？)

「だ、大本営から来たんだろ、龍驤も、お前も……」

「そのようになってる」

(そのように、だあ？ 大本営の考えてることなんざ知らねえが、俺は、この大湊警備府を守るために配属されたんだ。……命令違反をしても飛ばされなかった。今更ここで退けるかよ——！)

空回りを自認する木曾は、それでも、第六駆逐隊と共に大湊水雷団としての責務を果たすべく戦いを望んだ。まだ戦えるのだから、龍驤や、支援に来るらしい艦隊を尻目に修理なんてしてられない、と。

艦娘として素晴らしい戦意と褒めるべきだろう。しかし、それは日本海軍において、海原を除いた場合である。

たとえ偶然がいくつも重なって、奇跡か、はたまた悪夢のように現れた深海棲艦と戦うためであっても、艦娘が傷つくくらいならば逃げ出してしまえと平気で言っただけの男である。彼という歯車もまた空回りを続けている。

「どれだけ深海棲艦がいると思っただ……駆逐級も、バカみたいに、湧いて出て……！」

木曾も、第六駆逐隊の皆も、第二次大侵攻を知っている。

人づてに聞き、報告を見て、連日報道されていたのも目にした。

三年戦い生き抜いた彼女らでさえ想像もできない数の深海棲艦を殲滅した艦隊の指揮を執った男であると理解しても、受け入れられない。

工廠に戻ってきたら新人が実は軍人で、まして元帥だった？

だからどうした。戦っているのは俺達だ、と怒鳴り上げる。

「知っている」

「知ってるからなんだってんだよ！ 龍驤が戦ってたぞ！ 支援艦隊が来るまではアイツ一人だ！ いくら強いからって放っておけるかよ！」

「それも、分かっている」

クレーンに艀装を回収された第六駆逐隊が、海から工廠へ続く階段から木曾を不安そうに見つめていた。

それよりも高い位置から、後ろ手を組んだ状態の海原が大湊水雷団を見下ろす。

冷たく、凍えそうな声だった。

工場にいる全員が目を伏せてしまいうくらいに。

木曾も続けて声を上げられず、うう、と呻いた。

海原は――

（ぜーんぶ俺のせいだよオツ！ 龍驤に任せっぱなしなのも、木曾が怪我したのも、六駆の子達が泣きそうなのもぜーんぶまもるのせいです！ ほんつとうに申し訳ありませんえええんツ！ 仕事が終わつたらきりもみ回転式土下座でも何でもします！ 殴ってもいいです！ 蹴ってもいいですし踏んでも構いません！ それはそれでアリです！ いや違う！ そうじゃないだろ落ち着け！）

――胸中で既に謝罪していた。

それでも今は仕事をせねばと、険しい表情で言う。

「龍驤が戦っているのも、支援艦隊を呼び寄せたのも、全ての原因は私だ。熊谷少将にも迷惑をかけることになったが……木曾、お前が無茶をするのと、これは別問題だろう。戦況によっては撤退も視野に入れている。とにかく、修理を先決しろ」

（ヤバイなら逃げりゃいいんだよ！ 木曾達が沈んだら俺は二度と艦娘全員に顔向けが出来んわツ！ とつとと修理してくださいさあい！）

海原は正直に自分が悪い、と言っているのだが、龍驤や熊谷少将と話していた木曾は言葉通りに受け止められなかった。

修理と補給を済ませて、敵深海棲艦の殲滅に戻らねばならない。装甲剥離と一口に言っても、見た目は右上腕部からべろんと皮膚がこそぎ取られているような状態で、艤装にだっていくつも傷がついてしまっている。

彼女は、心のどこかでずつと理解していて、それを拒んでいた。

海原は木曾にこう言っている。

お前達の戦力を見誤った私が悪かった、と。

もちろん、決してそんな意図はない。

「お、俺の、せいで、撤退するのかよ……」

「そうではない」

「そうじゃねえかッ!! 俺が!! 弱いからッ!!」
「違う」

互いの声がすれ違い、そして木曾が動き出す。
艦装を装着したまま、海面を滑り、工廠へ続く階段へ足をかけた。
が、と音がして階段にひびが生じる。それだけの重量があるなど、今更のこと。

工員達を割って駆け出そうとした杉村班長の前に歩み出た海原は、艦装のまま階段を上がって来る木曾に向かって近づいていく。

「ま、待ってください——」

声も届かず。どんどんと距離が縮まっていくな。

「俺は沈んだって構わねえ! それでも! 仲間が沈むかもしれないのにゆっくりしてられつかよ! 航行出来りや戦えるんだ! だつたら補給を済ませて——」

悲痛な叫び。戦わせろ、戦わせてくれ、彼女らの元へ行かせてくれ。その叫喚を真正面から受け止める海原もまた、必死だった。

もう一段と上がれば完全に工廠へ足を踏み入れるところまで来た木曾が立ちほだかった海原の胸倉へ手を伸ばした。

杉村班長を怪我させてしまった時のように傷つけてしまうかもしれないのに、と考えられる冷静さを欠いて。

「だから俺を行かせろよッ!!」

まずい、と工員達が思ったのも束の間。

下から突き上げられるように胸倉を掴まれた海原は——不動のまま、後ろ手を組んだ状態のまま、衰えぬ眼光で木曾を睨んだ。

「その傷でどう戦うつもりだ」

木曾は確かに、腕も、足も、激痛が走っている。

それが理由で力が出せなくて海原を掴んでもなんともなかったのかもかもしれない。

その真相は、誰にも分からない。

「お前、どう、して……退けよっ!」

「沈ませるわけにはいかんだ、誰一人として」

「ど、退け……って……！」

ぐい、引き寄せる形で力を込めたと同時に、木曾へ一歩近づいた海原は彼女の背に手を回し、力強く工廠の方へと押し上げた。

その拍子に、がごと音を立てて木曾の艦装が床へ落ちた。

「文句ならば後でいくらでも聞いてやる。だが、今は修理だ」

「おわっ!? く、そ……なんで……ッ！」

瞳を揺らして、唇を噛みしめる木曾。

一連の流れを啞然として見つめる工員達。

それから——新たに、工廠へ飛び込んでくる影。

「木曾——戻ったか！」

「熊谷少将……!?!」

走って来たのか、乱れた髪に乱れた呼吸の熊谷少将の手にはレシーバーが握られており、そこから龍驤や支援艦隊であろう艦娘の声が途切れ途切れながらに聞こえた。

熊谷少将が現れたことによって息を吹き返したかのように行動を開始する工員達は、床に転がされた木曾の艦装にクレーンの爪をかけて作業を再開する。

海原はゆつくりと木曾から離れ、熊谷少将をちらりと見て、目を伏せた。

邪魔はしない、と言わんばかりに。

「熊谷少将、お、俺、俺の、せいで——」

木曾が震える声を絞り出す。階段で押し退けられた第六駆逐隊が木曾へ駆け寄り、木曾さんは悪くないと口々に言ったが、熊谷少将は意に介していない様子で大湊水雷団の面々の無事を見るや否や、ぶつかる勢いで全員に腕を回し、抱きしめた。

「お、あ……っつ」

「良かった……良かった……無事だった……よく、よくぞ戻った……！」

「熊谷少将……?？」

「司令官さん……」

「司令官……」

「し、れい……」

「海原元帥もいるから、今は休め。ほんの少しだけでもいいから……な……う？」

命令違反をした自分は、嫌われているのではないかと思っていた木曾。

第六駆逐隊も同じ表情をしていた。ぽかん、と。

かすかに震える熊谷少将に気づき、木曾は頷くしかなかった。

「……わかった」

戦③

「海原元帥……そろそろ木曾にも説明をしてやってください、どうか」
「うむ……」

工廠の最奥にある艦娘高速修復用のポッドに身を浸した大湊水雷団の面々は、自らの指揮官たる熊谷少将と、先ほど本当の身分を明かした海原を交互に見て不安げな瞳を揺らした。

彼女らの裸体が晒される——などといったことはなく、修復用ポッドの前面はすりガラスのような素材で作られており、影すらも見えない状態である。さらには半身だけが高速修復材に浸かっているだけで頭だけちよこんと水面に生えるようにして出ており、熊谷少将と海原はその傍で工員が持つてきた椅子に座っている状態だ。

（説明してやってくださいって、いや、あの……熊谷少将よお……。木曾達を前にして堂々と言えるか？ 君達が横柄だからって書状を寄越してきたから解決の糸口になれたらと遠路はるばる柱島泊地からやってまいりましたと。大本営で君達が哨戒で戦闘して帰って来たら、それはもう手が付けられないくらいに暴れ回っていたことも知っているから、こうして俺が顔を出したんだよと。言えるかアツ!! ただでさえ戦闘が多くとも今日くらいは平穩無事に哨戒を終わらせて戻って来るだろうなんて淡い期待を抱いてたっていうのに、重巡だか駆逐だか知らんが深海棲艦も邪魔してくるしよお！ 邪魔者ばっかりじゃねえかよ!! その筆頭是谁だアツ!! そうです、まもるです）
膝に肘をつけて指を組み鼻先に持つてきて、ふう、と深い溜息を吐く海原の姿に、木曾がビクリと震えた。

海原の内心など露知らず、熊谷少将もまた苦悩する。

（大湊水雷団の全員、戦闘に際しての能力は決して低いわけじゃない。しかし、この突発的な作戦についていくほどの練度はあれど経験値が足りなかった……それも圧倒的にだ。海原元帥は落胆しておられるのだろう……艦娘という存在を肯定し大いなる希望を見出だしておられる方だ。木曾や雷、電や響——たった四隻の戦力しかないと言った時点で私の能力不足が証明されたと言っても過言ではない。何せ

艦種の有利不利を無視して、たった一隻……龍驤のみで深海棲艦を押しとどめているのだから……。己の未熟さを棚に上げて、木曾達のためになるのであれば、口頭で説明してもらって、これを糧にすべきだろう。立場上の恥は、私が甘んじて受けるべきだ……」

熊谷少将はここまで一瞬で考え、後悔し、口を開く。

「木曾達の能力が低いわけでは、ないのです」

「木曾の能力が低いなどとは考えていない」

間を置かず言葉を返された熊谷少将は海原を見た。なら、やはり自分の見立てが甘かったとでも言うのか、と。無論、その通りであるとも考えながら。

ただ言葉にして欲しくないという欠片のようなプライドがあった。それを言われてしまっただけは大湊警備府の過去が否定されてしまうような気がしたのだ。数多の深海棲艦を退け、北方、ひいては本土の防衛を担ってきた警備府である。立地や立場、細かな運用が違ったとしても、柱島泊地を預かる海原と熊谷少将の目的は同じなのだ。

故に、彼は海原の圧倒的な先見性に対して畏怖している。

勘違いだが。

「私の口から、これを説明せねばならんのか」

恥の上塗りを避けるべく、海原は最後の希望に縋っていた。熊谷少将助けてくださいお願いします、と。既に胸中ではまもる式きりもみ回転土下座デラックスエディションが繰り広げられているが、表面上はただ気難しそうに眉根にしわを寄せているだけにしか見えない。

お前が説明しろ、いや、説明してみせろと言っているのだと熊谷少将は瞬時に察知して頭を浅く下げた。

「……失礼しました。では、この説明の機会を名誉挽回の一助とさせていただけますでしょうか」

壮二郎という物々しくも猛々しい名前に見合う鼻っぱしの強さを見せ、熊谷少将は息を吸い込んだ。一言目の重みに耐えるために。

そうして木曾も、第六駆逐隊も目を睜る事となる。

「——皆。この哨戒はいつも通りのルートだが……二つ、違う点があるんだ。あつた、という方が正しい」

「どういう、ことだよ……?」

木曾の声に、熊谷少将は椅子から立ち上がって一列に並ぶポッドに歩み寄って、木曾と雷の間に片膝をついた。

全員を一人一人見つめながら、言葉をゆっくりと紡ぐ。

「現在、北方海域では深海棲艦の増加に伴って防衛ラインの設置が急がれているのは知っているな?」

「前に聞いたね」

彼女らもただ哨戒だけをこなす存在ではない。少なからず情報にはアンテナを張っているし、軍事行動に関しては時代の差はあっても彼女らなりの矜持も方法もある。一切が上手くかみ合ってこなかったから十年という長い歳月をかけて戦争を強いられてきたのだが。

知識も知恵も、戦場において熊谷少将と同程度の認識だろう。

もちろん海原は艦娘に関して言えばこの世界の誰よりも上にある。裏を返せば、それ以外は最底辺である。軍事のぐの字すら怪しいかもしれない。本人も自覚の上で。

「これは誰に責任がある、とは言いつらい事柄だ。敵勢力の増加があれば我々日本海軍はどうあっても防衛ラインを決定し、設置せねばならん。例えばそれが有用であれ無駄であれ関係無くな」

「無駄なことはないと思うのですっ」

電が起き上がらん勢いで言った。ぱしゃん、とすりガラス越しに高速修復材が滴る。

「そう、無駄ではないんだが——無駄に終わる可能性もある。神出鬼没の深海棲艦は今や太平洋、大西洋と、陸地から離れた殆どの海域を支配しているだろう。仮に防衛ラインの設置が完了したとして、それ以降、相手が全く動かなかった場合は戦力を分散させただけに終わるんだ。これがどういう意味か分からんわけじゃないな?」

（どういう意味なんですか? あ、えーと……その他が手薄になるってことか……?）

大湊水雷団は理解し、頷く。一拍遅れて、海原の返事ともつかない鼻息。

「我々が艦娘を建造するよりも早く、敵は数を増やす。対応が間に合

わらないなど考えるまでもない。木曾は……実際に目にしたんだろう？」

「……ああ。あんなの、悪夢だ」

先刻、海上を埋め尽くした光景を思い出して木曾は齒噛みした。

あんな数の深海棲艦をたったの一隻で受け持つと言い切った龍驤の無謀さも恐ろしいところだが、やはり一人では無理があると海原が瞬時に判断しアメリカ海軍の支援まで要請した状況であったことも、修理に身体を落ち着けることしか出来ない今だからこそ深く理解できた。

大湊警備府に所属する木曾の弱みは、頭に血が上りやすいことである。

そして、暁を除く第六駆逐隊の弱みは、自らが踏み出さず先頭を追うことしかしない点である。良く言えば従順。悪く言えば、たったそれだけなのだ。

認めなければいけない。だから熊谷少将は、三年もの間大湊を守つて来た彼女らと己の無能さを堂々と受け入れねばならないと、心に生じる痛みを覚悟した。

海原は知らないまま、心の中で間抜け面のまま、救ってしまおう。

「防衛ラインの設置は国民に安心を与えることが出来る。国内の情勢安定は軍事に直結すると言つていいだろう。我々は嫌われながらも、好かれねばならん。有事の際に都合よく使われ、平時には唾を吐かれる存在でなければならぬのだ。出来れば、後者がこの先ずっと続くべきだと私は考えている……だからな、我々の仕事など知られるべきでもないんだ。それを失念し、必死になつて目先の事だけを処理してきた。私だけではなく、多くの者が……お前達も、そうだ。海原元帥が邪魔をせねば、分からなかつた。防衛ラインの設置に勘づくほどの知能があるのだ。尖兵……先触れ……いずれにせよ防衛ラインの設置よりも早くに内部へ潜り込んで戦力を増加させようとした相手の目論見を叩くに至つた。本当に、邪魔になつたわけだ」

相手方にとっての邪魔、である。

もちろんその通りに受け取れるはずもない。

最初から噛み合っているわけじゃないのだから。

「つ……そ、れは、俺達も、必死に」

「ああ、そうだ。知っている。私が一番近くで見えていたのだから」
互いの欠点を認めた今、では、今度は互いの欠点を補える形であるかを見ねばならない。熊谷少将と大湊水雷団の面々の視線が絡み合う。

私達は、まだ、戦えるだろう、と。

そんな空気の中——やつと事の状態を掴んだ阿呆が一人。

（あ……あ、あああああッ!? く、熊谷少将 teme ヲッ！ 木曾達にチクリやがっ——うーん、だめだ全部まもるが悪いから言い返せねえや。ごめんよ。むつまる達に大人しくしてろって言われた理由が良く分かった。くっそお……情けなさ過ぎるだろうこんな……俺が邪魔しなきゃ分らなかったって、それ、上手い事フォローしてくれてるのかもしれないが、俺の心は大破寸前だよオッ！ 邪魔してごめんてえ……でも龍驤貸したじゃん……アメリカ海軍も呼んだじゃん……きつと後で井之上さんに怒られるんだぞ？ しかも俺だけ！ だから許せよそこはサアッ！）

否。掴んだつもり、勘違いをした阿呆が一人。

しかして艦娘と人の心の本質に寄り添う、一番近い位置にいた。

（……でも、熊谷少将も必死で、木曾達も傷ついて帰って来たって、まだ戦えるし、守りたいって、上司に歯向かうくらいだもんな。熊谷少将は気づかなかったんだ——彼女らの必死さの意味に。木曾達も、熊谷少将がどうして自分達を止めるのか、分からなかっただけで……お互いに大事にしようとしてたから、噛み合わなかったんだろうな）

特大ブーメランを全力で投げて、それが弧を描いて戻って来るのにも気づかないまま。

（ああもう……こうなったら艦娘のためならどんな責任でも負ってやろうじゃないの！ フォローが下手くそでまんまチクリやがった……んっ、事実をつまびらかにしてくれやがっ……事実を、ありのままにつたえた熊谷少将でも、フォローをしてくれるくらいには上司のプライドをギリギリのところで守ってくれたわけだしな！ 今回は

サービスしといたるわって俺の心の龍驤も言ってくれてるぜ感謝しやがれ強面コラアツ！ はあ……これでも、艦娘の指揮官なんだ、俺は。面目躍如を果たさなきや嘘になるだろ、こんなの見せられてさ」
「邪魔をして悪いとは思っている。本来ならば、私が来るべきではなかった」

海原は素直に認めるも、歯車がかみ合っていないのならば、正しく伝わるわけもない。

しかしながら決してそれらが悪い方へ作用することは無かった。

誰もが、誰かのためにと動いているから、かもしれない。

「海原元帥……本当に、ご期待に添えず、申し訳ございません——」

片膝をついた状態で、部下たる木曾達を前にして頭を下げて見せた熊谷少将に、木曾も、雷達もぐつと唇を噛んだ。

頭を下げることになったのは間違いなく自分達のせいだ、と。

もちろん、そんなことは無いのだが。

「何故頭を下げる、熊谷少将」

「それはっ……」

体裁だけは保っていたい。平たく言えば、艦娘の前では恰好を付けたままでもいい、例えばバレバレであっても。

海原は自分が大湊警備府の軍務を邪魔したと思っていながらも威厳スイッチ全開。厚顔無恥の一手手前である。むつまるが今にも飛んで来て鼻っ柱にビンタを食らわせそうなものだが——修復ポッドの周囲にふわふわと寄って来た妖精達は、ニコニコとした表情で——艦娘に寄り添った。

「お、わっ……な、なんだよ、いきなりくつついて、くつ熊谷少将！

こいつら、いきなり……！ や、やめろってくすぐってえから！」

「あははっ！ やめてよ、もお、ふふふ！」

「わわっ、電の髪の毛に潜り込んで、わあっ」

「悪くない……かもしれない」

（あ、あああ、妖精もフォローに……すみませんほんと……）

胸中で土下座し過ぎて、既に海原は地中深くにある。

頭だけを出して号泣した状態の自分を思いつつ、海原は一つ咳払い

をした。

「頭を下げるな、熊谷少将。私が来なければきつと滞りなく哨戒を済ませ、いつものように過ごしていただろう……時間の前後があつても、熊谷少将の考えを彼女らは知つただろうし、何より、彼女らは熊谷少将をよく好いている」

だろう？ と海原が目を向ければ、木曾は目を伏せたが、頷いた。

雷達は何度も何度も、頭を縦に振る。

「ほら、どうだ。必要なのはちよつとした切っ掛けに過ぎなかつたわけだ。いずれ工廠の者も彼女達の想いに気づくだろう。だが……そう、だな……一つだけ」

面目躍如を果たすならば、仕事をこなしたと言えるようにするならば、今しかないと海原は苦渋の決断を下した。

彼にとつてそれはこの世の何よりも恐ろしく、苦しく、そして心に激痛を伴うものだった。

己を棚に上げて艦娘を叱ること——それは海原が一番やりたくないことである。

椅子に座つたまま、背を曲げて膝に肘をついて、指を組んで前傾姿勢で軍帽のつばから眼光を放つ。

見る者全てを凍てつかせる海原の姿に、大湊水雷団も、熊谷少将も、喉を鳴らした。

声が聞こえぬのを良い事に、妖精はそれぞれの反応をしていた。

ケラケラと笑う者。じとつとした目で睨む者。お前が言うなど徒党を組んで抗議する者。その徒党は一瞬で、それもあつさりと金平糖を寄越せという意味の分からない抗議になる。

全てを聞き届けながら、海原は堂々と無視をした。うるせえ、と。

「木曾」

「お、おうつ……あ、いや、はいっ」

「人を守りたいか」

「……はい」

「ならば、分かっているな」

「……」

「人を守りたいと言って、どうして人を差し置いて己を優先させるんだ。言わねば分からぬほど愚かなわけでもあるまい」

「……はい」

「雷、それに電に、響も」

「は、はいっ」

「なのです……」

「う、ん……」

「木曾があのままできて、良い結果になると考えたか？」

「それは……！」

「考えて、なかったのです……」

「……そう、だね」

「仲間だろう」

「仲間よ！」

「なのですっ！」

「彼女は、私達の旗艦で、仲間だよ」

「ならば、お前達も木曾と同じように考える必要がある。どうすれば互いが良い結果を得られるか。その過程において不利益が生じても、最終的に得るものが多い方を選ぶべきだと助言してやらねばならんだろう。どうだろうか」

第六駆逐隊の面々は、深く頷いた。

彼は、これ以上は心が壊れると——もちろん海原の——溜息で、言葉を締めくくった。

「私が言えたことではないがな。お前達は賢い。誰がどう言おうが、それは間違いない」

(それに可愛い)

まるで自身の心のバランスを保つように言ってから、海原は立ち上がる。

「これ以上は本当に邪魔になりかねん。龍驤も待っていることだ……熊谷少将と大湊水雷団に任せるとして——私は大人しくしているとしよう」

「どちらへ？」

熊谷少将も立ち上がった。そうして問えば、海原はきよとんとした。

「歓待の準備をせねばならんだろう。アメリカ海軍の艦娘に手伝わせるだけ手伝わせて、じゃあお疲れ様でしたと追い返す気か？」

「海原元帥にそのような事——！」

熊谷少将の言はもつともだが、海原は無言を言わさず。

（バツ、お前、バツカ！ 本当に仕事の邪魔だけしてましたって井之上さんに言ったら日本海軍から追い出されるわ！ 帰って大淀達にも怒られるだろうが！ それにアメリカ艦だぞ!? アメリカ艦！ フウー！ ……んんっ。日本海軍の面子もあるしな、ちゃんと彼女らにお礼が出来るように動きますよ！ 任せてください！ 社畜なんで！）

「なに、接待の一つや二つこなせんで何が国畜か。心配しなくてもいい。すぐに修理が出来るように準備しておくのと、食事の用意を言いつけるだけだ。ああ……そうだな、いくら私と言えど勝手に動くのは憚られるか。熊谷少将、どうだろうか？」

「大湊警備府どころか、如何な拠点であれ海原元帥閣下の指揮下でありますから……それは、構いませんが……」

「ならば結構。では、任せたぞ」

「……はっ！ 速戦即決で、問題の解決にあたります」

「速戦即決か——ふむ、良い響きだ。大湊水雷団の迅速さに期待しよう」

最後の最後まで恰好を付けて、海原は歩いていく。

高速修復材を用いた艦娘の修理は、艤装にも影響を及ぼす。

妖精も手伝うとあれば通常の修理の何倍もの速さで戦線復帰が可能なそれは、この戦争における人類と艦娘の強みである。しかしいくらでも使えるもの、というわけではない。艦政本部の明石達が開発した高速修復材には大量の資源が投入されており、妖精の手も加えられたもの。原理のおおよそは分かれど、修復液に根本が酷似している以

外は全くの別物であるために、湯水のように使っては開発より尽きる方が早いなど言わずもがな。虎の子渡しの運用は得策ではない。

しかしここに来て躊躇いなく使わせたということは、そういう事だと熊谷少将は海原が去って行った道の先を見つめて唸った。

「な、なあ、熊谷少将」

「うん？ どうした」

「お、俺、本当に悪かったと、思ってるよ……元帥に言われて、分かったんだ」

木曾のしおらしい声に、熊谷少将は軍服が汚れるのもいとわず、どっしりと腰を下ろしてあぐらをかいた。

「そうか」

「守りたいだけじゃ、ダメなんだな」

「……ああ」

「戦うだけでも、ダメなんだ」

「……そうだ」

「それを熊谷少将が、してくれてるんだよな」

「……ああ、ああ」

今にも涙がこぼれてしまいそうな木曾が、ぐっと堪えて視線を向けると、熊谷少将もまた同じような顔をしていて、驚いた。

「邪魔だ、邪魔だなどと言って、不器用なお方だよ、あの人は……はは、ああ言って冗談のつもりなのかもなあ。緻密な妨害作戦をこなす傍らで、自分は我々の仲を邪魔している、とでも掛けているつもりなんだろう。本当に、不器用な、はは、は……っ」

「なっ、泣くなよ、馬鹿、やめろよ、なあ、ごめん、ごめん熊谷少将、俺」

「違うんだ木曾、私はな、本当に良かったと思っているんだ。多くの後悔もあって、また、その後悔を増やすところだった」

「後悔……？」

「大湊警備府に固有の艦隊が無いのは、私のせいなのだ」

熊谷少将は語った。普通の修復より短くとも多少なりの時間を要する高速修復材がもたらした懺悔の時を、存分に使った。

大湊警備府に着任する艦娘の多くは捨て艦作戦に使われる前準備として戦闘を強いられる。本当に生まれたばかりの艦娘では攻撃すらも出来ないからと、哨戒に際して戦闘の多い大湊警備府を利用して最低限の装備で戦うことを覚えさせてきたのだ。

そうして駆逐一隻でも落とせるようになった艦娘を、彼は救うためだと自分に言い聞かせて異動させた。

多くは語らずとも、他の拠点が準備の間も無く戦闘の激しい前線に艦娘を送り込む真似をしていたのは知っていた。

熊谷少将が出来ることは、捨て艦作戦を反対して時間を浪費する事では無く、人類を存続させながらも艦娘が生き残れる術をなんとか与えることだった。

長く、それが続いた。

いつしか大湊警備府の戦略は形を成してしまった。哨戒にしては戦闘の多いそれを利用した戦略は日本海軍にとって良くも悪くも結果を残した。大湊警備府に所属した艦娘は、強くなるのだ。ただし、強ければそれだけ利用されるということでもある。

ほどなくして捨て艦作戦が中止された後も、熊谷少将は多くの艦娘を育て、送り出してきた。戦場で少しでも生き残れるようにと様々な戦術を考え、それを実行し、艦娘に実感させ続けた。

それを龍驤はきっぱりと否定した。その時点で、熊谷少将は気づいていた。

間違っただけではいなかった。ただ、正しいとも言えないのだ、と。

「俺達が警備府で一番長いってのは、そういう……」

「ああ」

ぴびぴ、と修復が完了したことを知らせる電子音がポッドから響く。

しかし誰もポッドから出ようとはしなかった。

「じゃあ、俺達もいつか、出て行くのか」

「……分かん」

木曾の問いへの答えは無い。

さらに雷が問う。

「雷達は、役に立てない?」

「そんなことはない!」

続いて、電が問う。

「もつともつと頑張れば、ここにいられるのです?」

「そ、それは……」

尻すぼみになっていく熊谷少将へ、響がとどめを刺した。

「……私達が、嫌いかい?」

熊谷少将はぐつと拳を握りしめ、それから、どんと自らの膝を叩いた。

「嫌いなわけがないだろう! 私の……私の仲間だ! 娘のように可愛がつてきたお前達を、手放したいわけがない! 他の拠点に異動させるなど、今更……」

くそ、と言葉を無理矢理に切って、熊谷少将は項垂れた。

己が撒いた種。己が実現させてきた戦術、戦略。きつとまたどこかの拠点が、大湊警備府で育てられた艦娘を欲するかもしれない。そうすると、ここに来て拒否をしては大湊警備府の戦歴を否定してしまうことになる。

熊谷少将の心に根を張った罪悪感と迷いから紡がれる言葉は、ほんの少しの意地と理性に殴り飛ばされた。

それが、木曾がポッドから器用に腕を出して熊谷少将の膝を殴りつけたのだと気づくのに、数秒を要しただろう。

「木曾……? あ、ああ、傷が、治ったのだな」

もう時間か、と悔やむ熊谷少将に、木曾は言った。

どうして今更と言いたげな表情で、驚きの声も無く。

木曾は哨戒ルートの中で落としてしまったのだろうと、眼帯の無い目を撫でて、ああ、くそ、どうして、今になって、と言う。

「俺は、異動しねえぞ。大湊水雷団の旗艦は、俺にしか務まらねえ」
だろうが、と木曾が声だけを雷達に届けると、当然ね、当然だよ、当然なのです、と三者三様の声が返ってくる。

弾むようできて、力強く、戦意に満ちた声だった。

「力が無いのも、よく分かったよ。だからさ……こんな命令違反ばつ

かの艦隊の面倒を見れるのなんて、熊谷少将だけだろ？」

「木曾、お前……」

「……頼むよ。俺、ここがいいんだ」

顔を上げた木曾の目には、光があった。

「目が、どう、して……！ お前、見えないんじゃない……！」

「は、ははは、分かんねえ。分かんねえけど、見えるよ……こええ顔してんなあ、やっぱ。なんだよその傷」

名誉の傷だ、と言いながら、熊谷少将は俯いた。

ぽつぽつと水滴が工廠の床を跳ねるも、他の面々は全員が希望に満ちた顔で、涙の一つも零さない。

木曾の頭の上に乗った妖精が、ぱしぱしと叩いて意識を逸らす。

「あ？ 何だよ、叩くなって——この目、そうか、お前らかよ」

ありがとよ。木曾から漏れたのは、ただ一言だった。

今まで、心の底から言ったことのない——何気ない一言。

「じゃあ、そろそろ行くかア」

よっこいしょ、なんて掛け声でポッドを開けて立ち上がった木曾に続き、第六駆逐隊が立ち上がる。

一糸まとわぬ姿の彼女らの元へ、妖精達がふわふわと飛んできた。

そこには、新品の制服。

「妖精ってすげえなあ！ どつから持ってきたんだよこれ」

「ぴかぴかなのです！」

「スパシーバ、妖精さん」

「たまには頼るのも悪くないわね！」

熊谷少将も立ち上がって、すつと背を向けた。

「着替え終わったら、出撃を頼めるか」

そして——

「ああ……行くか——」

工廠に満ちる、新たな気配。

着替え終わって工廠の出口へ移動してきた木曾達に、ドラ声が飛んでくる。

「木曾！ てめえ次に特殊塗装がボロボロに剥げてたら手伝わせるか

らな！ いいな!？」

工員達の口から飛び出る言葉に、熊谷少将は苦笑するしかなかった。

戦闘の多い大湊警備府らしいと言えば、そうなのかもしれないと。「んだよ、俺達にすつ飛ばされるお前らに出来んのか?」

心の中では恐る恐るの軽口を叩く木曾だったが、工員達も同じだった。

それでも歩み寄らねばならないと、艦娘と人は近づいていく。

「なつ、てんめえ……!」 杉村班長、言つてやつてくさいよ!」

「俺えつ!?! お前ら、ここで俺になんで……! はあ……話、少し聞いてたよ。熊谷少将も、申し訳ない。盗み聞きするつもりではなかったんです」

修復中の言葉を聞いていた彼らにも、新たな気配があつた。

身分を明かしてまで仲裁した海原という男の真意に触れたのだ。

もちろん勘違いである。

「いや、隠し立てすることではないからな、気にしないでくれ。軍属の者に、などと言うつもりもない。大湊警備府の工廠を任せている君達にしか分らんことだつてあるだろう」

「そう言つてもらえると、気が楽つてもんです。俺達の仕事は、船を直すこと……なんて、思ひ上がりだつたんだと気づきました。彼女らは……ただの船なんかじゃない」

「……そうだな」

「だから、工員でも、俺達は——」

既に出撃準備を整え、艀装を装着した木曾から声上がる。

「いつまで喋つてんだ! とつとと出撃させろ! 早く戦いに行かねえと——」

「だあああ木曾てめえ! こんの……戦闘馬鹿がツ!」

杉村班長を筆頭に、ずかずかと艦娘に詰め寄る工員達。

階段を駆け下りてくる姿にたじろぐ大湊水雷団だったが、続く行動に、ぴんと背筋を伸ばした。

全員が、艀装を叩いたのだ。ばしばし、と。

「暴れてこい！ 帰ったら俺達が直してやつから！」

「マジでお前次に塗装剥げてたら手伝わせるからな、なあ、マジだぞおい」

「装甲へこませるなよ、今直したばっかだからな。頼むぞ」

「あと出来れば血まみれになるな。汚れ落ちねえし怖いんだよ」

「い、一気に言うなよお！ わかったって！ わかった！」

「……ほら、眼帯。もういらねえか？」

杉村班長が差し出した新たな眼帯を受け取り、木曾は既に見える目を覆った。

「いいや、これが無きやな」

それから気合を入れるように頬を叩く。

「よしっ……大湊水雷団、抜錨するぞ！」

はは、と笑い合い、そうして、彼女らは海を往く。

戦④

《こちらマルフタ、こちらマルフタ。木曾だ。龍驤、聞こえるか》

ざあざあと波を切って進む大湊水雷団は、最大戦速を維持したまま周囲を警戒していた。

大湊警備府を発ち平館海峡に差し掛かったあたりから龍驤へ通信を飛ばしたのは、てつきりこの周囲で合流出来るものだと思っていたからだった。

しかし平館海峡に差し掛かってからも、少し進んでからも龍驤らしき反応すら見られなかったため慌てて通信したのである。

《ザ、ザザツ——こちら龍驤。現在地はどこや》

《平館海峡を北上中だ！ 少し前に綱つなしらずかいがん不知海岸を通り過ぎたから、もうすぐ津軽海峡に進入する！ 状況を説明してくれ！》

《さよか。こっちは結界の外周ギリギリのところで押しとどめとる》

木曾の声に覇気がある。

龍驤は額を濡らす汗とも海水ともつかぬ水滴を拭って眉間にしわを深く刻んだまま右手の人差し指と中指を立て、印を結ぶような恰好で津軽海峡中央部にある不可視の結界へ突っ込んで行く艦載機を睨みつけた。

結界は外観を一見した程度では違和感すらなく、潮の流れが速い津軽の海が広がっているようにしか見えない。しかし、龍驤の操る艦載機が一定の距離を進んだあたりで、まるで最初から存在していなかったかのように失せる光景があった。

龍驤は頭の片隅で、これを海原に見せたら「ゲームのバグのようだ」とでも表現するのだろうかと考えて笑って鼻息を漏らした。

《艦載機から結界内部の様子を確認しとるけど、えぐいもんや。一向に敵戦力が減る様子があらへん。ま、どう見ても君らとやりあった重巡がこの艦隊の指揮官級つちゆうことやろうが……——》

《わかった、すぐに向かう！ もう少し耐えてくれ！》

《お、おお……そら、大丈夫、やけども……》

面食らって声に詰まった龍驤に対して、木曾は通信を繋げたまま

言った。

《熊谷少将に聞いた。この哨戒には二つ、違う点があるつて》

《……気合入つとるやん》

ぼつりと呟いた龍驤だが、それは木曾に上手く届かなかった様子でノイズにかき消されていく。

木曾に代わり今度は響が通信に割り込んだ。

《海原元帥は、自分が来なければ、この哨戒はいつも通り終わつてただらうつて言つてた。なら彼は、私達の戦力が最適だつて見てたはずなんだ》

それなのに、と続けた響の言葉は、

《……なのに、私は龍驤さんに、酷く生意気なことを言つたんだ。ごめん》

小さかったが、しかしはつきりとしていた。

《ええよ、気にしてへん》

《——ありがとう、龍驤さん》

龍驤の印を結ぶ手が緩んだ。

少し間を置いて背負つた巨大な巻物型の艤装に手をかけ、展開する。

ばらばら、という音を立て空中に固定されながら開いた飛行甲板に、また不可視の壁の内側から飛び出してきた艦載機が向かつてくと、寸分の狂いもなく着艦を果した。甲板の奥まった部分まではどこからどうみたって金属のそれが、妖精が操縦席から出て来た途端にばさりとヒトガタの紙切れに変わる。

さつと指で挟んで、次々に帰還する艦載機を受け止めながら、龍驤は言う。

《ウチにお礼を言うくらいなら、結界の中で言うべき人に言うたりいや》

《結界の中——もう支援艦隊が来たのかい！》

《ああ、もう来とる。いやあ、さつすが南方で柱島艦隊とやり合った空母と、アメリカさんの戦艦やで。ウチもおるつて言うてもたつた二人で結界の内と外から深海魚どもを押し込めとる》

《そうか……木曾さん、急ごう!》

間髪容れず木曾の返事が聞こえてくると思っていた。

木曾の口から出たとは思えない言葉に、龍驤の口角が自然と上がってしまふ。

《慌てるなつて。俺達より強い奴らが押しとどめてるつて言ってるんだからよ。それにまだ聞きたいことがある》

《ははっ、なんや木曾、そんなコロコロと変わる奴やつたんやな》

龍驤の軽口にも反論せず、木曾は問うた。

《そんな時もある、とでも思つててくれ。それより、さつき響が言つたみたいに、この哨戒には俺達大湊水雷団の戦力が最適だと考えてたみたいだが、もう一つ……防衛ラインの設置の隙を狙つた奇襲艦隊を叩くためだつたつてのは、間違いないんだよな》

燃料か、念か、龍驤とて科学的理屈を上手く説明できない方法で光の粒子を伴つて指に挟んだヒトガタを飛行甲板へ並べ、ミニカーを滑らせるような形で発艦させていく。光に覆われたヒトガタは瞬時に重苦しい金属の光を灯し、操縦席に妖精が飛び込んで——飛び立っていく。

《司令官に聞いたんやろ》

《聞いたつていうか……熊谷少将がちゃんと理解してるか詰められてたつていうか……》

《あ、そう……んんっ、熊谷少将がそう説明して司令官が口を挟んでないなら、その通りと見て間違いないやろ。あの人はそういう人やからなあ……どうしてか知らんけど、書類仕事に関しては間違えたらアカンからつてあれこれ言う癖に、作戦に関しては……はああ》

《く、苦勞してんだな、その、龍驤も……》

《前もやでこれ! 前も!》

《前?》

《柱島艦隊が南方海域開放した時や! ほんつま……大淀がいつちやん苦勞しとるわこんなん。前のは込み入った事情があつたけども……》

最後の言葉は通信に入り込まないようにと意識したのか、非常に小

さなものであった。

《やっぱり柱島の龍驤かよ！ あーくそ、どうりでおかしいと思ったんだよ……初期型が大本営でくすぶってるはずねえもん……》

《まあ、こういうのは冷静になったらおかしい話やと気づくもんや。それと、ウチを柱島に行かせてくれたんは井之上元帥やけどな。型落ちやって理由付きで》

《型落ちが結界から湧いてる深海棲艦を押しさえ込めるわけねえだろ！》

《ははは！ 褒めてくれてどうも！ 君らが頑張ったたらウチはもうちーつと楽出来とったけどなあ？》

《返す言葉もねえ……。で、この奇襲してきた奴らは》

《……はぐれに紛れて南方から潜り込んできた残存勢力……あの時の別動隊が本隊の壊滅に気づいて独立行動に走ったんかもしれん。ここまで潜り込めたんや、相手側で情報共有がされとるのは間違いない。海軍の体制変更のお陰で佐世保も舞鶴も忙しいからすり抜けて来られた、と。でも司令官は清水中佐の事故の話を聞いて一瞬で勘づきよった。決定打は木曾、君や》

《あの、手……！》

《大湊水雷団が聞いてるんかは知らんけど、前から検証が重ねられてたことやったんや、深海棲艦の声と手えについてな。清水中佐の事故以降、これと言った報告があらなかったんは妖精が見えてる人がまだ限られとるっちゅう理由がでかいやろな。清水中佐もそやけど、呉の山元大佐は知つとるか？》

《ああ、反対派の——》

《元、反対派な。司令官にどつかれて今は反省しとるから、反対派って呼ぶのはやめてあげてや》

《どつ……マジかよ。いや、マジだろうな。龍驤、怒るなよ》
《なんや》

《早く戦いに戻らなきゃならねえって、必死でさ、その、あー……海原元帥に突つかかっちゃまって、胸倉を掴んじゃまって……》

《アクロバティックな自殺志願者やな》

《不謹慎なこと言うんじゃないやねえよ!! 俺、艤装展開してたんだぜ、あの時》

《へえ? まさか君、怪我させたんじゃないやろな》

《一步も、動かせなかった。それどころか背中を押されて、修理しろって叱られて》

《……あー》

《逆らう気も起きねえよ、あんなの……。だから、山元大佐の話も、盛ってねえんだろうなってさ》

《盛ってへん盛ってへん! ……つと、話逸れたわ。山元大佐も、妖精が見える軍人なんや。見えるようになった、やな。ほんでも清水中佐の時みたいに出ても足を掴まれるような事は無かったらしい。つちゆうことは、や。ただの予想、予測にしろ——あいつらは人を選んどる可能性がある》

ざあ、ざあ、と水飛沫の音だけがしばし通信を支配した。

《人を選ぶか。基準はなんだろうな》

《それが分かったら苦労せえへんて。でも、なんとなしに、君は見えるんじゃないの?》

《対象はどうあれ、まあ、分からねえとは言い切れねえな。破滅に近い……憎悪、とかか》

《ウチはノーコメント。そうとはつきりしてもうたら、清水中佐を詰めなあかんやろ。これ以降は熊谷少将を含めた上役の仕事や。君は今、しっかり修理して、仲間と一緒に戻って来たんやから、それでええんちやうかな。どや、聞こえるか?》

龍驤の言わんとする事を理解している木曾は、未だ遠く見えない津軽海峡の先にいるであろう戦場への航路へ視線を向け、いや、と否定した。

《不思議なんだ。波の音しか聞こえない》

《……さよか》

《あと、うるせえ関西弁くらいだな》

《君なあ……助けたった上に君にたつくさんヒントも出したった大先輩に向かつてなんやねんなあ! もお!》

《はははははは！ 冗談だって、冗談！ いつもと違う哨戒……一つは、俺達の戦力の確認。精査。二つ目が——奇襲部隊の正体の調査、撃滅か》

《調査して撃滅って、いっぺんに仕事終わらそうとするのはウチの司令官の悪いところや。そこは許してや》

《あとで文句言つとくよ。熊谷少将もいじめられたしな》

《それについては協力したるわ》

ここは、間違はなく戦場である。しかし艦娘の黄色い声は、海を渡っていた。

通信にさらに割り込んで来たのは——件の渦中にいた艦娘の声。

《あの……リ्यूジョーさん？ 一応、作戦中で……》

《サラトガあ！ 考えてみて！ 作戦の発令は聞いてへん！ これは哨戒や、哨戒って頑なに言うしやなあ！ 形だけなツ！ 君も文句くらい言うてええねんで！ きちんと説明して、作戦立てて発令くらいせえて！》

正規空母サラトガの柔らかな声に大湊水雷団、第六駆逐隊の面々の表情は有名人が既に到着していたのかと喜びとも驚きともつかぬものに変わる。

アメリカ海軍の艦娘にしては流暢な日本語を話している、というのも要因なのかもしれない。

さらに通信に割り込んでくる声によって、作戦海域で繰り広げられている戦闘はさながら戦争とは思えぬ様相を呈した。

《Hey！ もつとゆつくり、ゆーつくり話して！》

ぎこちない日本語、しかし明るい声。それは正規空母サラトガと同じくアメリカ海軍の艦娘、戦艦アイオワのものである。

《リ्यूジョーの話し方は速すぎるのよ。誰の話をしているの？》

アイオワに対して説明するサラトガの小さな話し声。

《Iowa……》

サラトガが英語で説明している途中であるのに、アイオワは不満そうに言う。

《日本語、むつかしいわね……むつか、むつかしい……？ Did I

say it correctly?》

全速力で進んでいる大湊水雷団の先頭たる木曾は、緊迫した状況に似合わぬ顔で器用に振り向いた。雷と電の二人は木曾と目が合うとぶんぶんと首を横に振ってみせる。分からない、とは口に出さないが。

最後に視線を向けられた響は、ふふ、と笑って言った。

《むずかしい、だよ。アイオワさん》

《むつ、ず、ず……むず、かしい、ね！ OK！ あー、あなたはオーミナトtorpedo corpsの艦娘ね！》

《私は響。ひーびーき、っていうんだ。よろしく》

順々に、雷、電、木曾と紹介し一言ずつ「おう」とか「なのです」なんて挨拶代わりに声を交わす。

そのうち——大湊水雷団の目前に、小さな影が見えた。

「待たせたな、龍驤！」

「やあつとや……遅いねん！」

「はは、悪かったよ。色々。結界は——？」

龍驤を囲むように並んでから周囲を見渡す木曾。

電も電探を起動させてみるが、深海棲艦の反応は見られない。

通信にノイズ音とともに何度も割り込んでいた戦闘の音は止んでおらず、平館海峡側に位置する龍驤と大湊水雷団とは別方向から支援をしているであろう正規空母サラトガの姿も見えず。しかしながら、まだ通信から音は聞こえたままだ。

「結界はこの先や。見た目じゃ分からへんけど……よう見とき」

丁度攻撃を終えて戻って来た龍驤の艦載機天山が、何も無い空間からぱつと姿を現した途端、わあ、と雷が驚愕する。

「い、今、いきなり出て来たわよ!？」

電が、じつと海の向こうを見て言った。

「まるで見えない壁があるみたい、なのです」

「電の感覚が近い……むしろ、体感的にそれが正解なんかもしれん」

誰が名付けたか、結界という現象はまさに海域の一部を現実と切り離すかのような異様なものだった。

結界の中には既に戦艦アイオワがいるはずで、大湊水雷団もこれから結界に突入しなければならぬ。いやでも緊張が高まり、喉が渇いた。

「帰還用の燃料を考えたら、ここからさらに積極的な攻撃してくれって言われてもきついとこや。その代わりにサラトガが津軽海峡中央部に向けて東側から航空支援してくれとる。火力についても戦艦が出張ってきとるから心配はないはずや」

「っし、わかった。準備はいいな」

木曾が第六駆逐隊の全員を見ると、一様に威勢の良い返事が鼓膜を揺らす。

「今度は……いや、今度こそ、木曾さんの力になるわ！ たーつくさん頼っていいのよ！」

「電の本気をみるのです！」

「不死鳥の名は伊達じゃないところを見せないとね」

不可視の壁へ進む。衝突も恐れず。

木曾達の背後から龍驤の声が届いた。

「かましたれ！ 後輩！」

* * *

真つ青な空の下を進んでいた大湊水雷団は、肌にとわりつくような感覚に身震いして瞬きした途端に変貌した景色に、う、とえづきそうになった。

自分達が居た戦場が、悪夢のままに、そこにあつたからだ。

海面を埋め尽くさん勢いで蠢く駆逐級の深海棲艦に、修理の間に湧き出したのであろう軽巡級の深海棲艦まで。黒い丘がいくつも海面へ出現しているようだった。

恐怖に支配されそうになるのを堪え、木曾が雷声を上げる。

「殲滅を開始する！ 複縦陣をとれ！ 距離をあけろ！ 響、俺の後ろに！」

「了解っ！」

木曾が駆け出す。海面を滑る、のではなく——本当に駆け出したのである。

ばしゃん、と水面を踏みしめる光景のなんと異様なことか。しかし木曾は本能でこれでいいと深海棲艦の群れへ走り出した。

海上を進む艦装の発した推進力に合わせ、一步、二歩、とその移動距離は物理法則に逆らおうとするかのように広がっていく。木曾の後ろについていく響は瞠目しながらも必死に追従し、砲雷撃戦を開始した。

「木曾さん、右舷だ！　ハ級が三せ——」

「おせえッ!!」

「っ……っ！」

砲身を突きつけて撃ったのか、はたまた、砲身そのものを突き刺すようにして殴りつけたのか、響の目には捉えられなかった。

一隻目。梯形陣の如く並んでいた三隻のうち、木曾の方へ突出していたハ級に向かって一発。

二隻目。何が起こったのかさえ理解出来ぬままぐらりと先頭が崩れ、木曾の姿が露わになった途端に、ごうん、と真つ赤な炎の華が咲いた。二発目の砲弾が放たれたのは、人ひとり入り込めない程の至近距離である。衝突、それから爆発によって生じた衝撃波を受け止めるしかない刹那の時間。木曾は身体の前面を煽られるが、それさえも利用するかの如く後方へ飛び、海面を蹴った。

三隻目。木曾を沈めんと狙いを定めようとしたハ級の反応速度が間に合うわけも無かった。衝撃と木曾の脚力によってトビウオと見紛う華麗さで離れ行く姿を見ている間に、追従していた響の砲撃が視界を煙らせたのである。

その間、わずか三秒にも満たず。

連続した轟音に蠢く深海棲艦の殆どが反応し、危険度を再認識したように叫喚した。

「アアアアアアアア——!!」

「ぐっ……」

木曾は顔をしかめるも、蹲らず、前を向いていた。気丈に笑って。

「二度目は無いぜ」

黒々とした波間の最奥に見える恨めし気に睨む重巡り級と目が合うと、木曾はさらに言った。遠回しに、それでいて、ガキ大将のような声で。

「つは……お前らの指揮官は無能だなあ！」

重巡り級は猛った。あの時、こいつらを逃がすべきでは無かったと。

「ア、アアアアアアアアア……忌々シイ、艦娘ガ……！ シズメテヤルウウウアアアアアアアアア!!!」

その一連の流れを離れた位置で見ていた戦艦アイオワは、圧倒的火力を以てして自らの周囲に空間を作り戦っていた自分とは違う空気を感知取り、通信を繋げたままにしているのも忘れて呟いたのだった。

「What a hell——あれが、オミナトtorpedo

corpsなの……？ 話と違うじゃない……!!」

戦⑤

冷静——とはどういった状態なのだろうかと頭の片隅で木曾は考える。

「前方、新手が来てるわ！ 響！」

「分かってる！」

雷と響がほんの少しずれたタイミングで魚雷を放つのを目にしながら、視界を埋め尽くすような深海棲艦の群れを各個撃破していく木曾は考える。

思考がある種の一つの塊であると仮定したのならば、頭の中に入る数には限界が生じるだろう。十か、二十か、賢しい者であれば三十や四十くらいは入るかもしれない。しかしそれ以上は考えられなくなり、きつとそれらが個人の限界値というもので、埒外の対応を迫られた際に困窮することとなる。

「てっ——！」

「y p a！」

であるならば、雷と響が放った魚雷の射線がどうして交錯しているのかを考えられている木曾は、冷静で、限界値はまだ先にあるのかもしれない。

放たれてから十数秒、前方の群れが赤い光と轟音に巻き込まれていく。その後方からぶわりと黒煙が上がって、多くの深海棲艦が魚雷同士の爆発に巻き込まれたのは狙って起こされたものだったのかと、自らの予想に反しない結果に木曾は目を細めた。

一隻ずつ狙っているは道も開けず、数も減らせず。効率的ではないと判断したのであろう。即興で彼女らは潮の流れを読み切り、ずれたタイミングで魚雷を衝突させ、爆発の波で多くを呑み込ませたのだ。

その間にも自分の意思と考えに従って木曾の身体は陣形を維持したままに、まるでその場で踊るように回転し、四方八方に湧き出る駆逐級の深海棲艦をあっという間に撃沈させていく。装填し、砲弾を放てばその分だけ確実に敵を撃破していた。

たかだか十四センチ単装砲、されど十四センチ単装砲。

真正面からぶつかるような砲雷撃戦となれば、頼りになると胸を張って言える兵装ではないと勝手に思い込んでいたが、なるほど、大湊水雷団の名の如く、熊谷少将の口から出た速戦即決の言葉の如く、今の自分にはこれこそが必要な兵装であると納得に至る。

自分の身軽さをも武器にして、ぬるりと湧き出す駆逐級に紛れている軽巡ホ級やハ級を一撃さえ放つことを許さずに海上へ出現した途端に撃沈させていく木曾の反応速度と正確性は、もはや改装を施された艦娘の領域を逸脱していた。

アメリカ海軍の支援として津軽海峡中央部にて発生した結界の内側にまで足を踏み入れた戦艦アイオワが視界の端にちらりと映った。有り余る膂力を存分に発揮して、決して深海棲艦を近寄らせず。

大湊水雷団、ひいては日本の艦娘たる彼女らの知るいくらかの戦艦とは違う三連装砲は、金剛型高速戦艦や長門型戦艦の装備とは違う。かつて聞いた砲撃の音よりも重厚で、海面そのものが揺れるかのようだった。

徐々に互いの領域を広げていく大湊水雷団と戦艦アイオワ。

指揮官として黒々とした波間に不気味に佇む重巡り級は叫喚した。

木曾を逃したところで津軽海峡へやって来る戦力などたかが知れている、なんて油断がもたらした結果である。

深度四百メートルを超えんとする海峡で息を潜め、数カ月に渡ってはぐれ深海棲艦を利用して戦力を確認していたというのに、ここに来てアメリカ海軍の支援が来るなどと誰が予想出来ようものか！ 幾ばくかある感情の残滓が発する微弱な電流がもたらした苛立ちと焦燥に灰色の脳を焼かれながら、重巡り級は兵装とも生命体ともつかぬ左腕の独立した頭のようなそれを振り回し、自身の盾になろうとしていた駆逐級の深海棲艦を蹴散らして砲撃するも、どれも当たらず。

【邪魔ダー！ 退ケ！ アア、クソツ！】

ぎい、ぎい、と金属を擦り合わせたかのような不快な鳴き声を上げて道を開けた駆逐級の深海棲艦達の先に、大湊水雷団の面々が見える。

色彩の無い視界に映る彼女らの表情といたら、それはもう。

「木曾さん！ まだいけるよ！ 陣形を広げよう！」

「ああ、砲撃範囲ならギリギリまで広げていいぞ。俺が援護する」

「ふふ、木曾さんが援護だなんてね……さっきの一撃が援護の範疇なのかい？」

「響、お前なあ……集中しろ、集中」

「集中してるとも。ほら、これは、そう……確認？」

「何を確認しようってんだ」

「援護がどこまで届くのか、とかさ。いつもは木曾さんについて回っていたから、これでも不安なんだよ私は。この行動が正しいのか、自分で考えたことなんて無かったから」

「自分を疑ってたらキリがねえなんて、言うまでもねえだろ。だから前を見てろ。お前らの判断を正しいと言わせるのは、旗艦である俺の役目だ」

「それじゃ、遠慮なくっ！」

重巡り級が、ぎり、と奥歯を噛んだ。血だか油だか分からぬ液体が口内に満ちて、口の端から雫を垂らす。

どうして、どうして笑っているんだ。何がおかしい。

あの戦争を忘れたのか。あの惨劇を忘れたのか。

あの悲惨な悲鳴を。あの惨憺たる光景を。

お前達には責任がある——この怨恨満ちた海に沈まねばならない責任が——！

【圧シ潰セ——！】

重巡り級の命令が下された瞬間、周囲の深海棲艦の動きに変化が起こった。

大口を開いて、そこから砲身を伸ばして砲雷撃戦に参加していた駆逐八級は閉口し、木曾の砲撃から運よく逃れられた軽巡級の深海棲艦さえも攻撃の手を止め、空を舞う艦載機の音を除き、静寂が訪れる。

再装填を済ませたアイオワが大湊水雷団と自分に向けられた憎悪の視線に気づいた時、まずい、伝えねばと通信を繋ぐも、言葉が出なかった。

出せなかった、という方が正しいだろう。彼女らにそのまま母国語

で伝えようとも、伝わらないと思つたのだ。日本語ではどう言えたいのだ、と考へたその数秒こそが命取りになるとも分かつていたのに。

ああ、だめだ、とにかく言わねば。

通信であるのに、アイオワは叫んだ。

木曾も同じように考え、同じ結論に至り、二人の声が重なつた。

《Retreat——!》

《退避——!》

ただ一点を突破するが如き戦いを続けてきた木曾から飛び出た言葉とは思えず、雷達は脊髄反射で背を向けて全速力で後退した。

固定砲台のようにして周囲の深海棲艦を退けていたアイオワもその場から一気に離れる。

深海棲艦が動き出したのと殆ど同時だつた。そうして、信じがたい地獄のような海上に絶望と驚愕を上塗りする光景が広がる。

「アアアアアア——」

「アアアアアアアア」

「アアアアアアアア」

アイオワにある個人的感情や感想は別としても、その光景は彼女にとつて見慣れていると言つてよいものであつた。

先ほどまで大湊水雷団の面々が居た場所へ、もしくはアイオワが居た場所に群がる深海棲艦達——そう、彼女らを我が身を以て沈めんと、特攻してきたのである。

重巡り級の判断は間違つていない。火力でどうにも出来ないならば、物量で押し潰せばいい。それは奇しくも、彼女らが経験したもの。

「マジかよ……ッ」

「電、こつちに來なさい！ 早く！」

「はわわわあっ!?!」

「もつと下がって木曾さん！」

艦同士がぶつかればどうなることか。言わずもがな。

艦娘同士がぶつかならば、相当な速度でない限り今や早々事故として処理せねばならない事態には陥らないが、それは艦娘であるが

故である。

人の身を持ちながらも超常の頑丈さを誇る彼女らは、サイズと比例しない頑強さがあるため同じ艦娘同士の衝突程度であれば案外問題視するほどもない。もちろん、一定の条件はある。

しかし深海棲艦はどうだろうか。

彼女らと同じ頑強さを持つが、彼女らとは比較にならない巨大さだ。何倍、いや何十倍と巨大な体躯である。

重巡り級や軽巡ホ級、へ級といった人体の一部が変質したような存在であれば艦娘と同程度のサイズであるが、どういった理屈か、彼女らは強くなればなるほどに艦娘に近い存在になる。ならば、その逆はどうだろうか。

航空支援に徹する龍驤やサラトガも艦載機越しに、それを見ていた。

生きた艦が、憎悪という感情で動く艦が互いに押し合いへし合い、爆炎を上げる。

これを地獄と言わずしてなんと言おうか。

重巡り級の選択こそ間違っていない。

艦娘にとつての最悪、深海棲艦にとつての最善であった。

無限に等しく湧き出す深海棲艦を有効活用し艦娘達から戦意を削ぎ、絶望を与えて近寄らせず、確実に相手を疲弊させ、消耗させていく戦略。これもまた、嫌に馴染みあるもので、木曾達もアイオワも歯噛みした。

「クソ！　こんなの近寄れたもんじゃねえッ……」

木曾が「魚雷の残りは！」と視線を重巡り級に向けたまま怒鳴れば、雷から震えた声が返って来る。

「の、残りは多くないわ……これじゃ、足りない……！」

木曾は再び自問する。

冷静とはどういった状態なのだろうか。

きつと感情から発された熱で顔の表面を焼くようなことを指しているのではないだろうし、悔しさで拳を握りしめたり、照準の定まらない十四センチ単装砲をウロウロとさせることではないだろう。

雷達に指示を出せないことも違うし、平館方面、方角で言わば南側に位置する自分達から北東の位置にいるアイオワを継るように見ることでもない。

冷静とは、手詰まりだと諦めることではない。

しかしまだ、どうしてか、木曾は思考に余裕があった。

たった一つしか入る余地はないが、確かに考えられる部分が残っている。

(どうして俺は位置取りなんざ気にしてんだ……二、三、四、五……ああ、くそ、こんな数えるのも馬鹿馬鹿しい量をさばくなんざ、いくら戦艦がいたところで、湧く速度を超えて減らすなん、て……)

チリツ……と、木曾の耳に脳が焼ける音が届いた。

(速度……そう、だ……速度がある……損傷してるわけじゃねえ。なら、俺にはあいつに届く十分な速度が出せる。どつかの島風だか天津風みたいに速度が重視された設計じゃあなかったが、俺には俺にしか出来ない事がある……)

重巡り級がニヤリと笑う。

これなら勝てると確信を得たような笑みで、さらに深海棲艦を出現させて突貫させた。

大湊水雷団とアイオワはどんどんと距離を離し、先ほどまでいた場所で爆炎が噴き上がった。

どれだけ深海棲艦が互いを潰しあいながら沈もうが、すぐさま新手が生まれて、希望を呑み込もうと海を埋め尽くした。

《Hey! キソ! あ……退避! 退避よ! これじゃ近づけないわ!》

アイオワの言葉通り、下がるしかない場面。

言われた通りに大湊水雷団は深海棲艦を回避すべく後退を続けるが、木曾だけが器用に重巡り級へ身体を向けたまま。

相手と、それから空を舞う艦載機を交互に見て、チリチリと脳が焼かれる音を聞き続けていた。

《木曾、曳航してくれるならウチが退路を確保するのに残りの燃料を



《ダメだ》

提案を即座に拒否した木曾に驚いた龍驤は、艦載機越しに彼女の表情を見た。

遠目からでも、ただ諦めたわけではないと分かって、さらに問う。

《どないするつもりや。指揮官の重巡には辿り着かれへんで。もしも届いたとして、確実に囲まれて終わりや》

《そうか?》

《なんや、君い……怖い顔しとるで》

龍驤は言葉とは裏腹に、口角をにいと持ち上げていた。

なるほど、これが木曾、いや、木曾の名を持つ彼女の性質か、と。

《なあ、先輩よ。ちよつと俺の提案を聞いちゃくれねえか? それに、

アメリカの空母さんもよ》

《おう、なんや言うてみい》

《私に出来ることなら》

ごくりと喉を鳴らし、乾いた口内に唾液を回すサラトガもまた、互いが見えぬ位置にいるために不安を感じ、ほんの一年も経たずして再び見る絶望の光景に言葉を待つしかなかった。

《弾着観測射撃の準備をしてくれ》

木曾の言葉に、アイオワがサラトガを呼ぶ。

いくらかの英語が飛び交って数秒、すぐにアイオワから大声が飛び出した。

《この数じゃ無理よ! それに標的なんて――》

《標的? そんなの、指揮官に決まってるだろうが》

《What a――!》

理論上、不可能ではない。偵察機ではない事を除けば確かに条件は揃っていた。

航空支援として攻撃に徹していた艦載機は味方しかおらず、制空権の確保は出来ている。しかし一方で、圧倒的に有利な状況にありながらも拮抗、今や押し返されている現状を顧みれば無謀であるとも言える。

アイオワが砲撃し、それを上空を埋め尽くさん勢いの航空機があら

ゆる角度から観測すればより正確な攻撃が可能だろう。

ただ、それは理論上である。

《これだけ数がいるんだ。確実に当てられるだろ?》

木曾の声に続くものは無かった。

当てたとて、指揮する重巡り級の知能を見ただろう、と。

アレはその場で最適解を叩き出し、最善の方法をとることができ
る。

さらには不利な状況をもともせぬ絶望という原動力で無限に等しく深海棲艦を生み出し、無茶や無謀をそのまま体现せしめる相手だ。一撃で勝てぬなら数で押す、それでも足りぬなら心を摩耗させる。心理戦すらも仕掛けてくるような相手に、今更になって弾着観測射撃を行ったところで、何が出来るというんだ。

そう考えているのは木曾にも伝わったが、しかしながら彼女の目は、爛々と輝いていた。

快晴なはずなのに曇天の空の下で。青々としているはずなのに真っ黒な海上で。

冷たく、そして厳しくも凜としているはずなのに、真っ赤の視界の中。

《アイオワ。あんたの力でも足りねえか》

《……一撃は当てられるわ。でも》

必ずや味方を肉壁にしてくる。砲撃が届く前に、怨念を盾にするはずだ。

それを口にしようが、木曾は諦めていなかった。

《どうしてこんな数を相手に、大湊警備府唯一の戦力である俺達が最適なんだってずっと考えてたんだ》

彼女は語る。つらつらと。

まるで思考を整理するかのようで、それに伴って彼女の中から余計な考えが海へ流れ出て行くようだった。

「木曾、さん……?」

後退を続けるうちにそばまでやってきていた響が木曾を見つめた。

それでも木曾はまだ、前を見つめたままだった。

《大湊警備府の指揮官は熊谷少将だろ？ 立場もある人だ、そりゃあ聞く耳をもたねえ俺達に色々な話をしてくれた。今になって、ああ、全部大事な話だったんだって気づいて、安心してるよ。間に合ったんだって。まあ、海原元帥からしたら間に合わなかったのかもしれないけど……清水中佐の事故だって、熊谷少将がただの与太話に聞かせてくれたもんだと思ってたんだ》

木曾の乾いた笑い声に、龍驤が咳払いを一つ。

《清水中佐の事故については軍部中枢が既に知つとることやろ。なら、熊谷少将の指揮下にある君らが知つとって当たり前や》

《でも、俺が聞いたのは、ただ転落事故にあつて深海棲艦の声を聞いた……くらいのもんだぜ？ いくら自分の部下相手でも全容を言ってくれるわけねえだろ。その証拠に、俺が知る以外の情報もあつたじゃねえか。必死過ぎて自然に流しちまつたけどよ》

木曾が示すのは言うまでもなく、自分達を足止めした正体不明の手のことである。

龍驤はここにきてはつとした後、呆れて溜息を吐いた。

《はああ……厄介な後輩や……口が滑つたウチもウチ、か……。そや、清水中佐は君らと同じ現象に遭うとる》

《ははは、一本いたただきだな》

《っはん！ 流したつて自分で言うとするがな！ 引き分けや！》

《……清水中佐を詰めなきやならねえかもつて言ったよな。もし俺達と同じ現象で、同じ状況だったなら——》

《詰めてへん理由はそこにあるんは、分かるやろ》

《じゃあ、同じ現象だけど……意味は違つたんだな。俺が陸奥湾で聞いたあの声みたいな》

「木曾さん！ 敵が——」

電の声よりも早く木曾の十四センチ単装砲が唸った。

あつという間に迫りくる敵を沈めたのに、木曾の表情は変わらないままで、電はぎよつとしてしまうが、すぐに目元を柔らかかに下げた。

「……いつもの、木曾さんのままなのです」

ぼつりとした眩きも、後退を続ける自分達が上げる水飛沫に消えて

いく。

《せやから言うたやろ。あれはウチらが背負っていかなアカン声やって》

《やっと分かったよ、それも》

《さよか。ならええんちやうかな》

そして木曾の瞳から、完全に迷いが消えた時、

《——よっしや、観測にどでかいの一発頼むでアイオワ!》

龍驤の声が重なり、サラトガの不安なままであるが、希望を探す声が呼応する。

《……アイオワ、お願い》

アイオワは一連の流れにあてられたように、全身を包む熱を鬱陶しがって怒鳴った。

「なっ……ん、もおおおッ! 日本のフリートガールはどうかしてるわ! こんな危険な事! ……こんっ……ああつ、もおッ!」

正確に、的確に、そして確実に撃滅をせんと狙って放たれたアイオワの一撃。

それは見る者をうっとりときせるほどに綺麗な放物線を描いて重巡り級へ迫った。

しかし、やはり予想通りに、

【無駄ダ——馬鹿メ——!】

湧き出た駆逐級の壁に阻まれる。

それが、深海棲艦にとって致命的な一撃になるなど、知らぬままに。

《アイオワ、位置情報を確認して!》

阻む壁を呑み込んだ爆炎の向こうからワイルドキャットと呼ばれるサラトガの艦載機が、エアショーが如き動きで深海棲艦の攻撃に巻き込まれないように離れた。

それらから送られて来る情報に続き、龍驤に随伴していた妖精の操る天山から送られて来た情報がアイオワに叩き込まれ、一つの道を示した。

これでも、また阻まれるかもしれない。

アイオワの不安が徐々に大きくなり、心を蝕もうとした。

だがそれらを打ち破る声が通信に響き渡る。

《雷、電、道を開いてくれ！》

《木曾さん、まさか……！》

《そのまさかだよ》

雷と電が、残り少ない魚雷を盛大に放ちながら、目元に浮かぶ涙を必死に拭った。

きつと木曾のしようとしている事は、絶望を打破するためのもので、自分を捨てるようなものではない。しかしどうしても、それは木曾の性質もあって、自沈に等しくも映るのだろうと予感して、涙が止まらなかった。

どんどんと黒煙が上がり、視界か煙る。

魚雷同士が衝突し、または魚雷が深海棲艦に命中して爆炎が噴き上がった。

《響、頼めるか》

《……嫌だっって言っても、連れて行くつもりでしょう？》

《はは、当たり前だろ》

木曾と響が駆け出す。雷達が開いた一筋の道を。

アイオワは木曾達に反応して動いた深海棲艦を目にして、ああ、これならと全身に力を込めた。

この隙こそがチャンスだ、と。

「私の火力見せてあげるわ：Open fire！」

一際大きな轟音が海上を支配した。

アイオワの放った一撃は、今度は明確な威を以て飛来し——重巡り級を捉える。

こちらに届かずとも脅威になり得る木曾達を沈めるか、それらを放置してでも自分を沈めるだけにとどまらない膂力をはらむ戦艦アイオワの攻撃を防ぐかの選択を突きつけられた重巡り級。

深海棲艦を操る指揮官として最善を選ぶか、あるいは、怨念そのものを体現する己が存在を守ることを優先するか。一瞬の判断は——己にあり。

「グウ、アツ……カハツ……」

《Shit……沈め……きれなかった……ッ!》

重巡り級は肉壁として深海棲艦をいくらか湧かせたが、その数は少なかった。

しかし駆逐級の巨大な船体、いや、体躯を利用して盾としたのである。

湧き出た深海棲艦は仲間である亡骸を自らが傷つくのもいとわずに重巡り級の周囲へと押しやり、未だ生きる身の自分達を含めて盾としたのだ。

木曾達へ迫る駆逐級も、軽巡級の深海棲艦も緩慢な動きながら妨害に徹した。

重巡り級の指揮官としての能力は、相当に高いと言えよう。

《キソ——Retreat——!》

《木曾さん、逃げて——!》

アイオワとサラトガの絶叫がこだまする。

「ハ、ハハ、ハハハッ……絶望ニ、溶ケテ、シズメ——」

爆風によつて半身を焼かれ悍ましい姿となった重巡り級が怨嗟の声を上げ前を見ると、そこには——

「木曾さん、全弾消費だ。もう、これで終わり」

「ありがとな、響」

——重巡り級に突っ込んでくる勇ましい木曾の姿が。

深海棲艦をかきわけ突き進んできた大湊水雷団の旗艦たる艦娘の姿を見て、重巡り級はとうとう恐怖し、絶句した。

「ハ、アッ……!?!」

「わりいな。命令違反上等のガキ大将なんだわ」

危機的状況に陥った際、全てがスローモーションのように見えるとはどこの誰が一番最初に体験し、言葉にしたことなのだろうか。なんて、木曾は考える。

その傍らで、もう一つ思い浮かぶのは——自らの指揮官の顔だった。

『木曾、無理はするな』

いつか、そんな声を掛けられた。しかし、戦いこそが自分の存在意

義であると木曾は無視をした。

『お前達が居れば、それでいいんだ』

いつか、そんな言葉を掛けられた。しかし、いつの日か自分達も大湊警備府を去るのだと、耳を貸さなかった。

『私達が、大湊を守るんだ』

毎日のように飽きもせず口にしていた言葉が、大湊水雷団の中で跳ねまわる。

「熊谷少将に怒られるな、こりや」

駆け出した勢いをより増して突き進む木曾の艤装が、何度か深海棲艦の亡骸にぶつかって鈍い音を立てる。

へこませるな、塗装を落とすなど言われたばかりなのに、工廠の奴らにも怒られちまうと木曾は自嘲した。

それでも初めて感じる高揚に、身体を止めるべきではないと突き進んだ。

木曾の艤装のいたるところにいる妖精の光に視界がチラつくが、それさえも自分の力だと確信して。

「一緒に怒られてくれよ」

なんて妖精に向かって言う木曾の身体が淡く光る。

《サラ、あ、あれ、何、ねえ、サラ……い！》

《あれは……っ》

アイオワは目を疑った。

サラトガはかつて自分を救ってくれた艦娘達を思いだした。

兵装はあれど残弾無し。重巡り級に辿り着くために撃ち尽くした木曾に残っているのは己の身一つだけ。

木曾の脳裏に浮かぶのは、やはり熊谷少将の顔だった。

(熊谷少将なら、相手をぶん殴って沈めたりすんのかな)

そんな戯言に塗れた思考の最中、通信に割り込む声。

《木曾、いけるか》

そういえば定時報告をしてなかったか、と思考する間もなく、木曾の全てが熊谷少将の声に塗りつぶされた。

それから、より強い光が木曾を包んで、消えて――

《今から帰るよ、熊谷少将》

――木曾の折れぬ意志と、大湊水雷団の染まらぬ魂が具現化したように、ばさりと黒いマントが揺れた。

振りかぶった木曾の手にはどこかで見たようなサーベルが握られており、瞬く間に鋭い刃が重巡り級をたやすく切り裂いた。

「ア、ア……？ ナン、デ……クソ、失敗、シ、タ……マタ、失敗……シ――」

重巡り級が仰向けに倒れ、海上からずぶずぶと沈み姿を消していく。

そこから糸が断ち切られた人形のように、周囲の深海棲艦も動きを止め、その恰好のままに沈んでいくのを見ながら、木曾はいつの間にか纏っていたマントを翻して、通信を通して言った。

熊谷少将に対してか、龍驤に対してか。

大湊水雷団の仲間に対してか、アメリカ海軍の二人に向けてか。

《what a hack……サラ、あ、あれ、キソ、よね……!?》
《木曾さんだと、思うわ……でも、あの艦装に、マントは……見た事が、ない……》

あるいは、自分自身に向けての言葉だったのかもしれない。

《——もう、大丈夫だ》

ふつと消えた重い空気に気づいて全員が顔を上げると、そこには
燦々と輝く陽光と、どこまでも続く水平線があった。

後始末 【鎮side】

「何もこのタイミングで定時報告など……」

「邪魔になると？ ならば木曾はどう言っていた」

「……もう大丈夫だと言っておりましたが、しかし」

「しつこいぞ熊谷少将。我々には我々の仕事がある」

「どうも。まもるです。」

「お待ちください海原元帥！ 事はここに及び、アメリカ海軍の支援までも投入したのですよ！ 例えどのような状況であれ、これは作戦としてまとめおくべきです！」

「作戦？ 作戦だと？ これがか？ つは、馬鹿を言うな」

「情けなさに今にも泣きそうになっておりますが、海軍元帥のまもるです。」

熊谷少将は俺が大事にしてしまったこの状況を作戦と言い訳できるようにまとめようなんて言ってくれておりますが、それは無理です。きつと秒でバレます。

食堂にて主計科の者達へ「急遽支援のために航路を変更し哨戒に参加させてしまったアメリカ海軍への歓待準備を頼む」と言いつけて暫く。

ただの哨戒だろ、と高を括る俺の鼻っ柱をぶち折るかの如き大湊警備府の仕事の難易度の高さに心まで折られ、泣きたいのを必死に我慢しているというのに、熊谷少将はカルガモの親子か！ というくらいぴったりと俺にくっついてああでもないこうでもないと言葉を背に投げかけてくる。さらに俺の周囲には妖精の包囲網。逃げ場がねえ。

大湊水雷団、もとい艦娘の皆様は周囲の安全を確認してから帰還するとの事で、この地獄はもうしばらく続くのじゃ！ 状態である。勘弁して。

「待ってどうしようと言うのだ。ん？ 熊谷少将よ」

いい加減うんざり——などとは、どの面下げて言ってるんだみたいな顔をする妖精達の前では一ミリも考えられず。さりとして俺の適当さや場当たりの対応で大事になってしまった現在、予定の何百倍もの

仕事が無い込んでいるわけで。

大湊警備府の一角にある物干場らしき場所まで逃げ……歩いてきた俺は、そこでどうとう振り返って大袈裟に溜息を吐き出した。

なあ、熊谷少将よ、分かっているのか？

俺はお前が「木曾が横柄で……」なーんていう書状を井之上さんに送ったことから端を発したこの仕事を片付けようと柱島泊地から遠路はるばるやってきたんだぞ。

それがなんだ？ 木曾は確かに多少横柄な態度だったが、工廠の軍属然り、他の人達が艦娘がどのと言っていただけじゃないか。しっかり話し合ってみればお互いの認識に差異があっただけで、俺達変わらないね！ と良い感じに哨戒にも戻ったろ！ それでいいじゃない！

そりやあ確かに、大湊警備府における哨戒が俺の思ってた以上の難易度だったのは理解したよ。普段から深海棲艦を相手に木曾達がロボロになるくらいにドンパチしてたんじゃあピリピリしちゃうのも分かる。重々承知したところだ。

帰って来て、それでも戦うんだって木曾を見た時は先に修理しろと焦ってしまったくらいなんだから。

でもよ？ でもだよ？

俺が邪魔しなきゃ熊谷少将はすんなり哨戒とは名ばかりのドンパチを普通に終わらせてたかもしれないけどもよ？

「はあ。アメリカ海軍の支援は、確かに私も想定外だったが、仕方があるまい。それもこれも、全ては私の責任だ」

「海原元帥……」

俺には重大事件だったんだよお！ 恐ろしいドンパチを少数で繰り広げるな！

そりやあビビッて助けも求めるわい！ まもるが悪いんか?! 責任は取るからお説教は誰も見ていないここでオネシヤス！

サーセンほんと屑で役立たずでエツ！

「熊谷少将は、私の出自を知っているな」

「は、はい、それは、そうですが」

「……なら、分かるだろう。私は熊谷少将や他の軍人とは違うのだ。仕事の出来だつて良いか悪いかなどと天秤にかけるべくもない」
「……」

ぐつと唇を噛みしめて、熊谷少将は目を伏せた。
むさくるしい男が二人きりで物干場……何も起こりません。ご安心ください。

その代わりに、俺の周囲をふよふよと飛び回っていた妖精とは別の妖精が警備府中枢の方角から紙切れをなびかせやって来ているのが見えた。

あいつら、まーた遊んでやがる……仕事しろオラアンツ！

「アメリカ海軍の支援についても私の独断で、哨戒の邪魔になってしまった責任は全て私が負う。井之上元帥にも大湊警備府には一切の問題は無かったと報告をあげると約束しよう。だから目を瞑ってはくれんか?」

「哨戒など……しかしそれでは——!」

あーあーあー! 分かっているよ! くつそ真面目な軍人めつ……!

こういった人たちが日々、世のため人のためと頑張ってくれてたから世界は崩壊しなかったんだなあ! ごめんよゼーんぶまもるがぶち壊しかけてよオツ!!

「熊谷少将。情けない限りだが、事後処理は全て私がしておくから」

「つ……どうしても、でしょうか」

「どうしてもだ」

まもる、渾身の即答である。つたりめえだろうがよお!!

どこの誰が哨戒でボロボロになって帰ってくるんだよ!? 大湊警備府は哨戒に際しての戦闘が多い……じゃねえよクソオツ!

熊谷少将を一目見れば分かるが、顔にある傷も相まって歴戦の猛者とは言わずもがな。そんな指揮官が取りまとめる警備府の仕事におけるレベルの高さなど俺の想像をはるかに上回るものであるなど、ただの社畜に備えを求めることが酷ではなからうか?

もちろん、俺だつて一年近くも軍人としてやってきたのだから、そ

れ相応の場面に出くわした事は幾度かある。

柱島泊地も日々の哨戒は欠かさず実施しているし、抱えている艦娘の数で言わば倍どころの話ではないのだ。しかし、毎日のように遠洋まで哨戒に出る彼女らが今日の木曾達のようにボロボロになって帰って来たことなど一度として無かった。

時に傷ついて帰って来たことはあれど艤装が黒ずんでいる程度で、顔や身体に傷がついてしまつて、今にも倒れそう……なんてことは無かつたのだ。

工廠で哨戒組を出迎えたことだつてある。それでもだ！

ここの木曾とウチの木曾は違い過ぎるのだツ！！

はあ、ともう一度大きく溜息を吐いて額に手を当て、冴えわたる空を仰ぎ見ながら思い出す。我が柱島泊地の木曾の姿。

ある日、ローテーションの兼ね合いから球磨型軽巡洋艦の大井と木曾の二人が駆逐艦睦月と卯月を連れて哨戒に出たことがある。

特に問題無く大淀に定時連絡もしていた様子だったし、帰つて来た時には大湊警備府の木曾のようにボロボロどころの話ではなかつた。

『早く行こうぜ大井姉^ねえ！ 報告書は明日でもいいんだからさあ！』

『ちよつと木曾！ ああもう、卯月も待ちなさい！』

『ぷつぷくぷう！ 食堂に直行だぴょん！』

『へへ、朝からゼリーだぜ？ ゼリー！ ラッキーだよなあ！』

『あつ、もう……！ はあ……睦月。真似しちやだめよ、絶対に。損傷がなくとも明石さんに確認と報告を忘れないように。後で木曾と卯月は説教してやるんだから……！』

『あ、あはは……はあい……』

……と、このような有様である。俺？ 工廠で出迎えるつもりが隅っこで居眠りしてました。すみません。起きたらそんな状態だったのだ。

でも、ゼリーで。報告書は確かに明日でもいいけども、ゼリーで。

木曾よ。お前。

工廠を担当する明石や夕張も、木曾達が置いて行った艤装をさらつと見て、

『バリイ、修理の用意おねがい、あと補給の用意もー』

『はい。あ、明石さん、先に機関部だけ確認を——』

『おっけーおっけー、置いといてー』

なんて気楽な感じだった。そりゃ油断するって……。

大湊警備府の木曾が眼帯のイケメンの方だとしたら、柱島泊地の木曾は眼帯の無邪気な方である。あれが個性と言われたらそれはそれで可愛いのでまもる的にはオツケーなのだが、そういったイメージがあつたが故に油断していたわけだ。

ここに来て大湊警備府の木曾ときたらガツチガチの戦闘狂である。とんでもねえ艦娘を部下に持つ熊谷少将のお怒りはごもつともなのだが、いかんせん軍歴と呼べるほど勤めが長いわけではないまもるに對してあれやこれやと求めないで欲しいところ。

油断してたのは俺が悪い。

だから焦ってアメリカ海軍来てたよねそういえば！ などという
悪い付きで支援を要請したのも俺が悪い。

大湊警備府の哨戒も柱島泊地と変わらんだろうと思いついで、とりあえず木曾が横柄かどうかは戦闘から戻ってから見てもいいんじゃない？ なんて言っていた癖に、ヤバイ状況になったらなつたでライブ感だけで乗り切ろうとしたところも、俺が悪い。

井之上さんへ助けを求め、現場を引つ掻き回したのも俺が悪い。

普段の仕事として片付けられたところを俺が邪魔してごめんねと謝罪したが、それでも報告書を出さねばと職務を全うしようとする熊谷少将を言いくるめようとしているのも俺が悪い。

あれ、全部俺が悪いな……？

「普段ならば、報告書をどのようにあげるんだ？」

「通常でしたら、大湊水雷団の旗艦である木曾に哨戒における戦闘の仔細を聴取し、行動調書にまとめます。今までは、それが難しかったため、その……」

「ふむ。ならば今回はどうだ」

熊谷少将に倅い俺が報告書を作成すれば何とかならんか？ と淡い期待を抱く。

「大湊警備府だけでは、難しいでしょう。アメリカ海軍の支援もありますから、事、今回における報告書の作成は聴取だけでも時間が掛かるかと思われまます」

うーん、無理！ まもる、お手上げ！

膝から崩れ落ちてしまいそうになるのを堪えていると、先ほどから紙切れで遊んでいたと思いき妖精がこちらへやって来て――

『えへへ、みんなでおしごとがんばったよ！ はい、これ！』

ぱさりと俺と熊谷少将の間に落とされる一枚の書類。

地面に落とさないよう空中でキャッチして書面を見た俺、顔面蒼白。

そこには柱島泊地でも見たことのある文字があった。

陽光に透けて見えた熊谷少将が声に出して読み上げたあたりで、俺はその書類を目にもとまらぬ速さで折りたたんで懐へしまった。

「大規模改装、申請……？」

「ん、んんっ！ んん、ごほん、ごほっ！ んんっ！」

何度も咳払いをして、俺は熊谷少将に言う。

「私が責任をもって処理しておくから、気にしないように」

「い、いや、あの、海原元帥」

「気にしないように、と言ったのだが」

「……っは。承知、しました……」

釈然としない表情を見せられてもおお！ これ以上はまもるの心が危ないのでええ！

眉間を指で揉みつつ、うう、と呻いてから、熊谷少将には妖精の声が聞こえていないというのに、俺は構わず言葉を紡いだ。

「様子はどうだ」

『ようすー？』

「大湊水雷団の」

『ああ！ うん！ あのねえ、みんながね、がんばるんだー！ まもるんだーってね！ すっごかったの！ こわいのいーっぱいいいたけど、きそさんたちがね、わーって！』

「………要点をまとめてくれるか」

「あ、あの、海原元帥……?」

熊谷少将の声を遮るようにさつと手を振ってから妖精へ顔を向けると、妖精はこれでもかと自慢げに胸を張った。

『きそさんたちがいーっぱいがんばったから! わたしたちもがんばりました!』

「それで、これか」

『うん! むつまるがわたせばわかるよっていった!』

むつまるが渡せば分かるってね……はいはい、なるほどね、そういうね……。

「……承知した」

それだけで分かっちゃうあたり、俺のダメさが際立つなあ……ッ!

これ以上に吐き出しては身体がしぼんでしまうというくらいに盛大な溜息が出てしまう俺を見て、熊谷少将が上目遣いになって言った。

オッサンの上目遣いなんて誰が喜ぶんだちくしょうめ。

「海原元帥、そのお……」

「ああ、説明するから待ってくれ」

うーむ。勝手に他の拠点にいる艦娘を改装しましたなんて言ったら、この場でぶん殴られそうである。とはいえ、既に木曾達は帰還している途中。黙っていても帰って来た途端に殴られるだろう。やばい。

「……こ、今回の、詫びとして、だな」

「詫び?」

お詫びに木曾を改装しておきました! ご迷惑かけてサーセン!

キャハッ! なんて言ったらそれこそ殴り殺されてしまうかもしれない。これが許されるのは艦隊のアイドルだけである。まもるはアイドルでもなくただの社畜だから二度殺されるだろう。

し、しかし改装は艦娘にとって悪い事ではない!

日々ドンパチを繰り返している大湊警備府にとっても戦力向上になるのだから、俺が恐れる必要がどこにある!

そうだね。資源はどこから出るんだって話だね。

「これに要した資源は」

出来る限り落ち着いて問えば、妖精はニツコリと笑顔で答えた。

『まもるにいえばいいってむつまるがいつてた！ あとでね、きそさんたちね、きつといーっぱいごはんたべるからって！ それと、ねんりよーとか、だんやくとかも！ いーっぱいほきゆうがいてるって！』
「ふむ、ふむ……そうか」

この世界での《改二》とはその場で資源を要するものではないらしい、とはぼんやりと知っていた。前例は柱島泊地所属の艦娘、神通がそれにあたる。

彼女は妖精の不可思議な力によってもたらされた改装で一夜にして大幅に戦力を向上させたが、俺の知る艦隊これくしょんのようにその場で資源を消費した、ということは無かった様子だった。その代わり、今しがた妖精が言っている通り、大量の補給を要した。大量、と言えど普段よりよく食べるなあ……程度の認識だったのだが、柱島泊地の明石曰く、翌日の補給だけは三倍から四倍に跳ね上がったという。

たかだか三倍から四倍、なんてさして問題にもならないように思えた。あの当時は。

よくよく考えれば、艦これよろしくクリック一つでチャリオンと補給されるわけではないなど当然のこと。神通の艦装に異常が生じていないかくまなく検査をしてから、それどこに入ってたんだというくらいの量をばんばか補給した神通自身が啞然としていたらしいのだから、改二とは、それだけとんでもない現象であるということ。

「……妖精の力によって改装が施される例がある、とは、聞いているな？」

「柱島泊地に所属する艦娘の多くがそうであると認識しております。

改二、と」

改二という現象は、きちんと大本営、井之上さんに報告してある。

大淀が任務にて出張のとは別に、妖精による改装が施された艦娘は大本営に出向いて検査をしている。神通もそうだ。

妖精の力による艦装の変化は、兵装に宿る妖精が能力を向上させる

現象の延長線上にある、あるいはその極致であろうと結論づけられた。

まあ、だからこそ妖精が見えるようになった軍人の多くが艦娘とのコミュニケーションを見直し、改善しようとしているわけで、熊谷少将も多分に漏れずその一人だったわけだが……。

怪我の功名、とでも言おうか。仕事を増やしやがってむつまるこのやろうと号泣すべきか。助けてくださってありがとうございますとございませむつまる様と土下座するべきか。

「大湊水雷団の旗艦木曾に、妖精による改装が施された」

「……はっ!?!」

熊谷少将から続く言葉が紡がれる前にと、俺は一気にまくしたてる。

「熊谷少将と艦娘、いや、正しくは大湊警備府の一同がもとより通じ合っていた証拠だ。艦娘が横柄だの軍人が頑なだのとそれらしい言葉や並べ立てて納得させようと考えていたが、ここに来て言い訳は不要だろう」

すみません実は殆ど勢いだけで乗り切ろうとしてましたと本音がちよっぴりこんにちは。

熊谷少将の表情を見て、流石にばつが悪くなってしまう。

「そ、れは」

「ここで少し休め。私は残った仕事を片付けるから」

「……」

そうして俺は「執務室を借りる」と言い残してその場を去った。

「まったく……ままならんな」

井之上さんにどう話をして納得してもらおうかと考え、そう呟きながら。

後始末②

大湊警備府、執務室にて。

「——はい、そのように伺っておりましたので、軽巡洋艦木曾の勤務態度を確認しました。その上で問題無しと判断したところですよ」

『ふむ、それで』

濃紺の軍服に身を包んだ海原が、軍帽を小脇に抱えて電話をしていた。

執務室には海原しかいないが、廊下と執務室を隔てる扉の向こうにはもう一人。

「それでですね……えー……大湊警備府の哨戒の件につきまして、大本営にあります資料をもとに実際に確認したところ……」

『資料と相違があったか』

「ええ、はい、そうですね」

じつと扉の前で耳を澄ませるのは、海原に置いて行かれてしまった熊谷少将、その人である。

彼は海原が大本営、井之上元帥と連絡を取っていることを察していた。

物干場での一連の出来事以降、すぐさま海原を追ってせめて仕事の一端でも担わねばと意気込んでいたところ、執務室で電話をかけはじめてしまった入室のタイミングを逃してしまったのだった。

熊谷少将には海原の声しか聞こえていないものの、明らかにただならぬ雰囲気であることは分かった。

しかしこのまま盗み聞きしているわけにはいかない。

いまだ、それいけ。さあ入るんだ。勢いをつけ何度もドアノブに手をかけるも、熊谷少将の頭の中では何度も海原の言葉が反芻され、どうしても力がこめられずにいた。

（海原元帥が別の世界からやってきた一般人など、既に承知しているはずなのに……何故だ……どうして、こうも及ばないのだ……私は少将にまで成り上がった軍人だぞ……！）

熊谷少将の自負。間違いなく彼は豪傑である。

(これが前々から計画されていた事であったならば、私がただ利用されたに過ぎない話だ。それならばまだいい)

再びドアノブに掛けられた手にぐつと力をこめる熊谷少将は考える。

(もしかすると、井之上元帥が計画していたことを前線指揮官たる海原元帥が実行しただけかもしれない。ならば得心がいく。元帥兩名に及ばぬなど当然のことだ。だが、ああして井之上元帥に連絡している口振りは、どうも……)

数秒から数十秒。熊谷少将が悩乱のうちに、さらに扉の向こう側で話は進んでいた。

「私が想定していた戦闘規模ではありませんでした」

短く切られた言葉に、熊谷少将は無意識のうちに息を詰まらせた。

研ぎ澄まされた五感がさらに鋭敏となって、ただ立っているだけなのに全身に痛みが走るようだった。

もちろん——勘違いであり、すれ違いである。

熊谷少将が勘違いしていれば、井之上元帥は海原とすれ違いを起こしているなどと、誰が考えようものか。

『想定していた戦闘規模ではない、と……ほお、言いよるわい。つくつく。海原、お前——これを読んでいたな?』

「……読んでいたとは、どういう意味でしょう」

海原は井之上元帥にさえ事後処理を頼ろうとするどうしようもない社畜である。誠心誠意、海軍に勤めている彼であれ、やはり抱えきれぬ量、いわば許容量は決まっている。

例えばそれが成長するものであり、今後は今よりも多くを抱えられるようになるとしても、今しがたの海原は既にパンク寸前なのだ。

木曾の横柄さを確かめるためにやってきた大湊警備府において、反射的に木曾の腕を握って「ご飯を残したら怒られるぞ」なんて小言を言った時点で、それを振り払われた時点で、いや、もう少しだけ海原の意を汲んで言わば、工廠部で海原が初めて感じた普遍的な艦娘への感想を耳にした時点で心は表面張力を失って多くを零していた。

さらに端的に言おう。

海原が鸚鵡返しする言葉に対して、井之上元帥が笑って先を察することにはさえ、彼は気づいていないし、早く柱島泊地に帰してくれと懇願する要因にしかならなくなっている。

要するに、逃げ出したのである。

海原はただ木曾の様子を見ただけ。そして、哨戒についてもきつとこれが大湊警備府の通常であり、海原が出しゃばってさえないなければそれで終わるものだとばかり思っていた。しかし木曾への思いやりと自分を優先する保身が混ざり合った結果、このような面倒を起こしてしまった、などと考えている。

それもそのはず、故に彼は何度も口にしていた。全て自分の責任で、自分は邪魔をしてしまっただけだと。アメリカ海軍の支援を乞うたのもまた、自分の責任であり、大湊水雷団を救うためだと。

海原は一言一句、おかしなことなど言っていない。

『このワシに駆け引きか？ なるほど、食えん奴になってきたとは思っていたがここまでとはな。いいぞ、いい、素晴らしいぞ海原』

「駆け引き？ あの、井之上元帥、ですから私は——」

『いつから読んでいた？ それだけ教えてくれんか』

日本海軍の頂点。日本国が持つ武力の象徴である井之上元帥がこうして海原に口を利くなど、井之上元帥と関わりを多くもつ政府の高官や軍部中枢の者らが聞けば卒倒するだろう。安心して欲しいが、もちろん勘違いである。

井之上元帥自身、海原の言動はよく勘違いされてしまうと知っているが故に、これこそ偶然であるなどとは一切考えなかつた。何故ならば、大湊警備府に送り込んだ本人であるからだ。勘違いを利用してやろうとした代償、とも言えよう。

世界一優しく、世界一強烈で、どうしようもなく下らない勘違いの連鎖。

それは日本海軍はおろか、アメリカ海軍、そして艦娘と妖精を巻き込み、海を渡る風のように吹き荒れる。

『よもや大本営に来る前、などとは言つまいな』

「読む読まない以前の問題です。私なりに考えた結果に過ぎません。

現地にまで来ているのですよ？ 大本営に来る前なんて井之上さんが送った人達までいて散々だったのに……」

井之上元帥を親し気に呼び、こうして愚痴るように零したそれもまた、要因。

『つは、それを人は読むと言うんじやよ。だがまさか、特警隊迎えを差し向け
てほどなくしてここまで考え、実行に移したとは……つくく、くくく、
面白い奴だ。お前が前の世界で使い潰されていた時間がこうも惜しく
感じられるとは。しかし、様々に突飛なお前のことを御しきれんワ
シもまだまだ成長の見込みがある、とも言えよう。どうだ？』

「それ以上成長してどうするんです？」

思わず素の感情を出して問うてしまった海原だが、すぐに咳払いして誤魔化し、ですから、と枕詞のように言う。

「井之上さ……んんっ、井之上元帥にお願いがありました、こうして連絡をさせていただいた次第です」

『よかろう。言ってみろ』

大湊と新宿、遠く離れた場所であるというのに井之上元帥は身構えた。

「大湊警備府における今回の哨戒は、通常通りであった、ということにしていたいただきたいのです」

『なに……っ？』

低くなった声に海原は溜息を吐き出した。緊張の溜息である。

しかし井之上元帥にとってそれは「それくらい考えられないのですか」と言葉無く示されたように感じられ、さらに思考を加速させるに至る。

『ま、待て、海原、少しでいい』

「はい。あの、申し訳ありません、本当……無茶を言っているのは、分かっているのですが……」

海原は一連の出来事について責任を取るつもりであるが、彼は社会人としての常識を持ち合わせている。

責任は負うが、体裁は保たねばならないと考えているだけだった。海原自身の体裁などではない。彼なりに、日本海軍、大湊警備府をか

き乱してしまつたと反省しているのである。表面上では何も無かつたかのようにしてくれと懇願しているのだ。

彼のように冗談めいて言わばアメリカ海軍の支援は渡りに船ならぬ渡りにアメリカ艦。しかしだからと言って巻き込んでしまつたのは海原の最大の汚点である。

では、これらを井之上元帥が額面通りに受け取るだろうか？

いいや、それは在り得ない。

『大湊警備府の哨戒を通常通りのものであつたと記録して、理由は』
「先にも申し上げましたが、大湊警備府は哨戒に際する戦闘が多い拠点であると自分でも調べて承知していたつもりでした。しかし想定していた規模ではありませんでした」

『先にも聞いたが……ふむ。具体的には』

「重巡洋艦級の深海棲艦を指揮官とした敵勢力を確認しました。運よく警戒網をすり抜けて来たとは考えられません。件の木曾率いる大湊水雷団と龍驤で戦闘しておりましたが、木曾の能力が——」

ここで一拍置いて、海原は言う。

熊谷少将の思惑を汲み取って伝えねばと。

これもまた、その通りなわけがない。

「……私の指示不足により、大湊水雷団に損害が出ました。ですので、今後こういふことのないように旗艦である木曾に妖精による改装を施しました」

井之上元帥以外であれば、大声で喚き散らしていたことだろう。

さらに詳しい話を教えろ、書面にまとめ、すぐに送れ、いいや、やはり私がそちらに行くから黙って待っている……井之上元帥の口からは、どれも飛び出なかった。

井之上元帥の頭に流れ込む情報から導き出される海原の心は、大湊警備府に住まう妖精の責任をも抱え込もうという大それたもの。

実態は妖精との共鳴が寸前で間に合ったに過ぎない。

『なるほど、なるほど……海原、お前の指示に不備があつたというのだな？』

「……っは」

『分かった。木曾の改装についてはどうしようとも書類が必要になるが、その準備は』

「出来ております」

『そうか。木曾は無事か』

「問題ありません。哨戒を終え、現在帰還している最中です」

海原の口振りが徐々に明瞭になっていくにつれて、別の理由があると思ひ込んだ井之上元帥はさらに問う。ただ解決しそうで海原が安堵しているだけだなんて微塵も思っていない様子で。

問題しかないのに「問題ありません」とはつきり口に出す愚か者がどこにいようなものか。しかし悲しいかな、社畜はどのような問題を抱えていても解決に向けて一歩踏み出しながら気丈に問題などありはしないと答えねばならない存在である。

ましてや社畜であり国畜ともなった海原のことだ。気丈どころか、それさえも手の内でしたと言わんばかりの雰囲気なものだから、井之上元帥に勘繰るなどという方が無理な話だった。

そうして、賢しい井之上元帥は偽りの答えを知る事となる。

電話口の向こう側で膨大な資料に囲まれた軍人が、ぼんやりと見つめる壁に貼り付けられた海図を見て、これしかないと導き出した。

まさか、いやいや、それでも、ここは確認せねば。

焦りを滲ませないように至極落ち着き払ったかのような声音で、井之上元帥は言葉を紡いだ。

『北方の防衛ライン、か』

「……」

海原は黙り込む。それもまた数秒。

彼の頭の中は――

(あああああ！ やっぱ北方の防衛ラインとやらに関係があるんですよねこの大湊警備府ってやつはあッ！ 邪魔した上に後始末を井之上さんに頼った時点でバレて当然だけどさああああ！ 突きつけられると何も言えないってもおおおお！ ごめんなさい！ マジでごめんなさい！ 木曾は問題無かつたんで！ 自分の仕事としては問題無しって報告が出来ただけで及第点ってことにしていただけ

ませんか！ オネシヤス！ オネシヤス！ お好み焼き奢るんで！
オネシヤス!!)

——酷いものである。

「防衛ラインの設置が急務であるとは存じております」

かろうじて口にした当たり障りのない言葉。

井之上元帥の耳には、こう聞こえた。

だから動いてやったのだ、と。

『ああ、そう、か……ふうう』

井之上は返事をしながら机の引き出しから葉巻を取り出し、器用に片手で火を灯した。葉巻の片側を乱暴に噛み切り、葉が口に張り付いてもお構いなしに煙を吸い込み、深く吐き出す。

『……礼を言う』

「れ、礼など、私はやるべきことを何とかこなしただけで……」

木曾の態度を確認しただけである。本当に見たただけだと本人は思
い込んでいる。

井之上元帥は電話の向こうにいる海原に見えないからと薄く笑み
を浮かべた。

『大変だったか』

「その……」

『構わん』

「……多くを一人で担う限界を感じました」

海原の消え入りそうな声に、井之上元帥はもどかしくなり、大声を
あげてしまう。

『当然だ！……こんの……！ はああ……すまん、今のは、忘れる』

「申し訳、ありません……」

謝罪され、さらに感情が高ぶりそうになった井之上元帥だったが、
葉巻の吸い口を噛むことで堪えた。

なんと不甲斐ない事か、と。

本来、その感情は海原に向けられることが正しいのだろう。

もちろんそのベクトルは現在、逆に向いていたが。

全てを悟ったつもりでいる井之上元帥は、ぽつりと言った。

『いや、いや、素晴らしい戦果だ。それだけでいい。大湊警備府における哨戒についてもそのように処理をして構わん。作戦概要なども結構だ。ただ、そうだな……撃沈数に差異が出るだろう』

多くを撃沈したために不自然な記録になることは必至である。

海原はそれを、こう返してみせた。

「提案なのですが……そ、その、軍規上、戦果を分けることは違反にならないのですよね」

『……まさか、お前』

「え、えー……と……舞鶴鎮守府などに、数字を移動させるというのは、難しいでしょうか。現在、立て直しに多くを割いている状態でしょうから、対外的に維持できているように見せられるならばと思うのですが」

海原がてんやわんやにしてみました被災地……もとい、被害地である。

井之上元帥はここまでくるとそれで手を打つしかなかった。ぽんぽんと何度も自身の太ももを掌で打って、言ってくれるじゃあないかと憂いすら忘れるくらいに笑った。

はぐれの深海棲艦として処理するならば、数の増減が両拠点であるなら違和感など皆無。ここまで考えられていたのならば、まさしく海原こそ戦争を掌握せし護国の鬼神と言えよう。

安心してほしいが、まったくそんなことはない。

『ワシに向かって堂々とそれを言うか。ははは！ 長峰少佐にはどう説明するつもりだ？ ええ？』

「私の不手際であると正直に言います」

『不手際か。そうか……つくく、お前らしい』

「……」

海原は今にも泣きそうな顔をしていたが、小脇に抱えていた軍帽を被ることでそれを誤魔化した。胸中では「勘弁してください井之上さん」といったところ。

このように複雑化した勘違いとすれ違いが何故上手く回り続けるのだろうか。

それは間違いなく、海原の矮小な人間臭さと、有り余る誠実さ、そして彼の――

「井之上元帥。こまごまとした後始末はするつもりですので、こちらでも人員を割く許可をいただきたく思います。大湊警備府の軍人へ仕事を割り振るのはまずいでしょようか」

『後始末か、そうだな……そちらに丁度良い使い走りがもうじき到着するはずだ。その者らを使えばいい』

――常軌を逸した処理能力の高さが原因である。

保身のためとは言え周囲の状況を的確に把握し、対処に必要な仕事を各員に振り分ける能力の高さは、奇しくも指揮官にとって不可欠のものだった。

「使い走り、ですか」

『戦艦アイオワ、空母サラトガを支援に送ったのはアメリカ海軍だが、それらは名目上、ソフィア女史の助手だ。ともすれば現場での命令権限はソフィア女史にある。彼女がお前が必要ならばと送ったのだ。その本人は福島で足止めを食らっておつてなあ。それではいかんとワシが特警を派遣し、護衛と共に大湊警備府に向かわせておる最中なんじゃ。何かあればと幾人かがそちらに先んじておるから、それを使えと言っておるんじゃ。事足りねば増派もできる。そも、これが望みだろう？』

海原はソフィア女史にも迷惑をかけていると自覚して地面に伏してしまいそうになりつつ、小声で「はい」と答えた。

「津軽海峡中央部における深海棲艦の出現で周辺地域に警報が発令されておりますので、住民への説明に人員を割かせていただきます。えー、それと……虚偽を説明するわけにはいきませんので、それとなく濁しますが……」

『敵戦力の撃滅は確認出来ているだろうか？』

「はい、大湊水雷団が現地で確認をしております。龍驤やアイオワ達も同じく。哨戒ルートとなっている海域の警戒網に引っかかるような反応はありません」

『ならばよし。アメリカ海軍への報告についてはワシが受け持つ――』

そちらは任せた』

「……っは」

そうして、時が来る。

* * *

入室出来ず、こうなればもう電話が終わり次第入室しようと佇んでいた熊谷少将のもとに、赤い腕章の一行が現れた。正門からの連絡さえもなかったために熊谷少将は慌てて姿勢を正し、威を醸したが――総勢十数名の腕章をつけた軍人はたじろぎもせず、一糸乱れぬ歩みで熊谷少将の眼前まで来ると、ざつと最敬礼してみせた。

その先頭で凜とした声を発した男の腕章にある文字を目で追った熊谷少将も、慌てて答礼する。

「海軍特別警察隊、第三方面分遣隊兵曹長、相川太一あいかわ たいちであります」

鍛え抜かれた軍人らしい体軀に、キツイ一重の目元。

今にも怒り出しそうな眉は相川兵曹長の性質を表しているかのようだった。

「何用か」

熊谷少将の重低音のきいた声が空気を揺らす。大抵の者はそれだけで畏怖し、縮み上がったものだが、相川兵曹長は堂々としたままだった。

「――申し訳ありません」

ただ謝罪するだけの相川兵曹長。それは階級が雲の上である熊谷少将であれ何用であるか答える必要があれど、答えられぬということ。

言わずもがな、今もまだ執務室内で電話をしている海原元帥、並びに井之上元帥の直属であるという証左である。

さらに明確にしめしてやろうとばかりに、相川兵曹長は熊谷少将へ機敏な動きで一礼したのちに、扉をノックしてみせた。

「誰だ」

くぐもった海原の声に対して、先ほどより大きな声で名乗り上げた

相川兵曹長。

たつぷりと間を置いてから海原は重苦しく「入れ」と言った。扉が開かれたと同時に、熊谷少将を目にした海原は電話口に向かって言う。

「丁度来ました。では、あの、えー……」

しばしの逡巡を見せ、海原は井之上元帥に向かって頼み込む。

「熊谷少将には、その」

『分かっておる。代わってもらえるか』

「はい。——熊谷少将、来て早々に悪いが、井之上元帥と話してもらえるか？ 私は別の仕事を片付けてくる」

呼びつけられた熊谷少将は小走りに海原へ近づいて、恭しく受話器を受け取って耳に当てた。

「熊谷であります」

『おお、すまないな熊谷少将。此度の哨戒ではご苦労だった』

「井之上元帥……これは——！」

哨戒などではない！ との言葉を呑み込む熊谷少将。それは何故か。

熊谷少将の背後で繰り広げられる会話が、そうさせたのだ。

「相川兵曹長と言ったか。これから割り振る仕事を任せたいが、出来る限り迅速に行う必要があることを念頭に置いてほしい。諸君らも、だ」

「っはー！」

多くの返事が聞こえてきて、それが少なからずヒントになっていた。

「深海棲艦の出現で周辺地域に警報が発令されている。今の今まで対応出来なかったため避難している住民がいる可能性がある。そちらに出向き通常通りの哨戒だったが戦力増派によつて手違いがあつたと説明をしてほしいのだ。誤報の原因は……私であると言ってくれ」

「海原元帥閣下が原因であるか？」

「そうだ。詳しい所は濁しておいてくれ」

「それは問題ありませんが……」

相川兵曹長の視線が熊谷少将を捉えるも、一瞬で海原へと戻る。

「任務にはどれだけの期間を——」

「今日中だ」

「きよつ……!?!? ん、んんっ……了解」

海原はただ単純に周辺地域に誤解を与えてしまったと説明してこいと言っているつもりだろうが——津軽海峡中央部に出現したと警報が発令されているのだから、その範囲は海峡を隔てて青森県の沿岸部のみならず、北海道は函館沿岸部も含まれている。

知ってか知らずか、いや、知らないだろう。海原なのだから。

「現時刻を以て開始とする。頼んだ」

「っは！ ヒトゴーフタフタ、行動を開始します！」

そのまま執務室を走り出た特警隊を見送った海原もまた、執務室を後にする。

彼にはまだ仕事が残っているのだ——アメリカ海軍の艦娘の対応をするという大仕事が。

そうしてぽつんと一人残された熊谷少将は、あつけに取られて言う。

「申し訳、ありません、その、今」

『聞こえておったわい。それでだな、熊谷少将。此度は哨戒で方を付けることが決定した。お前がどう言おうが覆すことは叶わんぞ』

「しかし！」

『ならん。ならんのだ、熊谷少将』

「どうしてなのです、井之上元帥……」

『ワシらの立場を考えてのことだ。海原の気持ちも汲んでやってはくれんか』

「あれは間違いなく北方の防衛ラインの設置を妨害するための戦力でしよう。それを作戦にもまとめずどうして——!」

『故に、だ』

「如何な理由であれ承服しかねます！ 私は大湊警備府の指揮官であり、防衛ラインを越えた最終地点でもあるのですよ！ 妨害するための戦力であれば、それが本土の海峡に現れたなどと……ッ」

熊谷少将の悲痛な叫びこそが答えだったと気づくのに、数秒も要さなかった。

「……あ」

『我々の目で見てどうあれ、国民や、いいや……日本を含む各国の政府からは防衛ラインの設置に失敗したと見られてしまうだろう。日本海軍がやつのことで立て直した全てを失いかねん』

「そ、それは……ですが……っ」

『さらに言わせるつもりか？』

熊谷少将は固唾を呑んだ。

それを肯定と受け取った井之上元帥から紡がれる言葉に、熊谷少将は執務机の椅子に座る気力さえ失い、茫然とした。

『日本海軍随一と謳われる横須賀鎮守府を凌ぐ勢いである大湊警備府の戦力は、海原の作戦において不足だったのだ。大湊水雷団の戦闘能力——突破力、とでも言おうか。それを海原の口から、役に立たなかったとでも言わせたかったのか？ これはワシにも言えることだ。各国との調整に奔走するワシは大局を見ているつもりだった。所詮、つもりだったのだ。木を見て森を見ずとは、気合十分から回っていた日本海軍そのものよ』

「ぐ、う……」

氣遣われた——軍人の、男の、大湊警備府を守護する艦隊の指揮官たる矜持を踏みつけぬために。

それを求めてしまったのは、熊谷少将にとって一生の不覚だった。

もちろんそんなことはないのだが。

『報告書の必要はない。海原から粗方の話は聞いておるのでな。熊谷少将と海原、どちらの肩を持つつもりもないが、これだけは言える。慰めでもなくな』

「なんで、ありましようか……」

『海原の手、妖精の力か……それによって、木曾に改装が施されたのだらう』

「……はい」

『柱島泊地を除く、初の改二、だ』

「——ッ！」

茫然自失としていた熊谷少将の背筋が伸びた。

『確認しておくが、今回の哨戒がどのようなものであったかは、理解しているな』

『はい。防衛ラインの設置を妨害しようとした深海棲艦の撃滅が主となる作戦でしたが……秘匿作戦でもある、と』

『左様。海原の悪い癖とも言えるが、奴はワシをも気遣ったのだろう。外交のほか、政府と国民への説明義務はワシにあるのでな。はぐれに紛れて警戒網を抜けたわけでもなければ、潜伏しておりましたと説明してみる。想像もしたくないわい』

『仰る通り、ですね……しかし規模については——』

『はは、それも先ほど、海原が言っておったよ。秘匿する理由はそこにある』

『秘匿理由が?』

いくら考えようとも先を紡げずにいる熊谷少将の鼓膜を、井之上元帥の重たい声が震わせた。

『恐らくは、敢えて戦闘を避けて襲撃されるまで時間を稼ぐ算段だったんじゃないろう』

『まさか、それで軽空母の龍驤を——!』

『うむ。奴は相手の動きを監視してギリギリまで時間を稼ぎ、一切の抵抗も許さずに方を付けるつもりだったのだ。それ相応の戦力を用意してな。そうすればワシは政府にも国民にも敵を見つけたりと説明がつく。見えぬ敵でさえ見つけ出したと各国へ日本海軍の在り様も見せつけも出来たじやろうな。しかし、想定よりも小規模であった——ならばソフィア女史の連れたアメリカ海軍の艦娘の二人を加え、大湊水雷団の水上打撃部隊、柱島泊地の龍驤とアメリカ海軍のサラトガの航空部隊に、大湊水雷団の戦力を底上げする戦艦アイオワで押し切ってしまうと、そういう話だ。奴は体裁を蔑ろにする男ではないが……第一に護国と考えたのだろう。国民へ無用な不安を与えぬようにと、たかが周辺住民に人員を割いて謝罪して回ろうというのだぞ?』

「なん、と……そんな事を、何故、私には話さずに……」

『ワシの耳にも痛いことを言うが、日々の哨戒を通して違和感を抱かなかった拠点はどうして相手の襲撃に対応できようか』

全ての答えが出揃ったところで、熊谷少将に残されたのは——自身に対する失望だった。

木曾が横柄だと書状を送って海原が大本営で資料を見た時点で気づいたとすれば、それよりも前にいくらでも時間のあった自分や井之上元帥は、無力であつたと言わざるを得ない状況なのだ。耳が痛いなどという領域の話ではない。

国家の存亡が危ぶまれる、その爪が本土に痕を残さんとする前に、海原はまさに神懸りの察知力を以て阻止したのである。

『国家間の諍いは鳴りを潜めておるが、無くなつたわけではない。多くのシーレーンを奪取したとは言え、日本国ははまだ大陸を通して各国との貿易を続けているなど、説明せねば分からないほどに阿呆なわけではないだろう』

「……はい」

『ワシらが十年という長い歲月存続出来ているのは、ある意味では攻撃を半ばあきらめたが故の結果。専守防衛はワシら人類の寿命を延ばしたが、その代わりに、多くの腐敗をもたらした。仮初の安全を錯覚させた結果になにが残った？ 無謀な攻撃を敢行し、戦力を見誤つて多くを失った。そうしてまた、今度は何を失うのだろうか』

「言葉も、ごいません」

『腐ったミカンを取り除けばそれで解決すると言うなら、ワシは喜んで身を切ろう。じゃが、それは人や社会の話ではないだろう。ワシもまた、日本国を守護するために立ち上がったが……立ち上がればそれだけ、視野が広がり、疎かになることも増えるということを思い知ったところよ。はは、なんとも、情けない限り』

「井之上元帥……」

今のは聞かなかつたことにな、と乾いた笑い声をあげる井之上元帥に、熊谷少将は目頭をぐつと指で押さえて返事した。

『今できることはなんだ？』

「大湊水雷団……いえ、大湊警備府の戦力を向上し、全ての記録を精査しなおして現状の把握に努めます。今後、このような事が無いよう大本営にも正しい記録を送付しますので、そちらでもまた精査いただければ」

『うむ……承知した。して、艦娘への対応もあろう。忙殺されてしまうが、手は足りるか?』

「……そ、それにつきまして、井之上元帥に意見具申が」
『言ってみろ』

「ここで言わずしてどうする、と熊谷少将は大きく息を吸い込む。

「今後、大湊水雷団からの異動はないものとお考えください」

『……ほう?』

大湊警備府は純粋な練度という戦力の指針を見れば井之上元帥直轄たる横須賀鎮守府に迫るものである。

各拠点に配属される前に大湊水雷団で戦闘とはいかなるものかを実地で体感することは、艦娘にとっても決して悪い話ではなかった。

今更になつてそれを覆そうとしているのだから、熊谷少将であれ緊張してしまうが、井之上元帥の返事は、あっさりとしたものだった。

『わかった』

「え、あ……よろしい、ので……?」

『よろしいもなにも、お前が言い出したのにおかしな奴じやな。熊谷少将の考えも分かっておる。戦力の流出が続いては安定しないことも一理あるとして、今の艦娘は……そこにきて、どれくらいになる』
「三年になります」

『愛着の一つも湧こうものよ。純然たる海軍としては、甚だ納得できるものではないが——ワシが言ったことが理由であらう?』

戦力の流出を防ぎ、大湊警備府を安定させるため——用意された理由であれ、継らぬ理由など無かった熊谷少将は力強く返事した。

「はい。その通りであります」

井之上元帥は、彼もまた変わり始めているのだと目を閉じて想い、吐息が漏れるような声を零す。

『理由付けの雑さは、海原のようじゃなあ』

「ぎつ、雑でしたか……」

『ワシが言うた以外にも考えられように、それでいい、とばかりに頷かれてはな。しかし無駄なことを考えることも億劫じゃと、声に滲んでおる』

「失礼しました」

熊谷少将は複雑そうな笑みを浮かべた。

『熊谷少将よ。海原を見て、何を学んだ？』

「……木曾が、笑ったんです」

その告白を聞いて、井之上は破顔した。

『ふむ』

「もう大丈夫だと、今から帰ると、言ってくれたのです。私は……彼女らもまた、私と同じように生きているのだと深く学びました。軍人として足りぬものがまだまだあるのだとも痛感しました。それに、井之上元帥も人だったのだと安心したところでもあります」

海原の仕事の成否を問うならば――

『ごいつめ、ワシに向かって言いよるわい。しかし、それを聞いて満足したぞ。熊谷少将、時間を取らせたな』

「いえ、そのようなことは。では……」

「そろそろ、ガキ大将とその子分を迎えに行こうと思います」

『うむ。後始末については心配はするな』

――成功としても、よいだろう。

後始末③

大湊水雷団と龍驤、そしてアメリカ海軍の支援艦として海域へ駆り出されてしまった戦艦アイオワと空母サラトガが大湊警備府に戻ったのは、夕刻になるうかという頃だった。

行きは五人で帰りは七人、警備府に勤めてりやいくらでも珍しいものは見て来たが……などとしみじみ口にしたのは杉村班長だけで、彼以外の工員はアメリカ海軍の艦娘を初めて見たのもあつてか緊張した様子で丁寧に艦装をクレーンにかけて修復作業の準備を進めていた。

しかしアイオワもサラトガも目立った損傷は無く、艦装も汚れていない程度。通信を直に聞いてはいなかったが、一度目に木曾達が戻つて来た時の損傷を考えれば、それがどれだけ幸運で、あるいは異常であることかを悟るに至った。だからこそその緊張、とも言えるのかもしれない。

大事をとつて、と修復用ポッドに案内されたアイオワから発された言葉が日本語だったのもそうだが、その内容に興味をそそられない者はいなかった。

「日本も同じなのね？」

何気ない一言だったのだろうが、工員達にしてみれば各国の艦娘の扱いや、準ずる情報は非公開なことも多いために、前線に出ている艦娘の言葉は重みが違った。

聞き流すべきか否かを迷っているうちに、最後の最後まで海を見つめて順番待ちをしていた大湊警備府の面々が工廠へと足を踏み入れた時、迷い、疑問、諸々を払拭するように杉村班長が白々しく言うのだった。

「仕事増やしやがったな木曾」

「うえっ……仕方がねえだろ、戦闘が激しかったんだからよ……」

文字通り、うえ、なんて顔をしながらクレーンに引っ掛けられて運ばれていく艦装について行きながら言った木曾だったが、表情の奥に宿る感情は晴れ晴れとしたものだった。

日が落ちるのも早くなった季節に似合う、戦いを知り、それでも前を向かねばと海に出た艦娘らしい顔をしていた。

木曾に倅い、やはりカルガモの親子のように並んで工廠を歩く六駆の面々も似たような表情だった。

「と、塗装、落ちちやったのです……ごめんなさい……」

「かなり激しく動いたから、そのお……」

電と雷が頭を下げると、連動して響も申し訳なさげに目を伏せた。

「私も気を付けていたのだけれど、ごめん」

すると、工員は「いいっていいって、気にすんな」と笑った。

しかし木曾に全員が顔を向けた時、その表情はやっぱり白々しくしかめられていた。

仲違いをしていたと言えばそうなのかもしれない。

仲直りをしたと言えば、それもまたそうなのかもしれない。

だからこそ距離を測りかねているが、互いから突き放すよう歩いて歩み寄るあべこべな姿勢は、屈強たる大湊水雷団と警備府工廠部らしさ、と言うべきものだった。

「木曾、あのよ」

一歩前に出た工員は、杉村班長をちらりと見てから頷くと、発する前に噛み砕かねばと言葉を口のなかでもごっつかせた後に、木曾に急かされるように「んだよ」と言われてから、こう言った。

「色々と言いたい事があるから、一つずつ聞くな？」

「はあ、さっさとしてくれ。俺達だつてとつと入渠しちまいてえんだから」

「バツカ、お前、助けてくれたアメリカ海軍の艦娘が先だろ。死にやしねえんだから我慢しろ。それよりだよ」

工員は、びしっとクレーンに吊られた木曾の艤装を指差す。

「なんだ？ あれは」

「……」

言わずもがな。それは工員達の知らない艤装だった。

正確には、見覚えがあるものだが、まったく形状の違うものである。「……ぴかっと光つたら、そうなってたんだよ」

「はああああ!? んな冗談みたいな話あつてたまるかツ!! ぴかっと光つてたらあんな模様の塗装に変わって? それで、なんだ? あんなモニターアームみたいなのがつきましたって言うつもりかよ!」

「そうだよ」

「そうはならねえだろ!」

「なってるんだから仕方がねえじゃねえか! 文句なら妖精に言えつて!」

「出た、妖精。ああ、ああ、分かってるよ。妖精がかかりや不思議なことの一つも起きたつておかしくねえわな。それでも、妖精が艦娘を怖がってここ数年はまともに姿を見せなかったのはお前が一番よく知ってんだろうが! その妖精が木曾の艀装を? ぴかっと、つてか?」

杉村班長をはじめ、工廠部の誰もが妖精を見たことがある。

偽新人であつた海原の次に若手である新井もまた同じく。

しかしながら彼らの知っている妖精は修復ポッドを弄っているか、開発用の仕組みの分からない機械に群がっているくらいで、不可思議な力を用いて艦娘に直接作用することなど皆無。

兵装に宿る妖精がその性能を向上させる、という話も知っているし、実際に目にした者もいくらかは在籍していたが、大湊警備府では一様に目撃さえしていない。

「本当だつて! マジ! マジなんだよ! 海域で戦つてたら、いきなりぴかーって光つてよ! そしたら身体が軽くなって——」

工員達と口々に言い合う光景を見て、何事だと修復ポッドに入ろうとしていたサラトガ達がやって来たあたりで、工廠の鉄扉が開かれた。

重苦しい音とともに姿を現したのは、海原だつた。

「戻つたか」

短い言葉なのに、全員がそれだけで気を付けの恰好になつてしまふ。

海原が右手を振ると力が抜けて背が少しだけ丸くなるが、両足は動かないまま。

「皆、ご苦労だった。サラトガとアイオワも、支援感謝する」
すつと頭を下げられてアイオワは慌てて両手を胸の前で振った。

「It, s o k! o k! I, m g l a d t h a t I c
o u l d h e l p y o u o u t! ……じゃ、ないわね。
えーつと……やくだてて! 嬉しいわ! ね?」

サラトガは頭を下げるのもそこそこにアイオワに微笑んだあと、海原を見た。

「――助けになれたでしょうか?」

その言葉に込められた意味を知らない者などおらず。

サラトガの言葉に工廠がしんとした静けさに包まれる。

海原はしばし黙っていたが、じつとサラトガを見て頷いた。

「素晴らしい働きだった。話したいことは多くあるが……木曾、改二
になったようだな」

海原はクレーンに吊り上げられた状態の艦装を見て言うと、次に各員を見回す。

「本日の哨戒について聴取されるだろうが、報告書の作成は私に任せ
てもらう。それから、支援に来てくれた二人」

「はい」

「Aye, aye, s i r!」

アイオワとサラトガの力強い敬礼に気圧されそうになった海原は、
内心でビビリ散らかしながらも顔に出ないよう必死に堪え、安心させ
るような声音で言う。

「……ソフィア女史も間もなく到着するそうだ。それまではゆっくり
と休んでくれ。ソフィア女史が来たら食堂に向かってもらえるか?」

ささやかながら食事を用意しておいた。もちろん、全員の分をな」

海原が全員を見て目を細め口元を綻ばせた途端に、力が抜けたよう
にへたり込む六駆の三人。そして木曾も、はは、と苦笑した。

これを以て作戦を終了する、と口にされたわけでもないのに、海原
の言葉はそれだけの力があつた。

「やつと、終わったのです……!」

「たったの半日、だったのに……長かったわ……」

「はああ、本当だよ。今までで一番の任務だったね」

思い思いの言葉を噛みしめる中、木曾は目ざとく海原の動きに気づいた。

「なあ、海原元帥」

「うむ」

口調こそ変わらないものの、木曾は最大の緊張で全身を強張らせて言う。

「……どうして、俺だったんだ」

海原はしばし考える仕草を見せた。それはたったの数秒ながらも、その他の全員には数分か、数十分にも思える長さだった。

（う、うーん、どうしてって言われなくても……妖精が勝手にやったことなんでえ……まもるは判断基準を知らないと言いますか、むしろ改二にしていたいただいたお陰でまもるの首が繋がっていると言いますか……。そのまま伝えるわけにもいかんしな……木曾の努力の結晶だ！ とでも言うか？ いやいや、もとはと言えば木曾達と大湊警備府の問題で呼び出されたんだぞ俺。努力云々なんてのは木曾どころか六駆だつてしてる事で、俺が来たから滅茶苦茶になったのを改二で誤魔化しに came したと思われてしまいかねん……誤魔化しを誤魔化すために適当な言い訳を——つてもうコレ何しに来たんだか分からんわ！ 助けて龍驤！）

龍驤をちらりと見る海原。地雷を踏みぬく行為になるとは知らぬまま。

「ウチに説明せえって？」

「私が説明するよりはよっぽど分かりやすかろう。頼めるか」

「間違えてたらどないすんの。君が説明する方がよっぽど正確やろ」

「何を言うか。柱島泊地で数多の任務をこなすお前が間違えるなど思っただけはない。私を良く知っているだろう」

「……それは、そやけど」

「私は言葉選びが下手でな。それこそ南方海域を開放したあの頃のよきに勘違いさせてしまいかねん。今でこそお前にやつと考えが伝わっているくらいなのだから」

言わずもがな、彼が社畜であつた過去を指している言葉に、龍驤は目を細める。

「……今はもう勘違いやないと思うけど？」

「それでもだ」

「はあ……なーんでウチになすりつけんねんな、こんなことお……」

「私が言うよりはるかにマシだからだ」

堂々と言つてのける海原に、ぐつと言葉に詰まつた龍驤。

「つ……ウチが言うても同じや！ アホ！」

アホ、という声に龍驤と海原以外がぎよつとしたが、それも一瞬だった。

「まだ仕事が残っているのだ。井之上元帥が人員を寄越してくれたから、今のうちにさつきと終わらせねばならん。分かってくれ」

「井之上元帥の名前まで出さんでもええやんか……わあつたて、もお……」

海原は重々しく頷いてみせた。それから迅速に工廠を離れることによつて窮地を脱した——が、ただ褒めたたえ必要事項を伝えて去つたように見えることなどありえるはずもなかった。

皆の目には不可思議に映っていたのだ。アメリカ海軍の支援艦たる二人に食事を用意したと歓待の意を伝えるだけならば、もう少しくらい雑談の一つや二つ挟んだつておかしくなかつたはずだ、と。

ましてや最初から大湊に向かつていたとは言え哨戒とは名ばかりの殲滅戦に打ち合わせさえ無くして戦力として投入されたとあれば、体裁を保つために動くのが通常考えられる行動だろう。

かつて救つたアメリカの空母と、ソフィア女史の友人と称される戦艦。

海原は工廠から出て行くほんの一瞬、二人を見た。

（く、くそつ……もつと話したい……見ていたいの……仕事がつ……！）

未練がましく見ただけである。

海原が工廠を去つたあと、龍驤は海原の想い以外の全てを察して、ああ、と溜息を吐き出して額を掌で打つた。

「なんでウチやねんな……」

「龍驤、教えてくれよ。どうして俺だったんだ」

柱島泊地のご意見番。賢しい彼女はいくつかの食い違いを頭の中で整理して修正しながら、ぽつぽつと話し出す。

「サラトガにアイオワまでおるから、間違いないなこれ……工員もおるのにここで話すべきかは分からんって言いたいところやけども、まあ、司令官がああ言うたんやし、ええか……」

「それでは、自分らは席を——」

「ああ、ええて、ええて、気にせず作業してや。妖精が一枚も二枚も噛んだら時点で君らも機密を握ってもうてるんやから」

工員達に手を振ってから、修復ポッドの並ぶ区画へ歩む龍驤。それに続く艦娘一同。

「哨戒と銘打っておいて、国民を安心させるための司令官らしい作戦……それやと語弊がある。この一件はな」

ほれ、と手で先に行けとサラトガとアイオワに修復ポッドを示すと、二人は頷いて制服に手をかけた。

しかし、続く言葉に手が止まる。

「——南方海域開放の後始末やったんや、これ」

* * *

大湊警備府の工廠に妖精が戻って来たど手放しで喜べる状況とは言い難く、工員は修復ポッドの並ぶ区画に間違っても自分達以外の者が入り込まぬようにと目を光らせていた。

別段、工廠部に来るような者など工員以外にいるわけもないのだが、それでもしなければ国家機密を聞いてしまっている自分達がどうかになってしまうと荒唐無稽かつ無根の不安が身体を動かした。

制帽を脱ぎながら、声が震えないよう注意しながら言葉を紡ぐ木曾。

「後始末って、もう一年も前の話じゃねえかよ、それ……」

大事を取って修復ポッドに入っているサラトガ達の表情が曇るも、

龍驤は終わったことだと言わんばかりに気の抜けた顔でサンバイザーを脱ぎ、すぐに入渠出来るようにと結っていた髪をほどいた。

工廠に吹き込む潮風と、鉄と油の匂いにさらさらと揺れる栗色は、見た目の幼さとは裏腹に、その場の者達に壮絶な戦歴を彷彿とさせるのだった。

「二年も前やからや。サラトガはええとして……木曾は南方海域開放作戦を、どう認識してる?」

サラトガとアイオワが入渠している間、空きのポッドには先に六駆をと電の背を押しながら木曾は答えた。

「どうって……楠木少将が殉じた海域だろ。会ったこと無いから知らないけど、今の俺達が深海棲艦とやり合うのに貢献したすげえ人つてのは知ってるよ。その人でも抑えきれなくなった海域を、海原元帥と柱島泊地の艦娘がやり合って——」

「おかしいうって思わへんの?」
「何がだよ」

「その当時、司令官——ああ、海原司令官な。司令官が大将から少佐に降格して、ほんでまた大将に戻って、一気に海域を攻略したんやで」
「そりゃあおかしいだろ。海原元帥を見て確信したよ。新人のフリして大湊警備府に来るのも変だし、哨戒かと思えば今ままで最大規模つて言ってもいいくらいの戦闘になるし、おかしいと思わないわけがねえだろ」

「ちやうちやう、そっちやなくて。南方海域の開放の方や」

「南方海域の開放も、まあ、そうだな……たかだか一日つて、ありや人間業じゃねえよ。新人のフリしてる時はなんとも思わなかったのに、軍服姿で出て来た時にや心臓が止まったつて」

「あー、ウチの聞き方が悪かったわ。南方海域は間違いなく開放された、それもたったの一日や。それがおかしいうちゅうんは誰しもが分かっこととやけど、深海魚どもの規模のことや。ぽこぽこ出てくるあいつらを全部沈めたんも間違いはない。ただ、特殊個体がおったような海域で——」

龍驤がそこまで言ったところで、言葉を遮るように木曾は声を上げ

た。

「あの重巡級——！」

「そういうこっちゃ。あの時、特殊個体が指揮を執ってるようなのと柱島艦隊がやり合ったわけや。確認出来る深海魚を全部沈めたってわざわざ言うたのも、そういうことやな」

そう、龍驤が言うように——あれは南方海域に出現した特殊個体が指揮していた深海棲艦とは別動隊で、戦場にいなかった個体だったのだ。

指揮官を失った深海棲艦は有象無象となつて各拠点に撃沈されてばかりだが、それ以外も存在するという証拠でもあった。既に沈んでしまったが、沈めた本人たる木曾はもう声の震えを抑えきれなかった。

「大規模な艦隊を即座に用意出来る……いや、艦隊じゃねえな、龍驤の言ってるように、魚みたいにウジャウジャいやがるんだ……海域の開放で終わりってわけじゃ、ねえんだよな……」

「その通りや。今回ののは、前とは違った状況やから司令官も慎重になつとる場合やなかったんかもしれん……せやから、大湊警備府の任務にかこつけて哨戒と言ひ張つてウチを筆頭に木曾を先行させた……」

「じゃ、じゃあ、俺は」

「司令官がウチに言させたんは、言葉選びが下手やから、ちゅう以外にも理由がある」

ぴたりと動きを止めた木曾。修復ポッドにすつぽりと身を沈めたサラトガ達も、複雑な表情で聞いていた。

「大湊警備府、もとい大湊水雷団におつたとされる艦娘は多くないけど、それでも日本海軍きつての戦闘集団やと名乗っておかしくない強さを持つとる。井之上元帥直轄の横須賀鎮守府とタメ張れるくらいって言うたら、まあとんでもない強さやと誰でも分かるやろ。殆どが戦闘技術を学んだら各拠点に異動しとるちゅうのに、三年もおるって言うなら、どれだけ恐ろしい強さなんやろか、と考えるのは、不自然な話ちやうやろ？」

「……」

木曾は褒められているというのに、押し黙ってしまふ。龍驤の言わんとして、いることが分かったからだ。

龍驤が言わんとして、いることは、言い換えれば——海原元帥が言わんとして、いることである。もちろん違ふが。

「——君を改二にしたのは、想定 of 戦力では無かつたつちゆうことやで」

「……ああ」

今度は龍驤が目を剥いた。てつきり反発するか、侮辱するなど吼えるものだと思つて、いたからだ。

どこか、柱島泊地にいる、とある軽巡洋艦を思い浮かべてしまふくらいには、自分に厳しい一面を持っているのだろうと龍驤は考えた。

「なんや、言い返さへんの？」

「言い返すもんかよ……言い返せる、もんかよ……」

奥歯を噛みしめ、木曾は俯く。

サラトガやアイオワは、何も言うべきではないのだろうと目を伏せた。

六駆の面々は、言葉を組み立てられず。

「ただウチも驚いとるんや」

龍驤は表情をぱつと明るくして、木曾に歩み寄つて背をばしんと強く叩いた。

「いッ……てえなあ……！ 何だよ!？」

「妖精が手を貸したつちゆうことは、改二になれるだけの強さがあつたつちゆうことでもあるからや！ それにな、木曾」

龍驤は瞳に悔しそうな色を宿しつつも、木曾に再び喜びと希望、驚愕と困惑を与える言葉を紡いだのだつた。

「先輩のウチより先に改二て！ 凄いやん！」

「いや待てよ!! 改二じゃないのにあの強さなのかお前ツ!?

後始末④

全員が入渠を終え修復が完了した頃、妖精が用意してくれた新たな制服の袖に腕を通す龍驤の横で、木曾はタオルで身体を隠すこともせず工員から制服を受け取りながら言った。

「それで、南方海域開放の後始末ってのは、討ち漏らしは無いつて公言してた癖に散らばってた残党のことだったのかよ」

工員も慣れたもので、木曾達はおろかアイオワ達にさえ目も合わせず、更衣室からそそくさと離れていった。その足取りがいつもより早かったのは、大湊水雷団のみならず他の艦娘もいるからといったところか。

はたまた、彼らの目に、もう【彼女ら】として映っているのかは火を見るよりも明らかだった。

龍驤はにやりと上がる口角をタオルで隠しながら木曾へ言葉を返す。

「言い訳やなく、事実として否定しとくで。南方海域に出現した深海魚どもは全部ウチら柱島の連中が沈めた。アレは完全な別動隊……として動く予定やったかもしれない奴らや」

「完全な別動隊？」

「南方からゾロゾロと大艦隊が突っ込んできたら戦力を集中せざるを得んやろ、そしたら自然と北はがら空きになる。日本海軍の戦力バランスを考えればそうとしか出来んのは深海魚どころか全世界が知つてのことや。例え秘密兵器があつたとしても——」

「そんなのあるのか？」

「例えやがなー!」

すかさずツツコミを入れつつも、こうして素直に話を聞く木曾というのも悪くないと思いつつ龍驤は話を続けた。

「別の手段があるから手薄にしても構わんのやって思たら、どこに注目がいくと思う?」

「……ああ」

察しのついた木曾の吐息のような声。

件の渦中にいたサラトガさえ、着替える手を止めてしまいうくらいの地獄の記憶。

それらが奇跡に奇跡を重ね、その上に運命と必然をトッピングしたってまだ足りないくらいの神業であった事がいまだ信じられないのは、全員が同じだった。

サラトガの表情に思うところがあつてか、アイオワがすつと彼女に近づいて腕をこつんと当てた。

言葉無く、大丈夫かと問われているような気がして、サラトガは寂し気に笑った。

「大丈夫、ありがとうアイオワ」

その眩きに同じような笑みを返したアイオワに、帰ってきたばかりの頃ののような快活さはなかった。それだけ大人としての理性や空気を読む能力があるとも言えようが、彼女のうちにある感情を押し量るような無粋な真似はしないという友人らしきとも言えよう。

戦場とは、かくも難しい。

「すぐさま動きを見せなかったのは、あの深海棲艦が動きを見せなかったから……ってことか」

「そういうこっちゃ。難しい話のようできて、俯瞰してみたら、まあ簡単な話やな。俯瞰すればするだけ、くそほど恐ろしい真似しとるつちゅうのも否定できへんけど」

からからと笑う龍驤の言葉に一切の嘘は無かった。その代わり、真実もない。

ただ、事実だけがある。

難攻不落の魔の海域と化した南方海域——シーレーンの復活を目的とし、支配権を奪還するならば少なからず国家間での協力を必須とし、作戦期間は確実に数年を見積もらねばならないだろうとは柱島の艦娘筆頭、軽巡洋艦大淀の言葉である。

あれらにちよつとした勘違いがあつたとて、龍驤からして今の海原の姿を考え、本当に全てがそうであつたのか疑わしいのもまた言うまでもなく。

すつと飄々としていた龍驤の顔からすつと色が抜け落ちたのを横

目に、木曾は真つすぐに言った。

「機密事項も多いだろうからな。俺あバカだが、それくらいは聞かずにおく分別くらいある」

ふと龍驤が顔を上げた。それから、気遣うでもなく、木曾と同じく真つすぐに言う。

「あ、ああ、ちやうねん。君らは少将の艦娘や、同じレベルで機密を知っておかしいことはあらへん。何ならその二人やって深海棲艦の研究を共有しよう言うてわざわざ大湊まで来たわけやから、今更な話やろ」

それ以外にも、という言葉 最後に龍驤はサラトガに視線をやるだけで、口を開かずにいた。

サラトガは視線を受けて頷く。

「ラインは弁えています」

「ほな安心やな」

途端にニカッと笑った龍驤は、ようやく木曾に続きを話した。

「——司令官は、待ってたんや。相手が息をひそめて狩ったろと思つてほくそ笑んどるその後ろで、全部を知つとつても黙つとつた……」

すう、と場の空気が冷え込んでいく。

「狡猾で世界中の軍隊を数で、策で翻弄してきたような相手でさえあのバケモンにとつちやただの魚と変わらへん」

「ま、待てよ龍驤、それ」

「一歩間違えば国家滅亡？　いいや、人類の破滅やろな。それでも一切の間違いはない。あるわけがない。全部があの人の手の内や。寸分の狂いすらあれへん。置いとる網に勝手に突っ込んできてさばかれに来るアホが哀れにもなるつちゆうもんやで」

そうして木曾どころか第六駆逐隊の面々さえ萎縮した。

「戦争も戦場も語る気は無いで？　ほんでも、海を往くうちらがよおくわかつとる事やろ。視界がひらけたらひらけただけ戦術が増えるし、手数も増やせる。その手札の一枚一枚が強かったら、針孔に糸を通すような作戦だろうが、箱にものを詰めるくらいに簡単になる——ウチが強いんやない。君らが極端に弱いわけでもない」

龍驤はトレードマークであるサンバイザーのような艷装をきゅつと頭にかぶると、どこかの社畜が如き動きを見せた。

指でくいつとつばを押し上げ、ふふん、と笑ったのだ。

まるで自分のことを自慢するように。

「……戦争をまるごと仕事として片づけるような男に目えつけられたんが最後、つちゆう話やな」

* * *

更衣室にてどのような会話が繰り広げられているかなどつゆ知らず。海原はいくらかの護衛を伴って大湊警備府に到着した深海棲艦研究者、ソフィア・クルーズを出迎えていた。

彼女は慣れない国外での長距離移動と、護衛の者たちとの行動に緊張しきりであったのか、疲れた目元を指先で数度擦って大湊警備府の正門をくぐる。

そうして視線を上げた先にいる海原を認めると、ぱあつと表情を明るくした。

『海原元帥……！』

海原はと言えば、妖精むつまるに情けないほど頼み込んで翻訳用の金平糖を出してもらっており、別の意味で疲れ果てた顔をしていた。

正門前でいつ到着するかも分からずバカ正直に待っていたのは言わずもがな。さらに言うならば食堂で歓待の準備を整えてくれと主計科に言いつけてから、そう言えばこれ以外の仕事とかもう全部振ってるわやつべえどうしよう、と手持ち無沙汰になるといふ愚かオブ愚かな醜態を晒してしまったのである。こうなると熊谷少将や木曾、龍驤やむつまるどころか日本海軍に所属する全軍人へ申し訳が立たない。

彼は仕事場にやってきて周囲をかき乱すだけかき乱して、やってやったぜ、という顔をしているだけの哀れな社畜なのだ。切ないが事実であるのだから仕方がない。

『かえったらはじめーするんだよ？ まもる、きいてる？』

軍服の胸ポケットから頭を出してやいやいと言い続けるむつまるに、胸中で何度もため息を吐きながら小声で答える。

「わかっている。お前達の主食であることなど言わずともな。帰ったら間宮と伊良湖に頼んでおくから……」

だから勘弁してもう……と、情けない声をソフィア女史に聞かれずに済んだのは、丁度駆け寄ってきた護衛の一人が最敬礼して大声を張り上げたからだだった。

「フタマルヒトヒト、到着致しましたっ!! 目標移動中に異常はありませんでした!」

作戦が終了してしばらく、宵の口とは言えど護衛の将兵たる男の声は耳に響き、海原は思わず顔をしかめた。

もちろんただ「うるっさ……もつと静かにして……頭痛いから……」というくらいの意であるが、将兵の目には海原の不快で不満げな表情が如何にも恐ろしく映った。

よもや遂行した任務に不備でもあったのだろうかと目を泳がせ、首だけで振り返って他の護衛を見る。すると、他の護衛はぶんぶんと首を横に振った。

ここに来るまでに失敗などあろうはずもない。

ただの護送と言えど彼らは重要人物を護衛するのに十二分の能力を持つているからだ。自覚もあり、油断もない。

しかして海原の不満げな表情は一向に晴れる様子を見せず、たったの数秒であるのに時が止まっているのではと錯覚させる緊張感を生み出した。

「あ、え、えー……と……!?」

「……ああ」

海原は眼前に立った将兵を一瞥し「ご苦労」とだけ言って横を素通りしていく。

「あ、あの、元帥閣下……?」

ほかんと口を半開きにしている将兵は、ソフィア女史の前に立って軍帽を軽く上げて挨拶を交わす海原の口から出た言葉にハツとした。

もちろん海原は妖精の不可思議な力によって得た金平糖の英語力

で話している。

海原自身の言葉はまるで向こうの文化を知り尽くしているかのような流暢さがあつた。

安心してほしいが、海原の力ではなく妖精の力である。

彼の力は艦娘にしか向けられない。というか向けようがない。艦隊これくしょんしか知らない社畜ならぬ国畜なのだから。

『待ちわびておりました、ソフィアさん』

『ま、待たせてしまつてごめんなさい海原元帥……その、できる限り急いで向かつてとはお願いして……』

ソフィアがしどろもどろに答えると、海原は疲れた表情が嘘であつたかのように微笑んでみせた。

『いいえ、待つてたのは私の意思ですので、お気になさらず。本当ならば観光する時間でも設けるべきでしたが……』

え？ と声を上げたのはソフィア女史のみならず、護衛の将兵たちも同じだった。

『仕事の杜撰さ故に事を急いでしまつたのです。ソフィアさんの手を煩わせてしまい申し訳もない』

『私の手を？ そんな、私はあなたの力になれるならとアイオワ達を――』

もうお分かりだろうが、海原は言葉こそ濁しているが、素直に謝罪している。

(ほんつとごめんよソフィアさん……まもるがしつかりしてれば龍驤にも怒られずに済んだし、なんなら熊谷少将の仕事も邪魔せずに済んだつてのによ……。おかげで普段なら問題ないような深海棲艦が出てきて警報まで鳴らしちゃう始末だよ……。しかも謝罪にはまもるの部下が出向いてくれましたとき……。このあと大本営に戻って井之上さんに謝罪する予定なんだぜ？ 笑えるだろ？ ははっ……。笑えねえ……。仕事できない社畜でサーセンマジで……。)

『あなたはお優しい人だ』

それはソフィア女史にしか聞こえないような小声で、すぐさま姿勢を正して海原は続ける。

『戦艦アイオワ、正規空母サラトガともに損傷はありません。それで、移動中にご不便はありませんでしたか？』

ただ言葉を繋ぐために投げかけられた問いに、ソフィア女史は答えられなかった。

ぽーっと頬を染めて、ただ武骨にも見える海原の顔をじつと見つめる。

『ソフィアさん……？』

『えっ？ あー！ いえ、不便はなかったわ！ 本当に、全然、ええ、大丈夫よ、とても快適で——！』

『足止めされたと聞いていたのですが……』

口について出た言葉に、海原はすぐに『ああ、いえ、失礼。お忘れください』と言って視線をすうつと動かした。

海原が背後にいる将兵とは別の、ソフィアのすぐ後ろに控えていた数名を見ると、全員がびくりと肩を震わせる。

大湊警備府から一歩たりとも動いてないであろう海原が何故それを知っているのか、とでも言いたげな目をしていた。

足止めを食らっているなどと誰が報告しようものか。

それでは護送の意を問われかねない。だが間違いなく海原は口に出して言っていた。

足止め云々は海原の事情からして、龍驤が口走ったことで全く無関係の作戦中の話である。

しかし彼らにとっては極秘に護送中に起きたアクシデントさえ知っていると、海原の神眼が如き言葉。

すぐさま一人が一步前に出て説明した。英会話であろうが理解しているあたり、優秀さが窺えるのだが、悲しいかな海原にその有能さはいまいち伝わらず。

「交通機関の麻痺ではありませんでした」

それだけで海軍の軍人ならば意味を理解するだろう。麻痺でないのなら、事故でも工事でもない。別の要因があったと。

さらには日本海軍の、それも特警を無茶に足止めできる存在は限られる。

アイオワ達を先行させた事によりソフィア女史の水質調査は中断され、陸路へと変更となった。それは考えずとも、例え海原が口にもせずとも理解するところだろう。

問題は、その陸路での移動にいち早く気づき対応しうる者が居たという事実である。

海原は重々しく頷いた。もちろん意味はよく分かっている。麻痺じゃないならなんだよ！　くらいに考えている。

しかしたったそれだけで理解したのだと将兵たちは悟り、海原の不満げな顔の理由を理解するに至る。

安心してほしいが、勘違いである。

「麻痺ではないのならば、諸君らは理解しているのか」

海原の純粹な問いかけ。

麻痺じゃないなら、なんで足止め食らってたんだい？

彼らの耳にはこう聞こえていた。

賢明な諸君らならば——まだ軍務の妨げが残っていると理解しているのだな、と。

「つは。現在、国内活動のため井上元帥閣下より群を分割し方面隊を編成する許可をいただきましたので、東西に分けて原因を——」

「待て」

海原の静かな制止。

ソフィア女史の前で答えるべきではなかったか、という将兵たちの心配は杞憂だった。

海原が理解できていないだけである。

（いや足止め食らった原因をそこまで調べる必要ってないから！）

「方面隊だど？　大袈裟過ぎるぞ」

遅れた原因を作り出したものを探すのに仕事のリソースを割くなという海原。

「……問題はありません、閣下」

不敵にニヤリと笑みを浮かべて、既に原因は取り除く寸前であると能力の高さを見せる将兵の一人。

「井之上元帥閣下からそう云うであろうとも言付かっております。な

ので、こちらを」

将兵が取り出したる書類には小難しい文字の羅列があった。

海原はと言えば、中身をちらりと見ただけで愛想笑いを浮かべて誤魔化すことしきり。理由？ 簡単である。分からないのだ。

しかし愛想笑いは彼らの目にどう映るだろうか？

——最低限の仕事は出来るようだな。ならば結構。

こう、映ってしまう。

「優秀なようで何より。これは私が確認してよかったのだな？」

ようやく晴れた表情に将兵たちは心底安堵しつつも、やはりかの御仁は軍人として常に生きているのだと実感に至る。

ソフィア女史に見せた流麗な英語や気遣いの全てもまた、ソフィア女史を安心させるためのものであったのだと気づいた時には、改めて身が引き締まった。

細心の注意を払い、最大の緊張を保ち、その上で守るべき者を気遣う余裕を見せるなんて、どこまでも素晴らしい人だ——。

全然そんな事はないのだが。

(何だこの新聞社の一部に繋がりがどうこうってよ……知らんよこんなの……後で忠野に投げちゃおう。ついでに困らないように事情だけ聞いておこう……)

人に投げるまでの判断は海軍随一である。不名誉だが。

海原は気を取り直して、とばかりに軍帽を被りなおしソフィア女史を誘うように警備府中枢までの道を示した。

『ささやかながらディナーを用意しております。お口に合えば良いのですが』

『しょ、食事を？ あ、ありが、とう……でも、あの、その前に！』

これが仕事着だとばかりに白衣に身を包んでいたソフィア女史がポケットに手を入れて、そおつと取り出されるそれ。

その瞬間、みるみるうちに海原の顔から色が失われていく。

『アドミラルは、その、この子を、知って、るわよ、ね……？』

恐る恐ると投げられかけた言葉に、海原は今にも卒倒してしまいうだった。

何とか地面に両足をつけている意識の糸がぶつとりと切れた時、どうなるか。

社畜が仕事に追われキャパシティを超過してしまうと、どうなることか。

人は——につこりと、全てを諦めて笑うのである。

海原の自愛と諦め——慈愛ではない、自愛である——のせめぎ合った末に表出した笑顔は、この世界の全てを許そうというほどに朗らかなものであった。

ソフィア女史はその表情に目を奪われ、将兵たちから緊張という緊張が解け、抜け落ちていく。

(なんで……なんでソフィアさんも妖精を……？ 待てよ、これ、まさか井之上さんの差し向けた刺客の一人じゃ……ああ……)

失礼極まりないことを考えるのもほんの瞬きの間だけ。

ソフィア女史の柔らかな手のひらに包まれているのは金髪の妖精で、それは奇しくも海原のよく知るF4F-3という正規空母サラトガに標準装備されている兵装に乗っている妖精であった。

瞬時にそれを見抜いた海原の艦娘愛もさることながら、どうしたって妖精というものは——

『……おなかへった。ごはんは？』

——自由なものである。

手のひらの上で目元を擦りながら寝起きですといった様相を見た海原は、静かにソフィア女史に問うた。

『彼女の言葉が、聞こえますか？』

するとソフィア女史は困ったように首を横に振るも、海原から続く言葉に、意味深に、それでいて真剣に重々しく頷いた。

『……あなたは幸運だ、ソフィアさん』

『それ、って、アドミラル、彼女たち妖精はやつぱり——！』

海原は意図的に言葉を遮るように背を向けた。

『それでいいのです、聞いても意味はない』

(こいつつらほんとよお……第一声が腹減ったって、しかも俺を見ながら言うってもう、用意しろってことじゃんかよお……！ 喜ん

でエッ！（ヤケクソ）

『……』

ソフィア女史はここに来るまでの、それこそ新宿の大本営地下で起こった出来事を思い返ししながら、ただ、瞳を焼くような熱い何かを抑え込むのに精一杯になってしまう。

この戦争の本質を、彼は知っているのだと。

もしも彼女らの声が聞こえるのならば、きっと私は耐えられない。

海原という男が突き進む原動力なのか、はたまた、その声を振り切るために進み続けているのか分からず。

どちらにせよ、圧倒的な智謀をも呑み込むどうしようもない感情の波に、彼は今も溺れないようもがいているのだと気づき、ソフィア女史は自らを恥じた。

そしてその恥をかなぐり捨ててでも、妖精を見る者として、艦娘とともにある者として見過ごしてはならぬものだとして勝手に足が動き出す。

背を向けて歩いていく海原に追いつがったソフィア女史は何も言わないまま、ばしんとぶつかる勢いで背中から抱きしめた。

驚いて声もあげられず数秒ほど固まった海原だが、転んでしまったのかとソフィア女史の手をそつと退けて振り返る。

『大丈夫ですか。足元にお気をつけて』

海原は単純に「何やってんだ頼むぞソフィアさん」などと色気もへったくれもない事を考えていたが、ソフィア女史の耳に届くのは言葉だけ。

『わ、わた、私は、助けられて、お礼ばかりで、その、日本に来て色々、起こりすぎて……でも……でも……！』

ぐるぐるとソフィア女史の脳裏を巡るあの光景に、彼が重なる。

ただ血にまみれても、地獄への道であつても進み続ける男の姿が。

何度でも言うが、そんな事はない。

海原は不安そうなソフィア女史の姿が単純に「見知らぬ土地に来て仕事して、しかもそれが恐ろしい深海棲艦が相手の研究なんだから不安だよなあ……仕事は出来ないが艦娘と一緒に生きる提督として協

力くらいはしてやるぜ！ 忠野とか橘とか便利だから後で紹介してやっからな！ アイツラに仕事丸投げしても構わんぞー！」と、遠い世にいる提督諸兄から囲まれてタコ殴りにしてもらうべき情けない発想をする始末。

しかしながら、自分が手一杯でも艦娘のためになるならと立ち向かう愚かな姿はどうしてか儂く、ソフィア女史の目に水滴をさらに生む。

『私に協力できることがあれば、遠慮なく言ってください。まずは食事をしましょう』

誤魔化しているかのような言葉。無論、海原は食事を済ませてとつと帰りたいだけ。

ソフィア女史はぐし、と袖で目元を拭ったあとに、妖精を壊れないようにポケットへ優しく戻して、何度も『大丈夫よ、大丈夫だから』と呟く。

そうして、彼女の胸に、火が灯る。

まるで艦娘が共鳴を起こしたかのような、それと酷似した強烈な感情だった。

ソフィア女史の瞳に爛々とした光が揺れた。

『……食事ね、ありがとう。いただくわ』

彼を決して一人にしてはいけない、と。

喚起【鎮side】

大湊警備府の中樞施設に足を踏み入れながら、俺は背に流れる嫌な汗に表情を歪めてしまわないよう極めて冷静に努めた。

後ろでじつと俺の後頭部に穴をあけるつもりであろうと分かるほどに睨みつけるソフィアさんは、南方海域で艦娘に救助してもらったお礼を代わりに俺へ伝えていたと思えば、今度は不機嫌そうに睨めつける始末である。

恐らくはとうの昔に限界を超過している俺の脳内がごちやごちやの雑炊みたくなっているが故に不用意な発言をしたのだろうが、それにしたって睨みすぎではなからうか。

美人ならなんでも許されると思ったら大間違いだぞソフィアさんよオツ！

俺が許すのは艦娘と妖精だけ！ その他の奴らなんざ知ったことか！

願わくば俺の必殺技、海原式ギガンティック土下座が大湊の地を赤く染めない事を――

『海原さん』

『……なんででしょう？』

食事が用意されている食堂までの道中、背後で足音がぱったりと止んだ。

数歩進んだ先で振り返った俺はあまりの殺気に気絶しそうになった。

『あなたは仕事だから、簡潔な質問の方がいいでしょう？』

口腔内を満たしていた金平糖の甘さとは別に、嫌な酸っぱさが顔をのぞかせる。

ソフィアさんの大きな瞳が見開かれ、ビームでも出て俺の体を焼き尽くすのではないかというくらいの威圧を醸し出す。マジでやべえ、これ絶対に怒ってる。

しかし俺として自分が邪魔して起こった現状の收拾を必死に図っている最中で、その最後の仕事たる木曾や龍驤、アイオワ達への労いと

謝罪が残っているのである。

こんなところでへこたれるわけにはいかないと、ソフィアさんが連れていた妖精を見て思わず浮かんだ諦めの笑みを浮かべないよう、鉄壁の無表情を保ち続ける。

ソフィアさんも移動でお疲れでしょう。ええ、まもるだつて馬鹿じゃありません、分かっております。ですからどんな質問にだつてきちんと答えましょう。

これ以上にソフィアさんの手を煩わせては井之上さんに頭を撃ち抜かれかねません。

『質問ですか。私に答えられることであれば、偽りなく答えましょう』妖精印の翻訳金平糖のお陰で冗長な口ぶりになってしまふのを疎ましく感じつつも、震えを隠すように後ろ手を組んで浅く顔を伏せた。

いや別にソフィアさんが怖いとかじゃねえから。違うから。

『……足止め、とは何でしょうか』

それは井之上さんに事情を説明することであつてソフィアさんに詰められるまでもねエよツ!! ちきしょう!!

口について出た「足止め食らつてたんじゃねえの?」という言葉は既に現実であり、引つ込みはつかない。

しかしどう説明したのか。真面目な話をすれば、哨戒中にあつた龍驤の言葉だったとは言え軍務の一つ。例え井之上元帥が協力を仰いだ人物であれ素人社畜の俺がおいそれと「実はあ……哨戒中にトラブっちゃつてえ……まもるの失敗をりゅーちゃんがフォローしてくれた時の話なんですけどお……すみませえん、頭がごちやごちやになつてましたあ!」などと白状……—あ、いや、説明、説明ね。説明をすべきではないと、そう思うわけである。

『あなたが言っていたのよ? 私達が足止めされているのを何故知っているのか、それを教えて欲しいの』

ああ、それ、そう、そうね。足止めされてたんだね。

俺が事態を收拾すべく深海棲艦が出たならアメリ艦娘も呼んでその場を切り抜けちまへつて言つちやつた件だよね。はいはい……。

『……』

どうやって説明しろってんだよツツ!!

君らが足止め食らってたとか知らんよ!!

正門でいくらかの言葉を交わした時、護衛についていた男ども——井之上さんの差金、もとい部下の方々——がああだこうだと言ったのは分かっている。

どうせどっかで渋滞にハマったんだろ!? それはまもるの責任じゃないじゃないですかあ! 該当の市町村にお問い合わせくださいあ!!

新聞社がどうこうという文言も覚えております、それについてはまもるだってわかります。そのお気持ち、痛いほど。

海軍元帥となつてしまった俺とは種別が違えど、今や世界の脅威たる深海棲艦の研究者であるソフィアさんの存在を嗅ぎつけてインタビューしようとカバディされたんでしょう!?

いやまあ、車で移動してたんだらうから、それはそれで危ないことすんなって話であつて、それについてどうなつてんだという質問の可能性もありますけども……。

と、ここまで考えるのにたったの一秒にも満たなかつただらう。

俺はかさかさに乾いた唇を動かした。

『……足止めくらいされるでしょう。我々はそういった存在であり、軍務とは、そういう一面もあります』

無難に答えたところで、これはきつとソフィアさんの望む言葉ではないだらう。

でも、もうマジで勘弁して……キソーと皆の仲が悪いって言うから来ただけなの……仲裁しようと思つてたら思わぬところで仕事を邪魔してしまつたが、結果的にふんわりと熊谷少将とキソー達は仲直りしたの……あとはかき乱したまもるが自分の尻拭いをしなきゃいけないのよ……。

マジで何しに来たんだ俺……?!

い、いかんいかん! 自分を見失うなまもる!!

大湊に来て起こつた一連の騒動の原因は木曾と熊谷少将、大湊警備

府の不仲であるのは言わずもがなだが、それらは極度のコミュニケーション不足によるすれ違いや勘違いだった。俯瞰できる俺という存在が「君ら話し合えば？」で解決する学級委員かな？ という簡単な仕事であったのだが、海軍という性質上、または艦娘という性質上、様々な要因とともに複雑化した結果でもあったためにちよつとしたトラブルがあっただけである。

まあ、そのトラブルこそが、まもるが起こしちゃった事なんですけどお……。

『あなたはここで戦っていたはずでしょう』

『それは違います』

反射的に否定した。戦っているのは俺ではなく艦娘である。

木曾や龍驤、ソフィアさん達が寄越してくれたアイオワ達が深海棲艦を退けただけで、突発的な事態に対応を急いだ俺が多大な戦力によつて相手を押しつぶすという、それはもう杜撰極まる……ああ、だめだ涙出そう。

自分でも目も当てられぬ不甲斐なさに、更に顔を伏せてしまう。

『作戦については言及を控えていただきたい』

俺の暗く低い声に、ソフィアさんが一歩下がり、息を呑む音が聞こえた。

ごめんて……お前なに堂々と逃げてるんだって思ってたんだろ……でも俺にだって立場があるんだ……俺だけが糾弾されるならば素直に頭を下げて、素直に認めよう。

しかし艦娘や形だけとは言え部下でもある熊谷少将の手前、簡単には下げてはならぬ頭でもあるのだ。それが彼らのためになるわけでもなく、非難の的になるのであれば尚更に。

『っ……違うの、海原さん、私……私……私……！』

明らかに濡れている声に視線だけを上げると、ソフィアさんは泣いていた。

え、ええっ!? ナンデ!? 涙ナンデ!?

『ソフィアさん……も、申し訳ない……私が不甲斐ないばかりに……な、泣かないでください、お願いです』

そろりと近寄って、手袋を脱ぎ、必死にポケットをひっくり返しハンカチを探す。

だが残念なことにイケメン紳士ではないので持っていない。

ころんと出てきた金平糖がリノリウムの床に落ち、ついでにむつまるも落ちた。

むつまるは何事かという、きよんとした顔で俺を見上げていたが、ソフィアさんを見て、俺を見て、再びソフィアさんを見て——びつと俺を指差す。

『まもるが泣かせたああああー!!』

おおい!! やめろお前バカ!! ちっげ、いや、そうかもしれない……い、いやいやいや! 違うよ! 俺じゃねえ!!

むつまるの声に、どこに潜んでいたのか、数多の妖精が誘蛾灯に群がる虫が如き勢いで集まってきた。

虫は失礼か……。

むつまるを筆頭に、ひつくひつくとしやくりを上げるソフィアさんの頭を撫でたり、並んで肩に座り慰めはじめる。

『酷いよねえまもるって。いっつも一人ひとつだって金平糖ケチるんだよ?』

『りゅーじょーさんにも迷惑かけっぱなしなんだよ』

『ぬいぐるみつくっただけで怒るんだよ。酷いよねえ!』

『てーとくも八つ当たりされたんでしょ! いいよ、わたしたちがこらしめてあげる! いっしょにぬいぐるみ作らせろってストライキだ!』

やめろやめろ!! 話が全部違うしややこしいんだよお前はよツ!!

わあわあと言いつける妖精をはねのけるわけにもいかず、涙で顔を濡らすソフィアさんへ手を伸ばそうとしながら、セクハラって言われたら否定出来ないから触れない方が……と、虚空をさまよう俺の両腕。

それから数秒とせず、不誠実になるくらいならセクハラだとぶつ叩かれた方がマシだと手を伸ばし、ソフィアさんの顔に触れた。

涙を指で拭い、何度も謝罪する。

『申し訳ありません、本当に、申し訳ない。不甲斐ないばかりに、私は人を泣かせてばかりだ……』

むつまるが『浮気だああああ!?』と大絶叫した瞬間、流石にむつまるだけつまみ上げて胸ポケットへ押し込んだ。

『あ!? なにするのまもる! やめ——むぎゆうっ』

黙ってる金平糖オバケ! 柱島に帰ったら伊良湖に土下座してでもお菓子いっぱい作ってもらってやつから今だけは黙ってる!!

と、むつまるを胸ポケットに突っ込んだ勢いで何かが指先に当たったのを感じ、無意識につまみ上げた。

取り出されたのは、一つのUSBメモリーだった。

なんじゃこれ。

『あ、ごめんまもる、それソフィアさんに渡しておいて。ほーしよーさんとがんばって撮ったやつ!』

だからてめえはどうしてこうも重要な仕事をほいほいと俺に投げるんだよ!?

渡したらどうなるのこれ!! 渡していいのか!?

鳳翔と撮ったって戦闘記録じゃねえかよ。深海棲艦の研究には役立つだろうが、それをどうして俺の胸ポケットに突っ込んでおくんだよ。

『いのーえさんとこの妖精さんをお願いされたんだもおん!』

……なるほどな、とうとう井之上さんどころか井之上さんの妖精さえ俺に仕事を投げつけるんだな。

ふふ、オツケーオツケー。ノープロブレム。後でぜってえにデコピシ食らわす。

『……国畜となれば、こうなることも予想出来たというのに』

思わず漏れる俺の本音。

人はこれを板挟みと言います。今回は俺は悪くありません本当です。

何度拭えど溢れ出る涙に四苦八苦しつつ呟いた俺の声に、ソフィアさんが濡れた瞳のままに顔をあげた。

驚くほどの美人であろうがパンクした俺は感想すら思い浮かばなかった。

『あ、あな、あなたは、声が、聞こえるのでしよう……?』

泣き止ませねばならない上に、質問に答えると言った手前、俺に拒否の意思はなく、はい、と肯定する。

『彼女たちは、なんて、なんて言ってるの……? 私に出来ることはないかもしれない、もしかしたら、邪魔かも、しれない、それでも、わたしは、見て、しまったから……!』

見てしまった……? 妖精の傍若無人っぷりをか?

可哀想に……。

『見てしまったのですね、彼女らの本当の姿を……』

『ん……うん、うんっ……!』

マジでお前ら節操ねえのか、と流石に妖精にジトツとした目を向ける。

『あたらしいてーとくにはやさしくします』

未だソフィアさんの肩に並ぶ妖精たちは口を揃えて言う。

ちよつと待て、新しい提督、というのは……?

『妖精が見え、艦娘と、ともにある……』

合点のいった俺は、新規プレイヤーならぬ妖精に選ばれし新提督となったソフィアさんを見る目が険しいものになってしまう。

こ、この人を過酷極まる職場に招き入れるのか……!?

待て待て! まだ引き返せるぞ!?

この人は深海棲艦の研究という要職も要職を担っているんだ、それ以上に艦娘を指揮させるなんて荷が重いななんて話じゃねえ!

『ソフィアさん……今なら、引き返せる』

真剣に、少し早口で言った俺にソフィアさんは戸惑いを見せた。

『この仕事は本当につらく、厳しく、難しいのです。ですから今ならば、私がなんとしても口添え致しましょう』

井之上さんも無茶はさせんぞ! なあ!?

と視線だけで妖精を見回せば、彼女らは彼女らでどこ吹く風といった様相。

日本語ならば伝わらんだろうと、俺は声を荒らげないよう注意しながら声に出した。

「分かっているのかお前達。遊びじゃないんだぞ」

『真面目にやってるよ』

即答され、一瞬だけ言葉に詰まるも、さらに声を絞り出す。

「……本気か」

すると、胸ポケットから再び顔を出したむつまるが言った。

『まもる』

『日本以外に、提督はいないんだ』

「な、に……?」

急に全身が薄い膜にでも包まれたような感覚に陥り、声が遠く聞こえた。

それでもむつまるや、他の妖精の声だけははつきりと届いた。

拙さも、舌つ足らずさも感じられない声は、間違いなく妖精のものだった——同時に、艦娘の声にも聞こえた。

ソフィアさんが何かを言っている、それだけが浮いて聞こえず。

『あなたのお陰で日本はもう大丈夫。どんな事があっても私達と一緒に乗り越えていける。今日、それがはつきりと分かった』

陸奥の声。

『我々が手を取り合わねば、どうして脅威を退けられる？ 今の提督ならば分かるはずだ。嬉しかっただろう、喜んでいただろう。海外艦娘だなんだとすぐさまロックを掛けてスクリーンショットまで撮っていたではないか』

不機嫌そうで、しかし面白がっているような那智の声。

『遺恨など知らん。私はビッグセブンで、あなたの艦娘で、それだけで

いい。難しいことは興味もない。だがな提督、戦わねばならん。守らねばならんと言っていたあなたの言葉は、私も頷くばかりだ。だから、守りたいのだ」

力強い長門の声がして、最後に、俺の軍服の襟首から控えめながらもはつきりとした大淀の声がした。

『——かつての遺恨など、わかりません。今の私達は妖精ですから。きつと艦娘であっても、同じです。だから……終わらせるんです。止まった時間を、再び動かすために』

ぐらぐらと揺れる頭を殴られた感覚がして、ソフィアさんが泣きながらもまつすぐに俺を見つめ続けているのにやっこのことで気づき、俺は息を吸い込んだ。

「ソフィアさんの意思を、お聞かせください」

思わず日本語で言ったのだが、驚いた表情をしたソフィアさんが口を開く。

「……あ、れ……どうして、海原さんの言葉が、わかっ——!? わ、私、には、日本語を……!?!」

おうお前喋れたんじゃねえか金平糖と渾身の土下座と懇願を返せよ。

いやそうじゃねえ!!

「妖精の言葉が分からないと仰られましたね。しかしあなたは妖精が見え、艦娘とともにある。あなたは、どうしたいのですか」

正直なところ、無茶苦茶な現状を招いた仕事をとつと終わらせた気持ちがいかにどころじゃなくらい顔を、いやほぼ全身を出しているところ。

「海外に妖精の見える提督はいないのでしよう」

すると、ソフィアさんは頷く。

「しかしあなたは、提督になれる」

「私、が……？」

「そう、妖精が言っています」

問題が解決していないのに新たな問題を持ち込んだできたことはこの際置いておく。置いておいてやる。まもるは優しいので。

社畜の鉄則は、目の前の仕事を片付けることである。

なら新たに発生してしまったとんでもない仕事を片付けねばならず、木曾達にはもう土下座を披露するつもりでいる。杜撰って言った奴らは後で柱島の武道場に放り込んで空母の方々に可愛がってもらうからそのつもりで。

ソフィアさんは逡巡していた。

「……そうすれば、あなたを、助けられる？ この子たちを、助けられる……？」

不思議な質問に、俺は眉根にシワを寄せた。

『たすけられるたすけられる』

『こんぺーとーくれたらおーるおっけーです』

『ぬいぐるみをつくらせてくれたらベリーぐるーです』

『まもるはほつといてほしいじょうぶです』

……そうだね。俺はね、あんまり関係無いからね。

この子、とは妖精を指しているのだろうと察し、妖精を睨み……

『なに？』

『もんくあんの？』

『おおよどさんにいいつけるよ？』

……妖精さんを、見つめたあと。

「妖精を助けたいですね」

「……っ」

意を決したように頷くソフィアさんに、新たな女神の誕生を感じつつ。

「お優しい人ですね。答えとしては……きつと助けになるでしょう。妖精も、それを望んでいる」

と伝えてあげる。しかしソフィアさんは頬に添えられたままの俺の手に自らの手を重ねて言う。

「あなたは……？ あなたは、助け——」

いやもう俺のことはいいって……妖精と艦娘で手一杯だから!!

「——おやめください」

これ以上触つてたら本当に怒られちゃうかもしれないと手を離し、一歩下がる。

「私のことは、気にしないでいい」

おらあ！ 威厳スイッチで有無を言わせぬ最低最悪の技だあ！

声を低く、軍帽のつばに指をかけて目元を隠す俺。

別にソフィアさんと妖精の圧力に屈したわけではないです。

でもお手伝いは大丈夫です。やっとこさ出来たルーティーンが乱れかねないので。

「……なる」

「はい？」

小さな声に聞き返すと、ソフィアさんは白衣を翻しながら仁王立ちして、震える両手をぐっと握りしめて叫んだ。

「世界を救うなんて出来ない！ 分からない！ それでも、私は大切な人を守りたい!! だから、だから……——私は提督になるツ!!」
ついてきていた護衛の将兵たちは口を挟めず、というか恐れおののいて俺の後ろに隠れていた。ふぎけやがってテメエらが前にでろオツ！ お願いしますつてエツ！ こわあい！

もう将兵は恐怖に屈したように直立不動で俺の背後に立って俺の真似をして顔を伏せていた。お陰で俺は顔を伏せることもできず。

ソフィアさんの絶叫を聞きつけたのか、程遠くない場所にあった食堂の扉が勢いよく開いて多くの者が何事だとやってきた。どうしたんですか？ だの、問題ですか？ だのと言っているが。一番まもるが聞きたいよそんなの。

妖精は満足げにソフィアさんから飛び立って彼女の周りをくると優雅に回った。

最後に駆けつけた熊谷少将は、現場の様相にあっけにとられていたが——流石歴戦の猛者といったところか、俺に事情を問うた。

「……元帥閣下、こちらは」

いや知らんよもう。まもるが聞きたいんだってば。

「妖精が提督として選定した。以上だ」

端的に伝えると、熊谷少将はぐっと顔を険しく歪めたあと、ふむ、と言つてソフィアさんを見つめた。

彼女はと言えば多くの軍人に見つめられた緊張と恐怖からか、せつかく止まった涙が再び溢れ出していた。だが、決して顔を伏せたりなどしなかった。

「では閣下、大湊警備府に駐在するソフィア女史は——」

あーもう知らない！ だめ！ 艦娘以外のことですからまもるの専門外です！ はい終わり終わり！ 撤収！ 閉廷！

「ここでの私の仕事は終わりだ。艦娘は食堂か」

「っは」

「そうか」

こうなるともう誰もが分かっている事が起こる。

「——熊谷少将。処遇は任せるぞ」

むつまる、もとい井之上さんのところに居たらしい妖精に託されたUSBを熊谷少将に手渡し、これをソフィアさんへ、と短く言いつける。

「……っは」

そうだね。他人に仕事を割り振る、だね。

食堂には龍驤がいるはずだ！ 早く、いち早く逃げねば……！

じゃあ、その、妖精には屈しないでくださいねソフィアさん。

艦娘がいれば大抵のことは何とかありますけど、書類仕事はゲロほどあるんで、死なないでくださいね。睡眠は大切ですからね。

伝えたいことが多すぎて、しかして伝えても妖精の前には無力……

許せ……！

とうとう逃げ出そうとする俺の背に投げかけられるソフィアさんの大声に、俺は足を止めることは無かった。

もう何を言っているのかさえ聞きたくなかった。怖くて。

「私は——あなたも——必ず助けるからッッ!!」

喚起【ソフィア side】

今思えば、私が私たる理由が出来たのは、あの頃だったと思うわ。アメリカで身柄が宙吊りにならずに済んだのが彼のお陰だと知って、南方海域の孤島で救助されてから数えて一年と少し、私は自らの研究成果が無駄にならないようにと必死になって政府に掛け合っただの。

アメリカ海軍における艦娘運用は、ある人の言葉を借りるなら杜撰と言う他無かったから。けれどアメリカ海軍の運用の全てが間違っていたとも言えないのも事実よ。

昔との決定的な違いは言うまでもないわね。彼女たちは生きているの。好き勝手に作って好き勝手に壊すなんて、決してあっていいわけがないわ。でも、だからと言って間違っているわけでもない……悲しいけれどね。

考えてもみて？ だって、日本の国土は三十七万八千平方キロメートル、対するアメリカ合衆国は九百八十三万四千平方キロメートル。誤差なんて話じゃないわ。

防衛範囲、費用、それに必要な兵力は百倍掛かるなんて試算が出る程なんだもの。子どもだってカートウーンの話じゃないかって勘違いしちゃうわ、こんなもの。

来日してすぐ、日本海軍の井之上元帥との会談を経て大湊警備府へ駐在する事が決定して、そちらへ向かう途中から私は戦場の前線へと足を踏み入れる覚悟を決めていたの。アメリカで見た光景を、ここでも見るんだって。

それは、間違いだった。

ふふ、間違つてないって？ そう言ってくれるのはインタビュアーだからかしら。

でも間違つていたのよ。

日本における前線の定義は、確かに沿岸部周囲数キロだけれど、当時の私も、今のあなたも大切なことを見逃しているわ。

あそこは、小さな小さな島国よ。それもぽっかりと浮かんで、海流

によってどこから敵が流れてくるか分からない恐ろしい場所。

あら、やつと分かったの？

そうね、そう、あなたの言う通り——深海棲艦の猛攻を押し返し、涼し気な顔で社会を形成し続けているあの国自体が戦場なのよ。

私の言う目の前で繰り広げられる、つていうのはどこか遠くから音が聞こえてきて、しばらくしてテレビをつけたら音の正体が分かる、そんな世界での話。

日本で繰り広げられているのは、本当に、目と鼻の先の話。

だってそうじゃない。支配権の多くを失って、シーレーンだつてまともに数えれば片手で足りちゃうような時代なのよ？ その半分以上を担う南方を開放した軍隊がいて、まだ諦めきれないような深海棲艦が毎日攻め込んでくる……。

休まることを知らず、戦い続けている。そんな中で作戦を無尽蔵に生み出す指揮官が顔を突き合わせて命を削りながらも平気そうな表情をして言うのよ。

人が笑うために我々がいるってね。

日本では、恥も外聞もないっていうんですって、こういうの。

なら今、日本の大湊警備府にいて深海棲艦の研究を続けながら、熊谷という軍人のもとで戦う私だって、いくら素人と指を差されても気にしている場合じゃないでしょう？

私にだって戦う理由があるもの。日本海軍やアメリカ海軍とは違う理由がね。

でも、その理由になった人は私を見て言ったの。

引き返せるって。戦場に身を浸すなって言いたかつたんでしょうね……ああ、いえ、きつと性別だとか、戦歴だとかいう意味じゃなかったと思うわ。

そんな事を気にする人じゃないし、それ以上に、どんな人材だつてフルパワーで活躍できる場を用意できる人だもの。

なら私が活躍できる場だつて用意できるはずでしょう。けれど、まるでそのために私を助けたんじゃないって言いたそうな顔で、引き返せって一度だけ言ってくれたのよ。

その瞬間、私は一瞬だけ敬虔な信者に戻ったわ。ふふ、ごめんさ
い、もちろん今でも神様を信じているわ。でなければ、あの孤島で鉄
くずに埋もれて死んでいたに違いないもの。

神は二度、私に手を差し伸べた。

一度目は絶海の孤島で。

二度目は大湊警備府で。

全てを忘れてシアトルに戻り、一般市民と同じようにニュースを見
ながら不安を感じ……それでも少しすれば何事もなかったかのよう
に生活を営む……そんなラストチャンスだった。きつとまたコー
ヒーショップで豆を挽きながら常連客とくだらない話で盛り上がっ
てたかもしれないわ。

それをも拒否した時、神様は私に手を差し伸べるのをやめたの。

代わりにずっと見守ってくれているのでしょね、今、この瞬間も。

だから神に誓って嘘は言わないわ。私は父を信じている。

私を助け出した人達を信じている。

でも戦場で手を合わせて祈っている暇はない。ならどうするか、簡
単よね。

私はマガジンに弾丸をいっぱい詰め込んで、ケーキナイフをアー
ミーナイフに持ち替えた。

これは戦争よ。間違いなく、多くの悲しみが渦巻いている。

今の私にこれ以上のことは言えないけれど……インタビューの
あなたや、この紙面を見た誰かにお願いがあるの。

戦争の意味を変えるのは、私や、私の仲間や、私を救ってくれた人
達だけじゃない。

そのあなたこそが、未来で戦争の意味を変えるの。

その代わりに仕事は私がこなしておくわ。だから、お願いね。

* * *

井之上元帥との会談を終えてから、私は海域の水質調査のために横須賀鎮守府を通りゆったりとした速度で北上を続けた。

深海棲艦が出現しやすい海域、もしくは、深海棲艦が出現したあとの海水には未知の成分が混じっているからだ。それらがどの海域で、あるいはどの地点で実測されるかによって行動予測が可能となる。

本来ならば共有せず独占していた、あつけないほどに簡単な研究の一つだ。

アメリカ政府の許可もあり、井之上元帥から直々に頼まれたことに私は使命感を背負い全力であたった。

深海棲艦にとっては相手にもならないであろう、人が作り出した軍艦に乗り込んだ私は、しばし進んでは停泊して周囲をアイオワやサラトガに哨戒してもらいつつ、海水をいくらか回収してはラベリングしていくという作業。

驚くべきことに、軽い検査だけでも全ての海域で未知の成分が発見された。それが発覚した時には本当にめまいがして椅子からしばらく立ち上がれず、船酔いとは違う恐怖からくる気持ち悪さに何度もえずいたものだ。

未知の成分——恐らくは深海棲艦由来のものであると推察されるそれは、成分で言わば第三石油類にあたるものだった。

流石に船内で火を扱うわけにはいかなかったので必ずやそうである、とは研究者である身の私は言えないものの、それでもしかし、確かにアメリカで研究していた時に採取したものと同じ水質だった。

特徴としては引火点が六十度から百五十度とある程度広く、濃度によつてはちよつとした火花であつという間に燃焼するものだ。

あえて未知の成分、と言っているわけでもない。

深海棲艦由来であろう成分は第三に分類される石油類でありなが

らも水溶性で、特徴として近いものを挙げれば不凍液として用いられるエチレングリコールに酷似している。

しかし一方で、引火点が百度を超える高さを持つエチレングリコールとは違って無臭ではなく、鼻をつくような二酸化硫黄——亜硫酸ガスに似た臭いがする。

水溶した状態であれば海水の匂いの方が強いと感じることは難しいが、濃度を高めれば顕著に違いが出る。

さらには有毒とされるガスと同じ臭気でありながら人体に対してなんら影響を及ぼさないのである。確かに嫌な臭いだと言われればそれだけだが、呼吸器系にも神経系にも作用せず、本当にただ不快で不安を煽るだけのものだ。

精神的に影響あり、と無理に言うこともできるかもしれないが……それはさておき。

日本の周囲海域、少なくとも私が移動した沿岸部の殆どで検出された成分から導き出される答えは、どうしようもなく日本もまた戦場であることを示すだけであり、諸外国と同じく十年という歳月を経てもなお終わらぬ戦争の先は、いまだ闇しかないという結論しか出ないのであった。

私がいくつもの試験管を眺めながらノートパソコンのキーを叩いている最中だったろうか。井之上元帥が護衛にと選出した多くの軍人の中の一人である大柄の男が船室に駆け込んできて、私に言った。

日本語訛りは抜けていなかったが、聞き取りやすい言葉だった。

『ソフィア女史、よろしいでしょうか』

『なに?』

名も知らぬ彼はスラスラと言う。

『海原元帥より戦力増派の要請が来ております。戦艦アイオワ、正規空母サラトガの出撃要請を——』

私は彼が言い切る前に立ち上がって怒鳴った。

『か、彼が!? 大丈夫なの!?!』

護衛の男が慌てた様子ですでに切れているらしい無線機を肩に引っかけて困ったようなぎこちない笑みを浮かべる。

『彼、とは海原元帥のことでしようが、心配するまでもないかと。戦力増派に許可がいただければ井之上元帥より——』

「またも護衛が言い切る前に私は何度も頷いて『早く向かわせて!』と金切声で叫ぶ。」

それから船室を飛び出して海上を優雅に進む二人に声を上げた。

事情を知った二人が航路を逸れてからは、艦娘がいないのであれば陸路へ変更すべきだと言われ、多くの軍服の影に囲まれて仙台から車両へ乗り換えることとなった。

件の問題が起きたのは——このあとすぐの事だった。

* * *

「軍務中である! 下がれ! 下がらんか!」

陸路を往くと車両に乗り込んでから一時間と経たないうちに、裏道とまでは言わずも一般道からすこし外れた道であるのに、私達の乗った車が止められた。

一車線半ほどの小道で、すれ違いも難しくはない場所で、だ。

「こちらには報道の自由が——!」

「現在、一部で注意報が——!」

唐突に現れた記者らしき人影を、一見して普通自動車にしか見えないう特殊車両——これは後に護衛から聞いた話だけれど——の後部座席から見ていると、助手席から降りた一人の将兵が記者を散らさんと冷たく腕を振るう。もちろん、暴力を振るうという意味ではなく、動的に。

「軍務を邪魔するつもりはありませんが、こちらにも報道すべき義務があります! 国民が不安に思うところを明確に説明し安心させることも軍務ではありませんか!」

「だあかあら!! それは広報に言え! 諸君らの行為は軍務妨害と言わざるを得ないぞ! なあ!」

「一言でも二言でもお答えいただければいいんですよ? それがどう

して軍務の妨害に繋がるんですか!」

喧々囂々と言いつつ将兵とカメラを構えた人。記者らしき人物は数名だったが、日本語で言い合う間にもどこからともなく現れて数を増やしていった。

たったそれだけでも気持ちが悪く感覚に陥るも、後部座席から動けずにいる私。行動としては動かないことが正解だったろうが、自分の立場を思えば顔を出して「早く行かせてほしい」と頼むべきだったと後で考えたのは言うまでもない。

なにせ自分は海外から派遣された研究者であり、私の一言が軍事外交とは別種の力を持っているからだ。

わかりやすい白衣の外国人、それだけでもカメラを構えた幾人かが相当に愚かでない限りは理解できよう。

今ここで足止めされている場合ではない。

私を救ってくれた人物が戦力増派の連絡をよこしてすぐなのだから、車から転がり降りて走ってでも向かいたい気持ちでいっぱいなのだ。出来ることはなくとも、せめて、救ってくれた人の傍で役に立てる何かを探したいと思うことは、決しておかしくも愚かでもないだろう。

そこで、驚いたのは私だけではなかった。

住宅街を通り過ぎる道すがら、まばらな家屋から濃緑の軍服姿の男達が足音もなく現れ始めたのだ。

それも奇妙なことに記者と同等の数が。

「なっ、え、なんっ……!?!」

という記者達の戸惑う声は一瞬にして掻き消えた。

それは私を護衛していた将兵の一人に向かって怒鳴る別の軍人の声で。

「海路は迷わずとも陸路では役に立たんとは軍人の名が泣くなあ?

さて……下がれエツ! 邪魔だ貴様らアツ!!」

後部座席からフロントガラス越しに見える将兵の背が戸惑いに揺れたのが見えた。将兵は腕が当たるか当たらないか程度を見極めな

がら記者たちを押し返そうとしていたのだが、その人達は違った。

ああ、あれは陸軍かと気づいたのもつかの間、恐らく日本海軍で憲兵と呼ばれる兵科の男の一人が記者の胸ぐらを掴んであっさりと道路脇へ押しやったのを皮切りに、次々とカメラを突き飛ばし、しきりに日本語で捲し立てた。ここまでくればいくら日本語が分からない私とて理解出来る。

彼らは「Move over!」と怒鳴っているのだ。

私は自然と窓を少しだけ開け、外の会話をよく聞こうと背筋を伸ばした。

聞いたとて意味は分からないのだけど……。

「何をするんですか!? いくら軍務だからってこんな乱暴な——」

「貴様ら○○新聞社と○○テレビ、○○局の者だな? ああ、その、腕章はどうした? 貴様は○○新聞だろう?」

「っ……!?!」

憲兵の言葉に記者たちが固まる。

「インタビューをしたければ広報を通せ、そうすればいくらでも回答してやると言っているのに軍務中の車両を止めるとは何事だ?」

「わ、私達は報道機関として国民に現状を正確に伝えるため——」

「ああ、ああ、怖がるな、別に殴ったりはせんから」

「今カメラマンを突き飛ばして……!」

「おっと、それは失礼。あれが暴力に入るとは……我々は普段からああいうやり取りをするものでな? これは大変申し訳無いことをした」

わざとらしく軍帽を脱いで頭を下げたあと、憲兵の一人は怯える記者と、それらを牽制する軍人をちらりと見て、ニヤリと歯を見せた。

「それで……○○党の方々はご壮健かね?」

「は、はい……? 何を仰っておられるのか、分かりかねますが……!」

「はあ、そうか。では分かりやすく言おうか」

憲兵は、護衛に顔を向けてしっしと手を振る。護衛はすぐに意味を理解して車両へ小走りに戻ってくると、乱暴に助手席側のドアを開い

て滑り込んできた。

ばたん、と大きさに音を立てて閉めて車両が発進し、憲兵の背を過ぎる寸前、ギリギリ耳に届いた日本語は、やはり私には理解出来なかったために、ため息を吐き出してパワーウインドウを閉めた。

「——〇〇党には現在、いくつもの軍務妨害容疑、それから陸軍大臣より正式な抗議が届けられているはずだ。ここにいる貴様らはそのこと仲良しこよしと記憶にあるが違ったか？ ええ……？」

車両が憲兵と記者を通り過ぎてしばらくは沈黙が車内に満ちた。

それから数分して、助手席に乗る護衛がぼつりと言った。

「まだ反対派が残っていたとはな……しぶといもんだ」

運転している護衛がその声に答えるように口を開くのがバツクミラーから見えた。

「残念ながら手の内、だったようだが……陸軍大臣までも動いているとあれば、井之上元帥閣下が提言したか」

「大方そうだろうよ。まだまだホコリは多そうだ。保全委員に報告するか」

「当然だろ。川内殿か、あきつ丸殿に——」

「すぐ繋ぐ。流石にネタが漏れてなきやあそこまで正確に足止め出来んだろうから、関係者一同を洗うくらいはせねばならんだろう」

私が口を挟む隙があるはずもない。ただ黙って俯き言葉を音として耳に受けるのみ。

「ここで報告はまずいか？」

「海原閣下のご要人だ、問題ないだろ」

「それもそうか……あー、こちら別班、こちら別班」

助手席の護衛が無線機を取り出してベツパン、と何度か言っている、無線機のスピーカーから女性の声がした。

《ザザツ——こちらあきつ丸》

「えー、〇〇道走行中、報道機関関係者に足止めされ……」

《その件については陸軍憲兵を派遣済みであります》

「あ……あー、それについて報告を……憲兵に対応を引き継ぎ、現在は

大湊に向け進行中」

《で、ありますか。委細は後ほど書面にて届ける予定でありますので、また足止めされるようであれば憲兵に要請されたし》

「……別班、了」

ぶつ、というノイズのあとに音のしなくなった無線機を片手に、将兵は妙な半笑いをしてみせた。

すると運転席の将兵も同じように小さく声を上げて笑った。

「……こりや海原閣下だな」

「○○党の看板も見納めか」